

フレームアームズ・ガール外伝～その大きな手で私を抱いて～

コマネチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分の作った物が意識を持って、友達になってくれたらどれだけ楽しいだろう。そんな風に考えた事はないだろうか。それは太古から神や妖怪のモチーフとして、そして現代のフィクション等で多くの題材となっていた人々の憧れや夢。そしてそんな事は叶わぬ夢と諦めてきた幻想。

しかし時は未来世界、人工知能やロボット、プラモを戦わせるアミューズメント。SFと現実の距離が近づいてきた昨今、幻想は現実になりつつあった。

その名は……フレームアームズ・ガール。

考え、行動する力、自我を与えられた少女達は主と様々な関係を築くべく生きていく。友として、相棒として、そして……恋人を目指して、これはそんな少女達の生き様の物語。

※2020年07月09日、完結しました。

※この作品はt i n a m iとのマルチ投稿です。

## 目次

プロローグ 『ある量産型轟雷のプラモ界反逆計画』	1
ep1 『ヒカルと量産型ステイレット』(前編)	24
ep2 『ヒカルと量産型ステイレット』(中編)	34
ep3 『ヒカルと量産型ステイレット』(後編)	42
ep4 『トモコと量産型マテリア』(前編)	49
ep5 『トモコと量産型マテリア』(中編)	61
ep6 『トモコと量産型マテリア』(後編)	71
ep7 『ヒカルと量産型ステイレット2』(前編)	79
ep8 『ヒカルと量産型ステイレット2』(後編)	90
ep9 『タケルと量産型フレズヴェルク』(前編)	103
ep10 『タケルと量産型フレズヴェルク』(中編)	112
ep11 『タケルと量産型フレズヴェルク』(後編)	123
ep12 『大輔と量産型アーキテクト』(前編)	149
ep13 『大輔と量産型アーキテクト』(中編)	160
ep14 『大輔と量産型アーキテクト』(後編)	176
ep15 『黄一と量産型轟雷』(前編)	192
ep16 『黄一と量産型轟雷』(中編)	212
ep17 『黄一と量産型轟雷』(後編)	227
ep18 『ヒカルと量産型ステイレット3』(前編)	239
ep19 『ヒカルと量産型ステイレット3』(中編)	257
ep20 『ヒカルと量産型ステイレット3』(後編)	269
ep21 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラ ルド』(前編)	289

e p 2 2 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラ  
ルド』(中編) 307

e p 2 3 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラ  
ルド』(後編) 324

e p 2 4 『人間とフレームアームズ・ガール』(前編) 351

e p 2 5 『人間とフレームアームズ・ガール』(中編) 371

e p 2 6 『人間とフレームアームズ・ガール』(中編2) 388

e p 2 7 『人間とフレームアームズ・ガール』(後編1) 406

e p 2 8 『人間とフレームアームズ・ガール』(後編2) 425

e p 2 9 『人間とフレームアームズ・ガール』(終) 444

### 最終章

e p 3 0 『その大きな手で私を抱いて』(起) 457

e p 3 1 『その大きな手で私を抱いて』(承) 471

e p 3 2 『その大きな手で私を抱いて』(転) 489

e p 3 3 『その大きな手で私を抱いて』(結) 509

エピローグ 534

## プロローグ 『ある量産型轟雷のプラモ界反逆計画』

「ここは私が時間を稼ぐから！あなたは逃げてレティシア！」

見渡す限り砂だらけの砂漠で二人の少女がそこにいた。

「そんな怪我では無理よイノセンティア！」

イノセンティアと呼ばれた褐色少女が、レティシアと呼ばれた少女に抱えられながら訴えた。イノセンティアの右足は損傷しており歩けない。周りは戦場だ。黄昏時の砂漠で多くの者が銃を取り、剣を振るい、それぞれの武器で戦っていた。そして何より特徴的なのは、参加していた全員が少女だったという事。

「行ってよ！せつかくここまで来たのに！ここでやられたら二人ともやられちゃう！」

「バカ！二人で生き残ろうって約束したじゃない！ここであなたを見捨てたら何の為に私は！」

「あははは！愚かな人！」

笑い声が響くと共に再び少女が二人降りてくる。紫髪、そして片目隠れの二人だ。

「友情確かめ合って、それで二人そろってやられるなんてねえ」とロングヘアーで左目が隠れた少女が、

「仲良く二人でやられたみたいだね、お姉ちゃん」とショートヘアーで右目隠れが続く。二人とも赤目が特徴だった。

「悪いけど時間はかけてられないの。二人一緒にやられてもらうわよ」

「ええー。またお姉ちゃんだけ？一人は私の獲物にしてよー」

まるで狩りを楽しむといわんばかりの紫髪の姉妹、相對する二人はもう駄目だとお互い抱き合った。

「目を閉じていて……きつとすぐ終わるから」

「……うん」

二人の表情は諦めが現れ始める。しかしその時だった。一発の実弾が二人の頭上を通過。姉妹の所に着弾し爆発。

「へ？わああっ!!」

完全に不意打ちだった。姉妹は情けない声を上げながら吹っ飛ばす。何が起きたと茫然とするイノセントティアとレティシアの二人、そこへ砂塵を巻き上げながら少女が走ってくる。厳密には踵についたキャタピラで。だ。

「無事ですか？あなた達」

バズーカを構えた銀髪の少女だった。戸惑いながらも「うん」と答える二人。二人の前に躍り出た少女はさつき撃った場所へ撃ち続ける。

「くっ！轟雷!!」

爆炎を突き破りながら姉妹は飛び出してくる。

「やはりしづといですね！アント！」

轟雷、そう呼ばれた少女は弾切れになったバズーカを躊躇いなく姉妹に投げつける。それを大型の剣で切り裂く姉。

「中々あなたが出てこなかったんでリハーサルよ！でも来てくれたならもういいわ！」

「私達姉妹の力を見せてあげる！」

「ほざきなさい！一度も私に勝てない人が！」

「今日はこれを用意していたのよ!!マスター!!あれをお願い!!」

アントと呼ばれた二人、姉の方が虚空に向かって叫ぶ。「解った」どこからともなく聞こえたその声の後に、二体の巨大な乗り物が落ちてきた。砂塵を巻き上げて着陸する二機。

片方は左右に大型ガトリングガンの付いたエアバイク、もう片方は機銃の付いたタンクだ。

「ギガンティックアームズ!!」

「その通り！あなたの為に用意していた装備よ！いくわよ！ライ！」  
「うん！レーフお姉ちゃん！」

そう言う姉妹はそれぞれギガンティックアームズと呼ばれた乗り物にそれぞれ乗り込む。レーフと呼ばれた姉はエアバイク『ブリッツガンナー』の操縦席に、ライと呼ばれた妹はタンク『ムーバブルクローラー』に、そのまま乗った。

「この辺りで最強のあなたを倒して私達は名を上げる！マスターの為に！」

「通常装備のあなたには負けないよ！」

「似合ってますね！ムーバブルクローラー!!」

血気はやる姉妹に対して轟雷が苦笑気味に言った。乗り物と言ってもムーバブルクローラーは乗り手と大きさが変わらないからちよつとバランスが悪い。

「うるさいな！動けばいいの!!」

四脚の大型キャタピラを動かしながらライが装備していたミサイルポッドを撃つ。轟雷もキャタピラを使い後退しながら手に持った89式5・56mm小銃で対応しようとする。自分に当たると予想したミサイルだけを撃つた。残りのミサイルは自分の周りに着弾し爆発。「くっ！」

爆発に身も守るべく屈み、動きを止めた轟雷。そこを狙ってブリッツガンナーに乗ったレーフが大型ガトリングを撃ちながら轟雷に突っ込んでくる。

「例の装備でないあなたが勝てると思ったのかしら?!」

そのまま轟雷にブリッツガンナーは突っ込む。質量兵器としてぶつけるつもりだ。高速で轟雷のいた地点を通り過ぎるレーフ、しかし手ごたえがない。何処に行つたと辺りを見回すレーフ。

「女の子相手に乗り物で突っ込むとは、絵面的に問題あると思わないのですか?」

「っ!!」

真後ろから声がした。後ろに轟雷は飛び乗っていたのだ。そのまま轟雷は右肩のキャノン砲を向けて至近距離で発射。爆発するブリッツガンナーから轟雷は飛び降りる。と、同時にブリッツガンナーは炎上し墜落、爆発。

「お姉ちゃん！よくも!!」

ムーバブルクローラーに乗ったライが怒りの余り轟雷に突っ込んでくる。機銃とライ本人の武装を併用してくるも、轟雷は動じずに腰に下げた日本刀を持つとキャタピラで突っ込む。

「無限軌道の使い方はこちらの方が一日の長ありですよ!!そんな動き！」

「なめないで!!」

軽快に敵の射撃をかわしながら轟雷は至近距離まで近づくと刀を振るう。その斬撃は乗ったライゴとあつけなく叩き斬った。

「お！お姉ちゃん!!」

斬ったと言ってもライの切断は無い。叫ぶ少女は淡い光を放ちながら消えた。

「凄い……あんな鮮やかに……」

少し離れた場所で見えていたイノセンチアとレティシアは轟雷の戦い方を茫然と見ているだけだった。

「これで残ったのは私達三人だけでしたね?」

轟雷はそういうと目の前に半透明のディスプレイを出現させる。宙に浮いたディスプレイには参加者数が乗っており、残りの人数も表記されていた。轟雷とさっきのイノセンチアとレティシアだ。

「よっし!!これでこのバトルは私達の勝利です!」

轟雷が笑顔でガッツポーズを取ると、バトル終了のアナウンスが出る。同時に周りの砂漠の風景が切り替わる。それは建物内、玩具店の中だった。しかしその大きさは人間の十倍はあろう。轟雷達が立っていた場所は巨大な丸テーブルの様な場所だ。

「通常装備でも余裕だね轟雷」

少年、しかし轟雷の十倍はあろう巨人が話しかける。…否、周りが大きいのではなく、轟雷達が小さかったのだ。

「マスター、なあに軽いもんですよ!」

Vサインで笑顔で答える轟雷、離れた場所ではさっき倒された姉妹が同じく若者の手に乗り、対象を見上げながら泣いていた。

「ごめんなさいマスター!折角買ってもらったギガンティックアームズを!」

「えーん!おねえちゃん!」

姉妹を慰める巨人。当然姉妹の大きさも轟雷と変わらない。その周りのいた少女たち全員が同じ様に巨大な人間を「ご主人」「マス



ター」または名前呼びながら話をしていた。

彼女達は『フレームアームズ・ガール』。身長15センチメートル。ナノマシンで構成された肌。ASと呼ばれる人工自我、プラスチックの武装を与えられた新世代ホビー、その製造目的は人間とのコミュニケーション、そしてフレームアームズ・ガール（以下FAG）同士でのバトルだ。

「あーあのー！」

と、二体の、否、二人のFAGが話しかけてくる。さっき助けたイノセントィアとレティシアだ。

「助けて頂き有難うございます！」

「ん？お気になさらず。結果的に助けた形になっただけですから」

恭しくお辞儀する二人にカラツとした対応の轟雷。

「でもあんなにカツコよく立ち回るなんて凄いです！どうしたらあんな風になれるんですか?！」

「そうですね……。自分が憧れた自分を目指す事ですかねー？」

「憧れた自分……。ですか？」

「はい。私の元になった試作型轟雷ですね。彼女はFAGに多大な影響を与え、私達の基礎となったと言われているFAGです」

試作型轟雷、製造元であるファクトリーアドバンス社（以下FACS）において第二世代型の先駆けとなったFAG、彼女はモニターとして選ばれたマスターの元で様々な経験と感情を学び、FACSの予想を超えた成長を見せた。

「私は彼女の様な影響を与える女になりたいんです。FAGの可能性を広げたい」

「凄い……。壮大ですね」

「ええ。その通り、FACSの発展に貢献し、いずれは……。いずれは……。えーと……」

言葉に詰まる轟雷、どう言葉を選ぼうと悩んでる様だ。

「あの……。轟雷さん？」

「ああもうメンドクサイ!!シリアスやめ!!FACS!いえ!コトブキヤがバン○イのガン○ラを駆逐し!私達コトブキヤがプラモ業界の征

服をする事です!!」

『え』

突然の爆弾発言に聞き手の二人は固まる。

「考えてもみて下さい!ここ数年でプラモ業界はスタンダードであるガンプ〇一強だった中、私達別メーカーも力をつけてきているじゃないませんか!!」

「そ、そんな事言われても……」

「あーあ、理想壊しちゃったわね」

と会話の中に参加する新たな二人が、さっきのバトルで戦っていた姉妹だ。

「あなたは……」

「そう身構えなくていいわよ。私達が戦ったのはマスターの為、バトルから離れば私たちは友達よ」

「私はアントのライ、こっちはお姉ちゃんのレーフだよ。アーキテクトタイプのバリエーションなんだ」

打って変わってフレンドリーに接してくる目隠れ姉妹、ほんの少しだが警戒心を解く二人。

『艦こ〇』が流行ってアオ〇マの戦艦スケールモデルとのコラボが始まりでした!艦娘フィギュアつけなくても展示シートと箱絵で売り上げ何倍にもなるご時世です!」

フィギュア自体は別に出してるじゃん。とレーフはぼやく、が、轟雷は聞いてない。

「そのア〇シマもVFガールで独自の美少女プラモ技術を見せつけました!今は美少女プラモが各メーカーの切り札にして技術披露のうってつけの場!しかも!それに比べて〇ンダイの美少女プラモの技術を見て下さい!」

いえ!技術自体はフィギュアライズラボのフミナ見れば高いのは解ります!しかしですよ!その後出したダイバーナミの顔の造形!他のメーカーは表情部分はタンポ印刷で済ましてるのにも関わらず!バ〇ダイはパーツごとの色分けでやっています!

これはいわば印刷の場合は個体ごとにいい顔あれば残念な顔も顔

もあるという事ですが！成型の段階で顔が決まるという事は！一度顔が残念になった場合は、残念な顔が延々と続くことを意味してるんですよ!!どうせ子供は美少女プラモなんて買わないんだから、多少は高額になってもバンダ○も印刷にすればいい物を!!」

「間接周りは私達より出来いいけどね」とライ。

「ご高説はいいけど誰も聞いてないわよ。新参の二人はドン引きしてるわ」

「他にも言いたい事はあるんですよ！例えばガンダ○ビルドファイターズからダイバー○まで！声優でモデル並にプラモがうまいという方は沢山いますが！現在ダイ○ーズまででうまい声優さん出てましたか?!池澤春○さん出てないでしょ!?!中○桜さん出てないじゃないですか！関智○さん出てないじゃないですか!!」

特に大和○仁美さんと！バーゼラルドやってた長江里○さん出ないとかひどすぎます!!もう佳穂○美さんか綾○有さんでガンダ○の主演かヒロインやらせてくれないとこの怒りは収まりそうにありません!!」

「……あの、轟雷さんっていつもこういう人なんですか？」

恐る恐る姉妹に聞く二人。

「昔つから変な所はあったわねー。どうも試作型轟雷の時から突飛な所はあったって話だけど」

「最近はなおさら酷いよね」

「何を言ってるんですか！いいでしょう！お教えします！私がどうして○ンダイに対して犯行意識を持つに至ったか！」

あれはネットサーフィンしていた時の事でした。私ある情報を仕入れたのです。

「マスター！通販サイトのプレミアムバ○ダイでメガハウ○製のシルフィーカラー轟雷が出たと聞きました！バ○ダイサイトで轟雷が買えるという珍事件です！是非買いましょー！」

「いいけどお前予算的に一つだけだぞー」

○ガハウスはバンダ○の下請けで普段はガ○ダムキャラのフィ

ギユアを作っています！なおかつ自社製品でコトブキヤとコラボしたりズブズブです！

しかし轟雷を買おうとしていたら目についたものがあります！HGモデルのガ○ダムウーンドウオー○でした！そうです！あの発表してから10年、皆が要望出しまくってようやく通販限定販売となったあのガンダ○ウー○ン○ウオー○トです！

どっち買うか迷った結果！可愛い私なら再販かかると思ってウ○ンドウオー○ト優先しました！しかしいつまで経っても私の再販は来ない！のちに調べていたらイベント限定品でもう販売は無いと！

私は泣きながらHGのウー○ドウオー○トを作りましたよ！塗装からウエザリングまで泣きながらやりました！そして写真撮ってネットにアップしながら誓いました！必ず模型業界のトップに私達FA Gは踊り立つ、そして全てを支配する！と！ちなみに投稿名は『涙のウーンドウオー○ト』です！よかったら見て下さい！！そんでもって評価お願いします！

「ってそんなどうでもいい理由かい!!」

「むぎゆうー」

レーフがツツコミとして轟雷にバックドロップをかける。レティシア達の視点では二人のパンt……ボディースーツが並んでモロ見えだった。

「轟雷お姉ちゃん。結局は○ンプラへの八つ当たりだけ？別メーカーの愚痴ばかりだけど、どうやってガ○プラ越えるっての」

「むーライー！知れた事ですよーこのまま私の実力を誇示し続け！全国の子供達に私を好きになってもらおうのですー」

起き上がりながら轟雷は言う。

「すつごい回りくどいー」

「さつき『子供は私達なんて買わない』って言ったじゃないですか……」

必死に話についてこようとしたレティシアが続いた。

「それはそれ！これはこれです！そして私達が業界を乗っ取った暁に

は！」

「暁には？」

『ねこぶそう』の著作権買い取って一大コンテンツとして育て上げます！」

その場にいた全員があまりのシヨボさに言葉を失った。ねこぶそう、その名の通り様々な種類の猫のフィギュアに武装取り付けるコンテンツである。武装ごとの組み替えも豊富でプレイバリューは高い。「ねえ轟雷、乗っ取ってやる事がそれ？そんな小さいコンテンツを」「小さくありません！レーフのバカー！」

その瞬間、レーフの頬に轟雷の拳がヒットした。

「ぐあぁっー！」

吹っ飛ぶレーフ。

「おねえちやーん！」

「動物のフィギュアに武装を組み付けるというコンセプトが重要なのですよ！美少女プラモが多い昨今、動物というのは独自です！しかもそれがにやんこ！」

「猫好きなんですネ……」

「うん……。しかし私達の大きさに本物の猫は小猫でも脅威です。15cmの私達では愛玩動物も怪獣同然ですよ！ネコパンチはもはや鉄球！手元に置ける可愛い猫ちゃん欲しい！」

「それが本心ですか……」

「うん……。しかし○ンダイは割とこういったコンテンツは早い段階で切り捨てます。ねこぶそうも第三弾発売まで来ましたがこれから先はどうなるか解りません！スコティッシュフォールドは出ました！マンチカンやメインクーンを出してくれるまでは続いてくれないければ!!ついでにガシャポンの換装少女も！」

「はいはい、ついて来れない子もいるんだから、そろそろ話題変えましょ。あなたの野心は解ったから」

また暴れられたら適わない。とレーフは話を中断。轟雷もバックトロップを恐れてか、それ以上は言わなかった。

「それはそうと、今週末のFAGのサバイバルバトル大会、出るかしら

？」

壁にかかったポスターを見ながらレーフは言う。ポスター内容はさつき言った言葉の通り今週末FAGのサバイバル大会の告知だった。

「当然！また私が優勝しますよ！」

「フフ……そうはさせない……」

轟雷は自信満々に言う。と、それを否定する声が聞こえる。聞き覚えの無い声に誰がいる。と辺りを見回す。と、天井から轟雷に似た赤いFAGが降りてきた。

「今度の優勝はボクが頂く。ボクの知名度を上げるために」

「迅雷タイプ？」

迅雷、轟雷の軽量化をしたような姿のFAGだ。それに違わず忍者の様な素早い動きが特徴である。しかし個体差か、目の前の迅雷はどうにも目が虚ろだった。

「そう。ボクは各所の強いFAGを倒して回ってるの。ボクこそが真の迅雷だと知らしめる為にね……」

「へえ、赤い迅雷とはね。こういうバリエーション機体もいるんだ」

「っ!!ボクはバリエーションじゃない!!」

その瞬間、レーフの頬に迅雷の拳がヒットした。さつきと同じ個所に

「あぁー!!」

またも吹っ飛ぶレーフ。

「おねえちゃん!!」

「フフ……そう、世間ではインディゴバージョン、つまり黒いカラーがバリエーションのはずなのに、もっぱらアニメではバリエーション機のインディゴの方が出ていたから、ボクの方がバリエーション扱い……フフフ……許さない……ボクの方がオリジナル、そして強いという事を証明する。その為にボクは戦う」

「アニメ本編見てない人にはワケ解らないよ」

「その為に、私に宣戦布告をしにきたというのですか？」

「その通り、それと……」

迅雷はポスターを指さす。その先は優勝賞品の部分だ。

「優勝賞品はヘキサギアのレイブレードとボルトレックスのセット。それもボクは頂く。これはマスターの為に」

ヘキサギアというのはコトブキヤの商品の一つ。有体に言えば荒廃した未来世界で戦うゾイド的動物メカとそれに乗る、もしくは歩兵として戦う兵士達の物語。プレイバリューも非常に高く、FAGへの取り付けも難なく行える。

「随分と豪華ですね。今回の優勝賞品は」

「いいでしょう！全て私が勝ちます！迅雷！私は負けませんよ！私の誓いは誰にも破らせません！」

「あ、準優勝の副賞もある。ねこぶそうセット！」

「え?!ねこぶそう!?!」といきなり轟雷の誓いが揺らいだ。

「……轟雷さん？」

「と！何を言わせるのですか迅雷！何はともあれ絶対に私の座は譲りませんからね！」

「ボクが言ったんじゃない！でも負けないのはこっちも同じ！」

その二体の気迫、それは先程の抜けた印象を吹き飛ばすのに充分。イノセンチアとレティシアの二人には轟雷が実力者だという事を思い出すのに充分な気迫だった。

「あの自信、なんやかんや言って実力者ってのは本当なんだよね」

「私達はどうするの？」

「記念位には出てみるかな。一応轟雷さんにも見習いたい所はあるし」

「まあ私達の一存ではね。マスターに聞いてみましょう」

マスター達はマスターで別の所で店内のプラモや商品を見ていた。

……科学技術の進歩は人と違わない人形を生み出す事に成功した。人と同じという事は、当然時に不安定だという事も意味していた。

そして大会当日、

「いやー、今日は随分人が集まりましたねー」

轟雷がマスターの手に乗りながら感心の声を上げた。

「凄いです。こんな沢山の人が集まっているの見たの初めて……」

今度はイノセントティアだ。初めての目にする人の集りに感激した様な声を上げる。いつの間にかマスター同士でも仲良くなっていた。「なんだか……怖いですよ。あれだけの人が見てる中で戦うなんて……うまく出来るかな……」

反面レティシアは緊張していた。こういった個体の反応の違いもFAG特有だ。

「大丈夫。まずは自分を信じて動きましょう」

「でもみて下さい。皆装備が段違いです」

レティシアが周りのFAGを見る。ほとんどが値段の高そうな武装を装備していた。反面レティシアとイノセントティアはハンドガンとナイフ、そしてシールドだけ。

「でも使いこなせるかは別の問題です。確かに重武装同士だと装備スベックで差は決まりがちですが、乱戦になりがちなのサバイバルバトルだと素早く動ける方が重要ですよ。フィールドをどう使うが鍵です」

「轟雷さん……」

「それに二人一緒で戦うわけでしょ？大丈夫。仲間がいる事はそのへんの武器よりよっぽど頼りになります」

「あ……！有難うございます！でも装備といえば、轟雷さんは通常装備でいいんですか？」

レティシアは轟雷を見ながら言った。轟雷は手に持った小銃はともかく他は通常の装備だった。

「当然。使い慣れた装備が一番ですよ」

「でも前に言ってたじゃないですか。通常装備って、あれって他に装備持ってるって事ですよね」

「う……」

その発言にどもる轟雷。不審に思うレティシア。更に追求しようとするが、

「ああ、こいつの装備ね。○ンダイ批判する前まで使っていたんだけど突然使うの嫌がりだしてさ」

「マー・マスター！何を言うんですか！私は今のままでも十分強いから



この装備で良いって言ったんです！何が何でもこの装備で私は勝ちますよ！」

そんなこんなでバトルが始まる。参加するであろうマスター達は皆手に六角形の小さな台座を持っている。これはセツションベースといってこれを合わせることによって仮想空間のバトルステージを生み出す機能がある。

それはFAGのナノマシンと反撥し、FAGの触れるホログラフを発生、更に装備の転送、プラスチックの武器に攻撃力を与えられた効果を生み出す。マスター達は全員巨大な丸テーブル状の機械の周りにぐるりと立つ。そして目の前のくぼみに全員がセツションベースをはめ込んだ。

これによりセツションベースの効果は何倍にも増幅。何人ものFAGが参加できるフィールドを作り出す。

『フレイムアームズガール!!セツション!!』

参加していたFAGがそう叫び、バトルステージへとダイブする。

「サリーフォース!!といっても一人ですが、轟雷!!行きます！」

轟雷がバトルステージへと降り立つ。今日のバトルステージは廃墟となった都市。辺り一面ガレキの山、大きさを合わせてかFAGを人間としてのサイズに合わせてある大きさだった。そして天候は曇天。

「早速のお出迎えですか?!」

フィールドに降り立って早々、弾幕の歓迎を轟雷は受けた。集団でFAGが撃ってくる。

「この店舗最強のFAG!まずはあなたを叩く！」

「優勝できなくてもアンタ倒せばマスターが褒めてくれるの!」

轟雷の降り立った大通りはミサイルと大型ガトリング等重火器の嵐だ。轟雷は辺りを確認、周りは廃墟となったビルが立ち並んでる。傾いたビルが多い。

「あれは使えますね」

そう呟くと轟雷はすぐさまビルに向かう。キャタピラを展開し、傾いたビルの外壁、垂直ではないが斜面を登る。

「何をやる気かは知らないけど！無駄よ！」

相手のFAGは瞬間にビルを、轟雷のいる地点を狙って撃ちつつける。そうこうしてる内にビルは倒壊。

「やったの？」

「駄目だ！むやみに撃つな！」

「マスター?!」

突如響いたマスターの声にFAGはハツとした。直後火器によって碎かれたコンクリートや石膏は粉塵となって人口の霧となってFAG達の周囲を覆った。

「うわっ！何これ見えない！」

困惑するFAGとマスター達だがすぐさま轟雷の音が響いた。

「本当は上を取る目的だったんですけどね！」

手伝ってくれた。と言わんばかりの声の直後、FAG達の周りで爆発が起こる。轟雷のバズーカだ。爆風が塵を、FAGを吹き飛ばすと同時に刀を構え見えているFAG目掛けて突っ込んでいく。

「雨だったらこうはいきませんでしたね！」

無双する轟雷、それを少し離れた場所で戦っていた迅雷も、轟雷の戦いに気づいていた。長巻で相手のFAGを切り裂きながら呟く。

「……やるじゃない」

そしてイノセントイとレティシアの方は……

「ほぼノーマル装備で来るなんて命知らずね!!」

「所詮は初心者だよお姉ちゃん！」

例の姉妹につきまとわれていた。場所は商店街だったらしき廃墟の大通り、装備の余裕か悠然とした態度の姉妹、そして壁に身を隠しながら銃弾をしのぐ二人、

「くっ！このまま待っていたって！」

「レティシア、一つ私に考えがあるんだけど」

イノセントイがある提案をする。レティシアは聞くと了承。銃弾の隙についてレティシアは相手のFAGの前にシールドを構えて躍り出る。

「諦めたの?!」

好都合とばかりに撃ち続けるFAG、しかし上空、店舗の屋上から相手のFAG目掛けて降りてくる影が一機。イノセンチアだ。

「何?!」

そのままイノセンチアは妹、ライのミサイルポッドを狙い銃弾を撃ち込む。弾薬の残っていたミサイルポッドはすぐさま誘爆し、姉を巻き込み、失格させる。

「嘘でしょー!」

「お姉ちゃーん!!」

「やった!」

「轟雷さんの言う通り! 重装備なんて怖くないわ! イノセンチアがいればね!」

「レティシアがいてこそよ!」

直後に『僕は?』『俺は?』と二人のマスターが突っ込みを入れた。

そうこうしてる内に決着はつきつつあった。轟雷は荒れ放題の広場を散策しながら迅雷を探す。

「宣言してくれた以上は向こうから出てくれないと困るんですけどね」

そうぼやく轟雷に迅雷の声が聞こえた。

「お待たせ! お望み通り来てあげるよ!」

「っ?!」

直後、轟雷はとっさに今いた場所を移動する。さつき轟雷のいた足元が、そしてその周囲が、爆音と共に広場の至る所に火柱が吹き上がる。

「これは?!」

「火遁の術ってね!」

一瞬動揺する轟雷だが、一本の竹筒が地面から突き出し、コンクリートを高速で突き進んでくるのが見えた。迅雷だ。そう判断した轟雷はキャタピラで後退しようとするが、真後ろは火柱、方向転換に躊躇していると竹筒は目の前まで来ていた。と、迅雷が地面から勢いよ

く飛び出す。当然轟雷の首を狩ろうという魂胆で。

「土遁の術！」

「っ！」

逆手に持ったククリナイフをすんでの所でかわす。肩と背中のウエポンラックに様々な刃物を持つてるのが見えた。持っていた竹筒を捨てると迅雷は轟雷に向き直る。

「待ってたよ。さあボクと遊ぼう！」

「強引ですね！」

迅雷は上半身が一切ぶれない走り方で轟雷に接近、轟雷もナイフで応戦する。

「速い………！」

「シヤアッ！」

鏢迫り合いはせずにヒットアンドアウェイの戦い方だ。火柱をうまくかわしながら迅雷は切りつけては離れてを繰り返す。

「うまくボクに対応できてる辺り流石！それで通常装備だって言うけど！君の本気はどんなのかなあ！」

「っ！あれは使わなくなつてあなたには勝てるんですよ！」

「なにをそんなに頑なに嫌がるのか！まあいい！そのままやられなよ！」

迅雷は離れ様に苦無を投げつける。幾つか、轟雷の顔と体を狙った物は裁くが、それは劣りだった。左足のキヤタピラに苦無が幾つか突き刺さる。

「キヤタピラが?!」

「これで素早く動けないね！」

今度は忍者刀との二刀流で切りかかってくる。小銃で応戦しようとするも迅雷の速さには当たらない。

「まあやられても気にしないで欲しいな。君の言う○ンダイへの反逆はボクが受け継ぐよ！ボクが有名になればアニメはボクがメインヒロイン！ゆくゆくはくノ一ロボの代表として有名になるんだ！ビルド○イバースも続編あつたらアヤ○もボクのカラーにしてもらう！」  
「いや○ヤメをあなたのカラーにしたって赤い彗星カラーにしかなら

ないでしょ」

「ムキー!!」

迅雷の一撃が轟雷を弾き飛ばす。

「いつまでもメタ発言続けたって白けるだけだね。そろそろ終わりにしよう」

大鎌を構えて近寄ってくる迅雷、

『轟雷!このままじゃやられる!あの装備でいけ!』

「マスター?!い!嫌です!使いたくない!」

『お前こんな時になってまで!!』

「だってあれガンプ〇……」

「マスターと喧嘩まですると余裕だね。そのままやられなよ」

そう言つて迅雷は鎌を振り上げた。「やられる」そう思った時だった。

「轟雷さん!」

レティシアが轟雷の前に躍り出るとシールドで庇う。消耗していたシールドでは鎌を耐えられず貫通。レティシアの体を切り裂いた。

「っ!」

「レティシア!」

間髪いれずにイノセントティアが横から迅雷に撃ってくる。邪魔だと言わんばかりに迅雷はイノセントティアに走る。

「レティシア!どうしてこんな事をしたんですか!」

レティシアを抱きかかえる轟雷。一撃でやられたわけではないが致命傷だ。長くはもたない。

「憧れでしたから……」

「え?」

「最初に話をした時、言いましたよね。自分が憧れた自分を目指すつて……。あなたの事……。ちよつと変だなんて所もあるけど、なんやかんやで憧れてるんですよ。……。だからどうか、本気で戦ってください。そして勝つて……。イノセントティアが命がけで時間を稼いでる内に……」

限界に来たのだろう。レティシアは光を放ちながら消えた。

「レテイシアの言う通り……そうじゃなきや私達が頑張った理由がなくなつちやうもの……私達が憧れたあなたとして……どうk」

イノセンチアも倒れこみながら呟く、迅雷にやられたのだ。そして言い終わらない内に消えていった。それが轟雷のASに、心に火をつけた。

「……マスター、例の装備……使います！リナシメントアーマーを!!」  
『遅いぞ轟雷！転送行くぞ！』

マスターがそう言うときとすぐさま装備を選択し転送、轟雷の体にアーマーが装着されていく。その装備は……

「アスタロト・リナシメントのアーマーか！」

迅雷が驚愕の声を上げた。別メーカー品、ガ○プラのパーツだからだ。

「ようやく本気になったってわけ?!存分に遊べるね!!」

疾走する迅雷、しかし轟雷は外側のサブアームで大銃『バスタード・チョッパー』、大剣『デモリッション・ナイフ』をそれぞれ持つ。眼の前に迫る迅雷に対して轟雷はバスタードチョッパーを迅雷目掛けてブン投げた。しかしチョッパーは迅雷の眼の前の地面に突き刺さる。

「何をするかと思えば」

「イグニッション！」

「!?!」

轟雷がそう言った瞬間、チョッパー先端部に取り付けられた『火薬式ダインスレイヴ』が地面に打ち込まれる。その威力は地面を隆起させ、チョッパーを、そして迅雷を空中に巻き上げた。

「な!?!」

「デモリッション!!」

巻き上がる迅雷、その目の前に轟雷は大剣を振りかぶる轟雷が飛び上がっていた。そのまま轟雷はフルスイング、慌てて鎌の柄で防御する迅雷だが、その勢いは凄まじく、鎌をへし折り迅雷を大きく吹き飛ばした。

「ぐああつ!!」

地面にバウンドする迅雷、轟雷はチョッパーを回収し悠然と歩いてくる。

「今のはレティシアの分、次はイノセントティアの分ですよ」

「くっ！それが君の切り札か!!ならばこちらも！マスター！切り札を!!」

今度は迅雷の方に装備が、否、支援機が送られてきた。先述の姉妹が乗っていたギガンティックアームズを合体させたバリエーション機、ダークネスガーディアンだ。その姿はSFのパワードスーツそのもの。

「忍法！ダークネスガーディアンの術！」

「あんな切り札を!」

「ボクの方も、これに乗ったら遠慮は出来ないんでね！覚悟しても……ら……ウ……ウウ」

搭乗した途端に顔面を抑えて苦しみだす迅雷、少だけ時間をおいて迅雷は顔から手を離れた。白目が黒に切り替わっており禍々しい。

「!？」

「ハ……ハハハ！後悔なんてする時間も与えないヨ!!」

声まで不安定なトーンとなっていた。迅雷はガーディアン両手、蹠の部分から連装式のレーザーを連続的に放つ。大口径な上に左右4門ずつのレーザーは厄介だ。機銃を加えての弾幕は中々近づくことは出来ない。

「ドコへ行くノ?!蹂躪シてアゲるからコツちへおいデー！」

「とてもヒロインには見えませんね!!」

引き撃ちに徹し、かわし続ける轟雷に迅雷は接近戦を挑むべく接近する。周りはまだ火柱がごうごうと上がっており轟雷が素早く動くのは困難だ。反面ダークネスガーディアンは火柱をもともせず突っ込んでくる。その姿はまるで迅雷が轟雷を追いかけまわす様だ。

『轟雷！作戦は解ってるな！』

「もちろんですよ！場所は……あそこがいいですね！」

轟雷は開けた場所を見つけるとその場に足を止めた。迅雷は轟雷を握りつぶそうと左右の手、『オーバードマニピュレーター』で握りつ

ぶそうとする。

「諦めたノ?!一思いに潰してアゲル！」

しかし轟雷は逆手持ちのバスタード・チョツパーを地面に突き刺し、ダインスレイヴを撃ち込んだ。轟雷は空高く舞い上がり、迅雷のマニピュレーターは空振りする。

「何イ！」

「エクスプロージョン!!」

そう言つて轟雷は大鉈と大剣を合体させて一本の大剣へと形を変えた。そしてバーニヤを一齐に吹かし突きの体勢で迅雷へと突つ込む。近づけさせまいと迅雷は轟雷へ撃ちまくるが剣に当たったレーザーは拡散、轟雷の勢いは衰えない。

「そんない！」

「これがイノセンティアの分!!」

そのまま轟雷はダークネスガーディアンを貫通。振り向き駄目押しとばかりに轟雷は大剣を振り上げて、

「そしてええっ!!エグゼキューション!!」

思いつきり叩きつけた。直後、損傷限界値をを超えたダークネスガーディアンは迅雷ごと爆発。

「ボクが!ボクこそがメインヒロインにイイイ!!!」

そして程無くしてサバイバルバトルは終了。優勝は……轟雷である。

「優勝おめでとうございませす!轟雷さん！」

閉会式が終わつての店内、バトルの舞台となったテーブルの上でレイシアとイノセンティアが轟雷に駆け寄る。マスターの手には優勝トロフィー、そして轟雷の背中には賞品のレイブレードインペルスとボルトレックスの二箱があつた。

「二人とも、ありがとう。勝てたのはあなた達のおかげですよ」

背負つた箱を置きながら轟雷は言つた。

「やっぱり轟雷さんは憧れの人です!私、今よりもっと強くなって見



せませす。轟雷さんに挑戦出来る位に」

「私もですよ轟雷さん」

「レティシア、イノセンティア……、だったら選別ですよ。これ持ってってください」

そう言つて轟雷が置いたのは賞品の二品の箱だ。

「え!?これって……」

「これは私達への規格も共通してますから。自分の強化パーツに組み込むもよし、普通に作つて経験にするもよし。作つてもっと上手くなつて下さい」

「つて！俺を無視して話を進めるんじゃない！」

「あうっ！」

轟雷のマスターが人差し指で轟雷を小突く。

「ま、ああは言つたけど、轟雷が持つてつていいって言つたんだから持つてつていいよ。うちじゃプラモは轟雷の方が多く買って作つてるからね」

「ふ……そう言う事です。さつき言つたでしよう？バトルの時にあなた達が発破かけてくれなかつたら私は負けてました。受け取る正当な理由はありますよ」

「轟雷さん、やっぱりあなたは私達の憧れの人です」

「いやーそんな」

「いやこんな奴に憧れたつて良いことないよ。憧れるんならもつと立派な人に……」

「マスター!!何言つてんですか!!」

——そして一週間後——

「プラズマキャノン！発射！」

バトルステージでボルトレックスの……恐竜型マシンのパーツを組み込んだレティシアがキャノン砲を放つ。相手の複数のFAGは、何機かは倒されるが、二機はどうにかかわす。レティシアの髪型で追加されたシニヨンカバーが目立つ。

「お願いイノセンティア！」

「切り裂け!!キングオブクロオオツ!!」

レテイシアの号令にレイブレード……ライオン型マシンのパーツを組み込まれたイノセントエアがすれ違いざまに相手のFAGを切り裂き倒した。背中の翼の様な部分が巨大なビームブレードだ。イノセントエア自身も、装備に合わせてか猫耳を付けていた。

「いやー一週間で大したもんだわ」

「轟雷お姉ちゃんもあんな風にいきなり成長するなんて思ってなかったんじゃない？」

「余計なライバル増えちゃったわねえ」

いつもの店内、アント姉妹がバトルを観戦しながら轟雷に言った。あれ以来、二人は覚醒した様に順調に力をつけていた。

「ふんだ。先輩として誇らしく思うだけですよ」

「轟雷さん！見てくれましたか!? 私達のバトル！」

と、バトルを終えたレテイシアとイノセントエアの二人が轟雷に寄ってくる。

「二人とも、立派になりましたね」

「もうあれ位軽いよ」

「まだまだですよ。いつか轟雷さんにも挑戦しますからね」

「ふふん。いつでも受けて立ちますよ」

と、二人は手をつなぎながら悠々と離れていった。その後ろ姿は少し前の彼女達からは想像出来ない。

「やっぱり……あげてよかったですよ」

「フフ……余裕だね轟雷……」

と、今度は迅雷の方が現れた。副賞のねこぶそうを一つ抱えて。

「迅雷、なんですかねこぶそうを持って」

「君に負けて解ったことがある。……このねこぶそうはいいね……実際にいい。悔しさを癒してくれたよ……。もう寝るとき充電くんの周りに置くのが常識な位さ……」

ねこぶそうを抱えた迅雷はちよつと幸せそうだった。

「なんですか！自慢にきたんですか！」

「半分はそうだね」

「ムキー！」

「でもボクの野心にもまた火がついたよ……ボクも自分がメインヒロインを目指すと同時にねこぶそうの普及を目指す。共に戦おう轟雷。バン○イを下し、ボクはメインヒロインとなり、ねこぶそうの宣伝と普及を行う」

「迅雷！ええ！ガ○プラを下して私達がプラモ業界の頂点に!!」

ガツシと握手をする二人、レーフとライは付き合ってられないとばかりに呆れた。

「ねえ、増えたけど放っておく？」

「放っておきなさい。ねこぶそうはともかく、どうせどっちの野心だって分不相応すぎて出来やしないわよ」

『レーフのバカー!!』

「ぐああーっ！」

「おねえちやーん!!」

轟雷と迅雷のダブルパンチに吹っ飛ばされながら、ライはレーフに駆け寄った。……人間の作った物は人間同様、複雑で愛おしい人間模様をみせていたのであった。

e p l 『ヒカルと量産型ステイレット』（前編）

「あー……やらかした」

真上に太陽の輝く昼時。高校の中庭でベンチに座った少年がぼやく。時刻は昼休みとなり、各々の生徒が昼食の準備に取り掛かる。ある者は持つてきた弁当を広げ、ある者は購買へ、コンビニへと足を運ぶ。

無論この少年も弁当を持つてきて意気揚々と机に弁当を広げる……といきたかったが、鞆の中を探しても見つからない。早弁で食べた覚えもない。忘れたな……と少年は結論付けた。

「どうしたのさ。いつものテストの赤点取った時みたいな顔して」

友人が少年に話しかける。昼休みはいつも一緒に食べる気安い仲だ。更に部活、バスケット部の後輩を含めての三人が中庭のベンチに座る。ここでの昼食が男三人による華の無い憩いの時間だ。ちなみに友人は部活は一緒ではない。

「悪い。弁当忘れちゃったよ。ちよつとコンビニまで行ってくるわ」

少年は立ち上がる。運動部らしい引き締まった体つきが目立つ。

「あーあ、こりや後が怖いねえ」

「?なんでさ」

「だって毎朝起こしてくれる彼女が作ってくれる弁当だろ?」

「忘れたら彼女泣いちやうぜ」と友人が付け足す。

「うそお!?先輩彼女いたんすか?!」と後輩が口を開く。

「うそお!?つてひでえなおい!」

「あ、スンマセン。いやだって先輩、学年一のスケベ魔人って異名で、女子の評価散々じゃないですか!」

「謝ってる意味がない!!」

「反論は出来ないよな。クラス一の脳筋でその上どスケベ」

「こないだの部活秘蔵のエロ本没収騒動で、一番必死に先生に懇願しましたからね先輩。血涙流す位に」

と、その時だった。

「あー、いたいた。探したわよマスター」

上空からの黄色い声、一つの影が男達の前に降り立つ。蒼い装甲をまとった少女だ。それも15cm程度しかない。可憐な顔つきとサブアームに握られた大型のランス。そして各部のブースターとジェットエンジン。

「あーフレームアームズ・ガール！」

目線の高さでホバリングする少女に対して後輩が声を上げる。フレームアームズ・ガール(以下FAG)。ナノマシンで構成された肌とプラスチックの武装。ASと呼ばれる人工自我を持ち、その表情豊かさは人間に限りなく近い新世代ホビーだ。

「あれステイレット。どうしたよ」

「マスター。見て解らないの?!これよこれ！」

ステイレットと呼ばれたFAGはサブアームに吊るされた物を突き出す。ナプキンで包まれた弁当箱だった。

「あ、俺の弁当ー！」

「なーにが俺の弁当よー！今朝早く起こしたのに二度寝してギリギリで慌てて起きるからでしょー！」

「別にいいだろー。部活で疲れてたんだからさー！」

「どうだか、遅くまで……あ、あんなハレンチな本読んでるからでしょーがー！」

途中から顔を赤らめどもるステイレット。ハレンチ、という物は別に説明不要なあれだ。

「バカ！後輩見てる前で言うなよ！」

「知らないわよ！学生ならもつと健全な物に打ち込みなさい！」  
「だから部活に打ち込んでるんでしょーが！」

口喧嘩を続ける少年とステイレット。後輩は予想していたステイレットのイメージとのギャップに唾然としていた。

「彼女って、あのFAGなんですか？」

「まあね。アイツが面倒見てる内になんかあんな関係になっちゃって  
「まるで幼馴染だ……」

「ちよつとそこのあなた達！」

話している二人にステイレットは食って掛かる。

「彼女じゃないわよ！私達FAGは人間とのコミュニケーションが目的なもの！こういうったやり取りは想定の内よ！」

「あ、そうなの？」と後輩。

「そうよ！覚えておきなさい！私達は所詮人形！」

そう言つてステイレットはマスターである少年に向き直る。また何か言おうとしたが、今ので興味が削がれてしまったようだ。

「まあいいわ。ここで言い争い続けていてもバッテリーの無駄よ」

「ったく、弁当届けに来たなら素直に置いて行けよ」

「フンだ。……毎朝四時に起きて仕込みやってて、それで忘れませんでしたなんてやられたらこうもなるわよ」

「な、なに?!」

頬を膨らませながらばやくステイレット。そして初めて知る弁当の秘密にたじろく少年。

「こりやお前が悪いな」

「先輩。女の子泣かせちや最低っす」

友人と後輩もステイレットに加勢する。

「げええ！お前から裏切るなよ！」

「どうせ味方するなら綺麗な方の味方をしたいだろ」

「可愛いは正義っす」

「フン、FAGは繊細なんだから！大事に扱いなさい！」

「……大事にはしてるつもりだよ」

そう言つた時だけ、少年の顔はさっきまでの軽い顔ではなく、真剣な顔つきとなった。それを察する様にステイレットも「あ………」と黙る。

「……ゴメン……マスター」

「……なんてな。気にすんなよ」

元の軽い笑顔になつてステイレットを、場を和ます少年。

「うん……さて、私も暇じゃないもの。もう帰るからね」

ステイレットも又、しゅんとした表情から、さっきまでの凜とした

表情へと戻った。

「雨に気を付けろよ」

「今日は雲一つない天気だから大丈夫よ。後マスター」

「なんだよ」

「残さずちゃんと食べてよね。後感想も」

楽しみにしてるから。そう言いたげな表情だ。その時少年の心は和む。

「ああ」

「加えてマスター」

「だからなんだよ」

「捨てるからね。あの本『むっちゃんプリン』シリーズ」

不潔よ！そう言いたげな表情だった。その時少年に衝撃が走る！

「ま！待ってくれ！それだけは勘弁してくれ！」

「問答無用！じゃあね!!」

意地悪そうに舌を出すステイレット。そう言って小さな彼女は高く舞い上がって行った。

「こうしちやいらねえ！今日は早退してむっちゃんプリンを守らなければー！」

「先輩、今日の部活他校との練習試合つす」

「レギュラーメンバーがそんな理由で休んじやいけないよなー」

「ぐああ！人は解り合う事は出来ないのかああ!!神よ！何故この世はこんなにも理不尽なのですかああ!!」

あまりにも冷たい現実に、少年の絶叫が中庭に木霊した。……今日も平和である。

硝煙立ち込める空港の上空でステイレットは飛ぶ。ここはセツシヨンベースによるバトルステージ、ステージは空港だ。敵を探すステイレット。

「出てきなさい！私が怖くなったのかしら!?!」

次の瞬間、ハンガーの出入り口からミサイルがステイレット目掛けて飛んでくる。かなりの数だ。

「ミサイル程度で！」

ステイレットは本体の手に握られたガトリングガンを撃ちながら迎撃。漏らしたミサイルもステイレットはサブアームの刀で切り払う。

「これ位のミサイル！引き離すまでもないわ！」

「でもその場にとどまったのは失敗よねえ」

「っ!？」

ステイレットは声のした後方を見る。パワードスーツ型のサポートメカ『ギガンティックアームズ』にまたがった片目隠れロングのFAGが、ステイレットを捕まえる。そのまま地面に真つ逆さまに落ちる。

「放しなさい！」

向かい合う形でサブアームを掴まれたステイレットが叫んだ。

「そうはいかないわ！防御の弱いステイレットタイプならこの高さでイチコロよ！」

「警告はしたわよ」

掴まれたまま落とされるステイレットはいたって冷静だった。不審に思ったFAG、レーフは次の瞬間に自分のギガンティックアームズに大きな衝撃が走るのを感じた。そして次の瞬間ギガンティックアームズは爆発炎上。

「何?!これは！」

「だから言ったでしょう。私の膝蹴りは痛いんだから」

見るとステイレットの膝部から細長いドリルが突き出しているのが見えた。レーフのすぐ横に深々と突き刺さったドリルをステイレットは引き抜き脱出。そのまま地面に落ちて爆散するレーフとギガンティックアームズ。それを地面に降り立ったステイレットは眺める。

「お姉ちゃんを！よくも！」

更にミサイルが飛んでくると共に、さっきのハンガーから二機目のギガンティックアームズが壁を突き破って突っ込んでくる。妹のライだ。そのまま対処が間に合わず爆風に晒されるステイレット。そ



の場にミサイルは立て続けに降り続け、舗装された地面は爆発によって見る影もなくなつてゆく。

「ふふん。跡形もなくなつちやつたわね」

破壊の後を見ながら得意げになるライ、しかし次の瞬間。

「わざと受けたのよ」

「何?!どこにいるの?!ッ!」

次の瞬間、ステイレットがドリルランスを突き出して地面から飛び出してきた。ギガンティックアームズの真下だ。操縦しているライが気づいた時はもう遅い。そのままギガンティックアームズは貫かれて爆散。地面を掘り進んでミサイルを回避。そして移動したのだ。  
「おねえちゃん!!」

ライの断末魔に目もくれず、ステイレットは次の相手を探す。

「雑魚の相手は飽きたわよ。もう出てきたらどうなの轟雷」

「いいでしょう。こちらもあらかた片付いた所です!」

そう言うと、ステイレット同様にサブアームと長い脚部を持ったFAGが飛び出してくる。その名は轟雷。

「私のリナシメントアーマーと!」

「キマリスアーマー!どっちが優れているか決着をつけるわよ!!」

大剣と大鉈をサブアームに持たせる轟雷、ドリルランスと刀を持ち突撃するステイレット。

「うおおっ!!」

ステイレットのランスを大剣で防ぎ、大鉈のパイルを向ける轟雷。

「はああっ!!」

そのパイル付大鉈を発射直前に刀で弾くステイレット。そのまま膝のドリル『ダインスレイヴ』で仕留めようとするが轟雷も銃剣で突き刺そうとする。いったん離れる二人。そのまま何度もお互いの武装を打ち付けた。

「はー、二人とも頑張つちやつてまあ」

それを見ながら敗退したFAG、レーフがバトルの壮絶さのため息

をあげる。勝てるわけないわ。といった表情だ。

「私達も頑張ったんだけどねえ、さすがライバルとうたわれた二人」

その横でライもぼやく。しかし更にその隣、レティシアとイノセンティアは目を爛々と輝かす。

「凄い！凄いです！轟雷さんの他に、このお店にこんなに強いFAGがいたなんて！」

「どうしてこの間の大会では出なかったんですか?!」

「新人のあなた達は知らないか。あの二人は元々ライバル関係で互いに競い合っていた仲よ」

「ちよつとトラブルあつてね。暫くここに来れない時があつて。その間に轟雷がバトルで勝ち星を上げてたから、戦績的には轟雷の方が上になつちやつたわけ」

「いわば無冠の帝王だねアイツは」

「へえー」

まるで憧れのアイドルの様に見る二人、その視線の先の二人は舞うように戦いを続ける。

暫くして時間切れのアナウンスと共にバトルは終了。バトルステージは解除され、模型店の中と切り替わる。二人の緊張の糸は切れ。その場に。息を上げながら仰向けに倒れた。

「ハッ！ハッ！暫く来ないと思つたら全然なまつてないじゃないですか！」

「ハアーツ！ハアーツ！当然よ！こっちは私生活でもバトルみたいな生活してんだから！」

「屈辱ですよー。今回も引き分けかあー！」

バトルが終わり、それぞれのFAGが専用の椅子とテーブルに座る。彼女たちの大きさに合わせた施設の様な物だ。大きさはドールハウスとほぼ同じ。自立可動のFAGはマスターの自宅を拠点に、ここを集会所の様に使う事も多い。

「それにしても悔しいわ。新しい後輩の子が出来たっていうから、その子達の前で轟雷倒そうと思つたのに」

「意地悪ですねステイレット。レティシア、イノセンティア、彼女はこ

ういう意地悪な奴なんですよ。覚えておいてくださいいね」

新入りの後輩二人に告げる二人。二人は何と言つていいか解らず苦笑い。

「あなたが言えた事かしら。バン〇イにケンカ売るなんて馬鹿丸出しな考えのあなたが、後輩から憧れるだけのFAGとは思えないわ。あなた達、憧れるなら私にしなさい」

再び頷くわけにもいかず苦笑いの二人。

「あ、あの、なんだか轟雷さんとは随分違ったFAGなんですね」

話題を変えようとするレティシア。

「そうね。こいつと違って私は自分の相応つてのを理解してるつもりよ。所詮私達は人形。第二世代型FAGはずっと人間に近い情緒を与えられたけど、それは覆せないわ」

第二世代、というのは轟雷やレティシア達の事だ。その前の第一世代FAGは自我を持たず。簡単な受け答えができる程度の知能しか与えられていない。

なおも轟雷を比較するステイレット。藪蛇だったと言葉を止めるレティシア。

「あーだったら！ステイレットさんのマスターってどんな人なんですか!?!」

今度はイノセントティアだ。FAGにとってマスターの話は自分の存在理由に直結する話でもある。

「？私のマスターは……そうね。馬鹿でスケベだけど、放っておけない奴。かな」

強気そうな顔から一転して乙女の顔になるステイレット。

「優しい人なんですよ。ステイレットのマスターは」

轟雷がステイレットのフォローをする。さっきまで怒っていたとは思えない穏やかな表情だった。

「よしてよ。私が毎朝起こしてあげないと全然起きない奴よ。いつつもバスケのユニフォーム汗臭くしてき。なんで人間ってあんな一時の事に夢中になるのかしら、こないだだって夏風邪ひいちゃって、無理してバスケの大会出たんだから。ほんつとワケ解んない」

「その時、風邪が悪化して、ステイレット凄く取り乱してましたよね。『マスター死んじゃったらどうしようー!』って大泣きして」

「な!なによ!マスターが大事なのはFAG共通でしょ!」

「それで必死に看病してたんですよ彼女は、風邪が完治した時は本当にいい笑顔したんですよ」

「何よ。私は転勤してるマスターのご両親からマスターを任されてるのよ。それ位当然の事なんだから」

——だからつい最近までここへ来れなかったのか——と納得する新人二人。今のステイレットは凄く誇り高そうだ。

「なあステイレット。洗濯位は俺がやるって」

家に帰って、ステイレットは家事全般をこなす。そんなステイレットに風呂から上がったマスターが声をかける。マスターにとつては家事をFAGに任せるのは少々むずかゆい。

「洗濯のイロハも知らないならひっこんでいてよマスター。以前無理やりやって色が移つたのは誰かしら?」

そう言いながらテキパキと自分以上の大きさの洗濯物を、洗濯機に放り込み。手順をこなしていくステイレット。完全に慣れている。この洗面所は完全にステイレットの独壇場だ。ちなみにFAGのナノマシンは水に弱いので、食器洗いは食器洗浄機に任せてある。

「それを言われると……でもなんかお前に頼りっぱなしってのも情けなくなるなあ」

「頼っていいのよ。私達は人形なんだから」

「そっか。で……ステイレット。本当にお前あの本捨てたのか?」

あの本、言うまでもなく昼に話していたあの本、数冊セットだ。

「むっちゃんプリンシリーズなら言ったでしょ?あんなのにうつつを抜かしてたら彼女なんてできないわよ」

こんな美少女が傍にいるのに……そうステイレットは言いたいがこらえる。

「そうか。……で、ステイレット、もう一つ話があるんだが」

「何よ。後はスイッチ押すだけだから待ってよ」

そう言つてステイレットは洗濯機のスイッチを入れた。脱水までかければ残りの水気はFAGでも耐えられる。

「で、何？」

そう言うステイレットにマスターは二枚の紙を突きつける。

「今週の日曜。遊園地に一緒に行かないか？」

きよとんとなるステイレット。二枚の紙は遊園地のフリーパスチケットだった。みるみるうちに真っ赤になるステイレット。

「そ！それつてデート?!ば！バツカじゃないの!?!そういうのは人間の彼女と行くもんでしょ?!なんで私が！」

「いや、日頃お前にはお世話になつてるからさ。そのお礼も込めて」

「〜何よ。そんなんで釣つたつてむっちゃんプリンは戻つてこないわよ……。」

「それは関係ないよ。お前には純粹に感謝の気持ちがあるんだよ」

「ふ、ふーん。まあいいわ。折角の申し出ですもの。精々彼女が出来た時の予行練習にでもするのね」

「おう。じゃOKだな。じゃあまた後で細かい日程を決めるから」

そう言つてマスターは洗面所を出る。いなくなつた直後にステイレットは振動する洗濯機に降り立つと悶絶しながらもんどりうつ。

——きやー!!マスターにデートに誘われちゃった!お弁当は腕にやりをかけて作らなくちゃ!どんな服着ていこう!お小遣いは貯まつてるから新しい一張羅買わないと!どの手順で回ろうかな!!きやーきやー!!——

ステイレットが洗濯機の上でゴロゴロ転がってる中、洗面所の入り口付近で、彼女のマスターはそれをこっそり覗いていた。

——本当は部活の罰ゲームつてもあるんだけどさ……、でもアイツが喜んでくれて良かった——

そうステイレットの嬉しそうな挙動に安堵するマスターだった。

e p 2 『ヒカルと量産型ステイレット』（中編）

「えー！マスターと遊園地ですか?！」

翌日、いつもの集合する模型店でいつもの様にFAG達が会って思  
い思いの時間を過ごす。当然ステイレットは遊園地に誘われたこと  
を話した。

「そうよ。まあFAGとデートなんて寂しい男のする事だから、私は  
断ったんだけどね。どうしてもってマスターが言うもんだから仕方  
なく了解してあげたの。私って罪な女ね」

——絶対二つ返事で了解したよね——

——よくこんな風にいけしやあしやあと嘘をつけるわよ。しかも  
マスターをだしに使って——

と冷めた態度で見抜くアント姉妹。割とステイレットは単純だっ  
たりする。

「そー！勝手な事言わない！」

「で、どうするんですか？服装は？マスターとおでかけなんて憧れま  
す！」

「そうね。店内のアゾンコーナーを見て回るつもりだから皆も来るか  
しら?。」

アゾンというのは専門ドールやドールの服飾等で知られるメー  
カーだ（※実在します）。規格があつてるのでFAGにも当然着せる  
ことが出来る（※実際にコラボもしました）。

「私も見て回りますステイレット！アサルトリイのアームズコレク  
ション『トリグラフ』が欲しかったところですよ！あれがあれば『深夜  
の大きいお友達向け魔法少女ごっこ』がもつと盛り上がります！リリ  
カルなんたらに出てきそうな武器セットですから！」

「アサルトリイごっこじゃないんかい!!どっちにしても変な遊びね  
！」

ステイレットと轟雷の漫才。それも昨日と打って変わってどこか  
微笑ましい。お互いの仲が本当は良いのだというのがイノセンテイ  
ア達にも解った。

「嬉しそうだね。ステイレットさん」

「うん。あそこまでマスターが好きなんって初めて見たわ」

生き生きとしたステイレットを興味深そうに見る。それにレーフが付け加える。

「そうね。あの子はマスターが本当に好きだから。それは見て解るでしょう?」

「でもさ。こんな事を言うのもあれだけど……」

それにライが付け加える。

「FAGが遊園地行くのにチケットって必要なの? 私達は人間じゃないよ?」

「それだったら……問題ないね……」

次の瞬間、レイシシア達の前に一体のFAGが降りてくる。前回轟雷と戦った迅雷だ。

「ボクもマスターと一緒に映画を見に行った事があるけどね……。その時はあらかじめ申請して、ボクだけ精密検査して、なんらかの処置を施されて映画見たから……」

「それ、映画の盗撮されたら困るからの処置でしょうが……」

私達精密機械なんだから、とレーフは呆れた。

——  
そうこうしてる内に日曜日がやってきた。

「遅いなー、あいつ先に俺を向かわせるとか何考えてんだ?」

遊園地の入り口でステイレットを待つマスター。そしてそこから少し離れたしげみの中。

「ステイレット来ませんねー。なにやってんだか」

「デートで先に彼氏を待たせておく演出でしょ? 本当にあざといわねあいつー」

ステイレットのマスターの友人兼、轟雷のマスター(※冒頭で昼食を食べていた友人ね)の鞆から身を乗り出して轟雷とライは眺める。

「あんま身を乗り出さないでくれよ。君らのマスターから預かってる以上、万が一にも落とすわけにはいかないんだからさ」

「解ってますよ。今日はよろしくお願いします」

「轟雷さんのマスターがステイレットさんのマスターと友達だったとは知りませんでした」

と、レティシアが鞆から顔を覗かせて言った。

「俺が様子見して皆に報告する役なんだ。面白いシーンがあったら撮影しないと」

「趣味が悪いですよマスター。ステイレットにはれたら怖いどころじゃないですよ」

「お前らが言えた事かよー。見に行きたいって皆ゾロゾロ来てさ」  
「友人のデートですよ！面白そうに決まってるじゃないですか！」

轟雷の発言に全員がうんうんと頷く。鞆に入ってるのは轟雷、レティシア、イノセントィア、そしてアント姉妹の五人だ。

「あ、見て。来たよ」

ライが言うと、ステイレットがマスターに飛んでくるのが見えた。  
「ごめんね。待った？」

おろしたての青いワンピースを着たステイレットがバスケットを抱えて飛んできた。彼女の力では持ちきれないのか装備はサブアーム部と、飛ぶ為の背中のジェットエンジンだけはとりつけてある。

「っってお前が先に行けって言ったんでしようが」

「もう。そこは『俺も今来たところ』って言いなさいよ」

「まあお前が楽しそうで何より」

「フンだ。彼女役になってあげたんだから感謝なさい」

そうこうしてる内に他の家族連れやカップルはどんどん園内に入ってる。開園時間はとつくに過ぎていた。

「とにかく入ろうぜ。高校生一枚です」

入口の受付にフリーパスを手渡すマスター。それにステイレットもわくわくしながら続く。

「なんて言うべきかしら。あ、FAG一枚」

「あの、お客様？」

受付の女性がマスターに話しかける。はいとマスターは応じた。

「人間で無いのでしたら、園内の入園は自由ですが。ですがもし壊れてしまっても自己責任となりますが……」



所持品としての扱いだった。その扱いに一瞬でステイレットの笑顔が消える。

「あ！すいません大丈夫です！ホラ行くぞステイレット！」

ステイレットのコンディションを見るや少年はステイレットを掴むと一目散に園内に走っていく。

「しよ、しよっぱなからキツイわねステイレット……」

「やった！じゃあ私達はタダで遊園地遊べるねお姉ちゃん！」

「ネタで言ってるでしょうけど、空気読みなさいライ」

轟雷達が聞いた事のないドスの聞いた声で答えるレーフ。ライは萎縮して「はい……」と力なく答えた。

「そんな顔すんなよ。とりあえず来たんだから遊ぼうぜ」

「FAGなんかと遊園地来たら皆に笑われちゃうわよ……」

今ので不機嫌になるステイレット。

「何言ってるんだよ。お前あんなに熱心にどこを回るか楽しみにしてたじゃないか。弁当まで作ってさ」

「……うん」

「じゃあ行くぞ。まずお前どこ行きたい？」

「あ、じゃあジェットコースター！」

「申し訳ございません。身長制限で135cm以上は乗れません」

「じゃーじゃあコーヒーカップ！」

今度は普通に乗れた。丸い座席にマスターは座り、ステイレットは反対側にちょこんと座る。

「ほらマスター！せっかくだからハンドル回して回転加えましょう！」

「え？だってお前回したら」

「いいから！周りは皆やってるわよ！」

「よーし、しっかり捕まってるよ！せーの！」

マスターがハンドルを回した瞬間。ステイレットは遠心力ですつ

飛んで行った。

「わー」

「ステイレットオオ!!」

その後……。

「キヤー! マスター! 怖い!」

お化け屋敷でマスターにわざとらしくしがみついて

「ほらマスター! 写真撮るからしっぴかり笑いなさい!」

「いいけどお前。顔が小さすぎるぞ」

ペア用の顔出しパネルで記念写真を撮って

「うさぎと戯れるっていつでもお前のサイズだと猛獣だよな」

「そう思うなら助けなさいよ! キヤー! よだれが!!」

ふれあい動物コーナーで小動物と戯れて。

「マスター! 見てみて!」

メリーゴーランドの馬に跨りながら、ステイレットは満面の笑みを、外側で見ていたマスターに見せつける。来てよかったと心から思う。しかし……。手を振ってるマスターの周りの通行人が、クスクス笑ってるのが見えた。

——あ……マスター……笑われてる?——

マスターの周りの通行人達はマスターを見て笑ってる。FAGとデートみたいに遊園地に来てるのが変に思うのだろう。

——……そっか……やっぱ私……人形なんだ……——

そう思うと虚しくなる。そしてマスターが笑われるのが悲しくなる。そう思うとステイレットはメリーゴーランドから飛び立ち。ふわふわと飛んで行った。

「あ・あれ? ステイレット。どうしたよ」

少し離れた木の上で、ステイレットは体育座りで顔をうずめていた。目で追っていたマスターは難なく発見する。

「どうしたんだよ。いきなり飛んで行って」

頭上のステイレットに話しかけるマスター。ステイレットは涙を流していた。

「……マスター、笑われてた。私を連れていたから……皆から馬鹿に

されていた」

「なんだ。そんな事かよ。気にすんなよ。どうせ皆すぐ忘れるさ。こっちは変な事してるわけじゃないんだ。会った事の無い奴にいちいち気にするなよ」

「見る側は変だっと思ってるわよ！……もう帰りましょう。これ以上マスターが笑われるなんて、私嫌よ」

「そんな事いったってお前、まだ弁当も食べてないんだぞ」

マスターは空を見上げる。太陽は真上の昼だ。そして入道雲が見えた。

「……確かにそんなに時間は無いかもな」

雲を見ながらマスターは呟く。とはいえ、せめて二人で弁当を食べる位はしたいと思うマスター。いい場所はないかと辺りを見回す。そこへある物が目につく。同時にある閃きが浮かぶ。

「そうであれだ！行くぞステイレット！」

「え？何マスター！」

戸惑うステイレットを尻目に走り出すマスター。ステイレットは待つてよと追いかけた。

「そっか。観覧車なら」

ゴンドラの中でステイレットは感心する声を上げた。今の二人は密室の中。誰も見て笑う奴はいない。

「ここなら誰も見ていないだろ？ほら、食べるぞ」

そう言っつて弁当を広げるマスター。そして座席に置くと床に胡坐をかいて座った。

「どうしたのよそんな所で座って」

「食べさせてくれるんだろう？ほら、あーん」

真っ赤になるステイレット。FAGは飲食が出来ない。こうなるのは必然だった。

「な！何甘えてんのよ！バカじゃないの?!」

「……弁当の中、全部俺の好きな物ばかりじゃないか。折角二人でいるんだからさ」

「……しようがないわね。ほら、あーんして」

両手で身の丈以上のフォークを抱えるステイレット。最初は複雑そうな顔でマスターの口に弁当を運んでいたが、数度運ぶと笑顔に変わった。

弁当も食べ終わり、座席に座るマスター、その肩に座るステイレット。そのまま景色を二人は眺める。

「こういう景色なのか。お前の飛んでる風景」

「もつと低いわよ。むしろ、これがマスターの目線なんだなって私は思うわ」

「……来て良かったって思ってるか？」

「……当たり前でしょ」

そう言いながら、ステイレットはマスターの頬に頭を、体重を預ける。しかし密室の距離間に、次第にももの凄く恥ずかしくなっていた。

——よ！よくよく考えたらマスターとめっちゃ近いじゃない！これからどうする?!どうすんのかよ！観覧車と言ったらあれでしょ?!恋人同士がキスする場所ってなもんでしょ！でも私達恋人じゃないし！でもでも私は人ですらないわ！FAGよ！やっても無問題よね！無問題！——

意を決してマスターの頬にキスしようとするステイレット。しかしその時だった。

カツ!!!

稲光が周囲を真っ白に染める。そして轟く轟音。雷だ。

「ッ!!」

ステイレットの体がビクッと強張る。と同時に土砂降りの雨が降ってきた。夕立だ。

「あ……うあ……」

ステイレットが両耳を塞ぎ、恐怖に歪んだ表情となる。マスターは「思った以上に早い！」と自分の判断を呪った。そのまま力なく肩から落ちるステイレット。それをマスターは手で受け止めた。

「俺の判断ミスだ。ごめん！ステイレット！」

「夕立が降ってきたな」

観覧車の見える屋内で轟雷のマスターと轟雷達は休んでいた。

「私達の防水技術は上がってますけど。これだけの土砂降りには歩けませんねー」とレティシア。

「っ！待ってください！じゃあ今のステイレットは！」

轟雷が慌てた声を上げた。マスターも同じ様な表情となる。

「何々？どうしたんですか？」

イノセントィアが聞こうとすると、降りてきた観覧車からステイレットのマスターが飛び出してきた。ステイレットを雨から守る為に、自分の胸に、シャツの中に入れて、そのまま一目散に入口に走っていくのが見えた。

「あ、あれ？帰っちゃうんですか？もう？」

「ステイレット……そうか、この夕立で」

「あの……ステイレットさんに何かあったんですか？」

「ステイレットは、今のマスターに引き取られる前に……ちよつとありましてね。その時に雨と雷に過敏に反応する様になってしまったんです」

「なんですかそれ？」

「マスター……話していいですよね」

そうだな。と頷くマスター。

「ステイレットはですね……。第一世代型のFAGなんです」

ep3 『ヒカルと量産型ステイレット』（後編）

——真っ暗だ。何も聞こえない……。何も見えない。……。真っ暗ってなんだっけ？今まで私は光を見ていた気がする。……。光ってなんだっけ？

「……ステイレット……ステイレット……」

何かが聞こえる。誰？ステイレットって……。……。徐々に思考がハッキリして、解らなかつたものの意味が解ってくる。見える。光が。

「ん……ん」

ステイレット。そう呼ばれた私は目を開けた。そうだ。これは過去だ。私が以前のマスターの所で目を覚ました記憶。いえ記録だ。私のデータ整理の際の記録。

「……あなたは？」

目の前の少年に私は話しかける。今のマスターと年齢はそう変わらない。

「君のマスターだよ。ユーザー登録は残ってるだろう？」

自分の記憶を確認。そして目の前のマスターが私の記録のマスターと同一人物と確定。

「確定しました。あなたが私のマスターですね？」

「凄いや。アップデート前と比べてずっと自然に喋ってる」

「？アップデート？」

「FA社に申請すれば第二世代型にパーツや自我を改良してくれるっていったんだけど、ここまで変わるもんなんだ！またよろしくね！ステイレット！」

「マスター。はい。よろしくお願いします」

私はステイレット。第二世代型のFAG、いや、人工自我にアップデートを施された第一世代型のFAG。試作型轟雷達のもたらしたデータにより、私達第一世代型にも製造元であるFA社から、申請によるアップグレードが施され、第二世代と同様の性能と情緒を与えられた。

「ステイレット。どうだった？今の心で飛ぶ空は」

「見るもの全てが美しいです。空も、町も、人間も」

「君も綺麗だよ」

アップグレードしてくれたマスターは私を大切にしてくれた。しかし……。

「お前、まだ第一世代なのかよ。第二世代はいいぜ」

アップグレードを受けたとはいえ、私の周囲の視線は第一世代のままだった。

「だからどうしたんだよ。こいつは家族だ」

最初はマスターもそれに対して、だからどうしたと言わんばかりに毅然とした態度で答えていた。だが次第に、第二世代型のFAGを羨ましく見る様になっていった。

「マスター……、第一世代の私は……嫌ですか？」

「そんなことないよ。お前は友達で、家族だよ」

次第に私に対する態度もマスターは変化してきた。表面上は変わりなく接しているように見えても、私には解った。そしてある日……「ここで待っていてくれ。必ずすぐに迎えに来るから。俺が来るまで、ここでじっとしていてくれ」

河川敷の土手、そう言ってマスターは私を置いてその場から離れていった。空は曇り空。もうすぐ雨が降る。

「マスター……待ってるから……」

その日はマスターは……迎えには来ませんでした。夜が来て、朝が来て、そして私達にとつて天敵である雨が降ってきた。

「マスター……本当はね……解ってたよ。こないって」

雨に打たれながら私はマスターに捨てられたという事が理解していた。私達の体を構成するナノマシンは水により機能を停止する。飛ぶ為のエンジンが、手が、足が、動かなくなっていた。横向きで空を仰ぎながら、私は泣いていた。

「こんな気持ちになるんだったら……人形のままの方がよかった……。誰か……助けて……」

そうやって私の視界はブラックアウト。後は楽だ。このまま私は

……死ぬ。あの日、アップデートを施された起動前の様に、もう何も見えない。聞こえない。

——ドクン！ドクン！——

聞こえないって、そう思ったのに、聞こえた。これは人間の心臓の音だ。命の脈動は「死ぬな。生きろ」そう私に訴えるように聞こえた。「何よ……うるさいわね……」

そう言っつて、私は目を覚ます。目の前の風景、まるで模型店の内装の様な景色、人間の言う天国という奴だろうかとその時は思った。

「……F A Gにも天国つてあるのね。にしても華が無い風景です事」「何を言ってるんですか！これは現実ですよ！」

声が気になって振り向くと、轟雷タイプがいた。私の反応を見るや否や抱き付く。

「良かった！気が付いて!!」

「いーいきなり何よ！」

引きはがそうと腕を動かすと外側のサブアームが轟雷を引きはがす。私の本来の腕は全く反応しなくなっていた。

「な！何よこれ！」

私の手足は、某キマリスヴィダールの手足が追加されており、本来の足は外されていた。

「手足のナノマシンが駄目になっていたからさ。応急処置だけど交換させてもらったよ」

轟雷のマスターだ。他にもF A Gを連れたマスターらしき人物が何人かいた。レーフとライもいた。

「俺が助けてやったんだからさ。感謝しろよ」

そう得意げに言ったのは現在のマスターになる人だった。今の私に生きている意味なんてない。そう思っつて怒鳴った。

「なんで……なんで助けたのよ！」

「待っつて下さい！この人が気づいてくれたからあなたは助かったんですよー！」

「私マスターに捨てられたのよ！こんな私に生きてる意味なんて！」

「……だっつてお前、『助けて』つて言っつたじゃんか」



「え？」

「そう言ったって事はお前はまだ死にたくないって事だろ」

「……」

確かに無意識に呟いた記録はある。でもそれで私の生きる意味であるマスターは……。

「この方は雨からあなたを守るべく、胸の中に入れて、助けようと必死でしたよ。感謝の気持ち位は示してもいいんじゃないですか？」

「なんかうるさいと思っただらあなたの心臓だったんだ……。おかげで目が醒めちゃったじゃない」

「良かったじゃねえかよ」

「でも、気が付いたとはいえ、今の状態は不安定ですよ。一度メーカーに送ってオーバーホールしてもらわないと」

「お金は俺達で出すしかないなあ」と轟雷のマスターが呟く。マスター本人がいなのだ。有志で費用は工面するしかない。

「じゃあ俺も」「僕も」「私も」と何人ものマスターが費用の工面を立候補する。人数が集まれば費用も少なくて済む。

「余計な事しないでよ。帰って来たってマスターもいないんだから、登録したマスターからは見捨てられたのよ」

「じゃあ俺の家に来いよ」

そう言ったのは現在のマスターだ。打算の無い、何も考えてなさそうな笑顔でだ。

「アイツの轟雷、見てたら俺も欲しくなっちゃってさ」

「……もういいわよ。勝手になさい。私型落ちだからね」

どうせまた捨てられる。そう思いながらぶつきらばうな返事を私は出した。そうして、メーカー送りになって、交換が必要な部分新品同様の状態になって帰ってきて、そして今のマスターと暮らす様になったんだっけ。……もう一年前の事だわ。でもなんで思い出したのかしら。

——ドクン！ドクン！——

ああ、また心臓の音が聞こえる。そうだ。これマスターの心臓だ。私倒れたんだっけ。捨てられた日から、私のプログラムに雨関係でプ

ロテクトがかかる様になったんだ。人間でいえばトラウマって奴ね。試作型ステイレットがかかったという奴だわ。そしてまたマスターに抱かれたんだ。……うるさいのに、暖かい。安心する。――

「ん……」

ステイレットは目を醒ます。見慣れたマスターの部屋だ。椅子形態になった充電デバイス「充電君」に、素体状態の彼女は繋がれていた。もう景色は暗い。夜である。

「大丈夫か？」

寝間着姿のマスターが話しかけてくる。

「……台無しな日曜日だったわね」

「いや、楽しかったぜ」

「……マスター、やっぱり私、人形よ。私に気を遣わなくてもいいんだからね」

「気なんか使ってねえよ」

「……マスター。これ」

そう言つてステイレットはアーマーを着こむと柵の一番上に移動。マスターの目線から死角になっている場所からステイレットはある本を数冊落とす。それは……、

「あ！俺の『むっちゃんプリン』シリーズ！」

マスターのエロ本だった。ステイレットは捨てておらず、柵の上に隠していたのだ。

「近くに隠していたのに、気づかないなんて馬鹿ね。マスター」

「お前なあ！」

「マスター……こんな事する私……捨てたくなつた？もし私が本当に捨ててたら……」

悲しげな表情でステイレットは問いかける。彼女は怖いのだ。今のマスターには全幅の信頼を寄せている。だが万が一にも、捨てられるかもしれない。自分と人間の立ち位置は等しい物ではない。だから自分は人形だと言い聞かせたのだ。自分に。

……最近はその感覚も薄れてきた。でもそれは間違いではないの

か。と、今の夢でステイレットは思う。

「んなわけねえだろ。仮に本当に捨てたつてそんな事するもんか」

「でも私……あなたに、この本みたいなさ、出来ないし……」

赤面するステイレットにマスターはずっこける。そういう話じゃないだろ。と突っ込む。

「もう余計な事考えんなよ。もう今日は休めよ。折角の楽しい日をごんなネガティブな気持ちで締めくくるのも嫌だろ」

「そうね。今日はありがとうマスター」

スリープモード、つまり眠ろうと装備の解除をしようとするステイレット。しかしある事を思いついて手が止まる。

「ねえマスター」

「望みどおりにはしたけど、いいんだな。寝返りうっても怒るなよ」

「解ってるわよ。今日はこうして眠りたいの。良い夢が見れそう」

ステイレットの提案。それは充電君をマスターのベッドに移動させ、ケーブルを伸ばしたステイレットを、マスターの心臓の真上に移動させ眠りたい。という物だった。

「俺は間違いなく悪夢見るな……」

「もう、こんな可愛い子と眠れるんだから文句言わないの！」

「しようがねえな。特別だからな。……おやすみ」

「おやすみなさい。マスター」

そう言つてステイレットとマスターは目を閉じる。胎児の様な丸まった格好でマスターの心臓の鼓動。それを全身で感じるステイレット。

——マスターの心臓……。ここから始まった。あれから凄い勢いで時間が経つて行った。楽しい思い出ばかり。最初はそんなつもりなかったのに……。どんどん一緒にいたいって思う様になってきた。……これが人間の言う『好き』って奴？

今のマスターはバカでスケベでデリカシーも無いけど……。でも優しくして行動で示してくれるマスター。そんなマスターが……。そんなマスターが——

「マスター。寝ちゃった？」

問いかけるステイレットにマスターは寝息で答える。どうもステイレットが鼓動に夢中になっていている間、結構な時間が流れていたらしい。ステイレットは起こさない様に慎重に四つん這いでマスターの顔のすぐ前に移動。

「マスター……あのね……」

そう言つてステイレットは、己の唇と、マスターの唇を重ねた。

——大好き——

## ep4 『トモコと量産型マテリア』（前編）

季節は夏、夏と言えば暑さ、そして熱さだ。太陽の照り付ける熱は新たな命を育み、学生は部活や大会、受験へ向けて己を鍛え上げる。とかく夏は様々な物が熱くなる季節だ。そしてそれは何も人間だけに限った話ではない。

「てやああっ!!」

イノセンチアが中世の城の大広間、舞踏会の会場を模したバトルステージでレイブレードから移植した刃を振るう。大ぶりな刃は衝撃波となって床と絨毯を粉塵と共に巻き上げる。相手を切り裂けば一度で勝負は決するだろう。しかし……。

「ウッフッフ。アハハハ」

相手のFAGは軽やかに舞いながらハンドガンで飛びながらイノセンチアに連射する。舞踏会のステージなだけに、まさに舞うように、だ。

「くそお！なんてすばしっこい！」

相手のFAGはマテリア、本来は武装を持たないFAGだが、あらゆる装備を使いこなす特性を持つ。追加装備で某ヴィダールのアーマーを取り付けていた。

「今までの自分の力を過信していたと言った所かしら。いいわよその顔、ゾクゾクするわ」

妖艶な笑みを浮かべながら、マテリアは蹴りをイノセンチアに入れる。刃の仕込んでいる足だ。吹き飛び、倒れこむイノセンチアにマテリアは一気に加速、細長いサーベルをイノセンチアの胸に突き刺した。

「あっ！」

『ガッ』という音からして致命傷だな。と、客観的に判断するイノセンチア。そして『負けた』と、悔しさを表情に浮かべながら彼女は光の粒子を発しながらステージから消える。

「でもその顔が一番ステキよ」

そう言うとマテリアは、慣れた手つきでサーベルを腰部のウエポ  
ンラックに仕舞う。それと同時に周囲のバトルステージは解除。模型  
店の風景に切り替わった。

「イノセントティア！大丈夫ですか?!」

轟雷がイノセントティアに心配そうに駆け寄る。今日は相方のレ  
ティシアやアント姉妹がいない。

「轟雷さん、やられちゃったよ」

イノセントティアが申し訳なきように呟いた。

「仕方ありませんよ。今日はレティシアもいないんですから」

「それでも自信はあったんだけどなあ」

今日はいつもとは別の模型店でのトーナメント大会だ。今日はイ  
ノセントティアと轟雷だけが出場していた。

「ごきげんよう。あなたの店舗のFAGは二体だけかしら？轟雷」

そう言うと、さつき勝ったマテリアが寄ってくる。FAGの数が少  
ないのが不満気味と言った言葉だ。

「あなたがこの店舗のエース、マテリアですか。今日は用事があつて  
来れないんですよ」

「まあ残念、もつと他にあなた達の仲間のFAGを連れてくる事を期  
待したのだけれど」

「彼女達でしたら、友達のステイレットが皆を無理やり連れて行つた  
んですよ。マスターの試合の応援だそうで」

「私の友達もさらわれたよ」

「くちゅん！」

その頃、体育館でチアガール服を着たステイレットはくしゃみをす  
る。

「ステイレット。風邪?」

「そんな露出の高いチアガール服着るからだよ。マスターに見せた  
かったんでしょ?」

「しかもボディまで変えるっていう念の入れ方だよ」

レーフとライの指摘に真っ赤になるステイレット。全員がチア

ガール衣装を着ているが、ステイレットだけ妙に露出が多い衣装だった。そしてオール肌色の素体装着である。

「そーそんなわけないでしょ!! ってそんな事より! いい事あなた達! マスターのチーム応援は気合いを入れていくわよ!」

「トーナメント大会出たかったのにー」

無理やりステイレットのマスターの応援に、駆り出されたレティシア達であった。

「私達は今日の試合の申請終わってたから免れたんですけどねー」

「残念ね。まあ、FAGの生活もマスター次第だから仕方ないわね。と、次の試合は轟雷、あなたよ。行った方がいいんじゃないかしら」  
「あ、本当ですね。じゃあ私行つてきます」

そう言つて轟雷はセツシヨンベースを持ったマスターと、一緒にステージへ移動する。相手は重武装のスクール水着娘、フレズヴェルクだ。背後にいるマスターはまだ小学生だ。

「へえ、轟雷タイプか。飛べるボクに比べて、地べたを這う轟雷じゃボクの敵じゃないね」

カチンと来る言い方だ。どうも開発班の違いからか、もしくは元ネタの地球陣営と月陣営の違いか。このタイプとは相性が悪い。

「性能的にダンボ○ル戦機に出てきたLB○の真似事やったフレズヴェルク型ですか。いいでしょう。そのアホ面を泣き顔に変えてあげます」

「そういう事言うなよ轟雷」「駄目だよフレズ、相手に失礼な事言っちゃ」

お互いのマスターが制止する。轟雷とフレズの二人が「うっ」と口を紡いだ。精神年齢は同じ位だろうな。とお互いのマスターは同じ事を思う。そしてステージは辺り一面の氷の世界となる。今回のバトルステージは南極だ。

『バトルスタート』というアナウンスと共に、フレズは真っ先に轟雷目掛けて低空飛行からの加速、両手に持ったブレード付きライフル。ベリルショットランチャーで切りかかる。

「眠れ！武装○姫の成り損ないめ！」

が、轟雷はこれを跳躍で回避、

「あなたみたいな生意気ロボ娘は！コミケの薄い本でミゼルオーレギオ○に乱暴されてなさい!!」

頭上から肩部キャノンで狙い撃つ轟雷。

「うるさいな！今時ダンボー○戦機は全部装甲娘（一言で言うならダ○ボール戦機公式美少女化）に移行しちゃったから！そのネタ今時の子供は解らないよ！」

素早く回避するフレズは回避ついでにランチャーを撃つ。空中ではバーニアの少ない轟雷では機敏に動けない。

「あれコロコロア○キで連載するとはビックリしましたよね！でもゲームも終了しちゃいました！」

轟雷は肩部のキャノンを撃って反動で回避、降り立つとジグザグに動きながらフレズの周りを回りつつ小銃で撃つ。

「夏に再始動するって言ってたから終了じゃないよ！きつと戻ってきてくれる！」

フレズも後ろを取らせまいと、轟雷と向き合いながらの形となる。

「コロコ○アニキは『劇画ガールズ&パンツァー』の方が気になりますんで私にはどうも！私のデザイナーの関係上！」

撃ちあいながらも言ってる事は緊張感の欠片もねえ。

「後コトブキヤで装甲娘のキットも出ますからねえ！しかしあれですよ！元ネタの○ンボール戦機の方はプラモがバ○ダイから出たのに！装甲娘のプラモはコトブキヤの方からって、これ裏切りですよレベルファイブの!!」

「版権的にはレベルファイブの物だからいいんじゃない!?ダンボール戦○のプラモも再販されるって！FAGもダンボール○機とコラボしないかなあ！」

「性能的に私らじゃ一撃で消し炭にされますよ！」

「クロスオーバーならもうちよつと空気読んでくれるよ！その前にお前を消し炭にする！」

そう言つてフレズはベリルショットランチャーの銃身ブレードで



切りかかる。お互いのマスターは『戦闘中に何を話してるんだよ』と呆れていた。

「マスター！」

轟雷の一言でマスターは轟雷は何を求めているか解った。バックパックのアーマー換装。リナシメントアーマーを転送だ。そのまま轟雷はサブアームのデモリッションナイフでブレードを受け止める。

「何?！」

『フレズ！離れて！』

フレズのマスターが叫んだ時にはもう遅い。

「パワー全開！」

そう轟雷は叫んでランチャーを弾く、そして至近距離で小銃を撃ちまくる。

「わああっ！」

フレズは一身に銃弾を受けて大ダメージを負う。重武装かつ高機動ではあるが、撃たれ弱く燃費が悪く、なおかつ機体バランスが劣悪なのがフレズヴェルク系列の難点だ。と、損傷したフレズの装備が爆発。フレズ本体も爆発に飲まれる。

「やったの?！」

「それはフラグの発言だねえ!!」

そう轟雷が言った瞬間、爆風の中からフレズが飛び出してくる。アーマーをパージした素体形態だ。そのまま轟雷の背後に回るとフレズは轟雷に絡みつく様に関節技をかけた。

「っ?!がっあああっ！」

コブラツイストだ。

「どうだっ！マスターとプロレスで遊びたいけど、サイズの無理だから持て余していたとっておきだ！」

轟雷の右腋から顔を出し、両手をクラッチさせたフレズが得意げに言う。

「……って、馬鹿ですかあなたは」

対する轟雷はいたって冷静だった。

「何！」

とフレズが戸惑う直後、轟雷は技のかかかってない方の踵のキヤタピラを可動させて足を上げた。回る無限軌道はフレズに当たり、それは技を解くのに十分な威力だった。

「わあっ！」

直後、轟雷はバックパックをパージ、バックパックはそのままフレズへの重しになる。その隙に轟雷は日本刀でフレズを切り裂いた。

「しよー！賞品のクロスフレーム！ガオガイガーが欲しかったのにい！！」

そのままフレズはダメージが限界となり光を発して消える。バトルの結果は轟雷の勝利となった。

「あざとい連中ですね。だから嫌いなんですよフレズヴェルクのシリーズは」

そして準決勝を勝ち抜いた轟雷は、そのままマテリアとの決勝戦となる。そしてバトルステージは古代の闘技場。コロッセオのステージだ。

「ウッフフフ！あなたはどんな声で泣いてくれるのかしらあ！」

「さあ来なさい！ストパンのサーニャもどき！！」

「似てないわよ！」

始まるや否や、ヴィダールアーマーを着たマテリアは二丁拳銃とライフルで轟雷を撃ちまくる。通常装備の轟雷は無限軌道の動きでそれをかわす。

「それっ！」

バズーカを撃つ轟雷、マテリアは着弾点からジャンプ。上空から轟雷へ銃撃とサーベルで突きをかける。

「あなたの装備は大物ばかり！私相手には分が悪いわ！」

轟雷は下がりがつつサーベルをかわす。サーベルは地面に突き刺さり、マテリアはその場にとどまる。その隙に小銃で反撃しようとする轟雷、しかしマテリアはサーベルを軸に回し蹴りを放つ。回し蹴りは小銃を弾いた。

「あっ！」

「少しずつ切り刻んであげるから！」

回し蹴りのいい勢いを利用してハイキック。からの踵落としだ。轟雷のバイザーに当たり、バイザーはぎっくりと傷が入り、衝撃で轟雷はバランスを崩す。マテリアはよろけた轟雷に飛びかかり押し倒す。背中から倒れこんだ轟雷に、馬乗りになりとどめを刺そうとするマテリア。

「でもやっぱり一撃もね！」

『キックだ！轟雷！』

轟雷のマスターは独断で轟雷の足アーマーをリナシメントに変える。キック力の上だった足で轟雷は足を思いつきり上げた。

「うっ！」

無造作ながらも力の入った蹴りは軽量のマテリアを弾き飛ばし、轟雷の体勢を立て直すには十分だった。その隙に全装備をリナシメントに変える轟雷。蹴りの衝撃でライフルを遠くに手放してしまったマテリア。向き合う二人。

「くっ！さすが全ての装備を使いこなすと言われたマテリア！」

「……そうね、私はFAGの最初期、双子の試作型マテリア、その二体の特性を受け継いだ量産機、それにしても……あなた、マスターに救われたわね」

「ええ、そう言うあなたはマスターはいないのでですか？」

轟雷は疑問だった。マテリアのマスターの姿は一度も見えていない。「……あなたが知る必要はないわ。でもこれだけは言っておく。私はマスター無しでは生きられない体なの。そのマスターの為に私も私は最高でなければならぬ。その為にあなたには負けてもらおうわ」

そう言っマテリアはサブアームにサーベルを持って、自身の両手にはハンドガンを持って飛びかかる。ハンドガンで牽制を行いつつサーベルで一突きという算段だろう。轟雷は大剣と日本刀で対抗しようとする。マテリアはサーベルで突っ込むと思いきや、刃を仕込んだ跳び蹴りを仕掛ける。

薙ぎ払おうとデモリッションナイフを横に振った轟雷だが、

「甘いわねえ！」

振るった大剣の刃の上にマテリアは立っていた。そのまま轟雷にサーベルを突き刺そうと駆け出す。

『轟雷!!……をしろっ!』

マスターからのとっさの指示だ。もう遅いとマテリアはサーベルを突き刺す。轟雷はサブアームで防御するも、サーベルはアームを貫通し轟雷の胸アーマーに突き刺さる。

「がっ!!」

「フフ、その顔、ゾクゾク……ん?」

勝ったと確信するマテリアだが、その瞬間に轟雷は刺されたサブアームを切り離す。刺さったままのサーベルは重量が増してマテリアはバランスを崩しよろけた。

「う!何っ!?!」

戸惑いの表情を見せるマテリア。轟雷が不敵な笑みを見せた。

「見たかったですよ……その顔がっ!」

サーベルの刃を切り離して、離れようとするマテリアだが、その前に轟雷は内側の手で大鉈を握っていた。そのままマテリアの胸に鉈をぶつけると同時にパイルを撃ち込んだ。それが決め手になった。

「くっあああっ!!」

「あなたの断末魔もステキですよ。なんちゃって……ね……」

光を放ち消えるマテリア。それを見届けつつ轟雷は膝をついた。かろうじてではあるがこの大会。轟雷の勝利、そして優勝となった。

「凄かったです轟雷さん!やっぱりあなたは私の憧れです!」

イノセントティアが目を輝かせて駆け寄る。

「あ、ありがとうイノセントティア。どうやら先輩としての威厳は保てたようですね」

「あなた……完敗ね。あなたには敬意を表するわ」

今度はマテリアが来て賞賛の言葉をかけた。しかし轟雷ではなくマスターに対してだ。

「……いやなんで私ではなくマスターに向かって言うんですか」

「あら、当然でしょう?マスターが優秀だったからあなたは勝てたの

よ。あなただけではこうはならなかったわ」

そのマテリアの態度にイノセントィアが食いつく。

「嫌な言い方するわね。では何、あなたの方はマスターがいたら、轟雷さんには必ず勝っていたって言いたいのか!?!」

「そうは言っていないわよ」

イノセントィアの発言にマテリアは若干面倒そうに答えた。

「イノセントィア、そういう発言は……」

「甘いですよ轟雷さん! マテリアタイプと言えば試作型が腹黒で有名じゃないですか! 彼女もそんな口に決まっていますよ!」

「イノセントィア。いい加減に……」

「どうせマスターも似たような嫌な奴なんですよ?!」

その瞬間、マテリアの表情が一気に怒り一色なった。

「お前もう黙「マスターの事を悪く言わないで!!!」

周囲が止めようとする前に、激昂したマテリアがイノセントィアを黙らせた。今までの態度と一変しての、その迫力にイノセントィアは言葉を詰まらせる。

「……もういい。不愉快だわ。言いたい事はまだまだあるけど、私はもう帰るわね」

そう言っただけマテリアはその場を離れた。少しして店内の窓からドローンに乗って移動するマテリアが見えた。

「やりすぎですよ。イノセントィア」

「だって、いちいち発言が腹立つんですよあいつ。上から目線が多いし」

「だからってマスターまで悪く言うのは最低だぞ。今度会ったら謝つとけ」

「う……」

若干バツが悪そうになるイノセントィア。

「へえ、マテリアのマスターの事が気になるんだ」

その中に割って入るFAGが一人、さつき戦ったフレズヴェルクだ。

「あなたは……知ってるんですか?」

「まあね。あいつとはホームグラウンドの店舗が同じだし、……見てみたくない？あいつのマスター」

いたずらっぽく笑うフレズ、豊満な体つきに比べて内面は子供っぽいというのを表情は現しているようだった。

「へえ」

「フレズ！駄目だよ！人のプライベートを覗いちゃ！」

それを止めようと彼女のマスターの少年が止めに入る。轟雷とイノセンチアのマスターも同様の事を言って止めようとする。

「いいでしょマスター、ちよつと見て帰ってくるだけだから、じゃあ行きましよう！」

あのマテリアの弱みになるかもしれないと、イノセンチアは思うと、ここで止まるつもりはなかった。フレズはアーマーをエアバイクに変形させると、イノセンチアを後ろに乗せて飛び立った。

「マスター、ボクの方もちよつと見せたら帰ってくるから心配しないでー！それじゃあ行ってきまーす！」

フレズは店内の窓を開けるとそのままエアバイクで飛び出していった。その様に轟雷も呆れた。

「何やってんですか二人とも……」

——三時までもう少しね。……間に合うかしら——

ドローンに乗りながら帰路につくマテリア、途中嫌な事はあったが、それをマスターに悟らせるわけにはいかない、さっきの事はマテリアは忘れようと誓った。程無くしてマテリアは住宅街の一軒家に向かって降りて行った。それを物陰に隠れながら見るフレズとイノセンチア。

「お金持ちかと思ったら、普通の家っぽいね」

「まああいつのマスターは、ある意味普通じゃないと思うよ。面白い物見せてあげるよ」

気づかれない様に慎重に近づいていく二人、マテリアは隠していた合鍵で玄関のカギを開けると、中に入っていく。暫くして、装備を外し、服を着て出てきた。

何かを待っている様だ。と、暫くして小型のバスが走ってきた。派手な絵柄からイノセントィアはそれが何かすぐ解った。

「？幼稚園バス？」

来るとマテリアの表情がパアツと明るくなる。扉が開くと一人の女の子が降りてきた。六歳位の子だ。

「トモちゃん！おかえり！」

店内で見せた態度とはまるで違う態度でマテリアは出迎えた。

「あーマリちゃんだー！ただいまー！」

気の置けない親友と会った様な笑顔で、トモちゃんと呼ばれた女の子はマテリアにかけ寄る。そして掴むと自分の目線に持っていく。

「今日もご苦労様です」

保育士の方がマテリアに話しかけた。

「こんにちは先生。当然の事ですわ」

「……そちらの方は大丈夫ですか？」

彼女の方もマテリアと会うのに慣れてる様だ。

「ええ、今の所は何も問題なくて、今の調子なら来月中旬に……ん？」

と、マテリアは妙な気配を感じた。というか、ある方向の木に妙にカラスが集まっている。黒い鳥たちが騒いでるのだ。その木には……。

「うわあこら近寄んな馬鹿！」

「なんでこいつらこんな時に集まってんの！」

フレズのエアバイクにカラスが群がっていた。マテリアもそれに気づくと何があつたか察する。

「すいませえん……ちよつと失礼。ごめんねトモちゃん、手を離して」

解放され、ひきつった笑顔でドローンに乗ると撃ち出し式の爆竹を持つ。自分がカラスに襲われた時の為の装備だった。ある程度近くになると爆竹を撃つ。強烈な音と共にカラスは驚きその場から一斉に去って行った。

「わああっ………た、助かった」

「あなた達い……？何をしているのかしらあ？」

怒りの漏れる笑顔でマテリアは詰め寄る。

「ぜ！全然助かってないいいい！！」



ep5 『トモコと量産型マテリア』（中編）

「じゃあマリちゃんのお友達なんだね」

その後、イノセントィア達はマテリアの家に連れ込まれた。ごく普通の一軒家である。

「そうよトモちゃん。とっても仲のいい友達なんだから」

マテリアの嘘。幼稚園児である主はそれを信じ込み、覗いていた二人を歓迎する。

「あはは……どうも」

「こ、この人があなたのマスター？」

「その通り」

「初めまして。トモコです。六歳です」

誇らしげにするマテリア。初々しく挨拶するトモコと名乗ったマテリアのマスター。

——こんなにマスターは純粹そうなのに……——と二人は思った。あまりにもFAGとキャラが違う。

「折角来てくれたから、今日は皆で遊びましょうよお」

純粹そうなマスターに反して、マテリアは含みのある笑顔で言った。

「いやあそう言いたい所ですけど、私達はマスターが待っていますんで」

「じゃあ今日はミィちゃんもハルちゃんも来るから皆で遊ぼうよ！」

マスターの発案、マテリアを除く二人のFAGは『え?!』と固まる。「あらー！それいいわねトモちゃん！いつもは私がおままごことで赤ちゃん役だったけどー！今日はこの二人にやってもらいましょうー！」

マテリアがどんどん話を進めていく。二人の表情は更に引きつった。

「ちよー！ちよつとマテリア！確かにボク達がついていったのは謝るけどー！さすがにそれはー！」

「……トモちゃん。この二人遊びたくないって」

「ええ……そんな……」

涙目になるマスター、小さな子供にそんな顔されると二人もバツが悪い。

「解った！解ったから！遊ぶよ！それでいいんでしょ！」

「だあだ、だあだ」

「はいイノセントティアちゃん、ミルクでちゅよー」

赤ちゃんがつけるおしゃぶりをつけたスク水美少女フレズ、それが母親を真似る幼稚園児に抱っこされていた。

「はいフレズちゃん。オムツ変えましょうねー」

「……勘弁してよ……」

げんなりした表情でフレズは呟いた。三人のFAGはそれぞれ、幼稚園児三人の相手をさせられていた。とはいえ雑には扱われていない。子供達全員が人形を労わる年齢に達していたのは幸いと言ったところか。

「もう不機嫌そうな顔しちやってー。笑って笑ってー本当に世話が焼けるんだからー」

マテリアが赤ちゃんをあやすガラガラを振るいながら笑う。だがイノセントティア達にはマテリアの笑顔は凄まじく邪悪に見えた。

「マテリアアア。さすがにこれは恨むよおお」

「あーら、これ位で泣き言とはだらしのないわねえ。私はいつもこういう役を一人で受けてるっていうのに」

——受けてるんだ……——

と、そうこうしてる内に「ただいまー」という女性の声が玄関から聞こえた。「あ、ママだ」とトモコが玄関に走って行った。友達の二人もFAGを掴んだまま走って行った。

「うわあつ！誰が帰ってきたの！」

「マスターのお母様よ。粗相のない様にね」

廊下に出るとそこにいたのは30代あたりであろう女性だ。

「ママ、おかえりー」

そう言つてトモコは彼女のお腹に抱き付いた。FAG達は母親の姿に妙な違和感を覚えた。

「あれ？あの人、お腹が……」

そう、太っているわけではないのだが、彼女のお腹は妙に膨れ上がっていた。それは人間で言うところの……。

「……二人目がいるのよ。トモちゃんのお母さん」

「え!?確か人間で言う妊娠って奴?」

「あら。マリのお友達?」

FAGに気づくや挨拶をする母親。

「あ、どうも……」

「お帰りなさい。検査の結果はどうでしたか?」

マテリアの方も母親のコンディションが気になったようで問いかける。

「順調よ。予定日に生まれるかは解らないけどね」

「健康で生まれてくれるのなら何よりですわ」

「マリ、あなたにも世話をかけるわね。トモコの面倒を見てもらって」「お気になさらず、人の望むサポートをする事こそが私達FAGの存在理由ですから」

誇らしげな顔で答えるマテリア。フレズ達やトモコに見せた笑顔とはまた別の類の笑顔だった。

「今日はパパも早く帰ってくるから。久しぶりに皆で一緒にご飯食べられるわね」

母親の一言、それにトモコは一瞬で表情が曇った。

「パパ、きらい……」

「トモちゃん。ダメよ。そんな事言っちゃ」

困った表情でマテリアはなだめる。

「だっていつもお仕事でいないんだもん」

「トモコ……」

「パパのお仕事の所為で、皆とお別れになっちゃったから!パパなんかいなくていいもん!」

「トモコ!」

「待って下さいお母様!ねえトモちゃん。そう思っていたとしても、お友達がいる前でそういう発言はよくないと思うわ」

トモコの両手に持たれたマテリアが、トモコに向かい合いながら言う。

「マリちゃん……」

「もうすぐお姉ちゃんになるんだからさ、見て。お友達の二人も困ってるじゃない」

二人の友達はどうしていいか解らず。黙っていた。

「ミイちゃんハルちゃん……」

「トモちゃん、わたし達はトモちゃんがお引越してきたから、お友達になれたんだよ」

「パパのこと、そんな風に言っちゃだめだよ」

「……うん。ごめんね」

申し訳なさそうな表情でトモコは二人に謝る。

「お友達にもちゃんと謝れるんだからさ。とりあえず今日はパパに会ってみましょうよ。ね」

「……うん」

「よし、それじゃ今日はごちそう作るからね！」

母親もそれを見て安心した様だ。

「お母様。では私も手伝いますわ」

「あなたはトモコと遊んでいて。あなたが一番トモコの扱いには慣れているんだからね」

「じゃあ次はお化粧ゴツコしようよ！皆で！」

「あらいいわねトモちゃん！この二人の顔に思いつきりお化粧しましょうー！」

トモコとマテリア、賛同する友達二人、その笑顔とフレズ達の心境はもう説明しなくてもいいだろう。

「？お化粧はマリちゃんもだよ？」

「え？いや私は……」

うろたえるマテリア。今日くらいは自分は標的にならず済んだと思っていたのに。

「……嫌なの？」

じわ、と涙目になるトモコにマテリアはブンブン首を縦に振って肯

定を現した。

「そ！そんな事ないわよお！私トモチちゃんのお化粧だーいすきつっ  
!!!!」

そう言いながらマテリアは覚悟を決めたのだった。

——今日はどんな顔になっちゃうのかしらあ……——

「じゃあ私達帰るねー」

「またねトモチちゃんー。皆ー」

暫くして、ともこの友達達は親に迎えに来てもらって帰って行った。それと共にイノセンチア達も解放される事になった。

「ぐあぁーっ！や！やっ！と終わったー！」

くてんと音を立てて倒れこむフレズとイノセンチア。お化粧ごとつこで顔を滅茶苦茶に落書きされておろい、お互いの顔は非常にカラフルとなっていた。

「お疲れ様。早く顔吹きなさい」

そう言つてマテリアは小さなタオルを二人によこす。マテリア自身も顔にお化粧と称して顔に落書きをされていた。

「もう時間ね……。トモチちゃん、私の方も、この二人を送ってくるわね」

「うん、マリちゃん気を付けてね」

そうやって拭き終わったマテリア達も、模型店にドローンで、そしてフレズのエアバイクで帰ってゆく。三人が飛ぶ空は、もう夕方と言つていい時間だが、日が長くまだ明るかった。

「お友達二人も食べていけばよかったのにね」

「気を使ってくれたんでしょ。若いのにしっかりした子達だわ」

「……その……マテリア。ごめんなさい」

ドローンに座ったイノセンチアが、隣のマテリアに話しかける。下に四脚アームを備え付けたドローンは、FAGが余裕で腰掛けられるほど大きい。

「……マスターの事を悪く言った事かしら？」

「うん……」

「ま、今日は手伝ってくれたから、チャラにしてあげるわ」

「ボクも知らなかったよ……君のマスターのお母さんが、赤ちゃんを製造していたなんて」

「そんな機械的な言葉は不愉快よ。妊娠と言いなさい」

不快そうな言い方と表情でマテリアは言った。楽しみに水を刺されたといった顔だ。

「でも大変じゃない？あぁやって小さい子を相手するのって、子供でも私達よりずっと力は強いんだから」

「そうねあなた達、運が良かったわね。あの子、去年まではFAGを何体も破壊してるのよ」

そのマテリアの発言に青ざめるイノセントィア達。

「なんて嘘よ。大丈夫。私ที่บ้านに来た時から私を妹みたいに優しく扱ってくれる子よ。母性っていうのかしらね。あの年齢で持つてるものなのね」

その発言に胸をなでおろす二人。そして気になっていた事を問いかける。

「……トモちゃんのお父さんって、仲悪いの？」

「悪いけど、それには答えられないわ」

答えるマテリアの声に遊びがない。この件に関しては何も答えたくないらしい。

「そうなんだ……辛くない？そういう家族間の問題とか、子供の相手とか」

今日子供の相手をして、どれだけハードか身を挺して理解した二人。いつも余裕のマテリアがこんな苦勞をしていたとは思わなかった。

「そうね。でも私にとって彼女の笑顔は最高に綺麗よ。泣き顔なんかよりずっとね。その為なら苦ではないわ」

「なんていうか、意外だね。試作型マテリアは『女は泣いている姿が至高』って考え方があったって聞いたけど」

「私は私よ。試作型ではないわ。でも……試作型だったとしても、同じ風に振る舞ったとは思わ」

「どうして?」

「ウッフッフ。こう見えて献身的な性格してるのよ。私達マテリア型は」

その後には帰ってマスターには怒られた。マテリアはあらかじめ模型店にいるマスター達には連絡を入れていたらしく、怒られたのは勝手についていった事に関してだけだった。

「全く、こんな遅くまで待たせて」

「でも意外でしたね。マテリアのマスターがそんな小さな子供だなんて」

轟雷もマテリアのマスターの事を話されて、意外に感じていた。

「そうだな。FAG自体ある程度成人した人が持つものだと俺も思ってたよ」

その横で僕は小学生ですけどね。とフレズのマスターが答えた。

「じゃあ私は帰るわね。……まあ今日は助かったわ」

そう言つてマテリアは家に帰ろうとする。

「あ、待ってマテリア。その……元気な赤ちゃんが生まれる事を祈ってるから……」

「イノセントィア……ありがとう」

最後にフツと優しい笑みを浮かべてマテリアはその場を後にした。

数日後。

「ママー早く早く!」

「はいはい。待って」

再びマテリアと彼女のマスターの家だ。予定日は近く、三人でする日課の散歩も警戒を怠れない。

——この光景も何度目だろう——

そう思いながらトモコの肩に乗るマテリア。もう自分がこの家に来てから半年がたつ。

——  
クリスマスの日に、プレゼントとして初めて起動した時は驚いたわ

ね。こんな小さな女の子が私のマスターだったなんて。

「…………ふああ…………」

場所は子供部屋のベッドの枕元。包装されたプレゼントから出されて目を覚ました瞬間。目の前に可愛らしい女の子が目を輝かせていた。その人がトモちゃんだった。

「あら。ごきげんよう。可愛らしいマスターさん」

「すごい！喋るお人形さんだー！」

私は表面上余裕に振る舞っていたけど、実際は戸惑っていたわ。私の予想とまるで違ったんですもの。この人はマスターでは無いかもしれない、とも十分考えられた。

「あなたがこの街での最初のお友達だね！あくしゅしよー！」

「？あなた、引越してきたの？」

「うん！サンタさんに『お友達が欲しい』って言ったらプレゼントであなたが来たの！」

「まあ本当に喋るのね。最近の人形は凄いわね」

部屋に入ってきたマスターのお母様も、感心と驚きが混じった声を上げてたわね。そしてすぐにこっちの疑問を察してくれたのか、答えを話したわ。

「うちはね、主人の仕事の都合で、昨日引越してきたばかりなの。この子の友達も、それで離れ離れになっちゃってね」

いきなりそんな事を言われて、正直戸惑ったわ。でもともちゃんの期待を込めた笑顔と、何よりお母様のお腹…………。

「？そのお腹は？」

今よりも膨らみは少ないけど、妊娠してるというのは私にも解った。

「私の弟がいるのー！」

嬉しそうにトモちゃんは言った。

「もうトモコったら、まだ解らないって言ってたじゃない。こんな体だからね。こっちじゃ頼れる人も少ないから、あなたにこの子のお守りを協力してもらいたいの。お願いできる？」

「ベビーシッターだなんて…………私達の本来の用途ではありませんわ。」



でも……断れないじゃない。これじゃあ」

「嫌？」とトモちゃんは泣きそうになる。冗談のつもりでの反応だったけど、こういう反応は予想以上に私のASにくるわね。まあ育児が自分の使い方ではないと愚痴ったのは本音だけれども。

「そーそんなことないわよ！私はマテリア！よろしくね！わあっ！」

握手として自分よりも何倍もの手に握られた私、大きなトモちゃんの手は私の肩ごと掴み、引き寄せる。

「まてり……？じゃあマリちゃんね！」

「マリちゃん……まあ、可愛いからいい……かしら」

そうして早半年、すすくとトモちゃんは大きくなって、時間が流れるにつれて、確実に環境が変わりつつあるのを実感した。ここではないけれど、トモちゃんのお父様もトモちゃんの事をとてても大事にしていたわ。

だって、私がこの家に来た日の夜。お父様から言われたから、私が買われた理由は……。

「……生まれる時は、お父様も一緒にいるといいわね」

マテリアはそれとなくマスターの父親の話題を出す。様子見も兼ねた質問だ。

「……パパきらい」

トモコはそれに対して露骨に嫌そうな顔をする。まだ駄目か……とマテリアはASで呟いた。

「……そういうのはよくないわよ。もうすぐお姉ちゃんですよ？」

「私はママと弟ちゃんとマリちゃんがいればいいの！」

そう言ってマテリアを抱きしめるトモコ。……父親の話題になるとどうもこれだ。

「でもパパも、トモちゃんやママの為に頑張ってると思うけどなあ」「やだ。……今日だって、お休みの日なのにパパお仕事で出かけたかったもん。本当は今日皆でお散歩行く約束だったのに」

「……ねえトモちゃん。それ以上は」

言っちゃ駄目。どうにかなだめようとするマテリアだが、トモコは

止まらない。母だとしてもマテリアよりキツイ言い方になる為、自分でどうにかしたい。というのがマテリアの考えだった。

「マリちゃんが来たクリスマスだって、本当は私と遊んでほしかったのに……」

「トモコ！それ以上言っちゃ……うっ！」

見かねた母の発言。その時だった。母がお腹を押さえてその場にうずくまる。

「お母様?!どうしたんですか！まさか！」

陣痛か！とマテリアは判断する。

「急いで救急車を呼ばなければ!!」

「駄目よ。確か陣痛は救急車駄目だって……!」

まだ呼べないと母は告げた。トモコもこの状況にどうしていいか解らず、母親に泣きついていた。

——人を呼ばなきゃ……!なんでこんな時にドローンを忘れてきたの!——

「大丈夫。少しすれば収まるからその時に……」

出産経験がある所為か、一人母親は冷静だった。とはいえのんびりしてられない。

「あれ?マテリアじゃん。どうしたの?」

その時だった。あっけらかんとした声が響いた。マテリアにとってはよく聞いた声だ。

「フレズ?!どうしてここに!」

「マスターが病院で入院してるからお見舞いだよ。……ねえ、君のマスターのお腹、大丈夫?」

母親の様子を見てフレズは状況を飲み込んだ。

「生まれそうなの!タクシーを呼んで頂戴!!」

ep6 『トモコと量産型マテリア』（後編）

その後母親はタクシーを呼んでもらい、病院へ直行。すぐさま入院となり、色々と手続きを踏んだ後に、出産の手術となった。手術室に母は運ばれていき、マテリア達とマスターはその前の廊下で待機する事になる。

「……暇だね」

フレズがぼそつと呟いた。マスターとの用事を済ませた後、なぜか戻ってきた。現在の時刻はもう日が暮れかけている。

「呑気な発言じゃないあなたあ」

怒りをにじませてマテリアは呟く。病院じゃなければ怒鳴っていたかもしれない。マテリアの方はかなりイライラしていた。

「悪かったよ」

その横でトモコは長椅子で横になりながら寝息を立てていた。

「マテリア！大丈夫なの?!」

と、そこへ更にFAGが現れる。ドローンに乗ったイノセントティアとレティシアだ。マテリアにとっては予想してない珍客だった。「なんであなたが」と言いたげなマテリアだったが、察したのかフレズが説明した。

「ボクが連絡したんだよ。イノセントティアだって心配はしていたんだよ」

「いやだからって友達まで連れてくるのは……」

「えー、でも皆来ちゃったしー」

イノセントティアが自分の後方を示すと、轟雷とステイレットとアント姉妹が姿を現した。

「心配なのは私もですよマテリア！」と轟雷。

「人をタクシー代わりにしといて何かと思えば他人の出産?!」と轟雷を吊るしたステイレットが愚痴る。

「なんか面白そうだからきたよー」とブリッツガンナーに乗ったアント姉妹。

「あなた達……呼んでないから帰ってくれないかしらあ、特に最後の

お二人さん」

見世物にされてるようで腹が立つ。せめてアント姉妹は追い出さうとするマテリアだったが、

「んー……。どうしたのマリちゃん」

「あ、ごめんねトモちゃん。起こしちゃった？」

騒がしさに目を覚ますトモコ。と、更に来客はこれで終わりではなかった。

「マリ……」

そこへスーツ姿の男性が現れる。トモコの母と同じ位の年齢だろうか。それを見たフレズは「おじさん誰？」と邪険に扱うが……。

「……お父様」

マテリアは言った。トモコの父親だ。

「……パパ」

トモコがわずらわしそうに呟いた。未だに父親には良い感情を持ってないらしい。フレズとイノセントイアも「まだ仲直りしてないんだ」とその時点で察した。

「……何しに来たの」

冷たく言い放つトモコ。その場の異様な雰囲気はFAG達が固まる。

「トモコ……」

「一緒にいてほしい時にはいないのに……ママ、さっきお腹痛いときもいなかったのに……こういう時だけなんで来るの？」

「トモちゃん……。ねえ落ち着いて」

父親は長椅子に座っているトモコの両肩を持ち、そして目線を同じ高さになる様に、床に膝をつけて向かい合う。普段相手に出来ない娘に対しての、出来る限りの誠意だった。

「トモコ……ゴメンよ。お仕事で……」

「いつもそうだよね。お仕事お仕事って、今日のお散歩だって、マリちゃんがいなかったら……」

「トモちゃん……」

「パパなんて……パパなんて家族じゃない！」

「トモちゃん!!」

「パパなんて知らない! サンタさんがくれたマリちゃんの方が! ずっと家族だよ!」

両手でマテリアをぎゅつと掴むトモコ。それは「お前よりもこの子の方がずっと大事だ」という意思表示であった。

「トモちゃん! そんな事言わないで!!」

もう耐えられない。そう言わんばかりにマテリアは感情を吐き出す。

「マリちゃん! マリちゃんまでパパの味方するの?!」

「違うよ! パパは最初っからトモちゃんが一番の味方だよ!」

「嘘だよ!」

「嘘じゃない! だって! だって!!!」

マテリアが何を言おうとしているか父親は感づいた。止めようとするもマテリアは止まらない。

「私をトモちゃんにプレゼントしたの!」

「っ! マテリア! 駄目だ!」

「私をあなたにプレゼントしたの!! あなたのパパなのよっ!!」

マテリアは声の限り叫んだ。

「……え?」

なんで……? とトモコは茫然とする。

「……パパはね、お仕事でいつもトモちゃんの相手をしてあげられないの。いつも気にしてたのよ」

マテリアの両頬を涙が伝う。父親もマテリアの大きさからは考えられない迫力に、止めようと思えなかった。

「……だって……そうでしょ。子供との約束は守りたくたって守れない。でもお仕事をやめたらトモちゃん的生活が大変になっちゃうわよ。でも、それで我慢していたらトモちゃん、お引越して友達とお別れになってしまった。だからあなたのパパは、友達として、私をあなたに用意したの」

そうだ。マテリアが来た翌日の夜。トモコのパパとマテリアは初めて会った。そして言われた「トモコの友達になってほしい」と。

「トモちゃん、私、トモちゃんの事大好きだよ？でも、私だけを好きでいて欲しくないの」

「……なんで黙っていたの？」

「パパのプレゼントって聞いたら、お前はこの子を大事にしないかとも思った……」

「そんなの……」

「トモちゃん。勝手かもだけど、パパなりの思いやりなの……」

複雑そうな表情でトモコは俯く。

「……解ってるよ。私だって……。お引越しで、お友達が欲しいって願わなかったら、マリちゃんと会えなかったって事位……。パパのお仕事も私やママの為だって事……。でもさ」

トモコの両目からも涙が流れてくる。

「寂しかったんだもん。ずっと家にママと二人で、友達とお別れになっちゃったの、許せなかったんだもん……」

「パパの方も……。ゴメンな。お前と一緒にいてあげられなくて……」

「パパ……。ごめんなさい！パパ!!」

マテリアを抱えたまま、父親に抱き付いたトモコ。と、直後に手術室のランプが消えて手術着の医師が出てきた。

「先生……」

「ええ、生まれました。男の子です。母子共に健康ですよ」

やり切った顔で答える医師に、「やった」と言った表情になる父親とトモコ、そしてマテリア、

「とりあえず説明いたしますのでこちらへ」

「えー！すぐ会えるわけじゃないのー!？」

赤ちゃんの顔が見られると思っていたトモコはぐずりそうになる。それをなだめるマテリア。

「駄目よトモちゃん。お母さんも赤ちゃんも疲れるんだから」

「うー……」

露骨に不満そうになるトモコ。

「そういうわけだから皆、私達はやらなきゃいけない事があるからもうこれ以上相手出来ないわ。じゃあね」

「じゃあ私達ももうこれ以上出来る事はないですね」と轟雷。

ただ一人、イノセントティアだけが、待ってマテリア。と彼女を引き留めた。振り返るマテリアに彼女はこう言った。

「おめでとう。マテリア」

「……ええ、イノセントティア。ありがとう」

——  
そして数日たって……

『おぉー!』

その場にいた全FAGが感嘆の声を上げた。場所はトモコの母親の病室。そこへ生まれたばかりの赤子の寝たベッドが運ばれてきた。まだ目が見えてないのか、寝息を立ててずっと寝ている。

「これがロールアウトしたての赤ちゃんだね!」

「物みたいに言うんじゃないわよ!!生まれたばかりと言いなさいフレズ!!」

「しー、マリちゃん。泣いちゃうから静かに」

「はいべろべろばー」

「轟雷、寝てる時にあやしても無駄だから……」

—— 赤ちゃんか……。……いつかFAGと人間でも赤ちゃん、作れるかな……。——

マテリア達の横で、マスターの顔を思い浮かべながらステイレットは思う。直後に「何考えてんだろ私」と顔をしかめた。

「なんか……。不思議だよね」

皆がはしゃぐ中、イノセントティアだけ神妙な顔をしていた。

「イノセントティア?」

その様子がマテリアには気にかかった。

「ついこの間まで、いなかったのに、今はいる。私達みたいに工場で作られたのとは違う。どこから来たのかなって考えるとすごく不思議で……」

「そうね……。増えたのよね……。トモちゃんの家族が……」

感慨深そうになるマテリア。

「マリちゃんも家族だよ。そしてこの子はマリちゃんの家族」

「トモちゃん……うん！」

「やあ皆、おっと、先客がいたかな」

そんな中、病室に父が入ってくる。仕事が早く片付いたのだろう。しかしトモコはそれに喜びの声を上げた。

「あ、パパ！」

「何度見ても、お前に似てるよな」

生まれたばかりの赤ちゃんを見ながらトモコに父は言う。

「もう！私こんなにお猿さんみたいじゃないよ！」

そりやないだろう。と笑う父親。つられて母も笑った。

「僕の方も仕事がひと段落しそうだよ。これからはもつと早く家に帰れそうだ」

「え?!本当!?!」

「トモコにも寂しい思いさせちゃったからな。今度何か買い物に行こう。何か欲しい物があつたら何でも買ってあげるよ」

そんな高い物は勘弁してね。と母親は付け足す。

「私は……別にいいよ。……代わりに、この子にF A Gを買ってあげたいな」

生まれたばかりの弟を見ながらトモコは言った。

「あらトモちゃん……どうして?」

「マリちゃんと一緒にいて思つたの。こんなに素敵な友達、私だけが一緒にや勿体ないって、だからこの子にも最初のお友達としてF A Gをあげるの！」

トモコの発言にマテリアは思う。今まで自分でもらつてばかりの子が、自分からしてあげたいという意志を持った。それは一つ大人になったという事実。マテリアにとつてとても感慨深い物だった。自分の主、そして友達の成長を見ながら、マテリアは胸がいつぱいになつていくのを感じていた。

「もちろん買い物にはママも一緒だよ！マリちゃんも一緒にF A Gを選びに行こうよ！」

「ええ、トモコ」

母も同様の心境だったのだろう。満ち足りた笑顔で答えた。



暫く月日が流れて……。

「……うーん……」

トモコの家のリビングで、箱から上半身を起こして一体のFAGが目覚めます。機種はマテリア・black、マリの色違いだ。

「あー起きたー!」

トモコが待ちきれないといった感じで新しく起動したマテリアに詰め寄った。その後ろには両親も揃っている。

「ん……あらあごきげんよう。可愛いあなたが私のマスターかしらあ」

マリと比べて若干低いトーンで黒いマテリアは問いかけた。

「いえ、あなたのマスターは別にいるわ」

白いマテリア、マリは黒いマテリアに答えた。マリを見るや黒いマテリアは目を輝かせる。

「まあ！私のアナザーカラーのマテリア！あなたの様なお姉様がいらつしやるとは！……この生活も楽しくなりそうですわあ!」

「だからあなたのマスターは別にいるって言ってるのよ。ほら、あそこよ」

「あそこ？……へっ?」

黒いマテリアは、マリの示した場所を見て固まった。……トモコの母が抱えていた赤子がそこにいたから。

「あなたのマスター、ユウちゃんよ。年齢は三か月よ」

「わ……私にベビーシッターをやれと?」

マリが来た時と同じ反応だったと母は苦笑する。

「いえ、あの子の友達、そして家族になるのよ。マスターとしても素敵な方よ」

「じゃあまずは名前決めようよー。白いのがマリちゃんだからテアちゃんでもいいよねー」

「あらいいわねトモちゃん」

「いやよくありませんわ！名前文字の余りじゃないですか!!」

黒いマテリア、テアは自分の名前のいい加減さに思わず大声で突つ

込む。

「ン……ふぎやああ——!!!」

その突っ込みが癪に障ったのか、赤子、ユウは顔を崩す程の形相、そして大声で泣き出した。

「あ……」

「もう。あなたが大声出すから泣いてしまったじゃない」

耳を塞ぎながらのマリの指摘にテアは焦り出す。

「そ、その……ごめんさい。そんなつもりじゃ」

「よしよし、大丈夫よ。この子はいつも泣くか寝るかばかりなんだから」

あやす母親、じきに収まって落ち着くユウ。

「ね、改めてこの子の友達になつてくれないかしら？」

母はユウを抱っこしたままテアの前に向けた。新生児のユウは、まだよく見えてない目で、目の前のテアに手を差し出した。

「あ、よ、よろしく……」

テアの方も手を差し出し、触れたテアの手を、ユウは弱い力ながらも握る。と、同時にニコツと笑顔を見せた。

「っ！笑いました！笑ってくれましたわお姉様！」

思わぬ反応に嬉しくなるテア。

「よかったじゃないか。ユウも君の事気につてくれそうだね」

「あら、ユウが笑うのなんて初めてよ。このタイミングで笑顔を感じるなんて、あなたとは運命の出会いかもね」

その言葉に嬉しくなるテア、それを見ながらマリは「チョロいわねこの子」と笑みを浮かべていた。

「あなたの言葉がこの子の学びになるわ。優しい言葉で話しかけてあげてね。テア」

「はーはいー」

「よろしくね。私達の新しい家族」

そうトモコは笑ってテアを迎え入れた。

e p 7 『ヒカルと量産型ステイレット2』（前編）

それは……ステイレットが遊園地デートをする少し前の話である。  
「37度8分……」

ベッドに座りながら、引き締まった体躯の少年が、体温計をかざして呟く。……紹介が遅れた。彼がステイレットのマスター『洪庵ヒカル』である。

微熱ではあるものの、熱く、寒気がする。全身の関節が痛む。そして何よりもダルい。しかし寝てるわけにはいかないとベッドから起き上がる。学校指定のジャージに重い動作で着替えると部屋を出た。声の無い悲鳴を、体の節々が上げる中での移動だ。どうしても動作が重い。

夏に差し掛かる時期だが今日の朝の気温は控えめである。涼しいと普通の人は思うだろう。だがヒカルは感覚では寒いという感想しか出ない。

「あーマスター！何やってんのよ！」

廊下を歩く中、全長15cmの少女が飛びながら突っかかる。FAG。ステイレットだ。今はアーマーはつけておらず、背中のジェットエンジンだけ装着していた。そして前面には料理をしていたのかピンのエプロン姿。その両手には氷枕を抱えている。ヒカルに届けるつもりだったのだろう。

「……見りゃわかんदार。試合行くんだよ」

赤い顔でおつくうそうにヒカルは答えた。彼は立場上ステイレットのマスターだ。主人がそう言ったのなら、機械は大人しく従う物かもしれない。しかしFAGは単純な機械ではない。主人の様子を見て黙っていられるわけがなかった。

「このアホっ子！寝ててって言ったじゃない！試合だか何だか知らないけれど！この状態で出かけようだなんてバカ丸出しよ！」

氷枕を手放し、主人の目線の高さまでホバリングしながらステイレットは叫ぶ。床に落ちた氷枕の事はお構いなしである。

「常にパンツ丸出しのお前が言うなよ……」

「パ……ボディースーツよこれ！」

少女は赤面しつつ、青いストライプのボディースーツの尻を両手で覆った。

「風邪マスクは、下の戸棚だったよな……」

「ちよつと！パジャマに着替えてよ！早く脱いで！」

ジャージを脱がそうとチャックに手をかけるステイレット。ヒカルは彼女を指でつまむと引きはがす。

「駄目だ。風邪つつたつて軽い程度だ。これ位で休んでられるかよ」

ステイレットは暴れて指から脱出するとヒカルの額へ移動。自分の額と合わせた。いつも以上の体温がステイレットに伝わる。

「何言ってるのよ！こんなに熱いじゃない！何で自分のコンディションが悪いのに部活優先させるのよ！」

「俺は攻撃役のフォワードだ。皆がいる事が前提で練習してきたんだよ。今日一日我慢したら休むからいいだろ」

「よかないわよ！」

必死に後ろ髪を引っ張るステイレットだが、十倍以上ある主人を引き留める事は適わず、ズルズルと空中で引きずられていく。廊下を歩いて階段を降りてマスクを回収。そうこうしているうちに玄関まで来た。ずつとステイレットはうんうん唸って力を入れていた。

「ああもう！だから待ってって！」

ヒカルの後ろ髪から顔の正面に移動、仁王立ちとなるステイレット。彼女に構わず靴を履こうとするヒカルだったが。

「う……」

中腰になった瞬間。遠近感がおかしくなった所為だろうか、クラツと立ちくらみが来る。前のめりに力なく倒れていくヒカル。その目の前にはステイレットがいた。

——やばい……巻き込む……——

下敷きにしたら大変だ。とっさにそう思うとヒカルは反射的に身をひるがえす。さっきまでの重い動きから一転した素早さだ。対するステイレットはヒカルの顔を受け止めようとしていたが、掴んだ状

態でそのまま振り回される結果となった。

「へっきやあぁっー！」

ドシンと音を立ててヒカルは仰向けに倒れた。

「わぷっ」

続いてステイレットがヒカルの顔面に落ちてくる。突然の事に少女は目を回していた。

「きゅう……」

「うう……ステイレット……大丈夫……うおっ！」

ヒカルは絶句。眼の前に広がるのはステイレットの開脚した尻だ。彼女はヒカルの鼻の上にがに股で、ヒカルの口に向かって四つん這いの様な恰好で倒れていた。縞柄のボディスーツごしのステイレットの恥丘、それが鼻の上に押し付けられている。

ぷつくりとした恥丘の両端のラインが上に走り、肛門付近で合流、三角形の艶かしいラインを形作っていた。そこを保護する様に左右に豊かな尻肉が広がる。痙攣するステイレットに合わせて、間近で見た柔肌はプル……プル……と小刻みに揺れていた。卑猥ではあるが、これもナノマシンテクノロジーの結晶である。本やDVDでしか見た事のない扇情的光景に、スケベではあるが奥手なヒカルはドギマギする。

「うーん……マスターどうしたの……ッ！」

ステイレットも自分の状況に気が付いたようだ。みるみるうちにステイレットの顔が真っ赤になっていく。わなわなと震えながら涙目だ。

「な！何見てんのよ?!」

「みみみ見てない見てない！しましまトライアングルなんて見てない！……あ」

それがトドメの言葉だった。向き直ったステイレットは右手で股を抑えると、怒り心頭の顔で左手を上げた。

「マスターの！マスターの!!!変っ態っっ!!!」

そして思いつきりビンタをかました。が、大きさが大ききさなので、「ぺち」という可愛い音しかなかったが。

「もういいわよ！勝手にしなさい！風邪が悪化しても知らないからね！！」

涙目のステイレットはヒカルからぷいと顔を背ける。と、ヒカルから離れて奥の部屋に引っ込んでいった。

「悪かったよ。じゃあ行ってくる」

謝る傍ら、ヒカルの脳裏にステイレットの恥丘が強く焼き付いていた。記憶の優先順位的に、つい風邪を引いた事を忘れてしまいそうだった。

——ちよつとラッキーだったかも——

が、関節の痛みがすぐに彼を現実に戻す。ステイレットに対して申し訳なさはあるが、今は部活が優先だ。

「ゴメンなステイレット……」

そう言っただけでヒカルは家を後にした。

玄関を閉めて出ていったヒカルを、ステイレットはただ見つめるしかできなかった。

「もう知らないからね……」

すぐさまステイレットは家の奥、キッチンに飛んでいく。屋内で飛ぶ彼女の飛行速度は、成人の歩幅とほぼ同等だった。キッチンにつくと隅にある電気コンロのスイッチを飛行しながら止める。そのままコンロの上に降り立つと、温めていた片手鍋の蓋を開けた。中で、出来上がったおかゆが湯気を上げている。人間サイズの調理器具の扱いは、身長15cmのFAGにとってはどんな物も大がかりだ。

「私の気も知らないで……」

……出来立てを食べてほしかった。美味しいって褒めてほしかった。あーんて食べさせてあげたかった。全部出来なくなった。

「……マスターの馬鹿……」

勝手にしたヒカルを心配するも、ずっとこうしていても仕方がない。

「ああもう！知らないって言ったんだから知らないの！気分転換に行

きましよ！」

自分に言い聞かせるように叫んだ。エプロンを外すと無造作に床に投げつける。そしてキマリスアーマーを装着すると屋内の火の元、戸締りを確認。安全確認が終了すると玄関から律義に出ていく。鍵をかけていつもの模型店に飛び出していった。屋内とは比較にならない飛行速度だ。

「アナタが！悪いんだからねえっ!!」

大空を飛びながらステイレットは叫んだ。

そして行きつけの模型店で手あたり次第にバトルを仕掛けた。暴れたい。という理由はあるが、完全に憂さ晴らしである。仮想空間内、高層ビルの屋上のバトルフィールド、ヘリポートの上でステイレットはアント姉妹を圧倒していた。もう今日何度目のバトルだろうか。

「この程度で終わり?!笑わせないでよ！」

通常装備のステイレット。二連装ミサイルが命中すると大きく吹き飛ばす姉妹、追撃として日本刀を両手に構えてすれ違いざまに一閃。姉妹は光を放ちフィールドから消える。ステイレットの圧勝だ。

「いたた……随分と今日は容赦ないじゃないステイレット」

フィールドが解除されるといつもの丸テーブルの様な機材に切り替わる。その無機質な地面の上をレーフが起き上がった。今日のステイレットの態度はおかしいとすぐ気づいた。

「ステイレット。今日は随分と機嫌が悪いじゃないですか」

ギャラリーの轟雷が、そんな事しちゃいけないといわんばかりに問いかける。

「大方ステイレットお姉ちゃん。マスターと喧嘩したんでしょ？」

レーフの次に起き上がったライが、いつもの事だと言った。

「ええ!?ステイレット、マスターと喧嘩したんですか?」

「真に受けちゃ駄目よ轟雷。どうせ最後はいつもみたいにノロケになっちゃうんだから」

「聞いているこつちが恥ずかしくなっちゃうよねお姉ちゃん」

冷めた態度で轟雷を止める姉妹。こういう事は珍しくない。轟雷だけがいつでも真剣な態度で聞いてくれるのが割とパターンだった。「そーそんなわけないでしょ！今日という今日は許せないんだからアイツ！風邪ひいたつてのに私の忠告無視してバスケ行って！こつちがどれだけ心配してると思ったのよー！」

「やっぱりノロケじゃない」

「こないだは梅雨時は不安で寝られないから、マスターのベッドですぐ傍で寝ると安心するって言ってたよね」

「ああ、確かバレンタインデーの時も『マスターが一つもチョコもらえなくて可哀想だから私が手作りであげたのー』って嬉しそうに言っていましたよね」

「ぐっ…うっさいわね！そんな昔の事いちいち覚えてないですよ！」

真っ赤になりながら反論するステイレット、自分の方ではノロケのつもりは一切なかった。

「でもさー、別にマスターが自分の言う通りにならないのは普通のことですよ？」

突然のライの発言だ。「え？」とステイレットは戸惑う。

「私達の作られた目的はあくまで人間とのコミュニケーションだよ？親や恋人じゃないんだからあーだこーだ口を出したら迷惑なんじゃない？」

「う……」

そう言われるとステイレットは口を紡ぐ。特に『恋人じゃない』の部分はステイレットにはかなり応える言葉だった。

「おいお前ら、悩み相談はいいけど、後が使えてるのを忘れるなよ」

と、ヒカルとは別の少年の声が機材の外側から響いた。轟雷のマスター『諭吉黄一』だ。その後ろで、他のマスターの肩や掌の上でそれぞれのFAGが「まだあかないのー？」「終わったんなら早くどいてよー」と愚痴ってるのが見えた。

「わあー…めんなさいー！」

長くバトルステージ用の機材を長く使いすぎた。慌てて轟雷達はその場を移動した。



少しして轟雷達は話せる場所として、店内のFAGのコミュニケーション用スペースに移動。大型テーブルの上に設置されたドールハウスの様な場所で、ここでFAG達は情報のやり取りをする。ドールハウス同様。一方向の壁は取り払われており外からは丸見えだ。テーブルの前にマスター用の座席も設置されており、会話に参加は難しく出来る。

なおスペースはいくつか種類があり、今回はステイレットの愚痴という事で、銀座のバーみたいなのステージを使用する。

「わ、これって確かスナックですか？」

「バーと言いなさい轟雷」

初めて入るステージに目を輝かせる轟雷。それを諫めるレーフ。カウンターの設けられた酒場。それ程明るくはない店内の照明は落ち着いた雰囲気があり、カウンターの外側には複数の丸椅子が置かれていた。

「ってその恰好。何やってるんですかレーフ」

「マスターと言いなさい」

カウンター内にはバーテンダーユニフォームを着たレーフがいた。その後ろの棚にはいくつものカクテルが並んでいる。

「個人的にこういう雰囲気が好きでね。ちよつとやってみたかったの」

自作であろうユニフォームを見せてクルツと一回転するレーフ。

「自作？ 凄いわね。ムードバッチリだね」

ステイレットにそう言われてまんざらでもなさそうなレーフだ。

「お姉ちゃんてば、いつ出そうか機会を伺ってたんだよー」

「ライ、余計な事言うんじゃないの」

「それでよー！ マスターったらー！ こっちが朝四時に起きてお弁当の仕込みやってるって言うのにー！ それにぜんっぜん気づかないんだもの！」

ステイレットの愚痴はかなり長く続いた。隣りのカウンター席に座った轟雷はうんうんと頷くしか出来ない。愚痴である以上吐き出

させるしかない。

「ライ！あなた確かFAGは恋人になれないっていったわよね！」

突如カラオケを熱唱していたライに話を振るステイレット。「え!?」という声を上げながら突然の指名に驚くライ。

「確かに私達は人形よ！主人に尽くすのは当然かもしれないわ！でもね！お礼の気持ち位もつと出したっていいじゃない！」

「まあいいじゃないですか」

戸惑うライ。それを遮ったのは轟雷だ。

「私達だって性格は個体差があります。ステイレットみたいな人がいても何も変じやないですよ」

轟雷のフォローにステイレットは安堵する。

「あ、ありがとう轟雷……」

「特にステイレットのマスター！ヒカルさんみたいなガサツな人には、ステイレットの世話焼きは相性バツチりなはずですよ！」

「一言多いわよ！フンだ！どうせマスター今日帰ってきたらフラフラになってるんだから！その時に私が看病してあげて！私の有難みを味あわせてあげるんだから！」

「あれ？ヒカルの奴風邪ひいたんだ」

と、話に参加したのは黄一だ。カウンター席の後ろの視点から話しかけてくる。轟雷達からはマスターの顔面か、あるいは胸部までしか見えない。体育会系のヒカルとは違う、インドア系の黄一は華奢な体躯だ。男の娘と言っていていいかもしれない。代わりにヒカルより知性を感じる印象である。

「マスター。昨日の学校では元気だったんですか？」

「まあね。しかしアイツが風邪とはね、……初めての事じゃないか？」

「幼馴染だったわね黄一さんとマスター」

「うん。体が丈夫なのがあいつの二番の取り柄だからな。風邪をひき慣れてないだろうからなおさら辛いんじゃないか？」

外見に反して蓮っ葉な黄一の発言にステイレットが黙る。家で待っていた方が良かったんじゃないかといった表情だ。黄一もステイレットにまずい事言ったなど後悔。

「どうしてこの時期に風邪ひいたんでしょうか？」

「うーん。そうだな……あ、多分精神的に参ってるんだと思う」

「っ?!思い当たる事があるの?!」

黄一の発言にすぐさま食らいつくステイレット。しかし黄一は話すのに抵抗があるといった反応だった。

「え?いや、これ言っていないのかな……」

次の瞬間、ステイレットが凄いい勢いでステージを飛び出すと、両手足で黄一の顔面に張り付いた。

「何!何なの!何がマスターをそんなに弱らせちゃったの!?!言いなさい!言いなさい早くうう!!!」

必死の形相だ。そのままガクガク黄一の顔を揺さぶる。

「だああ!解った!解ったから落ち着いて!……こないだあいつの部活で事件があったんだが……」

黄一はステイレットをつまんでステージに戻すと話し始める。

「お願いでございませう!!どうか!どうかそれだけは!!」

——その日、ヒカルの奴はただ自分の無力さを嘆きながらそう叫んでいたらしい。体育館にあるバスケット部、その男子更衣室の屋根裏天井スペースに。昔っからの先輩方が残っていた伝統があったらしい、それは教師たちも知らないバスケット部の禁忌、漏らしてはならないタブーだったとか——

「禁忌ってなんなんですか」

「あー……エロ本」

「は?!」

禁忌と言った割にはあまりにもくだらない内容にステイレットは絶句する。

「伝統でバスケット部の卒業生が、一年で一人一冊ずつエロ本を持ち寄って天井裏に隠す伝統があったんだってさ。それが先生達にバレて、全部没収されて、その中で一番先生に食いついていたのがヒカルの奴だったんだよ。直接俺が見たわけじゃないけど、……血涙流しながら先生に泣きついていたらって、目撃者は語っていたとか……、あ、ひと

きわ大きい声でマイクロビキニイイ!! って叫んでいたって」

「な！な！な！な！によれええ!!!」

ステイレットは大絶叫。轟雷!達は全員予想していた反応だった為に、あらかじめ耳を塞いでいた。

「たかがそんな……不潔な本でそんなヨロヨロに！ふざけんー!!」

「まあそれが男つてもんよステイレット」

レーフが効果を期待せずに慰めの言葉をかける。

「……馬鹿じゃないの……?どれだけ心配かけさせたつてのよ……私がいつも傍にいてあげてるのに……」

ステイレットはその場にへたり込みながら呟く。

「いいじゃないステイレット」

それを遮ったのはレーフだった。

「あなたの言った通り、今日ヒカルさんは帰ってきたらフラフラになっっているはずよ。その時にあなたの言った通りに看病してあげて、あなたの有難みを知らしめてあげればいいじゃない」

「うう……まあそうよね。今日は帰ってきたらすごく辛くなってるでしょうし、……辛く……」

その時、自分がいなくなったら、マスター辛いだろうな。とステイレットは思う。そう思うと、ここにこれ以上いるべきでないという考えが浮かんだ。

「私、帰るね」

「え?もう?」

次の曲を選んでいたライが意外そうな声を上げた。その横でステイレットはバーの壁にかけてあったアーマーを装着する。

「私がない時にマスター帰ってきたら辛いでしょう?私がついていてあげなきゃ駄目なんだから。じゃあね!」

そう言つてブースターを点火させるステイレット。そして模型店の出口へと素早く飛んで行った。

「本当に、ゾッコンなのね。ステイレット……」

カクテルのグラスを持ちながら、レーフはそう呟いた。

「マスター！待ってて！」

最高速度で飛びながらステイレットは帰っていく。いつでもマスターが帰ってきた時に迎え入れるためだ。程無くして自宅へと到着。「？車だ」

ふと、自宅の前に自動車が止まっているのが見えた。出てきたのは中年男性。顧問だろうか。そして後ろの座席から出てきたのはヒカル。

「っ!?!マスター！」

慌ててステイレットはヒカルの真ん前に降り立つ。目の前のヒカルの調子は予測の通り、悪化していた。

「FAG?家族の方ですか？」

「……よお……ステイレット……今日の……試合……勝った……ぜ……ゲホッ!ゴホッ!!」

フラフラになったヒカルにステイレットは愕然とした。

「っ!マスター!!!」

ep8 『ヒカルと量産型ステイレット2』（後編）

ステイレットのマスター、ヒカルが風邪をひいた。止めたにも関わらずヒカルはバスケの大会に強行出場。案の定。昼前にダウンし、教員に送ってもらおうという結果となった。

場所はヒカルの自室。ベッドの中で息も絶え絶えになっている寝間着姿のヒカルと、そのすぐ横で心配そうに見守るステイレット。腋の下に入れていた体温計が、電子音で計測終了を伝える。ステイレットは体温計を両手で引き抜くと確認。

「39度6分……。すっごい上がってるじゃない」

「ハア……。ハア……。学校は明日無理かなこりや」

「一日でどうにかなるわけないでしょ。二・三日は安静にしてなさい」

「……はは……。余裕だよ。試合は勝利に貢献したんだぜ……」

笑いながらヒカルは自分の強さをアピールする。しかしステイレットには逆効果でしかない。

「何言ってるのよ！一回戦勝つても、そのすぐ後に倒れこんじやったんでしょ？却ってチームに迷惑かけただけじゃない！」

「ファウルは……。ゴホッ！……。しなかつ……。ゴホッ！」

「単なる自己満足よ！」

「うう……。耳が痛いけど……。そう怒鳴らないでくれよ……。声が頭にガンガンくるからさ……」

言いたい事はまだまだある。しかしそう言われては言い返せない。今は一人にさせた方がいい。ステイレットはそう思った。

「……元気になったら言うから。氷枕、取り替えたくなくなったら言っつね。後欲しい物も、暫くしたらまたくるから」

「悪いな……」

「そう言うんなら早く元気になってよ」

そう言うのとステイレットはヒカルの脱ぎ散らかした服を担ぐと、洗濯機のある洗面所へと直行した。……。それを見送ったヒカルは、寒気と体の痛みと熱で何もしようがない。眠るしかなかった。

——……。思ったよりキツイわ……。アイツの言う通りにしといた方

が良かったかも……

ひき慣れてない風邪の辛さの所為だろうか、そんなネガティブな事を思いつつもヒカルは体を横に向けた。仰向けだと咳と淡で眠りづらい。悪化した風邪の辛さから逃げたかったヒカルは眠る事に集中する。時間がどれ程たったかは解らないが。ヒカルは眠りの中に落ちていった。

「フリースローだ！決めろよヒカル！」

夢の中、バスケットコートでヒカルは邪魔の入らないシユートチャンス。フリースローの場面だった。何故自分がこんな事をしているのか。夢の中なので一切の疑問は持たない。

——入れる。絶対に——

自分の意志か。夢のシナリオがそう思わせているのかはわからない。しかしヒカルは必ずゴールに入れるという意思で、審判からボールを受け取ると、フリースローサークルの中に入った。緊張からか力の調整がうまくいかない。だが制限時間内にやるしかない。慌てず、意を決すると軽く屈伸をし勢いをつける。膝を伸ばしきると同時に軽くジャンプしボールを放った。

——………行ける！——

ボールはゴールへと真っ直ぐに向かう。決まった。そう確信するヒカルだったが、次の瞬間、ゴールが突然ボールから遠くなった。「な?!」

一気に離れたゴールにボールは届かず無力に落ちた。その際に不協和音の様なブーイングが周りから起こる。

「ナニヤツテンダヨひかるー」

「無理ナラ休ンデイロヨー」

「家デ寝テイロヨー」

すべての声が、高くなったり低くなったり、大音量から極小音へと、もしくは逆の動作でぐちゃぐちゃに変化していく。それを発する周りの人間、その全員の顔の部分は真っ黒に塗りつぶされていた。そして風景全体が、空間が、コーヒーに入れたミルクを混ぜてる最中の様

にぐちやぐちやになっていく。

「うーうー！うわああっ!!」

自分以外の全てがねじれていく状況に、ヒカルは悲鳴をあげた。

「うううー！ううー！」

ヒカルがうなされてる。その様子にただ事じゃないと思ったステイレットは、慌ててヒカルを揺さぶった。

「マスター！マスター！どうしたの!？」

ステイレットの揺さぶりにヒカルは目を開ける。今朝着ていた素体エプロン姿だ。

「う……ステイレット……」

「怖い夢でも見たの？」

心配そうに覗き込む少女の顔にヒカルは安心感を感じる。窓からの景色はまだ明るい、寝ようとしてからまだ一時間程度しか経っていなかった。

「ああ……ちよつと……な」

「お腹すいてない？お粥あっためようか？」

「悪い……気分が悪くて食べられない……ゴメンな……」

「そう……気にしないで」

いつものつんけんした態度ではない。優しさを前面に押し出したステイレットの態度だ。今のヒカルにはそれがとても心地よい。

「ううー！ゲホッ！ゲホッ!!」

暫くして、トイレでヒカルは膝をついていた。気分が悪くて胃の中を戻してしまっただけらしい。

「マスター……」

献身的に背中をさするステイレット。少女にとって、いつもは頼もしいと思える背中なのに、こんなに弱弱しく見えるのは初めてだった。

「ゴメンな……ステイレット……」

「謝ってばかりじゃない……人間に尽くすのが私達の役割なんだか



「らさ」

「ありがとう……」

戻した影響か、目の潤んでいたヒカルをステイレットは抱擁する様に言った。不安だ。こんなに弱ったマスター。心配だ。こんな笑顔のないマスター。そのまま市販の風邪薬を水と一緒に飲むと、後はおもう寝るだけだ。さっきの様な悪夢は怖いけど、やはり寝るしかない。さっきと同様に横向きで寝るが、時折咳がどうしても出てしまう。

「マスター……」

そんな様子をステイレットはただ見守るしか出来ない。と、家のチャイムが鳴った。誰だろう？とステイレットはドアを開ける。

「ステイレット。ヒカルさんは大丈夫ですか？」

「マスターはもう帰ってきたみたいね」

出迎えたのは轟雷とアント姉妹。そしてマスターの黄一だ。FA G達は黄一の両肩や掌に乗っていた。

「皆…どうしたのよ！」

「あんな風に出たから、もしヒカルさんが帰ってきたらお見舞いでもしようって皆で来たんですよ」

「まあ病状が悪化してなければいいんだけどさ……。心配なのは俺も同じさ」

黄一が軽く笑いながら言った。一人だったステイレットにとって寄り添う相手が出来た。そう思うとステイレットの目が無意識に潤みだす。

「皆……皆あー！」

そして轟雷に抱き付いた。ステイレットの名前を呼びながら轟雷は動揺した。

「マスターが！マスターが死んじゃったらどうしよう!!」

嗚咽を、そして涙を流しながらステイレットは胸中を吐き出した。主も自分も、慣れてない状況にいつぱいいつぱいだった。

「結構大変な事になってるんだな……」

リビングのソファに座りながら、黄一は状況を聞きながらぼやい

た。定期的にステイレットが家の掃除をしている為、家の中は常に清潔だ。

「こんな事一度もなかったわよ……もうどうしたらいいか……」

「月曜日に学校休んで病院行けばいいだろう？焦つちや駄目だ」

「でも……早くマスターには元気になつて欲しいし……」

その時、ライが話に割り込む。

「あー、だったら特効薬のない方法があるよー」

特効薬というワードにステイレットは食いついた。

「特効薬?!何?!どうすればいいの?!」

ライにつかみかかるステイレット。ライはたじろきながら答える。

「わあー落ち着いてよステイレットお姉ちゃん!これだよ!」

台所から持ってきたのだろうか。ライの手には身の丈以上の長さのネギがあった。

「ネギ……?」

「聞いた事あるでしょ?白ネギを一枚むいて、粘りのある所を、お尻の穴につっこむと熱が下がるって」

「おいおいお前ら。馬鹿な事するなよ」

黄一にとつては馬鹿馬鹿しいにも程がある案だった。止めようとするが……

「それよ!!試してみましよう!!」

ステイレットは天の助けとばかりに大喜びだった。

「ええーお前!アイツのケツを!うええ想像しちまった!!」

首を抑えて吐き出す動作をする黄一。

「ライ!マスターのズボンおろすの手伝って!」

「えーやだよー」

「いいから!善は急げよ!!」

そのままステイレットはライを抱えて飛んでいく。部屋から二人がいなくなると黄一の後ろに隠れていた轟雷とレーフが顔を出した。

「……止めなくて良かったんですか?」

呆れながら言うレーフ。ライの心配はしていない。

「今から止めたって……ステイレットの思うようにやらせないと落ち

着かないだろう？それに……アイツのケツなんて見たくもない」

再びヒカルの夢の中だ。今度はベッドの上で寝ていた。周りは真っ暗で何も無い。

「なんだ……動きたいのに動けない……」

金縛りにあった様な感覚だった。といっても今の状況では動けなくても困る事はない。ただこの状況に流されるのみだった。

「……スター……ねえマスター……」

ふと、暗闇の中から歩いてくる人影がある。聞覚えのある声だ。闇と同化していたシルエットは近づくにつれてハッキリとその姿を現す。

「ステイレット……？」

素体状態からエプロンをつけたステイレットだ。ヒカルはそのステイレットに違和感を覚えた。何故なら……。

「お前、デカくなってないか？」

そう、今のステイレットはヒカルとほぼ同じ背丈、人間大のサイズになっていた。

「ウフフ……これでマスターのしてほしい事……してあげられるね……」

口元に指を這わせながらそう言った。いつもと違う、妖艶な笑みを浮かべるステイレット。彼女は静かにエプロンの紐を解く、ファサツという音と共にエプロンが地に落ちた。その下のステイレットの姿は、いつものボディスーツではなかった。

「ッ！お前その恰好！」

下の身体は、人間と同じ女体だった。その白い柔肌の上には、申し訳程度の布として白いマイクロビキニが身に着けてあった。だがステイレットの豊かな乳房はそれでは最低限しか隠しきれない。布地から食い込んだ下乳が写る、早く解放してと言わんばかりに押しさえつけられていた。

「ハア……ハア……嬉しいでしょう？見て。こんなに食い込むの……」

ほとんど紐でしかない下の布地に、少女は手を当てる。なぞって紐の付け根をつまむと引つ張り上げた。股間のラインが一層際立つ。肉付きはいい物の、ステイレットの肉体は鍛えているせいか、うつつらと腹筋や胸の下部のろっ骨が見える。くびれた腹部。へその上へ走る縦線。

鍛えていても、受け入れることに優れた女性の身体は柔らかかそうな印象が強い。ステイレットの息が上がるにつれて、見えている肌が、フル……フル……と振動する。そのままステイレットはベッドに上がり、ヒカルに跨った。ステイレットの柔肌全てがヒカルの目に丸見えだった。

「ねえ、マスター……しよ？」

「ッ！やめろ！ステイレット!!やめろ!!!」

さすがにこんな事をしては不味いと思ったヒカルは止めようとする。しかしヒカルの体は相変わらず動かない。

「どうして……？したかったんでしよう？」

ステイレットは息を荒くしながら、パジャマごしのヒカルのズボンに手をかけようとする。

「駄目だ！ステイレット！駄目だ!!」

「うーん。うーん」

「マスター、うなされてる……きつとまた怖い夢を見ているのね」

その頃、本物のステイレットとライは、ネギを突っ込むべく、ヒカルのズボンを下ろそうとしていた。ヒカルのうなされている様子を見て、一刻も早くネギを尻に突っ込もうとするステイレットであった。

「早くおろすわよ！うーん！うーん！」

ヒカルの腹部に跨りながら、思いつきりズボンを押すステイレット。しかしヒカルは寝ているのだ。人間の体重に巻き込まれたパジャマを下ろす力はFAGには足りない。

「うーんうーん」

なおも唸りつづけるヒカル。

「マスター！気をしっかり持って!!」

再び夢の中、拒絶するヒカルにステイレットは手を止めた。  
「手でしてほしくないの？じゃあ足でする?」

夢の中のステイレットは、少し離れるとベッドに座りながら両足をクワガタの鋏の様に上げて見せた。両足の付け根の柔肉は、今朝見た時と同様恥丘が盛り上がっていた。

「見て……向かい合ってあなたを……土踏まずでぐちゃぐちゃにしごくの……私はあなたの耐えている顔を見ながら満たされるわ……それとも……」

お互いの顔が見つめ合う形にステイレットは移動。ステイレットは目一杯よだれを溜めた口を開けてヒカルに見せつけた。

「やっぱりお口がいいの?」

くちやあ……と音を立てて、粘液の様な唾液が口の中一杯に広がる。上下の唇からヌラヌラと光った糸が引く。

「そうじゃねえ!お前は!!お前は!!」

それを見せつけられたヒカルは……喜ぶどころか、何故だか怒りの方が強く湧きあがった。直後、ステイレットの両肩を掴むと精いっぱい引きはがす。身体が動いた。

「お前はステイレットじゃねえ!!!」

「……どうしてそう思うのかしら?」

「あいつはそんな事を喜びながらする奴じゃねえよ!俺が知っているアイツは……ひねくれていて!口うるさくて!!意地っ張りで!!」

自分と暮らすステイレット。誰に言われるでもなく家事を引き受けて、毎朝起こしてくれて、

「でも!誰よりも純粹で!気が弱くて!乙女で!俺には勿体ない位!最っ高に可愛い奴なんだよ!!どの個体のステイレット型か知らねえが!アイツを汚すな!!」

「……へえ、私が汚してる。ね」

夢の中のステイレットは表情を変えることなく、余裕のままだ。

「では、これを一番望んだのは誰だと思う?」

まるでヒカルの言ってる事を全て見透かしているかのようであった。ひどく不気味にヒカルは思えた。

「何を?！」

「あなたがそれを理解しない限り、私にそんな事を言う資格なんて無いのよ……?！」

何を言っている。そうステイレットに問い詰めようとするヒカルだった。だが次の瞬間、ステイレットの表情がいきなりくしゃっと崩れた。妖艶な笑みから一気に泣きそうな顔になったのだ。

「ツツ!!!!きゃああああああああつっつ!!!!」

唐突に大絶叫をあげる。直後、テレビの電源を消したかのように、ヒカルの視界が一気にブツツと切れた。

「いいわね!全バーニア全開!一気に引きずりおろして!」

そしてこつちが現実である。ネギを構えたステイレットは、キマリスアーマーと自分のエンジンパーツを装着させたライに指示を出した。アーマーからはヒカルのズボンに紐がひっかけてあり、一気に引きずりおろそうという魂胆だ。

「いくよー!セーの!!」

逆らったら後が怖いとライは渋々従う。しかし内容は最大出力で引っ張ればいいだけだとバーニアを全部吹かした。

「もつと出力を上げてよ!」

「これが精いっぱいだよ!」

暫くしてヒカルのズボンと下着がずり落ちてくる。そして……勢いよくヒカルのズボンが下着ごと……脱げた。

「あ!脱げ……わあっ!!」

勢い余って部屋の隅まで飛んで行って壁に激突するライ。それよりもステイレットにとってはヒカルの事が優先だった。

「よし!脱げたわね!後はこれを……」

そう言って目の前のヒカルのそれを見るステイレット。何がステイレットの目に入ったのか、言うまでもない。そして、彼女がどういう反応をしたかは、……これもあまり説明する必要もないだろう。

「ツツ!!きやあああああああつっつ!!」

両手で目を覆いながらステイレットは大絶叫を上げた。そこでステイレット自身は初めて我に返った。

「うおっ!なんだあ!!」

直後ヒカルは上半身を起こしベッドから飛び起きた。まず最初に目に入ったのはステイレットの姿だった。

「あれ?ステイレット?.....小さい」

「な、何言ってるのよ」

目をしっかりと閉じ、なおかつ顔を真っ赤にしながらステイレットは答える。

「ネギ持ってたどうしたんだよ?」

「え?これ?!いやなんでもないわよなんでも!!」

目を閉じたまま、少女はネギを自分の背中に隠した。

「つて!なんだよこれ!なんで俺のズボンが!!」

かけ布団で慌てて脱げた下半身を隠すヒカル。同時にステイレットがなんで顔を赤くしていたのかおぼろげながら理解出来た。

「あ、あーなんででしょうねー。もうマスターったら寝相悪いんだからー」

「つて嘘つけよ。あそこで目を回してるライの奴はなんだよ」

ヒカルの指さした場所では、壁に激突して目を回しているライがいた。紐にズボンが繋がったままなので、関係ありと疑うのは当然だった。

「あー.....そ!それよりも!なんか熱が下がったっぽくてよかったじゃないマスター!さつきよりも随分と調子よさそう」

とつさにヒカルの反応の違いを思い出し、そっちにステイレットは話を振るった。確かにさつきより楽になっていた。寒気やダルさが小さくなっている。

「ん.....?あー確かに」

「風邪薬が効いてるって事なんでしよう?でも今日は休んでなさい」

安堵しながらステイレットは脱がしたズボンを手渡す。

「あ、待ってくれステイレット」

「何？」とライを回収し、部屋から出ていこうとしたステイレットを引き留めるヒカル。

「今日は、俺の傍で寝てくれないか？」

ついヒカルの口からそうこぼれた。

「っ……添い寝したいの？」

「……駄目か？」

「……しようがないわね」

恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに顔を赤らめながらステイレットは答えた。一瞬いつもの様にツンツンした反応で返そうかと思ったが、ヒカルがこの状態だ。いつもより素直な態度で接する事が出来る。

ヒカルは、そんなステイレットのその反応に安心が出来た……。やっぱりステイレットはこうでなくちゃ、と。

なお予断だが、下の居間では、黄一がステイレットの悲鳴を気にも留めずにお茶を飲んでいた。

「いいんですかレーフ。上の階でのステイレットの悲鳴」

「別にいいでしょう。大方脱がしたら見えたモノで悲鳴あげただけよ」

その日の夜、ベッドに運ばれた充電君から伸ばされたコードで繋がれて、ステイレットとヒカルは、お互いが向かい合う形で眠っていた。ヒカルはベッドを詰めてくれたが、15cmしかないステイレットには人間サイズのベッドは広すぎた。まだ鼻が詰まってるせいだろうか、若干辛そうに眠るヒカル。

——マスター……辛そう……私が人間だったら温めてあげるのに

……

映像媒体で見た事がある。凍えた男を裸の女が寄り添って温めるという表現だ。女性の方が体温が上だからとかいう理屈だ。……自分がそうだったらと妄想する。全裸になった自分がヒカルに抱きついて眠る姿を……。

「……………／／／／／／／／／／！！！！」



やたら恥ずかしくなる。顔面を両手で覆って、その場に高速でゴロゴロ寝返りをうつステイレットであった。

「なあステイレット……」

「あ、起きてたのマスター」

転がるのをやめるステイレット。若干不安そうにヒカルは聞く。

「……お前がネギ持ってた時、俺何か変な寝言言ってたか？」

「?別に、ウンウン唸ってただけよ」

「そうか。ならいいんだ」

「……どんな夢見てたのよ」

言えるわけがない。ヒカルは目をステイレットから逸らしながらごまかそうとする。

「あー……お前がチアガールで俺を応援してくれる夢……」

とつきの嘘だ。

「はあ?!それって私のチアガール姿が悪夢だって言うの?!」

「いやそうじゃねえよ!……眼福だったよ」

実際はマクロビキニを着たステイレットに言い寄られた。眼福だったのは事実だった。とはいえ真実を言うわけにはいかず嘘でごまかすしかない。

「眼福だったけど、お前が周りの男に言い寄られた夢見た」

「それって……私が他の人に取られたら悔しいって?へえ〜」

いたずらっぽく笑うステイレット。藪蛇だったなとヒカルは思う。

「く!悔しくねえよ!ただ見たら嬉しいなどは思ってたさ!」

「何よそれ位、……そんなの今度の試合でしてあげるわよ、確か来月、他校との親善試合があつたわね!」

そう聞くとステイレットはスクッと立ち上がってチアガールの動きの真似をする。

「特別サービスなんだから!感謝してよね!!」

三日後、ヒカルは全快するまで回復した。高校の廊下を足早に歩く。

「ようーおはよう皆!」

ブレザー姿のヒカルは、教室に入るとそう言った。そして席に着く。真つ先に来るのが親友の黄一だ。

「元気になったみたいだなヒカル」

「ああ、昨日は元気余っちゃって、動けないのが何より辛かったぜー」「ステイレットの奴が看病してくれたんだろう？感謝してやれよ」

「へへ、言われるまでもねえさ」

「それで、ステイレットの方は？」

「まだ気が抜けないってんで家にいるよ。いつでも俺が早退していいようにってさ。ちよつと過保護だな……」

それもある。が、ステイレットはノリノリでチアガール関係の動画をネットで見ているの練習をしていた。

「まあやりたいようにやらせてやれよ。しかしお前がエロ本騒動で体調崩すとはねえ」

黄一がそう言った瞬間。鞆を机の横にかけていたヒカルの手が止まる。

——エロ本騒動……そういや、あの時のステイレットのマイクロビキニ……——

没収されたエロ本の内容を思い出すヒカル……。一番好きだった本の内容は……青髪モデルがマイクロビキニを着て、卑猥な事をする内容だった。夢の中のステイレットは、その本の中の恰好をしていた。シチュエーションも一部なぞっていた。

——……なんで。ステイレットだったんだよ……——

そんな風にヒカルは思った。彼らしくない表情に、黄一は疑問を持つ。

「?どうしたヒカル？」

「ん?ああなんでもないよ黄一」

「まだ調子悪いか?」と聞く黄一にヒカルは「だったらステイレットが黙ってないさ」と軽く答える。……同時に「ただの偶然だよな」と心の中で片づけた。……そう。ただの偶然と、その時ヒカルは片づけたが、いずれ、この気持ちの正体を実感することになる。

ep9 『タケルと量産型フレズヴェルク』（前編）

「御見舞いですか」

真夏の空の下、街中のバス亭で轟雷が声を上げた。まだ午前中だが炎天下の中、屋根が備え付けられたバス停の日陰は心地よい。そこにいた人間とFAGはどちらもベンチに座ってバスを待っていた。

「そうよ。この間はお母様の出産でお世話になったもの。そのお礼とお見舞いの両方よ」

マスターと同行していないマテリアが答える。今いるのはステイレットとヒカル。轟雷と黄一。そしてマテリアのマリの合計五人である。マリはマスターの母親の出産の際に、フレズがタクシーを呼んでくれたという恩義があった。

「イノセンチア達も来ればよかったですけど」

あいにく今日はイノセンチアとレティシアは用事があって来れなかった。特にイノセンチアは、フレズヴェルクとマリと仲良くなったので今日の事は非常に残念がっていた。

「御見舞いって、そのフレズヴェルクのマスター、入院してるの？」

問いかけたのはステイレットだ。フレズとはこの間、病院で少し会った程度だが同行することに。

「この間会った時は元気に見えたんですけどね。ねえマスター」

轟雷がマスターの黄一に同意を仰いだ。「そうだな」と黄一も轟雷に同意。フレズのマスターは小学生の少年だった。

「まああなた達とは活動してるお店が違うから知らないでしょうね。あのフレズのマスター、華山タケル君は元々体が弱くてね。長期入院でいつもは山奥の診療所で暮らしてるらしいの」

マテリアはバス停のベンチの上に置かれた、フルーツの山盛りのバスケットに寄り添いながら言った。これを見舞いとして持つていくつもりらしく、丁寧にリボンをかけてある。

「しかし山奥だろ？こっからどんぐらい離れてんだ？」

「山奥と言ってもそんなに離れてはいないわ。フレズの話じゃせいぜい15kmらしいわよ」

ヒカル達の暮らすこの街からも山は見える。ここが街中でも山に入れば風景はガラツと変化を見せる。

「それ位の距離で療養にいい環境になるんかねー」

「まあここも特別都会ってわけじゃないからね」とヒカルに対してステイレットが付け加えた。と、そうこうしてる内にバスが来る。

「じゃ、俺がそのバスケット持つぜ」

「お願いします」と荷物持ちを請け負うヒカルに対して、マリが頭を下げる。本来なら自分のマスターの家族で行きたかったのだが、まだ家族間で都合が落ち着かなかった。FAG全員がマスターの肩に乗りかバンに入りながらバスへと乗り込んだ。

一時間近くかけて、目的の村のバス停についた。バス亭はトタン屋根の古びた物になり、道は舗装されてはいる物の、周りは森と青々とした田んぼだらけである。自分達の住む街の近くとは実感がわからない。

「んー。空気が美味しいですねー」

「轟雷、お前呼吸しないだろ……」

と、そうこうしてる内に診療所へと付いた。庭の備え付いた木造の二階建ての建物だ。古い建物ではあるが庭を含めて手入れが行き届いていた。

「有難うございました」

木造の引き戸を開けて、腰のまがったお年寄りが出てくるのが見えた。年齢80以上であろうお婆さんだ。ヒカル達にすれ違うなり挨拶をする。

「こんにちは」

『あ、こんにちは』

それぞれが挨拶を返す。そのお婆さんはFAGが気になったようだ。

「まあ可愛いお人形さん達。タケルちゃんのお友達かしら」

「タケル君はここで入院してるんですか？……あ、すいません。ここへ来るのは初めてで」とマリが聞く。

「そうよ。この集落だと子供がほとんどいなくてね、タケルちゃんもお人形とよく遊んでるわ。それにしても今時のお人形は凄いわねー。ほとんど人間と変わらないわ」

そう簡単な話をしながら別れる。そして病院内に皆入ると窓口で手続き、タケルの病室へと案内された。

「この辺だと室内でクーラーなしでも涼しいですね」

そんな他愛も無い事を話していると二階の一室へと通される。ノックをすると「どうぞ」という声が聞こえた。入ると少年とFAG、一人ずつがベッドの上にて、携帯ゲームで勝負してるのが見えた。タケルと、フレズヴェルクだ。

「あ、あなたは確か轟雷の……」

黄一達に気が付くと、パジャマ姿の少年、タケルが答えた。黄一以上に線が細く儂げな印象の少年だった。タケルが面識があるのは轟雷と黄一、マリだけだ。

「お礼も兼ねて、お見舞いに来ましたわ。といっても初対面の人もいるみたいだけど……」

「まあこっちは付き添いみたいなものだ。気にしないでくれ」と初対面のタケルに対してヒカルは笑って見せた。

「タケル君、これ」

そう言つてマリはヒカルに持たせたフルーツの盛り合わせをタケルに渡した。

「わー！いいんですか?!」

「いいのよ。本当は私達の家族でお礼に来るべきだったんでしょうけど……」

「いえいえ。有難うございます」

と、直後に二人の携帯ゲームから『YOU WIN!』『YOU LOSE』という音声が聞こえた。フレズはお構いなしに対戦を進めていたらしい。

「あーフレズ！お前僕が相手してるからって勝手に進めるなよー！」

「いーじゃん！普段ボクが相手しても勝てないんだからこれ位のハンデあつてもいいでしょー?」

客前だというのにマイペースさを崩さないフレズヴェルク。ストレッチをしながらマスターに対して声をあげた。

「セコいですね。フレズ」

呆れる様に言う轟雷。フレズに対して彼女はどうにも好きになれない。

「あ！轟雷！今度はバトルで負けないからな！マスター！セッションだよ！轟雷とバトルしようよ！」

リベンジだと血気はやるフレズに対してタケルは彼女を諫める。

「病院内だからよしなよ。それより丁度、日課の散歩の時間だから、皆で爺ちやんの家に行こうよ。折角のお土産も出来たしよ」

さつき貰ったフルーツを見ながらタケルは言う。自分一人では到底食べきれない量だ。

「散歩？外出許可があるのかい？」と黄一。

「まあね。人も少ない集落ですからね。先生に言えば割と自由ですよ」

で、どうします？と聞くタケル。別に断る理由も無い。と、全員は快く承諾する。

「本当に綺麗な空ね。こんな空を思いっきり飛んでみたいわ」

「この辺、鷹とかが普通に飛んでるからね。ボク達の大ききじや迂闊に飛んだら攫われちゃうよ」

「っ！怖い事言わないでよ！」

舗装された田舎道を歩きながら会話を続けた。FAGに詳しい人と会話するのはタケルにとっても新鮮だったのだろう。割とタケルの方から話しかけてくる。

「で、面白いカスタマイズですよ。黄一さんの轟雷の追加武装。ああいう追加武装が僕にもできたらなあ。フレズの場合元々派手な上にギミックも多いから、却って弄り辛くて」

「元々フレズ系列は燃費が悪いから、あえてもっと軽装にしてみるの

はどうだろう」

黄一としてもそういう後輩が出来たようでノリノリで会話に応じていた。

「アイツ重武装じゃないとヤダってごねるんですよ。性格上ゴリ押しになりがちだし」

「俺にはカスタマイズの事はイマイチ解んねーが、そういうペース配分はマスターの腕次第って所かい？」

カスタマイズに詳しくないヒカルも、彼らが言わんとしていた事は理解できた。

「そうですね。ヒカルさんのステイレットみたいに実弾で固めるのも良さそうだなあ」

「あれ？この間私とバトルした時にタケルさん、指示全然出してなかったじゃないですか」

その轟雷の質問にフレズは勝ち誇ったように答える。

「ふふん。その時はマスター、ボクの好きにやらせてくれるって約束だったからね。つまりあの時のバトルでは、ボクは完全じゃなかったって事さ」

「あなたのマスターの実力は凄いの？」とステイレット。

「そう！マスターの先読みは凄いよ！ゲーム対戦はボクなんか適わないんだから！マスターの力が備わればもうボク達はもう無敵なんだからね！」

装備を變形させたエアバイクに乗りながらフレズは答える。

「入院生活で長い事ゲームのオンライン対戦やってただけだよ。それに……お店でFAGの対戦できるのは調子いい時だけだからね」

「でもさつきも見て思ったけど、病院内でもゲームとかやって良かったの？そういうのって注意されるんじゃない……」

「子供が僕だけですからねあそこ。皆甘やかしてくれます」とステイレットに対してタケルは苦笑しながら言った。

そうこうしてる内に目的地の祖父の家が付いた。古い日本家屋の

家と言った場所だった。

「じいちゃん!!来たよー!!」

「おお!来たかー!!」

タケルが庭の入口で大声で叫ぶと、長身の老人が出てきた。口髭は蓄えているが背筋はピンとしており、頭髪はまだ豊かに残っている。それほど老いた印象はない。

「今日はお客さんもいるんだけど」

「ああウメさんから聞いてるわ。今日友達もつれてくるかもって待ってたよ」

ウメさん、というのとはさつき病院で会ったお婆さんの事だ。

「皆上がっていきなよ。この辺じや若い人が少なくていけねえ。しかもFAG仲間は唯一と言っていい。歓迎するよ」

「あ、すみません。お邪魔します」

無下に断るのも失礼と思い、ヒカル達は上がる事にした。

「ゆつくりしていつてくれ」

居間に通されるヒカル達、入るなり轟雷は部屋の内装に興味深々だ。中央にテーブルの備え付けられた畳張りのレトロな部屋。縁側のガラス戸は開いており、入る風は心地よい。

「なんだか、不思議な雰囲気ですな」

「フフン!ここでなら邪魔は入らない!さあ轟雷!ボクと改めて勝負だよ!」

入って早々に、フレズは轟雷にバトルをけしかけようとする。しかしタケルの身の上を知っているとあまり乗り気にはなれない。今の自分は客の身分なのだ。

「待って下さいフレズ、今はあなたのマスターは療養中なんですから、あまりマスターに負担をかけない方が」

「僕はいいけどね」

そうタケルは言ったが、タケルの身の上を一番知ってるのはフレズの方だ。

「うーん……」



少し悩んだ。タケルの負担は出来るだけ減らしたい。と、その時に外を飛ぶオオムラサキが見えた。

「そうだ轟雷！外の昆虫採集で勝負しようよ！これならマスターの負担にはならないでしょ?!」

「へ?!昆虫採集!?!」

「どっちが大きい昆虫を見つけてくるか勝負だよ！じゃあ行くよ！」

そう言っつてフル武装で縁側から飛び出していくフレズ、

「どうしましょう。マスター」と困惑する轟雷。

「まあ折角だから付き合っつてやれよ」

「別にいいですよ。アイツに無理に合わせなくても」とタケル。しかし轟雷的にはここで付き合わないと、後でフレズにグチグチ言われるかもしれないと判断。フレズ系とはソリが合わない。

「……仕方ありませんね。今回だけですよ」と轟雷は付き合う形で武装を展開、後を追う様に出ていった。

「すいません。アイツ人の話聞かなくて……」

そう言うタケルに気にしないでと返す黄一。

「はい皆。リング剥けたわよー」

と、程無くして、マリとステイレットが、一口サイズに切ったリングを皿に盛りつけて持ってきた。台所を借りていたのだ。

「お！来た来た！」とヒカルは飛びつく。

「ちよつとマスター！これタケル君に持ってきた奴なんだから少しは遠慮してよー！」

ステイレットの指摘に「しまった」といった顔になるヒカル。つい反射的にやってしまったらしい。

「ハハハ！気にすんな！タケルもあまり食わない方だな、君らみたいな元気な奴が来てくれると丁度いいさ」

「あ、じゃあそういう事なら」

再び手を出すヒカル。ステイレットはその様子に相変わらず不服そうだった。

「ヒカル……。そういう適応力はお前の三番目にいい所だよなあ」

皮肉と賞賛のどっちも込めて黄一は呟いた。と、ある問いが浮かぶ。というか聞きたかった事が黄一にはあつた。

「……あの、タケル君はいつからフレズと生活を？」

一番とっつきやすそうなフレズとの出会いだ。

「フレズとは……もう二年になりますよ。爺ちゃんが僕にプレゼントって事でくれたんです」

「タケルはな、ご覧の通り色々と不便でな。元気な時は街の自宅から学校に通ってはいいるが、そこに友達が出来ても、会いたい時に会えるつてもんでもなくてね。いつでも一緒にいてくれる友達がいて欲しいって思ってたんだよ」

「こんな病身だからね……臨海学校もいけそうだったけど、入院でいけなくなっちゃって……」

残念そうに言うタケル。楽しみにしていたであろう事は容易に想像できた。それに慣れてる様な諦めも、ヒカル達には感じられた。

「そう……だったんですか」

マリが共感の声を上げる。彼女の方も似たような経緯で買われたのだ。その考え方には大いに理解できる。

「でもフレズが来てからは楽しいよ。病院でもゲームで対戦相手が出来たし、僕と違ってグイグイ行くタイプだからさ」

「そっか……いいよな。F A Gって、心がある友達ってさ」

「うん」

タケルのそんなに深刻そうでない表情に、黄一はとりあえずの安心をする。と、そんな空気をぶち壊す様に轟雷が縁側から飛び込んできた。サブアームを精いっぱい掲げて八センチはあろうバツタを掲げていた。

「ふはは！見て下さいマスター！このビッグなショウリョウバツタを！これならフレズには負けるはずがありません!!」

バツタを追いかけたであろう轟雷の身体には土と草が所々こびり付いていた。

「うわあ！籠にも入れないで持ってくるな轟雷！」

と、黄一が注意すると同時にバツタは轟雷の頭を蹴って脱出。「む

ぎゅ!!」と奇声を上げて吹っ飛ぶ轟雷。そしてバツタはステイレットの方に飛んできた。

「へ?!何で私の方に来るのよお!!」

逃げようとするが転ぶステイレット。うつ伏せの彼女にバツタが覆いかぶさるような体勢でしがみついた。

「ひいっ!!取って!取ってよマスター!!」

悲鳴を上げるステイレット、「はいはい」とヒカルがバツタをつまみ上げようとする、轟雷同様に縁側からフレズヴェルクが入ってきた。直後、全員が凍り付いた。

「中々のサイズを見つけたね轟雷!でも負けないよ!見よ!この長さ!十センチオーバーのトビズムカデを!!」

両手でデカイムカデの頭附近を捕まえたフレズはドヤ顔だった。ちなみに脱出せんとムカデはウネウネと足の全てを動かす、ムカデの身体はフレズに巻き付いていた。当然祖父以外の全員がドン引きして部屋の隅に逃げた。当然である。中には奇声を上げる者も。

「あれ?どしたの皆?僕の勝ちだよ。マスターほめてー!」

『そんなもん採ってくるなああつ!!!』

——益虫で、縁起良いんだけどなあ——とただ一人祖父は冷静だった。

ep10 『タケルと量産型フレズヴェルク』（中編）

タケルへのお見舞いから一週間がたった。学校で黄一がある提案を立てる。

「もう一回お見舞いに行くのか？」

昼休みの時間。席に座ってるヒカルに対し、机の向かい側に座る黄一が会話する。

「ああ、この間タケル君、臨海学校へ行けなかったって言ってたろ？でさ、これ貸してあげようと思ってるさ」

そう言って黄一が取り出したのはVRだ。言わずと知れたヘッドセット型のゲーム機である。

「VRか？」

「そ、FAGと一緒に仮想空間で遊べるソフトだよ。最近出た奴さ」

いわゆるFAGが仮想空間でオンライン対戦を行うゲームだ。これにはFAGが人間サイズになってマスターとのコミュニケーションを行う事も出来る。

「海のステージでフレズと遊べたらなってさ」

「へえー新製品じゃねえかよこれ。後輩想いって感じだな黄一」

この世界の最近のモデルは意識をダイブさせて仮想空間を体験できる。これならFAGと同じ対比で会話も可能だ。ヒカルの発言に照れを見せる黄一。

「ほっとけよ。お爺さんの気持ち、お前も解るだろ？」

「そりやな。俺も何か貸したりあげたりできるなら、何か持っていこうかなあ」

そして土曜日、黄一と部活が休みだったヒカルは二人だけで、同じ診療所へお見舞いにいった。

「ようタケル！元気か?!」

「あれ、黄一さんとヒカルさん」

意外そうに叫ぶタケル。来てくれて嬉しいと言った反応だ。ベッドから半身を起して何かを書いていた様だ。ベッドサイドテーブル

に作文の原稿用紙が見える。

「それ作文？学校の宿題かい？」

「ええ、『将来の夢』っていうタイトルでして……」

何も思いつかないと言った表情のタケル。なんでそんなもんこの子に出すんだよ……と黄一は思う。

「そっか……フレズの奴は？」

「さっきまで遊んでいたんで今充電中ですよ」

タケルが向かいの机を指さすと、病室の隅にあるテレビ、その隣の棚の上で、フレズが充電君に繋がれているのが見えた。眠っている。

「お二人はどうして？」

「実はさ、これ貸そうと思ってさ」

そう言つて黄一はVRを取り出す。タケルは嬉しそうに反応する。

「わ！VRだ！これを僕に?!」

「うん。お医者さんからは使ってもいいって許可は貰ったからさ。仮想空間でフレズと遊んでほしいって思つて」

「本当ですか?!有難うございます！」

「俺からは……これだ」

続けてヒカルが取り出したのは……エロ本である。しかも巨乳スク水特集の……。

「……ヒカル」

何やってんだという黄一の痛い視線。外したと思いつつも、これしか思いつかなかったヒカルである。

「な！何だよ！いいじゃねえかよ！フレズの身体毎日見て、健全な男が冷静でいられるか?!俺はそう思ったからこれをチョイスしてだな！」

「お前そんな目でFAGを見てたのか……」

「お！お前はどうかなんだよ」

「……わぁ」

狼狽するヒカルだが、それを見るタケルは満更でもなさそうだと、その時だった。

「ようタケル！調子はどうか?!今日はお前に新しいプレゼントを！」

タケルの祖父がプレゼントを持ってタケルの病室にお見舞いに来た。黄一とヒカルは「あ」と予想してない来客に声を上げた。

「……って、二人とも来てたのか」

予想してなかったのは祖父の方も同様だった。

「まさかお爺さんの方もタケル君と同じプレゼントを用意していたとは……」

下の診療所の居間で、黄一達はお茶を出されていた。診療所の先生とタケルの祖父は友人関係だった為だ。テーブルの上には黄一が持ってきたVRが置かれていた。祖父が新品を上げた為に、黄一の物は不要になったわけだ。長方形のテーブルで祖父と向かい合う形で黄一とヒカルは椅子に座ってる。

「でも二つ揃ったからタケルとFAGで対戦できるな」

「よりによってエロ本持ってきたお前の方が正解だったとはなー」

「拗ねるなよ」

「別にそういうんじゃない」

「ありがたいな二人とも」

隣りに座った黄一とヒカルのどつき合う中、精いっぱい感謝の気持ちを含めて、反対側に座る祖父が頭を下げた。

「いやそんな。俺なんてエロ本持ってきた程度ですし」

「いやいや、あいつも思春期だからな。あいつもそういうのに興味持ってもらいたいからありがたいよ……」

その反応にどういふ事だと黄一は疑問に思う。が、

「そういうのに？……もしかして、その為にフレズヴェルクを？」

「んなわけないだろヒカル。真面目に考えろよ」

「真面目にやってるよ」

また碌でもない事言いやがって……という黄一の反応、ヒカルの方は精いっぱいやったという風に返した。

「ん。はっはっは!!その通りだー」

『……え』

豪快に笑いながら答える祖父に、二人は面食らう。

……一方こちらはタケルの病室。

「うーん。マスター、おはよう……」

フレズが充電から目覚めたようだ。タケルに目をやるが、彼は寝ていた。

「寝てる……。？なんだろう。この本」

そう言ってフレズはヒカルの持ってきたエロ本を手を取った。

下の階では祖父がフレズを与えた理由を話し始める。それはタケルの身の上を話す事も同じであった。

「アイツはな……知つての通り、体が弱くて激しい運動が出来ない。

……短命とも言われている」

短命という言葉に、黄一達は顔をしかめる。体が弱いとはいえ、そこまでとは思わなかったからだ。

「もしかしたら二十歳まで生きられないかもしれない……。学校へも碌に行けず、ほぼ病院で寝起きするだけ、刺激の無い毎日だ」

「それは……前にも言った事ですよ。それで友達としてフレズをあげたって」

「ああ……半分はその理由だ。もう半分は……ヒカル君が言った通りだ」

再びタケルの病室、フレズはヒカルの持ってきたエロ本を読んでいくが、内容はさっぱり理解できなかった。

「？変なの。ボクみたいなボディスーツ着てるのに裸になって抱き合っちゃって。誰が持ってきたんだろう」

彼女にとつて、新しい物はお見舞いの品が多い。フレズとしてはこのままマスターが起きるのを待っていても暇だ。テレビでも見ようかと思つたが、マスターは寝ているのでここでテレビを見るのは不味いと判断。

診療所内で暇つぶしにでも行こうとフレズはアーマーを装着、廊下に出ていった。

「下の階のテレビで何かいい番組やってないかなー」

「FAGを通じて、アイツには異性への興味を、いや生きる意志を持つて欲しいんだ。アイツが中学や高校へ行くような年齢になったら、異性にも興味がでるだろう。……でもアイツの病弱さではもしかしたら行けないかもしれない」

冷静に話す祖父の声、だがその中には様々な感情を内包していることだろう。ただ黙って黄一達は聞くことしかできなかった。

「友達としての意味合いでFAGを持たせたというのもある。しかし何より異性への興味で、いやハッキリ言おう。性欲やスケベ根性でも何でもいい。孫にとって『生きたい』っていう意思になって欲しいんだ。その意思があるだけで、きつと寿命を延ばす事に繋がる。そう思ったから、だから俺はプレゼントとしてFAGをあげたんだ」

悪あがきかもしれない。でも医学に詳しくない祖父に思いついた方法はこれ位だった。下品な理由でも孫には生きて欲しかった。だから異性をチラつかせるFAGを、フレズを与えた。

「……VRもそう言った目的で？」

「そう。レーティングは全年齢対応だから、過激な事は出来ないだろうがね」

「なんで会って間もない俺達にそんな重大な事を？」

「君の持ってきたエロ本から察するに、君達も似た様な事考えていたと思うからだよ」

「いや、それこいつだけです」と黄一はヒカルに指を示した。動作は一瞬でも、一緒にしないぞという黄一の意志は十分に祖父に伝わった。「お前こういう時位そういうのやめろよ」

「まあそれはともかくとして、君たちが来てくれたのは俺にとっても嬉しい。どうかこれからタケルと仲良くしてやってほしい」

そう言って再び祖父は頭を下げた。黄一達はそれにもちろんと言った言葉、そして言葉通りの気持ちで同意した。

「……フーン。よく解んないけど、ボクとマスターがあの本みたいな事すればいいの？」



「いやそうじゃねえだろ。別に普通に生活してるだけでも……ん？」  
突然会話に乱入した女声に、ヒカルは気付けなかった。その声の主は……。

「フレズ？お前なんでこんな所いるんだよ！」

フレズその人だった。装備で飛びながらテーブルの中心部に降り立つ。

「それはこっちの台詞だよ。上ではマスターが寝てるんだもん。邪魔にならない様にこっちでテレビでも見ようかなって」

テレビを見て暇をつぶそうとしたが祖父とヒカル達がいた。という経緯である。

「でさ、マスターが元気でいられるのってどうやるの？ボクってそれする為に買われたんでしょ？」

「！いや、別にそう言う事しなくていいよ！」

「そうだ！小学生にはまだ早い！」

慌てる三人にフレズは納得がいかなかった。

「なんだよ。マスターを元気にするなら早い方がいいじゃないか」

「あーいや、今は良いんだフレズ、お前は今のままでもアイツの元気に繋がってる。どうかこれからも普段通りで接してやってくれ」

「んー？……ま、いいや、それより何かテレビ見ようよ。暇でしようがないや」

マイペースに自分の暇つぶしに入るフレズに三人ホツと胸をなでおろした。小学生のマスター相手にはいささか早い話題である。

その夜……。

「あれ？フレズー？」

入浴から戻ってきたタケルは病室に戻るとフレズがいない事に気が付いた。いつもならすぐに「マスター！」と元気な声で出迎えてくれるのに。

「ねえマスター、やっぱりこの本つままないよー」

と、掛け布団の中からフレズが出てくる。その手に持ってる物を見てタケルは仰天した。

「わー！お前その本！」

ヒカルが持ってきたスク水のエロ本である。ベッドの布団の下に隠していたのだが、フレズが自力で見つけ出したようだ。

「写真ばかりで何がいいのかわかんないよー。どうしてこんな物を大事に持つてるの？マスター」

そうやってフレズはエロ本を両手で大開きにしてマスターに見せた。砂浜でスクール水着を着た女性モデル二人が、お互い向かい合う形で胸を揉んでいるシーンだった。

「み！見せなくていいから！！そんなの女の子が人に見せるものじゃない！」

「？じゃあ尚更皆で遊べる物で遊ぼうよー。そうだ！今日は貰ったVRで遊ぼうよ」

先述の貰い物のVRだ。

「マスター。臨海学校に行きたかったけど自分だけ行けなかったんでしょ？ボクと一緒に海のステージで遊ぼう？」

「……まあ、そうだね。折角の貰い物だ。一緒に遊ぼうか」

そしてタケルはVRを頭にマウント、起動させる。目の前に浮かぶスクリーンを操作し、ソフトを起動。タケルの意識は仮想空間にダイブ。あらかじめ登録してあったフレズも、同様にダイブした。

画面が切り替わると夜の屋外の風景が、満天の星空が見えた。『ザザ……ザザ……』と聞き慣れない音も聞こえる。

「う……ん……。波の音？」

「あー入ってきたー。凄いや！ボクとマスターが同じ大きさだ！」

「フレズ？大きい……」

辺りを見回すと、目の前には素体状態のフレズがいた。病院内の風景から一転、景色は夜間の海辺、空には満月が浮かぶ。海の反対側には森と山が見える。南海の孤島のステージだった。主の様子を伺うフレズは、主のサイズに合わせてか、約十倍になっていた。

「感激だよー！マスターとボクが同じ大きさなんてー！」

嬉しさのあまりフレズはタケルに抱き付いた。フレズの方が身長

が高い所為か、豊かな胸がタケルの顔面に押し当てられる。

「っ！んー！んー！」

「あはは！一度こうやってマスターと抱き合ってみたかったんだー！ボクの方が身長が大きいから、お姉さんみたいだね！」

いきなりのフレズの行為にタケルは面食らった。擬似的な空間。擬似的な物体の筈なのに、柔らかい。温もりがある。フレズの方は自分の方がタケルより年上の様に見える。という事で大興奮だった。大きさの比率が同じになる事で、お互いが主と従者であるという事実は忘れてしまいそうだった。

「プハッ！やめてよフレズ！いきなり抱き付いてくるなんて！」

必死になってタケルは柔肉から顔を出す。

「えー？ボクは嬉しいよ？マスターと同じ目線に立てるなんてー！」

フレズは一度タケルから離れると砂浜を走りながらタケルから離れ、クルツとターンをかけタケルに向き直った。全身でこの空間を満喫するといった意志表示だろうか。

「でも……今は夜だからか夜の海だね。昼間の海の方が良かったなあ」

再びタケルの方に戻ってきながら言うフレズ。

「今の時間と連動してるのかな」

ここまでリアルだと、夜に昼間のステージをやっても体内時計に狂いが生じるからこの方がいいかな。とタケルは考えた。

「そうだ。この大きさならさ、さっきの本みたいな事が出来るんだよね。マスター！ボクの胸揉んでみてよ！」

「っ！！！！」

タケルは耳を疑った。だがフレズの方は自分で言ってる事の意味を理解してない。

「マスターが隠してたって事はあの本好きなんですよ？ボクと同じボディースーツ着たモデルがいたって事は、ボクもそれを再現出来るって事じゃない」

フレズヴェルクのシリーズはASも基本的に、バトルの方へ興味を示す様に調整されている。しかしそれ以外への無知さ、それをタケルはお互い同じ大きさになって改めて痛感した。

「フーフレズー！そういうのは好きな人と！」  
もつとそういうのは好きな人と！」

「？だったら何の問題もないじゃない？だってボク、マスターの事大好きだもん」

さも当然という風に言い切るフレズ、タケルの方も閉口せざるを得なかった。……正直、同じ大きさになってフレズの身体に興味はある。ヒカルの持ってきた本の内容も、……それを自分で実行出来るというのは、思春期の入り口に立つ少年にとってはチャンスでもあった。目の前でボディスーツに包まれた豊かな乳房が広がる。それだけで少年にとっては誘惑だ。

「……少しだけなら」

顔を赤らめ、心臓をバクバクと高鳴らせながらタケルは了承。今の時間設定が昼間だったら、彼の顔は解りやすく真っ赤だっただろう。震える両手で、フレズの胸を……下からすくいあげる様に優しく掴んだ。『ふにゅ』という感触がタケルの掌に伝わる。それぞれの指がフレズの胸に食い込み、うっすらと月明かりの影を作った。

「柔らかい……」

思わず感想を口に出してしまったタケル。

「んっ……、もつと揉みしだいていいよ。マスター嬉しそうだから」

この時のフレズは特に変わった反応は示さない。マスターが喜んでくれるなら、その事位しか考えてなかった。……恐る恐る、タケルは指に力を込めていく。むにゅ、むにゅ、と押された胸は形を変えていく。

「凄……僕の手に収まりきらない……」

「あはは、マスターってば夢中になっちゃって変なの、こんなのただ重いだけなのに」

自分の胸に関してはコンプレックスとかとは関係なしに、フレズはそう思っていた。邪魔だったこれがマスターの為に役に立っている。

これなら自分の胸も満更捨てた物じゃないかもな、そうこの時フレズは思った。……この時は。

「……あれ?……マスター……なんだから、ボク……」

次第に変化が訪れる。

「……」

タケルは無言で、だんだん一心不乱に胸を揉む様になってくる。フレズのASに……得体のしれない何か湧き上がってくる。

——……怖い……——

最初はただ揉んでいた手も、タケルは段々と変化をつけてきた。それを受けてかフレズの方も……息が上がっていく、身体も震わせ、表情も徐々に恥辱へと変わっていく。同時にフレズの中で恐怖心が沸いてくる。未知の恐怖。

「ね、ねえ、マスター……やめようよ……ボク、怖いよ……」

「……ハア……ハア……」

「やめて……マスター……」

懇願するフレズだが、タケルはやめない。フレズの言葉が耳に届いてない。少年の表情はフレズの胸に完全に集中しきっていた。マスターの豹変、自分の原因不明の恐怖と恥ずかしさ、フレズは耐えられなくなってくる。

「やめてよ……やめてっ!!」

恥ずかしさと恐怖に耐えられなくなったフレズは両目をギュツと閉じながら、思わずタケルを突き飛ばしてしまった。タケルはそのまま砂浜に倒れこみ「わっ!」という声を上げた。その声でフレズは我に返る。

「っ!!、マスター!!ゴメン!!」

自分が何をしたか理解できたフレズは手で胸を押さえながら「大丈夫?」と駆け寄った。我に返ったのはタケルも同様だった。

「あ……フレズ。……僕何を……」

と、タケルの方も自分が何をしていたのか冷静になれた。と、少年の心も恥ずかしさで一杯になってくる。……お互いの空気が一気に気まづくなつた。

「ゴメンねマスター、ボク、変になっていて……」

「いや、僕の方も何だかおかしくなっていたみたいだよ……」

これはもう今日は遊ぶ気分になれないかと判断する。

「もう、今日はやめよう……。また改めて遊ぼうよ」

「うん……」

そう言っつて、お互いは仮想空間から出る。お互いが悶々としたものを抱えながらその日は終わった……。

e p i l 『タケルと量産型フレズヴェルク』（後編）

翌日の日曜日、お互いの間にはずっと微妙な空気が流れていた。V  
Rで遊ぶ事は当然ない。

「ねえ……マスター？」

「ふああ……何？」

欠伸をしながらタケルは返す。彼の方は昨日悶々としっぱなしで  
寝不足になっていた。

「あ……なんでもない……」

フレズもこんな感じだ。二人はずっと病室でテレビをボーッと見  
ていた。と、タケルは昨日の事以外に気になる事があった。

「……あのさ、フレズ」

テーブルの上でうわのそらのフレズにタケルは聞く。

「何？」

「お前今日の恰好……」

気になった事はフレズの恰好である。今の彼女は全身タオルでく  
るまっていた。

「！そういう気分なんだよ！いいでしょ！昨日のVR以来！……あ  
……」

顔を真っ赤にしながらフレズは答えた。といつてもタオルで隠れ  
た表情はタケルには解らないだろう。フレズは反論する際に昨日の  
事を思い出し、また恥ずかしくなる。それはタケルも同様だった。

——解んないよ！急にマスターに肌見られるの、胸がザワザワする  
んだもん！——

昨日の一件から恥ずかしさを感じるフレズ、マスターとの会話、今  
まで平気だった事が、まるで素体のまま空中から落ちた様な感覚だっ  
た。「これからどうしよう……」それが今のフレズの心境だ。マス  
ターと正面から向き合えなくなってしまった。フレズは恥ずかしさに  
慣れていない。

——マスターのお爺さんに聞くべきかな。……でもボクが買われ  
た理由って、ボクを通じて女の子に興味を持ってもらう事も含まれて

るんだよね……—

自分がこうなった経緯を祖父に話したら、自分が不要になってしま  
うのではないか、そうフレズは不安になる。恥ずかしさはある物の、  
マスターの事は変わらず好きだった。

——誰かいい人いないかな。相談できる人……—

人じゃなくてもいい。とフレズは思い浮かべる。……ふと、ある少  
女が浮かんだ。

「あ、そっこだ！」

「どうした？フレズ？」

「マスター！今日ボク達出かけようよ！」

「……え！」

「っ！ぶははははは！！胸揉ませて恥ずかしくなっただって！！しかもあなた  
が買われた理由がそれですか！！」

「わ！笑わないでよ！ボクがどんな想いで相談したと思ってるの轟雷  
！！」

場所は轟雷達の出入りする模型店、そのいつものドールハウスの様  
なFAG用のコミュニケーション用スペース。この時フレズにとつ  
て頼れるのは轟雷位だった。轟雷にフレズは相談するが、轟雷はタオ  
ルでくるまったフレズに対して馬鹿笑いで返した。

外出許可を取ったタケルと祖父とで一緒にバスで降りていた。さ  
すがにフレズ一人だけでここまで来るわけには行かなかったからだ。  
ちなみにタケルは工作室で黄一やヒカルと新しいパーツを作ってい  
る。

今のフレズにとってこの相談は勇気を振り絞った物だった。笑わ  
れるのは心外もいいところだ。

「ていうか自分で揉ませて恥ずかしくなるなんて馬鹿ですか！」

「こうなるなんて自分でも思わなかったよ！」

「ちよつと轟雷！そんな風に笑うなんて失礼でしょうが！」

笑う轟雷に対して、ステイレットの方は真剣に話を聞いてくれた。

「異性への興味とか、性欲とか言われたけど解んないよ……。こんな



気持ちになるなんて……」

胸を揉ませたのはマスターの為だった。

「今までこの姿を見られるの、何とも思わなかったのに、いきなり視線が刺さる様になっちゃったんだよ……。これが恥ずかしいって奴なの?。」

くるまつているタオルを握った手に力を込めながらフレズは言う。

「まああなたは全裸でも平気でいそうな気がしますが」

「轟雷、馬鹿にしたいだけなら口開かないで」

「マスターもその時、なんだか必死になっちゃって、怖かった……」

フレズにとつてその時のタケルは豹変と喋っていい物だった。自分の知らないタケル。

「フレズ……」

「ボク、自信なくしちゃった……自分の役割を果たせるのになつて」

いつも自信に満ちた少女の落ち込んだ姿だ。初めて故にどう対応していいか解らず、頼れるのは私達だけなのだろう。とステイレットは思った。

「まあいきなり胸を揉ませてあげるのは不味いでしょう? F A Gでも女の身体はおいそれと触っていい物ではないわ」

「そうかな? 考えた事もないよ」

「手を握るとか、キスするとかでもいいんじゃない?。」

「キス? キスって何さ」

きよとんとする。フレズにステイレットは言葉に詰まる。

「え? えーと……あれよ、男と女が唇を合わせるあれよ。試作型のF A Gの間ではシヨック療法とか言われているわよね」

「あー映画とかドラマの再放送でよく見るよね。そういうシーンの時にボクが『あれ何ー』って聞くとマスター恥ずかしながら答えないんだもん」

「それは……あれよ、大切な人同士がやる行為だからよ」

「大切な人? ステイレットはマスターとした事あるの?。」

「え……?。」

その答えに詰まるステイレット。ぶつちやけ答えは『ある』だ。ヒ

カルが寝ている時にした。しかしステイレットにとつても話すのは正直恥ずかしい。

「……」

「ねえ、何赤くなってるのさ」

「ステイレット……あるんですか」

付き合いの長い轟雷はステイレットの反応から答えは簡単に予測できた。

「仕方ありませんね……。あなたをタケル君に与えた理由は、友達としてっていう理由もあるじゃないですか。その点はよく役目を果たしていると思いますよ」

ステイレットが答えられないので轟雷が答える。轟雷としては不本意ではあるが、

「そうかなあ」

気を落ち着かせたステイレットが今度は答える。

「そうよ。きつとあなたと出会えてタケル君は嬉しいはずよ。タケル君言つてたわよ。あなたが来て楽しいって」

最初にお見舞いに行つてタケルが言つた事だ。

「マスターが？本当？」

「この時点で既にあなたがいる意味はありますよ。彼の『生きたい』という感情へ繋がってるなら何も問題はありません」

「うん……ありがとう二人とも、ボク、もう一度マスターと向き合ってみる」

「その意気よ」とステイレット。

「じゃあそのタオル脱いでマスターの所へ行きましょう！確か工作室にいますよね」

装備を付けるにはフレズのタオルはどうしても邪魔だ。（ここへ来るのは素体状態で乗れるエアバイク形態である）脱がそうとするが……

「う……それはやっぱり恥ずかしいよ……。マスターの前でタオルが脱げない……」

ギョツとタオルの巻き付きを強くするフレズ、タケルの前で脱ぐ事

への抵抗は解決してない。

「さっきのとは別問題ねそれは」

「トラウマって奴ですね。……そうだ！案外マスターとキスしたら元に戻るかもしれないよ」と轟雷が冗談半分が続く。しかしフレズはそれを聞き逃さない。

「え？そうなの?!」

「確か私達FAGの間ではキスってショック療法って言われているじゃないですか。なんでも試作型轟雷が昔それで数々のFAGの問題を解決したとか」

「そんなキス魔だっけ私達の基礎のFAGって……」

「タケル君は男の子ですからね。VRでしたら異性への興味ももっと強くなるはずです！」

「そっかー。キスカあ、そんないい方法があるんだ」

フレズにとっては救いの手の様な案だった。輝かせる表情に、轟雷は真に受けてると不安になった。

「って冗談ですからね。本気にしちゃ駄目「ねえあなた！」」

と、轟雷が言い終わらない内に、フレズに対して話しかけてくるFAGがいた。レーフとライの姉妹二人だ。フレズはこの二人に馴染みはない。

「何？確か前に会った様な……」

トモコの母親の出産辺りで会ったな。とフレズは思い出す。

「あなた別のお店では名を馳せたFAGらしいわね。どうかしら、今日私達とバトルしてくれないかしら」

「えー今？」

いつもだったら喜んで飛びつくだろう。しかし今日はバトルに没頭できる気分ではない。

「お姉ちゃん。この人轟雷お姉ちゃんと渡り合ったFAGでしょ？私達で勝てると思えないよ」

「盛り下がる事言わないでよライ」とレーフはいつもの様に妹に突っ込みを入れる。それを見ていた轟雷達はある事を思いついた。

「そうだ！バトルですよフレズ!!あなたとマスターの連携でバトルを

すればいいんです！」

いきなりの轟雷の発言にフレズは首をかしげる。それにフォローするかの様に轟雷にステイレットが続く。

「そうね。私達の作られた理由の一つはバトルだもの。フレズ、あなたマスターとの連携が自慢と言ってたわね。案外バトルすればそう言ったギクシャクした関係も簡単に直るんじゃないの？」

確かに変に考えるよりその方が解りやすい。今マスターに肌を見られるのはちよつと恥ずかしいが、バトルに集中すれば問題はないだろうとフレズは考える。

「いいよやろう。ちよつと待ってて、マスターを呼んでk「あらあら。誰かと思えば病弱マスターのフレズじゃありませんの！」

マスターを呼ぼうとしたら別のFAGに呼び止められた。誰だと振り返ると、そこにいたのはフレズヴェルクの色違いのFAGがいた。

「その金髪白スク水、アーテル……」

フレズヴェルク・アーテル、従来のフレズより接近戦に強く調整された機体。アックス、グレイブ、サイズと3変形可能な長柄状の大型武器、ベリルスマツシヤーをランチャーの代わりに持つ。

「誰ですか？あの楽園追○に出てきそうなのは」と轟雷。

「元々ボクが活動していた店でボクと張り合っていた奴、ボクとマスターのコンビに勝った事は一度もないけどね」

マスターの下りは自慢げに言うフレズ。

「ふん！所詮マスターありきの勝利ですよ！」

「何！またボクとやろうっていうの？ボクとマスターの絆はお前には壊せないんだから！」

「ふーん。マスターと、ね。ふふっ」

余裕のアーテルの含み笑いが、フレズは挑発の様に見えた。

「何がおかしい！」

「そのマスターに頼りっぱなしで、あなたは一人じゃ何もできない出来損ないと言うわけですね」

「っ!!」

プライドを傷つける発言だ。確かに自分の実力と勝利はマスターの指示あつての物だが、

「あなたはマスターがいなければただのFAG。私にも勝つ事は出来ない」と

「なっ！お前っ！」

その挑発にフレズはアーテルに掴みかかろうとする。が、アーテルは余裕の態度を崩さない。

「あら悔しい？でしたらあなた一人で私と戦いませんか？私に勝てるのならさっきの事は撤回しますわ」

「いいよ！だったらお前にバトルを申し込む！やるのはボク一人！それで十分だ！」

纏ったタオルを投げながらフレズは雄々しく応じた。見てる轟雷達は「それじゃ意味がない！」と止めようとするがフレズは耳に入らない。

「そうこなくては！よろしくお願いしますわ！」

してやったりと笑みを浮かべながら、アーテルは応じた。これで勝てる。という意味にも笑みは受けて取れた。

「フレズヴェルク型はこれだから……」

轟雷はフレズの様子を見ながらそう呟いた。

『フレイムアームズ・ガール！セッション!!』

模型店の一室にてバトルステージを起動。お互いのセッションベースを通して二人は戦場へと降り立つ。

「っ！このステージ!!」

バトルが始まってフレズは驚愕した。昨日の夜の海岸ステージだったからだ。決闘のごとく砂浜で相對する二人。フレズは連続的に昨日の事を思い出すと、またタオルにくるまりたい気分だった。

「そう！あなたが恥ずかしい思いをしたというステージですよ！」

「お前！聞いてたな！」

ベリルショット・ランチャーを撃ちながら叫ぶフレズ、さっきの夕イミングの時点で気づくべきだったとフレズは後悔。

「聞いてませんの。胸を揉ませていたら恥ずかしくてマスターと一緒に居づらいなんて〜」

とぼけつつ挑発で返すアーテル。しっかりと聞いていた様だ。満面の笑みである。

「くーううう!!!」

恥ずかしさで一杯になるフレズ、それをアーテルは見逃さない。アックス状の武器、ベリルスマツシヤーを頭上でブンブンと回転させながら、アーテルは飛び上がる。

「ふふっ！バトル中に考え事とは愚かですわ!!」

落ちながら切りかかる。後退してかわすフレズだが、アーテルはスマツシヤーをグレイブに変形、フレズの胸に突きを見舞う。

「っ！」

クロスさせたランチャーの銃身でグレイブを受けるフレズ、なおも歩を進みながら連続的に突きを仕掛けてくるアーテル。かわしつつ反撃に出たいが、アーテルは近距離を保ったままだ。

「あらあら！ベリルショットランチャーではグレイブの速さに対応できませんの?!」

「黙れ!」

銃身にエネルギーを纏わせて薙ぎ払おうと振るうフレズ、しかしアーテルは軽やかにバク宙で回避、空中でアーマーをサイドワインダーに変形させると再びフレズに突っ込んでいく。フレズヴェルク型の高速飛行形態だ。

「サイドワインダーならこっちだつて!!」

フレズも装備をサイドワインダーへ変形させ、対応しようとする。エアバイクとの違いは装備を装着したまま出来る形態だ。突っ込んできたアーテルをかわし、追いかけるフレズ。二人は海上スレスレを高速で追いかけるながらのドッグファイトともつれ込んだ。

暫くの間、満月をバックに空中戦が続く。お互いが後ろを取ろうと躍起になった。……そしてひねりこんだフレズがアーテルの後ろを取る。

「やった！アーテルは接近戦使用！ボクみたいなランチャーは持つて

いない！ボクの勝ちだね！」

アーテルを追いかけながらランチャーを撃ちつづけるフレズ、しかし……トリガーを引くもランチャーが反応しなくなる。

「あー」

武器エネルギーが残ってない。それに気づくのももう遅い。

「形勢逆転つですの!!」

アーテルは見計らってか、跨っていたバズーカを一発撃った。フレズ型のサイドワインダーやエアバイク形態は、バズーカを後ろに向けてサドル部にする。故に後ろに撃てた。

「っ?!うわあ!!」

その一撃はフレズの跨っていた槍上の機種ど真ん中を撃ち抜いた。そのまま飛行手段を失ったフレズは落ちそうになるも、その場で全スラスターを噴射。空中で踏んばる。

「まーまだ落ちるな!!」

「あらしぶといですのーねっ!!」

人型へ変形したアーテルがモードグレイブで高速で突きを見舞う。必死に身をひるがえし突きをかかわすフレズ、しかしアーテルはベリルスマツシヤールのモードを槍状のグレイブから鎌状のモードサイズへ変形、引く動作で、フレズを背中から引き裂いた。

「がつーわあぁっ!!!」

それが致命傷になる。悲鳴を上げながら海に落ちていくフレズ。

「マスターがいなければこんなものですね。フレズ……ふふっ」

満面の笑みを浮かべるアーテル。彼女はもう勝ち確信していた。

「これで私の実力も拍がつくものですわ！あーっはっはっは!!!」

—— 適わなかった……やっぱりマスターがいてくれなかったから

……  
海中に沈みながらフレズは自身の行動に後悔する。こうする間にもどんどん沈んでいく。

—— マスター、怒るかな……、いや、「何やってるんだよフレズ」って笑いながら慰めてくれるよね……何はともあれ、これでマスターと

話す機会は作れたかな……」

『何やってるんだよフレズ……』

——あー本当に聞こえてきた。たかが仮想空間のバトルなのに、なんか幻聴みたいでもう駄目な気分になってくるよー。そういえば昨日もこのステージで恥ずかしい思いしたし、なんか好きになれないなこのステージ……。呪われてるのかなー——

『聞いてよフレズ!!だから何やってんだってさあ!!』

「わあ!!あれマスターの声!？」

突如フレズの耳にタケルの大声が響く。幻聴ではなく本当にタケルが言っていた。

『何沈みながら物思いにふけてんの!!』

「マスターこそ、どうして?黄一やヒカルと一緒にだったんじや……」

『轟雷達に呼ばれてきたんだよ。全く、自分で勝手に行動して』

フレズの行動に呆れるタケル。彼はステージ機材のすぐ傍にいた。

「悪かったよー。ってボクやられちゃったんだから、もうちょっと優しい言葉かけてよー」

悔しさはある物の、マスターとまた気兼ねない会話が出来たというのがちよつと嬉しかったフレズ、しかしタケルの方はそんな事はお構いなしだった。今優先すべきはバトルである。

『何言ってるのさ。これ位で諦めていたら勝てる物も勝てないだろ?』

……損傷度と残りHPは……』

素早くコンソールを動かして、データ画面のフレズのコンディションをチェックするタケル。エアバイクの機首部分は損失、ベリルシヨットランチャーは弾切れ、残りHPは残りわずか、薄皮一枚で生きてる様な物だ。だがタケルにとっては勝算は充分だ。

『アーテルが相手なら……この手だ。フレズ、ランチャーとホルダーを捨てて。ダガーも邪魔だ』

「え?それじゃ武器がなくなっちゃうよ!」

『いいから!撃てないランチャーに意味は無い!まずは海の中から上がらないと、そしたら武器を転送するからそれを使って戦って!』

「でもボク、マスターなしでやれるって……」



そう証明したい。しかしタケルが一緒だところも心強いのかとフレズは改めて思う。

『嫌?』

「でも……マスターと一緒にの方がずっと楽しい!だからお願い!マスター!」

こういう時のタケルは自信に満ちている。この時のタケルは特に頼もしく感じる。だからフレズは彼に従いたくなる。

『最大出力だ!海から出たら陸へ!』

「うん!うおおおつ!!」

フレズは不要になった部分をパージする。切り離されたアーマーは海の暗闇へ沈んでいった。そして残りのブースターを最大で吹かして水面に向かう。少しして海中を抜けた。

「何?!まだ動きましたの!?!」

水しぶきを上げて飛び上がったフレズを見て、アーテルは驚く、

『アーテルの相手は今はいい!まずは陸へ!』

タケルの言う通りに砂浜に着地するフレズ、所詮丸腰とサイズモードで切りかかるアーテル。武器がないと不安を晒し出すフレズ。

『行くぞフレズ!これを!!』

そういつてタケルはコンソールの武器を選択し転送、フレズの手元にパルチザンの様な槍が出現。

「これは?!」

握られたそれは、アーテルの振り下ろされたベリルスマッシャーを受け止める。

「ガンブレードランス?!」

フレズに合わせた碧色のクリアパーツ刀身の槍に、アーテルは驚きながら名を呼んだ。ガンブレードランス。分離と変形により近距離から遠距離まで距離を選ばない武器である。

『これ工作室で作って遅くなったんだよ。間に合ってよかった』

「今更そんな武器一つ!」

アーテルは再びサイドワインダーに変形、今のフレズは翻弄してし

まえばすぐに倒せると思うが、

『フレズ！森の中へ！』

「うんー！」

タケルの指示にフレズは森の中へ入っていく。これではサイドワインダーではすぐに衝突してしまう。

「こしやくな!!」

アーテルは人型に変形するとベリルスマツシャーを最大出力。衝撃波で薙ぎ払おうというのだ。

「いい加減に眠りなさいな！弱き者よ!!」

最大出力で放たれた衝撃波は木々をなぎ倒していく。これでやったかとアーテルは警戒しながら様子を見るが……。

「おおおっ!!」

アーテルの側面からフレズが突っ込んでくる。アーテルは気づくとベリルスマツシャーをサイズモードで受け止める。ガンブレードランスはブレードドライフルモードになっていた。上下の刀身の間のスリットにベリルスマツシャーの刀身がすっぽりと入る。

『早くにかかったね……フレズ!!』

「OK!!」

フレズはランスを下に力いっぱい向ける。刀身を巻き込んだベリルスマツシャーはつられて下に向く。これでは思う様に振り回せない。

「あっ!!」

『今だ!』

「おおっ!!」

フレズはそのまま回し蹴りを思いっきり放った。ブレード付きの鋭利な爪先がアーテルの横腹を切り裂く、その拍子にベリルスマツシャーを手放してしまったアーテル。

『撃ちまくれっ!!』

追い打ちとしてランスをそのままサーテルに向けて発射、光の奔流はアーテルを飲み込む。それが決定打となった。

「こんのおおっ!!」

「そんな！あああつ！！」

そのまま押し切られたアーテルは光の中で消滅。退場となった。結果この勝負はフレズの勝利である。

『フレズ!!』

バトルが終わり、ステージが解除されるや否や、轟雷達がフレズに駆け寄ってくる。

「皆。へっへーん！どうだい轟雷！ボクの実力！」

「あれがタケルさんの実力ですか！凄いですね！」

「いやボクの実力だよ！」

自分を褒めて欲しいフレズにとっては不服な反応だった。

「あなたこのバトルの趣旨忘れてない？」と呆れ顔のステイレット、

「あ……、まあ確かにマスターいなかったら負けていた。かな」

そもそもこのバトルがマスターとの距離を縮めるための物だと言うのを今になって思い出したフレズ。

「フレズ……ナイスファイト」

タケルも笑いながらフレズに激励の言葉をかけた。

「マスター……マスターのおかげだよ」

いつもの笑顔でフレズは返す。さつき自分の実力とは言ったが、この反応は素直な気持ちだ。

「その反応。少しはマスターからの視線も平気になったかしら？」

「あ、そういえば……」

さつきまでその事実を忘れていたフレズだった。意識すると全く恥ずかしくないわけではないが、少しは楽になった感じだ。

「フレズのその恰好、僕好きだよ？」

「マスター……じゃあ、まだちよつと恥ずかしいけど、タオルやめようかな……」

「やっぱり、あなたはマスターと一緒に一番って事ね」

「うん。そうだよねマスター」

そういうフレズにタケルは「うん」と返した。そしてそのバトルは他のFAGとマスターも触発させた。

「次は私とマスターの二人で戦いましょう！」

「いいなそれ！俺も君達のバトルを見ていたら火がついたよ！」

轟雷と黄一はタケルとフレズのコンビに勝負を挑もうとするが……。

「あ！待って！ボクのマスター。結構無理しちゃったろうから今日の所は……」

そう言ってフレズはタケルを見る。

「ちよつと……辛いで……すいません……」

気の抜けたタケルは少々辛そうだった。病弱の身な上、大急ぎでガンブレードランスを作り、バトルで指揮をしたのだ。常人よりその負担は強いのだろう。心配そうに駆け寄るフレズ。

「ちよつと！あなた達！勝ち誇る上にノロケはやめてほしいですわね！！」

さつき倒したアーテルが納得しない風に食ってかかる。

「あなたは最初一人でやると言いましたわよ！それを結局マスターの力を借りて勝てた！こんな結果は認めませんわ！」

「アーテル……そうだね。ボクは一人じゃ負けていた」

謙虚な反応にアーテルは肩すかしを食らう。

「あ、あら？案外素直ですね」

「そして……ありがとう！」

「は？」

そして全く予想してなかったフレズの札にアーテルは面食らう。

「この一件がなかったらさ。ボクまだマスターとギクシヤクしてたと思うからさ！やっぱボク、マスターと一緒に一番楽しい！お前のおかげでそれが改めて解ったから！だから有難う！気づかせてくれて！」

イヤミの無いフレズに、アーテルはそれ以上言う気にはならなかった。

「……フン。まあ悪い気はしませんの。でも次こそは勝ちますの。精々マスターを大事にするんですのね」

そう言ってアーテルは装備をエアバイクに変形、店を後にした。

「……ちよつとこれ以上は激しい運動は控えたいな。僕少し休むよ」  
そう言つて室内に備え付けられた椅子に座るタケル。今日は少々体を動かし過ぎた。その上寝不足である。

「マスター、お爺さんに迎えに来てもらうね」

こういう時は無理はさせられないとフレズは判断。自分にも責任があると、彼女は自分出来る事をしようとした。

「うん……お願い……」

フレズのそう言つた想いを実感しながら、そう言つてタケルは目を閉じる。少しして、少年は眠りに落ちていく。

夢の中で、タケルはフレズと会つた時の事を思い出していた。

「タケル。今日も一日中病室で閉じこもっていたのか……」

病室、タケルのベッドの横に立つた祖父が残念そうに言う。対するタケルはベッドから上半身を起こし、意にも介さずに携帯ゲーム機に没頭していた。祖父の顔は見えていない。

「別にいいでしょ。遊ぶ相手もないんだし……。パパとママか、爺ちゃんかお年寄り位だよ。来るのは」

その時のタケルの表情は虚無的、諦めてると言つていい様な覇氣のない顔だった。

「そんなにゲームばかりやっていたら、体はますます悪くなるばかりだぞ。もつと外の世界を見てみないか？」

「……外行つたつて、何も無いじゃないか。街の学校で友達が出来ても碌に来られない。この辺だつて子供は全然いない。今オンラインで対戦してるんだから黙つててよ」

「タケル……」

「このゲームがね、僕にとっては外の世界なんだよ……」

少年は、体の弱い自分を呪つた。早く死ぬかもしれない自分を諦めていた。ゲームに没頭していた理由は『ゲームで記録を残せば、自分が生きてた記憶を残せるかもしれない』という理由もあった。……それから暫くして……

「タケル。お前に友達の代わりを連れて来たぞ」

「友達？誰だよ」

そう言うのと祖父はタケルに長方形の分厚い箱を渡した。開くと中に入っていたのはスクール水着を着た少女。FAGのフレズヴェルクだ。

「なんだこれ……美少女フィギュア？」

「……ん……ふああ……」

箱を開けたのを検知したのかフレズは起動、目の前のタケルを見るや、パアツと顔を輝かせる。

「わあっ！お前がボクのマスターだね！ボクはフレズヴェルク！よろしくー！」

「うわっ！人形が喋ったー！」

「最近流行りのフレームアームズ・ガールって奴だ。お年寄りよりは話をしていて楽しいはずだぞ」

「ガール?!男型ってなかったのー！」

なんでこんな女の姿をした人形と……そう思った故の発言だった。その質問にはフレズの方が応える。

「?ないよ。だってフレームアームズ・ガールだもん。それよりさ！バトルしようよ！フレームアームズ・ガール同士の!!」

箱から出ると早速バトルの催促をするフレズ。FAGの事は全然知らないタケルにとっては理解が追い付かなかった。

「へ？バトル？」

「あーん！勝てないー！」

タケルの横に座りながら、嘆いたフレズは目の前に置いたゲーム機のコントローラーに顔をつつぶした。

「お前ゴリ押しし過ぎ、技と高威力の動作に頼り過ぎなんだよ」

初めてフレズがやったバトルはFAG同士のバトルではなく、タケルとのゲーム勝負だった。結果はフレズのボロ負け。

「いーじゃん。強いんだからー」

「当たんなきや、どうって事ないだろー。っていかお前人工知能つんでるんだろ？もつと反応速度とか詰め方凄いと思ったんだけどな」

これじゃヘタな奴と対戦してるのと変わらないな。とタケルは思う。

「いつの時代のAIだよー。ボクらが積んでるのはAS!ずっと高度で柔軟な人工自我だよー!」

「AS?」

聞き慣れない単語にタケルはどう反応すべきか解らない。

「将棋やカードゲーム位しか出来ないあれと一緒にしないで! ニューズとか見てないの?!」

「興味ないよ。意味ないもん」

「マスター!今日は外で遊ぼうよ」

「嫌だよ。だるい」

ゲームに集中しながらタケルは答える。

「そんな事言わないでさー。同じゲームばかりやってても飽きるでしょー?」

「こうするのが好きなんだよ。放っておいてくれ」

「ダメ!もう決めたの!早く着替えてよ!見せたいものがあるんだ!」

そう言つてフレズは武装を装着するとタケルに早く着替える様に催促する。

「……つたく、しょうがないな」

まあ最近外へも出ていないからいいか。そう思いながらタケルはパジャマを脱ごうと手をかける。

「……フレズ、見てないで廊下で待ってろ」

じつと見ているフレズにタケルは注意する。が、フレズは「なんで?」と意味を理解してなかった。

「マスター!見てよ!このトンボの大群!」

外へ出ると飛びながらフレズは手を広げて周りを見せる。周囲はまだ黄色いアキアカネの大群が飛んでいた。

「うわあ、こんなにトンボが……。あれ?今つて秋だったっけ?」

日付はゲームの表示で把握をしているつもりなのに、タケルは自分の感覚を疑った。病室にこもりがちなタケルにとって、季節はあまり意味がない。

「知らないの？赤トンボは夏は山に上がって秋になったらふもとに降りるんだよ」

「へー、お前詳しいんだな」

「マスターのお爺さんが来た時に聞いたの。バトルも出来ないからね。マスターと一緒にこの中を歩いたら楽しいだろうなって思ったんだよー！」

「……僕なんかといたって楽しいとは思えないけどな」

「？そんな事ないよ？マスターゲームすっごいうまいじゃない」

「それは……」

単に自分の為だ。そう言おうとするが、なんだか人に褒められたのも久しぶりだ。

「ねえマスター！トンボってすっごい飛ぶの早いんだ。でもボクなら捕まえられる。見てて！」

そう言ってフレズはトンボの大群の中に突っ込んでいく。タケルはそれを見ながら、自分を褒めてくれた少女を黙って見ていた。フレズが突っ込んでいくと進行方向のトンボは一目散に逃げていく。

「子供みたいに夢中になっちゃって……おいフレズ。余り遠くへ……ん？」

と、真上から鳥の形の影にタケルは気づく。翼を広げた猛禽類が真上にいる。鷹だ。周辺のトンボはフレズが追いかけてまわしてほとんどいない。にもかかわらず影はゆっくりと自分達の周りを旋回している。

タケルは思った。「まさか……フレズが狙われてる……!?」と

「フレズ！戻れ!!」

「え？マスターなんで？っ！」

直後「ピーーツー！」というホイッスルの様な鳴き声と共に、フレズより遥かに大きい猛禽類がフレズ目掛けて突っ込んでくる。鷹は反応の遅れたフレズを蹴り落とした。



「っ！わあーっ!!」

そのままアスファルトにフレズは落下、そのまま鷹はフレズの上  
降り立とうとする。彼女を獲物と間違えてる。武器で対応しよう  
とするが大きさのスケールが違う。「フレズを失うかもしれない」  
そう思ったタケルはとつさに身体が動いた。

「お前！来るなあっ!!」

傍に会った石を鷹に投げる。命中する筈はないが、近くを通り過  
ぎた石に鷹は一瞬怯む。そして普段からは想像もつかないような速  
さでタケルは落ちたフレズを守るべく、上に覆いかぶさる。

「っ?!マスター?!」

絶対に守る。その想いでタケルの心は一杯だった。

「あっちへ行けよ!!僕の友達に手を出すなあ!!!」

普通だったら鷹の方は驚いて飛び去っただろう。しかしその鷹は  
若い個体だったのだろうか。それともタケルを自分より弱いと本  
能的に察知したのだろうか、執拗にタケルを嘴でつつく。

「ううっ！」

それは庇われてるフレズ解っていた。このままではマスターも危  
険だ。何とかしなければ、と。

「マスター！身体を起こして！」

「っ何?!」

「いいから早く！」

言われたとおりに身体を起こすタケル。鷹は驚いて飛び上がる。  
下にいたフレズはいつの間にかサイドワインダーに変形していた。  
鷹が飛び上がった瞬間に狙いをつけるフレズ、

「ボクのマスターに手を出すなあっ!!」

そう叫ぶと、最大出力でロケットの如く飛び上がるフレズ、その勢  
いは矢の如く鷹に真っ直ぐ突っ込んでいく。そして鷹の右眼にサイ  
ドワインダーの槍の部分は衝突。「ピイッ！」という鷹の悲鳴と共に、  
鷹は右眼から血を流しながら山の方に飛び去って行った。

それをホバリングしながら見送るフレズ。

「フレズ！大丈夫!？」

タケルは心配になってフレズに呼びかける。ふらつとフレズはゆっくり落ちてくる。それを両掌でタケルは受け止めた。

「マスター、こっちの台詞だよ。……ゴメンねマスター、ボクの所為で怪我を……」

タケルの両掌の中で、フレズは自分の選択が間違っていたかもしれないと思っただけだ。

「気にするなよ。……友達なんだからさ」

「っ！うん！」

友達と言ってくれたフレズは嬉しそうに頷いた。

「……今日の所は戻ろう。今度来るときは武器のレベルを害獣駆除用に合わせておこう……」

と、タケルの方も調子を崩してしまった様だ。さっき発揮したのはいわゆる火事場の馬鹿力。普段運動してない上に体の弱い少年がこうしたのだから、一気に負担と疲れが現れた。

「うう……」

うまく立ち上がれないタケルにフレズは気遣うくらいしかできなかった。

「ゴメンね……マスター」

「いいんだよ……」

最初のフレズとのお出かけはそんな結果だった。でもそれから、フレズと外に出る事が多くなった。それ以降、鷹に襲われることは無いが、警戒は怠らない。

「マスター！見てて！草笛だよ！ふーっ！ふーっ！」

散歩中、歩幅を合わせながらエアバイクに乗ったフレズは草を口に当てて音を出そうとする。が、鳴らない。

「全然吹けてないじゃないか。こうやるんだよ」

そういつてタケルの方も草を口に当てて吹くも、彼の方もフレズ同様に音は出さず。

「もう！マスターだって音が出ないじゃん」

「あつれ？ゲームみたいにはうまくいかないな」

「ゲームから離れたらマスターもこんなもんだね」

「気にしてるんだから言わないでよ。お前に会う前に爺ちゃんから作り方教わったんだけどなあ。また後で聞きに行こうかな」

「じゃあその時はボクも一緒に行くよ」

そう言っただけで、タケルの距離間はどんどん縮まって行った。そしてそれと同時に、タケルもまた、自覚の無い内に自分の殻を破っていく事が出来た。……そして今に至る。

「ふー、今日は疲れたな」

帰ってきて入浴を済ませたタケルは、病室のベッドに入りながら、今日の感想を一言で纏めた。もう時刻は完全に夜である。

「そう？ボクは楽しかったよ？」

「お前ね……元はと言えば誰の所為だと……でも僕も楽しかったよ。フレズ」

と、もう休もうかと思ったが、枕元に置いていた昨日のVRが知らずにタケルの手に触れた。その際の「こんっ」という音に二人は気づく。

「あ……、あのきマスター、もう一回VRに入ろうよ……」  
「……」

昨日の事を思い出すタケル。少し期待してしまいが、フレズの心境を考えるとそれはいけないと気持ちを切り替えた。

「いいの？」

「ボク。マスターに今日のお礼がしたいの……」

今まで見せた事の無い。恥じらいを含めた上目遣いの表情でフレズは言った。またフレズを傷つけないか心配だが、無下に断つても同じくフレズを傷つけるかもしれない。と判断するタケル。

「解った。入ろう」

再びVRに入ると、昨日と、そして今日のバトルと同じステージに入る。昨日の様に素体状態のフレズが、両ひざをついたポーズで出迎える。昨日と違って憂いを帯びた表情だった。

「マスター……ボクの胸……揉んで良いよ」

フレズは腕を組みながら、両胸を抱える様なポーズで言った。昨日

と違うのは顔を赤らめ、タケルからそっぽを向いている事だ。その様子から、彼女がどんな気持ちなのかは解る。

「いいよフレズ。無理しなくても」

「ううん……して欲しいの」

「でも……」

「何度も言わせないですよ……ボク、マスターの事が大好きなんだから」

大好き、昨日言ったのと同じ言葉なのに、今のフレズはその言葉に恥ずかしさを抱えていた。タケルを直視しながら言えない。その普段見せない少女の仕草に、何とも言えない愛おしさを感じるタケル。

——恥ずかしがるフレズ……なんだろう。ドキドキする……——

正直言われたとおりにしたい。とはいえ、タケルの方はこのまま揉んだら昨日と同じ事になるんじゃないか。しかし拒絶するわけにはいかないと思む。そして……

「出来ないよ」

「え？」

「お前が嫌がる姿なんて見たくない。僕だって……だから」

恥ずかしい所為か、後半は小さい声でボソボソと喋るタケル。フレズはその部分が聞き取れなかった。

「え？もう一回言つてよ」

「いやだから……だって」

「え？だーかーら聞こえないって」

催促するフレズにタケルは、フレズ以上に顔を赤くして叫んだ。

「っ！大好きなのは同じって言ったんだよ！お前の事、大好きなのは僕も変わらないの！」

「っ！マスター!!」

その一言に大喜びだった。フレズはタケルに真正面から飛びつく。その勢いでバランスを崩したタケルは「うわっ」と叫びながらフレズごと転倒した。仰向けのタケルにフレズが跨る形になる。顔が近い。と、フレズには思い出した事があった。ショック療法。キスの事だ。

「……マスター、これだったら大丈夫だと思う。ボクとキスして」

「っ?!おまえ何っんん!」

タケルが反論しようとするも、フレズはお構いなしに少年の口を、自分の唇で塞いだ。お互いの唇が密着。タケルは瑞々しいフレズの唇を、人間と遜色ない初めての弾力を直に感じる。フレズの方も同様の感想だった。ソフトキスの範疇で、少ししてお互いの唇が離れる。

「……ハア……」

——マスターの唇……不思議な感触……——

吐息を吐きながら、確かに胸を揉まれるのとは違う感覚と考えるフレズ、もう一回しようかな……。そんな風に考えていると。

「フレズ……もう一回」

タケルの方から言い出した。昨日の様な雰囲気を出す表情だ。また怖い想いをするかもしれないとフレズは不安になる……が、

「いいよ。マスター……来て」

受け入れた。もう一回したいという気持ちがあったからだろうか。

「フレズが……悪いんだからな」

そして再び唇を合わせる。……ふと昔、フレズは見ていた映画のキスシーンでタケルが赤くなっているのを思い出した。お互いが舌を絡めたディープキスのシーンだった。

——あれ、やってみようかな……——

好奇心でそう思った。フレズはタケルの口に……舌を入れる。

「……あ」

入ってきた暖かい舌に、タケルは目を白黒させる。暖かさと唾液にまみれたフレズの舌。……それが引き金だった。昨日からの悶々とした物を、まだ発散する術の無いタケルにとっては我慢の限界。タケルの方も、フレズの舌に自分の舌を絡ませた。

「あっ……んっ……」

やはり恥ずかしさもあったが、その気になつてくれた事に嬉しさを感じるフレズ、舌に一層力を込めて主の舌に絡めて行く。自分の唾液が主の唾液と混ざり合い。『くちゆくちゆ……』と卑猥な水音を立てていく。

『ハア……ハア……』

それに伴いお互いの息も荒くなっていく。タケルは必死だった。昨日と同じ貪り食らう様な行為。タケルが止められない事をフレズは知らなかった。籐の外れた主人は舌の先端を尖らせ、フレズの舌の側面に這わせていく。フレズも同じ。出し入れを続ければ続けるほどに、粘度の増す唾液は舌同士を更に密着させた。

——…昨日と同じ、怖いよマスター、怖いのに……——

正直、さっきのキスの方が良かったかもしれないとフレズは思う。デープキス、これはあまりにも生々しい、少し気持ち悪さもあった。恐怖と恥辱、しかしそういったネガティブな気持ちだけではなかった……それは、

——なんでこんなに幸せなの……？——

幸福感で一杯だった。大好きな人、信頼してる人とこんなに密着している。頭が、ASがとろけていく様な感覚。それがフレズを夢中にさせた。……暫くして唇が離れる。お互いの唇を糸が引いた。

「ふやあ……」

フレズの顔つきがとろんとした表情になっていた。慣れない酒に酔っぱらってしまったかの様だった。対するタケルは……徐々に顔が青ざめていく、

——…やばい……——

自分で自分のした行動に信じられなかった。若気の至り、据え膳くわぬは男の恥、言い訳はいくらでもあるが不埒は不埒。

「マスター……」

フレズからの呼びかけにタケルはビクツとなる。嫌われる。間違はなく嫌われる。なんでこんな事したか自分でも信じられない、と、しかしフレズからの言葉は意外な、そして嬉しい物だった。

「マスター……もつとお……しよお？」

熱に浮かされた様に囁くフレズ、その一言でタケルの理性は崩壊。フレズを押し倒していく。フレズの方は完全にされるがままになっていた。いつもは快活で自分を引っ張っていた少女が、今は病弱な自分に服従を誓う犬の様だった。

——自分だけの物にしたい。独占したい……フレズを……一人占めしたい——

少年にそんな欲が湧き上がる。それはタケルが少女の様な外見を持ってしても、男、雄である事の証明だった。

「変なの……恥ずかしいのに……怖いのに……幸せなのお……」

「ねえマスター……綺麗だね。星空」

キスの後、二人は手をつなぎ寝ころびながら空を見上げていた。夜の設定である今は満天の星空だ。

「……あ、うん……」

力なく答えるタケル。終わってみると……もの凄く気まずい。それはフレズの方にも伝わったようだ。

「もう、もつと何かムードある事言つてよ。……ボクだって恥ずかしいんだからさ……」

フレズの方も赤面しながら言った。タケルは思う。

——満天の星空、病院のベッドじゃ絶対見れないな……。でもこれは仮想空間、結局ベッドの上である事には変わらないな。と……病院のベッドの上……。ん？ベッドの上？——

「……ね、ねえフレズ、結局僕ら病院のベッドの上にいるわけだから、今のリアルな僕らどうなつてんだろう……」

「もう、マスターったら、今のVRは意識が落ちるから、外のマスターは眠ってるのと変わらないよ。催眠みたいなもんだよ」

タケルの言わんとしてる事がフレズには理解できていた様だ。その言葉に安堵するタケル。それと同時に、本物の星空をフレズと見たい。そんな風にタケルは思う。

「そうか……ねえフレズ。僕、絶対に自分の身体を治す」

タケルは、隣で手をつなぐフレズに決意した表情で言った。

「そしてさ。いつかこれと同じ島で、二人で本物の星空を見ようよ」

「マスター……うん！」

と言った時に「あ」と声をあげるフレズ。

「でもさマスター。その時はボクのサイズじゃ同じにはなれないね」

「あ、そうか」とタケル。と同時にある事が思いつく。  
「じゃあこうする！」

そして翌日

「タケル。学校の作文か？」

見舞いに来た祖父がタケルを見ながら聞いた。タケルはいつもの様にベッドから上半身を起こし、ベッドサイドテーブルの上の原稿用紙に書き込みながら答えた。フレズの方は充電君で眠っている。

「爺ちゃん。まあね。ようやく何を書けばいいのか決まったからさ」

「テーマは確か……将来の夢だっけか」

「うん。僕の将来の夢はね……」

『 将来の夢 華山健（タケル） 僕の将来の夢はたくさん勉強をして、ファクトリーアドバンス社に入社、今普及してる人形サイズのロボットから、等身大サイズのロボットの開発に携わる事です。人間とロボットの関係が今よりもずっと近い距離で、いつまでも仲良く暮らせる未来。夢と同時に、それが僕の来てほしい未来でもあります。』

だから僕は、生きたい。



## ep12 『大輔と量産型アーキテクト』（前編）

大輔とアーキテクト

「では文化祭の出し物は『お化け屋敷』で決定します」

高校の教室、教壇に立った教師がそう言った。季節は十月半ば、黒板にチョークで描かれた文化祭の出し物候補。その下の正の字で多数決を決めていた。その結果を聞いていた生徒達の反応は様々だ。「頑張ろうね」と友達と話す者もいれば、「あーあ、俺の出した企画の方がよかったのにさー」と愚痴る者も様々だ。そしてその少年も例外ではない。

「ちえー、メイド喫茶じゃなかったかー」

毎度お馴染み、ステイレットのマスター、洪庵ヒカルはその結果に満足していなかった。当然ながらFAGは家にて留守番である。

「ははは、残念だったなヒカル。お前の下心皆に見抜かれていたかな」  
ヒカルの前の席、親友の黄一が後ろを振り向きながら言った。

「ほっとけよー」

「ま、メイド喫茶は隣のクラスが既に決定してるってのもあるからな。同じのやっても面白がるとは思えないからな」

「つつたつて、学生の作ったお化け屋敷でしょうが。チープになるのは目に見えてるだろー」

「どうだろうなー。高校生だと結構凝った作りとかできそうだけど。まあチープだとしても、子供も来るかもしれないのが文化祭だからな。あえてチープにするのも鉄則だろうな。あ、メイド服が不満だったら、ステイレットに着てもらったらどうだ？」

そう言われたヒカルの脳裏にメイド服を着たステイレットの姿が浮かぶ。ロングスカートのクラシック衣装でスカートの両裾を持ち上げる仕草。露出の高いミニスカート衣装での丈で生足を見せるステイレット。何の事はない妄想。しかしその時のヒカルにはストライクである。

「っ!?!な！何言ってるんだよ！」

黄一にとっては軽い冗談のつもりだった。が、顔を赤らめて返すヒ

カル。

「?何ムキになつてるんだ?」

どうもヒカルの反応に違和感を感じる黄一、いつもだったら笑って軽く流すのだが……、

「あ、な……何でもない。第一アイツの性格上着ねえよ」

「ハハハ違ういな。大体いつもの素体姿でもメイド服よりずっと扇情的だ」

「はいはい皆騒がない!ではこれよりそれぞれ教室内のお化け屋敷コース、及びそれぞれの分担等を決めたいと思います。誰かアイデアある人はいますか?」

とまあ文化祭の出し物についての会議は滞りなく進んでいった。そしてその日の放課後。

「……くっそー」

教室に残ったのは掃除当番数人、ある男子が不満そうに床を掃く。ヒカルではなく今度は黄一の方だった。

「どうしたんだよ。さっきまでの俺じゃあるまいし」

その様子が気にかかったヒカルが問いかける。

「なんで俺がのっぺらぼう役なんだよー。裏方がよかった」

黄一が不満だったのは配役を決める時の事だった。和洋折衷という事で黄一の役はのっぺらぼうという事になったのである。

「顔覚えられる事ないからいいだろー?俺なんて無駄な脂肪が無いって理由でミイラ男だぜ」

コンセプトは和洋折衷という事になったのだが、どうも凝ったアイデアは何故か却下されまくった結果、ぬるい、そしてちぐはぐなアイデアばかりになってしまったのである。

「コンセプトの徹底もしてないよなあ……。こうも中途半端だと恐怖感もイマイチになりそうぞ」

徹底してない。という黄一の感想。ヒカルも思った感想だ。どうも誰かがアイデアを出すと先生に止められる。

「……まあ皆そう思うよなー。……あまり俺達が気合い入りすぎて、

悪ノリが過ぎるのを止めようって考えもあるんじゃないか？」

「……諭吉君、そう思ってる？」

と、一人の女子が話しかけてきた。

「あ、玄白さん」

玄白朱音、ツインテールが目立つ黄一達のクラスメイトだ。

「うちの文化祭なんだけどね……。どうも昔その理由と噂があるんだって」

『噂？』と黄一とヒカルの二人が同時に食いつく。

「七不思議関係で、文化祭のお化け屋敷の奴があるんだってさ……」

「え？うちの学校七不思議あったの？」

「文化祭限定の話ってのも珍しいな」とヒカルが付け足した。

「うん。それも最近、聞いた話じや一昨年的事なだけどもね……」

そう言って少女は話し始める……。

——うちの教室みたいに、文化祭でお化け屋敷を企画したクラスがあったんだって……。うちとは全然気合いの違う力の入れようだったんだってさ。会場の教室はしきりで真っ暗。外からの雑音が聞こえない様に防音はバッチリ。美術部全面協力でメイクも気合い十分。もう学生とは思えない本格的さだったんだって……。でね、文化祭の日、それだけ力を入れたんだから当然お化け屋敷は大盛況。で、問題は後日。生徒の中のあるお客さんが、企画者の生徒にこういう事を言ったの……。

『あの人形が飛ぶのと、途中聞こえてきた童謡、すっごい怖かったよー』

それを聞かされた企画者の生徒はね、こう言ったの。

『え？そんなの仕込んでないぞ』ってね。

体験した生徒が言うにはね。途中誰もいない通路で、日本人形をズラツと棚に置いていた通路があつて、そこを通った時に、日本人形が飛んで、生徒を囲む様に輪になって回っていたんだって……。そして童謡が……。

体験した人としてない人がいたから、本当の怪奇現象じゃないかって噂が流れたの。でもそれが一度だけでは精々変な噂止まり……。翌

年も特に問題はなくお化け屋敷を企画したクラスは問題なく通った。  
……今度は文化祭の日に事件は起こった。あるお客さんの感想でこ  
う言った。

『通路で「おいてかないでえ……」って後ろから女に呼ばれ肩を叩かれ  
て、振り返ったら誰もいないのが怖かった』

……なかったのよ。そんな仕掛け。それでスタッフが確認したら  
特にそんな仕掛けはない。でも体験したお客さんからは間違いな  
いって言っていた。大体お化け屋敷でお客さんの身体に触れるのは  
タブーと言われてるのよ。……流石に二回も起きたもんだから職員  
会議まで起きて、今後お化け屋敷は禁止になりかけたけど、最終的に  
変に凝った内装は禁止って事になったんだって……。

「おいおい……。マジかよ……」

「デカイ遊園地のお化け屋敷で怪奇現象にあったって話は聞くけど、  
文化祭の出し物であったなんて……」

「先生も内容を知ってるはずだよ」

「こういう話を聞くと、どうもお化け屋敷を通った事に後悔をする二  
人。特に黄一の方は顔が青ざめる。」

「……なあ、今からでも出し物変えてもらうか？」

「そう言う黄一、こんな話を聞くと流石に不安になる。」

「今回は緩い感じにしたから大丈夫じゃないのか？」

「い、いや、そうはいつでも程度の問題じゃないだろ？ 仮に、仮にだ。  
コトブキニツパーを小物として置いたとして、そのニツパーが飛んで  
くるとか程度でも、実際に起きたら大騒ぎになっちゃうぜ……」

「なんでニツパーなんだよ。黄一……お前もしかして怖い？」

「っ！ 違わい!! ニツパーつてのはあれだよ！ 確か立川の女子高でそん  
な話があったのを思い出したんだよ!!」

ムキになって返す黄一。親友のヒカルには解っていた。黄一が斜  
めに構えていてもこういうのに弱いというのを、

「俺はニツパーはガンダ○ベース限定の薄刃愛用だぜ。あ、両方置い  
たら案外○ンダムベース限定ニツパーとコトブキニツパーがぶつか

りあって対決する現象が見られるかも?」

「ふぎけてる場合か!」

「ムキになるなよー。ちよつとネタが浮かんだだけだろー?」

と、ふぎけてるわけではないが、ヒカルが笑いながら軽く返した直後、『ドン!』という音が聞こえた。

「?なんだ?」

「ひっ!もう怪奇現象が起きたのか!」

「じゃないじゃない。隣のクラスで何かあったみたいだ」

破裂したような音だ。隣のクラスへ確かめようと三人が廊下に出てみる。と、その教室の入口に人だかりが出来ている。

「何かあったのかい?」

「ロボット部の奴だよ。全自動掃除機で掃除当番の掃除全部やろうとしたら、突然壊れちゃったんだって」

「ロボット部?」

ヒカル達が教室を除くと、煙を吹いている自動掃除機が見えた。円盤状のボディ側面からはマジックハンドが複数伸びていて、それぞれ雑巾やハタキを持っている。

「あああ!何故だあギャラルホルン花子!!昨日はうまくいったのに!」

その傍ら嘆く男子生徒が一人、学生服の上から白衣を羽織っており、やや伸ばした癖毛と瞳の見えない瓶底眼鏡の痩せた少年。

「あいつが作ったのか」

「彼はロボット部最後の一人、橋本大輔くんね」と朱音は少年を判別する。

「大輔、大丈夫か?」

一人の生徒が少年を心配する声を上げる。

「あ、ああ心配ない!待っていてくれ!すぐに修理を!」

「待って待て。俺達で掃除はやるからいいよ。お前の気持ちは十分解ったからさ」

「しかし……」

「ロボットを宣伝して部員を勧誘しようってのは解るよ。でもお前が

焦ってるのも解る。今日の所は落ち着け」

「……すまない」

クラスメイトに諭されたのか、顔を下げた少年。と、白衣のポケットから一人の小さな少女が顔を出す。15cmサイズの少女、FAGだ。

「マスター、この騒動で教員が来る確率は80%。そのうえでマスターが捕まる確率は90%」

銀髪のFAGは主、大輔に表情を変えことなく淡々と告げた。

「と、そうだなアーキテクト。今捕まったら不味い。早く部屋に戻ろう」

そう言われた少年は掃除機を掴む。が、まだスイッチを切っていないかっただ上に加熱しすぎた部位を持ってしまったらしい。「熱つ」と言いながら一度手を放す。慌てて掃除機のスイッチを切った。

「皆、すまないな」

そう言う白衣を掌にまとわせて鍋つかみの様にし、その上から掃除機を掴み教室から出ようとする。「ちよつとごめんよ」と教室の人だかりをかき分けて。

「……FAGを連れていたな」

少年御後姿を見ながら、なんだかヒカルと黄一の二人には興味がわいた。

「ちよつと寄ってみるか？ロボット部へ」

「冷やかしは失礼だろ？」

「見学程度なら大丈夫だろ？今まで知らない部活動だったし、ちよつと気になるな」

「ちよつと二人とも、その前に自分の教室の掃除をすませてからね！」

そう言う朱音に二人は『はい……』と力なく答えた。

掃除が終わった二人は校舎の廊下を歩く。ロボット部の教室は校舎のかなり隅つこの方だ。倉庫で使われる部屋が多く、人は見ない。「バスケ部の方行かなくていいのかお前？」

「ちよつと位なら理由つけるから平気だつて。こんな所でFAG仲間

に会えるとはな。ていうかロボット部なんてのが家の学校にあつたなんてな」

「こんな所にあるってのがマイナーさを物語ってるな」

近くに部活で使われてる教室も無い為、ここまで来ると人の気配も無い。

「と、ここだな」

『ロボット部』と書かれた札が張り付けてある教室。そこが部室だと判断する黄一。ノックをすると「はい。どうぞー」という声が聞こえた。

『失礼します』

そう言つて二人は部室に入る。薄暗い部室の中はそこいらに機械が山積みとなつていた。壁にはセロテープで雑に貼られたメモ書きが幾つも貼られており、研究室と言つた内装だ。

「なんかまさに専門家の部屋って感じだなあ」

奥で勉強机に向かつていた白衣の少年が後ろを振り向いて、ヒカル達を認識した。さつきの少年、橋本大輔と呼ばれた少年だった。どうもヒカル達に見覚えがあるらしい。

「君たちは……確か同学年の……」

「ああ、ちよつと見学にね」

本当はFAGが気になつたというのが真相だが、黄一はそう言つた。

「っ！もしかして入部希望かい!？」

パアツと笑顔で応える大輔。分厚い眼鏡の所為で目は見えないが、「いや、悪いけどいきなりそこまでは……」

「あ……そうか」

バツが悪そうに答える黄一に大輔は若干残念そうに答えた。少年が座つていた机にはさつき壊れていた自動掃除機が、カバーを外されていた。基盤が焦げていたらしく本体から外されていた恰好だった。

「さつきの掃除機だ。あれ、君が一人で作つたのか？すげえな」

機械に強くないヒカルは素直に感心の声をあげる。

「っ。まあね。もうロボット部は僕一人になつちやつたからさ」

少し嬉しそうに答える大輔。と、ヒカルは大輔の言葉が気になる。「他の部員は？」

「皆上級生だったからね。全員引退しちゃったよ。たまにOBの人達が来るんだけど、見学は君達が初めてだよ。まあゆっくりしていつてくれ」

冷やかしかもしれないのに、嫌な顔をしないで大輔は快くそう言うってくれた。

「マスター」

と、その直後に一人の女の声が響く。声のするのは部屋の手前側のテーブルの方。

「三人の為に泡茶を淹れた。温度摂氏80度」

見ると飛行パーツを取り付け、ギガンティックアームズを着こんだFAGが湯呑みを、応接用らしきテーブルに三つ並べていた。

「ああ、ありがとうアーキテクト」

銀髪のFAG、アーキテクトは無表情でコクリとだけ頷いた。

「やっぱり、君もFAGを連れていたんだな」と黄一。

「？君達もかい？」

学校ではホビーであるFAGは持ち込み禁止だ。大輔にとっては大っぴらにしづらい話題だった。

「まあね。俺達も学校に連れてきてはいないけど、FAGは持っているからさ」

「まあ、本音を言うとき。来た理由はFAGが気になったって理由なんだけど」

「そっか……、いいよ。こいつも貴重な部員さ。アーキテクト、挨拶を」

そう言っただけでテーブルの周りの椅子に座った三人、大輔はアーキテクトを呼び寄せた。テーブルに乗りギガンティックアームズから降りたアーキテクトは黄一達に頭を下げる。

「……」

言葉は発しない。

「FAGの基礎となったアーキテクト型か。俺のは轟雷型だよ」



「俺はステイレット型だ。可愛い奴さ」とヒカル。

「特にこいつの場合は家事とかをステイレットに任せきりでさ。どっちが面倒見てるんだかわかりやしないんだぜ」

「おい黄一、そう言う事言うなよー」と笑いながら言う黄一に、ヒカルがいつもの様にツツコミを入れるが、

「別に使用用途に沿った事。私達FAGの役目はバトルと人間とのコミュニケーション、一言で表すなら人間の為」

アーキテクトが表情を変えずに淡々と言う。場を和ます目的でやった二人の漫才ではあったが、こう言われると閉口してしまう。

「……な、なんか、独特な雰囲気の奴だな」

「まあ……個性差だろ」

「ああこいつはね、アーキテクト型の中でも特に表情に乏しい個体みたいなんだ。引退した先輩にもアーキテクト型を持っていた人はいたけど、表情は豊かな方だったな」

「情報伝達には影響はしない」

またさつきと同じように、表情を変えずに淡々と喋る。

「でも今日のコイツはテンションは高いよ。嬉しいのかな」

「いや、表情変わってないだろコイツ」と大輔に対してツツコミを入れるヒカル。

「そうかな。これでもコイツ笑ってるけど」

そう言い切る大輔、

「ホ・ホントかよ……」

「まあ今日はいつともより口数多いからね。先輩たちもFAGは連れていたから友達はいただけけど、引退してからは疎遠になっちゃったからかな」

「そう……か」

さつきの掃除機の騒動も、ロボット部への宣伝も兼ねてるんだろうな。さつきの落胆を含めて黄一はそう分析する。

「マスターはその所為で勧誘に必死。部活動は一人だけでは存続は不可能。貴方達への入部を要請する」

正解だったようだ。アーキテクトは遠慮なしに言う。

「わーアーキテクトやめろよ！」

「その……悪いけど、俺の方は既に別の部活に入ってるからさ……」  
「そ・そうか」

やはり残念そうにする大輔。思ったより深刻になってしまった話に、若干の罪悪感を感じる二人。と、黄一が口を開く。

「だったらさ。今度の休みに俺達のFAGが集まってる模型店に、君とアーキテクトの二人で来てみないか？」

意外に感じた言葉だ。こう来るとは思ってたらしく、大輔は少し驚いた顔をしていた。

「その時に、文化祭で何か宣伝の出し物を皆で考えようって事さ」

ロボットに関しては詳しくない二人だが、FAGなら近い目線で話が出来ると。自我を持ったFAGなら宣伝も兼ねた出し物が出るかもしれない。というのが黄一の考えだった。

「そうだな黄一、ロボット部の宣伝かあ。もしかしたら俺達のFAGも手伝えるかもしれないぜ」

「い・いいのかい？」

「FAG目的なんて冷やかしてみたいになっちゃった罪滅ぼしもあるからね」

「ロボット関係は協力出来ないけど、FAG仲間としてなら協力出来そうだしな」

「ありがとう！助かるよ！」

「俺は諭吉黄一（ゆきちきいち）」

「俺は洪庵ヒカル」

「橋本大輔だよ。改めてよろしく！」

新入部員はともかく、横の繋がりが出来た事に喜びを見せる大輔。それを見ていたアーキテクトが口を開く。

「……マスター、別のFAGに会える？」

「ああ、アーキテクト。きっと友達になれるよ」

「そう……」

興味なさそうに、無感情に答えるアーキテクト。だが大輔にはアーキテクトが喜んでるように感じた。

「アーキテクトも喜んでるよ。最近は一人だったからずっと寂しそうで」

——だから解んないって!——

そう黄一とヒカルは心の中で同時に突っ込んだ。

ep13 『大輔と量産型アーキテクト』（中編）

ヒカル達がロボット部に行った週の土曜日。いつもの模型店のFAG用コミュニケーションスペース。そこで轟雷がアーキテクトを皆に紹介する。

「……」

「とうわけに来ていただいた大輔さんとアーキテクトです！」

今回のコミュニケーションスペースは日本の和室の再現である。部屋の中央に大型のコタツが用意されており、窓の外はしんと雪の降る庭。FAG達は下半身をコタツに入れながら談笑に望む。なおコタツの大きさは縦横それぞれにFAGが四人座れる程の長さの正方形型だ。

「よろしく頼む。これはほんの気持ち」

コタツの南側にて、正座しながら抑揚のない声、かつ無表情で返すアーキテクト。が、彼女は手に持った物をコタツの上に横に置いた。

「花束ですか。いい匂いですね」

アーキテクトが持ってきたのはブーケサイズのキンモクセイの花束だ。部屋の中を甘い匂いが包み込む。……確かに匂いはいいのだが、大きさが人間用サイズそのままなので、置いたテーブルの東西側は花束に占領される形になる。東西側のFAG達も寝ころんで回避という形になった。

「データ取得済み、キンモクセイ。モクセイ科モクセイ属の常緑小高木樹、主に庭木や街路樹の観賞用、実よりも花を食べるのが一般的。なお受粉させなくとも挿し木で容易に増やせるのでつける花の数の多い雄株が植えられる事がほとんど。花言葉は謙虚、又は気高い。シーズンは十月上旬が平均的」

「ネットの丸写しみたいな説明ですネ」

「つて大きすぎるわよ！場所を選びなさい！」

アーキテクトの反対側に座る北側のステイレットが叫んだ。南北側も寝かせた花束が視界を遮り前が見えない。ちなみに轟雷はス

テイレットの隣に座っている。

「想定内、ブーケサイズだから、縦にしてもこのスペースに入りきらないようなサイズではない」

「眼の前の状態を見てから言いなさい！」

「お、お店の人に頼んで花瓶に入れてもらいましょ……」

東側に座っていたレテイシア達は寝そべりながら苦しそうに呟いた。でもって、花束はコミュニケーションスペースの外に移動、花瓶にいれてもらった。

「また変なのが増えたわね……」とアーキテクトに対してステイレットは言う。

「問題は無い。コミュニケーション能力はFAGとして及第点に達している」

「まあFAGは厳密にはロボットですからこういうのも珍しくはないですよ」とレテイシア。

「バリエーション機の二人はこんなに饒舌なのにね」

ステイレットが左に一瞥で示したのは二人。東側のアント姉妹、レーフとライの二人。

「別に個体差の範疇だよステイレットお姉ちゃん」

「ま、彼女の様な静かさは少しはライに分けてあげたいけれどね」

姉のレーフがそう言うのと「どーゆう意味!？」と妹のライが突っかかる。このアント姉妹、片目隠れと紫の髪以外は無口なアーキテクトと同じパーツで出来ている。というかこのアント姉妹も厳密にはアーキテクト型なのだ。

「別に問題はない。彼女の言った通り、FAGの性格及び個性には個体差がある。私の性格は前のマスターの時からこうだった」

「?あなた。今のマスターが初めてではないの?」

アーキテクトの発言にステイレットが食いついた。彼女も今のマスターは初めてではない。

「今のマスターは二人目、一人目のマスターは中古屋で私を売った。そして格安だったところを、今のマスターに買われた。売却原因はコミュニケーションによる感情の反応がほとんどない事の確立。95

%」

——それしかないでしょ……——

——自分の性格に自覚はあるんですね……——

その場にいた全員がそう思った。が、失礼と解っているために、全員が口には出さなかった。表情も動かず、動作も最低限しか動かしていないアーキテクトだ。見てる側としては本当に感情があるかどうかすら解らなくなってくる。

「でもさー。アーキテクトお姉ちゃん、本当に感情あるの？私もここまで淡白なFAG初めてだよあいたっ!!」

前言撤回、ただ一人ライの失礼な発言にレーフは無言でゲンコツをくれた。

「……私は別に感情が無いわけではない。表に出すのが不向きなだけ……。私だって少しは気にしてる。なお今ので精神的ダメージを確認」

要するに傷ついたという事だ。

「うーごめんなさい」

「ねえ……。今のマスターとはうまくいつてるの？」

アーキテクトの劣等感を刺激するわけにもいかない。そしてステイレットとしてはマスターとの関係が気になるところだ。アーキテクトはステイレットの問いにコクリと頷く。

「肯定する。今のマスターには感謝している。私の感情や表情も読み取ってくれる。好意に値する」

「マスターの事、好きなんだ」

勘で言うステイレット。

「……」

親近感を含ませたステイレットの言葉に対してアーキテクトは無表情だ。が、目を逸らす。その場にいたFAG達は思う。likeではなくloveの方が。と、

「そんな無表情でもなー」と懲りずにライはつまらなそうに言う。そういう感情があるのならもっと反応を見せてくれればいいのに、棒読みではないが、変化のない声で喋るアーキテクトに対してライはそう

思った。

「やあアーキテクト。コミュニケーションはうまくいつてるかい？」

と、そのタイミングでマスターの大輔が来る。

「マスター」

「あ、どうも」「お世話になってます」

それぞれのFAGが大輔に挨拶をかわす中、ライの脳裏にある案が浮かぶ。この時にマスターに好きと伝えたら面白い反応を見せるかもしれない。と

「あなたがマスターですか？あのですね！あなたのアーキテクトちゃんがあなただの事が好き「ふんっ!!」」

ライが言い終わらない内に、アーキテクトが渾身の声と力で、コタツをライの方に思いっきりの勢いでひっくり返す。ちやぶ台返しされたコタツは、ライと、とばっちりでレーフとイノセントエアを巻き込んでひっくり返った。

『わああっ!!』

三人揃って悲鳴を上げ、下敷きになった。

「マスター、問題はない。コミュニケーションは順調」

再び正座の姿勢でアーキテクトは返した。

「あんまりそうは見えないけど……」

「順調ったら順調」

「本当に表に出すのが苦手なだけなのね……」

荒っぽい手段で事を収めたアーキテクトに対して、ステイレットはそう思った。

「全くライが余計な事するからこっちまでひどい目にあっただじゃない……」

「ううう、ちよつとした好奇心だよー」

ぼやくレーフとライ。と、今日の目的はもう一つある。ちやうど大輔や黄一とヒカルもいる事だ。アーキテクトは切り出す。

「マスター、全員揃ったから議題に入りたい」

「うん。そうだね」

FAG用のコミュニケーションスペースの前に備え付けられた座席に、大輔やヒカル達は座り、議題に入る。

「私とマスターのロボット部が存続の危機にある。マスターの部活を今度の文化祭で宣伝をしたい」

今回のアーキテクトと大輔が来た理由はそれだ。

「あれ？そもそも出し物ってクラスごとに変わるんじゃないの？部活で出すっていうのは？」

「物によるね。部活によつては裏方と兼業になる事もあるんだよ。資材運びとか駐車場の整理とか」

「裏方ね……そういえばロボット部の方は去年まで何かやっていたんですか？」

そう言いながら轟雷が大輔に問いかける。

「こつちも裏方、出し物の手伝いき。FAGの力を借りてね」

「FAGを？」

「確か一昨年は、お化け屋敷やっていたクラスの演出の手伝いをしていた」

その言葉を聞いた黄一とヒカルは顔を強張らせる。ついこの間聞いたこの学校の怪談だ。

「まさか……、お化け屋敷で人形が並んでいた棚で、人形が浮かんで輪になって、童謡を歌っていたっていうのは……」

ヒカルの疑問に大輔はよく解ったねと言わんばかりに答える。

「？知ってるのかい？あれはロボット部のやった演出だよ。恐怖演出だから悪くいう人もいるだろうから、生徒会の一部以外に口外しない様に言われてるんだけどね」

「っ！それが原因だったのかよ!!」

初めて聞いた時に一番怖がっていた黄一が一際大きいリアクションで答えた。

「？何だかよく解らないけど、出し物にFAGを使って手伝っていたってわけですか？」とレティシア。

「肯定する。最も一昨年は私もマスターも入学前だったので参加はしていないが……」



「……そうだ！ひらめいたぜ！FAGだ！」

ヒカルが思いつきを提案する。

「確か橋本君のクラスの出し物はメイド喫茶だったよな！アーキテクト達に手伝わってもらってロボット部の宣伝をするんだよ！」

「洪庵君、実はそのアイデアは既に二人で出したんだよ」

「あれ？そうなの？」

「でもそれはロボット部での宣伝とは関係のない内容。機械の性能を披露出来る場ではない」

「実はその代案で、校内の清掃を全自動の掃除機でまかなって、それを宣伝に使おうと思っていたんだけどね。それも壊れてしまって」

「それで修理と改良をしようと思っていた大輔だったが、間に合わないかもと不安になっていた所だったわけだ。」

「そっか。うーん、確かに関係は無いかも知れないけどさ。案外技術と宣伝は無理に結びつけなくてもいいんじゃないか」

「ん？どういう事だい？」

「肩ひじ張らずにやるのが部活だろ？遊びの延長だ。新しい人を迎えるのにガチ過ぎても、とっつき辛いつてももあるんじゃないか？俺としてはFAGに接客させるだけでも宣伝にはなると思うんだよ」

「そう言うヒカルに黄一がツツコミを入れる。」

「そうかあ？それで全くロボットに興味ない奴らばかりが入部して来たら逆効果にならないか？」

「ああそっか……まあそういうのも考えられるな……」

「余り深く考えてなかったヒカルには痛いところでもあった。それに大輔が追加で案を加える。」

「ひらめいた。だったら折衷案だ。FAGに僕の自作パーツを装着させて、それで接客を手伝わせたらどうだろう」

「そっか。自作パーツなら小さい大ききさで済むな」

「時間もあまりないからね」と黄一。

「へへっ。それなら可愛いFAGのメイド服が見れるってわけだな」

「ちよつと待ってよ。FAGにパーツつけて接客って、誰がやるのよ」  
それにステイレットが食いつく。まさか自分が？と言わんばかり

のリアクションだ。

「言っちゃ悪いけど、アーキテクトのこの態度はとても接客に向いてるとは思えないわよ」

「君もそう思うかいステイレット？さっき言ったメイド喫茶の接客を諦めたのは、実はそう言った理由もあるんだよ」

「あ、そうなの……。ごめんなさい」

「メイド喫茶ね……。だったら私が立候補するわ」

と、一番に手伝うと名乗り出たのは意外な人物、いやFAGだった。

「レーフ？珍しいですね」

「同じアーキテクト型が困っているのよ。手を差し伸べるのはFAGとして当然じゃない。それで、当然FAG用のメイド服はあるんでしょうね？」

「お姉ちゃん、メイド服が着たいんだー」

ライの指摘。轟雷達は以前ステイレットの愚痴を聞いた時にバーテンダーの衣装を着ていたのを思い出す。

「何を言ってるのよライ。そんなわけないでしょう」

「……メイド服だったら、お化け屋敷以前にロボット部が出し物で使った奴がある」

「で、FAGも一人だけで済ますつもりじゃないだろう橋本君」と黄一。

「そうだな。これ位のサイズなら披露するパーツを揃えるのも難しくないよ。もう何人か出てくれると有難いな」

「じゃあ私も出ますよ。メイド服って着てみたかったですよね」

そう言って立候補したのはレティシアだ。

「それって……」応バイトになるわけですから、バイト代は出してくれるんですよ？」

轟雷が打算的な表情を見せながら大輔に問いかける。

「厚かましい事言ってるじゃない轟雷。橋本君、コイツでよかったですよ使ってくれ」

と言って黄一は首筋をつまんだ轟雷を大輔に差し出した。

「ちよつとマスター！正当な労働には正当な対価は必要ですよ！」

「自作パーツだつてタダじゃないんだ。橋本君の苦労を考えてやれ。というわけで君さえよければ使ってくれ」

「そりやもう、一人でもありがたいよ。バイト代だったらどうにか工面するから」

「いいよいいよタダ働きで。コイツお金とか物とかガ○プラが絡むとがめつくなつちやつてさ」

「私の意志は無視ですかー」と轟雷。

「ま、二人とも精々頑張るのね。当日は私もお客として来るから」

「あれ？ステイレット達は出ないんですか？」

轟雷は意外そうな反応をする。当然ステイレットの方も出ると思っていたからだ。

「すみません。私達はその日用事があつて……」とイノセントイアは頭を下げた。ライの方は「私はそういうのは苦手だから」と逃げた。出たら姉のレーフがいびつてくるだろうなという予想もあったが。と、ステイレットの方は。

「自由参加なんですよ？私みたいな性格は接客には向かないわよ」

それが彼女の言い分だ。が、彼女のマスターであるヒカルは残念そうな声をつい出してしまふ。

「え？出ないのかお前」

「え？な、何よ。マスターも私に出て欲しいわけ？」

「そりやな……いや、無理にとは言わないけど……」

「ステイレット。ヒカルの奴、お前のメイド服姿が見たいんだつてさ」

黄一が意地悪そうに言う。ヒカルが「言うなよ！」と慌てるが

「……ふーん。……マスターがそう言うんだつたら、やってあげようかな……仕方ないから、そう、仕方ないからよ」

満更でもなさそうな顔をするステイレットにヒカルは安堵する。

「あ……そつか」

「……特別なんだから。感謝してよね……」

ステイレットの方もヒカルが自分に興味を持ってくれてる事に嬉しくなる。

「そう。皆には感謝する。私も裏方で協力する」

アーキテクトが託すように頭を下げた。

「何言ってるんですかアーキテクト。あなたもでるんですよ」

「否定する。需要が解らない。私のこのコミュニケーション能力では接客には向いてない」

「いや、いいんじゃないか?」

そう言ったのはヒカルだ。

「その無口、無感情キャラだから受けるってのはあると思うんだ。それ独自の需要ってのはあると思うぜ。まさにアンドロイドって感じだしな」

「否定する。世間一般の接客用アンドロイドの性格はこれと関係ない」

「それに、ロボット部の看板娘だろ。一番紹介にはうってつけだと思  
うぜ」

「……そうだなあ、やってみるか?アーキテクト」

「マスター……」

「お前は気遣いもちやんと出来る奴だよ。いい機会だからやってみよ  
う」

「……マスターがそう言うなら……。私は従う」

自分は人間の為の人形。そう言いたげにアーキテクトは答えた。  
結果としてその場にいた全員が出演を了承する事となったわけであ  
る。

そして翌日、大輔はこの事を担任に提案する。メイド喫茶の手伝い  
ならと了承してくれた担任は、クラスメイトに提案と紹介。確認を取  
るべくFAGを学校に呼ぶ。そしてFAG達は大輔の手伝いとして  
紹介され、皆の了解を取る。

滞りなく済んだFAG達は衣装の確認を行う。前にロボット部が  
FAGに着せていたという衣装の流用だ。

「いやいや、着てみたけど綺麗に残ってるじゃない」

ロボット部の部屋にて、レーフの感想はそれだった。箱の中身は数  
着のメイド服。ロングスカートの物が数着。他にも数種類の衣装が

数点。

「ロボット部全盛期の時はFAGが普及する前の時代だった。だから部員全員がFAGにメイド服を着せて、ロボット部のみでメイド喫茶を出し物としてやっていた年がある」

「とはいえ、一般的なメイド服とはいえ、ちよつと地味ね。もつとミニスカタイプとかあつても良さそうなものだけど」

「ステイレットはそういうのが好きですか？」

「やっぱりそれがヒカルさんに好みですか？」

「勝手な憶測をしないで！ていうかやつぱりつて何よ!!」と轟雷とレイシアに対してステイレットは頬を染めながら返した。

「甘いわね。メイド服にミニスカートで露出過多なデザインなんて邪道よ」

レーフがその発言に割って入る。

「元々メイドという者はハウスキーパー、家政婦故に肌の露出は最低限でなければならぬわ」

そう言つてレーフは一番目に着たロングスカートをひるがえした。

「まあ確かに家政婦が露出多めじゃ不味いですかね」とレイシア。

「あらレイシア、あなたも解る？やはりメイド服は肌を見せないこそが至高という物よ。最近のメイド喫茶やアニメの媚びる事に特化し過ぎたデザインは、品も清潔感も劣るとしか言いようがないわ」

そう言つてレーフは私物であろうアクセサリを数点つける。

……が、その装飾に他のFAGは注目させざるを得なかった。

「レーフ……、髪型はともかく、なんで眼鏡なんですか」

「気合い入ってますね……」

レーフのメイド服姿は髪を一つのお団子状にまとめしており、その上からシニヨンキャップで髪にカバーをかけている。いつもの片目隠れの前髪はヘアピンでサイドに寄せている。そして眼鏡をかけており、厳しい印象のあるメイド長と言った感じだ。

「レーフさんつて、もしかしてコスプレ好きですか？」

「何よレイシア。ファツション好きと言いなさい。アマチュアとはいえ飲食店なんだから清潔感第一でしょ？」

他の皆も着終わった様だ。レーフが周りを見渡すと、それぞれ轟雷達もロングスカートのメイド服を着た。

「何だか新鮮ですね。パーツを接続する部位が全部隠れちゃいます」

轟雷が軽く笑いながら言う。轟雷のマスターは黄一だ。マスターが男性だと、こういった服を着る機会は少ない。

「でもやっぱ露出多い方がよかったかもね。この上からパーツを接続するんだからむしろ露出は多くても困らないんじゃない？」

そうステイレットが言う。FAGのパーツやコード接続部は背中、胸の中央、尾てい骨の部分と多い。それ以外にもアタッチメント式で追加が可能だ。

「まあ当日は着方も変わるかもね。で、アーキテクトは？」

残るはアーキテクトその人だ。一番彼女が頑張らなくてはいけない立場。彼女が着なければ話にならない。

「着用は完了した」

そう言っただけアーキテクトは衣装を全員に見せる。結果的に言っただけベストチョイスと言っただけいい着こなしだった。トウニカと呼ばれる黒いワンピース状の服、頭を覆うベール。ただ惜しむらくはそれが……

「ってなんでマスターの着る修道服なのよ!!」

メイド服でなくマスターの着る修道服だった事だ。

そしてtake2。気を取り直してアーキテクトが身に着けたクラシックメイド服を披露する。パールがかった銀髪にメイド服は非常に似合っただけ見えた。

「あら、堂に入ってるわねー」

「皆、衣装は決まったかい？」

そう言っただけ大輔の様子を見に部室に入ってくる。ヒカルと黄一も一緒だ。

「マスター」

「良く似合うよ。アーキテクト」

「マスター……感謝する」

「本当だな。このクールって感じがまさにプロのメイドさんって感じだ」

「ちよつとマスター！アーキテクトだけ!? 私達はどのようなのよ！」

ヒカルの言葉にステイレットが食って掛かる。ステイレットにとつては彼に一番見せたいのだろう。

「お。お前も良く似合ってるぜステイレット」

「当然よ。もっと褒めなさい」

「ヒカル、毎度ながらノロケンなよ」

「っ！そんな事ねえよ！」

「とりあえず僕の方もロボット部の宣伝用パーツを作ってみたよ。アーキテクト。つけてみてくれないか」

そう言つてアーキテクトは大輔に従いながらパーツを装着する。メカニカルな足と背中に装着された中継ユニットを経由して腕の外側にサブアームが取り付けられる。（装着の為に服の背中は開いてる）

「んっ」

アーキテクトは手足を動かして確認。純正のFAG用のパーツではないが、スムーズに動く事が出来た。

「問題ない。正常に稼働している」

「じゃあこれはうまく持てる？」

そう言つて大きな重りをアーキテクトの前に置いた。持とうとしたアーキテクトだがうまく持ち上がらない。

「うまく持てない」

「パワーが足りないな。改良しないと……」

「これから更にいじるのかよ。もう十分に見えるけど」

見守つていたヒカルが言う。

「いやいや、色々な料理を乗せたトレイを掲げるからね。これ以上のパワーは必要さ。飛べるパーツも自作したいけど、流星に時間が足りないな……」

「こればっかりは市販パーツで代用するしかないだろう」

「そうだね。キラービークを使えば……」

ブツブツと改良点を呟き続ける大輔だ。分厚い眼鏡の所為で瞳は見えない。が、横側から覗くその眼は真剣そのもの。時間は無い上に。これを人数分揃える必要があるわけだ。

「バイト代とか言わなきゃよかったかも……」

轟雷は大輔の自作パーツにかかっているであろう費用を考えながら、若干自分の軽率な発言を後悔した。

「……」

そして悩む大輔、アーキテクトはそれをじっと見つめていた。

そして土曜日、いつもの模型店で轟雷達は接客の練習となる。丁度模型店に喫茶店型のコミュニケーションスペースがある為に練習にはうってつけだ。メイド服を着て練習となる。

「有難うございました。またお越しください」

アーキテクトは普段と変わらない表情と動作での接客の練習をしていた。しかしやはり淡々とした動作は温かみを感じにくい。

「あーん？なんや姉ちゃん。客に対してスマイルも満足にできひんのかあ？ああん？」

それをなじるのはグラスサンを付けた呼んでも無いのに来た客役のライである。当然姉のレーフが黙ってはいない。

「お客様あ、当店は暴力追放店となっております。……なんで呼んでもいないのに、来たのかしらあなたはあ」

捕まえた猫の様に首筋をつまんで持ち上げるレーフ。

「にゃーん……。いや暇だったんで」

「そんなにメイドがやりたいのねライ。それとも口を瞬間接着剤でくっつけて欲しいのかしらあ」

冷たいレーフの声。しかし怒りの感情だけはライも十分伝わった。「にゃんぱらり!!」と叫びながらライは暴れ脱出し、そそくさと逃げていった。

「全く……んーやっぱ動きと表情が硬すぎるわね」

と、切り替えてレーフはアーキテクトの動きをそう評した。

「問題は無いんじゃないですか？クレーマーが来ても動じないのは解



りましたから。後ヒカルさんもこのキャラがウケるって言ったじゃないですか」

「レティシア。マスターの言ってる事は無視していいから……」

ステイレットは恥ずかしそうにそう言う。

「そうはいつでも接客なのよ。礼儀作法はしっかり身につけておかないと、それに……いい接客をすればあなたのマスターの為にもなるという物よ」

「本当にメイド長って感じですねレーフ」

「……私は続ける」

コクリと頷きながらアーキテクトは言った。大輔の為、というのが決め手だ。

「それはそうとちよつと休憩いれましょうよ。バッテリーが持たないわ」

「んー……そうね。結構時間経ったし休みましょう」

そう言つて全員、店内型スペースにて充電君を變形させた椅子に座り充電を開始。轟雷、ステイレット、レティシア、レーフ、アーキテクトの計五人がメイド服を着ていた。

「ふう……、それにしてもアーキテクトの持ってきた花のおかげかしら、いい香りだわ」

そう言つてレーフはスペースの外を見る。前回と違い、鉢植えに植えられた赤い花が目に入った。細い花びらが目を引く。

「本当ですね。落ち着きます」

「あれはガーベラ。データ取得済み。キク科、ガーベラ属の総称。温帯地域に分布。フラワーアレンジメントやアロマでも使用されることが多い。花言葉は前進、希望……私が育てた」

「あなた、花が好きなのね」

「肯定する。花は好き。……会話しなくてもコミュニケーションが成立するから」

「ええ、そういう理由ですか？もつと綺麗とか、いい香りとか単純な理由じゃないんですか？」

「当然それもある。それぞれの薬効は興味深い。花だけでなく、同じ植物から作られたお茶や紅茶にも興味がある」

「お茶ですか。飲食の出来ない私達にはどうにもピンと来ない話です」

「無言でも何が出来るかをしっかりアピールしている。植物は興味深い」

「そうなんだ。それはそうと……あなたはマスターの事をどう思っているのかしら」

ステイレットがそう問いかける。気になっていた。彼女がマスターに対してどう思っているかを。

「……前にも言った、好意に値する。と」

「恋愛感情があるんじゃないの?」

そう聞くステイレット。アーキテクトは黙りこむ。

「……意味がない。人間とFAGの立場は対等ではない」

「……って事は好きなんだ」

否定の返事ではない。ステイレットがそう聞くと再び沈黙。

「私もね。マスターの事は好き。もつと一緒にいたいって思うわ」

「記憶している。あなたのマスターは、あなたに面倒を見てもらっているのどちらが主人か解らないと」

「誰から聞いたのよそれ……」

まあ当たってるけど、とステイレットは内心想う。

「私も……あなたに聞きたい。マスターは今パーツ製作で苦労している。……あなたのマスターが何か壁に当たった時に何かマスターにしてあげた事は無いか? 私に出来る事があるのならそれをしてあげたい」

「あなた……」

無表情の裏、そこにあるマスターへの想い。それをステイレットは感じた。ステイレットは考える。自分のマスター、ヒカルが何か壁に当たった時は、特にやる事は変わらない。家事をして、マスターと同じ部屋で寝て、傍にいてあげる位だ。

「私の場合は精々コーヒー淹れてあげた位よ。今回みたいに落ち着く

花とか部屋に置いてあげたら?」

「既に実装している。部屋に空気清浄用の花を置き、お茶を淹れてあげる位しか出来ない……」

「十分じゃない。大丈夫。後は傍にいてあげるだけでその人の為になる物よ。むしろこっちが教えて欲しい位よ。アイツつたら普段何も考えてないんだから悩みも何にもないもの」

「そう……」

「でもあれですよ。やっぱり笑顔とか見せた方がいいんじゃないでしょうか」

そこにいた全員が思っていた事がそれだった。接客に関しても、マスターに対してそれが出来れば万時うまくいくと思っていた。

「いや、そうは言いますけどレティシア。人には得意不得意って物が……ああうん」

言うべきではないと思っていた言葉、それを出してしまった轟雷は気まずそうになる。

「精神的ダメージを確認。だが撤回の要求はしない。……私もマスターに笑顔は見せたいから。実は私も気にはしている。こう見えて毎日鏡に向かって笑顔の練習は欠かさない」

「でも表面的な笑顔にはまだ至っていないのね……」

「普段使わない部位を使うのは負担も大きい」

「とりあえず見せて下さいよ。こんな可愛い女の子の笑顔なんですもの。変な顔になる筈がないですよ」

「了解した。では披露する」

アーキテクトは、精いっぱい笑顔を見ている轟雷達に披露した。しかし見ていた轟雷達の表情は、苦虫でも噛み潰したかのように渋くなる。

「……うん。やっぱりいつものままでいて」

「精神的ダメージを再び確認。失礼な」

ep14 『大輔と量産型アーキテクト』（後編）

「まいったな。部品が足りなくなった……」

その日の夕方、大輔の家にて、机に向かって作業をしていた大輔は、頭をかきながら呟いた。彼の自室は部室同様に機械とメモ書きであふれている。違いは日当たりが良く、明るいという事、そして空气清新にアーキテクトの育てている観葉植物が置かれていた位だ。

「マスター……これを」

と、ギガンティックアームズを装着したアーキテクトが、ハーブティーを乗せたトレイを持ってくる。二人の間ではありふれた光景だ。

「おつ、有難うアーキテクト」

ハーブティーを飲みながら大輔は一息つく。作業に没頭して、暫く腹に何も入れてなかったからだ。予想以上に喉が渴いていた。

「味と香りが違うね。新しい奴かな」

「今日のはハイビスカス。主成分はクエン酸」

「いい酸っぱさだよ」

アーキテクトは窓を開けて換気しようかと考えるが、風が出ている為、部屋の窓は開けられないなど考える。小さな部品が飛んでしまつてはいけない。と、外の様子を見るとそれぞれの木々が赤く黄色く鮮やかになっていた。大輔もそれに気づいたようだ。

「あまり気にはしてなかったけど、外の紅葉も進んでるな。アーキテクト、買い足しついでに散歩でも行くか」

何かマスターと話す話題が欲しかった。向こうから話を振ってくれたことに嬉しくなるアーキテクト。

「……はい」

アーキテクトはギガンティックアームズから分離。飛ぶ為の装備、キラークロスを装着。背中に飛行用の翼のようなフォルムが追加された。そして外に出る二人。

「綺麗だなあ」

アーキテクトを連れて大輔は近所のパーツ屋へと足を運んでいく。

車道の両脇、歩道との間にはイチョウの並木が植えられており、コンクリートの道路を金色に彩っていた。

「マスター……一人での製作、辛くはない?」

大輔の隣、キラードビークを装着したアーキテクトが聞いた。二対の大きな羽根はまるで童話の妖精の様なシルエットを形作っていた。

「全然、久しぶりにやり甲斐のある事が出来てうれしい位さ」

「そう……」

「アーキテクトの方はどうだい?他の黄一君達のFAGとも仲良くなれたかい?」

「はい……。久しぶりに気分の高揚を確認」

「そっか良かった。先輩の連れていた皆とも会えなくなっちゃって、気にしていたみたいだからさ」

「マスター……マスターは私の思ってる事、何でも知っている」

「?なんかそんな気がしていただけだよ。それに、マスターってそう言うもんだろ」

「……私の周りのFAG達は私の表情を理解していない」

「ああそっか。前もそんな感じだったからな。辛くはない?」

「不安だったら少しだけある。笑顔が出来ない。うまく接客の上で意思の伝達が出来ないのが不安」

「前の部活の時もそんな感じだったなあ」

ロボット部の時もアーキテクトは笑う事が出来なかった。浮いていたというわけではないが、逆に目立ってはいた。

「あの時はそれでも楽しい時だった」

「メイド喫茶の手伝い。不安かい?」

やりたくないなら降りても大丈夫。そう大輔は思う。が、

「少し思う……。でもマスターの好きなロボット部を潰したくはない。それに……仲間のFAGとの共同作業はやはりASが高揚する」

「楽しいんだね。有難うアーキテクト」

「……こういう時に笑顔で返したい」

表情は変わらない。しかしアーキテクトの気持ちは感じた大輔だった。紅葉したイチョウの舞う中を進むアーキテクト、自然という

有機物の中を進む彼女を見て、何とも言えないノスタルジックさを感じる。

「笑顔は無くても君は十分可愛いよ」

「っ?!」

その大輔の何気ない発言。アーキテクトは動きが固まる。動揺してるのは大輔以外でも解った。

「あ……花屋を確認。パーツ屋に行く前にこっちに寄っていきたい」

顔を赤らめたアーキテクトは、ごまかす様に目についた花屋に入って行った。「ああ待てよ」と大輔も後を追いかけていく。店に入るとさつきまでの寂しい色合いはどこへやら、様々な色の花が青々と生い茂っていた。

「ここは季節感関係ないなあ」

「そんな事はない。季節の旬という物は常に変化している」

店内を素早く飛び回るアーキテクトはそう答える。淡白な物言いでも、興味を強く持っているのが解る飛び方だった。大輔も興味ありげに店内を見回す。

「ん？随分とこの花束、作り物っぽいな。造花か？」

「データ取得済み。それはシャボンフラワー。石鹸で作られたフラワーギフト」

「へえ、そういうのがあるんだ。本当に花が好きなんだね」

そう言う大輔に、アーキテクトは「うん」と答えた。彼女の小さな変化も見逃さない大輔だ。彼にはアーキテクトが嬉しそうに店内を飛び回っているように見えた。

「好き。言葉で伝達しなくても伝えられるから、黙っていても皆が綺麗とか可愛いとか褒めてくれるから……正直羨ましい」

「ママ見て！綺麗な妖精さんが飛んでる！」

「っ?!」

別の客である女の子の指摘にアーキテクトは驚き固まった。

「ハハハ。いるじゃないか。君を普通に褒めてくれる奴」

「あ……行こうマスター」

顔を真っ赤にしながらアーキテクトは出ていく。大輔もそれを追

いかけた。

そしてまた日は流れて。いつもの模型店でいつものFAG達といつものマスター達。そしていつものコミュニケーション用スペース。「完成したぞー！FAG用パワードスーツ！とりあえずテストとしてつけてみてくれ！」

大輔が完成させたボディは内部機構の露出したボディだ。構成自体は轟雷達がつけている追加のアーマーと似た様な物だったが。

「これはまた武骨な……まさにロボットって感じだぜ」

装着したアーキテクトの姿にヒカルは思わず感想を漏らした。

「M・S・Gのコンバートボディを参考に作ってみたんだ。どうかな」装着したアーキテクトは重りの乗ったトレイを軽々と持ち上げる。動きも軽快で以前とは雲泥の差だ。

「問題ない。これなら複数人の注文でも一度に運べる」

「良かったあ」

「マスター、お疲れ様」

そうやってねぎらいの言葉をアーキテクトはかけた。大輔の目の下にはクマが出来ている。かなり負担になったのは見守っていたアーキテクトには理解していた。

「そう言ってくれると僕もやった甲斐があるもんだよ。と、アーキテクト、これも作ってみたんだけど……」

そうやって大輔はある物をアーキテクトに手渡す。形状はメカニカルな頭をとりつけたハンドパペット。

「これは？」

「翻訳機能をつけたハンドパペットだよ。アーキテクトの思った事を言葉にして話してくれるんだ。アーキテクトの意思疎通の手助けになつてくれればいいかなと思つてさ」

「マスター、感謝する」

「アーキテクト、大丈夫なんですか？なんか怪しいとも思えますが」

と、轟雷がそう言った瞬間、その時パペットの頭部の目が光った。「あ、光った」と誰もが思ったその時、

『うるっさいなあ。マスターの苦労も知らないで』

と、ガラの悪くなつたアーキテクトの声が響いた。パペットからだ。

『眼の下のクマを見てみなよ。マスターがどれだけ夜更かしして作つたと思つてるの?』

「っ!？」

アーキテクトの表情が曇る。戸惑いの表情。その場にいた全員が見た事のない表情だった。そこまで強い感情という事だ。

「喋つた、つていうかあんな表情できたんだ……」

そうステイレットが言うのと再びパペットの目が輝く。

『ステイレット。マスターの事好きって言つたよね。……私もマスターがだーい好き。でもさ。人間とFAGじゃ結ばれない。……ヤダよ……そんなの』

「っ!っ!」

アーキテクトは必死になつてパペットを外そうと掴む。が、手に接続されておりパペットは外れない。表情がどんどん焦つてくる。

『マスター!私マスターの事愛してます!ずっと傍にいさせて下さい!結婚できないけど!赤ちゃん作れないけど!寿命は私の方が短いけど!ずううーつと尽くしますから!マスター大好き』

パペットが言い終わる前に『ぐしやつ』という音を立てて、声を発していた頭部は破壊された。アーキテクトが取り付けられたサブアームでパペットの頭を握りつぶしたのだ。

「……」

彼女の全身はわなわなと震えていた。大輔には、その場にいた全員がその理由を理解していた。

「アーキテクト……ごめん……」

「……つく。うう」

ボタボタと大粒の涙が落ちる。アーキテクトの涙だ。ASの中で満たされたであろう恥ずかしさに嗚咽するアーキテクト。大輔も「やらかした」と判断し、謝るしか出来なかつた。直後にアーキテクトの顔が大きく歪む。隠してた感情は満ちると同時にあふれ出した。



「ううつつ！う　えええー　　んっ！！う  
わああああー　　っつ！！」

ガクツと膝をつく、周りもはばかりらずに、アーキテクトは小さな子供の様に泣き出した。轟雷達にとっては、いつもの冷静な彼女とは余りにもかけ離れた姿。その場にいた全員が、彼女に声をかける事は出来なかった。

その日の集まりはそこで終わりだった。空気は台無しとなつてしまい、結局その後大輔はアーキテクトを連れて帰るしかなかったからだ。帰ってきた後、大輔はアーキテクトが気になって作業が手に付かない。というか何もする気が起きない。アーキテクトの方も大輔と顔を合わせづらく、別の部屋に閉じこもったままだ。

「……駄目だ」

ベッドに寝転びながら理系関係の本を読み続ける。時間潰しだが、どうにも気晴らしにはならない。アーキテクトのつけたパペットの言った「愛してる」が耳に残る。

「……マスター」

と、部屋のドアがいきと少し開くとアーキテクトが入ってきた。部屋は薄暗く、廊下は逆行となっている為、アーキテクトの表情は確認できない。

「アーキテクト……その……」

大輔は上半身を起こし、昼間自分がした事を謝罪しようとするが。「マスター……マスターの製作物を壊してしまいました。ごめんなさい」

大輔の言葉を遮る様に、頭を深々と下げてアーキテクトは謝る。

「いやあれは」

「昼間のあれは、ただの間違い。ちよつとした設定ミス。忘れて……」  
そう言つて部屋を出ていくアーキテクトを大輔は追いかけてようとベッドを降りる。

「待つてくれよ」

「来ないで!!」

アーキテクトが叫んだ。普段の冷静な様子からは想像も出来ない姿だった。

「今はマスターは大事な時期。部活の宣伝だけに集中して、私もそうするから……私、頑張る」

遠まわしに拒絶する様に言っただけでアーキテクトは部屋を後にした。大輔は黙ってそれを見守る事しか出来なかった。

翌日の学校にて、大輔はヒカル達にこの事を相談する。

「そりゃ災難だったとしか言えないな……」

同情する様にヒカルは言った。黄一がそれに続く。

「アーキテクト本人は？」

「一応練習には出ているけど……、正直このままでもいいとは思えなくて」

このまま練習をさせるべきか、それとも取りやめるべきか。大輔は悩んでいた。アーキテクトと生活を続けてはいたが、こういった展開は今までにない。

「FAGだとしても、対応は人間と変わらないだろ。……時間を置いて話し合うしかないな」

「でもさ、文化祭まで時間が無いんだぞ。どうにか両立する方法はないもんか」

「それだけどき。……文化祭の手伝い。やめようかと思うんだ」

大輔のその発言に「え？」と声を上げる二人。

「いやさ。結果的にアーキテクトを傷つけてしまったのは事実だ。……そんな事をしてまで宣伝をしていいとは思えなくてさ……。無理をしているんじゃないかって思うんだ」

昨日の拒絶のされ方に大輔はアーキテクトが読めなくなっていた。というか不安になったのだ。

「大輔……。お前さんいつも表情は解るのに、そういうのは解らないって感じだな」

「……その通りさ。解らない。今まではそんな事なかったのに」

「……その考えはさ。アーキテクトの気持ちをないがしろにしてない？」

大輔の言葉を遮る声の一つ、どこだと周りを見てみると、空いた窓から入ってくる人影、否F A G影が一つ。フル武装のステイレットだった。

「ステイレット？どうしたんだよこんな所まで来て」

「アーキテクトが練習に身が入らなくなったと思ったなら案の定よ。大輔さんに、昨日の後何があったか聞こうと来てみたらってわけ」

聞く手間が省けたわとステイレットはぼやいた。

「それだけでここまで来たのかお前」

「……いいでしょ。そういう気分なんだから」

本当はアーキテクトがマスターに対して恋愛感情を持っているのをステイレットは知っていた。だから自分と重ねてしまい、気になって来たわけだ。ステイレットは大輔の視線まで飛ぶと口を開く。

「アーキテクトはね。自分に出来る事を必死にやってるのよ。あんな恥までかいて、それでも必死に自分の役割を果たそうとしてる」

「……それで、このまま続けていてもアイツの為にはならないと思って」

「それで取りやめたらそれこそアーキテクトの為にはならないわ。ましてやアイツの気持ちを理解してるって事にはなるわけない」

「それは……」

「ねえ、これで何かアーキテクトに罪悪感みたいなのがあるんだったら、何度拒絶されてもアーキテクトと向き合っただけよ。だってさ……」

アーキテクトは大輔さんの事が好きだから、そう言おうとするステイレットだが、その言葉は飲み込む。言えない理由は、アーキテクトの気持ち自身が自分にも当てはまるだけに、本人に知られた事がどれだけ辛いか自分も理解していたからだ。

「……信頼してるんでしょ？アーキテクトの事。アイツの気持ちが解ってるって思ってるんなら、ここで向き合うってのは愛してるとか以前の問題の筈よ！」

「ステイレット……」

自分のヒカルへの気持ちを肩代わりする様に、真摯にステイレットはアーキテクトの為に伝えた。だからか、大輔の気持ちにもそれは突き刺さる。

「……僕は」

アーキテクトとの信頼関係、いつだって自分に寄り添ってくれた。「そうだね。僕は技術者だ。失敗したって何度も立ち上がってきた……それをずっと傍で見守ってくれたのがアーキテクトだったのに……やってみるよ。僕」

ここでやめたらアイツは泣き続けるだろうし、僕もきつと後悔するだろうから……。そう少年は思い、アーキテクトの事を考えた。

そして大輔の自宅にて、今日は部活をせずに帰宅。こういう時は部員一人というのは都合がいい。調子の悪かったアーキテクトは途中で家に帰されたとの事で、大輔は家に帰る事となる。

「アーキテクト……いるか？」

フロアリングの廊下でアーキテクトと行き会う大輔。

「あ……おかえりなさい。マスター」

まず話したのはその一言だけだ。顔色等で誰が見ても調子が悪いと言うのは解った。なんとというか、昨日までは動きは控えめでも健康的な印象ではあったのだが、今日はどうにも病的な印象がある。

「アーキテクト、話がある」

「……拒否する。今は調子が悪い」

そう言つてアーキテクトは自室に入ると戸を閉める。部屋の中は簡易的な植物室。空き部屋を利用したアーキテクトの趣味の部屋だ。FAGが人間の個室を一つ使えると言うのはかなり珍しい。

「だったら僕の一方的な独り言だ。聞き流したっていいよ」  
「……」

ドア越しに聞いているアーキテクトは黙る。大輔は肯定と判断。話を続ける。

「正直さ。文化祭の手伝い、やめた方がいいんじゃないかと僕は考え

てる」

『っ！マスター？』

「結果的に君を傷つけてしまったからだ」

『否定する。それでは部活の宣伝が出来ない。宣伝できずに部活が存続出来る可能性は……』

どうにか考えを改めさせようとするアーキテクト。ほんの少し、彼女の声が大きくなっているのは、やはり焦りの感情だろうか。

「解んないんだよ。ここでどうするのが正解か。……今まで、君の気持ち解ってるつもりでいたつもりでいた。……つもりだったんだ」

『マスターは……よく解ってくれてる……』

「でも君の気持ちを解っていたのはつもり、ただの予想だった」

『……』

「アーキテクト……君は、花は言葉が無くても伝えられるって言うてよね。それが羨ましいって。僕はそれじゃ嫌だ。花と違って、君の言葉が聞きたいんだ。君と話がしたい。知りたい。聞かせてくれ。アーキテクトの言葉を」

『……マスター……私……』

それからすぐに、キィと扉が少し開くとアーキテクトが出てきた。目じりに涙を浮かべながら……、

「マスター……私も……皆と出たい。……不安も本当だけど、やりたかって言ったのは本心だから……」

「アーキテクト……」

その顔を、そしてその言葉を聞いただけで安心できた。アーキテクトは差し出された大輔の掌に飛び乗る。同じ目線で向き合う二人。

「……変だよな。部活の宣伝がしたいって思っていたのに、君が傷ついた途端にその気持ちが萎えた。そして君がやりたかって言った方がやる気が出ていた」

きつと僕もお前を……。と続く言葉を大輔は飲み込んだ。越えられない壁を大輔は理解していたからだ。だから別の言葉で続ける。

「二人で、僕と君で話し合っって決めよう。どう手伝うかさ。君が楽しかって思うメイド喫茶にしたいんだ」

と、大輔の頭にある事が思いつく、アーキテクトが楽しんでくれる  
「仕様変更？ マスター大丈夫？ あまり時間はない上に元々私達の立場  
は手伝い」

「大丈夫だよ。君が好きな事を、ロボット部の華である君を伝えたい  
んだ」

そして文化祭の日がやってきた……。

「わが眠りを妨げる者は誰だー」

暗い教室の通路内でミイラ男。全身包帯ぐるぐる巻きとなったヒ  
カルが客である子供数人のにじり寄る。

「……」

詰め寄られた子供達は意にも介さず、ヒカルのスネを蹴った。

「いつてえ!!」

「その包帯トイレットペーパーじゃん!! 安っぽいのー!!」

そう言いながら小学生の悪ガキ共は逃げていく。

「くー。最近のガキはー!!」

「災難だなーヒカル」

蹴られたスネをさするヒカルにのっぺらぼうが近づく。不意打ち  
同然だった為ヒカルは大声で叫んだ。

「っ!! うわあぁっ!! ……って、なんだ黄一かよ。のっぺらぼう顔でい  
きなり来るなよー」

そう言われたのっぺらぼう。黄一はマスクをずり上げ見慣れた表  
情を見せた。

「その辺の客より驚いてんなお前。休憩時間だつてよ」

「あーもうか。なんか食べるかなー」

「俺もそうだから付き合おうよ」

そう言われたヒカルと黄一は指定衣装の上に上着を着て廊下に出  
ていく。暗い教室にいたわけだから、昼間の光がひどく眩しい。

「で、どうなったかな。大輔達の手伝ってるメイド喫茶」

自分達のFAGも手伝ってる、というのも気になる要因だ。二人は  
飲食ついでに隣のクラス。メイド喫茶に入って行った。

「お帰りなさいませえ。ご主人様あ」

と、出迎えたのはメイド服と薄化粧をしたステイレットだ。満面の笑顔で出迎えるがヒカルの顔を見るや否や、何時もの顔つきに戻った。

「って何よマスター達じゃない。そっちの方は順調なわけ？」

「こっちは休憩時間だよ。何か食べようと思ってさ。な、ヒカル」

同意を求める黄一だが、ヒカルからは返事がない。ステイレットの方をじつと見ていた。

「あ……」

「ふふん。どう？ 私達の魅力に見とれちゃっても知らないわよ？」

ポーズを付けながらステイレットは言う。何時もの様にヒカルとの軽いやり取りになるかとステイレットは思ったが、ヒカルの反応が無い事に違和感を覚える。

「？……マスターどうしたの？」

「……綺麗……だな」

そう一言だけ呟いた。言葉の様子からして茶化す様子は一切見られない。その反応にステイレットも意識をしてしまう。

「え……？ な、何よ。褒めても何も出ないわよーだ」

「化粧したんだなお前」と黄一。

「手伝ったFAG皆がね。女子生徒の人達がノリノリでやってくれたわ。マスターもノックアウトなんて自信ついちゃうわ」

「で、大輔とアーキテクトは？」

「あそこよ」とステイレットが指をさす。メイド服を着用し、キラークビークを装備したアーキテクトが教室内を飛び回る。

「あれ？ 前に見せたロボットパーツを装備してないぞアイツ」

「宣伝用のロボットパーツは外したよ」

聞き慣れた声、声のした方を向くと……。見慣れない少年がいた。メイド喫茶に合わせてか。ウェイター衣装を着ている。くせ毛だがツリ目でもの凄い美男子だ。

「……どちらさん？」

全員思い当たる顔がない。代表しての黄一の発言。

「がくっ！いや僕だよ僕！」

ずっこける動作をして、少年は取り出した眼鏡をかける。見慣れた顔、大輔がいた。

「っ?!大輔!?お前あれが素顔なのか!？」

ホストかアイドルの様だった。世の中不公平だと思いつながら黄一は問いかける。

「アーキテクトがこういう時位コンタクトにしろって言ってさ。二人で話し合って決めたんだ」

「仲直りは出来たみたいだな。と、ロボットよかったのか?宣伝に使うって言ったのに」とヒカル。

「代わりにいくつかメニューを追加してもらったよ。アイツの得意なメニューをさ」

「ご注文のカモミールティー、お待たせしました」

アーキテクトが運んだのはハーブティーだ。「効能はストレス、貧血、冷え性、キク科アレルギーはありませんね?」と説明を続ける。

「ハーブティーか?」

「あいつ、お茶やハーブティーが好きだからさ。それを伝えようって二人で話し合って、クラスの皆と相談したんだ。さっき言ったように眼鏡を外す指摘もアーキテクトがね」

「お茶を追加したのか」

「それだけじゃない。周りを見てみな」

周りを見ると教室内の各所に花が置かれてる。アーキテクトが育てた物だ。『ロボット部進呈』という札が全ての鉢についていた。

「へえ。アーキテクトの育てた奴か。でもあれってロボット部の宣伝になるのか?」

「黄一君、ヒカル君が言ったろ。肩ひじ張らずにやるのが部活だってさ。それに見てみなよ。アーキテクトのあの表情」

説明を終えて「ごゆっくりどうぞ」と頭を下げ、アーキテクトは調理場の方に戻る。すぐにまた紅茶の入ったトレイを受け取ると飛んで行った。表情は相変わらずだが、挙動からしてなんだか楽しそうだった。



「新入部員も欲しいけどさ、あいつの笑顔がないとやっぱり寂しいから。あいつもロボット部の正式な仲間なんだから」

「いや笑顔って……やっぱり解んないって……」

とヒカルがツツコミを入れる中、親子連れの客に紅茶を運ぶアーキテクト。幼稚園児らしき子供がアーキテクトに興味を持ったようだ。

「店員さん可愛い、ケツコンして」

子供の客がプロポーズをかけた。最も意味は解ってないのは言った本人の様子からしてだが、

「ごめんなさい出来ません。だって私」

アーキテクトは大輔の真横に移動すると大輔の腕を掴み、体重を預ける様に体を傾けた。

「マスターの物ですから」

その瞬間にクラス内がざわつ……とざわついた。

「ア、アーキテクト？お前……」

「表情を変えるのは苦手だから、ボディランゲージを多用する様に決めた。マスターにしかするつもりはない」

戸惑いながら問いかけるヒカルにアーキテクトは淡々と答える。

「表面的な笑顔がなくても、アーキテクトはアーキテクトさ。二人で決めた事だからね」と照れ笑いをする大輔。

「そう、マスターも眼鏡が無くても変わらない。そして外すところなのに格好いい」

抑揚は無いが、傲慢するような口調で言うアーキテクト。

「……いいなあ」

それを若干羨ましそうに見てるステイレット。と、テーブルの上に立っている彼女に誰かがぶつかる。

「わっ!?!」

後ろから誰かが肩をぶつけてきた。自分と同じサイズという事はFAGかと相手を見る。そのまま相手はお構いなしに歩いていく。ステイレットが見た背中は、白いボディと膨らんだ肩アーマー、そして赤いツインテール。FAG『白虎』型だ。

「ちよつと!?!ぶつかって置いてノーコメント?!」

「……」

武装を付けてない素体の白虎は振り向いた。ステイレットを睨み、そして値踏みする様に見える。と、白虎は再び振り向くとテーブルから降りて行った。

「ちよつと！待ちなさい！」

ステイレットが追いかけてようとするが、轟雷達がステイレットの所に飛んでくる。全員がキラードビークを装備していた。

「ステイレット。まだ休憩時間ではありませんよ。サボらないでください」

「あ、皆、なんかさつき白虎型に絡まれたのよ」

さつきのテーブルの下を覗きこむが、もう白虎はいなかった。

「白虎型ですか？誰かのFAGででしょうか？」

「あー皆ー！こんな所にいたんだー！」

と、そんな時にエアバイクに跨ったスク水のFAGが一人、そしてマスターも一人、フレズヴェルクとそのマスター、華山健（タケル）だ。「フレズ！健さんも！」

「呼んでくれてありがとうございます」

「文化祭って楽しいね。こんなお祭り初めてだよー」

「健君の身体の方は大丈夫かい？」と黄一。健は病弱なので入院生活になりがちだった。

「最近調子いいから暫くは実家の方で暮らせますよ。また皆で直接遊べますね」と儂げな少女のような雰囲気少年は嬉しそうに答えた。

「そいつはめでたいな。と、俺達の出し物はお化け屋敷だけでも入ってみたかい？」と黄一。

「ええもう。驚きましたよ。子供だましかと思ったら最後にあんな仕掛けがあつたなんて」

感心する様に言う健、しかし黄一とヒカルには心当たりがない。

「ん？出口付近？」

「あつたっけ？そんなところに仕掛け」

「とぼけないで下さいよー。誰かが足を掴んで『行かないでえ……』っ

て言うんですもん。で、見たら誰もいない。どうやったんですか？あの仕掛け」

と、それを聞いた瞬間。黄一とヒカルの二人は固まる。

「……足を掴む？……知らないぞそんな仕掛け」

「確か……いや、なかった筈、あ、もしかしてまたFAGの仕込みじゃないのか?! 去年の肩を掴む仕掛けと似た手口じゃないか! な! 大輔!」

焦りながら大輔に問い詰める黄一。ビビってるのは丸解りだった。しかし大輔の方はキョトンとしながら答えた。

「? 肩を掴む? なんだいそれ?」

アーキテクトも大輔に続く。

「大体去年はロボット部はお化け屋敷に参加していない。そもそも、お化け屋敷において、体に触れる仕掛けはタブー」

「……じゃあ、今のって……」

青ざめる黄一。その後ろで子供達の悲鳴が響いて教室を飛び出す子供が数人。さつきヒカルのスネを蹴った子供達だった。

「なんだよ! あの仕掛け! 冷やかしてまた入ったら足掴んできやがって!!」

「舐めてたよ俺! 超怖かった!」

「……」と様子を眺めてる黄一の顔は青ざめて冷や汗でダラダラだった。……その後黄一が休憩時間が終わってもお化け屋敷に復帰せずにゴネまくったの言うまでもない。

「ヤダヤダヤダヤダヤダ!! 俺出るのヤダアアツツツツ!!!」

同時に、この年以降お化け屋敷は禁止されたのも言うまでもない……。

## ep15 『黄一と量産型轟雷』（前編）

季節は12月に入ろうと言う時期である。

「えへへー！ネット予約しちゃったー！新型のボクのビキニアーマーボディ！」

いつもの模型店において、FAG用のコミュニケーションスペースでフレズヴェルクの声が響く。今マスターの健（タケル）とはこっちで暮らしており、最近はおっぱらこっちの模型店で来ることが多い彼女だ。

「うわあ……そりゃ別に頼むのは自由でしょうけど、……すっごいわねこの衣装」

ステイレットがネットのカタログを見ながらビキニアーマーのデザインに戸惑う。名前の通り、腹部や胸の中央部が大きく開かれており、露出度はフレズのスク水の比ではない。

「なんて大胆なデザイン」

アーキテクトも淡々とだが言った。表情の変わらない彼女だけにこの言葉にどういった感情が込められているかは解らない。

「これが届いたら、マスターに見せたりVRで遊ぶんだー」

「あなたのマスターは小学生、教育の悪影響になる確率は……」

「いーの！ボクが買われた理由はマスターをドキドキさせるのが目的みたいなもんなんだから！本当言うよね、これと迷っただけで、さすがにこれは刺激が強すぎるかなって」

フレズが選ばなかったというボディは、バリエーション機、ルフスの褐色肌に合わせたスク水、なのだが褐色肌と同じ色のスク水なので、遠目から見れば全裸と変わらない。

「裸とどう違うのよこれ……」

「封入されてる箱のデザインからして卑猥。テープの位置が……」

「なんだよー。マスターを魅了したいって思うのはFAGの常識だろ？お前らは何かマスターに見せたい恰好とかないわけ？」

『え？』

そう言ったフレズにステイレットとアーキテクトの二人は考える。

まず口を開いたのはステイレットの方だ。

「別にそんなエッチな格好する必要はないわよ。最近マスターは期末テスト近いから私が教えてやらないといけないんだから」

「教える？FAGが高校生の家庭教師？」

ステイレットの発言に二人は怪訝な顔をする。どうもピンと来ない発言だ。

「別にそう言うんじゃないわ。一緒に教科書を読んでもらうだけよ。マスターだったらこういうの理解力はないからね、私が正しく解釈してあげてるってわけ。ただでさえテスト前日にならないとやる気すら出さないんだから」

ほぼ徹夜になっちゃうから大変よ。とステイレットは笑いながら言う。

「でもステイレットのマスターの場合。本音のコミュニケーションが取れて楽しそう。私のマスターはそういうのは無い」

「アーキテクトだってマスターには甘えてるんでしょ？」

「……」

若干恥ずかしそうにアーキテクトは身をくねらせる。文化祭の時に言ったボディランゲージ発言を、彼女は若干後悔している様だった。

「……しかし意外です。皆マスター恋愛感情を持つなんて」

と、完全に蚊帳の外になっていたFAGが口を開く。轟雷だ。

『え？そーお？』

三人揃ってそう答えた。

「だってそうじゃないですか。マスターに好意を抱くのはまあ当然として、恋愛感情までに至るのはレアケースと言われてますよ」

轟雷の言う通りだ。普通FAGがマスターと暮らしていると、FAGがマスターに抱く感情は大抵が家族愛になる。これは第二世代の試作型轟雷がマスターである女子高生との生活で、親子愛の様な感情、そして家族と言っていい関係を持った事に起因すると言われる。

「恋愛感情じゃないわよ。別に普通にしてるんだから」

「ボクは……よくわかんないや」

「かつての試作型轟雷達は異性との接触はあまりなかったとされている。私達が異性との接触で、別の感情を学習するのは当然の事」

否定するステイレットとフレズ、直接的ではないにしろ『愛してる』と公言したアーキテクトだけは普通に答えてくれた。

「なんか、そういうの最先端って感じがします。なんか羨ましいな」

「……別になりたくてなったわけじゃない。私はマスターと暮らしていたらなっただけ」

「私はマスターに恋してるわけじゃないけど、別になつてなくなつて問題ないじゃない」

バレバレにごまかすステイレット。

「私は試作型轟雷の様なFAGの可能性を広げるFAGになりたいんですよ。でもこれじゃ私は普通のFAGで終わってしまいそうで、なんだか嫌です」

「轟雷……」

ステイレットが若干心配そうに見つめる。思い込みが激しい所があるが、常識はある程度わかまえてるのが轟雷だ。その轟雷がこう言うのは今までにない。

「私もマスターと恋がしたいです！というわけで今日マスターにアップローチをかけてみますー！」

『え、？』

「恋をすれば私もFAGとして最先端になれるはずですよ！」

「ああうん。まあ頑張つて……」

恋愛トリオの三人はこう言うしか出来ない。こうなつた轟雷は止める事が出来ないからだ。

「というわけで皆！恋つてどういふものか教えてください！」

『ええ……』

そしてその夜、マスターである黄一の家にて、轟雷の自宅での生活は、一言で言うなら遊ぶ。だ。マスターとゲームやって、ネットで動画見たり、プラモ作つたりと二人で遊ぶ事が多い。平均的なFAGの

生活ではある。ホビーやペットとしての扱いが本来の用途だ。

「マスターあ……」

机に向かってテスト勉強している黄一に轟雷は声をかけた。期末試験が近い。

「なんだ轟雷、今はテスト勉強中だから静かにしてくれよ」

「いいから見て下さい！後ろですよ後ろ！」

「だからなんだ……っ!?お前……」

振り向いた黄一、ベッドの上の轟雷は素体の上から巫女装束を着ていた。

「勝利だ勝利だー。しゃんしゃん」

お祓い棒を両手で持って振りながら笑顔の轟雷、合格祈願のつもりだろうか。

「頑張れ頑張れマスター」

「轟雷……なにやってんだよお前」

轟雷の笑顔に反して、黄一の反応は冷めていた。

「気にしないでください！私の想いをマスターに届けたいだけです！」

そう言うとき轟雷は投げキッスの動作で黄一にキスを飛ばす。轟雷的にはイメージでハートを飛ばしたつもりだった。

「……そういうのはいいから、邪魔しないでくれよ」

それに対して黄一は手で払う動作で答える。イメージ的にハートは払われた。

「ああー私の想いが!!」と叫ぶ轟雷に、冷めた反応の黄一は気にもしないので、再び机に向かっていく。

「音出さなきゃいつも通り遊んでいていいから」

——そして数十分後——

「えーと……この英文が……」

「マスター、マスター」

「んー、なんだよ。勢いづいてきたのに……っ?!」

黄一が後ろを振り返ると、素体の上にワイシャツ一着だけの轟雷が寝そべりながらポーズをとっていた。裸ワイシャツのつもりだろう

か。

「疲れてない？私と一緒に添い寝してあげよう。私の魅力で深い眠りにいざなってあげるんだから」

そう言っただけはウイंकする。またもイメージでハートが飛んだ気がした。

「轟雷……お前何が欲しいんだ」

ウイंकで飛ばしたハートを再び手で払う動作の黄一。

「ああ！私の魅力……って何言ってるんですかマスター！私が何か欲しそうに見えますか！」

「見えるよ。もの凄く」

「んー、強いて言うなら今欲しいのは……マスターの愛……ですかね」

轟雷的にはしなを作る動作のつもりだったが、黄一の背筋には（ぞわっ!!）と擬音がつかんばかりに薄ら寒い物が走るだけだった。

「轟雷……あっ！お前！そうか！そうなのか！」

何か感づいた様な黄一に轟雷はやつと気づいたかと笑顔を見せる。

「気付きましたか！そうです！その通りです！さあ来てくださいマスター!!」

両手を広げて黄一を迎えようとする轟雷、しかし黄一はスマホを取り出して電話をかける。

「……もしもし！ファクトリーアドバンス社ですか!?!うちのFAGが変になってしまいました！この状況をどうすれば!!」

「っ!!異常じゃありませんよマスターアツツ!!」

必死な表情の黄一を轟雷は大声で止めた。

「で、どうしたんだよお前、本当に異常はないんだな」

「当たり前じゃないですか。熱を測らないでください。脈を測らないでください。失礼な」

額に指を当て、手首に指をあてる黄一に轟雷はふてくされながら答えた。

「私はですね。私の周りのFAG達が恋をしているから、私も恋をしようというのですよ」



「……は？恋？」

抜けた返事の黄一に轟雷は馬鹿にされた様な気がした。

「何ですかその反応は！あのですね！ステイレットやアーキテクトがそれぞれのマスターの事が好きなのは知ってるでしょう?!」

「まあな」と黄一。

「私もマスターと恋がしたいです！恋愛感情を知る事で私は高みを目指したい！試作型轟雷の様に皆に影響を与えるFAGになりたいのです！」

「お……おう」

ついていけないといった反応の黄一だ。

「そういうわけで私と恋をしましょうマスター！私こそがメインヒロインです！」

「いや、悪いんだけどさ轟雷。俺お前と恋愛って、どう考えても無理だ」

若干バツが悪そうに言う黄一に轟雷は「え?!」と愕然とした。

「お前と恋愛なんてどう考えてもイメージが湧かない」

「そんな……マスター、ひどいです……」

眼に大粒の涙を溜める轟雷。

「おい轟雷……?」

「それじゃ私は試作型轟雷の様な特別なFAGになれないじゃありませんか！」

「いや、そんな不純な理由で恋愛なんかしようとするなよ！もっと清いお付き合いを心掛けようよ！」

「マスターの……マスターの……馬鹿あつ!!」

そう言ってワイシャツを脱ぎ捨てた轟雷は武装を装着して部屋から出ようとする。しかしドアが閉まっている為に廊下へは出られない。

「……グスツ。マスター、ドア開けて」

「あぁうん」

「有難うございます……バカアーツ!!」

そう言つて轟雷は廊下へと飛び出していった。

「おい、夜なんだから外へは行くなよー」

痲癩を起こした轟雷に反して黄一は冷静なままだった。それはまるで恋人ではなく……。

翌日、轟雷は愚痴としてお馴染みのFAG達に事情を話す。

「というわけですよ！マスターは私の事なんだと思つてるんですか！」

以前ステイレットが愚痴つた時と同じ様に、バーの内装のコミュニケーションスペースにて、轟雷はカウンター席で愚痴り続ける。

「少なくとも恋人には見えないでしょうね」

「轟雷お姉ちゃんは見えない子供つて感じだよね」

「あなたが言いますかライ!!」

轟雷の愚痴を聞いているのはカウンター内のレーフだ。今日の衣装はバニーガールである。今日は集りが悪く、彼女とライ位しかない。

「ていうか今日はステイレット達いないんですか！一番愚痴を聞かせたい人なのにいないなんて!」

「フフ……久しぶりに来てみたら、荒れてるね轟雷……」

と、聞き覚えのある喋りと声だ。声のする方を見る轟雷、そこにいた赤いボディのFAGは、

「あ、迅雷じゃないですか!」

轟雷のバリエーション。迅雷だ。

「お久しぶり……。最近出入りする人が増えたみたいだけど、今日は来てないみたいだね。残念だよ」

バトルしてみたかったのに、とぼやく迅雷、彼女は強いFAGを倒して名を上げるべくいろんな店を回つてるわけだ。

「それでどうしたんだい?」

「実はカクカクシカジカなんですよ」

隣りの席に座る迅雷に轟雷は事情を話す。

「へえ、マスターと恋愛がしたいのに、マスターは受け入れてくれな

い。ね」

「迅雷はマスターとはどんな関係なんですか？」

「大切にしてもらっているよ。最近はボクが、ねこ○そうにハマったのがきっかけで、タカ○トミーのトミ○とかアニ○とか小さな知育玩具を一緒に集めたりしてるね。恋愛ではないけど、親友みたいなもんだよ」

「やはり恋愛関係ってのは早々ならないんですね。どうすれば恋愛になるんだろう……」

考えても解らないと轟雷はカウンターに顔を突っ伏した。

「だったらさ。そのマスターとFAGの家に行って、どんな恋や生活してるか観察してみたらどうだい？」

「え？」

「大体話を聞く限りでは恋愛がどういう物か解ってないじゃないか君の場合」

「ステイレット達は胸がドキドキするとか、苦しいとか切ないとか言っていましたけど、正直解りませんね」

最もステイレットは恋愛してないと言ってますが、と轟雷は付け足す。

「ボクとしてもいずれ挑戦すべきFAG達がどういう奴らか、事前に調べておくつもりはあったからね。君で良ければ付き合うよ？」

「なるほどー」

そう言って迅雷が呼び出したのはパワードスーツ型支援機、ダークネスガーディアンだ。これを変形させて飛んでいくという事だろう。「ちよつと二人とも。そういう人のプライバシーに関わるのは……」

レーフが止めようとするが、逆に妹のライは興味を持ったようだ。

「じゃあ私も行くー。なんか面白そうだもん」

「ライ!!」

「と、いうわけでレーフ。私達ちよつと皆の家回ってきますんで、マスターには遅くなると伝えて下さい」

そういうと轟雷は、既に乗り込んだ迅雷とライと共に、ダークネスガーディアンを飛ばして模型店を後にした。パワーを感じさせる機

械の唸りだけが、少女達の後に木霊した。ちなみに黄一も店に来て  
いる。

「もう！皆自分勝手なんだから！」

レーフの懸念はもう一つある。外を見ると今日は暗めの曇り空だ。  
「雨が降りそうだったのに……」

飛びながらダークネスガーディアンで三人はどこへ行くかと話し  
合う。そんな中、轟雷がポツリと漏らした。

「もう冬な上に、予報では晴れて言っていたのに、今日は怪しい天気  
ですね……」

店に来た時には晴れていたのに、と轟雷は心配になる。ちなみに三  
人とも転落防止のためにしっかりとダークネスガーディアンに固定  
されている。

「昼間だったのにこの薄暗さだよ。傘を持ってくれば良かったかなあ  
……」

「降ってきたらすぐに雨宿りすればいいよ。それで……まずはどこへ  
行くんだい？」と操縦席の迅雷

「一番近いのはステイレットとヒカルさんの家ですね！彼女は最近  
テスト勉強教えてると言っていましたし、きっと家にいるでしょう」

でもってヒカルの家につく三人。インターホンにダークネスガー  
ディアンを寄せて、押そうとする轟雷だが、

「轟雷……お邪魔するのはやめておこう。代わりに窓から部屋を覗き  
込んで様子を伺おう」

「ヒカルさんの部屋なら確かベランダがある筈です」

そこなら屋根があるから雨が降っても大丈夫と移動。三人とも見  
つからない様に端から部屋の中の様子を伺う。

「なんか弱み付け握れたらいいな」

部屋の中では……、ヒカルは机に向かっており、ステイレットが部  
屋の中にコーヒを持って入ってくる。鼻歌を歌っており上機嫌だ。

「ステイレット……機嫌いいですね」

「ヒカルさんも真面目に勉強してるね……」

※さて……ここからは視点をヒカル達に移してみよう。

「マスター、勉強ははかどってる？これ位は私がいなくてももう出来て当たり前よねー」

なにしろ私が教えたんだから、そうステイレットは言おうとヒカルの顔を覗き込む。

「……ぐー」

当のヒカルは……寝息で答えた。机に向かったまま寝ていたのだ。ステイレットの笑顔が一瞬で渋い顔に早変わりだ。すぐさまコーヒーを近くに置くと傍にあつたクリアファイルをメガホン状に丸める。そして……

「……起きろおおっつ!!!」

腹からの大声をステイレットはヒカルの耳に叩きこんだ。

「うわああっ!!っ!!?なんだっ!!?」

強制的に目を覚ましたヒカルは周囲を見回す。

「って何授業中に起こされた生徒みたいな反応してんのよアンタは!!」

「あーびっくりした……。なんだよ良い夢見てたのに……」

「どんな夢よ」

「睡眠学習してる夢」

「……そんなんあつたらとづくにマスターを気絶させて使ってるわよ!ってまだ全然できてないじゃない!」

ステイレットはヒカルの取り組んでた問題集を見て呆れた。まだ回答が書かれてない。

「つつても考えと全然違う風になっちゃうんだよ。こういうの見てるとすぐ眠くなっちゃうし」

「ああもう……もう一回言うわよ、この公式はこうやるって言うてるじゃない。なんでこういう風に入れるわけ?」

一からステイレットは教科書内の公式を説明しなす。ガミガミ言ってるわけではないが、静かな迫力がある。ヒカルの方も大人しく聞き入れるしかない。そして轟雷達はそれを見ている。

『うーん。なんとというか本当にステイレットに教えて貰っているとは

……』

『普段いじられ役のステイレットお姉ちゃんが、ヒカルさん相手だと普通に強気に出られるよね』

『尻に敷かれてるってわけじゃないんでしょうけどね』

「……ん。出来た」

一つ問題を解いてステイレットに見せる。

「どれどれ……ちゃんと出来てるじゃない。そう、そのやり方よ。ちゃんと冷静になれば出来るんだから」

にこやかに、そして嬉しそうにステイレットは言った。

「つつたつて途中でこんがらがっちゃうんだよな。数学つてさ」

「計算式で慌てる必要なんてないでしょ？全く、これじゃ私が最後まで教えてあげなきゃ駄目ね」

マスターは私がいなきや駄目なんだから、そう思いながらステイレットが優しい表情をした時だった。雨が降ってきた。

『わあー降ってきました！』

『ベランダなら屋根があるから大丈夫だよ……』

『雨か……あ。ステイレットお姉ちゃんの方は？』

ライはステイレットが雨に対してトラウマがあるのを思い出した。濡れずとも音だけでも過敏に反応する。部屋の中のステイレットは……蹲ってカタカタ震えていた。当然事情を知っているヒカルが黙っているわけがない。すぐに駆け寄る。

「ステイレット！大丈夫か?!」

「へ・平気よ。前よりは克服出来てるんだから……」

涙目になりながらステイレットは答えた。こうなつてなおもヒカルに数学を教えようとするが、足元がおぼつかない。ヒカルは両手でステイレットを救い上げると充電君の所へ乗せる。

「休んでろよ。自分の事は自分でするからさ」

接続させながらそう言った。息を荒くしてそれを見守るステイレット。

「マスター……大丈夫なの？」

「冷静であれば問題ないって言ってたろ。問題ないさ」

ステイレットの持つてきたコーヒを一気飲みすると、ヒカルは真剣な表情で問題集に取り組んだ。……でもって二十分後……。一度も声をあげずに、行詰まった様子も見せずに問題集のページをやり切った。

「出来た」

安堵の声をあげるヒカル。出来上がった答案の上にシャーペン置いた。外を見ればもう雨は上がっており、雲の切れ間から光が差し込んでいた。もうステイレットを起こしても大丈夫かとヒカルはステイレットの方を向く。

「ステイレット？」

「……ずっと見てたわよ。マスター」

だいぶ楽そうになったステイレットが答えた。

「お前、もしかして寝てなかったのか？」

「言っただでしょ？少しは克服できたって、随分とスムーズにいけたみたいじゃない。見せてよ」

「ああ……」

ヒカルはそう言っただけステイレットに答案を見せる。答案のページをチェックするステイレット、暫くして、への字だった口が緩んだ。

「やれば出来るじゃない。全問正解よ」

全問正解した事に喜びたいヒカルではあったが、ステイレットが少しでもトラウマを克服できた事の方がヒカルにとっては嬉しい事だ。

「へへっ……お前もトラウマ耐えるなんてさ、よく頑張ったよ」

片手の人差し指と中指を合わせてステイレットの頭をなでる。ステイレットはくすぐったそうに身を震わせる。

「あん……当然でしょ。そう言うんだったら……何かご褒美欲しいな……」

※ヒカル視点終わり。

「……なんか爆発して欲しくなりました」

のぞきの轟雷の感想はそれだった。完全に二人つきりだと思い込んで二人に対して、うんざりした表情で言った。

「恋をしたって言ったのは君じゃないか。見に行きたいって言った

のも……」

「だってあんまりベタベタしてるとなんか腹が立つんですよ！」

「まあまあ轟雷お姉ちゃん、大声出したら見つかったら見つかっちゃうよ。ステイレットお姉ちゃんだったら今度会った時にネタにいじればいいじゃない……ふえつ……ふえつ……ぶえつつくしよん!!!」

ライがオチを付ける様に大きなくしゃみをした。同時に部屋の中の二人もそれに気づく。すぐさまベランダの窓を開けるヒカル。轟雷達三人は一瞬で青ざめる。

「あれ？来てたのかお前ら」

「アンタ達……、何を見ていたか言ってみなさい……」

ヒカルの方は別に気にした素振りも見せず。問題は……爆発寸前といった表情のステイレットだ。轟雷達は冷や汗をダラダラ流す。

「いやいや、ただの雨宿りですよーやだなー」

「そうだよー。間違ってもヒカルさんがステイレットお姉ちゃんと夫婦漫才していて、さつきあざとい反応していたんなて私達見てないよー知らないよー。更にそれをネタにお姉ちゃんをいじろうなんて思っていないよー」

——あ、終わった……——

ごまかそうとしていた轟雷達だったが、ライのその発言で全てがぶち壊しになった。

「……出しなさい……」

「へ?」

「全員AS出しなさい!!粉砕して忘れさせるわああっ!!」

キマリスアーマーを着て怒り心頭したステイレットが三人に襲いかかる。

「わああ!まだセツションになってないのに!」

「逃げるよ!!煙玉!!」

迅雷が煙玉を地面に投げつけると煙幕が発生。ステイレットは何も見えずに戸惑い、煙が脹れた時には既に三人はいなかった。

「逃げた……あいつらああっ!!」

「落ち着けよ。別にお前がトラウマ克服したのは悪い事でもなんでも



ないぞ」

「マスター……共感してほしいのはそこじゃないわよお……」

そう言ってステイレットはヒカルの胸に泣きついた。ヒカルもステイレットの背中を優しく掌で包み込んだ。

『ピンポーン』

と、その時にヒカルの家のインターホンが鳴った。誰か来たみたいだ。

「……何よー今日は次から次へと……」

「拗ねるなよ。誰だろう」

そう言ってヒカルは玄関に移動しドアを開ける。そこにいたのは見知った人物だった。

「黄一？どうしたんだ？」

「轟雷来てないか？レーフに聞いたらどっかいつちやっみたいで、GPSで反応追ってたらここだったんだよ」

そう言って黄一はスマホを見せた。街の地図に赤い点が点滅している。登録されたFAGは紛失防止として、GPS機能が基本でついているわけだ。そしてその反応はまた移動していた。

(※オリジナル設定です)

< p f >

雨上がりで冷たく潤った空気の中を轟雷達は飛んでいく。

「もう、ライがくしゃみなんかするから」

「生理現象だからしょうがないでしょー」

「ステイレットの方は見えただけど、次はどこへ行くんだい……？」

「健さんとフレズの家ですかね、小学生のマスターとフレズヴェルク型で仲がいいんですよ。えーと確か文化祭の時に教えて貰った住所は……」

そうこうしてる内に健の家についた。今度はベランダは無い。窓の傍にダークネスガーディアンを寄せて身を乗り出し中の様子を伺う。部屋の中では……

※以下健視点。

「マスターー！今日こそ勝つんだからね！」

健とフレズ、二人はテレビの前でゲームのコントローラーを持って並んでいた。鼻息荒くするフレズに対して健の方は落ち着き払っていた。

「あのきフレズ……やっぱ僕が手加減した方がいいんじゃないか？」  
正直健とフレズの実力差は歴然だ。しかもフレズの場合力押しがちになってしまう。簡単に健には動きを読まれてしまうわけだ。

「何言ってるんだよ！ボクだって成長してるんだから！なにしろマスターが学校行ってる間はオンライン対戦で鍛えてあるんだから！真の力を見せてあげるから本気でおいで！」

「うーん……いいのかな」

困ったような表情の健にフレズは信じてないと判断。

「むー、信じてないね！じゃあ負けた方は罰ゲームだよ……そうだねー、しっぺね！勝った方が負けた方にしっぺ百回なんだから！」

「しっぺ?!ちよつとちよつと、お前僕が勝ったらその体に打ち込む事になるんだぞ」

その大きさの差は十倍である。出来るわけがない。

「心配ご無用！何故ならボクが勝つのは目に見えてるから!!」

自信満々のフレズ、しかし健にとっては根拠のない自信でしかなかった。そして三分後……。

「えーん！勝てない！」

フレズはコントローラーに突っ伏しながら嘆く。いつもの事と云っていい現象だった。

「まあ前よりは動きは良くなっていたよ。僕でよければいつでも教えるから、無理に一人で突っ走るなよ」

「お情けなんていらぬよ！うー……煮るなり焼くなり好きにしなよ！しっぺ百回！さあこい！」

覚悟を決めた様にフレズは腕を差し出す。

「あのねえ、無理言うなって、そんな細い腕でそんな乱暴な事」

「でもこれじゃボクの意地が……そうだ。腕が細いから駄目なんですよ？!だったら！」

頬を膨らませて不満を露わにするフレズ。と何か思いつくと、フレ

ズは壁に手をついて、健の方に……お尻を突き出した。

「ボクの面積が一番大きい、一番丈夫な部分はお尻だよ！これなら打ち込めるでしょマスター!!」

「っっ?!だ！駄目だっつてフレズ！この間の胸で似た様な事あったの忘れたのか!?!」

「っ！……あ、あれは……」

思い出して顔が真っ赤になる健。言われてフレズの顔も恥じらいで赤くなっていく。

「っつて大丈夫だよ！別にお尻なんてエッチな部分じゃないよ！マスターもこれでドキドキはしないでしょ？」

「……うーん……」

健的には確かに胸やキスよりはドキドキしない。この二人、幼いがゆえに尻の性的な部分に気づかずにお尻を思いつき……、打つたら吹き飛びである。

「っべこべ言わないで！さっさとこおい！」

「ああもう！知らないからな！」

そう言っつて健はフレズのお尻を思いつき……、打つたら吹き飛びそうなので、軽く人差し指と中指の指先で打ち付ける。

「ううっ！」

「フレズ？大丈夫？」

「大丈夫。加減なんかしないでもっと強くして」

そうは言うが、本気で叩けるわけがない。健はどうかにか、ぶつわけではなく。表面だけを叩いていく。指先だけながらペチンペチンと音が部屋に響く。フレズは振り返らずに耐える。

「んっ……うん。そうだよ。このまま百回まで打ち付けて」

——でも、どうしても戸惑うよなあ……——

その健の戸惑いが、打ち付けるタイミングを不規則にしていく。打たれる手を見ていないフレズは衝撃が、感覚がモロに伝わる。

「十……十……」

眩くように数える健。

「んっ。へへっ……余裕だね。音だけで痛くないや」

——そりやそう言う風に打ってるからね——

健の感想は、人の気も知らないで、という思いと、痛くなくて良かった。という両方だった。二人はこのまま何事もなく終わると思っていた。……この時は。

——あ、あれ……？またなんだか……——

妙な高揚感がフレズの中に湧いてくる。マスターにお尻を向けている背徳感。そしてぶたれる恥ずかしさ。何より不規則故にいつぶたれるか解らないスリル。フレズはだんだんこのマスターにぶたれる感覚に夢中になっていった。それは健の方も同様だった。

「んっ……やつ……あぁっ……」

「九十九……百。これで終わり。フレズ大丈夫？」

「あ……あああ……」

フレズの方はがに股になっており、手を付いた姿勢のまま、ガクガクと膝を笑わせながらやつとの思いで立っていた。健はこれがフレズが怪我をしたと判断。

「っ!?フレズ!やつぱりFAGをぶつなんて駄目だったんだ!ごめんよ!大丈夫?!」

「ち、違うのお。ましゆたあ……」

振り返った彼女の顔は、ぶたれる快感に完全に飲まれていた。

「気持ちいいよお……もつとお……してえ」

さつきまで元気に笑ってた少女が、ベそをかき、震える体でお尻を左右に振りながら主人を誘う。何が起きたのか。少年の理解を越える状況だった。

※健視点終わり。

「フレズ……、変態だったんですか」

轟雷とライも顔を真っ赤にしていながらそれを見ていた。

「あれがどMって奴なんだね。本当にいたんだ。あれ?迅雷お姉ちゃんは?」

迅雷はその様子を直視出来ず、両耳を両手で塞いで目をギュツと閉じてみない様に別方向を見ていた。

「見えない……聞こえない……見えない……聞こえない……」

彼女は完全にこういうのに免疫がなさそうだった。

「迅雷、ウブですね……」

聞こえたらしく迅雷はキツとこちらを見る。

「ボ！ボク達のコミュニケーションにあんなのは必要ないよ!!」

「えーでも、人間同士じゃ、ああいうのもコミュニケーションに入るっていうじゃない」

「絶対違うよっ!!! あんな不潔なの!!! コミュニケーションなもんかあっつ!!!」

絶叫同然で言い返す迅雷、それは中の二人に余裕で聞こえた。すぐに窓が開くと、恥辱と怒りにまみれた健とフレズの顔が見えた。

「お前達……何やってんだよ……」

怒り心頭でフル武装のフレズの表情は、さっきまでのM要素は一切消えていた。

「い、いやー何のことでしょうか？さっきたまたま通りかかっただけですよ私達はー」

「駄目だよ!! マスターとFAGであんな事しちやあ!!! もっと清い交際をするべきだよ!!! もっと交換日記とか!!!」

——あ、終わった……——

今度の墓穴は迅雷が掘った。

「永遠に眠れ……外道どもよ……」

健はセクションベースを取り出してバトルステージに三人を巻き込もうとする。だがそうする前に三人は脱出。ダークネスガーディアンは操作は迅雷が動こうとしなかつたので、割り込んだ轟雷がやった。

「逃げますー煙玉!!」

追いかけてくるフレズ目掛けて轟雷は煙玉を投げつけた。切ったフレズは中からの煙幕に動きを封じられる。

「うわっーなんだこれ!」

煙が晴れると既に轟雷達の姿はなかった。既にダークネスガーディアンは安全圏へ移動していた。

「いやー、危ない所でした」

飛行中の穏やかな風を感じながら轟雷は安堵の声を上げた。

「危うく『その大きな手で私を抱いて』が『その大きな手で私のお尻を叩いて』になっちゃうところだったよー」

「なんですかそれ」

「なんかそんな言葉が浮かんだの」

「不潔だよ……あんな関係……」

一人だけ、迅雷だけはまだ見た物を信じられないといった表情だった。

「まあ、たまたまなっちゃったって感じですよ。フレズヴェルク型はバトル以外は無知ですからね」

「なんか知らない内に、健さんとの子供を妊娠してそうだねフレズお姉ちゃん、ビキニアーマー来てくる頃にはお腹ポツテリになってたりしてー」

「ライ、不可能な上にあらゆる意味で危険なネタは言わないでください」

「?どうしてだい?赤ちゃんはコウノトリさんが運んでくるんだろう?」

「……迅雷……」

何の疑問も持たない赤忍者に、轟雷達は何にも言えなかった。

「あああもう!ボクの馬鹿あつ!絶対にからかわれるよおおつ!!」

轟雷達を見失ったフレズは自分の無知と行動を後悔する。

——本当は僕ももつと叩きたかったけど……さすがに無理だよな……—

健の方はフレズの反応を楽しみたいという気持ちはあったが、この状況ではさすがに無理だと思いきるを得なかった。

『ピンポン』

と、家のインターホンが鳴る。誰か来たのかな。と二人は玄関に移動した。

「やあ健君、轟雷の奴来なかった?」

ヒカルとステイレットを連れてインターホンを押した少年、黄一が

そう言った。

その日、アーキテクトはマスターに対するアプローチを考えていた。理由は、最近知り合ったフレズヴェルク、彼女の無自覚ながらマスターへの積極性はアーキテクトとしても参考にはなった。というわけでアーキテクトはかねてより考えていた方法をマスターの大輔に試そうとしていた。

「えっと、春はあけぼの、やうやう白くなりゆく……」

大輔の家にて、大輔もまたテスト勉強にはげんでいた。古文の暗証をしている所にアーキテクトがやってくる。キラークビーク装備で飛んでいた。

「マスター……」

「どうしたアーキテクト」

「最近は猫にも興味が出てきた。猫を飼いたくなくなった」

「え？」と言いながら大輔は振り返る。若干申し訳なさそうに大輔は言う。

「さすがに猫は駄目だよ」

「そう……」

表情は変わらずだが、大輔にはアーキテクトが落ち込んでるように見えた。

「あのねアーキテクト。FAGみたいな小さいロボットには危ないだろう？」

「理解はしている。成体の猫では私が弄ばれる可能性。98%」

「解ってるならやめておきなよ」

「マスターは……動物では猫は嫌い？」

「?そうだねえ……好きかな。なんか自由って感じで、奔放な所を見るとなんか癒されるんだよな」

僕が機械関係で悩んでる所とかに見ると特にね。と大輔は付け加える。

「そう……私も猫の挙動には興味がある。そこを観察して今後の私の



挙動の参考にしたい」

「参考って……バトルの時のかい？」

「違う。甘え方」

「え……？」

「データ取得済み、猫は甘え上手。喉を鳴らし、お腹を見せて精いっぱい信頼を表す」

ボデイランゲージとしては大いに参考になる。というのがアーキテクトの理由だった。データで取得した情報があるが、本物の猫には適わないだろう。

「マスター、勉強で疲れてる確率、0・0……99・9%」

言い直すアーキテクト、大輔が勉強を始めたのはついさっきだ。

「いや今言い直したよね」

「マスター……私が甘えて癒す。マスターは私の挙動に合わせた対応を……」

そう言ってアーキテクトは猫耳のバンドを頭につけると机に降り立つ。四つん這いになるとアーキテクトは大輔の大きな手に頬を摺り寄せた。

「にやあ……」

「おっと、くすぐりたいよアーキテクト」

「みゃう……」

今度は額をコツコツとついてくる。頭突きをしてくる。

「あれ？頭突きもするんだ？」

「データ取得済み、猫の頭突きの仕方もある。でも匂いまでは再現できなかつた……」

「さすがにお尻から匂いを出す君は嫌だなあ」と苦笑する大輔。

「喉を鳴らす事は可能だった。ゴロゴロゴロ……」

「十分凄いよその発声機能」

アーキテクトのボケにそこは突っ込むところであろうが、技術者肌の大輔にとっては、アーキテクトの音声機能に素直に感心をしめした。と、アーキテクトはその場に仰向けに寝転んで大輔を見る。

「猫の代表的な甘え方はお腹を見せる。これは信頼をしてる人に急所を見せるといふ事、マスターの事は信頼してる。お腹をなでて欲しい」

「ええ、ちよつと恥ずかしいなあ」

苦笑いする大輔。

「やってくれなきや猫キツク。猫の遊んでほしい時の挙動は、主人の作業の邪魔をする」

「なりきってるなあ。まあ片手なら」

そう言いながら大輔は勉強を続けながらアーキテクトの胸から腹にかけて、インナー越しに撫でていく。優しく指が通っていくたびに、アーキテクトの身体が震える。

「んっ……にやあ、にやあ……」

恥じらいながら猫の鳴きまねをするアーキテクト。暫くそれが続くが、大輔の方は勉強を続けていた。

「ふみい……みやああ」

段々アーキテクトの声艶っぽくなっていく。大輔の方もそれは意識してしまう物だった。

「アーキテクト、そろそろいいかな……ちよつとこれ以上は」

こういった事は大輔は慣れてない。これ以上続けるのは大輔にとつても戸惑う反応だった。

「みやああ……ふぎやあああああああああ  
!!!」

「っ!!!」

いきなりもの凄い絶叫を上げたアーキテクトに大輔はビクツと身を強張らせる。

「ア、アーキテクト!?大丈夫?!」

「あ、マスター、ごめんなさい。つい発情期になり切ってしまったて大声を……しかもこの鳴き声は雄猫の方……」

対応を間違えてしまったとアーキテクトは反省。こういったアップローチは、お互い慣れてなかったからだ。

「お互い慣れない事はするもんじゃないね……」

「見抜かれてた……マスター……ん?」

と、アーキテクトは大輔の後ろの方、窓の外から覗いてる轟雷達三人の姿を見た。アーキテクトが自分の行動が見られていたと判断。どんだん顔が青ざめていく。

「アーキテクト? どうしたんだい?」

「……フシャーッ!!!」

猫の威嚇ポーズをするとアーキテクトは新型のギガンティックアームズ、ルシファーズウイングを呼び出す。そして装着し、外の轟雷達の方に突撃していった。スピードに優れたその姿は、猛禽類の獣人、ハーピーを思わせる。

「みいたあなあああっ!!!」

「うわああっ!!! 来たあ! 化け猫おお!!」

「新型アームズ! ステイレットが欲しいって言ってたルシファーズウイングです!」

窓を開けて飛び出してきたアーキテクト。普段の無表情からは想像出来ないほどに悪鬼の様な表情だった。逃げようとする轟雷達だが、こちらが思った以上に相手のギガンティックアームズ。ルシファーズウイングは速い。

「にやにやにやにやにやーっ!!!」

外側の羽根状のユニット。フェザーユニットを飛ばして襲ってくる。短剣の様な形状の羽根がそれぞれ遠隔操作で襲ってくる。

「らちが明かないよ! 煙玉!」

操縦に専念する迅雷なので、ライが煙玉を投げつける。

「みゃっ!!!」

外側のクロー状のアームで煙玉を切りつけるアーキテクト。あふれ出た煙幕がその場を覆った。

「うにやああ……逃げた」

もつと辺りを探すべきかと思案するアーキテクトだが、周りにいないのではどうしようもない。そのまま戻る。

「災難だったね。アーキテクト」

「うみやああ……」

分離したアーキテクトは自分の身体をなめていた。そしてカリカ

りと壁を爪でひっかき始めた。もっとも手袋越しなので真似でしかないが、

「つてまだ猫の真似をしてるんだね」

「……猫は失敗した時に別の事をやって気分転換する習性がある……、昔はごまかすと考えられていた」

「まあ気が済むまでやるといいよ」

アーキテクトのボケに突っ込む事のない大輔。これもこの二人の関係ならではだ。

『ピンポーン』

と、家のインターホンが鳴る。誰だろうと大輔がアーキテクトを猫の様に抱えながら玄関を開けると、

「よお大輔、轟雷来てないか？」

ヒカルとステイレット。健とフレズを連れていた黄一がそこにいた。

「それで、参考になった？」

空を飛びながら問いかける迅雷。恋愛感情を持った三人はこれで全て回った事になる。

「んー正直解りませんね」

喉に小骨がつつかえた様な表情で轟雷は答えた。どうも自分の思っていた事と違うとでも言いたげだ。

「なんだよそれ……」

「確かに仲がいいなって思う事はあれど、別に私達とそう違いはなさそうに思えました」

「轟雷お姉ちゃん的には、もっとラブラブしてるもんだとばかり思っていたって感じ？」

「そうですね。フレズの場合は仲良しで済むもんじゃなかったと思いますが。見た感じ、単純に仲良しってんなら私達とそう変わらないじゃないですか」

轟雷としては、もっとそのまま行動を流用でもできそうだと思っただけですが、これでは昨日マスターにしようと思っただけで変わらな

い。

「……ボクとしては彼女達の弱みが見えたから収穫と言えなくもないけれどね」と迅雷は満更でも無さげだ。

「もつと私達の周りに特別な関係っぽい人がいればいいんだけどねえ」

「ライ、そんな簡単にそういう関係の人なんていませんよ……。特別な……あー」

その時、轟雷の脳裏にあるFAGが浮かんだ。特別な関係に心当たりがある。

「そうだ！次はあの人に聞きに行きましょう!!」

「ウッフッフ。それで私達の所に聞きに来ましたのね轟雷」

轟雷の訪ねたFAG、マテリアwhiteのマリは上品に笑いながら答えた。暖房の効いた子供部屋でマスターと遊んでいたマリだった。

「そうなんですマリ。どうすればマスターと恋が出来るか、特別な関係になれるか知りたくて」

「あらあらまああ」

「ねーマリちゃん。ご本の続き読んで」

轟雷が問いかける横で、彼女のマスターであるトモコが聞いてくる。彼女は六歳の幼稚園児で、マリは友達とも保護者ともいえる。あの意味ではマスターと特別とっていい関係だった。

「あ……ごめんねトモちゃん。私はちよつと轟雷ちゃんと大事なお話があるから少しお部屋を出るわね」

話づらい内容だ。マリにとってマスターの前では話せない。

「そうなのー？だったら大丈夫。轟雷ちゃん達お外飛んできて疲れてるんでしょ？廊下は寒いからここで話ししなよ。話づらいなら私が出るよ」

申し訳なさそうに答えるマリに対して、トモコは不満を見せずにそう言った。

「トモちゃん……。でも……」

「水臭いよー。マリちゃんと私の仲じゃないのー」

「どこで覚えたのそんな言葉……でもトモちゃん。ありがとう！」

そう言った気遣いにマリは感激する。

「私、別の部屋行ってるから。どうぞごゆっくり」

見様見真似か。ペコリと頭を下げるとトモコは部屋を出ていった。

「ああトモちゃん……どんどん大人になっていくのね……全く。折角トモちゃんにクライマックスのシーンを読んであげていたというのに……」

ひとしきり感動するとマリは轟雷に向き直る。あからさまに態度が変わった。

「すいませんねマリ。それにしてもFAGがマスターに絵本を読んであげるとは……」

轟雷が床に目をやる。床に置かれた一冊の絵本が見えた。作品名は『ピノキオ』。説明不要の命を持ち、最終的に人間になる人形の童話。

「ピノキオですか……」

「で、マスターと恋愛がしたいと言っていたけれど、ウッフッフ……くだらないわね」

笑った直後にマリは冷淡な表情で轟雷を切り捨てる。

「な！何をおっしゃいますか！」

「なぜマスターと恋愛関係になろうとするのかしら？あなたは」

「それは、それがFAGにとって最先端だと思っからです。かつての試作型轟雷の様なFAG全体に影響を及ぼす個体に私はなりたいたいですよ」

「それがくだらないと言ってるのよ轟雷。恋愛関係になってマスターとどうなると思うの？」

「それは……やっぱり結婚ですかねー」

「ウッフッフ。……馬鹿ねあなた」

軽蔑するような表情でマリはそう言った。さっきの冷淡から更に踏み込んだと言っている。いい。

「出来るわけがないでしょう？私達の本質は変えようがないわ」

「本質？」

「どれだけ人間に近い心や知能を与えられても私達の本質はホビー、人形でしかないわ。人間と並び立つ事なんて出来ないのよ。マスターが人間である以上、対等な立場になるには人間でなければいけないの」

「で！ですが！」

「そもそもよ。あなた自分で言ってみて最低だと思わないの？人を愛する理由が最先端だからとか」

「う……」

言われてみて轟雷なりに最低だと思った。

「別に人を愛する事を目立つ為に使わなくてもいいでしょう？マスターを愛してるなんてF A Gなら当然であって、最高の幸せよ」

「マリは……マスターを愛してると言うのは解ります」

マスターの前では子煩悩全開になるマリだ。トモコとマリが互いを大切に思っているのは轟雷にもよく解る。

「あらありがとう。その通りよ。あなたの周りを見てみなさいな。あなたのマスターはあなたを大切に思っているでしょう？恋愛感情なんてそこには必要ないのよ」

自分の身の周り、というのは解っていたが、周りを見ている。ベビーベッドの上で、トモコの弟ユウ（生後四か月）が寝ていた。と、彼のF A GであるマテリアBlackのテアがお腹に顔を突っ込んでいるのが見えた。マリの妹である。ライと迅雷もそこにいた。

「さあ。この至高の快樂を知ってしまったら、これなしでは生きられないわあ。こうやってユウちゃんのお腹に顔を突っ込んでえ」

むき出しにした赤ちゃんのお腹にテアは顔を押し付けて顔をこすりつける。

「ああ！この肌触り！こんな快樂はどこにいつても味わえないわあ！」

端正だったテアの表情が一気に崩れる。そのままスリスリと高速で顔をこすりつけるテア。それを見ていた迅雷は顔をしかめた。

「ボクは賛成しかねるよ……。今の寒い時期に赤ちゃんのお腹をむき

出しにするなんて……」

その迅雷を尻目に、ライの方はテアと一緒にお腹に顔をうずめてこすりつけていた。

「ああー本当この感触！今まで触ってきたどのクッションよりもやわらかくてきめ細かあぁいい!!!」

テアとライは恍惚の笑みを浮かべてスリスリと顔をこすりつける。

「ライ！何やってんの君まで！」

「ええーいいじゃん。迅雷お姉ちゃんもやってみてよー。これすっごい気持ちいいよー」

「いやボクは別に……」

興味なさそうに振る舞う迅雷ではあったが、いつの間にか回りこんだテアの方が迅雷の後頭部を掴む。

「お高くとまる必要はないわぁー！さあ堕ちましょう！私と共に！」

そうして強引にテアは迅雷の顔をユウのお腹にあてがった。肌障りの良い柔らかい感触が迅雷の顔いっぱい広がる。

「んん……この感触……でも駄目。赤ちゃんの身体で遊ぶなんて！赤ちゃんのお腹なんか絶対負けない！」

が、2秒後にはお腹を掴んで顔をすりつける迅雷がいた。

「お腹には勝てなかったよ……。凄いよこの感触ううっ!!!」

ベビーベッドの上の光景をマリと轟雷は閉口しながら見ていた。

「……まあ今見えてるのはともかく、あなたの妹もマスターを大切に思っではいるんでしょうね……後Blackerだとますます顔がサーニヤダナ」

皮肉で言ってるわけではないが、どうしてもそう聞こえてしまう言いかたの轟雷、横目で見たマリは顔をひくつかせている。怒ってるのはすぐ解った。こっちは真面目にやっってるのに妹はマスターのお腹でのランチキ騒ぎだからだ。

「テアアアッ!!マスターの身体で遊ばないでっいつも言ってるでしよう!!!」

怒り心頭のマリ、ビクツと体を引くつかせるテア。

「っーごごめんなさいお姉様！」



が、その怒りが逆効果だったのだろう。ユウは愚図り出すと泣き出してしまう。キメ細かい肌の顔が一瞬で歪んだ。

「うう……ふんぎゃああああツツ!!!」

その大声にその場にいた全FAGが顔をしかめて耳を塞いだ。かなりの大絶叫だ。

「うっわ！強烈!!」

「テア！あなたがユウちゃんで遊ばなければこんな事には！」

「わ！私の所為なのお姉様?!直接の原因はお姉様が！」

テアの指摘にマリはバツが悪くなる。が、マリは開き直る様に言った

「ぐ……問答無用！何とかなさい！あなたの責任でしょ!!!」

「トモちゃんが見てないからって……苦労してるね」

同情するライに対してテアは苦笑して返す。

「余計な事は言わない方がいいわあ。まあユウちゃんの担当は私だから任せておきなさい」

いつもの事よ。そう言うのとテアは一度ベッドから離れる。そして一つの武器を抱えてきた。ギター型アックス。ライブアックスだ。

「ユウちゃん。今日も聴いてね」

泣き続けるユウの耳元へ移動し、椅子に変形させた充電君に座ると、テアはギターを弾き始める。ゆったりしたテンポの曲。それは……

「このメロディライン……バラードだ」

「子守唄にバラード？」

「静かに。ユウちゃんの為だけに歌うんだから……」

テアはギターを弾きながら歌詞を口ずさみ始める。最初はどこ吹く風と泣き続けるユウだったが、徐々にではあるがユウの泣き声も収まっていく。

「……収まっていく。聴き入ってるんだ」

「単に泣きつかれただけじゃないの？」

ライのその失言にテアはキツと睨み付ける。

「〜♪ライ〜♪後で覚えておきなさい〜♪ラ〜ララ〜♪」

「……ううっ!!」

ユウの顔が再びしかめる。テアが変な歌詞を歌ったからだ。「ライが余計な茶々を入れるから」心でそう思いながらテアは盛り返そうと再び歌い続ける。ユウはまた穏やかな顔になっていく。

「やるじゃないテア、さすが私の妹ね」

元はと言えばお姉様が怒鳴るから。と思うテアだがここで口喧嘩してまたユウを泣かせるわけにもいかない。その判断は正解だった。暫くしてユウは泣き止む。するとユウはテアの方に顔を向けるとニコーツと笑顔を向ける。

「ツ〜♪」

テアの方もその反応に微笑み返しながら歌い続ける。暫くするとそのままユウは眠りについた。泣き声は聞こえない程小さい寝息へと変わった。

「ふう……おやすみなさい。ユウちゃん」

根ながらもテアの方に顔を向けているユウに対し、見守るような笑顔をしながらテアはユウの鼻にキスをした。眠っているユウには解らないだろうが、テアはそれで満足だった。

「眠った。凄いね。ギターの演奏で眠らせるなんて……」

迅雷が感心しながら言う。ユウを起こさない様に小声でだ。

「毎度の事よお、泣くのをなだめる位なら楽な方よ」

テアもまた小声で返す。

「お母さんみたいです。テア」

「よして頂戴。抱っこできるのはユウちゃんのお母様だけ、お母さんの温もりと大きさは、どうしても私達では再現できないもの……」

F A Gではギガンティックアームズを使っても赤ちゃんを抱きかかえる事は出来ない。人肌の温もりはどうしても覆せない差だった。

「……寂しくはないですか?」

「ちよつとだけ、ね。でも大丈夫よ。私ユウちゃんの事大好きなもの」

「そうよ。人に私達が仕える事は当然の事、マスターが私達を好きになつてくれるかどうかは関係ない。それが私達の役割よ」

「……仮にですよ?向こうが私達を好きになつてくれなかつたとして

も?」

「当然よ。至高ですらない辛いだけの心の痛み。でもそんな環境に置かれたら私達はそれを受け入れなければならぬ。だけどあなた達のマスターは皆あなたを大切にしてくれているのでしよう?」

「マリのその問いに、全員が頷いた。ためらう者はそこにはいない。「幸せ者じゃない皆。それ以上を求めるのは贅沢としか言いようがないわね」

「……それは……そう……ですけど……」

マリの言ってる事は解る。しかし、どうもステイレット達の行動や葛藤を見ていると、どうも釈然のしなさも感じた。とはいえ、マリの言ってる事も最もだ。ここで否定するのも間違っていると轟雷は感じた。

「少し、考え直してみます。と、それはそうと、ユウちゃんのお腹って本当に気持ちいいんですか?私も顔を埋めてみたいなあ」

何か、別の話題に切り替えたかった。

「あら、いいわよお。ユウちゃんのお腹の感触、まだ腹筋のついてない至高の感触を味わいなさあい。罪悪感は最初だけ、これなしでは生きていけなくなるわあ」

「あなた達ねえ……」

呆れるマリを尻目に、ベッドに移動した轟雷はユウのお腹に顔を埋めて気分転換しようとした。しかし……

「?……なんか臭くないですか?」

鼻に付く異臭に気が付いた。テアの方も気が付いたらしく、オムツの方に顔を近づけると鼻で確認。

「あらあ、しちやったのねユウちゃん。お姉様、オムツ交換ですわ。ギガンティックアームズを」

いつの間にかギガンティックアームズを装着したマリがバーニアで上がってくる。テアの分のギガンティックアームズを抱えてだ。すかさずテアは自分の機体へ乗り込んだ。

「轟雷ちゃん。ぼさつとしてないで手伝いなさいな」

「え。もしかして……しちやったんですか?」

「大きい方よお早く取り替えないとかぶれてしまうわあ」

「えええ……」

テープを外してオムツを脱がそうとするテア。

「轟雷……ボクがやるよ……」

その催促に迅雷の方が対応した。彼女もダークネスガードイアンで新しいオムツとベビー用のウエットティッシュを抱えてベッドに上がった。

「これを……」

「有難う。あなたは見ていだけで良いわ」

姉妹の手つきは慣れた物で躊躇いなど無い。マリがユウの足を掴み。テアがオムツを外すとお尻の汚れをあつという間にユウのお尻を拭きとる。

「あの姉妹……連携しながらオムツを……」

「いや、片方が押さえてるだけでしょ」

迅速にオムツ交換を完了させる姉妹だった。迅雷がやった事といえばオムツとウエットティッシュをベッドに上げただけで入り込む余地はなかった。

「待たせたわね。さあどうぞ」

テアは取り換えた方のオムツを袋に入れて捨ててるついでで轟雷に言った。

「あ、やっぱいいです。……そろそろ帰ろうか」

元々気分転換的な提案で言った轟雷だ。こういった事になるとは彼女自身思っていなかった。迅雷も特に反論はしない。ライはまだここにいたかったようだが、日が短い冬の事だ。早い時間に帰りたいと言うのもあった。

「お邪魔しましたー」

トモコと、その肩に乗ったマリ姉妹に見送られて玄関から出ていく轟雷達。

「トモちゃんお待たせ、これでご本を読んであげられるわ」

「うん！じゃあお部屋行こう！」

そして玄関の鍵をかけると部屋に移動、トモコは姉妹を下ろすと読

んでもらう絵本を回収しに走った。

「ちよつと待っててね」

「うん。ゆつくりでいいわよ」

「……ねえお姉様……ああいう言い方で轟雷ちゃんの考えを切り捨てるのはちよつとどうかと……」

トモコの背中を見守るマリに対し、テアが問いかけた。あら聞いてたのねと言わんばかりの顔で反応するマリ。

「ウツフフ。テア……。私達は人間と同じ土俵に立つ事は不可能よ。私達は自分の死も含めて、マスターの思い出の一部となる事こそが幸せ」

「お姉様……。それでは長くいればいる程、マスターを悲しませる結果になるのでは？」

「片方の感情だけで済むはずがないわ。幸せだからこそ失う事を恐れる。でもそれは正しい成長よ。私達の死を以てマスターが乗り越えてくれるなら、成長を促せるなら本望という物よ」

「……私達が死んだ時、トモちゃんやユウちゃんに乗り越えて欲しいと？」

「その時まで私達を好きでいてくれるかは解らないけどね。……さて、トモちゃんにご本を読んであげなくちゃ」

大好きだからこそ、それをマリは覚悟していた。しかしマリはそれのある意味達観した風に受け止めていた。話題を切り替えると同時にマリは考えも切り替える。トモコに本を読んであげる事だ。

「もうご本読んでくれるよね？」

「トモちゃん。ええ、ごめんねこんなに待たせて」

「やった！大丈夫だよ。マリちゃんピノキオさんの続き読んでよ！」

トモコが抱えてるのはピノキオだ。やはりこれが一番のお気に入りなのだろう。

「ウツフフ。トモちゃんたら本当にピノキオさんが大好きなのね」

もう何度も読み返してる。どハマリしてるというのは読んであげてるマリにとっては熟知した事実だ。

「うん！ピノキオさん大好き！私も人間になったピノキオさんみたい

に良い子になるの」

「まあ！トモチちゃんたら偉いわ！」

「そして魔法使いさんが来たらマリちゃん達を人間にしてもらおうの！！」

「あらあらまあま……え？」

最後の言葉に、マリは言葉に詰まった。……子供はいつだって大人の予想を超える者である。

ep17 『黄一と量産型轟雷』（後編）

「あ、また轟雷達移動したみたいだ」

GPSで轟雷達を追いかけてきた黄一達だが、目的地を転々としておりその都度人数が増えると言う事態になっていた。人間だけでも黄一、ヒカル、健、大輔、FAGの方はステイレット、フレズヴェルク、アーキテクトの大所帯だ。

「またあ?!今度はどこよー!」

ステイレットはうんざりした様子で答えた。完全なたらい回しにその場にいた全員が同じ様な感想だった。

「追いかけて行ってもキリがないよ。何か予想して目的地に先回りしておいた方が……」

「肯定する。マスター、現在予想出来るポイントは……」

——……アーキテクト、ルシファーズウイングつけてる……いいなあ——

大輔の発言にうんうんと頷くアーキテクト。彼女は先程同様にルシファーズウイングを装備していた。ステイレットが羨ましそうに見ている。

「日がそろそろ落ちて来るわけですから、そろそろ戻ると思えますよ黄一さん」

「轟雷一人だったらこのまま帰ってたんだろうけど。ライと迅雷型も一緒なんですよ?ライだったらレーフ置いて帰るなんて出来ないだろうし」

黄一のスマホのマップを見ながら、健とフレズが口を開いた。

「で、この方角……こりゃ目的地は恐らく……」

轟雷達の向かった先はいつもの模型店だった。帰って来たわけだ。

「結局帰ってきちゃいました……」

「で、轟雷……何か解った?」

「正直余計こんがらがった感じですよ。……FAGと人間が恋愛するって、間違ってるのかなあ……」

「……なんだかステイレット達を否定された事に、余計に悩むようになってしまったって感じだね轟雷……」

「……」

迅雷の指摘に轟雷は言い返せない。それ以前に、マリ姉妹に言われた事が轟雷に突き刺さる。ステイレット達のしていた事を否定される言葉だった。しかし轟雷としてはそれを正しいと思う事はどうしても出来ない。ステイレット達が恋愛してる様子はとても輝いて見えただけからだ。

「ただいまレーフ……」

「あらおかえり三人とも」

模型店のコミュニケーションスペースに降り立つ三人。カウンターに座るとまだバニーガールのコスプレをしたレーフが出迎えた。「レーフ……恋愛をする事自体が正しいのか解らなくなりましたよ。間違っていると云うのなら……」

レーフは黙ってカクテルを渡す。

「ってレーフ……私は飲めませんよ」

「ていうかまだコスプレしてたのお姉ちゃん」

「ライ、あなたねえ……置いて帰れるわけないでしょうがぁ……」と、あちらのお客様からよ」

ライの発言に怒りをにじませてレーフは答える。直後に彼女はカウンターに座った轟雷達の背後を示した。「あちら？」と轟雷達は後ろに目をやると、店の外側の席。中を覗き、FAG達とコミュニケーションをとる為に設けられた人間用の席、そこにいたのは……。怪しい人物だった。

「……初めまして……」

「っ!!!」

轟雷は、否、迅雷とライも含めて声を失った。その姿は、タイトスカートの女性用スーツを着込んでるので、首からは普通の人間の女性といった所である。肝心の首からは……FAGの元ネタ、フレームアーキテクトの頭部だった。一言で纏めると某アーキテクトマンの女性タイプである。なお轟雷達の印象としては……。



「へ！変態だああっ!!!」

「うわああっ!!!変質者!!!変質者です!!!誰か来てくださいいいい!!!」

変質者でしかなかった。思いつきり絶叫をあげる轟雷達三人。

「へ！変質者ではありません!!ワタクシ！ファクトリーアドバンス社の者です!!」

そう言つて怪しい女性は名刺を取り出すと店の中の轟雷達に手渡す。小さな厚紙は轟雷達にとっては新聞紙を広げた様な大きさだった。確かにファクトリーアドバンス社と書かれている。そして中央に書かれた彼女の名前は……。

「???……アーキテクトウーマン?」

名前と眼の前の怪しい人物を交互に見る。

「はい！ワタクシFA社において宣伝やお客様のお悩み相談等を担当させていただいております!……ではちよつと失礼」

アーキテクトウーマンと名乗った女性はそう言つと轟雷を両手で掴む。

「うわあつ！なんですか！私の身体が目当てなんですか?!」

「違います!……ちよつと待つて下さい!」

そう言つとアーキテクトウーマンは頭部中央のアイガードの部分からサーチライトの様な光を轟雷に向けて放つ。

「ひいっ!!やっぱり身体目当てなんですね！私が可愛いからつて許しませんよ!」

「ああ動かないで!ちよつと黙つててくださいいってばあ!」

轟雷の行動に慌てる。どうも初々しい拳動のアーキテクトウーマンだ。暫くしてライトは停止。アーキテクトウーマンは何か解つたように口を開く。

「認証完了。登録ユーザー諭吉黄一さんの轟雷ですね！シリアルナンバー認証……はいご本人に間違いなさそうです！諭吉黄一様からの連絡でご相談に来ました!」

「あ……そういえばマスターがFA社に連絡入れたんだっけ」

昨日黄一が本社に連絡を入れたのを思い出した轟雷。と、そんな人に自分は変質者と言つてしまったのかと轟雷は気まぎれになる。

「じゃあ本当に本社からのスタッフって事かい……?」

「あ! すいません! 変人扱いしてしまつて!」

「いえいえ。誤解が解けたようで何よりですよ。それで轟雷さんの様子がおかしいと連絡を受けましたので、マスターである黄一様はいらつしやいませんか?」

「あ……そういえばマスターは?」

「あなたを追いかけて出てつたわよ。……多分カンカンに怒つてるでしょうね」

怒らせた。という言葉に轟雷は頭を抱えた。ステイレット達も行く先々で怒らせた事を思い出したからだ。

「ああどうしようく皆になんて謝れば……」

「あの……できればマスターご本人から症状を確認したいのですが……」

状況が飲み込めず困惑するアーキテクトウーマン、と、轟雷はある事を思い出した。

「あ!あの……本社の方でしたら相談したい事が……」

「?何でしょうか?」

相談したい事、というのは勿論マスターとFAGの恋愛についてだ。轟雷は話し始める。さつきマリ姉妹に言われて揺らいでいた事を含めて。

「……それで、言われたんです。私達は本質はホビーだつて、人間と対等の立場にはなれないつて……」

「そう、それであなただはお友達を見習つてマスターと恋愛をしたいと」「はい……恋愛を否定した友達の言つてる事は解ります。でも、恋愛感情をマスターに抱いてる友達も間違つてるとは思えないんです。それじゃ何の為に私達のAS、心はあるんだらうつて思つて……」

「あなたのマスターが言つていた変になつたつて言うのは恋愛感情の事だつたんですね……」

「残念ですが、私には恋愛感情は解らないままですよ。……私には解りません。本社のアーキテクトウーマンなら、どちらが正しいと思えますか?」

迅雷たちにとっても気になる話題らしい。その場にいたFAG達の多くが聞き耳を立てていた。(ライはカラオケで熱唱していたので除く)

「そうね……。どちらもある正しい。かな」

「え……。それでは意味が……」

「その否定したお友達は当初のFAGの目的を果たそうとしている。そして恋愛感情を持ったFAG達も自分の限界を越えようとしています。私としてはどちらも正しいと思いますよ」

「……では、人間とFAGが結ばれることは、可能なんでしょうか？」  
マリとの話で生まれたもう一つの疑問はそれだった。人間と対等であるには人間でなくてはならない。という言葉。

「それは……。そのFAGとマスター次第としか言いようがありませんね」

「……さつきから随分とのらりくらりとかわす言葉ばかりじゃないですか」

どつちつかずの言葉ばかりだ。ハッキリさせようが無い答えに轟雷はどうもイラつく。不機嫌な表情でそう言う轟雷にアーキテクトウーマンは申し訳なさそうに言葉に詰まった。

「轟雷。よしなさい」

心中を察したのかレーフが止めに入る。しかし轟雷は納得がいかない様だった。

「レーフの言う通りだよ轟雷……」

迅雷もそれに続く。

「マイノリティ、性的少数派という言葉は昔からあったよ……。世間的に普通じゃないという恋愛はその人それぞれが答えを見つければきなんだ……。その人が言った事は正しい……。ボクらで解決出来る様な事じゃないんだ……」

「二人とも……。すいませんアーキテクトウーマン。困らせる様な事を……」

渋々ながらも謝る轟雷。アーキテクトウーマンは「気にしないでください」と答えた。

「……でも、最後に聞かせて下さい。さっき言っていたFAGの限界を越える。それは……可能なんでしょうか。私達の本質はホビー、それを越える事は」

轟雷の真剣な表情だ。その表情を見たアーキテクトゥーマンは何か感じる物があったのかもしれない。少し違ったトーンで話し始める。

「そうですね……。かつて、あなた達FAGは人間とのコミュニケーションを目的に開発されました。その時はあくまで新世代ホビーとしてです。でもある時にその範疇を超える出来事がありました」

「……第二世代型、試作型轟雷と源内あおの生活ですね」

有名な話だ。轟雷にとっても行動の根源にある物である。

「その通り、本社の予想を大きく超える轟雷の成長に、結果的に試作型轟雷は当初の予定よりもずっと人間に近い情緒を得ました。代表的な物が涙ですね」

かつて試作型轟雷が再現不可能と言われた涙をナノマシンによって生成し流した。というのは量産型FAG達にとって有名な話だ。本社は試作型轟雷達のデータとノウハウを元に量産型のFAGを販売した。単純なビジネスに加えて、更なる多様性と成長の為に。

「知っています。……マスターに対して恋愛感情を持つ事も、その結果だったのでしょうか」

「そこまでは解りません。なにしろ試作型のFAG達は男性と接触したデータが不足していますので……」

「でも……今度のは自己完結で済む涙とは違います。恋愛となると直接マスターを巻き込む物じゃないですか」

「……私は、そしてFAGの開発者の多くは、それも乗り越えられると信じてます」

薄情な答えと言ってしまえばそれまでだ。しかし当事者でない彼女が言えるのはこれが精一杯だった。それは言われた轟雷の方も理解していたらしい。それ以上言う事は無かった。

「そうですねか……有難うございます……そして、すいませんでした。意地悪な質問ばかりになってしまつて……」

深々と頭を下げる轟雷、彼女にとっての解決にはなつたらうかと  
レーフは気になるところだ。

と、その時だった。

「轟雷…こんな所にいたのかお前!!」

どこかかと大人数を引きつれて黄一が入ってきた。後ろに轟雷が  
覗きをしまくったFAG達とマスター達を引きつれてだ。

「あーマスター!!と……げえ!皆!!」

顔面蒼白になり後ずさる轟雷。そして迅雷とライも同様の表情と  
なる。全員がもつと早く逃げておけば良かったと同じ事を考えてい  
た。ちなみにアーキテクトウーマンは邪魔にならない様にさつさと  
下がる。

「轟雷……覚悟出来てんでしようねえ……」ドリルランスを回すス  
テイレット。

「バトルなんて必要ないね……即粉碎だよ」ベリルショットラン  
チャーの二刀流を構えるフレズヴェルク。

「……地獄に落ちろ……」ルシファーズウイングの両手を向けるアー  
キテクト。全員が怒り心頭になっているのは解っていた。

——もう逃げられない。——

そう轟雷は思った。観念しようかと轟雷が諦めた時だった。

「なあ皆、待ってくれよ」

それに待ったをかけた少年が一人。黄一だった。彼は轟雷達の前  
に楯になる様に躍り出る。

「皆、今回は許してやってくれないか?」

「黄一さん。止めないでよ」

「許すなんてそうはいかないよ。轟雷がいなかったら今頃もつと気持  
ちよく……」

「?気持ちよく……?」

「な!何でもないよアーキテクト!」

慌てて必死にごまかすフレズであった。

「実はさ、今回轟雷が覗きをしたのは俺と轟雷が口喧嘩したのが理由  
なんだよ。こいつが俺と恋愛したいって言ってきた。……考えて

みたけど、こいつと恋愛する発想ってのは一切浮かばないんだよな。それでこいつとしてはショックだったみたいで」

「それでも轟雷が実行した事には変わらないよ」黄一と向き合ったフレズはどうしても納得がいかない様だった。ステイレットとアーキテクトも同様なのは表情から読み取れる。しかし黄一は動こうとしない。

「そうはいかないよ悪いけど、別に轟雷に恋愛感情は湧かないといったけどさ。コイツが俺にとって特別で大切なのは俺も変わらないんだからさ」

「そういえばさ……黄一にとって、轟雷はどういう存在なんですか？」

大輔が黄一に問いかける。ピリピリしたFAG達の反面、マスター達は健を覗いて特に怒ってる様子はない。大輔が聞いたのも、少しは場を和ませようとしたのだろう。

「そうだなあ……。俺さ、一人っ子だったから、ずっと兄妹が欲しいって思ってた。気がまぎれるかなって理由もあったからFAGを買ったんだけど、……買ってみて散々だったわ」

「え!？」

「口を開けば突拍子も無い事言うわ。変な所で意地張るわ。後俺の金でプラモ買うわで」

フォローに入るかと思えばこの恨み節だ。轟雷にとってはあんまりだった。

「な！何を言ってるんですかマスター！私はですね！」

「まさに俺にとって手のかかる妹だよ。轟雷は俺の妹。掛け替えのない、俺の大切な妹なんだ」

「え……いもう……と？」

自分にとって意外極まりない言葉だった。きよんとする轟雷を尻目に黄一は話を続ける。

「幼い家族が迷惑かけたら上がフォローすんのは当然だよ。なあ皆、今後埋め合わせはするからさ。今回は許してくれないか？」

そう言っつて黄一は深々と頭を下げた。奇しくも轟雷と同じポーズで、だ。ステイレット達は無言でそれを見つめる。

「……まあ、黄一さんがそう言うなら、轟雷も見た事を言わないつても付け加えるなら、僕は許しますよ」

まず健が黄一に対して賛同する。

「……黄一さんが轟雷に言っただけ聞かせるなら……、私のマスターとの親友なんだから悪い人なわけじゃないもの」ステイレットがそれに続く。「マスター……ボクの意見はどうなるのさあ」フレズは不満そうだが健はそんなフレズをなだめる。

「……いつまでも恨んでいてもマスターの顔に泥を塗る……。今回は許す……」アーキテクトは大輔と顔を見合わせながらそう言った。

全員が手に持った武器を下ろす。それは轟雷を許すという意味表示だった。

「マスター……」

轟雷が背を向けた黄一に呼びかける。黄一は振り向かずと言う。

「申し訳ないって気持ちがあるなら、まずは迅雷とライとで謝れよ」

そう言っただけ黄一は体をどける。ステイレット達と轟雷達とで目が合った。すぐさま迅雷が轟雷の隣に移動し、ライは逃げようとしたがレーフに耳を引っ張られて轟雷の横に移動。三人並ぶと取るべき行動は一つだ。

「その……ゴメンなさい！」

アーキテクトウーマンにとつたのと同じ動作、そして黄一と同じ動作で轟雷が頭を下げると、迅雷とライも同じ動作で謝った。

「何度も同じ事言わせないでよ。黄一さんに免じてよ」

「……親は選べない。あなたは自分のマスターに感謝すべき……」

今回は特別と付け加えながら轟雷達への怒りは見せなかった。覚悟していた状況とは違う終わり方に轟雷は安堵する。

「素晴らしい！マスターとFAGの絆の繋がりが！見せて頂きました！」

と、そこへ静観していたアーキテクトウーマンが割って入ってくる。轟雷達はともかく、ステイレット達はそのアーキテクトウーマンの姿に絶句した。

「ああ申し訳ございません！ワタクシこういう者です！」

と、自己紹介の下りは轟雷と同じだ。名刺を見せて自分の事を説明する。

「えーと、つまり……俺……いえ自分が連絡入れたのが心配で派遣されたのがあなたと」

「はい。最も杞憂でしたが。こういったマスターとFAGの絆を見る度に、FAGの開発者冥利につくという物ですよ」

「ど、どうも……」

「そして……そのお友達もそれぞれ強い絆を結んでいるのですね！」

アーキテクトウーマンはステイレット達を、そしてその後ろのヒカル達を視界に入れながら感激した声を上げるのだった。最もステイレット達もアーキテクトウーマンに対する警戒を解く事はなかったが、

アーキテクトウーマンは他のFAG達やマスターにも大いに興味があるらしく、食い入るようにヒカルやステイレット達を色々な角度で見ている。

そして程無くして、全員が別れた。冬の為に辺りはもう夜の闇に包まれており温度は一層低くなる。吐く息が白い。そんな中轟雷達は人の多い通りを歩いていく。

「つたく、あつちこつちたら一回しで散々な日だったな」

「うう……すいませんマスター」

黄一のバッグの中に入った轟雷が顔を覗かせながら、バツが悪そうに答える。

「ま、少なくとも今後は覗きなんてやめておけよ。今回許してもらえたのは特別なんだから」

「はい……」

「まだ恋愛したいって思ってるか？」

「いえ、それはもう諦めましたよ。あんな風に言われたらね……お兄ちゃん」

あざとい感じで呼ぶ轟雷に昨日ほどではないがうすら寒さを感じてしまう黄一だった。



「悪い、普通に今まで通りで頼む」

「もう！マスターったら！……あの、マスター？」

「ん？」

「……あ、何でもないです」

『ステイレット達の恋愛って、……成就すると思いますか？』そう轟雷は聞いたかったが、無理だと返ってくるのは目に見えていたので言えなかった。でも何かしらは黄一と会話をしたい轟雷だ。

「あの、マスター」

「だから何だっての」

「私、いつか自伝でも書こうと思うんです」

「自伝？なんでまた」

「やっぱり私、試作型轟雷の様に皆に影響を与えるFAGになりたいです。その為にも自分の事をアピールしたいって思ってます」

「でもお前の生活ってそんな売り物になる位面白いもんかねー。俺達やお前の周り、百合アニメみたいに、『キャツキャウフフなワンダーランド』って感じの面白みもない」

『破壊も創造もすべてお前が決める』って位重苦しい物でもないですよ。いつか、ですよ。……ステイレット達の恋愛感情も記録しておきたいってのもあります」

「それ、またステイレット達に怒られないか？」

「解ってますよ……。でも、誰か一人にでも知っておいて欲しくて……。もし、ステイレット達の恋が誰も成就できなかったら可哀想で……。そしてもし成就できたのならそれを知って欲しいと言う気持ちがある……。が……」

「だったら気持ちは解るけど尚更やめとけよ」

「……どうして、私達は心だけ中途半端に人間に近づいたんでしょうね……」

「轟雷。でもな、少なくとも俺にとっては、お前に心があるおかげで幸せだ。それを忘れるなよ」

バッグの中から顔を出す小さな妹に対して、大きな兄は笑顔を向けた。

「マスター……有難う。黄一お兄ちゃん」

そう言つて妹も兄に笑顔で返すのだった。

その頃、夜の高速道路を疾走する車が一台、運転席に座ったドライバーはハンドルを握らず、車内の丁度中央部に備え付けられた台に、スマホを立て掛けて連絡を入れていた。今では当たり前となった自動運転なので問題は無い。運転席に座った女性。アーキテクトウーマンは、ファクトリーアドバンス社へと連絡を入れていた。

「はい……。いきなりですが一度にターゲット全員に接触する事が出来ました。直接話をしたというわけではありませんが」

そう言つてアーキテクトウーマンは、被ったままのアーキテクト型ヘルメットの側面を一部開く。接続端子が露わとなり、スマホとヘルメットをコードで繋いだ。

「今そちらにサンプルのデータを送ります」

そう言つてスマートフォンにある画像が表示された。ステイレッツトとヒカル、フレズヴェルクと健、アーキテクトと大輔。恋愛組が集合していた時の画像だった。

「彼らの中から希望が生まれるはずですよ。人間とロボット、お互いが新しい関係を結ぶ希望の！」

画像を転送するアーキテクトウーマンの声は、まるで救世主でも見つけたかのようなだった。

## ep18 『ヒカルと量産型ステイレット3』(前編)

その日は12月24日、クリスマススイブ、言わずと知れた年末の大イベント、大抵の人は家族や恋人と過ごすのが基本と言われている日であり、筆者の様な人によつては忌まわしき日である。そしてその日の夕方、ある少年は、ある意味想い人と二人でクリスマスを過ごしつつあった。

「悪い。ちよつと休憩」

その少年。自室で机に向かつていたヒカルが目頭をつまみながら言った。そして柔軟として、両手を上に上半身をのけぞらせる。柔軟性のある背もたれは抵抗なくヒカルの身体を後ろに導いた。

「もう！マスタータラ勢いついてるんだから一気にやつちやいましょうよ！」

それをステイレットが不満げに呟く。勉強机の上に立つ15cmの少女の周りは、袋から出したプラモパーツのランナーが散乱していた。

「つたつたつて、これを一気にやるのは中々に骨でしょうが。いくらお前が手伝ってくれてるつていってもさ」

ヒカルがそう言いながら組み上げた一体のプラモを机に立てた。机の上に置かれたのは翼を広げた白い大鷲のプラモだ。二人が作っているのはルシファーズウイング。この大鷲型メカと馬型メカを合体させる事により、大型パワードスーツとなる新型ギガンティックアームズである。

「とりあえず鳥の部分は完成したから区切りはついただろ。残りの馬の部分は休憩後にしようぜ」

「ハーピーとユニコーンよそれ……。まあいいわ。折角の私へのご褒美ですもの。いい加減に作られちゃ困るものね」

ご褒美、前回の期末試験勉強でステイレットはヒカルの勉強を手伝い、結果は上々。何よりその中でステイレットは自分のトラウマを少しながら克服してみせた。今回のヒカルが作ってるルシファーズウイングはそのステイレットの為のご褒美である。

——でも……確かにトラウマ克服に向けていい傾向なのは嬉しいけどさ……かなりの値段でサイフが痛いぜ……——

ギガンティックアームズの類を買った事のない&親の仕送りに頼ってる(※部活をしている所為でバイトする時間的余裕がない)所のあるヒカルにとつて、ルシファーズウイングの値段はかなりサイフに痛かった。更にヒカルの生活費は親の意向でステイレットに握られてる。

——ま、ステイレットが喜んでくれるならいいんだけどさ——

机の上のステイレットは興味深そうに分離したルシファーズウイングを眺めていた。説明書も熱心に読んでおり、これが彼女にとつて楽しみにしていたというのが解る。

「お前本当に楽しみにしてたんだなルシファーズウイング」

「そりゃね？私が装着前提になつてるギガンティックアームズですもの」

「でも良かったのか？これがお前の欲しいクリスマスプレゼントなんてさ。あんまり女の子の欲しがるもんじゃないよな……」

ついそう本音が出た。FAGが人間でないとしても、女の子の感性をいつも見せつけられてはそう思ってしまう。

「何言つてんのよ。……所詮私達FAGは人形なんだから、人間の女の子みたいに扱われても困るわ」

自虐的に笑いながらステイレットは答えた。

「でもさ……」

「何よお。そんな事より人間の彼女が出来ないマスターの学園生活を心配した方がいいんじゃないの？」

おどけてからかう感じに言うステイレットにヒカルはムツと顔に不満を出す。

「お前なあー！」

ヒカルが言葉が続けようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

「あれ？誰だろう？」

そう言いながらヒカルが玄関を開けると、そこには……

「こんちわー」

「あれ？黄一？健君と大輔も一緒か」

いつものFAG仲間の親友達だった。全員が各々の相棒を連れている。

「よおヒカル。クリスマスはやっぱ寂しく一人だよな？」

「黄一……友達を選ぶ権利は俺にもあるんだぞ……」

ステイレットといいなんで皆、俺をこう決めつけるんだ……。冗談にしても皆タチが悪すぎる。と心の中で愚痴るヒカル。

「つていうかこんな時に俺んち来るって事はお互い様だろうが！」

「そりやそうだ。まあ彼女なんかいなかったって楽しい高校生活に支障はないさ。というわけでこれを持ってきた」

若干自棄になりながら同意する黄一は正方形の白い箱を見せた。それはクリスマスお馴染みの……。

「お！クリスマスケーキ！」

「轟雷以外家族が今日いないからさ」

「更に飲食できるのはマスターだけですからねー」

黄一が言おうとしていた事を轟雷が先に言う。そしてそれに大輔が言葉を続けた。

「どうせなら大人数の方がいいって黄一から誘われてね。ヒカルの家にお邪魔しようって事になったんだ」

「そう言う事か。だったら事前連絡を入れてくれよー。俺に予定あったら台無しでしょうが」

「まあその時はその時って事で、お詫びとして僕の方はこれを持ってきたよ」

大輔が持ってきたのはフライドチキンの詰め合わせ。クリスマスセットだった。少年一人含めて大の男三人が食べるとなると丁度いいであろう量だ。

「おつと大輔！そういうお土産があるなら歓迎するぜ！」

「ちよつとマスター！私の意見も聞かないで話を進めないでよ！」

そこをステイレットが流れを遮る。突然の展開に彼女は不満げだ。

「あ……悪い。駄目か？」

「別にそうは言っていないわ。来るなら事前に言ってくれば、ちゃん

と料理作っておいたのについて思ったのよ」

今からじゃ大したもののは作れないわよ。とステイレットは言う。ルシファーズウイングを作るのが先送りになってしまふのは特別不満というわけではないらしい。

「そうだなあ、何か買ってくるか？」

と、その時だった。玄関先で一台のトラックが停車する。宅配便だ。その場にいた全員が降りてきた宅配員を見ると、二つの長方形の箱を抱えながらこちらに来る。

「宅配便ですーサインお願いしますーす！」

「あ、お疲れ様ですー」

そう言っただけで社交辞令を交えながらサインを書いてヒカルは荷物を受け取る。発進するトラックを見送ると全員が家の中に入って居間で箱を開ける。

「わあトマトですかー。更にこっちはウドの詰め合わせですね」

健が声を上げる。届いたのはトマトの詰め合わせとウドの詰め合わせだ。

「げえー……よりによってトマトとウドかよ……」

うんざりした風にヒカルは言う。ヒカルが不満全開にした反応に全員が気になった。

「お前嫌いだもんなー。トマトとウド」

「へえ、ヒカルってトマトとウドが嫌いなんだね。何でも食べる印象だったから意外だよ」

大輔の驚いた風な反応。嫌いな食べ物がある印象もなかった。

「ある意味当たってるよ大輔。コイツ子供の時の食い意地は凄かったんだぜ。好物はヤギ肉とドジョウなんだよ」

「それもちよつとマイナーだなあ」

「コイツ幼稚園時代に遠足で立川のみどり地区に通りがかった時さ。ヤギ見るやいなや全力疾走で飛びついて、凄い形相で噛み付いた事あったんだよ。逃げるヤギにロデオ状態で噛み付き続けてさ。ヤギの群れ全体がパニックになっちゃって」

「つてうおい黄一！勝手に人の恥ずかしい過去をばらすなー!!」

顔を真つ赤にしたヒカルが黄一の頭に軽めのチョークスリパーをかける。

「ぐあぁっ!!悪かったって!!」

バツが悪そうに黄一は答える。受け答えが出来るという事は首に入っていないおふぎげだ。ヒカルは気を付けるよと付け加え腕を解いた。そして差出人を確認していたステイレットに問いかける。

「ステイレット。差出人はやっぱり……」

「予想通りよ。出張中のママとパパだわ」

FAGのステイレットが言うパパとママという言葉にフレスは気になった。

「?ヒカルのパパとママって事?」

「出張中なんですか?ヒカルさんのご両親って」と健もほぼ同時に質問をする。

「まあな、本当は父さんの単身赴任だったんだけど、母さんもついて行っちゃたんだよ」

「おかげで私が家事全般をしてあげなきゃいけなくなっちゃったわけよ。いなくなっちゃった事で普段家事をしてくれるママの有難みは解ったかしら?」

「お前まで黄一みたいな追い打ちかけないでくれよー。当然親にもお前にも感謝してるからさ」

そういうヒカルにステイレットは満足げな笑みを浮かべる。いじられてもうまく回避するのがヒカルの良い所だな。と、やりとりを見ている大輔は思った。

「そうだマスター!折角だからトマト鍋作りましょ?これだったら簡単に人数分出来るわ!」

思いついたようにステイレットは言う。

「それに……マスターもトマト鍋なら平気でしょう?」

「まあな」とヒカルは言う。トマトなら何でも駄目というわけではない。

「でも今冷蔵庫には大したもん入っていないよな確か」

ヒカルは思い出したように言う。ステイレットも思い出したよう

に「あ」という反応を見せた。

「折角のクリスマスなんだし、もつと具材増やしたいから買ってきていいか？下準備の方はステイレットに任せたい」

「そうねお願い。オリーブオイルやチーズは揃ってるから、好みの物を買ってきていいわよ。折角だからヤギ肉とドジョウ入れちやましょ？」

そう言つてステイレットは家の奥へと飛んでいく。暫くすると食費の一部を持ってきてきてヒカルに渡した。

「買い物かい？だったら俺達も手伝うよ」

それに賛同するのは黄一と大輔と健だ。

「別に俺一人で良いんだけどな」

「ついでに俺達の好きな物も買ってきて鍋に入れてもらおうかなって思つて、自分の物は自前で払うからいいだろ？」

「詫びつてよりそっちが目的だろ」

「ん〜。まあいいわ。よっぽど変な物でもないなら入れても大丈夫よ」

ジェットエンジンのセイレーンmkIIを装着し、素体にエプロンをつけたステイレットがそう言った。時間が惜しいとばかりに料理に取り掛かるようだ。

「まあグチグチ言つても仕方ないな。全員で行つてくるよステイレット」

「あまり遅くならない内に帰ってきてね」

台所に飛んでいくステイレットに対して言うと、ヒカルはウインドブレーカーを羽織ると既に防寒着を着た黄一達と玄関へ向かう。

「あー！だったら私もついて行っていいですか？」

と、そこへ名乗りを上げたFAGが一人、轟雷だった。

「轟雷？……怪しいな」

真つ先に黄一が怪しむ。

「ぎくっ！な！何を言うのですかマスター！この私が何か打算があると思うのですか!?!」

「打算無い奴は『ぎくっ』とか言わない!」



憤慨する轟雷に黄一は当然ながら冷静だった。

「……実はですねー。買い物ついでにクリスマスプレゼント欲しいなーって」

うって変わって機嫌を伺う様な対応で接する轟雷。

「プレゼントだったら親からお前にプレゼントいった筈だろ。フレームアームズの轟雷改」

「それがですねー。……製作に失敗しちゃいまして、二個目が欲しいなーって……汚し過ぎちゃって」

「お前ね、自腹で何とかしなさい」

「ケチー！仕方ないからとりあえず付いていきますよ」

「模型屋行っても、見るだけだかな」

一応の話はまとまった。あまり時間はかけてられないと男達と轟雷は出掛けていく。

「留守を頼むぜ皆。じゃ行ってきまーす」

そう言って防寒着を着た男達は家を出ていった。まだ日は沈んでいないが緑のほとんどない冬景色。当然ながら肌寒い。

「ここからならショッピングモールが近いから歩きでいけるな」

「あるんですか？モールとはいえスーパーにヤギ肉って……」

そんな事を言い合いながら男達は買い物へ行くのだった。

男性陣がそんな事をしている中、轟雷を覗いたFAG達女性陣は鍋の準備に取り掛かる。といってもステイレットの手伝いがもっぱらだ。

「来客用の食器が棚の一番上にあるから、好きなもの出しておいでね」

電気コンロの上で土鍋にトマト鍋の準備をするステイレット。その傍らで轟雷達に支持を出していた。

「それにしてもさー。いつ頃からのの？ヒカルの両親が仕事で家を空けたのって」

台所のテーブルに食器を並べるフレズが言う。彼女達のサイズでは一つずつ運ぶしかない。

「そうねー。もう一年近くになるわね。ママからは色々家事を教えて貰ったわ」

「どういう人だったの……?」

今度はアーキテクトが聞く。エプロンとキラービーク装備の彼女はステイレットの隣りで鍋製作の手伝いだ。アーキテクト自身トマト鍋のレシピに興味があるようだ。

「パパはちよつと寡黙だったけど、行動力と誠実さのある人だったわ。ママの方は……反対に豪快な人ね。……どっちともマスターと似てる所はあつたわね」

この場に轟雷がいたらもつと詳しく伝えられたかもしれないとステイレットは思う。轟雷だけはステイレット以外でヒカルの両親に対して面識があるからだ。

「お世話になった人なんだね」とフレズ。

「本当にね。特に私がこの家に来た時なんかは」とステイレットは苦笑しながら言う。思い出しているのだろうか。

「その話、興味がある……聞きたい……」

「……ちよつと恥ずかしいわね」

「ボクも聞きたいなステイレット。お前とヒカルの始まりの歴史」

「……そうね。今日はクリスマスだから話してあげる。……特別なんだから。感謝してよね」

そう言つてステイレットは話し始めた。自分とヒカルの両親の繋がりのお話を……

話はステイレットが最初のマスターに捨てられて、ヒカルが引き取ると言つて本社へとオーバーホールへと送られた時に遡る。……その時のステイレットは、かなり精神的に自暴自棄になっていた。本社に送り返されてオーバーホールを受けてる間は、  
「どうせまた捨てられる……」

そんな事ばかり言っていた。信じてた人に、信じようとしていた人に裏切られたのだから。一方的にマスターに捨てられて、マスターがいきなり変わつて納得するには時間があまりにも足りなかった

……。そしてオーバーホールの後に、箱の中に入れられて眠りについて、登録手続きを済ませたヒカルの家送到了。

「ん……んん……」

箱が開かれた事に反応してステイレットの目が醒めた。……どうも目の前がぼやけている。暫く闇の暗い環境にいた所為だろうか。光と、眼の前の人型のシルエット位しか判別できない。彼女はどうせマスターだろうと判断し喋り出す。

「……あついたのアンタの家。アンタも物好きよね。捨てられた私を拾って引き取ろうだなんて、とんだアホっ子よ。さぞかし親もアホ面してんでしょね。親の顔が見てみたいわ」

自暴自棄になっていたステイレットは思いつく限りの毒を吐いた……いっそこで怒って捨ててくれた方がスツキりする。そう思いながら……、だが相手の反応は、というか相手自体がステイレットの予想とは違った。

「うおおっ!!すっごい!喋った!!」

ヒカルとは明らかに違う女性の声、直後に目のぼやけは収まってくる……。目の前で子供の様に目を輝かせていたのは……。マスターの母親である。

「……え?!」

別人であるという事に気が付いたステイレットは驚き固まった。

「ただいまー」

直後にヒカルが帰ってきた……。少年が玄関から入ってきて一番に目にしたのは……、

「あ、ヒカルおかえりー」

玄関先で箱から身を起こしたステイレットと、勝手に箱を開いた母親の姿。一瞬で状況を理解したヒカルは母親に慌てて食って掛かる。「……母ちゃん!!じゃねーや母さん!!また勝手に俺の届け物開けたのかよ!!!」

息子の怒る姿に母親は気にも止めずに片手をヒラヒラさせて答えた。

「怒らないでよー。息子とのコミュニケーションって事で」

「親しき仲にも礼儀ありでしょうが!!」

「で、何なのこのパンツ丸出しのエロ人形は？新しいエログッズ？」  
『違う!!』

ステイレットとヒカル。お互いが顔を真っ赤にしながら叫んだ。その時が初めてステイレットとヒカルの息の合った瞬間だったのは言うまでもない。

居間に移動して状況をヒカルとステイレットは説明した。

「へえー、フレームアームズガールねえ」

ヒカルと母親はソファに座り、ステイレットはテーブルに置かれた箱から立ち上がって説明をしていた。

「そう言うわけよ。私達が作られた理由は人間とのコミュニケーションとFAG同士のバトル。新世代の人形ね」

主ともいうべき相手に対してステイレットは若干ぶつきらぼう気味だった。

「コミュニケーションって事はエッチな事出来るの？」

『出来ない!!』

再びハモる二人。あつけらかなとした表情で言う母親に対して妙な恐怖心を感じるステイレットだった。

「なんなのよ……FAGをそんな下品な風に見るなんて……」

額に手を当てるステイレット。予想の斜めを行く家の人達にステイレットは頭痛を感じていた。

「だってそうでしょ？パンツ丸出しにしてるんだし」

「っ！ボディスーツよ!!」

両手で股間部の前後を抑えながらステイレットは叫んだ。

「でもいいなー。こんな風に会話できる人形が今はあるんだー」

興味深そうにステイレットを眺める母、それに対して「母さんも昔は人形で遊んだの？」と息子のヒカルは聞く。

「当然。もちろん子供の話よ。なんかアンタが羨ましいわねヒカル。今の人形は本当に友達になれるって事じゃない」

「友達……でも私は捨てられたわ。結局人間の真似をしたところで人間じゃないのよ。私は……」

どうも地雷を踏んでしまったようだ。爆発とはいかずとも元々不機嫌だったステイレットの機嫌は更に沈む。

「情を移さないで頂戴。所詮人間と友達になれるのは人間だけなんだから……」

俯きながら胸中の不安を混ぜての忠告、だが……

「あー、ステイレット。シリアスやつてる所悪いんだけど、母さんだったらもういない」

「はあ?!」

言ってる相手がもういない事にステイレットは絶句した。

「なんかキラキラした目で出てったわ」

「非常識にも程があるでしょアンタの親……」

「苦労してます……。と、それよりも届いたんだったらお前の装備を作らないとな」

そう言っただけステイレットは箱の底にあるランナーを取り出した。ステイレット用の基本装備がついておりこれをプラモデルと同じ要領で切って、組み立てて完成となる。ステイレットの武装は飛行能力も有しており、これが有ると無いとで大きく移動の幅に差が出る。

「安物のニツパーでは切らないでよね」

「ガン○ラ用でよけりや良いのがあるから大丈夫だよ」

「よりによつてガン○ラ……コトブキニツパーとかないわけ?」

「文句言うなよ。あれ高いんだから」

「まあいいわ。作って頂戴」

「ごこじや母さんうるさいから俺の部屋でな」

そうしてヒカルはステイレットを箱ごと部屋へと運ぼうと移動する。ヒカルが持った箱から身を起こしながら、ステイレットはついでとばかりに家の風景を見ていた。当然ながら以前のマスターの家とはまるで違う風景だ。

—— 今度の家はいつまでいるのかしらね…… ——

卑屈にそんな事を考えるステイレット、ヒカルには解る筈もなく階段を上がり、廊下を歩いていく。一分もかからずに部屋に付いた。

「ごこじだ」

そういつてヒカルは部屋のドアを開けて入った。部屋の4分の1を占めるシングルベッドに、あまり本来の用途では使つてなさそうな勉強机、本棚の少年漫画に、戸棚の上のプラモデル、壁にはバスケットボール関係のポスター。インテリアを気にしてなさそうな簡素な雰囲気なステイレットは感じた。男の子の部屋だな……と。

「少しは片付いてるのね」

「まあな」

本当はヒカルがFAGをお迎えするという際に、女性の情緒を持つてるといふ事でヒカルが全面的に部屋の掃除をしたわけだが、ステイレットに言えるわけがない。

「じゃあま、とりかかるとしますか」

そういつて机に向かうとビニール袋からパーツを取り出す。ヒカルはニツパーでランナーとパーツを切り離し、組み立てていく。パチン、パチンとパーツを切り離す音が静かな部屋に響く。

「綺麗に作つてよね」

そう口うるさくいつてるとドアからノックがした。ヒカルがどうぞといふと入つてきたのは母だった。

「あ、ここにいたのね」

「何か用」とヒカルが答えると母は人形用の服を何着か持つてきていた。

「折角可愛い女の子が来たつていうのに、そんな恰好じゃ可哀想だつて思つてね。お古だけど人形用の服を着てもらおうかになつて」

持つていたのは幼児用の人形服だ。だいぶ古いらしい。白い生地は黄ばんでいる所も多く見える。

「え……別にいいわよ」

「ヒカル、このえーと……なんだっけ」

ステイレットの事を呼ぼうとするが、どうもド忘れしたらしく名前が出てこない。

「ステイレットだよ」とヒカルは告げる。

「そうステイちゃん！ちよつと借りるわねー」

そういつて母はステイレットを掴むと持つていた服をステイレッ

トに合わせる。突然の事にステイレットは声を上げた。

「ちよーちよつとー」

服のサイズが合わない。本来想定していた人形とFAGのサイズが違うのかどうしてもブカブカになってしまう。

「あー合わないわね。こりやサイズ合わせた方がいいかな」

「ちよつと。そういうのやめてよ」

こういう風に情けをかけられるのを今のステイレットには我慢できなかった。

「だから言ってるでしょ。情けをかけるのはやめて頂戴。私は友達になれないんだから」

「ふーん……友達にはなれない。ね。だったら主人として命令するわ。私の言う通りに衣装を聞きなさい」

「登録したの俺なんだけどな……」とヒカルがぼやいた。

「……あーもう……もう好きにしなさいな」

そう言っつてステイレットは抵抗をやめた。母はそのままステイレットを持ったまま出ていく。

母はそのままリビングへと移動する。テーブルの上には先程なかったミシンが置いてある。さつき移動したのはこれらを取りに行っていたという事だ。母はテーブル前のソファに座ると巻き尺を取り出した。

「はーい。ちよつとサイズ図るわよー」

「へ……ちよつと待ってよ私の意志は？」

母はステイレットの意志はお構いなしに巻き尺をあてがいサイズを測っていく。巻き尺がステイレットの肌に当たるとピクンと体を震わせた。

「ん……くすぐりたいからやめてよ！」

「じつとしてて。へー、このサイズでこのバスト……人間サイズにするとなると大きさは」

「うー、変わらないわよどの機種も、共通規格なんだからあ、ていうかわざとやってない？」

恥ずかしそうにするステイレット。と、その時に母の指がステイレットの腋を意図したかどうかは解らないがなでる。

「んひゃっ」

仏頂面だったステイレットはくすぐったさに笑顔を見せた。

「あら、やっぱり笑った顔の方が可愛いのね」

「っ！」

手を止めた母の反応に、すぐまた元の仏頂面に戻るステイレット。

「あらら、もうちよつと愛想良くしてくれたっていいのに」

「……悪かったわね。愛想がなくて……。どうせ私は捨てられた出来損ないよ」

まさに友達に突き放されたか、失恋でもしたかといった風に母は感じた。

「女の子がそんな風にしてちゃモテないわよ」

「だから私は人間じゃないの。何度も言ってるじゃない。いい加減解ってよ」

「難しい事は解らないわね」

「……」

「……でさ、私の息子があんたのマスターなわけだけど、ヒカルの事……どう思う？」

「バカね」

即答だ。ステイレットとしてはわざと辛口な事を言って怒らせようという魂胆だろうか。が、自分を拾った事をステイレットは素直にそう評した。

「あ、アンタもそう思う？」

「な……」

これで怒る素振りも見せずにカラツとした反応にステイレットは「普通怒るでしょ」と思いながらも閉口した。

「昔っから変な所あったのよアイツ、アイツヤギ肉が好きなんだけどね」

「また随分とマニアックな物を……」とステイレット。

「聞いた話だけど、幼稚園時代に遠足で立川のみどり地区に通りが



かった時さ。ヤギ見るやいなや全力疾走で飛びついて、凄いい形相で噛み付いた事あったのよ。逃げるヤギにロデオ状態で噛み付き続けたさ。ヤギの群れ全体がパニックになっちゃって」

「本当にバカね」

「そう、バカよ。子供の時からいじめを受けていた子を庇ったり、それで相手と喧嘩してボロボロになった事もしょっちゅうね。あいつつたら石頭だから殴った上級生の方が手を痛めて泣き出したって話よ」

コロコロと笑いながら話す母親に対して、ステイレットの方は渋い顔は変えなかった。

「……ああそう言う事。私もそんないじめられっ子同然って事ね」

「でも最後までアナタ信じようとしたんでしょ？ 最初の持ち主をさ」

「……」

捨てられた時を、置き去りにされた時を思い出す。確かにこれで捨てられたと思った。だが最後まで信じてようとした。でも駄目だった。それが逆効果でステイレットの心に与えた傷は大きい。

「良い子じゃないアナタ」

「所詮人に仕えるのが私達人形のつとめよ。馬鹿正直にそれに従うしかないの」

「そうかしら？ そうやって投げやりになってるのは人間的としか言いようがないけど」

「投げやりになってなんか……」

「今はのんびり休みなさいな。どんな辛い思い出も、時間が癒してくれるものよ。大丈夫。追い出したりなんかしないわ。ご覧のとおりここでは緊張する要素なんか全くないんだから」

「……ホント馬鹿な所ねこの家は」

「楽でいいでしょ？ さて、こっちは服を作り直すとしますか。ミシンを使うからしばらくヒカルの所行ってなさいな」

そう言うって母は人形服のサイズをステイレットに合わせるべくミシンを起動させる。母の顔つきは真剣そのものだった。近寄れないと思ったステイレットは渋々とヒカルの部屋へと移動しようとする。が、今の状態は素体であり移動出来ない。テーブルの上でミシンの動

きを、母の表情を目で追っていくだけだ。

——…さつきまでとは全然違う表情……

なんだか頼もしく思える。同時にふとステイレットは思った。『本当に、私の為にやってくれてるんだ』と。

——…何言ってるんだろ私……

人間なんて信じられない。と思っていると、ヒカルが上から降りてくる。

「あーここにいたんだ二人とも」

「どうしたのよ」とステイレットが聞く。

「組みあがったぜ。お前のアーマー」

ヒカルがそう言っただけステイレットを肩に乗せ、自分の部屋に移動させる。机の上には組みあがったアーマー一式とガトリングガンに二連装ハンドミサイル、日本刀が置かれていた。

「ふうん。……まあまあね。そこそこ綺麗に作ったじゃない」

まじまじと装備を見ながらステイレットは評価を口にする。

「とりあえずちゃんと飛ぶか確認よ」

そう言っただけ装備一式を身に着けると、背中エンジン『セイレーンmkⅡ』を起動。緩やかながらにステイレットは机から飛び立つ。どうやら問題はなさそうだ。

「装備つけるとなんかお前サメみたいだな」

「どういう意味よそれ」目線をヒカルに合わせながらステイレットはホバリングで答える。

「額の形とか全体的なシルエットだよ。ていうかちやんと問題なく飛べるな」

「まあね、こうやって飛べるなら悪くない出来たて事かしら」

そう言っただけ部屋の中を飛び続けるステイレット。と、本棚の近くを飛んでいた時に異変は起きた。セイレーンmkⅡが『ガスッ』と詰まったような音を出し、エンストを起こしたのだ。

「え？ちよーちよつとお!!」

異変に気付いたステイレットはどうか体勢を立て直そうとするが落ちそうになる。とつさに本棚の本の上部をつかんで本棚の上に

降りようとするが、ズルツと本が抜けて本ごとステイレットは床に落ちた。

「キヤー!!」

「ああっ!」

見開き状態に広げた本の下敷きになっていたステイレットにヒカルは駆け寄る。

「大丈夫かステイレット!」

眼を開けてどうにか答えようとするステイレット、しかし直後、ステイレットの出した声は。

「っ!!きやああああっ!!」

悲鳴だった。ヒカルは何かあったのかと本を持って引きはがすとステイレットは恥じらいで真っ赤になっていた。

「ステイレット!大丈夫か!?どこか痛いのか?!」

「こーこの変態!!その本!!」

両手で目を覆いながらステイレットはそう声を上げた。ヒカルはなんだと本を見るとその見開きになったページは女性のヌードグラフィアが写っていた。ステイレットは目の前でそれを見てしまったわけだ。

「あ……これか」

「不潔!!最っ低よ!!そんな本持つてるなんて!!」

健全な男子なら別に普通ではあるが、免疫のないステイレットにとってはそうとしか思えなかった。

「別に普通だよ!それより体痛くないか?さつき落ちたんだから」

落ちたステイレットの身体を触って確認しようとするヒカルだったが、ステイレットは当然それを手足をばたつかせて拒否。

「触らないでよど変態!!」

「っ!おい!さすがに怒るぞ!!」

不服そうに表情にするヒカルとステイレット、そんなやり取りをしてると母が部屋に入ってきた。

「ステイ子ちゃん。服出来たよーってどうしたの二人とも」

問いかけようとするが二人は答えない。特にステイレットの方は

拒絶するかの様にそっぽを向いていた。……これがステイレットが  
来て一日目の出来事であった……。

e p l 9 『ヒカルと量産型ステイレット3』（中編）

ステイレットが来てから数日がたった。

「お婆様、こちらの食器はもう並べてもいいですか？」

場所は夜6時半の台所、トマト鍋を煮込んでる母の後ろで、ステイレットは母の手伝いをする。といってもステイレットの大きさからして小さな子供の様な手伝い位しか出来ないが、

「うんお願いね。悪いわね自分では食べられないのに」

この数日で母はステイレットの事を、FAGとはどういうものか解っていった。

「いえ、人に仕えるのが私達人形の役割ですから」

そう言い飛びながらステイレットは食器を並べていく。飛行用エンジンと、母の手直した人形用服を身に着けている。ステイレットにとつてまず始めに打ち解けたのが母だった。

「ただいま。おお、もうすぐ夕飯か……」

続けて台所へ中年の男が入ってくる。この家の家主である父だ。

「おかえりなさい、おじ様。今日もお仕事お疲れ様です」

ステイレットも目の前の相手に対して恭しくお辞儀をする

「ああ、ただいまステイレット」

「鞆お持ちしますよ。くつろいでいてくださいね」

そう言つてステイレットは父の鞆を持つと、朝あつた場所へと戻すべく飛んでいく。

「なんだか若い子が増えたみたいで空気が明るいな……」

「へえ……どうせ私は若くないですよーだ」

父の感想に対して母は不機嫌そうに振り返る。

「や……そういう意味で言つたわけじゃ……」

そういう父に対しすぐ不機嫌そうな表情を解く母、冗談だったらしく険悪な雰囲気はない。

「ま、空気が明るくなつたつてのは同意だわね。積極的に手伝つてくれて本当にいい子だわ」

「しかし、ヒカルに対してはどうなんだ？」

ダイニングキッチンの椅子に座りながら言う父に、母はバツが悪そうに答える。

「あー、ヒカルにはね。相変わらずだわ」

ステイレットは父の鞆を部屋に置きながらキッチンに戻ろうとする。と、そこへ、

「ただいまー」

玄関を開けてヒカルが帰ってきた。バスケット部の活帰りだ。

「あつ……」

姿は見えないが、声でステイレットは気が付いた。今のステイレットには気まずさがある。エロ本の事をまだ引きずってるのだ。ヒカルを避けるべきかどうか考えてると、ヒカルがやってくる。今のステイレットが立っているのは洗面所の前の通路だ。手を洗いここを必ず通る。と、二人は鉢合わせした。

「ただいま」

ヒカルの方は普通に声をかける。ステイレットの方もおかえりと返そうとするが、前日のエロ本のビジョンがフラッシュバックする。すぐさまステイレットの顔面は真っ赤になる。

「お……」

おかえりと返そうとするがステイレットは恥ずかしさのあまり無言でその場から飛んでいった。

「あ……今日も駄目か」

残念そうに呟くヒカル。その様子を両親二人は物陰から覗いていた。

「ご覧のとおりよ。ステイ子ちゃん、エッチな本を免疫なしで見ちゃったせいかな。ああやってヒカルを避けちゃって」

「本当に人間みたいだな……。主人として登録したのはヒカルだというのに……」

「こそこそ何してんだよ二人して……」

そんな両親の奇行にヒカルは不快そうに言葉を返した。馬鹿にされてる様にヒカルは感じたからだった。

「あ、何でもないわよ何でもー。それよりも晩御飯だから早く手を

洗っていらつしやーい。今日はウド入りトマト鍋よー」

「げえー！またトマトとウドかよー！」

今度は不満そうな顔でヒカルは返す。

「はい好き嫌いしないー。懸賞でウドとトマトのセットで当たったんだからさつさと食べないといけないんだからー」

——…それにステイレットの機嫌も直ってないのに、こんな呑気にメシなんて……—

そう心の中でぼやいた。とはいってもステイレットが飲食できないのはヒカルもよく知っている。自分が食べるかどうかは全くの別問題だった。

そして夜も更けて……。現在午前0時。

「あー、眠い」

ふああ……。と欠伸をする。パジャマ姿の母。就寝の準備を終えた母が自室に戻ろうとする。と、廊下から光の漏れる部屋を見つけた。ドアが少しだけ開いている。ヒカルの部屋だ。ばれない様にそつと母はヒカルの部屋を覗いた。

「……ああー。なんでこうなるかなあ……」

不機嫌そうに頬杖をついて机に向かっているヒカルが見えた。来週から期末試験だ。その為ヒカルは時間を縫って試験勉強をしなければならぬ。しかしうまくはかどってないのは簡単に予想できた。何時もの事だったから。

——…無駄な努力にならないといいけどね——

正直母はあまりヒカルの頭に期待してない。頑張つてほしいと思うのは母親として当然の考えではあるが……。そんな母の考えを知ってか知らずか、ヒカルは頭をワシヤワシヤとかきまくる。

そのまま母は自分と夫の寝室に向かう。部屋の中、並べられた二人分の布団では、片方の布団で夫は静かな寝息を立てて寝ており、

「お疲れ様です。おば様」

棚の上で起きていたステイレットが飛んで母を出迎えた。今の彼女は素体とエンジンのみを装備、彼女は充電とスリープモードはヒカ

ルの部屋でなくここをしている。部屋は真つ暗ではなく常夜灯がついており相手の距離間は問題なくつかめた。

「まだ起きていたのね。ヒカルの部屋にいればもう少し好き勝手できるわよ?」

「あ……迷惑でしたか?」

「そうじゃないけど、暇でしょ?お父さんはすぐ寝ちやうから大きい音も出せないでしょうに、こんな暗いんじや部屋の本だつて読めないじゃない」

そう、ステイレットはヒカルを避けてこっちの部屋で生活してる。

「だつて……そ、そういう気分なんです……」

「ヒカルがエツチな本を持っていたから怖いのか?自分が襲われるんじゃないかつて」

「それは……」

違う、と答えようとしているのだが、原因はそれだと言うのが簡単に予想できた。

「純情ねー。男なんて皆エツチなのにー」

「で、でも恥ずかしいです……私がやらしい目で見られてるんじゃないかつて思つて」

「そんな恰好してんじや皆そう思うわよ」

「うう……」

なにか言い返そうとするが、言い返せないステイレット。自分の恰好がそういう物だと自覚は出来てきたようだ。

「……可笑しいですよね……。自分は人形なのに……。ヒカルさんの事、考えてる事が解らない……」

ステイレットとしては、ヒカルの考えてる事が解らない。

「でも、あなたは自分の事捨てていいって言わなくなった。つて事は、ここにはいたって事でしよう?」

「それは……自分でも解りません……」

「とにかくヒカルと一緒にいなきやアイツの事なんてわかりやしないでしょうに。どうしたもんかねー」

少しの間考える素振りを見せる。母、そしてある事が思いついた。



「そうだわステイ子ちゃん！今週の週末付き合いなさい！！」  
「え？」

そしてその週の日曜日、それは決行された。三人は母の運転する車の中だ。

「明日試験だっていうのになんで俺が駆り出されるんだよ」

助手席のヒカルは不満たらたらだった。明日は期末試験で最後の追い込みの日だと言うのに付き合わされたわけだ。

「どうせ途中で遊んじゃうんでしょ？だったら私に付き合いなさい」

「実の息子に対してそういう事言うなよ。グレるぞ」

「駄目よ。親にそういう事言っちゃ」

ヒカルを注意したのは母ではない。後部座席に座ったステイレットだ。チャイルドシートの様につけられた充電君に座っていた。

「つたく、俺以外に対しては心開いてるんだから……」

少しは打ち解けてくれた事による嬉しさと、自分に対して避けてる寂しさを感じながらヒカルはそう呟く。

「それはそうとどこ行くんだよ。ここ隣町だろ？」

「後少しよ。と、見えてきたわね」

母が目的地らしき場所を視線で示した。大通りに面したショッピングモールだ。休日だけあって周辺はここに寄るであろう車が非常に多い。

「モールね……。要するにだ、バーゲンセールに俺達に荷物持ちして欲しいって事かよ」

「おいしい。正確にはクリアランスセールよ。家で引きこもってるより外の空気吸ってた方がいいでしょ？お母さんね。今日はお父さんと飲み会行ってくるから着る物探しに丁度良かったわ」

「普通子供の成績下がったら親は悲しむもんだろ？」

「そんな事よりヒカル。今日ね、私達家にいないから、遅くまでステイ子ちゃんと二人つきりなの。この意味が解る？」

『っっ!!!変な事言うな!!!（言わないでください）!!!』

「アハハ、息ぴったりね。はい、もうつくから切り替えていきま

しよー。つてあれ?」

二人を完全に手玉に取っていた母、だが前を見ていると予想外と言わんばかりの声を上げた。

「どうしたんだよ。あ、あれか」

感づいたヒカルが指さした場所。丁度モールの駐車場入口部分が道路工事で通れなくなっていた。

「まいったなあ。迂回しないとイケないわね。……あの渋滞の先か」

迂回路であろうモールに沿った道路、交差点ギリギリまで渋滞でつかえてる自動車が見えた。あそこへついて行けばモールへ行けるだろうが、相当な時間がかかるのは容易に予想できた。

「なあ、あの渋滞について行ってバーゲンの開始に間に合うのかよ」

「ぐぬぬ……」

「あの一次の信号の交差点。モールと反対側行ってもらえますか?!」

その時、充電君から降り、飛行装備を取り付けたステイレットが、運転席の背もたれに乗りながら指定方向を指さした。

「ここの駐車場。目立ってないんですけど第二、第三駐車場があるんです!マイナーで気づかない人も多いから、もしかしたら空いてるスペースあるかも!」

「っ!ステイ子ちゃん偉い!!よっし行くわよ!!!」

若干諦めムードだった母の目に闘志が宿る。……反面ヒカルの方はステイレットに対して思っていた事がある。

「この街って、お前まさか……」

「車が発進するから後でね」

そう言いながらステイレットは充電君の所へ戻っていった。

ステイレットの指摘通りに第二駐車場へと移動し、空きスペースは見つかり、どうにかバーゲンの開始時間には間に合った。ヒカルとその横で立つステイレット。二人の視線の先にはモール内バーゲン会場の大型ワゴンに群がり、商品をむさぼる年配女性たちの姿が……。

「……ねえ、いいの?おば様の手伝いをしなくて」

「いいんだよ。こうしてじきに待ってりゃ」

ヒカルがそう言うのと、背中を向けていた母が衣服を後方にポーンと投げ出す。

「ほら来たー！」

そう言うのとヒカルはバスケのパスを受け取る要領で飛んできた衣類を受け取る。次々と衣類が飛んでくるとヒカルは次々とキャッチしていく。

「はあ……器用なもんね」

「バスケ部やってるから俺、と、しかしこのペースは……」

しかしヒカルの都合はお構いなしに母はセール品の衣類を投げ続けていく。受け取り続けるヒカルも商品が山盛りになっていき、動きにも影響が出てくる。次第に手で受け取る動作は山になった衣類の上に乗せる動きになっていった。

「まーまだあんのかよー！」

山は視界を塞いでしまう程の高さになってしまった。そこから追い打ちとばかりに母が投げたであろう衣服が飛んでくる。思う様に動けない今の状況ではそれもままならない。

——やっべ。見えねえ。間に合わない——

この動きでは乗せられないとヒカルは心の中で吐き捨てる。が、ステイレットが上空の衣類をキャッチし、ヒカルの山の上に乗せた。

「しゃんとなさい。そんな状態で落としたら拾うのもままならないでしょう?」

「あ、ああ、ありがとう……」

「勘違いしないで、おば様の為なんだからね」

そっぽをむきながらステイレットは洗濯物の上に座った。ツンデレの常套句だが、今のステイレットが言ってるのははたして本心か。そしてすぐさま母が欲しい物を仕入れ終わったのだろう。満面の笑顔でこちらへ来た。

「やー、大量大量。それじゃレジへ行きますしうか」

「お役に立てて光栄ですわおば様」

「ったく、買いきすぎだよ母さん。飲み会に着ていくだけの分じゃないだろこれ！」

「はい怒らない。昼ご飯奢ってあげるから」

そう言つて三人はレジに並び会計を済ませた。と言つても相も変わらずヒカルの方がいくつもの紙袋を持った荷物持ちのままであったが。

「なあステイレット」

ヒカルは気になった事があるのでステイレットに聞いてみる。彼女はヒカルと母の間の空間をホバリングで飛んでいた。

「さつき聞きそびれた事だけど、この街つてまさか……」

「……そうよ。私が前のマスターと一緒に住んでいた街」

「そうなんだ……ステイ子ちゃん。……ごめんね、嫌な事思い出させちゃったかしら？」

母の方も感づいていた様だ。若干申し訳なさそうに言う。

「良いんですおば様、所詮人形の私達にそう言つた気遣いは無用ですわ」

そう言いながらステイレットは更に高くふよふよと飛び立つ。3m程の高さに達すると、辺りを見回し人ごみを見回した。

「まだ一か月も経つてないのに……ん？」

ふと、飛んでいたステイレットは突然目の色が変わった。何かにハッと驚いたようだ。それは見ていたヒカル達も理解出来た。

「ステイレット? どうした?」

「……あの人!!」

さつきとはまるで違うスピードでステイレットは飛んでいく。ヒカルは驚きながらも後を追いかけた。

「ステイレット! どうしたんだよ!」

暫くして人ごみの中にステイレットはいた。ホバリングで通路のど真ん中に陣取り。必死に辺りを見回して誰かを探していた様だ。

「どこ…ねえ! どこにいるの?!」

「何を見たんだよお前!」

ヒカルの呼びかけに答えずにステイレットは周囲を見回しながら叫び続ける。

「マスター!!返事をして!声を聞かせて!」

「っ!?見たのか?!お前!」

しかし人ごみはステイレットの叫びを無視しながら蠢くのみ。それでもステイレットは諦めずに叫び続ける。だが暫くしてステイレットの方も、もう無駄だとうな垂れた。

「マスター……どうして……」

「ステイレット……」

ステイレットを慰めようとしたヒカルだが、同時にショックでもあった。まだ自分をマスターと呼んでない上に、血眼になって前のマスターを探した……。それはまだステイレットの中で自分をマスターと認めていない事だったからだ。

「ちよつとちよつと!どうしたのよ突然!」

母も二人を追いかけてきた。

「どうして……どうして私を捨てたんですか!マスターアツ!!」

モール内に、一人の少女の叫びが木霊した。

そして帰りの車の中にて、……あの後、ずっとステイレットは沈んだままで、ヒカルと母の弁当を買った後にそのまま帰路についた。

「……」

ステイレットは無言でボーツとしていた。場を明るくしようとする母が何度かステイレットに話しかけたが、単調な返事位しか返ってこず、車内は若干の気まずさに満ちていた。

「……なあステイレット……」

ある信号待ちで、この雰囲気ヒカルはたまらずステイレットに話しかける。

「……懐かしいわねこの道路」

いつの間にかステイレットは充電君から離れて窓から外を覗いていた。そして外の白い家を指さす。

「見てよあの扉に囲まれた家、あそこで私とマスターは、お父様とお母様と暮らしていたの」

ステイレットの示す先、ここら一帯では一番大きい家だった。お金

持ちの家なのだろう。

「使用人もいてね……。マスターが学校へ行く時は私も『いつてらっしやいませ』って見送って……。帰ってくる時も一緒に『おかえりなさいませ』って……。」

「もういい。それ以上言うな」

イラついた様に後ろのステイレットに向きながらヒカルは言う。

「ステイ子ちゃん、ごめんね……。」

母もこの結果にはさすがに自分の行為を反省した。本来はヒカルとステイレットにコミュニケーションを取らせて二人の距離間を近づける算段だったのだが。

「……裏目に出ちゃいましたねえおば様。私とヒカルさんを仲良くさせようって腹積もりだったんでしようけどお」

一番信用していた母にすらステイレットは感情をぶつけだす。

「ステイレット……いい加減にしろよ」

見かねたヒカルが口を開く。声は静かな怒りに満ちていた。

「あらあ？ママを馬鹿にされて怒った？」

「俺を馬鹿にするんならいいわ。でもお前を気にかけてくれた母さんにまでそんな事を言うんじゃない！」

「気にかけて？ハッ！誰がしてくれて頼んだのよ！こっちはいい迷惑よ!!それでうんざりして何が悪いっていうのよ!!!」

「うんざりじゃねえだろ!!お前は……。自分が捨てられたって事を認めたくないだけだろうが!!」

「っ!!うるさい!!あんたに何が解るっていうのよ!!信じてたのに!!最後まで信じようとしたのに!!!……。一番の味方だったのに……。!!!」

最後の言葉は叫びではなく、血の出そうな位に絞り出した口調だった。

「お前……」

と、その時だった。母は運転中の車のクラクションを鳴らした。大きな音が外と内側に響く。

『っ!!』

外に鳴らす理由になる物は見当らない、二人の喧嘩の仲裁の為とい

うのは明らかだった。

「二人とも、運転中は静かにね」

その横やりで、続きをする気持ちは二人とも萎えた。この時の二人の喧嘩はひとまず終わった。

——…まだ信じていたいのね。ステイ子ちゃん……—  
平静を装っていた母は誰に言うでもなく。心の中でそう呟いた。

「それじゃあお母さん、飲み会行ってくるから」

家に帰ってきて、夕方近くなり両親が共に飲み会に出かける時間になった。玄関にてヒカルは出ていこうとする両親を見送る。……その場にステイレットはいなかった。

「ああ行つてらっしゃい。……なあ母ちゃん。ステイレットの事……どうすればいいんだろう」

その後家に帰ってきて、ステイレットはずっと同じテンションのままだった。充電君に繋がれ、更に人形用布団に包まり、ふて寝していた。

「あんたが見捨てない限りは、まだ望みはあるわ。信じ続けなさい」  
「時間、かかるだろうなあ……」

そう言ったヒカルに、沈黙していた父が口を開く。

「ヒカル。そんなもんだ。男は女が必要としてる時に動けばいい」

「父さん……」

蚊帳の外、と思いきや自己主張の少ない父もこつちを思ってくれていたらしい。ヒカルとしてはそれが嬉しかった。

「必要としてる時ねえ、私としては毎日家事を手伝って欲しいんですけどー」

心当たりのある男二人は気まずそうに互いを見合わせる。

「うう……感謝してます」

「ただね……ヒカル」

「何だよ」

「あの子、捨てたマスターって人の事、まだ信じようとしてるわねあれは……これを取り除くのは容易じゃないわよ」

「……だとしてもさ。たくさんの人が心配してくれてるって事位、アイツも自覚してほしいもんだよ。前の所じやいつも見送ってたとか言ってたのに見送りにも来ないなんて」

「ま、今は一人にさせておきなさい。帰ってくるのは11時位になるからね、行つてきまーす」

いつてらつしやいと二人を見送つたヒカル。と、いつまでもふてくされてるであろうステイレットが気になるのは当然の事だ。

「ちよつと様子を見てみるか」

そう言つてヒカルは階段をかけ上がり両親の部屋に入る。

「ステイレット。母さん達出かけたから……その、悪かつたな」

何かコミュニケーションがとりたかつた。部屋に入るなりステイレットに声をかける。しかし……。

「？ステイレット？」

部屋にはいない。充電君と、くるまっていたであろう布団が、ぱたぱたと風をうけてなびいていた。ヒカルは一瞬で違和感に気づいた。外から風が入っている。窓を見ると開いていた。外には雨の降りそうな曇天が広がっていた。

「まさか……」

その日、ステイレットは家を出ていった……。



ep20 『ヒカルと量産型ステイレット3』（後編）

「隣町に入ったぜ黄一！ステイレットはまだ移動してんのか!？」

暗くなり始めた国道の歩道を走り続ける自転車が一つ。乗っていたヒカルは必死にこぎながら、ハンドル部のホルダーに固定されたスピーカー通話のスマホに叫んだ。ヒカルのプライベート用のMTBだ。

『ああヒカル!!このまま真っ直ぐだ！GPS機能でステイレットの居場所は解ってる！ナビはこっちで任せてくれ!』

「ああ!」

『そっちのバッテリーが心配だから一回切るぞ！また変化あったら連絡入れる!』

「頼む!」

通話の終わったスマホに眼もくれず自転車をこぐヒカル。行き先は隣町にあるステイレットの前のマスターの家。黄一のナビでもステイレットはそっちを指しているとの事だ。

「ハッ……ハッ……あの馬鹿……!!なんでなんだよ!」

ステイレットの行動にヒカルは怒りと焦燥感、自分を信じてくれない悲しみが混ざりながら自転車をこぎ続けた。……日の長い初夏ではあるが、空はどんどん暗くなってくる。いつ雨が降るか解らない状況だった。

ステイレットの出でいった直後、ヒカルは慌てて黄一に連絡を入れた。万が一にも友達の家に行ってるかもしれない。そして今彼女の友達と言えるFAGや人間は少ない。ステイレットがいなくなったと伝えると、黄一はすぐさまシリアルナンバーを言う様にヒカルに指摘。

セッションベースに書いてあったシリアルナンバーで検索をかけた黄一はステイレットの居場所を突き当てた。移動してる。隣町に向かっているとの事だ。ヒカルにとって予想通りの場所へ向かっていった。

親がいたら車で追いかける事が出来たのに、とつくづくこのタイミ

ングで出ていったステイレットを恨んだヒカルだった。幸い道は複雑に曲がる事は無くほとんどが広い国道だ。目的の場所へは簡単に近づいていく。昼間通った道だ。

「ヒカル……」

ヒカルとの通話を終えた黄一は、通話と並行して起動させていたステイレットのナビアプリを見続ける。ステイレットはヒカルのいる位置の先を飛んでいる。

「ステイレット……止まりませんね」

黄一の肩に乗っていた轟雷がぼやいた。彼女も今回のステイレットの騒動には驚いていた。

「ヒカルの方は信号とかで引つかかるだろうし、こりゃ目的地まで追いつけないかもな……」

「いつそ雨が降ってくれたら、雨宿りで足止め出来るんですけどね……」

FAGのナノマシンは水に弱い。いつそ降って欲しいと願う轟雷、だが彼女は知らなかった。ステイレットには、雨に関して心に深い傷を負っていた事を……。

「?止まった?」

と、チエックを続けていた黄一はステイレットの移動が停止したのを確認。住宅街だった。

「公民館ですかね?この敷地の広さ……」

「じゃあそこでステイレットは止まったんだな!」

『ああ、そこが目的地だろう』

「解った!サンキュー黄一!」

『それはステイレットを捕まえてから言ってくれ。……頑張れよ!』

そう言つて黄一は通話を切る。ステイレットの目的地はヒカルの予想通り、前のマスターの家だ。

——あいつ、やっぱり前のマスターの所へ会いに行ったんだ!——だがそこから先の理由は解らない。前のマスターとやり直したいのか。それとも……、

「ステイレットト……いた!!」

たどり着くとステイレットはあっさり見つかった。敷地には入っておらず門の所で佇んでいた。

「ステイレット!!」

怒りを極力抑えて少女の名を呼ぶ。

「っ!!」

恐怖と戸惑いの表情で少女は体を強張らせた。今の装備はキマリスアーマーだった。こちらの方が高出力だったので長距離移動には向いていたのだ。

「アンタ……なんでここまで!!」

「こっちの台詞だよ。……前のマスターに会いに来たのか」

気まずそうにコクリと頷く少女。

「……前の家に戻りたいのか?」

「ち!違うわ!!」

ブンブンと少女は首を横に振る。

「だったらどうして……」

観念したステイレットは、俯きながら本心を呟き始める。

「……前のマスターに……本心が聞きたかったの……お別れとして」

「本心って……お前、捨てられた時点でソイツの心は!」

「解ってるわよ!でもね!彼は!捨てるまでは私の味方でいてくれたの!私が旧世代だって周りから馬鹿にされても!表面上だけだったかもしれないけど……酷い人間だって思いたくないのよ……」

ステイレットにとつて、前のマスターは一番信じていた人間だった。それが裏切られてもステイレットは信じようとしていた

「DV受けた彼女かよお前は……」

「そんなんじゃないわよ!恋愛感情じゃない!!……答えはなんだっていいの。一度だけ、一度だけ顔を合わせて別れが言えればそれでいいの……。じゃないと、心をここに置いてきたまま気がして……、言えないのよ。あなたをマスターって……。なれないのよ。あなたの家のFAGに……」

フルフルと震えながら絞り出すステイレットの本心。彼女が飛ん

で家に入らず門の所で待っているのも、戻る気はないと言う意思の表れだった。

「……終わったら帰るぞ……俺も待つよ」

そう言ってヒカルはステイレットの横に、塀にもたれかかる。

「その、悪かったな。今日は流石に言い過ぎた」

「あ……ううん……いいの。その、私も今日は……ごめんなさい。……その……ありがとう」

横に並びながらお互い顔を見合わせる。初めて自分の意志で、お互いの意気投合だった。

『……フフツ』

不思議とお互いに笑みがこぼれる。ヒカルの方はステイレットの本心が知れた事、少しでも心を開いてくれた事、そしてステイレットも、ヒカルが自分の為にここまで追いかけてくれた事、信じる事が出来そうと思った。お互いが嬉しかった。

遠くでゴロゴロと雷の音がする。遠くで夕立になっているのだ。

「もうすぐここも夕立が来そうだな……。家の中に入れてもらうか？」

そう聞くヒカルに対して、ステイレットはなんだかそわそわしだす。ヒカルはそれが気になった。

「どうした？」

「ううん。なんでもないの。変ね、何か遠くの雷聞いてたら……」

「……あの、うちに何か御用ですか？」

と、暗闇から誰かの声があった。誰だと警戒するヒカルと、ハツとするステイレット。黄昏時の暗闇から現れたのは、色白の少年だった。

「……マス……ター……？」

ステイレットが茫然としながら名前を呼ぶ。ヒカルと比べて少し小柄で線が細い。体育会系のヒカルとは全然雰囲気の違い少年だった。

——……コイツが……？——

相手の事を胡散臭げに見るヒカル。と少年はステイレットが誰なのか気づいたようだ。

「……お前は……」

「……お久しぶりです……マスター……」

少年は気まずそうにステイレットから目を逸らす。自分に対して後ろめたい感情があるのだろうか。とステイレットは推測した。しかし彼女は話を続ける。

「マスター……。どうして私を……」

「ご主人様？どうしたのですか？」

と、少年の傍らにいたFAGが話に割って入った。ステイレットの知らないFAGが……。

「え……？」

ステイレットに似たフォルムではあるが、細かい部分が違っている。ヒカルとステイレットを見ると、恭しくお辞儀をする。

「あら、ご主人様のお友達でしょうか。初めて見るFAGですね。ワタクシこの方に仕えるフセットと申します」

新人のメイドといった雰囲気少女、もしくは深窓の令嬢といった感じのFAGだった。純真無垢と言った感じだ。

「あの、ご主人様？この方達は？」

「わ！私は……」

ステイレットはすぐにでも答えようとする。「あなたの前に仕えていたFAGだ」と、だがその前に、若干バツが悪そうに、そして面倒そうに少年は答えた。

「い、いや、こいつとは初対面だよ。今日初めて会ったFAGだ」

「え……？」

脳天に、稲妻でも落ちた様な衝撃だった。

「彼女とは会った事はない。関係のない奴さ」

「……?!」

——どうして？——そう言いたい声が出ない。

「ではどうしてご主人様に？」

「道にでも迷ったんだろう？早く家に入ろう」

こんな反応で返されるなんて思ってもいなかった。……こみ上げてくる悲しさが、喉に出かかっていた声を覆う。そんなステイレット

を二人はお構いなしだった。彼女を尻目に逃げる様に敷地内に入ろうとする少年とフセット。

「あ……」

——どうして? どうしてなの? ——

引き留めようと手を伸ばすステイレットだが、声が出ない。こみ上げてくる涙が、嗚咽が、声を遮る。あまりにも惨めで、悲しくて、絶望的で……。希望が消えていく様に、彼女のマスターは離れていった。……その時だった。!!!

「待て……待てよッッッ!!!」

間近に落ちた雷の様な怒号が響く。ビクツとその場にいた全員が震えた。叫んだのはヒカルだった。

「っ?! なんですか!?!」

そんな少年の胸倉をヒカルが凄い勢いで掴む。ヒカルの形相は鬼の様になっていた。言うまでもなくキレていた。

「は! 離れて下さい! 人を呼びます!」

フセットが警告する。ヒカルは一切動じない。そもそも聞いてないのだ。

「コイツが何の為に お前に会いに来たと思ってるんだ!!! わざわざ自分を捨てたお前なんかに!!!」

「え? 捨てた? ご主人様? それって……」

ヒカルの発言に戸惑うフセット、だが元マスターはヒカルに慄いて反応できない。

「なんで向き合ってやらねえんだよ!!! コイツはなあ!!! ステイレットは自分にケジメをつけようとしたんだ!! なのになんで逃げるんだてめえは!!! どうして言葉の一つでもかわそうとしねえんだ!! 答えろ!!! 答えてみるよ!!!」

必死のヒカルに対して、元マスターは苦しそうに呟いた。

「……所詮ホビー、人形じゃないか……。何をムキに……」

「っ!!! てめえええっ!!!」

その態度にヒカルは思わず右手を離し拳にする。殴るのは目に見えていた。

「やめてっつ!!!」

その時、ステイレットが悲痛の叫びを上げた。その叫びによってヒカルは手を止める。

「もういい!もういいのよ!!それ以上はやめて!!」

「ステイレット!何言ってるんだ!!!お前はこんな奴に!!!」

「こんな奴だからよ……」

涙をボロボロと流しながら、ステイレットはヒカルを示しながら元マスターに対して口を開く。

「……この方が今の私のマスターです。今までお世話になりました。二度と会うことは無いでしょう……殴る価値も無い!!もう二度と顔も見たくない!!!」

最後だけそう叫び、ステイレットはその場から飛んでいった。

「っ!待てよステイレット!」

それを自転車で追いかけてしようとするヒカル。だが元マスターに振り向くと、怒りと憎悪を込めた声で言い放つ。

「……一生お前を許さねえ」

恐らく黄一ですら聞いた事のない声だっただろう。感じ取ったのか二人は凍り付くように動かない。そんな二人を尻目にヒカルはステイレットの後を追いかけていった。

少し離れた街頭の下でステイレットは俯いていた。……泣いている。

「ステイレット……」

ヒカルに気が付くとステイレットは、わざと明るい口調を出す。

「あは……ざーんねん。あれが前のマスターよ。格好いい所全く見せてあげられなかったわ……」

「……あれでよかったのかよお前……」

「清々したわよ。あんな奴だっと思って思わなかったんだから……」

ここでステイレットを慰めたいが、今の彼女を慰めても素直に受け取ってくれないだろうと、ヒカルは何も言えなかった。

「……帰ろう」

「うん……。ごめんね」

その時だった。水滴がパラパラと落ち始める。雨が降ってきたのだ。雷も音がさつきより大きい。

「うわ降って来たな。参った。どこかで雨宿りしないと」

自転車で来たヒカルは雨の中を走る事は出来ない。

「とりあえず近くにコンビニあったから、移動するぞステイレット」

ステイレットの方を見るヒカル。彼女の異変に気が付いたのはその時だった。

「うう……。あ、ああ……。!!!」

恐怖に怯える様にその場に蹲るステイレット。両手で頭を抱えていた。

「なんだ?! どうしたよ!」

ステイレットの頭には捨てられた日の事がフラッシュバックする。裏切られた記憶が、臨死体験をした記憶が、自分の頭を、心を侵食していく。

「雨……。雷……。嫌……。あ」

気絶寸前だったステイレットは必死に声を絞り出す。恐怖に塗れつづきそれになる絶望顔。恐怖の中で、ステイレットは惨めさで一杯だった。全て失って、信じてた人にも裏切られて、自分がすがっていた物はもうない……。何も……。

「ステイレット!」

ヒカルは片膝をついた体勢でステイレットを自分の胸に押し付ける様に持っていく。相手が人間なら抱きかかえるかの様なポーズだった。自分の身体を傘にする事でステイレットを雨から守る。

「あ……」

「大丈夫だ! 俺がついてる! だから一緒に帰ろう! 俺達の家へ!」

少女の背中を、ヒカルの手は覆い包み込む様に抱く。彼女の脳裏に浮かんだのはヒカルの家、そして両親、そして目の前の……。馬鹿でお人よしでスケベで……。優しい少年。自分の為に無茶をしてくれた人の手、自分の為に怒ってくれた人の温もり、湧き上がる安心感に、ステイレットは溢れた涙と一緒に叫んだ。



「う……マス……タア……。マスタアーツ!!!」

自分を受け入れてくれた人の胸にしがみつinaながら、ステイレットは初めて自分の意志で、ヒカルに対してマスターと呼んだ……。

「私！私い!!!わああああアツツ!!!」

溜め込んでいた感情全てを吐き出す様にステイレットは泣いた。わんわん泣いた。そんな泣き声も強くなつていく雨音に消されていく。少女の抱えていた苦しい記憶も、この雨が流してくれてる様だった。傷ついた心も、少年の温もりが癒してくれる様だった。

「じゃあ暫くすれば目を覚ますわけですね……良かった。有難うございました」

近くのコンビニのカフェコーナーで、椅子に座ったヒカルはファクトリーアドバンス社へと連絡、今のステイレットはヒカルの胸にずつとしがみついたまま眠っていた。スリープモードに入っていたのだ。連絡前にタオルを買って自分の身体を拭く。ヒカルはステイレットの身体が濡れない様にシャツから外そうとするも、離してくれない上に、引きはがした途端うなされる。仕方なく新しくシャツを買って、着た新しいシャツにステイレットを貼り付ける。ヒカルの胸にステイレットは安心する様だ。

その後ステイレットのトラウマについて問い合わせをしていた。ガラス越しの外では相変わらずの雨だ。

——黄一の奴にもお礼の電話しなきゃな……これじゃ帰れないから母さんにも迎え来てもらわないと……——

時計を見る。帰ってくるのは11時と言っていた。帰る頃には日付変わるだろうな、とヒカルは思う。

——明日の期末……こりゃ駄目かな、まあお前が心を開いてくれたからよしとするか——

ヒカルは眠り続けるステイレットに言った。ずっとステイレットはヒカルのシャツの胸にしがみついており、ヒカルはスマホを持ってない方の手でステイレットを抱き続けていた。

「すう……すう……」

「……つたく、こんな可愛い寝顔も出来るんならもつと早く見せろよな」

ヒカルが抱き続ける限り、ステイレットはすやすやと安堵の寝息をたてていた。

「う……」

充電君に繋がれた状態で、ステイレットは目を覚ます。

「あら目が醒めた？」

パジャマ姿の母と父が目の前にいた。ヒカルの両親の寝室だった。

「お婆様？あれ？ここは……」

「ヒカルがね、迎えに来てくれって言ったの。ずぶ濡れになっていたのを見た時は驚いたわよ」

「あ……」

その時自分に何があったのか、自分が何をしたのか思い出したようだ。

「わ！私……ごめんなさい！昼間の事！勝手に出て言った事！」

「それはステイ子ちゃんが立ち直れたのならいいわ。辛かったのね……。自分の気持ちをないがしろにされて……」

ヒカルは自分の事を話してしまったようだ。仕方ないと言えば仕方ないが、

「……ええ、ひどい人でした。前のマスター、今のマスターよりずっと……あの！」

言いたい事は色々ある。順を追って話そうとステイレットは頭の中を整理すると口に出した。

「私、やっぱり人形かもしれません！でも！ここにいたいんです！ここで暮らしたい！」

その発言に母はニツと笑う。

「元よりそのつもり！大歓迎よ！ずっと女の子いなくて寂しかったんだからこっちは！」

「あ！有難うございます！」

嬉しくなる。確かにこの家は前の家と比べて全然小さい、でも距離

間が心地いい。不思議な雰囲気があった。この家の全員がそれを作り出している。そんな場所にいいと言うのが嬉しかった。と、少女は一番気になる事を問いかける。

「あの、それでヒカルさんは？」

「ったく、これじゃ完全に徹夜になっちまうな……」

自室にて、寝間着姿に着替え、机に向かっていたヒカルがぼやく。帰ってきてから一夜漬けども、と試験勉強をしているわけだが、どうにも進みが悪い。現在時間は午前1時である。

「焦らないですよ。ほらコーヒー持ってきたから飲んで」

「おうサンキュー。……ってステイレット?!」

突然の声。後ろを振り向くとそこにはコーヒーの乗ったトレイを持ったステイレットがそこにいた。通常装備で空を飛びながらだ。

「マスターが手直した装備、今度は完璧ね。……私の所為で勉強遅れちゃったんだから、これ位させてよ」

責任感と羞恥心を一緒に出す表情で少女は言う。

「もう大丈夫なのか？」

「おかげさまでね。思いつきり泣いたらスッキリしちゃった」

「そっか。良かった……」

「……でもマスターの方は良くないでしょ？どうなのよ試験勉強の様子」

そう言ってコーヒーを渡したステイレットは机に降り立つとノートと教科書を交互に見る。英語の教科書だ。……と暫くして少女は大きなため息を出した。落胆のため息だ。

「……あのね。なんでこの英文こうやるわけ!?ちよつと考えれば解るでしょ!」

そう言ってステイレットは置いてあったシャーペンを抱えると、正しい英文に書き直す。

「ぐ……しょうがないだろ!普段使わない会話なんて!」

「……マスターもしかして、いつもこうなの?」

「わ、悪いかよ……」

再度落胆のため息。

「悪いに決まってるでしょ！折角見直したと思ったらこれだわ！こうなったら私も協力しないと駄目ね！」

「な！何!？」

「一緒に勉強するのよ！私が解釈してマスターに伝える。それならずっとマシになる筈よ！期末って事は1日3教科ずつって事でしょ？ポイントかいつまんでやれば朝までに2時間ずつ！余裕よ！」

「ちよつと待て！完全に徹夜前提かよ！」

「さつき一人でいる時に、『徹夜になっちまう』って言ったでしょうが。……ねえ、私だつてマスターがいたから、もう一度頑張ろうって思っただよ。マスターだつてきつと……」

ステイレットはヒカルに手を差し伸べる。半分は色仕掛け感覚だ。しかしもう半分は本心。

「……そうだな。やるか！」

ヒカルの方も、女の子にそんな顔をされては黙ってはいられない。ステイレットにそう言われて机に向かつていった。

……でもって二時間後。

「うあー！もう無理ー！脳みそが筋肉痛だー!!」

机に突つ伏したヒカルが愚痴る。慣れない猛勉強に妙な頭痛を感じていた。生まれて初めての頭を使いすぎての頭痛だった。

「その表現どうなのよ。……まあ確かに飛ばし過ぎたかもね。ちよつと休憩いれましょうか」

ステイレットの方はまだ余裕だった。

「こんなんでも本当に大丈夫なのかよ。確かに効率は10倍以上になった気はするけどさ」

「普段どんだけ非効率的な勉強してるのよ……。大丈夫、私を信用しなさいな。それに今更寝ようたって寝付けないでしょ。頭使いすぎたんだから」

「まあな、しかしこれじゃモチベーション維持が大変だぜ」

「モチベね……。そうだわマスター！勉強や試験を、私の前のマス

ターだと思えばいいのよ!」

「な!何だと?!」

「これならモチベになるんじゃない?あの時の怒り、殴れなかったしまだ残ってるでしょ?」

ノートと教科書を、殴れなかった元マスターに置き換える。確かに……腹の底からマグマが湧き上がってくる感覚だった。

「それは……効くな。すぐにでもリベンジしたくてしようがないや!残り4時間行くぜ!ステイレット!」

「その意気その意気♪」

「それにしても……酷い奴だったとはいえ凄い事言うなお前……」

「ソフフ♪マスターも気を付けてよね♪」

子供の様に無邪気に笑うステイレット。こんな表情も出来るんだな。とヒカルは思いつつも、

——怖いんだか可愛いんだか……——

怒りついでにそう思いながらヒカルは試験勉強に再び取り組む。

「……でもさ、あなたも酔狂よねー。こんな人形にあんなに怒っちゃって」

「?人間とか関係ないだろ」

さも当然と言うヒカルにステイレットは……妙な嬉しさを感じる。

——……バカ。嬉しいけど、そんな事言われても、人間と私達の立場は同じじゃないんだから……——

ステイレットはヒカルに気付かれない位小さな声で呟いた。人間とFAGが同じ立場ではないと言うのも、今日の経験で改めて嫌と言うほど思い知った。

——でも、そう言ってくれるんだったら、一緒にいたいって思っちゃうからね……——

これが、二人が仲良くなつてからの初めての共同作業である。……後日試験結果は上々だったのは言うまでもないだろう。……ステイレットがその日からヒカルの部屋で寝る様になった事も。

——  
……そんなこんなでステイレットと洪庵家の生活は絆を深めて

いった。そして数か月後……。

「今日の夕飯はウド焼きそばー！ちなみにステイ子ちゃんが一人で作ったの！」

「マ、ママと比べたら味が落ちるって位解ってるんだから！マスター……不味かったら捨てていいからね！あなたがウド嫌いって知ってるし……」

両親との絆も一層深まったステイレット。今ではおば様おじ様とは呼ばず、ママとパパと呼んでいる。

「大丈夫よく。ステイ子ちゃん色々工夫したし、愛情タップリなんだから〜」

——……絶対俺の反応楽しんでるな母さん……、でもそっけない振りしてめっちゃ見てるよアイツ……——

ツンデレ的にそっぽ向きながらこつちをチラチラ見るステイレット。

——……どうしよう——

「何戸惑ってるのよヒカル。こんなに美味しいのに」

両親の方はウドが嫌いというわけではないので問題なく食べられる。

「どうですか？味見できないから出たとこ勝負になっちゃいましたけど自信はあります」

「もう合格よ。ステイ子ちゃんたら掃除も洗濯も覚えちゃって大助かりよー家事はもう完璧ねー！」

「そりゃ……私人形ですから」

照れながら……答えるステイレット。

「でも自分を人形というのはそのままなのね、そんな人間らしい心があるのに……」

「親しき仲にも礼儀ありですよ。私が色々覚えた中には、人間とFA Gで出来る事と出来ない事があるというのも解りましたから……」

「……まあいいわ。これならステイ子ちゃんにヒカルを任せられるわね」

突然、母がそんな事を言い出した。面食らうヒカルとステイレッツ

ト。

「どういう事？つて言いたいよね。黙っていたけど、お父さんが今度長期出張でね、お母さんもついていく事にしたの」

「え?!なんでそんな突然!!」

「ほらお母さんとお父さん。あまり二人の時間とれなかったし……、ヒカルだっていつまでも子供じゃないんだからさ」

「そんな事言つて本当はステイレットに全部押し付けようつて事だろ？」

「それでもあるが……つてゴメンね。でもステイ子ちゃんがいるから安心して任せられるつてのも事実よ」

ヒカルを押し付ける。というのは別に不快に思う要素はない。要するに自分がマスターと、ヒカルと二人暮らしという事になる。ステイレットにとつてそれは大いにときめく用件だった。

「わ、私がマスターと二人暮らし……あ、それは構いませんけど、そんないきなり出来るでしょうか」

「ずつと傍で見えてきた私が言うんだから大丈夫よ。ヒカルの事、お願いね」

そう言つたお墨付きをもらおうと安心する。

「っ!はい!」

キラキラした目でステイレットはそう言つた。

「つて!お父さんも何か言つてよ!あなたの出張でしょ!」

「ああ……そうだな。人間でも悪い奴がいる様に、ロボットでも人間以上に人間らしい奴がいる。君ならヒカルの事を任せられるよ」

「パパ……」

「もしもし……」

ステイレットの方が話の主役になっている事にヒカルは釈然としなかった。とはいえ、ステイレットがいてくれた方が心強いのも事実ではあった。

そして両親は出張の為、飛行機に乗つてヒカル達の元を去つていった。空港でのドラマのワンシーンの様な別れから、二人は展望デッキ

で両親の乗った飛行機を見送っていた。滑走路を走りながら離陸する飛行機を見送るステイレット。彼女は自分の恩人であり、同時に家族である二人の乗った飛行機を大きく手を振りながら見送る。

「ママ・パパ！気を付けて行ってきてね!!」

「いや、ステイレット。あの飛行機じゃなくてあれだよ」

反対方向を指差すヒカル。別の飛行機を勘違いしたらしく真っ赤になるステイレット。

「ぐ……しよがないでしょ！空港なんて初めてだったんだから！……でもこれで暫く会えなくなっちゃうわね……」

「暫くだよ……暫くすりやまた会える」

「その時に、もっと誇れるFAGになりたいわ……。いってらっしやい。ママ、パパ」

そしてヒカルとステイレットは二人で暮らす様になった。それからの話はご存じの通りである。

「というわけ、それで私はマスターと暮らしてもう一年半つてわけよ」  
トマト鍋の準備を、クリスマスパーティーの準備をしながらステイレットは皆に語って聞かせた。といっても一部ステイレットは話したくない部分もあったので、そこはカットしたが。

「凄いなあ。そんなドラマがあつたんだ」

「ドラマチック……私にはそういう話がないから憧れる」

同じマスターに対して恋愛感情を持つフレズと、アーキテクトの興味を引くには十分だった。

「つて、まさか私だけに言わせて終わりとか思つてないでしょうね！次はあんた達の番よ！ほら！アンタ達とマスターの話、聞かせなさい！」

「ええ！ちよつとちよつと！それは横暴だろ！」

「同意……。大体よく考えたらマスターの両親の話だった筈、いつの間にか勝手にマスターとの馴れ初めの話にしたのはステイレットの方……」

「う……いいでしょ別に！つなげて話さないと却つて不自然な話に



なっていたんだから！アンタ達にも色々エピソードはあるでしょ！」  
「それは……」

話す内容を考えていたフレズの方は顔を赤らめる。彼女の場合浮かぶマスターとの話題がエロ絡みばかりだったから。

「その反応……フレズ！次はあんたよ！さあ話しなさい！」

「え?!ええーちよつと待ってよー!!」

「藪蛇……」

そう言いながらアーキテクトは時計を見る。まだそんなに経っていない事を確認。マスター達は今モールかなと予想した。

その頃ヒカル達男4人は、モール内のスーパーで無事買い物を終えたタイミングだった。年末というだけあってカツプルや親子連れが非常に多い。店の方も稼ぎ時という事で、そこかしこで店員の呼び込みや活気であふれていた。

「いやーヤギ肉あって良かったなー」

「ドジョウもな。ていうかなんであつたのか逆に不思議だわ」

満足げなヒカルに対して、黄一の反応は冷静だった。目当ての全員の好きな物は手に入った。

「そういえば轟雷の奴大丈夫かな。玩具屋で欲しい物見ているって言ってたけど」

「確かクリスマスプレゼントが欲しいって言ってたけど、買ってあげないのかい黄一?」

「買わないって大輔。貰ったもんと同じもん欲しいって言ってんだから」

「迎え行っても駄々っ子みたいにごねそうですね」

ヒカル達がスーパーで買い物中、轟雷はただ一人、玩具屋で欲しい物を探してると言っていたので置いてきた。で、当の本人はというと……。

「見つけました！轟雷改です！」

フレームアームズ売り場の棚の上で轟雷は喜びの声を上げた。轟雷改の箱は五段積まれたフレームアームズの一番下だ。

「どうにかしてあれをもう一度買ってもらえるようにしないと！うーん！うーん！」

お目当ての箱を引つ張り出そうとする轟雷、しかし箱の大きさ、積まれた重さは轟雷を越えていた。どうにかして取り出そうとする轟雷、最大限の力で引つ張り続けると箱がズルツと動く。が、上の箱まで巻き込んで勢い余って柵から落ちた。轟雷ごと、

「あ。わぁーっ!!」

バラバラに落ちていく箱、埋もれていく轟雷。轟雷は目を回す。

「ねえ！ちよつと大丈夫?!」

落下音に気が付いたのか。店員らしき人の声が聞こえた。女性の声の様だ。箱を取り除くと目を回していた轟雷を掘り起こす。

「うーん……はっ、店員さんですか？あなたが助けてくれたんですね。有難うございます」

店員であるツインテールの少女が「どういたしまして」と答えた。マスターと同世代っぽいなど轟雷は思う。

「轟雷？何やってんだ？」

「あ、マスター」

と、黄一達がやってきた。店員の少女の手の上に乗っていたのが気になった。しかもその少女は……。

「え？諭吉君?!」

「?!玄白さん!」

ヒカル達のクラスメイトの玄白朱音だった。……アーキテクトの話の冒頭に出ていた少女である。

「そっか。この子諭吉君のFAGなんだね」

そう言つて朱音は手に乗った轟雷を黄一に返した。

「マスター？知合いですか？」

「クラスメイトだよ。……玄白さんはバイト？」

「うん。あ！ヒカル君達も来ていたんだ！」

後ろに続くヒカル達に朱音は声を大きく上げた。

「玄白さん？バイト？」

「うん。あつとごめんね。その前に箱を戻さない」と

「て、手伝うよ!」

黄一は朱音に続いてフレームアームズの箱を戻そうとする。

「あーいいよー。私店員なんだから」

「いや、俺のFAGが迷惑かけたんだからさ」

そうして最後の箱を戻そうとして、二人の手が触れた。

『あ』

突然の事に顔を赤らめる黄一、しかし朱音の方は別に動じていなかった。黄一の手が止まったので朱音の方が箱を戻す。

「手伝ってくれて有難う。この轟雷小さい子みたいで可愛いねー。黄一君と何年位一緒なの?」

「あ……もう三年位になるかな……」

「私もね、FAGが家族にいるんだー。でもちよつと愛想無いからさ、なんか羨ましいなこういう性格の子」

「いやーそれほどでも」

「照れるな照れるな。ガキっぽいって言われてるんだよ……」

「俺の方もFAGは持つてるよ。ここにいる全員がだけどね」

そう言うヒカルに、朱音はさつきより強く食いついた。

「え?!ヒカル君も!?嬉しいな!共通の話題が見つかった!ねえねえ!今度FAGの話とかしようよ!ヒカル君はどんなFAGを連れているの?!」

「え?いやステイレットだけど……」

「私もね!家に『モモコちゃん』っていう名前つけた子がいるの!会わせて対戦とかしたいなあ!」

「あの、ヒカル。そろそろ帰らないとステイレット達が心配するよ」と茶々を入れる様に大輔が言う。

「あ!そうだ!玄白さんゴメン!俺達もう戻らなきゃいけないから!じゃあね!」

「そうなんだ。私もバイトあるから仕方ないよね……じゃあまた!」

——　　なんか、ヒカルに対しての方が食いつきいいなあ——

そんな事を思いながら、黄一はヒカルに不満を抱いていた……。そんな事は露知らず、ステイレットはヒカル達の帰りを待つばかりだっ

た……。

「マスター……まだかなあ」

ep21 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラルド』（前編）

『さあ！チャンピオン十人抜きも大詰めです!!』

煌びやかなホールにて、何人もの派手なスーツやドレスを着た人達がルーレットやカードに興じていた。ある者は余興とばかりに軽い気持ちで、ある者は儲けを第一に欲を全てさらけ出す。ここはカジノ『トワイライト』。それも正規ではない違法の店。

その店内の一面にて、ミニチュアのコロッセオがあった。その中で一組のFAGが戦っていた。コロッセオの周りに観戦用の椅子とモニターが並べられており、コロッセオの中のバトルを間近で観戦できるという仕組みだった。

『常勝無敗のチャンピオンによる十人抜き！息切れ一つせずにこれで9人目！強い！強すぎる!』

コロッセオの中で二人のFAGが戦っていた。必死に武器を振り回し、銃を連射し相手を倒そうとする。その一方で相手側、チャンピオンと呼ばれた白いFAGは無駄のない動きでかわし続け、その中で撃ち返す。バニーガールの様なFAG、バーゼラルドだ。全身にバーニアを設けた高機動かつ高火力機。

「……」

バーゼラルドは両手に持った連装レールガン『セグメントライフ』を連射して敵FAGに反撃の隙を与えない。相手側は攻撃に集中しすぎたのが災いしてモロに銃撃を受ける。

「くっあぁっ!」

悲鳴を上げつつ吹き飛ばされるとそのまま機能停止。敗北となる。バーゼラルドの周りには十人抜きの敗者であるFAGが九人、それぞれ地面に突っ伏し、壁に寄りかかり倒れこんでいた。その光景を見ていた観客はバーゼに賭けていた者は狂喜し、賭けていない者は絶望の叫びを上げた。

「……」

どちらにしてもバーゼは一切の反応を示さない。何時もの事とばかりに興味がなかった。

『さあーいよいよ10人目の挑戦となります！はたして10人抜きなるか!?!』

反対側のコロッセオの入場用の柵がせり上がり、挑戦者が飛び出してくる。

「バーゼラルドオオ!!」

叫びと共に白いギガンティックアームズが飛び出してくる。ルシファーズウイングだ。自分の倍以上ある相手に対して、バーゼは変わらず一切動じない。

「アンタがここのナンバー1のバーゼラルドか?!アンタを倒す!」

ルシファーズウイングの中央部に収まったFAG『イノセンチア』が吼える。色白の肌とグレーの髪、赤いボディが特徴だ。そんな彼女にバーゼは初めて口を開く。

「新人か?……盛り上がる要素になればいいがな」

冷静かつ堂々とした態度にイノセンチアは一層腹を立てた。自分の切り札を全く脅威に感じていないのだから。

「舐めるなっ!!」

そう言つて手に持った大剣『ギガスラッシュエッジ』をバーゼ目掛けて振り下ろす。が、紙一重で回避、叩きつけられた地面から巻き上がった轟音と土煙が、バーゼの姿を覆い隠した。直後土煙の中からバーゼが飛び出し、左サブアームのヒートクローをイノセンチアの顔面に叩き込もうとする。

「甘いな!」

「このおっ!」

イノセンチアは羽根状の遠隔装備、フェザーユニットを全て飛ばした。バーゼの左右からそれが襲う。その数22個。バーゼは攻撃をやめると後方へ退避、短剣状の羽根はバーゼを追い詰めるべく追いかける。

「さあ追い詰めなフェザーユニット!踊れバーゼラルド!」

「フツ……」

余裕の態度を崩さないバーゼラルド。彼女は下がるのに急制動をかけると、大きく前方に高くジャンプ。その際に全てのフェザーユニットとルシファーズウイングの動きを計算。ロックオンを瞬時にかける。

「マルチロック……fire!」

二丁のセグメントライフルを撃ちながらバーゼは着地、撃ったライフルは正確にフェザーユニットを撃ち抜き破壊。間髪入れずに残りのフェザーユニットにライフルを高速で撃って当てていく。まるで鼓舞してるかのような鮮やかな動きだった。

「ガンカタ?!」

「盛り上がるだろう?」

自分のこの戦法さえも、相手にとっては場を盛り上げる芸扱いなわけだ。一層イノセンチアは不快さを表す。

「っ!舐めるなど言っている!」

だが動きが止まった事には変わりない。イノセンチアはギガスラッシュエッジをライフルモードへと変形させるとバーゼへと発射。フェザーユニットを巻き込んでもバーゼを倒せばそれでいいという考えだった。

「フルチャージ!いけえっ!」

「っ!」

バーゼが気づいた時には遅い。着弾したビームは大爆発を起こしバーゼの姿を掻き消す。これで勝った。そう思ったイノセンチアだが、

「貴方に教えておいてやろう。必殺のつもりなら必ず仕留めなければ、ギヤラリーから不満の声が上がるぞ。無様だからな」

爆風の中からバーゼが飛び出してくる。バリアの様なフィールドを張っていた。A B S A。機体正面のみだがバリアにより防御障壁を張る。

「なっ!」

「もう一つだ。相手の事はよく調べておけ」

「くう！偉そうに！」

イノセンチアはルシファーズウイングをパージ、そして二体に分離させる。ハーピーとユニコーンの獣型だが、更に変形、それぞれ人型のヒューマノイドモードへと変える。そしてバーゼに突っ込ませた。イノセンチアはライフルモードのギガスラッシュユエツジをバーゼに向ける。ハーピー型が両手のクローでバーゼを捕えようと、そしてもう一体。ユニコーンの方は脚力を活かしてバーゼを放浪しようとする。が、バーゼは冷静なままライフルで二体を難なく撃ち抜いた。それぞれ胸の真ん中を撃ち抜かれた二体はそのまま沈黙。

「なっ！」

「見本を見せようか、必殺とはこうする！」

バーゼは右サブアームを向けた。さりげなくフルチャージしていたのだ。そして放たれたビームの濁流はイノセンチアに向かう。負けじとライフルを撃つがこちらはまだチャージが不十分。バーゼの砲撃を押し返す事は出来ずそのまま、イノセンチアはビームに飲まれる。

「ア！アタシは！ここで勝って自由の身に！そして運命の素敵なマスターにいい！！」

そのまま爆発。10人抜きはバーゼラルドの優勝となった。

「……私達にそんなものはないよ」

『見事！見事10人抜きとなりました！流石チャンピオンバーゼラルド！』

沸きあがる歓声。バーゼラルドはさも当然と言った表情で、両腕を上げながら歓声のする方へと応える。

『これにてチャンピオン10人抜きを終了となります！賭け金は窓口でどうぞ！』

ハイテンションな実況が終わると観客たちはそれぞれの想いを口に席を離れていく。そしてバトル仕様が解かれたコロッセオは一気に静かになる。そして、それぞれ倒れていたFAG達が次々と起き上がった。

「お疲れ様——これで今日のシフト終わり？」



9人目に倒されたFAGが言った。それにバーゼラルドが返答する。

「ああ、終わりだそうだな。これで今日の仕事は無くなったな。後は各自自由にしてくれだそうだな」

「と言つても話す相手も碌にいないしなあ。あーあ、私達も一般のFAGみたいにならないうちにお出かけとかしたいなあ」

「無理を言うな。私達に自由はない、ただ命尽きるまで戦い続けるのみ、それが我々の誇りだ」

武人然か騎士然とした態度のバーゼラルドだ。試作型は幼く天真爛漫だったらしいが、これは真逆と言つていい性格設定だろう。

「っ?!ねえー!ちよつと!」

バーゼラルドにさつき戦つた新人のイノセンチアが噛み付いた。

「なんだ?新人」

「ここで勝つても自由になれないってどういう事よ!」

「?聞いてなかったのか。私達はこので一生涯戦い続ける事を義務付けられている」

「!?なんだよそれ!」

「闘犬の代わりだよ。私達の女としての姿や情緒が必死に戦っているのは観客を熱狂させるのに都合がいいらしい。実際に闘犬を使うよりはずっと安上がりで場所も取らないしな」

FAGの分類はホビーだ。賭けはともかく最初からバトルは想定されている。血の出ない人造人間とはいえ女同士で戦うのは実際でも見世物にうつつつけられない。が、イノセンチアにとってそれは到底受け入れられるものではない。

「アタシ達は犬じゃない!」

「だがホビーだ。だいたい正式な手続きを受けて買った以上、違法性はない」

「でもアタシは!どんな人が買ってくれるんだろうって楽しみにしていたのに……素敵なマスターと会えると思つていたのに……。それがこんな違法カジノで賭博試合だなんて……」

理想と全く違う状況にイノセンチアは項垂れる。

「素直でいればきちんと整備はしてくれるぞ？ 達者なのは口よりも強さであってほしい物だな。いつまでもやる気のない試合をするつもりなら、本当に捨てられるかAS書き換えをされるぞ」

さらつと言うバーゼラルド、しかしそれはお前は奴隷と言われている様な物だった。

「……こんな所、潰ればいいのに……」

「無理を言うな。違法なのに巧妙に隠してある場所だ。そんな簡単にこういった場所が潰れるものか」

と、一体のFAGがバーゼの肩を叩く。

「あのさバーゼ、ちよつといい？」

「なんだ？」

「なんか外が騒がしいよ？ 何かあったのかな」

「賭けの歓声位いつだって上がってるだろう？」

「いや、戸惑いの声だよ」

気になって飛行可能なFAG達は上空へと上がる。入口近くで、良く知ってる制服を着た集団が、オーナーと従業員相手に騒いでいた。とはいえオーナー達は観念したらしく手を上げていたが。

「動くな！ 賭博開帳凶利、及び賭博罪の疑いで現行犯逮捕する!!!」

集団の正体は……言わずもがな、警官隊である。バーゼラルド以下はこの状況に驚愕の声を上げるのみだった。

『な！ なんだとおー!!』

それから時は流れて……。

『フレズ！ そのまま真っ直ぐ！』

「OK！」

バトルフィールドの外からの指示、マスターの声を受けてフレズヴェルクが地表スレスレを飛ぶ。ご存じ健とフレズのコンビだ。そして場所はナノマシンで構成されたバトルフィールド。今回のバトルフィールドは西部劇でよくある荒野だ。常に風が吹いており、砂塵を巻き上げ続ける。

そして今回のバトルは何人ものFAGが同時に対戦するサバイバ

ルバトルの大会だ。フレズは一人のFAGと戦っていた。

『相手は重武装な上にアーマーでガチガチだ！距離を……』

「そりゃーっ！」

健の指示を待たずにフレズはベリルショットランチャーの銃身にエネルギーを纏わせ相手を切り裂いた。

『置いてって言おうとしたのに！』

「くあっ……一人じゃやられない！」

だが相手のFAGは相打ちに持ち込もうと、持っていたミサイルポッドの弾薬を全て至近距離のフレズに撃ってきた。

「ちよっ！聞いてないよ!!」

戸惑うフレズを他所にポッドが一斉に火を噴く。フレズが一斉の爆発に包まれる。

「フレズが!?!」

同じくバトルに参加していたイノセンチアがこの展開に驚愕の声を上げた。打たれ弱いフレズだがこんなに早くやられるとは思ってなかった。だがミサイルの煙が晴れるとそこにいたのは等身大の碧色のエネルギーフィールドだった。

『TCS解除』

健がそう言っただけでフィールドを解除する。中から冷や汗を流したフレズが胸に手を当てていた。表情からして相当ドキドキしてる様だ。

「あービックリしたあ」

『全く！ランチャーじゃ接近戦の威力は並だっただけだ！』

フィールドの外でスマホをいじっていた健が呆れながら言った。彼が独断でバリアフィールドのTCSをフレズに張ったのだ。

「あ、マスターがTCSを張ってくれたんだ。ゴメンね」

『エネルギーかなり食うからなこれ、暫くは使えないぞ』

「当たらなければどうって事ないから大丈夫！」

『さつき当たる寸前だったろ！』

漫才。そんな感じのやり取りもつかの間。別のFAG達がフレズを襲う。

『つと！話は後！行くよフレズ！』

「ok！……頼りにしてるから！」

『僕もだよ』

訂正。夫婦漫才をする二人は戦場を舞う。フレズは両手にランチャーを構えると相手に突っ込んでいった。

——ああも仲良しなの見ると、健さんが病弱だっていうの全然感じないなあ——

そう思いながらイノセンチアも西洋剣と獅子の顔を模った楯で複数のFAGを相手に取っていた。もう以前の様な轟雷に助けられた面影は無い。

「覚悟っ！みつともなく命乞いなさい！」

イノセンチアに対して相手のFAGがマシンガンを連射している。

「なんのー！」

イノセンチアは飛び上がり回避。相手のFAGは狙い撃とうと銃を向けるも、イノセンチアは剣を蛇腹状に変形させて鞭の様に一体に伸ばす。ビーストマスターソードと言う変形機能を持った剣だ。

「あっー！」

蛇腹状の剣は相手の腕に巻き付き、イノセンチアは力を込めて相手の横にいたFAGの方にぶつけた。

「なっ?!」

二体は重なり合い体勢を崩す。そこを剣を解き戻したイノセンチアが二体纏めて切り裂いた。

「そんな！コンビネーションが仇に!?!」

「ただ撃つだけじゃ連携とは言わないわよ！乱戦になりがちなサバイバルバトルは、フィールドをどう使うが鍵なんだから」

以前轟雷に言われた事の受け売りだった。それが今は自分が人と言う立場になった。

「本当に連携のとれた仲間ってのはね、強力な武器よりもずっと頼りになるんだから！」

「努力……します」

そう言いながら二人は光を放ち退場。イノセントィアは今の自分をカッコいいと感じていた。

「決まったあ……んっ」

と、残った少女は巻き上がる砂塵に眉をひそめる。常に砂嵐の状態が続く。と、ある地点で一際派手に暴れてるFAGが見えた。

「アハハ！所詮はこの武装差！観念なさい！」

正体はFAGフレズヴェルク・ルフス。フレズヴェルクシリーズで最も重武装。両手に構えた分と背中にもマウントした4丁のベリルショットライフル。赤いスク水と紫のお団子ヘア、そして下腹部の淫もn……装飾が特徴である。彼女は全武装を前方に向けられるサイドワインダー形態で戦っていた。

ルフスの人数は3人。それが一斉に相手に奇襲をかける。

「全機で1機！情けはかけないわ！」

彼女は体艦巨砲主義を自負するかの如く4丁の乱射を続ける。襲われたFAG達は成すすべなく敗北。

「あいつら！無茶苦茶して！」

遠目から見ていたイノセントィアはどうするかと思案する。今日はマスターがいない。と、そんなルフス3体に向けて健のフレズが突っ込んでいくのが見えた。

「群れてなきや何もできない奴が何を言ってるのさ！」

『フレズ！連携取れば勝てる！行くぞ！』

「ノーマルのフレズヴェルク！そんな貧相な武装で！」

ルフス3人のうち1人がこちらを撃ってくる。銃身からランチャーよりも大型の碧の砲撃が撃ち出された。

「わっとなっとな……ボクのランチャーよりも高出力なベリルショットライフルだあ。いいなあ」

かわしながら相手の武装を羨ましそうに見るフレズ。

『見とれるなよ！僕はお断りだからね！あんな重いライフルを4丁も！』

そう言いながら健はあの3人をどう仕留めるか思案する。機体出力自体はこつちと同等、武装はあの重武装となれば当然スピードは落

ちる。

「でもカッコいいじゃん。あーあ、ビキニアーマーじゃなくて、ライフ標準装備のルフスのボディでもよかったかも……」

今のフレズのボディ、ビキニアーマーverはルフスとどちらにするかで結構悩んだ。最終的にビキニアーマーを選んだわけだ。しかし重武装好みのフレズにとってはあの武装が正直羨ましい。

『……僕は今のお前の恰好が好きだからそれはやだよ』

ぴくつとそれを聞いたフレズの耳が動いた。このボディを褒めてくれた事が嬉しい。

「っーじゃあやっぱり、こっち選んでよかったあ」

「っー何かムカツク！木端微塵にしてやる!!」

ノロケる健とフレズに対してルフス達は一斉に撃つてきた。爆発しろと言わんばかりの怒りだった。その弾幕もうまく避けながらランチャーで迎撃を行う。距離があればある程威力が落ちてしまうのがランチャーの欠点だ。これには牽制の意味もあった。が、決定打にはなり辛い。

「甘いー」

先頭のルフスに命中しそうになるも、3機目のルフスがTCSで防御した。少なくとも1機は援護に徹してる様だ。

『高威力だけど、あいつらその分消耗は激しいな。暫く疲れさせてから一網打尽にした方が確実か……』

同じフレズシリーズだ。どうすればいいか健はよく知っていた。

「じゃあ暫くは時間稼ぎだね……あれ？」

「どうした？」

フレズに聞くまでも無く、健はフィールドの異変を理解した。1人のFAGがルフス達に突っ込んでいく。

「あの姿……バーゼラルド型だ！」

乱入したバーゼラルドはライフルを2丁構えて突っ込んでいく。

「いちいち相手が弱るのを待ってられるか」

フレズ達の意図は理解していたらしいが、それではつまらないとばかりに相手に突っ込んでいく。

「なんなの貴方は！」

突然の乱入者にルルス達は撃ちまくる。フレズ以上の勢いでそれをかわしながらライフルを構えて撃つ。

「……干渉弾装填……fire！」

「させない！」

1機のルルスが先程と同様に前に出てTCSを展開し防ごうとする。しかし……

「TCSに胡坐をかき過ぎたな」

バーゼラルドの声と共にTCSは貫通、ルルスの身体を撃ち抜いた。撃たれたルルスはこの状況に信じられないと言った顔で叫んでいた。

「そんな！そんな馬鹿なあっ!!」

「私のライフルは対TCS用の攻性干渉弾を撃っているんだよ。フィールドで全てを防げると思ったら大間違いだったな」

このバーゼラルドは対フレズヴェルク用といった装備で固めていた。

「くっ！所詮武器の威力に頼ってるだけだ！」

「貴方が言うか？」

ライフルを構えて撃つルルスに対し、バーゼラルドは全身のフォトンブースターで軽快に後ろに回りこむ。すぐさまルルスの背中に2丁で連射。

「なあっ！」

重武装の所為で対応が遅れる。背後から撃たれたルルスはそのまま爆散退場していった。

「後生大事に切り札を使わないからそういう事になる」

「よくもやってくれたわね！」

残ったルルスが変形を解き、ライフルを4丁まとめてパージ。ダガーを構えてバーゼに斬りかかった。

「ふむ。少しは学習したか」

「舐めるな！」

バーゼは冷静なまま刃をかわし続ける。と、隙を見てライフルの銃

身を勢いよく振り下ろす。手首を叩かれたルフスはそのままダガーを取り落した。

「つうっ！」

痛みに顔をしかめるルフス。そのままバーゼはライフルの乱射。最後のルフスもこれで仕留めた。

「3人まとめてあんなに早く?!」

この状況にフレズ自身も驚きの声を上げた。あっという間だ。

「……ねえマスター。アイツとバトルしたいって言ってくれたら、許してくれる?」

『勿論だよ。僕だって戦ってみたい相手だ』

「じゃあマスター! やろっか!!」

そう言つてフレズはバーゼラルドに挨拶代わりとランチャーを一発撃つ。

「む?」

難なく避けるとバーゼはフレズヴェルクが向かってくるのが見えた。

「お前の戦い見てたらなんだかスイッチ入っちゃったよ!」

「身の程知らずだな!」

先程と変わらないと言わんばかりにバーゼラルドはライフルの連射で迎撃しようとする。

『フレズ! 右! 左! 真っ直ぐだ!』

「OK!」

健の指示通りにフレズは動く、少女の傍を弾丸が通る。だが連射の効くセグメントライフルにとってはこれをフェイントにする事は造作もない。フレズの進行方向にライフルを撃って撃ち落とそうとするバーゼ。

『フレズ!!』

「あいよ!!」

フレズは健の言おうとしてる事が解っていた。目の前の弾丸を、ランチャーの刀身で切り払う。そしてもう片方のランチャーをバーゼ目掛けて撃つた。



「なっ?!弾丸を!」

中距離まで接近してからの射撃、バーゼが初めて表情を崩した。歯を食いしばる驚愕の顔で身をひるがえし回避しようとする。が、左肩のサブアームに被弾し破壊される。

『このまま畳みかけるぞ!』

『その余裕の表情!もつと崩す!』

更に攻めに出ようとするフレズ。だがバーゼの方は……笑みを浮かべた。

「これだ!これこそが私の求めていたバイオレントストラグル!!心が躍るな!!」

バーゼが叫ぶと同時に、彼女は全身から追尾式のビームを発射、歪曲したビームはそれぞれフレズを襲う。

「ホーミングビーム!?!」

更にバーゼはライフルをこちらに向ける。

『この距離じゃ!TCS起動!!』

健が叫びながらバリアを起動させる。バーゼの周囲をバリアが包みビームを弾いた。ギリギリで使用可能だったらしい。

『向こうはTCSを貫通する!下がって体勢を立て直すよ!』

「何言ってるのマスター!このままゴリ押ししたほうがいいよ!」

向こうのスピードは理解していた。このまま逃げても追いつかれると、健の忠告を無視してフレズはランチャーのトリガーを弾いた。

……が、反応が無い。

「あれ?」

『馬鹿!TCS展開中は武器が使えないの!』

慌てた健の声が響いた時には遅かった。バーゼは一斉にフレズに干渉弾を撃ち込む。これがフレズにとって致命傷となり撃破された。

「わああっ!!」

「……とんだ見込み違いだったな」

肩すかしを食らった。&口直しとばかりにバーゼはフィールド内のFAGと新たにバトルしようとして飛んでいった。……暫くしてこの

バーゼラルドが優勝した事は言うまでもないだろう。

「負けちゃいましたねフレズ達」

「何やってんのよアイツ」

「イノセンチアもいい線行ってたんだけどなあ」

バトルを観戦していた轟雷とステイレット。そしてレティシア。

「頑張ったけど駄目でしたー!」

イノセンチアが半泣きで戻ってきた。

「よしよし、あなたはよく頑張ったわよ」

レティシアはそんなイノセンチアを撫でて慰める。

「その通り、1人であそこまで戦えるとは大したものです。師匠として鼻が高いですね」

「って、アンタ師匠らしいことやったっけ?」

「むー、さっきのイノセンチアの決め台詞は私の教えですよステイレット」

「と、そういえばフレズが来ませんね。さっきの負け方からして健さんに怒られてるのでしょうか」

フレズが来ないのが轟雷は気になった。周りを見ると健とフレズが一緒にいた。さっき戦ったバーゼラルドと相対してる。

「おい! さっきのはトラブルで負けただけだ! もう一度勝負しろ!」

フレズとしてはさっきのバトル結果に納得が行かない様だ。

「何を言うんだ? さっきお前が負けたのは貴様個人の愚かなミスのお為だろうか?」

バーゼラルドにさっきの有様で負けたフレズは眼中に無いらしい。テーブルに置かれた優勝賞品に寄りかかりながら言った。

「そーそうだけど! ボクとマスターの真の力はあんなじゃないんだ!」

「フン……。まあ確かにマスターは悪くなさそうだな」

健を値踏みする様にバーゼラルドはジロジロと見る。フレズへの指示はちゃんと聞こえていた。バーゼにとって健は評価に値する人物の様だ。

「お前。私のマスターにならないか？」

「な！何言ってるんだよお前！」

「お前と組んだらもつと私は高みへ昇れる。バトルし放題。そして常勝無敗も夢じゃない。勝利の美酒でこんな女よりお前を満足させてやれるぞ？」

「っ!!マスターに何言ってるんだよ!!!離れろ!!」

バーゼの態度の所為で、フレズのASに怒りと嫉妬が湧き上がるが、バーゼは意に介さない。

「悪くない話だろう?こんな知性のないFAGよりはいいと思うが」

「また!!また言うかあ!!」

「フレズ落ち着いてよ。気持ちは嬉しいけど、僕は体が弱いんだ。バトルは頻繁には出来ないんだ」

バーゼに飛びかかりそうなフレズ、涙目の彼女の前に健は手を置きフレズをなだめる。

「そうなのか？」

「それに、僕にはフレズ以外のFAGは考えられないからさ」

フレズの前に置かれた手が、フレズを包み込んだ。そう言ってくれたのがフレズは無性に嬉しかった。勝ち誇った様な気分になる。

「っ!マスター……。ど!どうだ!マスターにはボク以上なんて有り得ないんだからな!バトルだけがFAGの全てじゃないんだ!」

「フレズヴェルクシリーズらしくない物言いだな。……残念。君も物好きだな」

「くうう!!そ!そういうお前のマスターはどういう奴なんだよ!!まさか野良じゃないだろ!!」

なおも挑発的な態度のバーゼラルドにフレズは怒りを見せる。が、フレズの指摘にバーゼはピクツと身体を強張らせる。

「……」

その反応に、何か隙を感じたフレズ。ここぞとばかりに言葉の追撃をかける。

「まさか当たり?まあそうだよな。マスターいるならお前自分のマス

ター馬鹿にする様な事ばかり言って、こんな酷い奴じや捨てられ  
たっっておかしくないもんな」

「それは……」

「やめろよフレズ。お前もひどい事言ってるんだから」

「だってマスター！」

注意する健に対し、不満を顔に出すフレズ。と、その時だった。

「あーやっぱりこんな所にいた!!何やってんのバーゼ!!」

ブリッツガンナーに乗ったイノセンチア型が三人の間に割って  
入った。褐色肌ではない色白のイノセンチア。作業用のエプロン  
をしていた。

「うーいーイノセンチア！」

解りやすくバーゼラルドが狼狽した。イノセンチアはバーゼの  
手を掴む。

「職員の人がカンカンよ!!早く戻ってよ!!今日と言う今日はしつかり  
絞ってもらおうからね！」

「まー待ってくれ!ちよつと息抜きのもりだったんだ!!」

「仕事ほっぽり出して何言ってるの!早く戻るわよ!!」

「解った!解ったから耳を引っ張るな!!」

そう言つてイノセンチアはバーゼラルドを連れてその場から離  
れていく。それを黙って見ていたフレズや轟雷達、

「明らかに何かありますよね」

「……フレズ、失礼だから追いかけてや駄目だよ」

間違いない追いかけるだろうなと予想していたので釘を刺す健。  
前にもマテリアの事についていった事があつたからだ。

「健さん……、アイツもうついて行っちゃったわ」

「……アイツ」

「でさあ!どうしてお前はそんなに慌てるのさ!」

大急ぎで戻るバーゼとイノセンチアに対してフレズが呑気そう  
に問いかける。三人共上空を並走していた。

「貴様!……こつちの話だ!つきまとうな!」

「やーだよ！お前のマスターがどんな奴か解るかもしれないだろう？」

必死なバーゼラルドに対してフレズの方は余裕だった。その表情がバーゼにとつて無性に腹が立つ。

「貴様ああ!!」

「構ってる暇はないの！このまま戻る！」

「解ってる！新入り!!」

「いつまでカジノ時代の栄光引きずってるの!!」

「ん？カジノ？」

そうこうしてる内に目的地についたらしい。バーゼとイノセンティアの二人は下に降りていく。フレズもバーゼについて行った。

「なんだここ？」

「あー！バーゼラルドちゃん！どこ行つてたの！」

施設からツインテールの少女が出てきた。

「すいません朱音さん！すぐ戻りますから！」

慌てて言うイノセンティア。そう言つて二人はすぐに施設の中に戻つていった。それを見送つた朱音もまた施設に戻ろうとするがそれをフレズが引きとめた。

「あのーすいません」

尋ねるフレズヴェルクに朱音は振り返る。

「わ！可愛い！フレズヴェルク型だ！」

「あ！あのー！ここつてどういう施設なのさ?！」

「え？そこの看板を見てみなよ。ここデイサービス（通所介護）だよ」  
そう言つて朱音は看板を指差した。フレズは看板に書かれた文字を読む。

「デイサービスセンター……『よあけ』？」

デイサービス……自宅や老人ホームまで迎えに来てセンターに通い、様々なレクリエーション、食事に入浴を受けたりする介護保険サービスの事である。

……その頃バーゼラルドは、自身の主に勝手に姿を消した事を謝罪していた。

「……勝手にいなくなり申し訳ありませんマスター……」

「いや、いい……」

バーゼの目線の先、向かい合うマスターの良沢源三（りょうたくげんぞう）……80代のお爺さんはソファに座りながら、低い声でそう言った。

ep22 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラルド』（中編）

「更生プログラム？」

聞き慣れない言葉にフレズは首を傾げる。デイサービスセンター内部でフレズは見学を受けていた。

「FAGの中にはね、犯罪に加担されたりする個体もいるの。そう言った個体はFAG社に回収されて、再出発する為にこういった場所のお手伝いをされるの」

バイトの朱音がフレズに答えた。何故バトルマニアのバーゼラルドがこんな場所にいるのか全く理解できなかったからだ。

「そんな事されるんならアイツ昔悪い事やってたの？」

「あんまり言うべきじゃないんだろうけど……カジノで賭け試合出されていたんだって」

「そんな事されていたのか……。じゃあお前は皆の監督ってわけ？」

「私はバイト。いつもは正規の職員がいるんだけどね。今日は用事で来れなくて」

FAGはマスターを選べないのはフレズも知っていた。違法行為をやらされていたと思うと何だか気の毒になってくる。

「それでここで暫く研修を受けてね、都合によっては家に連れて帰るのも可能よ」

フレズはお年寄りにお世話をしているFAG達を見る。お婆さんが数人集まってテーブルに座ってるのが見えた。テーブルの上にはFAGが数体いる。

「こうやって……できた！」

あるFAGが両手オーバーボードマニピュレーター装備のパワードガーディアンを装着し、あやとりをしているのが見えた。またあるFAGも同じ仕様の装備でお手玉をしている。お婆さんに教えて貰ってる様だ。

「しかしお前らに使われてるナノマシンってのは繊細なんだな、知っ

てるか。俺が若い頃は旋盤でな……」

「うんうんー」

またある場所ではFAGがお爺さんの昔話を聞いている。ほとんどのFAGがマンツーマンでお年寄りの相手をしていた。

「皆一対一で相手をしてるんだ。でも……こういう場って本格的な介護ロボットとかは導入してないの？」

FAGの様なロボットが実用化している時代だ。もっと専門職用の本格的なロボットは当然ある。

「あら。FAGはこういうのに一番実用的と言っていていいわよ。柔軟なASは介護用ロボットにうってつけだもの。自然な会話で、自分に視線を合わせてくれる相手がいるってのは嬉しい事よ」

——そういえば、ボクもマスターには似た様な理由で買われたんだっけ……」

彼女の病弱なマスター、健は友達として、そして異性を連想させることによつて生きる気力に結び付ける。その理由でフレズは与えられた。ある意味では彼女達の今の立場は何だか共感出来た。

——ボク達って本当に無限の可能性があるんだなあ……」

かつて試作型のフレズヴェルクが教え込まれたと言う言葉を思い出す。量産型の自分達にも受け継がれた新世代ホビーとしての本質。「ねえ、ここで世話したお年寄りはさ。もしかしてそのままマスターになるの？」

「お互いの合意によるわね。中にはお孫さんや家族にプレゼントつてのものもあるわ」

「へえ、もしかしたらボクのマスターとライバルになる奴とかいたりして」

ライバル、自分で言った言葉に彼女はあざむきつつ。さつき戦ったバーゼラルドだ。

「そういうえば……さつき帰ってきたバーゼラルドはどこいったのさ」

キョロキョロと辺りを見回す。まだ怒られてるのか、と思いつつ。

「彼女ならあそこよ」

朱音が部屋の隅を指さすと、部屋の隅に置かれたテレビを見ている



老人とFAGが一人ずついる。バーゼと彼女のマスター、源三だ。

「……」

ソファに座りながら源三は無言で時代劇を見ていた。バーゼはそのすぐ横で背もたれの頂点の部位に座っており、ほとんど同じ目線だった。

『……』

特に会話も無しに見ている二人。それを見ていたフレズはいたずらっぽく笑みを浮かべると、バーゼの後ろから声をかけた。

「なあお前」

「っ！貴様……」

飛行しながら話しかけるフレズに、バーゼは鬱陶しそうな顔で応える。

「中々ダンディズムあふれるマスターだねえ」

「皮肉か？」

「まっさかー。ボクのマスターには無い魅力だなと思って、キシシ……」

チエシヤ猫の様に笑うフレズ、さっきバトルではバーゼに一方的にやられたのだ。これ位のお返しはしたい所だ。

「貴様……またやられたいのか？」

「やめなよ。お前のマスターの前だろ？」

どんどんフレズの方のペースにはまってるバーゼ。バトル絡み以外では完全に逆転していた。と、マスターの源三もフレズの方に気付いたようだ。

「バーゼ……友達か？」

「あ、いえ友達では……」

「……友達だよ。ボクとコイツは」

振り向きながら否定しようとしていたバーゼだが、フレズの方が先に肯定の声を上げる。「な?!」とバーゼは戸惑いの声を上げる。

「そうか」

源三は一言そう言うと、またテレビを見始める。

「どういっつもりだお前……」

「そう言った方が安心するでしょ？こっちはお年寄りとの付き合いは長いんだ。普段はマスターとそういう地域で暮らしてるんだからさ」

普段フレズは健と山奥の集落で療養生活を送ってる。周りは老人ばかりで話し相手もそうなりがちだった。感性は健と彼の祖父のおかげで若いままだった。と、フレズはある事が気になった。バーゼと源三の距離間だ。どうもコミュニケーションをとってるようには思えない。他のFAG達は普通に会話してるのに、だ。

「ところで、会話無いけどいつもこんな感じなのか？」

「悪いか。別にこれで困った事はない」

「何か勿体ないなあ。周りはあるなりに賑やかなのにさ。皆の輪の中に入ったりしないの？」

「別にいいだろう。こうしてるのが好きなんだ私達二人は」

「でもさ、せめてテレビ見ながらの会話とかないの？ボクの場合はいつもマスターと、テレビ見ながらお話ししてるよ」

「……だよ……」

消え入りそうな声でバーゼが呟く。フレズにはどうも聞き取れない。

「あ？何？」

聞き返すフレズにバーゼは突然飛び上がるとフレズの両肩を掴む。直後、部屋の隅にすっ飛んで行く二人。

「……どうやって話をすればいいのか解らないんだよ……」

「いや、別に感じた事だけを話せばいいだろ」

「人間と会話する機会なんて全然なかったんだよ。ずっとバトルばかりやってきたから……」

まさかそういう事で相談受けるとは思ってたかったフレズだ。

「なんで他のFAGや職員に聞かないんだよー」

「そ、それじゃ舐められるかもしれない！他のFAGは私の部下だった奴らだ！」

「サボりでバトルやってた奴の言う事かよ……」

「私はバトルが抛り所だったんだ！栄光を忘れずにいたかった！」

「めんどくさい奴だなあ。別に話をするなんて自然な事だろ？思った

事を素直に言えればいいんだよ」

「そうなのか？でもそれで相手が不快な思いしたら……」

「大丈夫だよ。大体そんなの気にしてたら出来る会話も出来なくなっちゃうだろ。ボクなんてマスターとの会話の中で不快な思いなんて一度も……」

と、会話の中でフレズは自分の行動を思い返す。会話の中で……胸を揉ませたり、舌を絡めて唾液を出し入れするキスをしたり、スパンキングされてもつと叩かれたいとお尻をくねらせて主人を誘ったり……不快な思いはしてないが、恥ずかしい思いはしていた。

「……して……な……」

「？どうした？顔を真っ赤にして……」

「な！何でもないよ!!さっさと行って来い！」

「!?あ、ああ……」

フレズに促されながらバーゼラルドは源三の所へ戻る。

「あの……マスター」

「……どうした」

「……今日はいい天気ですよね」

「？ああ」

「……いや、もつと盛り上がる話題とか出せよ」とバーゼの後ろでフレズは小声でバーゼに告げる。

「そんな事言われても……そもそも話す話題が……」

「眼の前の時代劇があるだろ。普通に感じた事話せばいいんだよ」

目の前の時代劇はクライマックス。殺陣のシーンになっていた。主人公の侍が一人で何人もの浪人を切り捨てている。

「感じた事……あの、マスター」

「なんだ」

「こうやって何人もの相手を相手にするシーンって、どう考えてもあり得ないですよね」

「」

バーゼの話題にフレズは口をぽかんと開けた。

「普通だったら主人公が一人斬ってる隙に、後ろから襲って斬ればそ

れで終わりなのに、わざわざ待ってたりするなんておかしいじゃないですか。大体この場に一人で乗り込むなんてこの主人公も愚かとか言いようg」

「アホーッ!!!」

見かねたフレズがバーゼの後頭部に飛び蹴りをかました。綺麗なライダーキックだった。

「グハッ！何をする！貴様の言った通りにやったのだぞ！」

「少しは話の内容を選べよ！」

「何でもいいと言ったのは貴様だ！」

「言われた相手がどう思うか位考えろよ！」

あまりフレズの方も人の事は言えないかもしれない。こういう彼女の反応も、健に似た様な事言って怒られた事がある故の反応だった。

「ぐ………すみませんマスター………この様な醜態を………」

「？いや、いい………」

マスターの源三は特に気にした素振りも見せずに時代劇にまた集中する。が、ポツリと呟いた。

「………そういえば初めてだな。お前がこんなに喋ったのは」

「え？あ、はあ………」

—— 面白いえば………ボクも昔は物を知らなくて、マスター困らせてたっけ………

そんな事をフレズは思い出す。元々自分のシリーズもバトル以外では無知だった。今こうしてバーゼにアドバイスが出来るのも健や彼の祖父のおかげだ。

—— アイツ………本当にそう言って叱ってくれる人がいなかったんだ………

なんというか、自分が買われた理由含めて他人の様な気がしない。バーゼに対して親近感があつたフレズだ。

「あのさ、お爺さん………」

「………バーゼの友達か」

フレズの事が気になっていたらしい。源三は声をかける。さつき

の口喧嘩でバーゼと親しそうだったのが気になった様だ。

「あ、うん。あのさお爺さん。バーゼの事は好き？」

「!?な！何を言っているー！」

「ああ、好きだよ」

そう聞くと、フレズとしては何だか嬉しくなってくる。

「マ、マスター……」

戸惑いつつも嬉しそうなバーゼに、フレズは言った。

「やっぱりダンディでいいマスターだね」

その後、健を待たせてはいけないとフレズは健の所へ帰って行った。勝手に出て言った事を謝ると健や轟雷達にフレズは事情を話す。

「ってわけなの。ゴメンねマスター」

「へえ。お爺さんだったのか」

「そのマスターに会う前は、バトルしかやってこなかったんだってさ。なんか……可哀想だよ」

「意外ですねー。フレズがそう言うなんて」

思わず轟雷の口からそんな言葉が出てくる。好戦的で普段考えなしなフレズがそう言うのはかなり意外だった。そしてそれはその場にはいたFAG達が皆思っていた事だった。

「！な！なんだよ！ボクだってマスターから色々学んでるんだからな！」

「え？そうだったの？」と健。

「!?マスターアツ!!」

きよとんとした表情の主、望んだ答えを出してくれなかった少年にフレズは若干涙目で叫んだ。

「泣くなよー。ゴメンゴメン」

「マスターが教えてくれたんだからね……無限の可能性があったって、一人ぼっちじゃ何にもなれない、何も出来ないって……」

「?そんな大それた事言った覚えはないよ」

「ボク達の試作機が開発者にそう言われたらしいよ。だから孤高の存在でいろって、……変だよ。ボク達を作ったのも人間なのに」

「……フレズ。熱でもある？」

普段見せ無い様な知的な様子に、イノセンチアはかなり面食らう。

「イノセンチアまで！」

頬を膨らませて涙目で怒るフレズにイノセンチアは言い過ぎたかと反省する。

「悪かったよー」

「まあまあ、フレズも色々と学んでいるって事さ」

その日の夜。場所は健の家。VRの空間内で健とフレズの二人はキャッチボールをしていた。ステージは夜の草原がどこまでも続く。穏やかな風が吹く心地よいフィールドだ。こうした一日の終わりにVR内での軽い運動は二人の日課となっていた。

「それっ！」

左手にグローブを付けた健がフレズに向かってボールを投げた。フレズも左手にグローブを付けて投げたボールを受け止める。

「そうそう。マスター上手！」

「じゃあもう少し距離をとってやってみるよ！せーの！」

健が距離を開けてボールを投げた。が、フレズには届かずボールは地面に落ちるとそのまま転がり停止。

「マスター、手だけで投げるんじゃ駄目だよ。体全体をバネにして投げなきゃ」

見本として投げる動作を一度しながらフレズはボールを拾い、健に手渡した。眼の前のビキニアーマーのフレズの肌をさらした胸が、中央部に空いた穴から見え、左右の谷間が小刻みに振動する。

「……あ、うん」

人工物なのは解っている。しかし目の前の少女の健康美は小学生の少年には刺激が強いのは明白だ。以前自分が揉んだ胸より露出が多い。人間なら何カップあるのだろう。とどうしても意識してしまう。フレズの方も健の様子を理解した。

「？あー、マスターってばボクの胸見てドキドキしてるんだー」

フレズは健が胸をチラ見してるのに気付いた。両手を広げて見てと言わんばかりにアピールしてくる。

「っ！悪いかよ……」赤面しながら少年は答える。

「ううん……マスターが好きならボク嬉しいよ……」

恥ずかしさと嬉しき、両方を出した様な表情で少女は言った。恥ずかしきはあれど、好きな人にそう思ってもらえるのはやはり気分がいい。

「っ!!さつき教えて貰った事実実践するからな！」

愁いを帯びた少女の表情は、少年にとってこれまた強い刺激だった。ごまかす様に距離を置く健。

——マスター、恥ずかしいのは嫌だけど、マスターが喜んでくれるとボク嬉しくなるの。ボク達に無限の可能性があるなら、マスターの身体も治せるよね。……そして何だって出来るなら……何にだってなれるなら……なれるかな。ボク……マスターの……——

「フレズ！行くぞー！」

照れをごまかす様に、わざとぶっきらぼう気味にボールを投げる健。物思いにふけていたフレズは我に返った。

「ええっ！ちよつと待ってー！」

対応が遅れたフレズお構いなしに、投げたボールは真っ直ぐフレズに向かい、『ぼすっ』と音を立てて、……フレズの胸の谷間に突っ込んで、左右の柔肉を押しつける形で止まった。

「……えっ？」

「……ナ、ナイスキャッチフレズ……」

流石にこの状況はドキドキしない健であった。

暫く遊んで二人で寝っ転がる。上空に広がるのは満天の星空だ。並んだ二人は提案するまでもなく手を繋いでいた。

「やれやれ、これで運動になるのかなあ」

この空間の中では自分は健康な身体能力を発揮できる。しかしVRの仮想空間だ。自分のリハビリやトレーニングになるとはどうも

思えない。

「お医者さんからはイメージトレーニングに繋がるって言われたじゃない。大丈夫だよ。病は気からって言うだろ？」

「そういうもんかなあ。今度の検査入院も近いし何て言われるか」

検査入院、というのはこっちで定期的に短期間の入院をして体の調子を見るわけだ。いつもは山奥の診療所暮らしの健だが、調子がいい時はこっちで暮らし、その時は診療所の先生と繋がりがあある医師に診てもらおう。そして山に戻るか街で生活するか判断してもらおうわけだ。

「そういえばもうすぐだったっけ。……寂しくなるなあ」

その間フレズは留守番となる。やはり主と会えなくなるのは寂しい。

「そんな長く続くもんじゃないから大丈夫だよ。今度はお見舞いでヒカルさん達も来るだろうし」

「ねえマスター……手、もっとギュツとして……」

暫く会えなくなるから少しでも温もりを感じていたい。そう思いながらフレズは健に手を差し出すのだった。

そして健は検査入院となり市内の総合病院で入院となった。そして暫くして……。

「いい傾向だよ。前よりも調子がよくなってるね」

パジャマ姿の健。一通りの検査を終え、診察室にてカルテやレントゲンを見る中年の医師が、安心する様に言った。健の担当医でありもう長い付き合いだった。丸椅子に座った健は結果を早く知りたかった。

「じゃあ山に戻る必要は……」

「うん大丈夫。このまま街にいても問題は無いはずだ」

そう言ってくれる担当医に「よかったあ」と健は顔の緊張を解き、安堵の息を吐いた。

「後でご両親にも連絡をしておくよ。これなら早く退院も出来そう  
だ」

「有難うございます。よろしく願います」



そう言つて健は診察室を後にした。田舎の診療所とは違う。広大で何人もの人間が行き来する廊下が健はどうにも慣れない。

——診療所と違つてこつちだと落ち着かないなあ……——  
「マースタツ！」

と、快活な声が響くと目の前に小さな少女が飛んでくる。エアバイク形態のフレズだ。

「あ、フレズ。来てたのか」

「今日はボク一人だけだね。診察結果どうだった？」

「うん。調子はいいよ。山に戻らなくてもいいみたい」

「やったあ！じゃあ退院しても轟雷達とも遊べるね！」

「僕も出来れば山に戻りたくなかったからね。正直嬉しいよ」

そんな話を話しながら、健は今の状況ならジュースとか飲んでも平気だろうなと休憩所へ移動。

——何にするかな……今日はコーラでいいか——

自販機の前に立ちサイフからお金を取り出そうとする健だが、その拍子にお金を落とす。

『あー！』

そう思わずフレズと健は口に出す。コロコロと百円玉は床を転がり健の手元から離れていった。

「……」

と、それをソファに座ったお爺さんが手を床に置いて百円玉をキャッチする。新聞を読んでいた為か老眼鏡をかけた白髪の老人だった。

「……これ、君の？」

健に老人は拾つたお金を渡す。

「あ、はい。有難うございます」

「あれ？源三さん？」

と、フレズは相手がバーゼのマスターである事に気が付いたようだ。

「ん？フレズ知合い？」

「良沢源三さん。知ってるも何も、この間のバーゼの……」

「マスター。迎えの車はもう少しかかるようです」

噂をすればなんとやらだ。バーゼが休憩室に飛んでくる。とフレズと鉢合わせするや否や反応する。

『あ』

「まさかマスターと同じこの病院に通っているなんてなあ」

休憩室内の日差し差し込む窓際、そこに腰掛けたフレズが、同様に横に座ったバーゼに言った。マスターの健も源三の横に座ってコーラを飲んでいた。こちらでは会話はない。

「家ではマスターと二人で生活をしている。サポートは私の役目だ」

「二人？他に家族は？」

と、フレズがいきなり聞き出す。「いきなり失礼だぞフレズ」と少し離れた健は釘を刺した。

「……家族はいないな。逃げられたよ」

感情がいまいち読めない声で源三が口を開く。逃げられたという言葉に健の顔が青ざめる。

「あ……！！すいません！こいつが失礼を！」

「いや、いいさ。そういう君の方は見た所入院してる様だが」

「あ、はい。僕身体が弱くて……」

「そうか。家族は？」

「両親と祖父がいます」

「そうか……。大切にしてやれよ」

言葉は少なめだが、健に対して思う所があるらしい。「はい……。有難うございます」と健は返した。

「入院生活が多くて会える頻度が限られていますけど、コイツがいるから寂しくないですよ」

そうフレズの傍に歩を進めるとフレズを掌の上に乗せる健。

「マスター……」

「まあ賑やかし程度にはなるな」

そして水を差すバーゼ、

「お前っ！所で源三さん。バーゼとの生活ってどんなのですか？こいつつてばバトル以外からつきしだからどんなのか心配になっちゃうよ」

バーゼの挑発に乗りそうになりながらもフレズは逆にバーゼの弱みになりそうな事を口にする。どうもバーゼが家事を一手に引き受けてるとは思えない。

「貴様……」

バーゼも痛い所を突かれた様な反応を見せる。効いてると確信するフレズ、

「バーゼの奴はな……ただそこにいるだけだな……サービスセンターでも一人だけポツンとしていた奴でな、浮いていたから俺が選んだ」フレズの予想通りと言っていい答えだった。鬼の首でも取ったかのような気分になるフレズ。

「あーやつぱり駄目なやつじゃん。源三さんてばなんでこんな奴を選んだのさー」

「フレズ！」

健は止めようと声を荒げる。

「逃げた妻と娘に似ていたからだ」

『え?!』

その言葉に全員が言葉を失った。

その日の夜。昭和に建てられて現在も手入れが行き届いている二階のない古い一軒家。そこがバーゼと源三の生活する家だ。

「ズズ……」

ノスタルジックな和室の中にあるコタツ。そこに入りながら源三は湯気の立つ緑茶を飲んでいた。自分で淹れた物であり、先述の通りバーゼは家事は何もしない。というか出来ない。

「マスター……お茶でしたら私が淹れるのに……」

向かいのテーブルの端、正座するバーゼが申し訳なきように言う。

「淹れ方解るのか？」

「いえ……」

ついノリで言ってしまったがバーゼは世話の一切が出来ない。バトル一辺倒の生活だったからだ。テレビもつけてないお茶の間を、お互いの間を沈黙が漂う。

——なんなんだこの重い空気は……、無心でバトルをしていた時の方がずっと楽だった——

フレズにからかわれた事がどうにも腹だたしい。なんとか自分がそんなことは無いと言い返したいが、自分が何もできないのは本当だった。

「……昼間に言われた事が気になるのか」

見抜かれていた。バーゼとしてはドキツとした。

「構わないよ。俺としては任せっきりにするよりはずっといい」

「?も、もしかして期待されてないんですか?!」

慌てたバーゼの声、戦力外に思われるのは正直嫌だった。

「そうじゃない……お前が逃げた妻と娘に似ていると言っていたのは知ってるだろう」

「あ、はあ」

「昔俺はな、仕事にひたすら打ち込んでいた。働けば働くほどお金が貰える時代だった」

今は昔、かつてバブルや好景気と呼ばれていた時代の話だ。今の若者には無縁と言つていいだろう。

「休みの日も返上して、日付が変わるまでは当たり前、お金があればあるだけ幸せになれると思つて、授業参観や運動会といったイベントも一切を無視したやり方をしていたら……な」

「……そういうのはご家族の方が酷いと思います。マスターの苦労も知らずに……」

バーゼ自身、ガムシヤラに戦つていただけに、マスターの方に共感が出来た。

「いや、酷いのは俺の方だったよ。それぞれに役割があると思つて、それに違う役割の人が踏み入つてはいけなさと決めつけていただけだ」

「役割ですか……」

「逃げられた後に思つたよ。俺は一体何の為に働いていたんだつて

な。家族の為のつもりだったが、結局は自分の為だけだった」

「……」

フオローを入りたい所だが、どう言えばいいのか解らない。どうか似てると言われてもどう似てるのかすら解らない。

「あの……私に似てるのでしたら、写真とかはないのでしょうか……」  
マスターの心の傷を抉るかも知れないという不安もあつたが、知りたかつたバーゼだった。

「ああ。写真はまだあるよ」

暫くして別の部屋でゴソゴソと音を立てて押し入れの中を探す源三だった。次々と箱や小物が出てきながら源三は中を確認すると、目的の写真で無い物は外に出す度に横に寄せる。畳張りの和室の上に物が積み重なっていった。

バーゼは力の関係上、それを見てる事しか出来ない。

「マスター、手伝わなくて大丈夫でしょうか……」

「大丈夫だ」と源三は答える。バーゼとしては自分で言い出したのに手伝えないというのがどうももどかしい。自分が無力だというのが以前の栄光とは真逆の体験だった。

——これら一つ一つが、マスターの歴史の積み重ねなんだ……——  
そうバーゼが思っていると源三が今までより高い声色で声を出した。

「出てきた。これだ」

長らく手入れをしてなかったのだろう埃をかぶっていた小箱を出してきた。フーツと息を吹きかけて埃を飛ばす。そして箱を開けると布に包まれた写真立てを取り出すと布を解く。そしてバーゼにそれを見せた。

「わあ……」

感嘆の声を上げるバーゼだった。中の情報は彼女にとって非常に新鮮な物だったからだ。現在のデジタルの写真とは質感が違う。男性一人と同世代の女性が、そして女性に抱きかかえられていた女児が写っていた。場所は遊園地だろうか、背景に観覧車やジェットコース

ターが見える。

——フレズの言った通りに……言われた相手がどう思うのか考えて……

バーゼ自身、コミュニケーションをとる目的もあった。

「……よく、似てると思います」

嘘だ。イマイチ実感が湧かない。写真の中の女2人はバーゼ同様の金髪のロングヘアと白い肌をしていた。が、バーゼとしては顔つきは自分と似てるのかイマイチ判断がつかない。実際は確かに似ているのだが、意識してないバーゼにとってはよく解らない。

「そうか」

「むしろ、マスターの若い頃の方が私は興味を引きます」

素直な感想だった。写真の中の若い源三は現在の源三と、どこことなく面影はあるがこんなに老化していくというのはFAGにとって興味深い現象だった。

「新鮮か？……ここまで顔が変わるってというのは」

若干砕けた様に言う源三。

「そりゃ、私は生まれた時からバニーガールでしたからね」

バーゼなりのジョークだった。源三もその意図が解った様だ。フツと笑う。

「フツ……」

「どういう人だったんですか？マスターのご家族」

似てるとは言われたが人となりは聞いてない。バーゼは気になった。

「妻はそうだな。我慢強い人だったな。娘は……どういう子だったんだろうな……」

「え？」

「まあ、そう言う事だ……全てを仕事の方に優先してしまつて、その所為で家族の事すら知らなかった。それに気づいたのは、離婚した時だったよ」

「……」

後悔、そんな感情が言葉の中に感じられた。想像以上に重い話に

なつてしまった。どうか話題を変えようかと

「あの……この遊園地の場所、どこなんでしょうか。今度一緒に行きませんか？」

「いや、そこはもうやってないよ。閉園した」

「え……」

「昔の話……」

なんとというか、全てが裏目に出る。言うべきじゃなかったとバーゼは首を垂れた。

「あの……マスター、私は……」

——私は……この家族の代わりなんだろうか……

そう問いかけたい。だがバーゼにもそう言うのは失礼だと理解はしていた。

「……なんでもありません」

言える筈も無くバーゼは口を紡ぐ。

「言いたい事は分かる。……お前を……妻や娘の様に思ってるな。俺は……」

「……そう……ですか」

考えてみればそうだ。最初に自分を選んだ理由が妻と娘に似ていたのだから、そう思うのは自然でもあった。

「……私も、どうしても過去の戦いの栄光に想いを馳せてしまいます。

似た者同士なのかもしれませんね」

「そう言う、お前の過去も知りたいな」

「いいですよ。私を買われたのはですね……」

少しはお互いの距離感も近づけたかもしれない。お互いがそんな風に思えた夜だった……。だがそれはお互いが過去に拘ってるともいえた間柄だった。

ep23 『タケルと量産型フレズヴェルク&源三と量産型バーゼラルド』（後編）

「よかった。じゃあ退院しても山には戻らないでいいわけか」

退院が近い健の病室にて、携帯ゲームで対戦をしていた黄一が、対戦相手の健に聞いた。丸椅子で座る黄一に対して健はベッドで上半身を起こしながらゲームを操作していた。

「はい。最近は調子も良くて、この状態が続いてくれて良かったですよ。また黄一さん達と一緒に遊べるなんて嬉しいです」

言ってる事は温厚な子供だったが、ゲームのボタン捌きは容赦がない。今お見舞いに来てるのは黄一とヒカル、そして大輔、その相棒であるFAG達だ。ヒカルと大輔はアーキテクトがお茶を淹れたいからと、その付き添いで今病室を離れていた。

「ちよつと2人とも、早く退院したいんだったらゲームを病室でするのは感心しないわね」

2人の反対側でリングの皮をむいて切っていたステイレットがぼやいた。当然ながら個室とはいえ病室ではゲームは禁止とは言わずとも控えて欲しい所だ。

「ごめんねステイレット。でも定期的にゲームで鍛えておかないと腕が鈍っちゃうからさ」

「その謙虚さには必要ない位君は強いって……あ」

黄一が言い終わらない内に、対戦は健の方が勝利を収めた。病弱と言う本人とは裏腹にゲームでは暴君と言った所だ。「やられた……」とぼやく黄一。そうこうしてる内にヒカルと大輔が戻ってきた。

「黄一、対戦どうだった？」

「おーヒカル、惨敗だよ。本当に小学生とは思えない強さだわ」

「これ位しか取り得ありませんので」

自虐ではあるがあっけらかんとした風に言う健。ヒカルに続いて大輔とアーキテクトが病室に入ってくる。

「健君……ハーブティ淹れてきた。お医者様に見せた上で許可は貰っ



だから飲んで……」

大輔の持つトレイの上に乗ったポットと複数のティーカップ、植物が好きなアーキテクトにとっては最高のおもてなしだった。本当は鉢植えの花を持って来たかったアーキテクトだが、縁起が悪いと言われていたので断念したところだったりする。

「まさか入院中に自家製のハーブティーが飲めるとは思わなかったよ。有難うアーキテクト」

「山の診療所生活では野菜とか漬物ばかりもらってたよねマスタ。周りお年寄りばかりだったし」

大輔の肩の上に座ったアーキテクトはお礼を言われて満更でもなさそうだった。しかし相変わらず表情は変わらず、大輔以外に表情は解らないだろう。

「皆の分も淹れて来たから飲んで欲しい……」

「といっても男だらけのお茶会ってのも変な感じだな」

「どーせ人形よ私達は」

「悪い。ステイレット」

失言だったな。そうヒカルは思いながらステイレットに謝る。

「なんてね。冗談よ。リング切ったからこれも皆で食べて」

ステイレットは舌を出しながらウインクする、そして皿に盛りつけたリングを健たちによこした。切る作業はフレズヴェルクも手伝ってはいたが、ステイレットの手捌きにただ感心しながら見ていた位しか出来なかった。

「ステイレットってこういう時本当にうまいよね。ボクもこういうの出来ればなあ……」

「やってみる？ 健君喜ぶわよ」

と、そんなやり取りをしていると、

「邪魔をする。フレズヴェルクはいるか？」

病室に入ってくるFAGが一人。バーゼラルドだ。フレズ以外のFAGにとっては初対面となる。

「あれがフレズの言っていたバーゼラルドですか」

「あれバーゼ？どうしたんだよ」

意外に思ったフレズだった。マスターがこの病院に通つてるとはいえ、どうもお見舞いに来る印象が無い。

「……私の服を作りたいんだ」

「つまり、マスターの奥さんが着ていた服を再現して、それを着た貴方がマスターに見せたいって事ね」

「そう言う事だ。理解が早くて助かる」

ステイレットにそう答えたバーゼラルドは、持っていた一枚の額縁を皆に見せた。中に納まっていたのは写真だ。立ち姿の正装の男性と椅子に座ったバーゼに似た正装姿の女性。

「あなたのマスターの若い頃ですか」

「人間が年を取って姿が変わるって言うのは知ってるけど、随分変わるもんだなあ。髪の毛は変わってないけど」

普段老人だらけの集落で生活してるフレズも、年長者の若い頃の姿は写真でも見慣れてない。見たとすれば精々健の祖父の若い頃の写真位だった。

「隣は奥さんですか？」

バーゼに似てる。写真を見る轟雷達もそんな印象を抱いていた。

「ああ、私に似てるらしい。お見合いで知り合って、その後に婚約したらしい。今は離婚しているが……」

「離婚で……大丈夫なんですかそれ？」

轟雷の指摘に「ん？」と首を傾げるバーゼ。どうやら意味を理解してないらしい。

「いやだって、奥さん別れた人なんでしょ？マスターにその格好をして欲しいとか言われたんですか？」

「いや？私の独断だが」

バーゼの反応に彼女の世間知らずっぷりを痛感したFAG達だった。

「あのですね……。そんな離婚した相手の格好をして現れるって、普通シヨック受けるリスクの方がどう考えても高いでしょ」

「そうなのか？」

「お前、なんでそんな事しようとしたのさ」

轟雷に続いてフレズが会話に割って入る。少なくともフレズが一番バーゼと付き合いが長い。

「それは……私にしか出来ないと思ったからだ」

「そりや奥さんに似てるとは思うけど……」

「マスターは過去に家族を失う経験をした。私を家族と重ねていると言ってくれた。私と言う存在を以て過去の苦い思い出を払拭できるかもしれない。私としてもそれが存在意義になるなら喜んで受け入れよう」

確かにバーゼとしてはそれが買われた理由である以上。それも一つのやり方かもしれない。そんな風に思えるが、やはり納得できるものではない。

「それで……最終的にどうするのさ」

最初に言葉にしたのは健だった。

「む？そうだな……私がマスターの新しい妻と娘となる」

『は!?!』

その場にいた全員が固まった。打って変わって頓珍漢な発言となる。

「それが私のマスターにしてあげる新しい使命だ。その為にもいずれは妻や子供らしい立ち振る舞いというのを覚えなければいけないと私は思ってる」

「……それ、間違っていないか？」

フレズがまず口を開く。全員が思っていた事だが、彼女が一番にそれを指摘した。

「なんだと」

水を刺されたと言わんばかりに面白くなさそうな反応をバーゼは示す。

「マスターとお前の一緒にいるきっかけが、お前の家族だとしても、別にお前が家族の代わりになる必要なんてないよ」

「お前がそれを否定するのか？確かフレズヴェルクの開発チームは

言っていたな『FAGは無限の可能性がある。何にでもなれる。何でもできる』と」

「言ったね……。同時に人間の真似事なんかするなどもね。人間だろうとFAGだろうと、自分は自分にしかなれないんだよ。……誰かの真似をしたって、それがどんなに似ていようがそれは偽物。心が……魂が違うんだから本物にはなれないよ。必ず無理が出る」

フレズの言葉にその場にいた全員が驚きを見せていた。この間同様あまり彼女らしくない理知的な一面だったから。

「心……。興味が無いな。あるかどうかも解らない不確かな物。口で言うのはたやすい。私には戦いの歴史しかないんだ。マスターにそれを見せたとしても、戦ってるだけの私など面白い物でもないだろう。それ以外の物を知らない以上、他から模倣するしかないんだよ」

「……可哀想。1人ぼっちで戦いしか知らないなんて……」  
アーキテクトの口からポロツとこぼれる。が、バーゼはムツとした顔で返す。

「……聞き捨てならないな。私にはそれが歴史であって栄光だった。それを同情で否定されるのは不愉快だ」

「あ……すいません」  
アーキテクトが謝罪する。機械的ではある為、バーゼが尚更不快にならないか不安だったが、どうも謝罪の態度は気にしなかったらしい。

「……戦いの歴史はあるんだな？」

そこで健が初めて口を開いた。

「健君？」

「戦いがお前の得意な事だったら、見せてあげればいいんじゃないか。それだつてまさしくお前の一部なんだから」

マスターが自分の味方をしてくれた。そう思ったフレズはバーゼに向き直る。

「バーゼ……今週末、この間みたいなサバイバルのバトルの大会がある。そこでボクとのリベンジをしろ。お前のマスターを呼んで立会人になつてもらおう」

フレズは神妙な顔で悩むバーゼに指を示しながら言い放った。

「……マスターを立会人に？それは……」

「バトルはお前にとっては何て位にのめりこんでいたじゃないか」

初めてバーゼに会った時を思い出す。フレズに挑発をしつつも圧倒された時の事を、絶対の自信を以てバトルに望んでいた事、それは紛れもなくバーゼの一部とだっていい物だった。

「それを見せた上でマスターがどういった反応を見せるかは解らない。でもそれを知ってもらえた上でどう振る舞うかを決めても遅くないと思うよ」

「……マスターに話してみる……」

そして病院の休憩所にてバーゼはマスターである源三に話を付ける。

「あの、というわけなんです。マスターでよろしければ見て頂きたいな。と……」

初めてする提案に源三は興味深そうに聞いていた。ソファに座った源三は、日差しの逆光で皺に覆われた顔からはあまり表情が読み取れない。

「そういうえば、お前達はバトルする事も作られた理由だったんだっけか」

「ええ。バトルの方は安全性はしっかりしてるので危険はないです。だから……」

バーゼとしては不安だった。駄目だと言われるかもしれないから「……娘の運動会は碌に応援をしてあげられなかったな」

「え？」

「そして何が好きかも得意かも解らないまま、離婚して会わなくなっちゃった。……お前は娘ではなくとも……それこそ応援位しか出来ないが、見せて欲しいな。お前のその戦いぶりを」

頭を動かした事により源三の表情がようやく解った。少しではあるが笑っている。さっき言った通り、参観日に出られなかった事によ

る反省点を活かす事が出来るからだろうか。

「マスター……任せて下さい！私の栄光は戦いの栄光ですから！」

その発言に健達は胸を撫で下ろす。もし危険な事は駄目だと反対されたらどうしようと思っていたからだ。

「話はまとまったな。バーゼ、今度は負けないから」

「フレズ……、いいだろう。格の違いという物をお前に見せてやる」

——  
そしてその週の日曜日はすぐにやってきた。

「今の玩具屋も昔とあまり変わらないな」

「どうも当時の事は解りませんので私にはどうも……」

バーゼを引きつれて源三は店内を案内されていく。健とフレズが案内役だ。昭和と平成時代でしかこういった物に馴染みの無い源三には今の玩具店の内装は興味が沸くところだ

「いらっしやい。今日はよろしくお願いします」

出迎えたのは黄一とヒカル、大輔、そしてそれぞれのパートナーのFAG達だった。目上の方が相手なのだろうか、若干控えめに二人は話しかけてくる。

「ああ、こちらこそ。こういうったのは全然馴染みが無くてね。うまく操作出来るか不安ではあるね」

「大会での操作はいりませんよ。私が1人で片づけます。マスターはそれこそ参観日の感覚で見えて頂ければ問題ありません」

「そうですよ。こいつら普段から暴れっぱなしなんですから」

ヒカルがステイレットを示して言う。

「なーんか含みがある様な言い方ねえマスター？」

ステイレットが怪訝そうな表情で聞き返した。

「そう言ってくれると助かるよ。どうもこういうのはファミコン以来だからね。フフフ」

源三なりのジョークだった。が、ヒカル達の方の反応は……

——……なあ大輔……ファミコンて？——

——？いや僕も聞いた事は……——

——学習モード……データ取得完了。ファミコン……1980年

代前半に発売されたファミリーコンピュータの略称。初めて普及した家庭用ゲーム機で……――

「いや……いい。うん」

検索中のアーキテクトを源三が止める。皆と距離間を詰めようとした源三なりのジョークだった。しかし感じたのはジエネレーションギャップだけであった。なんだかギャグを説明された様で若干気まずくなる。

「あーそー！そういうえば大会手続きはしましたか?!FAGの操作はせずともその所はやっておかないと!」

それを若者達も察したのだろう。別の話題に黄一が切り替えた。

「あ、そうだね。どこへいけばいいのかな?何か身分証明とかは?」

「大丈夫です。大会参加の手続きと、セッションベースがあれば問題ないですよ」

セッションベース。事前にバーゼから持つように指示された六角形のベースだ。

「案内しますよ」とヒカル達に案内される源三だった。

かくしてバトル大会が始まる。

「これは……凄いな」

手続きを済ませて、会場で現れたバトルフィールドを間近で見た源三はその圧巻のフィールドに声を失う。眼の前に広がるのは月面の宇宙空間、これが今回の大会用のバトルフィールドだ。

「今の子が羨ましいな。こんなSFの様な遊びが簡単に出来るんだから」

「では映画感覚で私の戦い方をご覧くださいませ」

マスターに自身の戦いを見せようと、源三に目線を合わせていたバーゼラルドは戦場へと振り向いた。さも当たり前のように宇宙空間を浮かぶバーゼに源三は違和感を感じる。

「宇宙空間なのに平気で飛べるんだな」

「所詮はそういう設定のフィールドです。いざ!」

そう言いながらバーゼラルドは先手必勝とばかりに戦場に飛び込

んでいく。手ごころな相手を見るや否やバーゼラルドは早速相手に襲い掛かる。

「っ!?このおー!」

気づいたFAGは対応しようと手に持った重火器をバーゼに撃つが、バーゼは意に介さずに相手の懐へもぐりこんだ。そして手に持ったセグメントライフルですぐさま相手を撃ち抜く。

「まずはひとつ!見ててください!マスター!」

「頑張れバーゼ」

なおも暴れていくバーゼを見ながら、源三は静かにだが応援をする。

「どうですか?間近で見たFAGのバトルというのは」

それに大輔が話しかけてきた。肩にアーキテクトを乗せている。彼とアーキテクトはこの大会に出ていないのだ。

「凄い迫力だね。ただ、ちよつと女の子を撃つと言うのは見てみるとちよつと怖い、かな」

やや尻ごみをする様に言う源三。戦場にメカニカルなロボットが戦ってるわけではなく、女の子が飛んで撃ちあうと言うのは少々怖さもあつた。

「まあゲームではあるんですけど、やっぱり合わない人には合いませんよね……。僕も酔いやすいので、こういうのは」

「さてね。歯ごたえがないな。常に戦いに身を置いてない奴らはこんな物か?」

一方のバーゼ、周囲は破壊した武装の残骸等が煙を上げる。カジノで戦っていた方が手ごたえのあるバトルだったなどバーゼは思った。と、次の相手のFAGがこちらに向かってくるのが見えた。紫髪で片目隠れの姉妹、アント型の姉妹、毎度おなじみのレーフとライの二人だ。

今回の姉妹は龍装具という東洋龍を模した装備をつけていた。

「轟雷から聞いたわ!あなたが例のバーゼラルドね!」



「アーキテクト型か!？」

飛びながらのバーゼは見下ろす様に姉妹を見た。

「轟雷お姉ちゃん以上の大物だね! 疲れているであろう今がチャンスだよー!」

「そういう事! 覚悟してもらおうわよ!」

「フン。小物に限ってそういう手を使う」

「言つてなさい!!」

そう言つて龍装具、アギトを装備したレーフは大型ライフル『龍機砲』ドラゴンキャノンを上空のバーゼに向かって撃つ。難なく回避するバーゼだが、そこへ龍装具、リュウビを装備したライが大型クロー『双龍牙』ツインファンゲで切りかかる。月面ステージな為に、高高度への跳躍は容易い。

「にゃーお!」

猫の様な動作で、しかし素早くバーゼに襲い掛かるライ、ライフルで撃ち返すバーゼだが、ライは双龍牙のシールド部分で防御。

「何発も防げるものか!」

「甘いわ!」

そんな時、レーフが『双龍剣』ツインブレイドを投げる。大小のナイフをワイヤーで繋いだ武器だ。大型のナイフを重しとして投げつけ、ワイヤーの部分がバーゼにグルグルと巻き付いた。

「何!？」

「マスター! アレを!」

レーフの指示に、彼女のマスターがある物をフィールドに転送する。四本足の大型タンク、ムーバブルクローラーだ。

「逃がしはしないわ!」

レーフはそれに跨り全速力で走らせる。バーゼを地面に引きずりおろす算段だ。必死にブースターを噴射させて抵抗するバーゼ、

「おのれええっ!!」

「ヒステリーはみつともないよ! ウサギのお姉ちゃん!」

挑発する様にライが方天戟状の武器『長龍刀』ドラゴンクレイブで切りかかる。サブアームのクローで受け止めるバーゼラルド。そこへレーフの方も援護として龍機砲でバーゼを狙う。姉妹の連携に焦りを覚えるバーゼ。

「アツハハ！マスターは助けてはくれないよ！」

「貴方のマスターはFAGに全然馴染みの無いお爺さん！サポートでの形勢逆転は心配ないね！」

が、その発言がバーゼのプライドを傷つける。

「っ！私がそんな物に頼ると思ってるのか！」

怒りを見せたバーゼ、フリーズの時に撃ったホーミングビームを姉妹に放つ。任意の方向に放たれたビームはそれぞれレーフとライの二人に向かい、二人を撃ち抜いた。

「なっ!?おねえちゃん!!」

「そんな!!ああっ！」

撃墜扱いとなり光と共に消えていくライを見ながら、クローラーの爆発に巻き込まれるレーフ。そのまま月面に投げ出され倒れこんだ。

「お前のマスターを交えた浅知恵だったが、後一步だったな」

「つう……浅知恵とは随分ね。あなたにもマスターはいるでしょうに」

「そのマスターが見てるんだ。マスターの手助けなくとも十分に戦える！」

「あら、バトルジャンキーかと思いきや、私達と変わらないのね……」

同情する様な目付きのレーフがバーゼには不快だった。そのままバーゼはレーフにトドメを刺そうとするも、その前にレーフは光と共に消えた。

「……これしかないんだよ！私には！」

カジノで戦っていた時と感触の違いがバーゼの心に引っ掛かった。口直しとばかりに次の相手を探しに飛び立った。

バーゼのバツの悪そうな顔は源三も確認できた。自分のFAGとして大会登録した為、自分のスマホからコンディション確認用のモニターやパラメータが確認できる。……最もこういった細かい操作は大輔がやっていて、源三は見ているだけだった。

「バーゼの奴……。ちよつと機嫌が悪そうだな」

「こういったバトルには慣れてないでしょうから」

「……でもあんなに、のめり込みながら、生き活きとしたバーゼを見るのは初めてだ……」

バーゼは高揚した笑みを浮かべながら、次々と敵機と交戦しては相手を撃ち落としていく。いつものかしまったバーゼとは違う。檻から解き放たれた獣の様に、戦いの世界を肌で満喫しているかの様に源三は感じた。

「カジノでバトル漬けだったらいいですからね。彼女にとっては生き甲斐だったんでしょうね」

「生き甲斐か……なんだか仕事に打ち込んでいた俺の様だ」

ついそんな言葉がポロツとこぼれた。家族の為という理由はあれど、なんだかんだ言って仕事が自分の居場所だったと源三は思う。

「アイツと俺……似てる所があるんだな……」

暫くしてサバイバル大会も決着が付きつつあった。最初はそこかしこでバトルが勃発していたフィールドも、勝ち続けたFAG達の決闘場へと変貌していく。

「だいぶ減って来たな。さてフレズは？」

そう言いながらバーゼはフレズを探す。自分を誘っておきながら大会ではまだ会ってない。もうやられてしまったのか？と周囲を見回す。ふと、近くで戦ってるFAGが見えた。

「！轟雷か」

黄一の連れていた轟雷がリナシメントアーマーを付けて戦っているのが見えた。が、どうにも押されている様に見える。

「相手は……知らない顔だな」

膨らんだ肩と白いボディ、そしてツインテールが特徴の白虎型だ。口元を覆う装甲は若干の異形さを持たせていた。

「このっ……このおっ！」

デモリッションナイフを振り回すも、白虎は軽やかな動きでかわし続ける。

「気に入らない態度ですね！さつきから無視って！」

「……」

轟雷が叫ぶ。白虎の方は眼中にないとばかりに黙っていた。大方この態度の所為でこじらせたのだろうとバーゼは思う。

「何とか言いなさいってば!!」

「……ウゼエな」

初めて白虎が口を開く。ダウンナーな不良と言った口調だった。背部の黒い刀、『黒碩剣』を持つと轟雷に斬りかかる。ダウンナーな態度とは裏腹に力強く素早い動作だった。

「ぐうっ!!」

大剣の所為で、武器の取り回しは轟雷の方が不利だ。何度か斬り合って距離を取ったと思うと、白虎は黒碩剣を投擲、デモリツションナイフを握っていたサブアームの付け根に命中し腕ごと切り落とす。

「あっ!!」

そのまま追い打ちをかけるべく白虎はレーザーライフルを撃ちながら突っ込んでくる。

——白虎型なら空は飛べないはず!——

そう思った轟雷はバスタードチョッパーを白虎の目の前にブン投げる。前に迅雷戦でやった戦法だ。火薬式のダインスレイブを地面に打ち込み隆起させ。上空に吹き飛ばされた瞬間に狙う。狙い通りに白虎の目の前にチョッパーは突き刺さり点火、月の大地を隆起させ白虎を吹き飛ばした。重力の関係か、幾つもの岩盤が大きく舞う。

「あん?」

「今ですー!」

手に持ったバズーカを白虎に狙い撃ちをしようとするも、白虎は表情を変えなかった。そして直後、バーニアで轟雷の射線から移動、吹き飛ばされた月の岩盤を飛び移りながら轟雷の真上に移動。白虎の背部に備え付けられていたレーザーキャノンが、真上から轟雷を撃ち抜いた。

「えっ!?!」

白虎は全身のバーニアで制御し、轟雷を狙っていたのだ。

「喧嘩すんなら相手を選びな」

「そんな!私がつ!?!」

『轟雷っっ!!』

黄一の叫びが虚しく響く。自分の敗北に驚愕しながら轟雷は光を放ち消えていった。

「轟雷が!?あの白虎型……楽しめそうだな!」

友人への吊いの意味も込めて、興味を持ったバーゼは白虎に対してライフルで奇襲をかける。黒碩剣を回収していた白虎もそれに気付いたようだ。

「あ?」

「お前!私と戦ってもらおうか!」

上空からのバーゼの連続射撃を難なく回避する白虎。この機種は派手さは無い物の、滑らかな運動性能と高火力が特徴であり、堅実な作りとも言えるFAGだった。さっきの岩盤を飛び移る動作からもそれは窺い知れるものだった。

「またウゼエのが来たよ……」

心底付き合ってもらえないと言った反応の白虎だった。

「そう言うな。本命は別にいるが、その前の準備運動というわけだ」

「オレがかませってか?あいにくこっちにもぶつとばしてえ女がいるから出てるんだよ。テメエなんぞに構ってられるか」

「お前にも本命が?……ん?」

と、高速でこっちに向かってきているFAGが二体。健のフレズヴェルクと、キマリスアーマーを付けたヒカルのステイレットだ。

「バーゼ!待たせたな!」

「遅かったなフレズ!ステイレットも一緒か!」

「この間のルフスのトリオと戦っていたんだよ!ボクとマスターのコンビの敵じゃなかったけどね!」

「それより轟雷がやられたんですって!?あの白虎型!」

身構えるステイレット。自分と互角の実力を持ったライバルがやられたと言うのは警戒すべき情報だった。

「ステイレット。悪いが仇討なら私にやらせてもらおうか、私が先に目をつけていたんでな」

そのまま白虎と戦おうとするバーゼ、しかし……

「ステイレットト……そのアーマー……テメエがステイレットだな……!!」

白虎はステイレットを見た途端に目の色を変えた。口元は見えずとも目つきから、並々ならぬ怒りを感じた。

「!?何よアンター!」

「オレと!!戦えええつつつ!!!」

黒碩剣で切りかかる白虎。突然の事ながらステイレットも慌ててドリルランスで対応。

「なんだつてのよおお!!アンタ誰よおつ!!」

『ステイレット?!』

ヒカルの叫び虚しくバトルは進む。この展開にバーゼとフレズはそれを茫然と見ていた。

「どういう事だ……?アイツは一体?何故ステイレットを?」

「バーゼ……でもボクとしては都合がいいや。……戦ってもらうよ。

ボクと……ね?マスター」

『勿論だよフレズ』

それに応じる健、元々今日のバトルの目的はバーゼとフレズのリベンジも含まれていた。

「マスター……見ててください。……勝負!!」

バーゼは源三に見せつけようと気合いを一層入れる。そして二人はぶつかり合う。

「接近戦用の装備も持たないくせに!」

そう言つてフレズはランチャーの銃身を振り回してバーゼを切り裂こうとする。が、大振りなのでバーゼにとってはかわすのは容易い。

「必要ないな!」

そう言つてライフルを連射するバーゼ。フレズは後方に下がりつつもランチャーを撃ち続ける。

「くうっ!」

「フン!防戦一方じゃないか!何を大口を!」

と、バーゼの方もライフルが弾切れになったらしい。ライフル攻撃

が途切れる。セグメントライフルは弾切れを起こし易い。こうした時はライフルを両肩部のスラストアーマーに接続して再充電する必要がある。予備のライフルを手に持つバーゼ。が、同時に攻めていた時にこれは非常に大きな隙だ。

「今だ！」

「馬鹿め！」

フレズがランチャーを撃とうとする瞬間。チャージしていたサブアームのビーム砲をフレズに向かって撃つ。再装填時に隙が生まれるのはバーゼ自身承知の上だった。

「っ！」

直後にそのエネルギーの濁流はフレズを飲み込む。そして爆発を起こし爆風を巻き上げる。

「あつけないな。……いや」

直後、TCSを張った物体が爆風を突き破ってこちらへ突っ込んできた。凄まじいスピードだ。フレズとバーゼは判断

「そうでなくてはな！」

バーゼはあえて受け止めようとABS Aを展開、が、ぶつかる寸前にTCSは解除、と、同時にエアバイク形態になっていたフレズは座席から飛び上がった。その両手にはランチャーがそれぞれ握られていた。

「受け止めるなんて油断が過ぎるんじゃない!？」

上空からフレズがバーゼ目掛けてランチャーで狙いをつける。かわそうとしたが突っ込んできたエアバイクを受け止めた為、大きい身動きが取れない。

「っ！調子に！」

バーゼはとっさにスラストアーマーをフレズの方へ向け、接続していたライフルを発射、フレズもとっさに身をひるがえして回避、と同時にランチャーを発射、狙いのずれた弾丸は片方のスラストアーマーを破壊するも本体に命中はせず、

「クソッ！」

「しまった！スラストアーマーが!？」

悔しがるフレズだが、バーゼも慌てる。何故ならブースター内臓のスラストアーマーを破壊したのだ。切り裂かれたスラストアーマーを切り離そうとしていたバーゼを巻き込みアーマーは爆発。バーゼの態勢を崩しABS Aへの集中が途切れ出力が弱まる。そこをエアバイクが強引に突っ込む事により突破、バーゼは大きく弾かれて月面にバウンドした。

「グアアツ!!……クツ!受け止める事さえしなければ!」

致命傷へは至らなかつたものの、バーゼは自分の行動を後悔する。

「本当は追いかけるつもりだったけど手間が省けたよ。マスターの作戦のおかげだね」

「っ!またマスターか……!」

イラついた様にバーゼが呟く。フレズがエアバイクと合体し元の武装形態へと戻っていった。

「所詮他人に頼った力だろう!」

「その何が悪いつて言うのさ。ボク達FAGはマスターとの協調あつてこそだろう」

「……私は私だけの力で勝って見せる!ずっとそうしてきたんだ!」

「ならさ!マスター!」

フレズの呼びかけに健はガンブレードランスを転送させる。

「見せてみるよ!一人の力!」

そうして二人は再びぶつかり合っていく。

「そんな大振りな武器で!」

バーゼはそれにライフルを連射しながら対応するが、

『フレズ!下がって!』

フレズは健の指示に従ってうまくかわし、

「この!」

『サブアームのビーム砲が来る!撃って!』

ビーム砲の最大出力にはライフルモードの最大出力で対応される。こうした流れで徐々にバーゼは押されつつあった。そして暫く経つて……。



「うあつー！」

バーゼはその場に倒れこむ。ビーム砲のサブアームは破損し、もう片方のスラストアーマーも破損、ボディの各部に損傷も見られた。

「悪いけどボク達の方が上だったみたいだな！」

「まだ！まだだ！」

なお諦めないとはかりにバーゼは起き上がる。バーゼより損傷の少ないフレズは再び身構える。

「私は今までマスターに頼らずに戦ってきた！ぬるま湯に浸かっている様なお前たちに！私の誇りを理解出来る物か！」

今まで一人で勝ち続けていたバーゼにとって、精神的にも押されていた。故に出た言葉だがぬるま湯という言葉にフレズはカチンと来る。

「そういう風に見ていたわけ？違法行為を誇りっていうお前が言うか！」

売り言葉に買い言葉、フレズの言葉もバーゼのプライドを傷つける。

「っ！貴様あつ!!」

『……そう言わないでやってくれないか』

その時だった。ある人物の声が響いた。源三の声だ。ビクツとその場の二人が止まる。

「マスター……？」

『バーゼはな、そうせざるを得ない環境で生きてきたんだよ。戦って勝ち続けて見世物にされて、でもそれが彼女にとって、唯一許された居場所だったんだ』

バーゼとフレズは茫然とその言葉を聞いていた。激昂するバーゼを落ち着かせる。

「でもバーゼのは違法行為だったじゃないか！」

『直接人を傷つける事はしてこなかったとは言っていたんで許してくれないか。それにお客さんは喜んでくれたって話だ。バーゼにとってはかけがえのない歴史だ。それをどうか否定しないでほしい』

「マスター……」

『バーゼ、お前は戦いが誇りだつて言つてたな。……俺もそうだよ。家族の為ではあつたけど、仕事は俺の誇りだつた……。居場所だつた。でも結果家族には逃げられたけど……』

「……」

『なあバーゼ、お前は変わろうとしていたな。俺の妻子になりきろうと……』

「……気づいていたんですか」

『家族の代わりのつもりでお前を迎え入れたけど、やっぱりお前はお前のままがいい。やつてきた事が違法だつたとしても、俺は認める。お前は今までしてきた事は間違つてはいない。変わる必要もない。お前の生きてきた歴史は、きつと間違つていないんだ。……ただ少し、冷静になつてみてくれ、周りにも目と耳を傾けてくれ、そうするだけできつと、俺みたいに後悔はしなくなる筈だから……。俺から言えるのはこれ位だ』

二つの意味のある言葉だつた。このバトルで冷静さを欠いてはいけない事、そして周りを見渡せる視野を持たなければ、いずれ自分の様になつてしまうという事。……バーゼの頬を涙が伝う。

「……」

「泣いてる？バーゼ……」

「あ……れ……う……初めてだ……こんな気持ちになつたの……」

バーゼの胸に熱い物がこみ上げる。違法行為をしていた故に同情してくれた人は多くいながらも、認めてくれた人はいなかったから。

「いけ……ないな……今はバトル中なのに……こんな事は」

……だがすぐに拭うとバーゼはフレズに向き直りライフルを向ける。だが尚も涙は止まらない。視界が若干ぼやけながらもバーゼは戦う意思をやめなかった。

「……本当、いいマスターじゃないか」

「そうだな。会えたのが彼でよかったよ……さあ！やろうか！」

気を取り直す様に身構え突っ込んでくるバーゼ、飛び交いながらぶつかる二人。

「だああっ！」

ランスで横に薙ぎ払おうと振るうフレズ。バーゼは上空に飛び上がって下のフレズにライフルを発射。

「つとおっ！」

太もも部のイオンブースターで後ろに下がるフレズ、追い打ちが来ると身構えるフレズだが、

「ん？アイツ連射してこない?!」

『スラストアーマーが壊れて再充電が出来ないから、慎重になってるんだらう』

「泣き続けてるってのに動きは冷静ってわけ?!変な奴！」

バーゼはジグザクな高速起動で迫ってくる。これでは狙いがつけられない。

『でも動きはさつきよりキレが増してる！油断は出来ないぞ！』

「解ってるよ！」

ランスをライフルモードで撃つフレズ、バーゼはそれを軽やかに回避。フレズはそこをすかさずランスで貫こうとバーゼに突っ込む。

「これで！」

「っ！」

バーゼは全身のフォトンブースターを使い回避、そしてランスの刃の上に移動、そのままブースターを使って急降下、真下のランスを踏んづける。月面にランスの刃がめり込みフレズも無防備となってしまう。そのままバーゼはライフルをフレズに向けた。

『切り離すぞ！フレズ！』

健はランスの踏みつけられていたライフル部を切り離しアックスモードへ分離。フレズはすかさず上へ切り上げる。

「おりゃあっ!!」

「なっ！」

バーゼの頬をアックスが掠めた。そのまま後方へ下がるバーゼだがライフルを左右それぞれ発射しフレズの腰のマウントラックへ命中させ破壊、

「っ！ベリルショットランチャーが!!」

「こっちも必死なんでな！」

「このおっ！」

そしてぶつかり合いは続く。マスターも、自分の生きてきた環境もまるで違う二人だったが譲れない物があるのは変わらない。だがどんな物も終わりがあがる……。健は支持を出し続け、フレズは従い協力しバーゼに対応していく。そして数分後……

「強いね！でもめっちゃ楽しいよマスター！」

『そうだな……でも……早くケリを……うっ！』

弱々しい声で呟くと、突然健がうづくまる。

「マスター!?!」

身体の弱い健は長時間のバトルが難しい。ずっと見てきたフレズはそれにいち早く反応する。と、同時に自分が楽しむ事に夢中になってしまい健のコンディションに気を配れなかった事を激しく後悔。

『バカ！よそ見するな!!』

「え?」

「隙あり！」

「あっ！くっ！」

バーゼはフレズに向かって発砲、とっさにアックスで受けようとするも、一つの銃弾は防ぎきれず拳に受ける。その衝撃でアックスを取り落してしまう。

「っうっ！」

致命傷にはならないがバーゼはこのままサブアームのヒートクローを構えて突っ込んでくる。ライフルは今ので弾切れになっていた。

「あと一歩だったな！このままもらうぞ！」

バーゼとの距離は近い、アックスを拾おうにもダガーを受けようにもその前に貫かれる。

『フレズ！サイドワインダーだ！』

「！うん！」

フレズは健の言う通りにサイドワインダーに形態を変形。せり出した槍状の鋭利な機首部分が、突っ込んできたバーゼの腹部を貫通した。

「がつ！」

『今だフレズ！ブースター全開!!』

「そうかつ！了解!!」

そのままフレズは真っ直ぐにイオンブースターを点火。バーゼを串刺しにしたまま一直線に飛ぶ。

「このまま後方の岩山へぶつける!!」

「マ！マスターが……！マスターが見てるんだ……！こんな私を認めてくれたマスターが……！」

まだバーゼの闘志は消えてはいない。弱々しくも残ったサブアームのヒートクローを構える。抜き手の要領でフレズを突き刺そうと言うのだ。

「負けられ……ないんだ！」

そのままバーゼはフレズの胸目掛けて抜き手を放つ。このままじゃ逆転されるとフレズは焦る。

——ヤバイ！受ける物！受け止める方法！——

一瞬で思案するフレズ、白羽取りしようにも片手はまだ使えない。と、とつきにある事を思いついた。そして放たれるクロー、が、それはある物で挟み込まれてフレズの身体に届かなかった。それは……。「な……ふざけるな……なんで胸の谷間で受け止められる!!」

ドン引きする様な反応のバーゼ、クローはフレズが左右の手で思いつきり寄せた胸の谷間で受け止めていた。

「毎晩ボクがマスター（の体力つけさせる為のリハビリでマスターと運動をVR空間で）しごいてる事を思い出したんだよ……！ボクの胸でマスターの（たまたま投げたボール）を挟み込んだ夜の事をな！」  
なおドヤ顔で言ってるが、フレズの発言がセクハラ全開だった為に、

——あれ……？何か周りの目が痛い？——

周囲の健を見る目が白い目だらけになったのはこの際おいておくとして……健はまだ知らない事の多い小学生です。

「……熱い……やけどしちゃう……ってホントにあつちい!!!」

ヒートクローを挟んだ乳から黒い煙がブスブス上がる。熱さに思

わず手を放すフレズ。そのまま投げ出されたクローはフレズを貫く事は適わなかった。そしてそのままサイドワインダーは岩山に激突。バーゼはこれが完全に致命傷となった。

「があっ!!馬鹿な……そんなくならない方法で、マスターに頼り切った方法で……」

「ふーっ!ふーっ!そのくだらないのがいいんだろ!マスターとの思い出があったからボクは勝てた!ボクはマスターを信じていたから!!」

虫の息のバーゼに対し、涙目で必死に胸に息を吹きかけながらフレズは答えた。実際はバーゼが瀕死だった事、エネルギーの残り等で受け止める事が出来た程度だったが。

「本当に……こっちのバトルはぬるいな……」

そう言っつてバーゼは撃墜扱いとなり光と共に消える。

『やったなフレズ……大丈夫か?』

変形を解いたフレズに対して健が心配をする。が、心配なのはフレズの方だった。

「マスター、自分の心配をしてよ。もう棄権しよう。マスターが心配だよ」

『……ん?』

「どうしたのさ」

何か気付いたようだ。健は今スマホに接続した操作作用のディスプレイから残り人数と、フィールドのアナウンスのモニターを見ている。

『さっきの白虎。ステイレットに勝ったみたいだけど、棄権したみたいだ』

「え?」

……少し離れた場所で、少し時間を巻き戻して、

「そんな……」

「こんなもんかよ。轟雷共々大したことねえな」

月面でうづくまるステイレットに対して、白虎の方は余裕で立つて

いた。ボロボロになったステイレットを白虎がレーザーキャノンで吹き飛ばす。

「つきやあぁっ!!」

それが決め手となりステイレットは大敗する。光となって撃墜扱いとなった。

「ステイレット!大丈夫か?!」

ヒカルが慌ててステイレットの傷を確かめようと、フィールドから移動した彼女を両手ですくい上げた。ステイレットが驚きの声を上げる。

「きゃッ!マスターっつらもう、大丈夫よ。バトル中の損傷はこっちは反映されないって知ってるでしょ?」

「あぁそっか。悪い」

撃墜扱いとなったFAGはバトルフィールドから弾かれる。バトル中の損傷は反映されない為ステイレットは無傷だ。ただ敗北の屈辱は残るだろうが、

「馬鹿ね……でも有難う」

『……はっ!おいステイレット型、随分マスターに大事にされてるな!』

満更でもないステイレットに対して鼻で笑う白虎、水を刺す様な挑発にステイレットは不快感を露わにする。

「何よ!何か文句あるっていうの!」

『まるで恋人気取りかよ?!くだらねえ!』

「そ!そんなんじゃないわよ!」

顔を真っ赤にして否定するステイレット。それすらもフィールド内からの白虎にとっては不快の元だった。

『そうだよなあ。人間とFAGじゃ恋人にはなれねえよな!』

「っ!」

そう言われては、ステイレットにとって何も言えない。ASの何処かでは理解していた。でも目を背けていたかった現実ではあった。

「お前!それ以上やめろよ!そう言う事言ってる自分のマスターの品位も落とす事になるって解らねえのか!」

ヒカル自身もそう言われては黙ってはいられなかった。ステイレットに言いたい放題な事に加えて、……ヒカル自身、ステイレットの事が好きだから。

『……萎えたわ』

そう言うと、白虎は自分からバトルフィールドを出た。棄権という事だ。ステイレットとヒカルの隣に白いボディの少女が降り立つ。ステイレットにとっては見覚えのある顔だった。

「……アンタ、もしかして文化祭の時の……」

「お前じゃ何も出来ねえよ。自分の器つてもんを知るんだな。……あばよ！」

ステイレットとヒカルの両方を見ながらそう言うと、白虎は近くに待機してあったドローンへと移動。さつさとその場から飛んで立ち去って行った。

「マスターはいなかったのか。アイツは一体……」

「何なのよアイツ！」

とまあこんな事があって、白虎は大会を辞退。結果的に残ったフレズの優勝となった。

「マスター……申し訳ありません。大会でマスターに勝利を捧げる事は叶いませんでした……」

頭を下げながら申し訳なく謝るバーゼに源三は手を優しく横から置いた。

「バーゼ、傷は大丈夫か……」

源三としては心配だった。さつきのバトルであれだけボロボロになっっていたのだから。

「それは……大丈夫です。バトルでの傷はあくまで仮想空間での傷ですから」

「そうか……よく頑張ったな。それだけで俺は満足だよ」

「マスター……」

パチパチパチパチ!!!

その時だった。大きな拍手がまき起こる。見てみると色白のイノ



センチアを筆頭に、複数人のFAGがバーゼに向かい、全員が拍手を送っていた。カジノでバーゼと共にバトルに参加させられていたFAG達だった。

「お前達……」

「見てましたよ。さっきのバトル！凄かったです！」

「まさかアンタが泣くとはねー」

「っ！あ！あれはー！」

今になつて恥ずかしくなるバーゼ。バトル中に涙を止めようにも止まらなかつたわけだが、思い返してみると恥ずかしい。

「怒らないでよ。なんやかんやでマスターとの距離も縮まったみたいじゃない?!よかったじゃない」

「そうそう。なんか安心したよー。ずっとあのままじゃないかって皆心配してたんだからー」

「！……そうかもな、その……有難う……」

「バーゼ、変わったね」

礼を言いながら頭を下げるバーゼラルドに、かつて同僚だったFAG達はバーゼの変化を感じていた。そんなバーゼに源三が話しかける。

「なあバーゼ……俺はね、正直に言うとうちのしてきた生き方が間違いだと思っていた。これを無かつた事に出来るなら無かつた事にしたいと……」

「マスター……でもそれは……」

「でもその必要はなかつたよ。これも含めて俺の歴史。一部だった。そして……お前と言う新しい家族に出会えたんだからな」

自分の責任、後悔、それ一色だった自分の苦い経験が、バーゼという少女を救えたのなら、こんな歴史も何かしら意味があったかもしれない。離れていった家族に申し訳ない気持ちは当然あるがそんな風に思えた。

「マスター……これからもマスターの歴史、教えてください！私、これからも変わっていききたい！」

「ああ、バーゼ……俺もこれからも変わっていききたいからな……」

「何だか盛り上がってるみたいだね」

そう話してる内にフレズがやってくる。白虎の棄権があつた為にフレズが優勝となつたわけだ。

「フレズ……。マスターは大丈夫か？」

「今は休んでるよ。ヒカル達に送ってもらつた方がいいかな」

「ねえ、今でも奥さんや娘さんの代わりになりたいって思ってる？」

「そうだな……。ちよつと今は……。私のままで変われるなら、私のままで変わりたい」

「変わるなんて当然だろ？ボク達には無限の可能性があるんだ。何にだってなれるし、なんだって出来る」

「だといいな……。だったらお前は何になりたい？」

「え？」

興味があるな。と言うバーゼの問いにフレズは赤面する。ごまかそうかと思つたが……。健もいなかったし何より正直に言いたかつた。だからこう言つた。

「……。決まつてんだろ？……。ボクが……。ボクがなりたいのは……。マスターのおヨメさんっ!!」

人間同様、それぞれの道を模索しながらFAG達は道を歩んでいく。だが誰もこの時は知らなかつた。少女達にとって、そして何よりヒカルとステイレットの二人にとって、試練の幕開けの日だという事を。

ep24 『人間とフレームアームズ・ガール』（前編）

その日、黄一は南の島にいた。空高く輝く太陽。白い砂浜、輝く水平線、人の手が入ってない自然が少年の眼の前に広がる。そして水着の少女達が泳ごうと、この自然を満喫しようとして砂浜をその足で踏みしめた。

「イイヤットホオオツツ!! マスター! 2月と言えば海水浴ですね!!」

競泳水着を着た小学生の様な体型の少女。轟雷がテンション高に叫ぶ。武装はつけておらず、素体姿である。

「お前初めての海だからって興奮しすぎだよ」

轟雷の隣、パーカーと海パン姿の黄一は轟雷を鎮めようとする。

「それにしても……お前の体型」

黄一はイメージ通りと言わんばかりに微笑みながら言った。水着になって露わになった轟雷のプロポーションは小学生その物だった。まな板でイカ腹である。

「な! なんですか! 私のプロポーションに何の文句が!」

微笑ましいといった黄一の反応だが馬鹿にしてる様に轟雷は感じた。

「轟雷と黄一さんを確認……」

「あ……」

続けて黒いビキニを着たアーキテクトが止めた。出るところは出て引つ込むべき所は引つ込んでる体型だ。轟雷の反応はアーキテクトのプロポーションに関してである。圧倒的差に轟雷は閉口するしかない。

「ようアーキテクト。大輔は?」

「まだ準備中との事……」

「……アーキテクト。声が控えめな割には体は主張が激しいですね」

まな板兼イカ腹の轟雷は、グラマー体型のアーキテクトを羨ましそうに見ながら言う。

「つ……。個体差の問題。なりたくてなったわけじゃない」

俯き、胸を押さえながらアーキテクトは言う。相変わらず表情に変

化は見られないが恥ずかしいのだろうか。若干顔が赤い。

「個体差……そうですねー」

そういつて轟雷は別方向に目をやる。自分と同じ水着姿の轟雷のバリエーションがビーチバレーで和気あいあいと遊んでるのが見えた。

「いきまーす！てやーっ！」

おっとりした声で轟雷の支援用バリエーションの榴雷・改がボールを上げる。(水着はフリル付きのビキニ) ぽっちやり系体型でふくやかな胸がぽよんと揺れる。

「ふぎゃー！」

投げた拍子にこけた榴雷・改はその場に前のめりで倒れた。

「遅いなー！」

対する轟雷の重武装バリエーションのウェアウルフ・スペクターは鋭い声でボールを撃ち返す。(水着はバンドウービキニ) 引き締まった褐色肌は健康的な色気を出していた。巨乳ではなくともスタイルはいいと間違いなく言えるだろう。

「なんのおー！」

打ってきたスパイクを、轟雷の近接戦闘用バリエーションである漸雷がスライディンググレシーブの動作でボールを受け止めた。(ホットパンツとビキニの組み合わせを着ている) 地面に押し付けた巨乳がむにゅつと潰れる。

「……試作型の轟雷はナイスボディだったと聞きます。なんで私だけ……」

自分と起源になったFAGは同じなのに……そう轟雷は思いながら平坦な自分の胸を恨めしそうに触った。

——素体じゃ全然区別つかないけどなあ——と黄一。

「……学習モード……データ取得完了。『貧乳はステータスだ。希少価値だ』」

「それ、冗談なら最低ですけど。皮肉ならもっと最低ですよ」

「そんなつもりじゃ……」

「うう、マスター！私の大人素体ボディを買って下さいい！」

「もう予算ないから無理だ。改アーマーに使ったんだから」

「ぐぬぬ……」

「別に他人の目なんか気にするなよ。どうせ向こうだって意識してないんだから。それよりお前も初めての体験だろ今日のイベント。そつちを楽しむのに集中しろよ」

「……そうですね。……では！こうなったら海の家でヤケ食います！VRのイベントならば、味覚が私にも解るといふものですよおおっ!!」

そう言つて轟雷は近くに会つた海の家に走つて行つた。

「そつちかよ。まだ泳いでないのに……」

「でもこのイベントの出来事は私達にとつても凄く貴重な体験が出来る。轟雷も多分このイベントでマスターと距離間が近づけるのが嬉しいんだと思う……」

「飲食もその内だからな。確かにあんなテンションは珍しい」

妹の様に思つてるFAGの、いつも以上の変人っぷりを発揮してる辺り、嬉しさと周りとの体型格差に、絶望とない交ぜになつた感情を轟雷は感じてるのだろうと黄一は思つていた。

そう、これはVRを使ったFAGの一大イベントだ。何故こうなつたかを説明するには、ある程度遡る必要がある。

2月某日、いつもの模型店にて、健と黄一と大輔と、そしてヒカルの男4人はFAG関連の売り場の前にいた。目的は当然白虎への再戦への新装備だ。

「恐ろしい相手だったね。あの白虎」

「そうだな。予備動作が偉い短いから大型の武器を使つてる轟雷達じゃどうしても不利になつてしまう」

「つて事は取り回しの良い武器が必要になるでしょうね」

黄一達がそんな風に話し合つてる中、ヒカルはその会話の中に入らず、ある事を考えていた。白虎の言葉を。

——人間とFAGじゃ恋人にはなれねえよな——

ステイレットがボロ負けして挑発されたというのは当然悔しい。

だが先述の言葉も、言われたのがたまらなく悔しい。

——なんで俺、白虎にああ言われて腹立っただらろうな……——  
ステイレットが好きと言う事には自覚はまだないヒカルだ。……  
高校生が人間とFAGの恋愛に関して否定的になってしまふのは普通ではある。そう言った心の奥底の望みにヒカルはまだ気づいてない。

「ヒカル……？おいヒカル？」

ヒカルがだんまりな事に他の3人も気になっていた。黄一の言葉にヒカルはハツとする。

「っ！あ、黄一か。なんだ？」

「大丈夫か？なんか妙にボーツとしてるぞ」

「悪い。ステイレットの奴がボロ負けしたのがどうしても忘れられない」  
「……」

「珍しいですね。ヒカルさんが上の空なんて」

「コイツ授業中はいつもこんなもんだぜ健君」

「あんまりでしょうがその言い方。で、どうなんだリベンジ用の装備は？」

「……あまり買うの気乗りしないな」

一方の黄一もどうも気分が乗らない素振りだ。当然ヒカルの方も気になる。

「？お前もどうしたんだよ」

「あのバトルの後にちよつと轟雷の奴がやらかしてさ……正直新装備とかは買いたくない」

「？よく解んないけど、でもここにいてるって事は買うんだろ？」

「……そうだな。ま、今回は特別だ」

——腹は立つけど……アイツの落ち込んでる姿は見ていたくないからさ——

黄一はそう言って積まれたある箱を手取る。

「やっぱそれ選ぶか。じゃあ俺も！」

そう言ってヒカルも黄一に続いてある箱を手取った。

さて主達が再戦の準備を進める中、一方のFAG達はと言うと、

「ああもう！思い出すだけで腹が立つわ!!」

毎度の事ながら、いつものFAG用のコミュニケーションスペースにおいて、いつもの様にだべっているわけだが、一つだけの違い、轟雷とステイレットは不機嫌さを隠そうとしない。原因は前回の白虎に大敗を喫した事だ。この模型店のトップの実力を持っていながらも、ぽつと出のFAGに圧倒された事は彼女達にとって屈辱だった。

「荒れてるね。ステイレットお姉ちゃん」

「この間の戦いを見たでしょう？自信をへし折られたんだから仕方がないわよ」

いつもの様にバーの様な内装のセット、そしてバーテンダーのコスプレをしたレーフがカウンター内で対応する。ごっこ遊びを兼ねた愚痴の吐き出しだ。カウンターの丸椅子で座って荒れてるのはステイレットとフレズヴェルクともう一人。轟雷である。

「レーフ。もう一杯頂戴」

「飲み過ぎよ。轟雷」

「いいでしょ？今日は酔いたい気分なの」

ヤケ酒ごっこやってる轟雷だった。カウンターに突っ伏しながらグラスを手にとって口に運ぶ。とはいえ飲食の出来ないFAGにとっては無駄な行為だが、

「そういうごっこ遊びしてる辺りまだ余裕だね轟雷」

フレズとしては何意味不明な事をしてると呆れ気味だった。

「フレズ、うっさいですよ。人間は嫌な事があるとヤケ酒や、ヤケ食いで気をまぎらわすと聞きましたので」

「お待ちせしたご主人様」

と、そこへトレイに乗せたグラスを持ってくるFAGが一人、それは……

「あっバーゼお前！」

「……何やってんですかバーゼラルド」

フレズと轟雷が反応する。スカートの丈の長いメイド服を着たバーゼラルドだった。

「私は私のままで変わりたいと誓った。が、どう変わればいいのかいまいち解らず、レーフに相談してみたら、『まずは形から入って模索しましょう!』と言われてこの服を渡されたのだ」

「バーゼ、私の見込んだ通りの女だったわ!この冷徹な眼差し、主人との恋愛は有り得なさそうな仕事と割り切った距離間!有事の際には武装でボディガード!まさにハウスキーパー、武装メイドとしては申し分ないわ!」

「むう……そうは言うがなレーフ、正直これは得体のしれない何かが湧き上がってくるぞ」

若干恥じらいを見せるバーゼ、こういった格好の経験は当然ながらバトル漬けだった彼女にはない。

「慣れよ慣れ。その内皆が羨む様になって、それが快感になるわ。着こなすつてのは才能よ」

「お姉ちゃん、前の大会でコテンパンにやられたのにもう仲良くなっちゃってさー」

バーゼへの態度は、レーフとライでそれぞれ違っていた。打ち解けているレーフと違いライの方は不満ありげだ。

「関係ないわねライ。バトルが終われば同じFAG同士、いがみ合う必要はないわ」

「そうはいうけどさー。アイツなんか苦手なんだよー。一緒にいるとなんか空気が張りつめるっていうか」

ライの方はバーゼラルドに苦手意識がある様だ。あまり距離を詰めるようとしらない。警戒する様な素振りのライにバーゼは少々申し訳なくなる。

「……ライにはあまり好かれてない様だな……」

「人見知りよあいつ。根が単純だから何かきっかけがあればすぐに懐いてくれるわ。全く、普段空気読めない割にこういうのは敏感なんだから」

「とはいってもバトルばかりやってきた私に、出来るコミュニケーションパターンは多くは無いな……」

「いつそライを弟子入りさせて鍛えてあげたら?地獄の特訓メニュー



でもすれば、少しはアイツも身が引き締まると思うから」

「っ！何言ってるのお姉ちゃん!!」

珍しくライが嫌そうな顔で言った。

「……特訓?!そうよ!そうだわ!」

と、レーフの発言に気付いたFAGがバーゼに食いつく。ステイレットだ。

「バーゼラルド!あんた強いんでしょ!今度のバトルであの白虎に勝ちたいから私達を鍛えてよ!」

ステイレットの提案に轟雷も同意する。

「あ!そうですねバーゼ!あなたの経歴を考えてみたらその手がありました!」

「それは別に構わんが……」

「良かったじゃないバーゼ、」

「でもさー。リベンジするって言っても、ボロ負けしたんでしょ?何か新しい装備とか必要じゃない?」とライが水を刺す。いつもは完全に余計な一言ではあるが、今回は理にかなった一言だった。

「装備?そうね……」

確かにリベンジとなると新しい装備は必要だ。例の白虎には何が有効か考える。

「確かに全然当たらなかったですからね。私の攻撃」

「轟雷もそう思った?予備動作が短すぎるのよアイツ。相対的に大物使ってる私達には相性が悪いというかね」

白虎の戦法はオーソドックスな正面切つての戦い方だ。ではあるが挙動が非常に早い。ステイレット達の武器は大型がメインな以上隙が生まれがちだった。

「となるとやはりお前達の装備を今より強化した方がいいだろう。理想はやはり……」

そう言つてバーゼラルドは店の外側のポスターを指差す。貼られていたのはFAG強化装備、『轟雷改』『ステイレットx f-3』『バーゼラルド強化型ゼルファイカール』等の宣伝だった。いずれも対応したFAGの強化アーマーだった。

「試作型轟雷が使用していたっていう轟雷改装備だな。ボクも知ってるよ。ボクの試作型と激闘を演じたって装備だ」

轟雷改。かつて試作型轟雷と源内あおの2人が使用していたと言われる轟雷用強化装備だ。

「じゃああれを即買えばいいわけだね轟雷お姉ちゃん」とライ。

「うーん。改装備ですか」

珍しく轟雷が乗り気ではない。

「どうしたのよ。貴方憧れの試作型轟雷も使っていた装備でしょ？大喜びで食いつくと思っただけだ」

「そりゃそうなんですけどね。……こないだの敗北のショックから、マスターのお金で衝動買いしちゃいました……」

「その所為でマスターから財布握られてると」

「最低だねお姉ちゃん」とその場にいた全員が呆れていた。

「我慢できなかったんですよー！そんな目で私を見ないでください！！」

「じゃああなただけ新装備なしで挑む？」

「だ！大丈夫です！かくなる上はこの状況をひっくり返す逆転方法があります！」

「あるのか？そんな方法が」

バーゼとしてはコミュニケーションの方法として興味があるらしい。隣にいたレーフからは「碌なもんじゃないから真似しちゃ駄目よ」と釘を刺されていたが、

「それは……」

「あ、皆が来たよ」とライが近づいてくる黄一達に気付く。

「轟雷、白虎との再戦なんだけどな……」

「行きます……。……お兄ちやま☆」

『っ!?!』

決死の表情から一転。凄い猫なで声で轟雷が黄一に走ってゆく。バーゼを除く全員の背筋が凍った。

「キヤツ☆」

その場で転倒する轟雷。余りにもこけ方がわざとらしい。

「あいたた。ごめんなさいお兄ちやま。轟雷ドジな妹でえ☆」

「轟雷……お前……」

「こんなドジな轟雷だけど、轟雷はお兄ちやまが大好きなFAGです。どうか轟雷を見捨てないで……!」

悲劇のヒロインめいた、片手をつけて下半身を寝そべらせたポーズで、轟雷は黄一を見上げる。目は潤んでおり保護欲を掻き立てる……と轟雷は思っていた。なお周りはドン引きである。バーゼと黄一は除く。

「……すまん轟雷……。俺は……。俺は……」

黄一は思いつめた様に体をわなわなと震わせる。

「いいのお兄ちやま。ただね、轟雷ね。ちよつと欲しい装備があつてえ……」

改装備の事を切り出そうとする轟雷。しかし黄一はスマホを取り出し電話を掛ける。

「もしもし!?ファクトリーアドバンス社ですか?!家の轟雷に異常がっ!助けてあげてください!!」

「っ!!お兄ちやまああっ!!……あれ?前にもこんな事あつた様な……」

とりあえず轟雷は意図を説明してこの状況を収まらせた。

「何故ですか……!何故私の色仕掛けが通じないんですかいつも……」

「そりや無理あんでしょアンタ……」とステイレット

「お兄ちやまじゃいけなかつたんですか?!やっぱ兄やでいくべきでした!」

「うんアンタもう黙ってて」

「……ほう。妹という立場を装えばマスターへの頼みごとがスムーズに行くのか」

バーゼとしては今まで見た事のないコミュニケーションだった為真に受けていた。

「お、バーゼ解りますか?バーゼも兄くんとか言つて源三さんに」

食いつきのいいバーゼにステイレットは呆れながら止めようとする。

「うん80歳差の兄妹って所を考えてみましょうか」

「フレズもします?あにいとかなって誘惑すれば健君喜びますよ?」

「っ。やだよ。絶対やだ」

嫌そうなしかめっ面でフレズは答える。いつもの快活さは一切感じられない。

——妹じゃ……結婚出来ないじゃないか。マスターのお嫁さんになれないじゃないか……——

「?珍しいですねフレズ。まあ、体格差はともかく健君とフレズじゃお姉ちゃんも弟とも見えますからね」

フレズの反応に違和感を感じる轟雷。フレズの恋愛感情は知っている轟雷だが、ここまで強いとは思っていなかった。認識の違いである。

「……」

一方で健はムスツとした表情を見せる。フレズが年上に見られるのがどうも不満らしい。これは誰にも悟られなかったが。

そして他のマスター達は……

「しっかし轟雷の奴面白演技するもんだ。なあ黄一」

「……ったく、また演技なら演技って言えよ……。心配かけさせやがって……」

黄一の方は完全に騙されていたらしい。しかも2回目だ。

「黄一……、君もしかして轟雷のあの演技に騙されたのかい?」

「っ!?!と!当然じゃないか大輔!あれ位見抜いてたよハハハ!電話も実はフリだよフリ!」

黄一のごまかし方に完全に騙されていたなど感づくマスター達、

「……完全に騙されてましたね黄一さん」

「あいつ捻くれてる割に純粹だからな……」

「まあ轟雷をそこまで大切に思ってたって事でしょ」

——黄一……お前まさかシスコン?——

昔からの付き合いのあるヒカルも、親友のそんな一面を目の当たり

にしていた。

「まあそんな事より！新型装備が欲しかったわけだお前は」

「はい……。ですがマスターを怒らせた為に買ってもらえないんじゃないかと心配になった結果でした……」

「そう言う事か……。これ買ってきたから使えよ」

そう言うって黄一は店内の轟雷へある箱を見せた。

「っ!?轟雷改10式装備!マスター……」

「多分欲しがらるだろうからなお前」

伝えずとも自分の欲しかった物をマスターは買ってくれた。自分の事を考えてくれていた事に轟雷はなんだか嬉しくなる。

「有難う！お兄ちゃん大好き!!」

「だからその呼び方やめろって……。まあいいか」

笑顔になってくれた轟雷に黄一も満更ではなかった。ヒカルも続いてステイレットに買って来たであろう箱を見せる。ステイレット用強化アーマー。x f—3だ。

「で、俺の方もこれ使って欲しい、ステイレットの強化装備」

「いいの?マスター……。この間高価なルシファーズウィング買ってもらったのに……」

「気にすんなよ。俺がエロ本に使うよりは建設的なお金の使い方だろ?」

「っ!と、当然ね!」

ステイレットの方も嬉しそうだった。ただややヒカルに対して壁を意識してる感じはある。

「……なんかステイレットの奴、ちよつとよそよそしくないか?そんなに白虎に負けたの悔しかったんだらうか」

そんなにショック受けるのもアイツにしちゃ珍しいな。と黄一は疑問に感じていた。黄一はステイレットがヒカルを好きな事は知ってる。しかし両思いである事と、それがお互い人間とFAGであるという事で悩む程本気になっている事はまだ知らなかった。

「……まあ、そうだな」

ヒカルの方も適当な事を言っってはぐらかすしか出来ない。

「?ま、いいや。とりあえず工作室借りて新装備を組立てようぜ」  
と、その時だった。

「諭吉黄一様!お電話頂き有難うございます!!」

突如女性声が響くとある人物が現れる。女性用のスーツを身に纏った人間の女性、……首から下は、だ。頭部はフレームアーキテクト。前にも会った異様なその人物は……

「うわっ!!ア・アーキテクトウーマンさん!」

アーキテクトウーマン。FAG達のメーカー。ファクトリーアドバンス社の宣伝及びお客様の相談担当の社員である。

「お電話って……黄一。やっぱり本当に電話したんじゃない」

「っ!わ!悪いかよ!」

「それではまずは轟雷さんの身体検査をさせていただきます!無料で!

そう言つて轟雷をむんずと掴む。これで目からサーチライトで透過してFAGを検査するわけだが、轟雷にとっては恐怖だった。

「え?!もしかして分解ですか!」

「いえいえ、私のアイガードから透過式のライトを当てて確認するだけです」

「ギャー!お兄ちゃま!」

「あ、それ位でしたら、まあ無料だし折角なんですから」

「っ!アニキの薄情者おっ!!」

「見られちゃった……色々……もうお嫁にいきません……」

悲劇のヒロインポーズ2回目で轟雷は透過された事を嘆いていた。

黄一は水をすくい上げる様に両掌を合わせてその上で、同じ目線の高さで轟雷を乗せていた。

「行けるもんなら行つてみるお前。有難うございます。どこも異常はないみたいで良かったですよ」

「いえいえ、大切に扱つてるといふのは解りますから。やはりこうして大事にしてくれるユーザーを見るのは嬉しいですよ」

「しかし随分と迅速な対応でしたね。電話したらすぐだ」

大輔が問いかける。以前の時は電話した翌日だったが、今回は連絡後すぐに来た。いくらなんでも早すぎる。

「ああ、それなんですけど、実は今日あるお知らせがありました、ちょうどこちらに向かっている時に本社から轟雷さんの検査をする様に言われたわけですね」

「お知らせ。ですか？」

「はいーこれですー!」

そう言つてアーキテクトウーマンはあるポスターを見せた。今時2月だと言うのに、南国でバカンスに興じるFAGのグラビアがでかでかと写っていた。大きな字で『第1回フレームアームズ・ガールマスターとFAGのサマーフェスティバル』と書いてある。

「これは……VR空間を使ったFAGとのお祭りですか」

小さく書いてある説明文を大輔が読みながらアーキテクトウーマンに問う。

「その通りです!是非皆さんに参加していただきたくてお知らせに参ったわけです!」

それが本来の目的か。と黄一はすぐに来た理由に納得。

「これ……自由参加のイベントではないんですか？」

「いえ、特定のユーザーとFAGに絞った物です」

「……何か引つかかるな……何故僕達みたいな特定のユーザーに見せるんですか？」

「同意……私達にも通達は来てない。こういうのは事前にインターネット経由で知らせるのが普通……」

どうも大輔とアーキテクトは懐疑的だ。

「あーそれはですね……こういうったVRのイベント自体まだ試作の域を出ていなくて、選ばれた一部のテストユーザーにのみ参加して改良を重ねていこうと言う試みなんです」

「そうだなあ……出てみるかステイレット」

早速ヒカルが食いついた。

「マスター?何言つてんのよ。私は白虎相手にバーゼの特訓を受けなきやいけないのよ、私は出ないからね」

「こんな時だからだろ？……負けて以来お前結構ふさぎ込んでいたからさ」

「別にそんな事……」

目を逸らしながらステイレットはどもる。確かに最近は白虎に言われた事で割と悩んでいた。

「それでしたら、イベント内でもバトルの大会はありますから、それに出ればいい腕試しになりますよ」とアーキテクトウーマンは付け加える。

「だったら決まりだな。俺参加しますよ。ステイレットも出来れば……」

「はあー……もういいわよ。出ればいいんでしょ？」

ぶつきらぼうにステイレットは答える。ヒカルとしては何かしら別の話題に興味を持って、今の燻ってる気持ちを薄めて欲しいと思っていた。ヒカルにつられて他のマスター達も興味をくすぐられた様だ。

「ヒカルが出るなら俺も出るかな」

「そうですねー。2月ですけど南の島でバカンスですよ海水浴ですよ」

黄一と轟雷も食いつき。

「マスター、ボク達も出ようよ。南の島で皆で遊べるよー」

「うーん……まあFAGとのイベントって余り縁がないからな、出てみるかフレズ」

「えへへー。初めてだねこういうの」

健とフレズもこういったイベントには興味がある。

「まあ怪しいけど、日程はすぐについてわけじゃないし……」

「折角友達が出るなら私達だけ出ないわけにはいかない……。後から情報収集でこのイベントの事を調べればいいだけ……」

最後に訝しげだが大輔とアーキテクトも参加の意思を見せた。

「では決まりですね！ポスターに書いてある通りに今週の日曜日に、指定した時間とサーバーにお集まりください！では！」

そう言っアーキテクトウーマンは恭しいお辞儀をしながらその



場を後にした。

そして当日、装備を製作し、バーゼからの特訓を受けながら轟雷達はその日を待った。そして当日、指定の時間になると、黄一は自室で机に向かいVRを起動。コードでVRに繋がれた轟雷もバーチャル空間にダイブする仕組みだ。

「じゃ、やってみますか」

「ふふん。私の水着で海の皆は悩殺させて見せますよ」

「妙に自信満々だなお前、空間内での体型も個体差があるんだろ？」

いつも見てる素体はどの機体も専用パーツでもつけてない限りは変わりはない。黄一は轟雷の体型を予想しても子供の様な体型しかイメージ出来ない。

「何言ってるんですか！私達の始祖たる試作型轟雷は、精神年齢に反してナイスバディだったと聞きます！その直系の後継機たる私なら同じ体型になるのは解りきったことです！」

「はいはい。とりあえず入ってみるぞー」

そしてVRを被って起動させる黄一。そして冒頭に繋がったわけである。轟雷の予想は外れやけ食いに走ったわけだ。

「大輔まだかな。てつきり皆もう来てるもんだと思ってたけど」

まだ自分達しかいないという事に残念がる黄一、その時だった。

「シュコー……やあ黄一。……シュコー……来てたんだ……」

「？うおっ！お前……大輔か？」

声のした方を向くと潜水服を着た人物がそこにいた。フレームアームズのグライフエンまんまのデザインの潜水服である。くぐもった声と頭部パーツから覗く顔で大輔と分かった。

「水泳があると聞いたんでね……シュコー……潜水服が衣装にあったから選んだよ……シュコー……」

「マスター……泳げないから……」

「……まあ自分で選んだっていうならなんも言えないけどさ……」

「よう黄一……わはは！なんだよ大輔その恰好！」

ヒカルの声がするや否や、大輔の潜水服に気づきヒカルは笑う。ラ

イトブルーのビキニを着たステイレットも一緒だ。

「笑わないでくれよヒカル……」

ステイレットの方は自分のサイズがヒカルと同スケールになる事に違和感を感じていた。

「実感沸かないわね。マスターや黄一さん達と同じスケールになるなんて……、轟雷は？」

「飲食が出来るってんで海の家の方に行ったよ」

周りを見回し探すステイレットに黄一は言う。理由を正直に言っても轟雷を傷つけるだけだろうと黄一は詳細を言わなかった。

「再戦控えてるってのに呑気ねアイツも」

「こういう時位そういう事は忘れるよ。……折角そんな可愛い恰好してんのに仏頂面は勿体ないでしょうが」

ヒカルは水着のステイレットを前に、シリアスを保ったままだった。ヒカルにとって今は彼女が立ち直ってくれるのが先決だった。白い肌、アーキテクト程ではないにしろ巨乳で引き締まった体型のステイレットだ。

「可愛い……。よしてよ……」

好きな人の感想に、照れつつも目を伏せるステイレット。そんな会話をしてる中、「あーいたいた！」と言う声。健とフレズがやってくる。

「もう来てたんですか皆さん」

「やつほー皆、こういう場所で会うのは初めてだねー」

シャツと海パン姿の健と、紫のビキニを着たフレズが来る。

「よおフレズ、健君も一緒か」

「へへん。僕の水着姿にマスターもメロメロだよ」

健に見せ付ける様にポーズをつけるフレズ。デフォルメした猫顔のマークや切込みが特徴のビキニだ。

「！そんな事ないよ！いつもあんな水着同然の格好してる癖に！」

得意げになってるフレズに対し、健は顔を赤くして反論。色白な分余計に真っ赤に見える。とはいえ確かに、いつもビキニアーマー姿なので正直水着になっても、きわどさがいつもと変わらない。

「手足の露出は増加してるが……いつもと余り変わらない様な……」  
アーキテクトは……いや、他の全員もそんな事を考えていた。が……当の健はフレズを直視できないらしくチラチラと目を逸らしていた。ビキニアーマーと水着では違ってみえるらしい。

「フフ……健君てば純情ね。2人並ぶとお姉さんと弟だわ」

ステイレットが少し笑いながら言った。健とフレズの2人が並ぶと、お互いの体格差が顕著に出る。フレズより一回り小さく、彼女の胸辺りまでの身長からどちらが上の立場か曖昧に感じてしまう。

「こいつの方が年上に思われるのは正直やだなあ」

不満げに健は呟いた。

「ボクもそう言われるのやだよ……」

「? 珍しいわねフレズ、アンタこないだもそんな顔してたけど」

「……いいじゃないか別に」

理由は前述の通り、姉弟じゃ結婚できない。だ。

「それよりさ、時間が惜しいよ。早く遊ぼうよマスター」

「そうだねフレズ。すいません。まずは二人で遊びたいんで」

そう言ってヒカル達に断りを入れた健はフレズと海へ走っていった。「気をつけてな」そう言っただけでヒカル達は見送った。

「じゃあ俺の方も轟雷が心配だから様子を見てくるわ」

続けて黄一が海の家で轟雷の様子を見に行っただけ。

「すぐ泳ぐんじゃないのか。じゃあ僕も付き合うよ」

潜水服を脱ぐとウェットスーツ姿の大輔はアーキテクトと一緒に黄一に付き添う。残ったのはヒカルとステイレットだ。

「……お前はどうかするよ」

ビニールシートとパラソルを設置しながらヒカルが問いかける。

「暫く考え事したいからここに居るわ」

遊ぶ気になれないとステイレットはシートの上で体育座りをする。

「そっか。じゃあ俺もここに居るわ」

「……好きにすれば?」

その横でヒカルは座った。

「……」

「……」

暫く時間が経つ。お互いの耳には波の音と、FAGとマスターの話  
し声が入ってくるが、そんな喧噪も、季節外れの日差しも二人は意に  
介さない。

——…何やってんだろ私、マスターがこんなに私を心配してくれ  
てるのに……—

ステイレットは白虎に言われた事もそうだが、ヒカルに対して壁を  
作ってる事に自己嫌悪に陥っていた。

——今まで散々自分の事人形だって言い聞かせてきたけど、マス  
ターと一緒にいるとそんな事些細だって、無意識に思ってたんだらう  
な。……でも私が人間でない以上、人間の事……好きになるなんて  
……私がやってる事ってなんだろう……—

今まで、ヒカルが自分に優しくしてくれた事を思い出す。自分をF  
AGだからと、人間でないからと差別しなかった少年。どうして彼が  
そうしたか、それは純粹にヒカルが優しさを持っていたから、

——…だからってマスターにこんなよそよそしくする必要もな  
いよね。周りがどう言おうと、私が……私がマスターを好きなのは変  
わらない。一緒にいければ今はそれでいいわ。普通に考えたら今で  
も十分私幸せじゃない——

そう意を決したステイレットは態勢を変えずに、隣のヒカルへ口を  
開いた。

「あのさ、マスター……白虎型に言われた事だけど、奴の言った通りだ  
わ。FAGと人間は恋人にはなれない。でもそんな事は関係ないわ。  
人形の私達FAGでも信頼を結ぶ事は出来る」

それを証明してくれたのはヒカル自身、そうステイレットは含みを  
持たせながら言う。

「あの白虎に勝つには恋人とか関係ない。マスターと力を合わせる必  
要があるし、それを見せ付けたい。……だから、私と一緒に戦ってマ  
スター」

自分一人では難しいかもしれないし、一人で戦ってる白虎に対し、  
それはフェアではないかもしれない。しかしステイレットはヒカル

との絆を白虎に見せ付けたかった。

「勘違いしないでよね……。私別にマスターと恋人になりたいとかじゃないから。……でも意地だから、マスターも私を大事にしてくれるんなら、私もマスターに答えてあげなきゃって思っただけだから……ね、マス」

そこで初めてステイレットはヒカルの方を向いた。が、当のヒカルは……見とれていた。視線の先、鞆に収めた日本刀を持ち、サラシと六尺禪を水着として絞めた黒髪のFAGの後ろ姿に見とれていた。禪なのでお尻が丸見えだった上に、歩く度に尻肉がふるふる揺れる。

「……ハッ！殺気！」

「まああすううたああ……」

殺気に振り返ろうとしたヒカルだったが、その前にステイレットが両手でヒカルの頭を掴むと、無理やり自分の側に振り返らせた。

「こつちが……こつちが真面目な話してんのに何見とれてんのよ!!」

「いででで！仕方ないだろ！男としてどうしても反応せざるを得なかったんだよ！」

「何よ！こつちは塞ぎ込んでいたつてのに！マスターのおかげで……やっとな気持ちを切り替えられたつてのに！」

「！それって……立ち直れたのか？」

純粹に心配する顔だ。何をいけしやあしやあと思いつつも、心配する気持ちはやっぱり本物だったとステイレットは思う。

「悩んでるの馬鹿らしくなったわよ。何はともあれあの白虎に勝つにはマスターとの協力が必要になるわ。その為にはマスターにも健君みたいな腕前が必要になる。付き合ってもらわよ。マスター」

「ステイレット……ああ！」

「ま、そう考えたら今日位は遊んでおきたいわね。折角だから遊ぶわよマスター！」

そう言うときステイレットは立ち上がり海の方へ走っていく。いたずらっぽく笑うステイレットにヒカルは、少しはここに来た意味はあったかなと安堵した。

「つとー！待てよステイレット！」

そう言つてヒカルはステイレットの後を追いかける。

……そんな二人を興味深そうに見ているFAGが一人いた。水着は着ておらず、デフォルトの格好だ。マスターらしき高校生の少年と一緒にだった。

「HEY！提督ウー。あの二人、なんだか面白い関係のFAGとマスターの様デース。年齢は恐らく提督と近そうネ」

「初対面でもない人にそう言うなよ。それに提督呼びとその口調はやめてくれ。大姉ちゃんの連れているアイツの真似だろ？」

「金剛姉さんの真似だったのですが……では指揮官、あの二人、なかなか優雅ですわ！」

「それも、ちい姉ちゃんの金剛の真似だろ。普通にやってくれグライフエン」

「あらら、解りましたマスター。……私、なんだかあの人達と友達になりたいです」

一方で禪とサラシを巻いた巨乳の美少女『マガツキ』は不快そうな顔で呟いた。

「……どいつもこいつも、FAGである事の自覚を忘れて……」

海の家……、海水浴場で海水浴客の更衣室やシャワー、そして飲食等を提供する場所である。吹き抜け同然になっている内装、そして幾つも並んだテーブルはマスターと、等身大になったFAG達で溢れかえっていた。お互い同じサイズで同じ時を過ごせる機会というのは中々に希少である。時折店内を通り抜ける風が心地よい。

「……ぐふつ。もう無理です。このお腹の圧迫感。これが人間の言うお腹いっぱいって奴ですなきつと……」

その店内の一角にて、競泳水着を着た小学生ボディの絶壁少女、轟雷は片手でお腹を押さえながら呟いた。胸はまな板と形容できるほどだが、お腹は食べ過ぎの為かぽっこりと膨らんでいる。轟雷の目の前のテーブルにはラーメンのどんぶりが二つ重なっており、それを食べたと言っただけだ。

「ええ〜もう？轟雷ってば小食だよお。あたしはまあだ全然食べられるよお。ふー、ふー、ちゆるるるっ！」

その隣で、明らかに十杯は越えてるであろう重なったドンブリ、それを食べた張本人、もとい張FAGはまだまだ余裕とばかりにラーメンを食べ続ける。

「本当どうなってますか かぐつち 輝鎚。あなたのお腹……」

「あたし重量級だからかなあ、バッテリーの減りが早くてえ、だからこんなに大食いになっちゃったみたいだよお」

轟雷はさつき知り合って打ち解けたFAGの食べっぷりに呆れる。食べるペースに乱れが一切ない。

「でも一人じゃきつとこれだけ食べられないよお。誰かと食べるごはんの方が美味しいって本当なんだにえ」

——……一人で食べても変わらないと思いますけど——

にこやかに笑う友達に対して、轟雷は啞然としながらそう思った。マイペースな性格なのは会って時間の浅い轟雷にもよく解る。

「おい轟雷。ヒカル達が来たぞってお前、もう食べてたのか」

と、そうしてる内に黄一達が来た。

「あ、マスター。早速友達が出来ましたよ」

轟雷も黄一の声に反応を見せる。

「んなになにい？轟雷のマスターさん？」

若干の訛った言葉を発しながら輝鎚は食べるのを中断して黄一に反応する。やはりマスターという存在は興味があるのだろう。

「輝鎚型？あ、どうもうちの子がお世話になりました」

輝鎚<sup>かくつち</sup>、防御に特化し、積載能力に優れたFAGだ。機動力は申し訳程度ではある物の、戦線維持、及び拠点防衛のバトルでは真価を発揮する。

「はじめましてえ。いえいえくあたしも新しい友達が出来て嬉しいですよお」

輝鎚は立ち上がり黄一に向かい合って頭を下げる。ビキニ姿の輝鎚は全体的にふとましい。……余ってるお腹の肉が一番目立つ。

「ちよつとマスター。なんで私がお世話になる前提なんですか！」

「日頃の行いだな」

「ムキー！」と2人が言い争っていると、

「……轟雷、自分で食べるってどんな気分？」

アーキテクトが轟雷に問いかける。アーキテクト自身飲食には興味があつたらしい。

「？そうですねー。舌への刺激が止まらないって感じですね。そうすると食欲にその刺激を求めめるのですが、反面満腹になるともう嫌だつて気分になります」

「そう」

そつけない返事だが、彼女はこういった反応なのがデフォルトだった。

「食べるのって初めてだけど楽しいよお。皆で一緒に食べたらもつと美味しいって言うから皆で食べようよお」

「こーら、折角海水浴に来てる人にそう言う事言っちゃ駄目だよ輝鎚」

と、そこへラーメンを乗せたトレイを持った青年が現れる。ふとましい輝鎚に反して長見でスレンダーな青年だ。黄一より若干年上と言った感じだ。



「ふわあマスター、マスターも食べるんだあ」

輝鎚は嬉しそうに青年の横に立つ。

「あ、加賀彦さん。マスター、この人です。この人が輝鎚のマスター、あきつぼかがひこ『秋坪加賀彦』さんです」

紹介する轟雷、太めのFAGと痩せてるマスター、並ぶと体型差がよく目立つ。

「轟雷さんのマスターですね。助かりました。輝鎚の相手をしてください」

黄一達に頭を下げる加賀彦と呼ばれた青年。大学生位だろうか、体型は似ても似つかないが清潔感があり温厚そうな所は輝鎚と似た感じだ。

「ああいえ、こちらこそアイツの面倒を見てもらって、轟雷の奴落ち着きないから……」

「いえいえ、輝鎚が誘った中で付き合ってくれたのは嬉しかったですよ」

「あれ？轟雷の方から絡んだかと思っただんですけど」

ヤケ食いすると言って海の家に入って行ったわけだ。輝鎚ののんびりした感じからあまり彼女が誘うイメージは無い。

「私ではないですよ。食べようとしたら輝鎚の方から『一緒に食べよう』って言ってきたんですよ」

「一人で食べるゴハンって美味しくないんだってえ。ここでならマスターと一緒に食べられるから、あたし嬉しいんだあ。マスターもきつと美味しいって言ってくれるよお」

「……思っただんですけど、妙に誰かと食べるのに拘ってますね輝鎚」  
「んう？だってここでなら、マスターも一人で食べる事ないでしょお？」

「どういう事ですか？」

「マスターはねえ、親に勘当されちゃったんだあ、料理人になる夢があったんだけど、親は仕事を継げって言って大喧嘩になったんだよお」

「輝鎚、それは……」

止めようとする加賀彦だが輝鎚はマイペース故か止まらない。

「それで今は、あたしと一緒に一人暮らしで、料理学校行ってるよお。家でお話出来るの、あたししかないからあ、一緒にご飯食べられたら、きつとマスターも喜んでくれるって思ったんだあ」

「輝鎚。言うな」

バツが悪そうになる加賀彦に対して輝鎚は拒否する。

「ええ〜？やだよお。……だってあたし言いたくなる位嬉しいんだよお？ずつと一人で食べてるマスター見てたからあ」

「……お前……」

輝鎚の声のトーンが若干低くなる。真面目になっているという事だ。初対面の黄一でもこれが嘘とは思えない。

「そうだね。一緒に食べようか」

輝鎚が一番聞きたかった言葉だった。パアツと表情が明るくなる。

「ふわああ！やったあ！皆も食べようよお！」

「そうは言いたいんですけど輝鎚、私の方はもう食べられませんよ……」

「ちよつと僕達の方も、友達と待ち合わせがありました……」

そう言うのと一転して残念そうな表情になる輝鎚。

「食べてくれるんじゃないのかあ……」

「輝鎚、一人で食べるのは寂しいけど、無理に食べさせるのも楽しくないし美味しくないんだぞ。……俺と一緒に食べるのじゃ不満か？」

「ううん。そんな事ないよお。あたしマスターと一番一緒に食べたかったんだあ」

「マスター……、私はこの二人と一緒に食べたい。かき氷とスイカが食べてみたい」

と、そう提案をしたのはアーキテクトの方だった。邪魔しちや悪いと思いつつも、アーキテクトが強く興味を抱いてるのが大輔には解つた。

「……そうだね。折角だから僕も付き合うよ。黄一、悪いけどヒカル達に伝えといてくれ」

「解つた」そう言った黄一に大輔は「というわけでご一緒させてください」

い」と加賀彦達に付き合う形となった。黄一と轟雷はそのまま海の家を後にする。

外に出た瞬間に夏の日差しが出迎える。思わず眩しさに目をしかめる二人だった。

「……ただ食べるだけだったのに、ドラマがあつたなあ……」

「……輝鎚、マスターの事どう思ってるんでしょかね……」

2人はサンダルで砂浜を歩く。印象に残る二人を思い返す黄一。一方でボソツと轟雷が呟いた。

「?なんでそう思うんだ?」

「いえ……なんかマスターの事話す時、似てたんですよ……ステイレットやフレズ達に」

「なんだそりゃ?全然姿は違うだろ?」

「それはそうなんですけど、雰囲気と言うか、なんかそう思えたというか……」

自分でも変だとは思った。でもそんな風に思えた轟雷だった。

さてこちらは健とフレズの方である。2人の方は遊んでくると言って出ていったわけだが……、

「クツソ!直線の差が縮まらない!」

エアバイクに乗ったフレズが海面を高速で走りながら声を上げた。その姿は水上バイクその物だった。先述のセリフから彼女はレースをしているのだが、相手に差を開けられてしまってる。前方に同じくバイクに乗ったFAGが見えた。

「ヒヤッハー!!遅いぜフレズ!!」

フレズの相手のFAG、『ウイルバーナイン』はアーマーを変形させたバイクに跨りながら上機嫌で叫ぶ。ウイルバーナイン。バイクへの変形機能を持ったFAGだ。

変形させたバイクはタイヤのついた陸上用だが、このバーチャル空間ではお構いなしに水しぶきを上げながらタイヤで海面を疾走する。そのままウイルバーナインは水面にポールが2本立った地点の間、つまりゴールを猛スピードで通り抜けた。少ししてフレズもエアバイ

クで通過。結果は言わずもがなウイルバーナインの勝利である。

「ああもう！全然適わなかったよお！」

ハンドルを握りながら、フレズは項垂れた。

「当然だろう？変形機能はお互いあるけどお前の仕様は空中がメインだ。アタイらウイルバーナインやセカンドジャイヴは陸での走りこそ真価を発揮するってなもんさ！」

陸の走りなら誰にも負けないとでも言いたいのだろう。が、フレズとしてはツツコミ所のある発言だった。

「陸つてここ海じゃないかあ」

そう言いながら二人は陸に、砂浜に上がる。バーチャル空間ではバイクに乗ったままでも問題なく陸に上がった。

「フレズ、お疲れ様」

降りる二人をまず出迎えたのは健だ。

「御免マスター、勝てなかったよ」

「始めてやったんだから気にするなよ」

「レースゲームなら慣れてただけだなあ」

悔しそうな表情のフレズに対して健は慰めの言葉をかける。その横でウイルバーナインが得意げにマスターの男に勝利を報告する。

「オヤジ。アタイの勝利さ。軽いもんよ」

「そ、それはいいんだがナイン！大丈夫か!?怪我はないか?！」

ウイルバーナインをナインと呼んだ30代の男、ダイバースーツを着た筋骨隆々のモヒカンヘアーの大男は心配そうに詰め寄る。

「おいおい。オヤジは神経質すぎなんだよ！仮想空間なんだから平気だったの！」

うんざりした風にナインは答える。何時もこれだ。と言った雰囲気だ。

「……お前のマスター随分と大切にしてくれてるじゃないか。そんな荒くれ者みたいな外見しているのにさ」

「外見で人を判断するなよフレズ。すいません長瀬さん」

とはいった物の、感想自体はフレズと同じだった。『長瀬直哉』ながぶちなおや、それがナインのマスターの名前だ。

「ああすまない取り乱してしまつて。直哉おじさんでいいよ」

——この外見の割に人当たりはいいんだよなこの人——

「見かけによらないって思ったか？オヤジの本業はバイクショップの店長なんだよ。なのにアタイが外で走ろうとすると顔真っ赤にして止めんのよ」

考えを読まれたわけではないが、だからか、と健とフレズは納得する。

「いや！外で走つちや危ないだろ!?心配で心配で！」

「あーあ、いつもこれだよオヤジは、こんな世紀末でヒヤツハーとか言いそうな外見してるくせにさ」

「オヤジって言ってる通り、お父さんみたいですわね」

健としては、親との過ごした時間の関係上ナインと直哉の関係は興味深かった。

「?まあな、いつの間にかアタイも呼んでいた。独身だつてのにさ……なあお前、誰かオヤジの嫁さんに良さそうな人間知らねえか？オヤジの周りが結婚しろつてうるさくてよ」

「あー、悪いけどボク達、山奥の診療所暮らしが長かったからさ。平均年齢70代ばかりで……」

「いいんじゃないね？」

認識のずれたナインの発言にフレズと健は言葉を詰まらせる。さすがに直哉もその発言は看過できなかつた。

「ナイン勝手に話を進めないでくれえ！さすがに年上好きも限界があるー！」

「あ?そうなのか?人間つてよく解んねえな」

認識のズレはあれど、お互いが心を開いていて、仲がいいのはよく解る。

「とりま、もう一回走つてくらあ、フレズも付き合えよ」

「ちよつと待て！準備体操をしてなかつたら二人とも！ちゃんと体操してからだ！それに救命胴衣もつけていきなさい！」

「んだよー。泳ぐわけじゃねえからいいだろ」

「そもそもお前ら泳げる設計じゃないだろ！」

直哉の言葉に「あ、そういえば」とフレズ達は思い出した。FAGは水に弱い故に泳げない。

「つたく、オヤジは神経質すぎんだよ。このイベントだって何があるか解らない怪しいイベントとか言ってたしよ」

「変な顔の怪しい女に誘われたイベントだぞ。心配にもなるだろ」

変な顔の怪しい女、というのは健達も心当たりがある。なんだか気になった。体格差故に健は見上げながら直哉に聞いてみた。

「?あの、変な顔の女って顔がフレームアーキテクトの?」

本業で客商売をしてる所為だろうか。直ぐに健に目線を落とすと直哉は丁寧な対応で答える。

「うん?そうだね。話してみると普通の人ではあったんだけど、見た目が怪しさマックスだからか、話をしてても怖くて怖くて……」

「そんなツラしたオヤジが言えた事かよー」

——大輔さんじゃないけどなんか気になるな……。アーキテクトウーマンは一人じゃないのか?——

そしてその頃ヒカルとステイレットの二人はと言うと……、

「で、遊ぶとは言ったけどさ。まさか泳げないとはなー」

「笑わないでよ!元々私達は水は駄目なんだから!」

ヒカルに両手を引かれ、海面に浮かびながらバタ足をするステイレット。海で遊ぼうにも先述の通りなのでこうなるのは必然だった。ぷかぷかと水着をまとったお尻が水面に浮かぶ。自分の態勢の恥ずかしさをごまかす為か若干声を荒げるステイレット。

「ふふっ……」

「ゴボッ!何笑ってんのよ!」

まだ足はつく深さだ。口に水が入る事をお構いなしに、ステイレットは立ち上がると食って掛かる。ヒカルと、等身大のステイレットとの身長差は若干ステイレットの方が見上げる形となる。

「いや、なんか安心した」

「何がよ」

「お前、雨に関してトラウマあったからさ。もしかしたら同じ水の海

も駄目なんじゃないかと思っただけど、平気みたいでよかったよ」

数か月前の期末勉強の時もそうだった。本当の意味で立ち直りつつあると言うのはずっと見ていたヒカルとしてはやはり嬉しい物である。

「あーそっか。これも雨と同じで水なんだっけ」

「って、知らなかったのかよ」

いつも自分に勉強を覚えてくれる割に、こういう予想外の言葉をヒカルはひどく意外に感じた。

「良いでしょ別に、FAGにとって水は大敵なんだから。別に泳げなくても問題ないのよ」

「って、今泳ぎの練習してるんでしようが。……浮き輪借りてくるか？」

「嫌よ格好悪い。……別に泳げなくてもいいのは本当よ。……マスターと同じ大ききで遊べるっただけで、私……」

眼を逸らしながらステイレットは言う。

「お前……」

「……なーんて、冗談よ冗談。マスターに彼女が出来た時の為の練習相手になってあげてるだけなんだから。本気にしないでよ」

「……そう……だな」

舌を出しながら茶化すステイレット。人間とFAGの違い、そんなのはお互い解ってる。ここでの体験はあくまで仮想空間内での出来事であって本来の二人の大きさの差は知ってるの通りだ。

「ま、イベント内のバトル大会まで時間はあるんだし、今のうちに身体を温めておこうって事よ。折角の新装備のお披露目なんだからさ」

元々ステイレットが今日のイベントに出る理由はその大会だった。忘れていたヒカルは、言われて思い出す。

「あ、そうか。今日のイベントそれもあつたんだっけ」

と、その時だった。

「あの。バトル大会のイベントに出場するのですしたら私と出ませんか？」

その時、突然声が響く。誰かいると辺りを見回す二人だが近くには

誰もいない。

「あ、失礼しました。こちらです！」

直後、水しぶきをあげて一人のFAGが姿を表した。半透明の仮面の様なヘルメットを被り、副腕付きのパワードスーツを着込んだ、水着ともセーラー服とも付かないボディ。彼女の名は、

「水陸両用FAG、グライフエンであります！」

内側の片手で敬礼ポーズを取りながらグライフエンと名乗った少女は快活な口調で話す。

「な、なんなのよいきなり！なんで海中から！」

もしかしてきっきのやり取りを見られてた?!そんな懸念がステイレットを襲う。

「ああ、申し訳ありません！ダイビングを楽しんでいたのですが、イベント出場の2人のお話が耳に入りました！……お二人とも、仲がいいんですね」

羨ましそうに言うグライフエン。しかしステイレットにとっては地雷を踏まれた様な物だ。

「な！何を言ってるのよ！どんなに仲が良くってもFAGと人間の関係は所詮人間と機械でしかないわ！こいつとの関係なんて他のFAGと変わらないわよ！」

顔を真っ赤にして否定するステイレット。

「そうなのですか？どうも2人ともお付き合いでもしてるのかなと思ひまして」

「だだだ誰がっ!!」

そう言つてステイレットは照れ隠しでヒカルを突き飛ばした。浅いとはいえ海面に突っ込むヒカル。

「ぶふお！うおいステイレット！」

「ああスイマセン！なんだかそういつた独特なオーラを感じたのですよー！」

「おいおいグライフエン。もうちよつと普通に声かけられないのかよ」

そこを高校生らしき少年が状況をややこしくするグライフエンを



止めた。髪が逆立っており、ヒカルとは違った感じだが同じ体育系と言った所か。

「あ、司令官！申し訳ありません！どうも2人の雰囲気的に声をかけ辛くて！」

「司令官じゃないって」

「あ、すみませんマスター」

『……』

敬礼をして謝罪するグライフエンを少年は諫める。その光景をヒカルとステイレットはどう声をかけていいか解らなかつた。

「じゃあ益次君もアーキテクトウーマンから誘われたってわけだ」

砂浜に上がったヒカルとステイレット。そしてグライフエンとマスターの『益次蓮』<sup>ますつぐれん</sup>。四人はヒカルの敷いたシートの上で話をしていった。イベントがなければ縁のないFAGとマスターの会話だ。皆新鮮に感じていた。

「蓮でいいよヒカル君」

「じゃあ俺も呼び捨てで」

「お付き合ひしてる。と勘ぐってしまったのは謝罪します。本当に申し訳ありませんでした」

マスター達が談話してる横でグライフエンはステイレットに重ねて謝っていた。

「いいって、そんな何度もやられても却って失礼よ」

「すみません。どうもこういうのはキチツとしておかないと気が済まない性分です……」

「アンタ生真面目ねー。私の友達に見習わせたいわ」

「見習うなんてそんな……私なんて金剛姉さん達の足元にも及びませんよ」

謙遜するグライフエン、本当に真面目過ぎる。そんな印象だ。

「姉さん？あんた姉妹が……あー、一緒に暮らしてるFAGがいるの？」

FAGの場合一緒に暮らしてれば姉妹機でなくとも姉妹と表現で

きる。一度言い直して質問するステイレット。

「いや、一緒に暮らしてるってわけじゃないよ。俺達は帰国子女でね。暫く前まではイギリスについて、そこで暮らしてた俺の姉2人が、金剛型をそれぞれ相手にしてたんだ。俺達だけ今日本に帰ってきてるってわけ」

金剛型、艦艇への変形機構を持ったアーマーを装備し、水上戦闘と射撃戦に優れたFAGだ。水面を滑走する様に移動し、マルチロックオンにより一対多で真価を発揮する。

「イ・イギリス……すげえな」

帰国子女、そんな言葉だけでなんだか自分と違う世界に生きてる様に感じるヒカルだった。

「そんな物怖じしないでくれよ。ただ別の場所で暮らしていたってだけさ」

「でもバイリンガルって奴なんだろう？すげえな。俺英語全然駄目だから」

「そんな事ないよ。俺だつてこっちで生活してるだけで順調に英語忘れてるからさ」

ハハハと明るく笑いながら蓮は答えた。快活で明るい少年と言った所だ。

『イベント参加の皆さんにお知らせします。イベント内でのバトル大会の申請を開始しますので参加希望の方は指定の場所にて申請を行ってください。場所は……』

その時だった。フィールド内全体に放送が響く。

「と、そうだった。折角だから一緒にチーム組んで出ないかヒカル。組む相手を探していた所なんだ」

今回の大会は二人一組のタッグ形式だ。ヒカルとしてはステイレットの考えを尊重したくて聞いてみる。

「ステイレットはどうする？」

「私は……別にいいわよ。特に轟雷と組むとも話してなかったし」

「本当ですか!?嬉しいです!グライフエン頑張ります!」

立ち上がって敬礼する少女に「やっぱ生真面目ね」とステイレット

は思う。

「じゃあここで待っていてくれ。申請してくるから」

「!マスター。でしたら私も……」

ヒカルと一緒に申請に向かおうとする蓮をグライフエンは止める。自分も同行しようというわけだ。

「いいよ。これ位だったら俺だけでも出来るから、心配するなっ」

申請にFAGを同行させる必要はない。

「ですが……、解りました。ステイレットさんと話をしながらお待ちします」

敬礼を取りながら二人を見送るグライフエン。

「なんか、大ききだなグライフエンの奴」

「いつもああだよ。もう少し碎けたっていいのにさ。……おつと」

苦笑しながら歩く少年達、と、蓮が転びそうによろける。

「あ、大丈夫か?」

「ああ悪い。ちよつとVRに慣れてない所為かな。歩きづらくて……」

そうは言うがヒカルは蓮の歩き方が気になっていた。左右で歩幅が合っていない。左足を引きづる様に見えた。

「お前……その足……」

「……そこは聞かないでくれないか……」

その言葉とグライフエンの反応からして、大体の予想はついた。それを察しながらも二人は申請会場へ向かっていった。それに気づいていたのはステイレットも同じである。

「ねえ、アンタのマスター……」

「ステイレットさん。……あなたはマスターのヒカルさんをどう思っていますか?」

「え?」

「私の司令官はですね。イギリスではあるハイスクールで、水泳のホープでした。でも無理がたたって泳げない足になってしまったんです」

「……」

「……泳ぐのが大好きな人でしたから、荒れに荒れましたよ……私たちの様にパーツ交換でどうにかなるわけじゃないですから。……不便ですよ、どんなに辛い事でも受け入れなければいけない時もある。立ち直るのに時間かかりました……」

言葉の意味も、声のトーンからして、辛い思いをしてきたのは容易に想像できた。

「気休めを言いながら、見守るしか出来ませんでしたよ。……こういう時、私が人間の女だったらと、どれだけ思った事か。それだったら元の小さな体よりも支えになる事が出来たのに……」

言葉に含んだ意味をステイレットは想像できた。

「アンタ……もしかして……」

グライフエンもまた、ステイレットが自分の言葉の意味を理解してくれたと思った。

「これが恋愛感情って奴なんですかね……おかしいですよ……」

「まさか……私もそうだって思った？だから近づいたの……？」

「正直に言います。その通りです。普通恋愛感情があつたとしても主従関係は抜けません。あなたとヒカルさんのやり取りが、なんだか人間同士の関係の様に見えたんです」

違う。いつもならステイレットはそう答えたらう。でも白虎に言われて悩んでいた事と、グライフエンの気持ちはよく解るから……こう答える。

「……好きよ……。アイツの事」

「やっぱり……」

「……お互い難儀な病気にかかっちゃったもんだわ」

その頃ヒカル達は申請手続きの受付に向かう。……その途中での出来事だった。

「マキーー！ねえマキーー！何処にいるのー!？」

一人の小さな少年が誰かの名前を呼んでいた。小学生位だろうか。と、ヒカル達を見るや否や駆け寄ってくる。

「あ、あの……この辺でマガツキ型のFAGをみませんでしたか？禪

を水着にしてたんで解りやすいと思うんですけど……」

マガツキ、女の鎧武者を模したFAGだ。問いかけてくる内気そうな少年は、一瞬性別が解らなくなる様な中性的な外見だった。水着の所為で男と一瞬遅れて判断した。悪い言い方ではあるが、軟弱か、女々しい印象だった。……ある一部分を除いて。

——眼帯をしてる？ケガかな？——

右眼の部分に医療用の眼帯をかけていた。そこは気にはなるがヒカルは聞くわけにもいかず、質問に答えた。

「マガツキ型？暫く前に海水浴場で見ただけど……」

輝と聞いたらヒカルは覚えがあった。

「あーありがとうございます！」

そう言つて少年は砂浜に向かおうとするが気になったヒカルは止めようとする。が、先に蓮が聞いた。

「待ちなよ。何かあったのかい？」

「ふえ!?バ・バトル大会に出ようって約束してたんですけど、いなくなっちゃいました……」

困惑する表情の少年。というか元々困り眉の顔だった。

「申請だったらマスターだけでも出来るよ。その時にスタッフと会うだろうし、そのマガツキを呼んでもらったらどうだろう」

「あ、そうですね。……ご一緒してよろしいでしょうか」

断る理由もない。構わないよと了承すると三人は申請会場の海の家に向かった。

——  
場所は海の家のカウンター内で名前を言えば受付完了だ。

「結構混んでるなあ」

「申請できる窓口が一つだけだからなあ。必然的に人が集まりすぎる」

マスターやFAGが列となって長い行列を作る。ヒカルと蓮の2人は海を家の外側にいた。

「よおヒカル、お前は那些人達と出るのか？」

と、後ろの方から聞きなれた声がした。振り向くと黄一と健、ヒカ

ルとは初対面の直哉と加賀彦である。並ぶFAGは轟雷とフレズとナインだ。

「お、黄一か。まあな。紹介するよ。さつき友達になった益次蓮君だ」

「よろしく。相棒はグライフエン型だよ」

「どうもこちらこそ。俺の方もこちらの秋坪加賀彦さんと組む事になったよ」

「よろしく。輝鎚型が相棒だけど、今いないのが残念だよ」

「いえいえとヒカルの方もステイレットがない為、紹介出来ない事を残念がる。そしてヒカルがさつき会った少年を紹介しようとするが……」

「で、こつちが……えと君名前は？」

「ふえ?!し、信道駿しんどうしゅんです……、相棒はマガツキ型です。お兄さん達とはさつき会ったばかりで……」

「眼帯とは珍しいですね。なんか女子のスク水着ても似合いそうです」と轟雷。

「失礼な事言うなよ轟雷。中々合流できないと思ったらお互い新しい友達が出来たってわけだ」

「そうだなあ。黄一の方も同じ理由？」

黄一は轟雷を呼びに行ってたわけだ。それが今まで合流できなかったと言うのも、新しいFAG仲間と話し込んでいたのかな。とヒカルは今まで合流しなかった理由を分析する。

「いや、轟雷の奴が一通り会場内を見て回りたいって言ったのが原因だわ。加賀彦さんや健君とはさつき再会してさ」

「……気になる事があったんです」

「気になる事って？」

「今回のイベントのFAGとマスター……」

と、その時だった。

「ちよつと、話してないで前詰めてよー」

真後ろにいた一人のFAG、ジイダオが列を詰める様に言い出した。前の人との間が結構空いている。

「つと、いけね！」

そう言つて走るヒカル達、ただ一人、轟雷は進みながら指摘したジイダオの方を見た。マスターらしき女性と会話してる。

「全く、話すのはいいけど周りもちゃんと見て欲しいよ。ねーマスター」

「ああもうこのサイズでこんな事言うなんて！もう可愛いったらないわ!!」

「あはは！くすぐったいよマスター！」

マスターがジイダオを抱え、頬同士をこすり合わせるのが見えた。笑ってるジイダオの様子から溺愛されているというの是一目で解る。

——……妙に仲良いのが多い気がするんですよ。今回のイベント参加のマスターとFAG……——

誰にも聞こえない位小さい声で、轟雷は呟いた……。

ep26 『人間とフレームアームズ・ガール』（中編2）

——イベント参加のFAGの呼び出しです。マガツキ型のマキさん。マスターの信道駿さんが……——

滞りなくバトル大会への申請も終わり、駿（以下シユン）の相方のマガツキ型を待つのみとなった。

「すいません。一緒に待ってもらって……」

海の家テーブルの一つを皆は囲み、眼帯をつけた幼い少年は萎縮しながら頭を下げた。

「気にすんなよ」

「所でシユン君はバトル大会は一人で出るのかい？」

「はい……。マスターはサポート用のメカで出られますから」

「それにしても待ってるの暇じゃない？一緒に食べて待とうよお」

と、そんなヒカル達に輝鎚が割って入ってくる。突然の事に「ふえ?!」とシユンは狼狽する。今の輝鎚の手にはラーメンの丼ではなくかき氷のグラスが握られていた。

「輝鎚、だから無理に食べさせようとするなって」

そんな輝鎚を加賀彦が止める。

「でもさあマスター、アーキテクトがお腹壊しちやっただからまた一人になっちゃって寂しいゆお」

やや離れた場所で、椅子に座ったアーキテクトが渋い顔で休んでいた。

「アーキテクト。大丈夫？」

「マスター……申し訳ない。想定できたのに……」

付き添う大輔に対して申し訳なさそうな顔でアーキテクトは答えた。アーキテクトが冷たい物を食べ過ぎた所為である。

「いいって別に、僕の方はバトル大会には出るつもりはなかったし、まあ出来れば大会と一緒に見たいかな」

「同意。私もマスターと一緒に大会を見たい。それまで完全治癒の確立……64%。しかしマスターの為ならそれを100%に……」

「無理しないでよ」



「アーキテクトもすぐお腹一杯になっちゃうんだにえ。あたしも同じの食べてるけど全然平気なのにい」

「……お前さつきまでアツアツのラーメン食べまくってたのに、今はかき氷で腹大丈夫なのか？」

熱い物ばかり食べた後に冷たい物だ。人間ではない上にこれは仮想空間だと解ってはいるがお腹の調子が心配になる。

「んう？別に平気だよマスター。大会は轟雷とあたし出るから、今の内に食べてエネルギー溜めておかないとお」

「ブラックホールにでもなってるんですかあなたのお腹は……」

と、そんな話をしてる時だった。

「ヒカル君？やっぱりヒカル君だ！」

店内に聞き覚えのある女性の声が響く。その声の主は。

「あれ？玄白さん？」

初めに黄一が反応する。ツインテールで白ビキニを着た少女がそこにいた。クラスメイトの玄白朱音である。

「わあ奇遇！さつき受付で見かけたけどやっぱりだ！」

嬉しそうな感情を込めた声を上げてヒカルに駆け寄ってくる少女。

「ん？ヒカルの彼女かい？」

会った事のない蓮は素直にそう思う。その質問にヒカルは戸惑いながら答える。

「ち！違うよ蓮！ただ同じクラスメイトってだけでそんな関係じゃない！」

「そうですよー。ただのクラスメイトですよ私はー」

戸惑うヒカルに反して朱音の方は満更でもなさそうな反応だった。彼女扱いが嬉しいと言った所か。

——あの反応からして、とりあえずヒカルの方に脈はないな……—

それを面白くなさそうに見る黄一、朱音がヒカルをどう思ってるかは容易に予想できた。

「……ていうか玄白さんもこのイベントに参加してたんだ」

「黄一君、うん、さつきのバトルイベントに参加申請しようとしたんだ

けどね。その時にヒカル君達を見かけて凄い奇遇だっと思ってんだ」  
「クリスマスのお姉さんですね。その節はどうも」

轟雷も朱音の事は覚えていた。挨拶を交えると朱音も轟雷の事は覚えていたらしい。

「この間の轟雷だね。いいなあ。私もモモコちゃんを会わせられたかったんだけど……」

モモコちゃんというのは朱音が持っているというFAGだ。このイベントに参加するという事は当然連れてきてるといふ事になる。

「いなくなっちゃったんですか？」

「うん……ついさっきまでいたんだけどね。そういうわけで私もここで待っていいかな？ここで会ったのも何かの縁だし」

断る理由もない。ヒカル達は朱音を加える事になる。

「そういえば、モモコちゃんという名前は聞きましたけど、FAGの種類はなんですか？」

轟雷が問いかける。以前から聞いた『モモコ』という名前。気になっただけはいた。

「え？そういういえば言っていなかったね。白虎型だよ」

『!?!』

ヒカルと黄一、轟雷が固まった。この間してやられたのも同じ白虎型だからだ。まさか例の白虎のマスターは彼女か？と思いき問いかける轟雷。

「……どういう性格の子なんですか？」

「やさしい子だよ。普段強がってるけど本当は凄い繊細で優しい子なんだ」

自慢げに朱音は答える。まるで自分の子供を自慢する母親の様にも見えた。

「優しくて繊細ですか……じゃあ別人ですねマスター！」

「へ？別人？」

轟雷の言ってる事が解らず朱音は困惑する。慌てて黄一が説明をする。

「こら轟雷、あー……轟雷の奴少し前にバトルで白虎型にやられてな」

「いやヤンキーみたいで、とても優しいとは言えない奴でしたよ。調子こいた小悪党って感じの奴ですねー」

かなり轟雷の主観が入った意見である。

「そうなんだ。轟雷ちゃんはそのリベンジに燃えてるってわけだね」  
「その通りです！その準備もある程度煮詰まってきたんで今回のバトル大会では予行練習と言うわけですよ！朱音さんの白虎は強いんですか?!是非お手合わせをしたいと思いますー」

「いきなりそんな事言うなよ。失礼だろうが。ごめんよ玄白さん」

遠慮のない轟雷の態度に黄一はヒヤヒヤだった。朱音の機嫌を損ねてこっちまで嫌われたらどうしようといった黄一の考えだ。

「別に気にしてないよ。黄一君の轟雷ってやつぱり可愛いなあ」

カラツとした態度で朱音は笑いながら答える。轟雷の動作に小さい子供を重ねているわけだ。

「一緒にいると楽しいでしょ諭吉君。私のモモコちゃんは素直じゃない時が多くてね」

「え？いやコイツといても疲れるだけだよ」

「でもさ。放っておけないんじゃない？」

「ああうん。出来の悪い子程可愛いつて言うからかな……」

出来の悪いというワードに轟雷は引つ掛かる。

「って何言ってるんですかマスター！っていうか朱音さんも何言わせてるんですか！」

「えー私は一言も言葉にしてないけどなあ。フッフ……」

話が出来た事に少しばかり轟雷に感謝する黄一だった。その一方で朱音を腹黒と認定しかねない轟雷である。

「ヒカル君のステイレットちゃんも会いたいな」

そう言って朱音は、ヒカルの方に身体を傾けながら言った。

「あ、覚えてたんだ。俺がステイレット連れているの」

「クリスマスの時に聞いてからずっと覚えていたよ。対戦したいとも言ったでしょ私……」

ヒカルにとっては何気ない一言だった。しかし言いだしつぺの朱音にとっては随分と楽しみにしていた様だ。

「……なんだよヒカルの奴……」

そんな二人を黄一は面白くなさそうに見ていた……。

と、その時だった。

「失礼する。ここに眼帯をつけた子供が……」

刀を持ち、サラシと六尺禪を水着として身に着けた少女が現れる。黒髪ロングの姫カットと頭頂部に結ばれたリボンは全体的に和風な印象を周囲に与えた。マガツキ型だ。

「あ、マキー」

オドオドしていた少年は一転して嬉しそうな声を上げ、禪の少女に駆け寄る。気づいた少女は中腰となりシユンの目線に合わせた姿勢となった。

「主殿、ここでしたか」

凜とした表情のまま少女は答える。凜々しい女剣士そのものといった感じだ。なおどうでもいい話だが、締め付けた禪は後ろにTバック状に食い込んでおり、中腰の体勢を後ろから見たら、お尻を突き出してる格好となるわけで非常に際どい。

「どこ行ってたんだよー！来てそうそういなくなってさー！」

「申し訳ありません。少し考え事をしていました」

「その人、いやFAGが信道君の相棒の？」

健は質問として聞きながら、少女の丁寧な対応に、FAG個人それぞれの行動の違いを感じた。フレスだったら健を見下ろす様な姿勢で答えるからだ。

「はい。真姫（マキ）と申します。主殿がお世話になりました」

「真姫が勝手にいなくなっただんじやないかー」

「信道君、彼女とバトル大会に出るんだな」

「わあ、信道君てば強そうなFAGを連れてるんだにえ、折角だから、何か一緒に食べなよお」

と、輝鎚が相変わらず駿と真姫の二人を飲食に誘おうとする。彼女としてはこの皆で食べる感覚を知って欲しかった。

「……結構だ。人間と飲食をするなど無意味だ」

「真姫？」

眉間に皺を寄せながら真姫は突っぱねる。不機嫌そうに店内を見回す。

「……ここは主とFAGがまるで家族か恋人の様に語らってるな。だがFAGと言えど所詮は機械だろう。人間の真似事など私の趣味ではない」

「でも楽しいよお？マスターとFAGが今までにない距離感を感じられて新鮮だよお」

「……私達にとって意味があるとは思えないな。正直、この雰囲気は好きにはなれない」

「ええでもお」

「真姫。駄目だよそんな事言っちゃ、ごめんなさい。ちよつと今機嫌が悪いらしくて……」

謝るシユンに真姫は自分の態度が大人げなかったと判断。

「主殿……いえ、どうやら私の方も大人げなかったようだ。すまなかったな」

続けて頭を下げる真姫に、輝鎚はそれ以上言わなかった。若干不満には思ったが彼女はそれを引きずらない。

「いえいええ、無理強いはいけないってマスターに教えてもらったから大丈夫だよお」

見ていた加賀彦もその返しには安心した様だ。

「ただこの雰囲気は自分には馴染めないのも事実だ。悪いが私は外に出させてもらう」

「真姫……じゃあ僕も外に出るよ」

踵を返す真姫に対してシユンはそれに付き合おうとする。折角のイベントなのに離れてばかりなのはシユンも嫌だからだ。

「玄白さん、ゴメン、FAGを待たせちゃいけないから俺達も戻るよ」

「じゃあ私もついて行っていいかな？モモコちゃんは迷子呼び出しで

もしとけば大丈夫だから」

シユンが真姫に会えたのならヒカルと蓮も目的は果たした。ステイレット達を待たせっぱなしにさせてはいけないからと戻ろうとした。

「すいません。お付き合いしてしまつて」

「気にする所なんてどこもないぜシユン君」

「すいません……」

「謝る必要なんてどこにもないんだからかしこまるなよ」

その後ヒカルと蓮はステイレットとグライフエンの所に戻る。大輔とアーキテクトは残り、ついてきたのは轟雷と黄一、健とフレズ、そしてシユンと真姫、そして朱音だ。

「主殿、申し訳ありません。ですがあの場所ではどうにも落ち着かないのも事実でした」

もしもシユンがあの場合にいたいというのだったなら、自分のやった行為は早計ではないかと真姫は自分の行動を反省する。

「いいよ。真姫がいるのが辛いなら、ぼくも付き合うから」

「有難うございます。主殿」

安心した様な表情を出す真姫。常時眉間に寄っていた皺が和らいだ。シユンの方もオドオドした印象はない。心を開いてる相手というわけだ。

「……仲良いんですね2人とも」

そんな2人を見ながら轟雷は口に出す。

「……特別意識はしてない。FAGなら主に仕えるのは当然の事だ」

真姫は、また眉間に皺を寄せた表情に戻ると轟雷に答える。

「私は右目を失った主殿の代わりに目にならなければならぬ。仕える者なら当然の事だ」

「失つたつて……」

「……失言だったな。忘れてくれ」

轟雷は言葉を失った。真姫の方は余計な情報を与えてしまったかとちよつと後悔。

「そ、そんな大袈裟にする事じゃないよ……ぼくにとつては良かったって思う位だよ」

「主殿、その話は……」

言おうとしたシユンを真姫が止めた。

「人の個人情報に関わる事だ。あまり詮索はしないで欲しいな」  
「そういうつもりはないですよ。ただ気になったのは事実ですけど」  
正直、その場にいた全員がシュンの眼帯に少なからず気になってはいた。しかし失明してると聞いてはそれを聞く事も出来ない。話が重すぎる。

そしてヒカル達を待つステイレットとグライフエンの2人は、お互いのマスターとの思い出を語っていた。2人の少女が砂浜に敷かれたビニールシートに腰掛けながら、だ。

「それ以来、前のマスターとは会ってないわね……。今更会ったってどうもしないわ。新しく相棒にしてるっていうフセットと仲良くやってるでしょうね」

「そのフセットさんも、今は捨てられてしまったかもしれませんがね……。そこまでドライなマスターもやはりいるという事ですか……」  
「でもなんやかんやあって今のマスターと会えたんだから、運命って不思議な物ね……」

「私もマスターが怪我を経由して、好きになりましたからそれは解ります」

同じマスターに恋愛感情を持つ者同士だからだろうか。ステイレットはどんどん胸中を吐き出す事が出来た。

「さてと、そろそろマスター達が戻ってくる頃でしょうね。装備の慣らしでもしておこうかしら？」

「お待ちせー。ステイレットー！」

その時背後から帰ってきたヒカルの声が聞こえた。すぐさま振り向くステイレット。

「あ！マスターお帰りなさい！」

「わあ！この子がヒカル君のステイレット？すっごい可愛いね！」

朱音が目をキラキラさせてステイレットの眼前に飛び出す。ガン見してくる少女にステイレットは戸惑う。

「っ?!どーどちら様!？」

「家のクラスメートの玄白朱音さんだよ。さっきそこで会ったんだ」

「キヤー！髪細くって綺麗ー！肌もすっごいきめ細かいねー！うちのモモコちゃんとはやっぱり全然違う感じ！」

「ど、どうも……」

褒めてくれる事には悪い気はしないステイレットである。

「私もバトル大会でエントリリーしたからトーナメントで当たるといいな。……本当はヒカル君とチーム組みたかったんだけどね。イベント参加するって解っていたらなあ……残念」

「？」

残念そうに言う朱音の態度がステイレットは気になった。

「うーん、だったら別の時に改めて、大会とかでチーム組んでみるかい？」

「えー本当?!その時があつたら是非にね！」

「折角だから黄一や健君達も一緒に誘った方が……」

「えーヒカル君と二人がいいな……」

「いや、皆の方が楽しいでしょ？」

どうもズレた反応を見せるヒカルである。黄一としてはそれが見ていてイラついた。だから張り上げた声で伝えた。

「おいヒカル！鈍いなお前！玄白さんはお前をデートに誘ってるんだよ！」

「な！何?!」

「いや諭吉君デートなんてそんな事ないよー」

慌てるヒカルに照れる朱音、黄一としては朱音に脈があるのに、当の本人のヒカルは鈍感極まりない。彼がモテた試しがないからだ。

——え?じゃあステイレットは……?——

それを聞いた轟雷は愕然とした。ステイレットがヒカルの事を好きなのは知っていた。しかしこれでは……、ステイレットの方を見るや案の定だ。

「……」

カタカタと震えてヒカルと朱音をじっと見ている。どんな風に考えてるのは一目瞭然だった。フレズとグライフエンも心配そうな表情でステイレットを見ていた。轟雷と似た様な事を思っていたのだ



ろう。

「よっ！ご両人！」

「マ、マスター……それ以上は……」

轟雷は黄一にこれ以上言わせてはいけなと止めようとする。と、その時だった。ステイレットの声が上がる。

「ねえ、マスター……」

「ステイレット？なんだよ……な！」

なんだと思つてステイレットの方を見るとヒカルは愕然とした。ヒカルに背を向けて、片腕で胸を押さえつつ、トップスを外したステイレットがうつ伏せで寝そべっていく。白い背中が丸出しになっていた。

「サンオイル塗つてほしいの。マスターの手で塗つてくれない？」

しなをつくる動作を意識したのであろうが、ステイレットに余裕はないらしい。声は上ずっており、表情は引きつっている。顔も真っ赤だ。

——ステイレット、無茶な事を……——と轟雷。

「ステイレット！お前どうしたんだよいきなり！」

「日焼けしちやつて痛いよ。これじゃ本調子で大会に出られそうにないの」

問いかけるヒカルに、ステイレットは背を向けながら答える。スケベなヒカルといえど、いきなり塗れと言われて塗れるわけでもない。皆が見てるんだぞ、轟雷に頼めよ」

ヒカルはステイレットの正面に回り込むと座つて目線を合わせる。見下ろすヒカルと見上げるステイレット。

「……何よ。玄白さんがいるからカツコつけようつてわけ？」

「そういう意味じゃなくて！」

不機嫌そうに顔をしかめるステイレット、ヒカルはどうかしてステイレットを落ち着かせようとする。その時だった。

「嫉妬か？醜い上に無意味な事をする」

「!?誰よ！」

声の主は、マガツキ型の真姫だった。彼女もシユンと共にヒカルの

横に立っていた。立ちながらステイレットを見下ろしており、見下してる様でもあった。

「大方、主が彼女にデートに誘われるのが面白くないと言った所だろう？」

「真姫！駄目だよ！」

シユンは隣りの真姫をなだめようとするが、今度は彼女は聞き入れる様子はない。

「そ！そんな事ないわよ！」

「だったら普通は主がデートに誘われたと言うのならむしろ喜ぶと思うんだがな」

「そんな事……言われなくても解ってるわよ！」

口ではそうは言ったが、あの状況を喜ぶという発想がステイレットには無い。

「その結果がその奇行か？まるで自分が主の恋人にでもなりたい様に見えるが」

妙にステイレットに食いついてくる真姫だ。しかし言ってる事は一つ一つがステイレットに突き刺さる。

「ああそうか、要はFAGをデートへのダシにした事が不満と言うわけだ」

「!!」

それが引き金だった。頭に血が上ったステイレットはマガツキに食って掛かろうと立ち上がる。なおビキニのトップスは外したままだったので……。

「アンタ!!さつきから黙って聞いてくれb「み！見るなああ!!」

直後、顔を真っ赤にしたヒカルが……ステイレットの露わになった両胸を左右両手で鷲掴みにした。それぞれの指が少女の柔らかい乳房に食い込む。

「ひゃあん!!!」

少年の手ブラに、黄色い声を上げ表情を、怒りから恥辱へ一転させるステイレット。なおヒカルの方は、手の柔らかい感触に一瞬顔がゆるむが、すぐに表情が「どうしよう……」と言いたそうな顔になって

いく。……ステイレットの方は一瞬醒めた表情になるや、恥辱と怒りが混ざった表情になっていき……、

「……」

無言で右手を掲げた。ずっと二人の表情は真っ赤である。

——手、離せないな……——

そんな事を思いながら、ヒカルはステイレットの平手打ちを素直に左頬で受け止めた。「パンツ」という乾いた音が響いた。

——最低！信じらんない!!あの変態!!——

轟雷達が並んで壁になってる後ろで、ステイレットは脱いだビキニを再び着る。巡る感情は後悔や怒り、ネガティブな物ばかりだった。

「真姫、言い過ぎだよ。謝らないと駄目だよ」

シユンが赤面しながら真姫に言う。一瞬。ステイレットのを見てもしまったからだ。

「……主殿、主殿はさっきのステイレットの見て興奮しましたね？」

「え？いやそんな……」

赤面度が上がりながらシユンは答える。脳裏に焼き付いていた。

真姫はそれを察すると面白くなさそうに言う。

「なら謝るつもりはない」

ピシヤリと言いつける真姫。

「ア！アンタねえ!!」

ビキニを着終わったステイレットは真姫の態度に激昂し組み付こうとする。

「いけません！ステイレット!!」

意の一番にグライフェンが止めようと、轟雷達も続いた。と、その時だった。

「立派な格好の割に随分と子供っぽいんだね……」

朱音がそれを遮って、FAG達より先に真姫に食いついた。

「貴方は……」

彼女が助け船を出すとは思ってなかったらしく、意外そうな顔になる真姫。

「駄々をこねてる子供に見えるよ君」

「……異な事を言いますね。あのF A Gは貴方に嫉妬をしていたのですよ。」

「関係ないね。目の前で口喧嘩なんてやられて見過ごせるわけじゃない。周りを見なよ。皆笑顔だって言うのに君位だよ。ここで不機嫌そうなのは」

「その笑顔が私には非常識に見えるのですよ。まるで自分を人間と錯覚しているかの様だ。私には己の一線を踏み越えたF A Gを看過する事は出来ませぬ。所詮私達はロボット三原則で動く人形でしかない。こんな空気、不快だ。これを作り出しているF A G達も」

「お前……！」

フレズがイラついた調子で食いつこうとする。言いたい放題の真姫の態度や言葉がイチイチ癪に障る。横で見えていた轟雷も同じ。だがそれを朱音が制止する様に冷静に言葉が続ける。

「そうかな？ だったらどうしてこのイベントから抜けないの？」

「それは……」

「私には、君がマスターに甘えられなくて腹を立ててる様に見えるけど？」

「……！」

ピクツと真姫の身体が硬直する。

「ハッキリ聞かせてもらうけど、シユン君の目に関係してるんじゃない？」

「！」

「説明しろとは言わないけど、せめてステイレットちゃんに謝る位はした方がいいんじゃない？」

「真姫……」

シユンが真姫に寄り添う。孤独な少女を慰める様だった。

「……嫌だ」

「真姫！」

「私がただの機械だったら！ きっとシユンは失明なんかせずに済んだから!!」

一転して泣きそうな顔で真姫は叫ぶ。直後、真姫の身体が一瞬光ると同時に、白いサラシと禪の姿は、黒いインナースーツへと変わる。そして蒼いクリスタルを取り付けた緋色の鎧を身に纏う。正に姫武者と言った真姫の武装だった。そのまま真姫は両肩のバーニアを吹かすとその場から逃げる様に飛んでいく。

「くうっ！」

ジェット噴射から巻き上がる砂塵を防ぐべくその場にいた全員が身構える。その隙に真姫はそのまま飛んでいった。

「……無茶するなアイツ」

「そのーごめんなさい！真姫の奴、失礼な事を！」

即シユンがステイレットと朱音に頭を下げた。真姫の事は不愉快ではあつたが、マスターがこうも健気だところちも怒る気は失せる。「いえ、別にいいですよ。なんていうかアイツも色々あるつて事でしょうね……」とステイレットは返す。

「すいませんー皆さんにもー！」

フレズ達にも頭を下げ続けるシユン。謝り過ぎだとさつきはヒカルが指摘したが今度は謝るのも仕方ない。

「いいよ。気にしないでくれ」

「ぼく、また真姫を探しに行つてきますね。バトル大会には出るつもりなので、そこで会いましょう。それじゃー！」

手伝おうかというヒカルの提案をシユンは断るとそのまま真姫を探しに走つて行った。

「一人で大丈夫かな信道君」と心配するヒカル。

「大丈夫でしょ？どうも2人しか踏み入っちゃいけない要素があるっばいからねあの2人」

失明なんて要素のある2人だ。確かに当事者でなければいけないかもしれないが、

「それにしてもさつきは真姫相手に凄かったですね。堂々とした態度、見習いたいです」

轟雷が尊敬する様に朱音に言う。真姫を完全に言い負かした。

「うちのモモコちゃんも天邪鬼な所あるからね。叱る事多いからああ

いう風になっちゃうんだ」

「モモコちゃんのお母さんなんですね。玄白さんは……」

「その、有難う御座いました……」

続けてステイレットが感謝しつつ頭を下げた。

「気にしないで、こんなイベントなんだもの、皆で笑顔の方がいいでしょ？ 私に言うより君のマスターに謝つときなよ。不可抗力とはいえないンタしちやっただから」

「あ……」

にこやかに返す朱音にステイレットは何も言えなかった。自分よりもずっと大人な人だな。と、思いながら。

「……」

真姫のさつき言っていた事を思い返す。朱音が自分をダシにしてデートの約束でもしてる様。そして今の堂々とした態度、ステイレットにとっては再び自分がFAGだという現実を突きつけられてる様だった。

「ステイレットさん！」

そんな感傷に浸ってるステイレットをグライフエンが現実を引き戻す。イベントへの意気込みだろうか。やる気十分と言った所だ。

「貴方の心の傷！ 私にも解ります！ 真姫さんはバトル大会に出ると言っていましたね！ その時に思い知らせればいい事です！ 一緒に戦いましょう！」

グライフエンの表情も真剣そのものだった。彼女もステイレット同様にマスターの事が好きなのだ。真姫にああ言われては彼女も頭に來るといふ物だ。

「グライフエン……そうね！ お互い頑張りましょう！」

「見せつけてやりましょう！ お姉ちゃんの言葉を借りるなら Burning Love! なBattleを！」

と、そこでステイレットにある疑問が浮かんだ。というか気になっていた事があった。

「……あのさグライフエン……、思ったんだけど。アンタのお姉さんの金剛って本当にFAGなの……？」

そしてバトル大会は始まり、滞りなく進む。内容としては海上に設置された円形の巨大なバトルフィールドが設置、マスターは両端にそれぞれ待機し、自分と同じサイズになったFAG達に指示や援護としてサポートメカの操縦等でサポートが可能だ。

「さあ！ 始まりました！ 今回のバトル大会！！ マスターとFAGが同じ大きさでバトルに挑む！ ありそうでなかったこのシチュエーション！ どんな結末があるか実に期待できます！！」

バトルフィールドから離れた砂浜は簡易的ながら観客場となっていた。そこであるウェーブのかかったストロベリーブロードの女性マスターと、全身にセンサーと巨大なレドームを背負ったFAGが横長のテーブルを設置し、椅子に座りながら備え付けたマイクでまくしたてる。

「といってもトーナメントは既にある程度進んでいるからもう中盤なんですけどね。ウフフ」

解説役の女性はおっとりとした調子で答える。おおらかそうなのは一目で予想できる。反面実況役のFAG『レヴァナント・アイ』は……。

「この大会淡々と進むから盛り上がりもクソもねえんだよ……。カビが生えちまうわ……。というわけで急遽参加させていただきました！ 実況はワタクシ！ レヴァナント・アイのアイちゃんと！」

普段ぶりっ子めいた高音で喋る物の、毒舌部分だけやさぐれた低音で喋るアイであった。

「解説はそのマスター。クローディアアリアーセシーボルトでお送りいたしますわ」

「……勝手に解説させていいんですか？」

少し離れた場所で職員のアーキテクトウーマンが数人話し合っていた。何せ非公式の解説実況だからだ。

「まあ盛り上げ役として機能するならいいでしょう……」

「さあ！ アタシらを楽しませるために戦えやクズ共！！ といったこの大会！ 有力候補はどんな感じでしょうか解説のクローディアさん！！」

「そうですねー。もうある程度進んじやったのでもう結構絞り込めますわね。優勝候補としては……」

そう言ってクローディアと名乗るマスターは参加表を指でなぞり、有力候補と見た参加者の部分で指を止めた。

「轟雷さんと輝鎚さんのチームと、例のマガツキさん、そして今戦っている……」

目の前のバトルフィールドで戦っているFAGを見る女、チームの片方、グライフエンが両腕の連装砲を相手のFAG、ヴァイスハイトに向けて発射。

「当たってください!!」

相手のFAGに命中。爆発を上げる。だがその爆炎の中から撃たれたコボルト（ヴァイスハイトの分離形態）が突っ込んでくる。ヴァイスハイトから分離して敗北を免れたわけだ。

「このお！よくもー」

「しまったー」

「グライフエン！ボサツとしてないで!!」

驚きで硬直していたグライフエンを叱責する直後、掴みかかろうとしていたコボルトは脳天から射撃を受けて爆散。フィールド内設定で武装だけが破壊されたコボルトが投げ出されて倒れた。コボルトの敗北となる。

「しっかりしてよね。アンタ格闘ならアタシより上なんだから」

「助かりましたステイレットさん、流石です」

「当然でしょ？鍛えてきたんだから」

どや顔で勝ち誇るステイレットと、グライフエンを見ながらクローディアは確信した。

「あの二人ですわね」

その頃……、観客席から更に離れた場所で観戦しているFAG、白虎型がステイレットの戦いを見ていた。

「……バックレたから、マスター怒るだろうなあ……」

更に別の場所では別のやり取りをしている二人がいた。



「ご主人様。やはり大会を見に行きましよう？いい気分転換になるはずですよ」

「いいよ。所詮気休めだよ……。このイベント自体だって終わってしまえばまた現実に戻される」

「でも私は幻想だっついていい！ご主人様と一緒に思い出を作りたい！」

「フセツト……。そうだな、見に行くか……」

ステイレットにとって因縁の二人、前のマスター達がいた事も、今は知る由もなかった。

ep27 『人間とフレイムアームズ・ガール』（後編1）

今回は少し時間を巻き戻して一回戦から見よう。

『battle start』

試合開始のアナウンスと共に、フレズは飛び上がりベリルショットランチャーを連射する。彼女の今の恰好は猫水着ではなく、いつものスク水と武装に戻っていた。そして照準の先は、

「真姫って言ったなあ！ステイレットの受けた屈辱をボクが晴らす！！」

マガツキの真姫だった。トーナメントでは一回戦で彼女と当たったわけだ。

「フン。頭に血が上って品性がないな」

真姫の冷淡な態度は変わっていなかった。しかもこの大会はFAG同士がペアで組むのが普通だったが、フィールドには真姫の相手は見当らない。後ろのセコンドにシュンはいるが、一人で出ているのだ。

「1人で出ているくせに！余裕か!？」

「その通りだ」

真姫の周囲に蒼色のエネルギーフィールドが発生する。フレズにも搭載されたバリア、TCSだ。そしてランチャーの弾丸を防御。

「フィールドが?!」

「私は防御特化だからな!」

真姫はそう言いながら巨大な火縄銃のようなライフルをフレズに向ける。『オオトリ』というベリルショットカノンだ。真紅の姫武者はそのままトリガーを弾く。

「照射」

オオトリから放たれた大型ビームはフレズを悠々と飲み込むほどに大きい。防御しようとフレズは悩むが、

「避けるフレズ!」

健の指示に素直に従うフレズ。回避した場所を光の濁流が飲み込む。しかしこれで終わりではない。オオトリを発射しっぱなしで真

姫はフレズに狙いを付けつつける。

「追ってくる!?!」

「照射と言った筈だ」

尚も執拗に追う真姫、その横からバイクに跨ったFAGが突っ込んでくる。

「もらったあ!!」

バイク形態のナインだ。機体側面に取り付けられた刃『フィンガーマチエット』で速度の勢いで突破しようとする。

「主殿」

「もう送ったよ真姫」

顔を向けずに確認する真姫、それに答えるセコンドのシユンは、真姫に既に武器を送っていた。空いてる方の手に、軍配とも大剣ともつかない武器が収まる。それを真姫はナインの方に向け発射。オオトリより大型のビームがナインを飲み込む。

「なあっ!?!」

「消えろ」

連装式ベリルショットランチャー『キョウウテン』である。そのまま爆発したナインは素体状態で投げ出されセコンドの場所に転送。

「ナ！ナイン！大丈夫か!?!」

転送されたナインをマスターの長淑直哉が過保護の父親の様に心配する。

「わりいオヤジ、いいところ見せらんかった……」

一発でやられた事にバツが悪そうに言うナインだが、直哉としてはそんな事はどうでもよかった。

「そんな事はどうでもいいんだよ！お前が無事なら!」

「やめとくれ！まだ健とフレズが戦ってんだろうが!」

ナインのその言葉に直哉はハツとした。自分より小さい子が必死になって戦ってるのに、自分はうちの子の心配ばかりだ。反省しながら直哉は健の方を見る。健は聞いておらず必死になってフレズに指示を出していた。

「くっそ！中々息切れしない!」

「マガツキ型は拠点防衛用だ！スピードは無いけど他が高い！だけど一人でなら限界は来るはずだ！」

消費を気にせずに真姫は撃つてTCSで防御を繰り返す。消費量が多いのは目に見えていた。

「侍みたいな恰好しといて砲撃機つてわけ?!アイツの性格同様滅茶苦茶だな！」

「ほぎくなー！」

そう言つて真姫はキョウテンを変形させる。軍配の様なランチャーは弓の様な形状に開き、収束させていた先程とは違いビームを拡散させて放つ。

「なっ！」

「こつちもTCSだ！」

拡散ビームをかわしきれないと健は判断しTCSで防御、そんなこんなで二人の攻防は続く。真姫の射撃をかわし続けるフレズ、程無くして真姫の射撃が尽きた。

「撃たなくなった?!今がチャンスだフレズ！」

そう言つてフレズは転送されたガンブレードランスを構えて突っ込んでいく。

「うおおっ！」

「チツ！短期決戦にするはずが！」

そう言つて真姫は背中の中の日本刀『テンカイ』を二刀流で抜き、交差させてランスを受ける。

「観念しろ！一人だけでボクとマスターに勝てると思うな！」

ブースターの推力を加味してランスの勢いを増すフレズ、押され始める真姫の表情に焦りが出てきた。

「へん！焦ってるみたいだな！大口叩いておいてこれかよ！」

「……ちっ！」

そんな様子には違和感を感じていた。真姫の方のセコンド、シユンが一人で佇んでいた。こんな状況なのに落ち着き過ぎてる。静かすぎる。……と、ようやく隻眼の少年は口を開いて真姫に通信を入れる。

『真姫、我慢の限界だ。ぼくも出る』

「主殿?! いけません! まだ予定では!」

そんな真姫の意見を聞かずにシユンが備え付けのコンソールを操作し始めるのが見えた。健はこの体勢のままでは不味いと判断。

「っ! フレズ! 離れろ!」

「え? 何?... っ!」

次の瞬間だった。左右から機銃を吊り下げたドローンがフレズの左右から飛んでくる。すぐさまフレズに向けて発砲し、不意打ちによって小破のダメージを受けるフレズ、

「ぐあっ!!」

「はああっ!」

そのまま真姫は隙を見せたフレズを二刀流で両断。防御力の低いフレズはその一撃によって破壊される。とはいっても表示されたHPのバーが空になり敗北判定として爆発の演出がたったただけだ。

「わああっ!!!」

『winner マガツキ』

抑揚のないアナウンスによって、真姫の勝利は告げられた。

「フレズ! 大丈夫?!」

転送されてきたフレズに健は心配そうに寄り添う。フレズの衣装は猫水着に戻っていた。

「マスター!... ゴメンね。ボクがもっとうまくマスターの言う事聞いてれば.....」

「気にするなよ。怪我はないみたいでよかった」

「あくまで演出だからね。現実の方に影響はないよ」

そしてフレズとナインはそれぞれのマスターに連れられ、セコンド席から伸びた橋を伝い砂浜の方に戻っていく。出迎えてくれたのはヒカルやステイレット達だった。

「フレズ! 大丈夫でしたか?!」と轟雷がいの一番に聞いてくる。

「轟雷。格好悪い所見せちゃったな。ご覧の通りさ」

「何言ってるんですか! 真姫の方は、あのマスターの横やりがなかったら勝ってた筈です!」

フレズを心配する轟雷とのやり取りに、ステイレットは以前の轟雷を思い出していた。開発班の違いからか対抗意識や拒絶する様な所があった2人だったが、今はもうすっかり仲良しだ。

「でもあのドローン2機がシュン君のサポートメカかしら？」

「……違うと思うよ。チームを組まずにマガツキを1人で出してきたんだ。本気になったら多分もつと凄いい切り札があると思う……」

勘ではあるが健が予想を言う。シュンはオドオドしてるように見えて、ただそれだけの男じゃないと健は思っていた。

『次の試合を始めます。出場チームの轟雷さんと輝鎚さん、そして対戦チームの……』

と、次の試合が自分達だという事に気付く、

「轟雷、次はあたし達だよお」

「ああつと、じゃあ行きましようか。フレズ、仇は打ちますよ。轟雷改装備の力を見せてあげますよ」

そう言つて轟雷と輝鎚はバトルフィールドへと上がっていく。対戦相手は……

「轟雷改10式か。相手にするには面白そうだな」

黒い轟雷がそう言つた。両肩にサブアームを2本ずつ接続し、ミサイルポッドとロングレンジキャノン、グレネードランチャーと重武装を盛つた機種『ウェアウルフスペクター』だ。

「しかも相方は輝鎚。陸戦用のプライドをかけた戦いつてなりそうねえ」

相方のマントを羽織つた白い轟雷が言つた。バズーカ砲を2丁持つてバーニアを追加、胸と腕の装甲が変化したその機体は『漸雷・強襲装備型』。近接戦闘用に調整された轟雷のバリエーションだ。

「轟雷型のバリエーションですか……」

「いっぱいいるにえ」

『battle start』

アナウンスと共に相手の2機が一斉に撃ってくる。武装量として向こうの弾幕にうまく近寄れない。

「くっ！いきなり飛ばして!!」

「轟雷！動き回って相手の弾切れを狙え！」

黄一が指示を出すのが、そこを加賀彦が提案する。

「大丈夫だ。ここは輝鎚に任せて。輝鎚！」

「わかつたゆおマスター」

そう言つて輝鎚に追加装備が転送される。身の丈もある大砲だ。

超長距離砲『叢雲』。

「狙撃で援護するからその隙に近づいてにえ」

「え？輝鎚？そのサイズで狙撃つて……」

「よいせつと」

お構いなしに輝鎚は叢雲をぶつ放す。狙撃と言つてるが叢雲は対要塞用の電磁加速砲である。それが限られたスペースのフィールドで撃つたもんだから……。

『へ？わああっ!!』

スペクターと漸雷、二人の悲鳴が響いた。着弾と同時に大爆発を起こした砲撃は、相手のペアを爆発と余波で簡単に吹き飛ばした。

『winner 轟雷&輝鎚』

「あ、終わっちゃつたにえ？轟雷大丈夫？」

横で腹這いに倒れていた轟雷に輝鎚は聞く。衝撃が来るととつさに伏せていたのだ。

「うう……頼むから次はもつと大人しめの装備で援護してください……」

衝撃が来るととつさに伏せていた轟雷だったが、輝鎚は撃った態勢のままに衝撃波を物ともしていない。輝鎚のマイペースさと型破りっぷりに轟雷は呆れるばかりだった。

「よ・よくやつた輝鎚！」

「……加賀彦さん。どの辺が援護だったんですか……」

「いやー……俺達の方も使うの初めてだったからさ……。ま、まあ勝てたんだからいいじゃないか！」

後方で黄一はそんなツツコミを入れていた。

「さて！次は私達の番ね！いくわよ！グライフエン！」

そして次はステイレットとグライフエンの番になる。

「任せて下さい！グライフエン！頑張ります！」

敵のペアはこれまた高火力の機体。バーゼラルドの砲撃戦仕様。両肩にビームバズーカ『イオンレーザーカノン』を装備したFAGだ。そしてもう片方はカトラス。バーゼラルドのバリエーションで非常にバランスよく纏まっている。

「空中戦用のステイレットx f-3とグライフエンだねー。対照的なFAGだけどんな連携するかなー」

「どっちにしても倒すのみだわ！やる事はいつも通りよ！」

のんびりした口調のバーゼラルド砲撃仕様と、せっかちな印象のカトラスだ。セオリーとしてはカトラスの方が前衛でバーゼが援護役といった所だろうか。

『ステイレット……その、必要な装備あったら言ってくれよ』

「……いいわよ別に、私一人で出来るんだから……」

ヒカルがどうにかコミュニケーションを取ろうとするが、ステイレットの反応はそつけない。ヒカルに胸を揉まれた事と、朱音の一件により、ステイレットは壁を作ってしまった様だ。

「ステイレットさん……何か一言位は……」

「いいのよ！特訓の成果を見せるんだから！マスターの力は借りないわ！」

グライフエンの言葉も突っぱねる。ステイレットは意地になっていた。

『battle start』

アナウンスが始まると共にカトラスはライフルで突っ込んでくる。バーゼと比べて小ぶりを取り回しは改善されていた。

「どっちが強いか！どっちが速いかも勝負！」

カトラスの狙いはステイレットの方だった。

「丁度いいわ！特訓の成果を見せてあげる！」

白虎へのリベンジの特訓をバーゼとしていたわけだ。ここを乗り越えなければ白虎へのリベンジは話にならないとステイレットは考える。右手のガトリングガンを握り、左手のブレードを展開、高機動



の二人は即座にぶつかり合う。

「それじゃあ私はカトラスの援護……といたいけどねー」

砲撃仕様のバーゼはグライフエンに向き直るとレーザーカノンをグライフエンに向けて発射。グライフエンの方は腕に連装砲を複数装備しており、長距離に対応した装備だった。

「あの二人への無粋な真似はさせません！」

レーザーカノンを横に回避するとグライフエンは撃ち返す。

「パワー自慢のグライフエンを砲撃仕様とはね！私も変わんないけどさー！」

相変わらずの間延びした口調だが、力が籠った声になるバーゼ、その上空では二体がブレードとダガーで何度もぶつかっていく。

「このっ！」

ガトリングガンを連射するステイレット。カトラスは腕に装備した、連結ダガーをプロペラのように高速回転させ防御、回転により軽量の盾にしたわけだ。デифエンスロッドという物だ。

「速いね！でも両手しか手数がないんじやこっちの方が有利ね！」

カトラスが距離を詰めながら蹴りを入れてくる。つま先にベリルダガーを取り付けている為に、蹴りも強力な武器となっていた。

「確かに両手しか使えないならね！でもこっちだつて！」

そう言つてステイレットは両肩のブースターを分離させる。これらはブースターであると同時に遠隔操作の出来るドローンだ。それぞれが高速で飛びながら周りをかく乱し備え付けられた機関砲でカトラスを襲う。背中のブースターがまだあるのでステイレットはまだ問題なく飛べる。

「くそっ！こっちのバーニアを狙つて！」

バーゼラルド型は高機動ではあるが防御力が低い。当たり所によつては機関砲も致命傷になりかねない。カトラスはドローンをかわしつつ操作してるステイレットに対応しようとするが、ステイレットは容赦なくガトリングガンで襲う。

「無駄よ！隙を作るのが目的なんだから！」

「!!」

目論見通りだ。ステイレットはカトラスの隙を見抜くと即座にガトリングガンで連射する。

「わああっ!!」

ガリガリとHPを削られ、損傷したカトラスはそのまま墜落する。ステイレットにとって、同じバーゼラルド型が師匠だから。共通したパーツの癖はよく知っている。

「カトラスが!？」

「よそ見とは油断が過ぎますよ!」

バーゼラルドの気が削がれた隙をライフエンジンは逃さなかった。連装砲を一斉射撃。射撃にさらされたバーゼラルドはボロボロになっっていく。

「ぐああっ!!」

2人とも瀕死の状態だった。それを追い詰めようとするステイレットとライフエンジン。

「くっ!思ったよりやるわね!」

「こりやあれしかないね」

『!マスター!あの装備をお願い! (頼むねー!)』

バーゼ系列の2人はそう叫ぶ。切り札があるとステイレットは判断すると近づいてガトリングガンを放つ。

『おいステイレット!スマートガンで狙撃した方が速いからそつちを!』

「うおおっ!」

ヒカルの言葉を見捨ててステイレットはわざわざ近づいてガトリングガンを連射する。着弾による黒煙が相手の2人を包み込んだ。

「やった?!」

「バカ!離れろ!」

「バカとは何よ!……っ?!」

直後、黒煙を突き破って大型のビームが上空のステイレットに放たれる。よけきれず右腕に当たりドローンは破壊。

「ああっ!」

「ステイレットさん!っ!あれは……!」

グライフエンがステイレットを気に掛けるも、姿を表した二人の武装に閉口する。全身に装備されたブースター内臓アーマーのそれは……。

「ゼーゼルファイカール……!」

バーゼラルドの強化アーマー、ゼルファイカールだ。フルアーマーバーゼラルドと言っていいそれは、高機動と重装甲を両立させるそれは脅威と言っていい装備だった。

「こんな早くこの装備を使う事になるとはねー、まあ気を抜けないって事だねー」

「こうなったら仕方ない!本気でいくわよ!」

まず撃つたのはカトラスの方だった。右側サブアームに剣にもライフルにもなる緑色の武器、『ベリルマチエツト』を向けており、射撃モードから斬撃モードへと畳む。そのまま追撃として、それぞれが相手をしていたFAGに向かっていく。

「くっ!!」

ステイレットの方にゼルファイカールとなったカトラスが向かう。内側の両腕には銃剣付きのセグメントライフルが握られており容赦なく撃ってくる。

「それくらい!マスター!スマートガンを!」

セグメントライフルのかわし方は、バーゼとの特訓で培ってきた。相手のカトラスの射撃スキルは特訓相手のバーゼ程ではない。損傷してる状態でもどうにかかわせる。

『ステイレット!でもあんな早く動く相手に!』

「さっさとしてよ!」

『ああもう知らねえぞ!』

ヒカルがスマートガンステイレットに転送する。受け取るステイレットは左腕に装着するとそのままカトラスに撃つ。しかし高速で動くカトラスには難なくかわされる。

「愚かだね!所詮は単発!」

懐に入るとカトラスはライフルの銃剣でステイレットを切り裂く。対応しようにも左腕のブレードはスマートガンを装備するために外

してしまった為にモロに受ける。

「きゃっ！」

一方で地上の方でもグライフェンは圧倒されつつある。

「速いー！」

連装砲で対応しようとするが、ゼルファイカールは高速でグライフェンの周囲をグルグル回りながら射撃で追い詰めていく。

「形勢は逆転したねー！」

そういつてバーゼラルド砲撃仕様は左のサブアームに取り付けられた盾、いや、ワイヤーアンカーを射出。せり出したクローがグライフェンを掴むとバーゼラルドは上空にぶん回して放り投げる。

「っ！うわっ！」

「観念しなよー！」

そのまま上空のグライフェン目掛けてベリルマチェットの射撃モードで狙い撃ちにした。撃たれて爆発を起こしたグライフェンはそのまま墜落。パワードスーツはボロボロとなってしまいもう満身創痍だ。

『グライフェン！』

蓮が悲痛な声を上げる。いつもと違って等身大のFAGがボロボロになるのはかなり痛々しく見えた。

「あうっ！」

ステイレットの方も落ちてくる。それから悠々とゼルファイカール2人が降りてくる。まるで断罪する天使の様だった。

「負けてもクヨクヨするなよー。私達の装備じゃ仕方ないってー」

「そうそう。マスターとの愛が詰まったこの装備だものー」

「代わりに私達が優勝してあげるから、ゆっくり観戦でもしてなよ」

そう言つて2人はベリルマチェット射撃モードを向ける。その時だった……。

「そうはいくかよ!!」

突如戦闘機が2機乱入してくる。片方はハチドリのようなライフルを備えた高速戦闘機、『キラビーーク』、もう一機は左右に大型ブースターを備えた『レイジングブースター』。追加で武器として左右にエ

クスキャンオンという艦砲を備えていた。乱入する2機に戸惑う二人。  
「!?」

2機とも射撃でゼルファイカールの注意を逸らす。

『立てよ！ステイレット！』

「!?マスター?!じゃあもう一機は蓮さん?!」

キラービークを操作してるのはヒカルだった。そしてレイジングブースターを操縦していたのは蓮だ。

「マスター！余計なことはしないでよ！」

『意固地になるな！最初に言ったじゃないか！一緒に戦おうつて！』

「!!それは……」

最初に自分が言った事だ。ヒカルが聞いてたかどうか不安だったが聞いていた様だ。

『お前が大事なのは俺だつて同じだよ！そんなお前がこんなボロボロになって！黙ってみてられるか?!俺は出来ない!』

「マスター……」

『答えてあげたいのは俺達だつて同じなんだよ!』

「っこの！」

鬱陶しいと言わんばかりにゼルファイカール2機はキラービークを、レイジングブースターを撃とうとする。しかしそれをステイレットとグライフエンは許さない。スマートガンで、パワードスーツを分離させたロケットランチャーで、それぞれの相手を撃った。

『っ!?!』

すんでの所かわす2人。仕留められなかったのを悔しがる暇はない。ステイレットはそのまま上昇。カトラスと決着をつけるべく空中戦にもつれ込む。

『俺達も行くぞグライフエン!』

「はい！司令官！」

下から撃つグライフエンに蓮のレイジングブースターは合体、飛んでゼルファイカールに対応しようというわけだ。

「させないね！」

ベリルマチェットの射撃モードで狙い撃つゼルファイカール。着弾

と同時に起こる爆発。だが直後、爆風を突っ切って。背中にレイジングブースターと合体したグライフエンが飛び上がった。きた。

「あつー！」

直後、エクスキヤノンがゼルファイカールが狙い撃つ。大口径のそれは連射出来ないがかなりの高威力だ。不意を突いたそれがゼルファイカールに命中する。

「駄目押しっ！」

そしてグライフエンがロケットランチャーで追撃をかける。それを受けたゼルファイカールはそれが致命傷となった。そのまま爆発、真つ逆さまに落ちていく。

「装備にあぐらを……かきすぎたねえ……」

反省の言葉を上げながらバーゼラルド砲撃仕様は爆発。HP表記は0になり、敗北判定を受けた。そして上空のステイレットの方も連携により形勢は逆転しつつあった。

『ステイレット！コイツを使い！』

そう言つてヒカルはキラビークの側面に搭載されたサムライマスターソードを切り離し、ステイレットに手渡した。スマートガンを手放したステイレットは左手でソードを受け取る。

「OK！」

阻止しようとするカトラスだが、キラビークが攪乱し邪魔をする。ベリルマチェットで狙い撃とうとするが……。

「カトラスー！」

大剣を抱えたステイレットが突っ込んでくる。

「くうっ！負けない！大好きなマスターが見てるんだから！」

そう言つてカトラスは銃剣を振り上げた。すれ違いざまに斬り合う二人、そして……。

「うっ……」

ステイレットの方が渋い顔をしてよろける。カトラスの方は自分の勝ちと確信するが……。

「やった……あれ？」

カトラスはマチェットを取り落とし、真つ逆さに落ちていった。そ

して地面に落ちる前に爆発。負けたのはカトラスの方だった。

「装備は強くても……経験と実力は私の方が上だったみたいね！」

『強力な武装が逆に慢心を招いたかなありや……』

『Winner ステイルレット&グライフェン』

アナウンスの直後に観客席から歓声が響いた。武装差のある2人が逆転での勝利は観客を大興奮させるとい物だ。更にマスターとの連携というのはドラマチックさを上げていた。

「……少しはやる様だな……」

観客席に座りながら待機していた真姫はステイルレットの様子を見ながら呟いた。今の服装は鎧を脱いだ黒いインナースーツだ。

「ステイルレット。やったな」

観客席の方へ戻るFAGとマスター達、ヒカルはどうにか仲直りがしたくてステイルレットの方に話しかけるが彼女は無言のままだ。ヒカルの前を背を向けて歩くステイルレット。

——……やっぱ謝ったほうがいいかな——

胸を揉んだ事がステイルレットにとって、そこまで心を傷付けてしまったんだろうな。こちらが謝るべきかとヒカルは思う。ビンタされてこつちが謝るのは理不尽ではあるが、今はステイルレットの笑顔が見たかったから。

「なあステイルレット……胸の事だけど……ゴメン」

砂浜についた時にヒカルは謝るが……、

「ストップよ。マスターは悪くないじゃない……」

ステイルレットは振り向きながら言う。その顔はさつきまでの不機嫌な表情ではなかった。

「お前……でもさ」

「マスターは私が恥ずかしい想いをするのを助けようとしたんでしょ？……結果的にあんなんなっちゃったけどさ。マスターの優しさは解ってるつもりだから……」

「ステイルレット……」

「その……、ゴメンなさい。……私の方が謝るべきだったのに……」  
頭を下げるステイルレットにヒカルは安心する。

「気にすんなよ。こうして勝つ事も出来たんだしさ」

「うん！……でもさー、いきなり掴んでくるんだもん。……そんなに私の裸、人に見られるの嫌だった？」

と、いたずらっぽく笑うステイレットにヒカルは赤面する。少年の脳裏に浮かぶのは一瞬見えたおわん型のステイレットの……。

「な！んなこと！」

と、そんなやり取りを轟雷達は遠巻きに見ていた。祝福の言葉でもかけようとしたが、これでは水を差す様な物だった。

「ステイレット……。のろけちやつてますねー」

「同意。げっぷ。ご馳走様」と見ていたアーキテクトが言う。彼女の体調は回復していた。そしてほぼ全員が同じ様な感想だった。

「ええ?!なにになに?!何か食べ物あるのお?!」

「そういう意味じゃないよ輝鎚」と加賀彦。

——ヒカル……?大ききの所為かな。あれじゃまるで恋人じゃないか……——

唯一、見ていた黄一は、そんな2人のやり取りに違和感を感じていた。マスターとFAGで大きさが同じだという理由で結論つけたが……

そして……その後もバトルは続いていった。勝手に実況解説を始めた二人を加えて更に大会は白熱していく。

『さあ！準決勝も決着はつきそうです！果たして勝者は誰の手に！そして番狂わせはあるか！』

ステイレットの方の準決勝はもう決着はつきつつあった。

「これで！」

「ぐああつ！」

ステイレットの撃ったガトリングが相手の黒いステイレット型に命中。準決勝の相手は同じステイレット型だった。足が特徴的な『クファンジヤル』という陸戦用のステイレットだ。

『ああつとクファンジヤル撃破！同じステイレット型同士のバリエーション対決！果たしてスーパーステイレットはx f | 3に勝てるの



か!?!」

「よくもクフアンジャルを！もらったわ！」

その真後ろからもう一機のステイレットが両腕のダガーを振りかぶって襲う。両腕にACSクレイドルという複合兵装を装備している。重武装型の『スーパーステイレット』というバリエーションだ。ちなみに色は白がかったグレー。

「なんのー！」

ステイレットは相手の腕を掴むとブースターの勢いを利用して、一本背負いを仕掛けた。

『おおっとーこれは柔道だ！』

「なあっー！」

投げられたスーパーステイレットに対し、ステイレットは離脱ついでに左腕の2連装ミサイルをお見舞いする。その爆発にスーパーステイレットはHPを0にされて敗北する。

「そんなあっー！」

「同じステイレットなら負けられないのよ！」

『winner ステイレット&グライフエン』

『これは見事です！決勝進出はステイレットとグライフエンチームだ！』

ゼルフイカールの後は割とスムーズに試合は進んだ。準決勝は同じステイレット同士の対決となり、結果は御覧の通りだ。

「凄いなステイレット！バーゼから柔道の技まで習ったのか！」

「まあね。バーゼの奴色んな事知ってるわ」

驚くヒカルにステイレットは上機嫌に答える。

「凄いですねステイレット！同型相手を圧倒して」

「同型対決だったからね。ついムキになっちゃったわ。……それより轟雷、次はアンタがあマガツキと戦うんでしょ？……頑張ってるね」

心配するステイレットに対し、轟雷はこう答える。

「大丈夫ですよ。彼女には言いたい事が沢山ありますから、それに私はステイレットのライバルですからね、決勝は私が相手でなければ盛り上がりません」

「轟雷、気を付けてね。アイツの手の内はまだ全部見せてないよ」

フレズが心配する。自分が大敗を決した。その相手と轟雷が戦う。それ以降、真姫はほぼ単体で駒を進めていた。

「フレズ、でもフレズがある程度手の内を見せてくれましたから、やり易くなってる筈です。行きましょう！輝鎚！加賀彦さん！マスター！」

そう言つて轟雷はフィールドへと向かう……。

——そう……もし私が負けたら、向こうの手の内は全部暴かないと……ステイレットが少しでも戦いやすくなる為に……、つて、何弱気になつてるんでしょかね私は——

こう思いながらも何かしら戦う結果を残すと誓う轟雷だった。

——  
対峙する3人……。轟雷と輝鎚、そして真姫。

「準決勝まで来るとはな、お前たちがこれ程の力を秘めていたとは思わなかったぞ」

「どうしても倒したい相手がいましたね。そして……あなたには言いたい事も聞きたい事も山ほどある」

さつきまでとは打つて変わつてだ。轟雷の表情は真剣そのものだ。

『battle start』

「戦いの時に余計なお喋りなどする気はない！」

そう言つて真姫はオオトリを転送し撃つ。

「輝鎚！」

「よいせつと」

輝鎚の後方に隠れる轟雷、輝鎚はボディからキラキラした物を散布。直後、オオトリのビームを輝鎚は直撃を受ける。が、ダメージを受けてる様子はない。

「効いてない?！」

『あのキラキラ……金属粉だ！』

シユンの指摘に真姫はハツとする。輝鎚の装備『試作三式対光学障壁』だ。散布した金属粉をトサカの磁場で障壁を作る疑似的なバリア。

「疲れさせますよ！輝鎚！」

飛び出した轟雷は真姫に向かって右腕の大型レールガンを撃つ。真姫はTCSで防御。

「轟雷、あたしに任せてえ」

1回戦同様に叢雲で撃とうとする輝鎚、敵もそれを阻止しようと輝鎚の左右にドローンが飛び出した。

「来ると思ってきましたよー！」

すかさず轟雷はキャタピラを使いターンをかける。反転と同時にロックオンをかけると背中 of キヤノンとレールガンを発射しドローンを破壊。真姫は背を向けた轟雷を撃とうとTCSを解除。

「いや待ってたよおー！」

そこをすかさず輝鎚が真姫を叢雲を発射する。反転した轟雷は巻き込まれまいと一目散に輝鎚の方向へダツシュ。

「！不覚！」

TCSを今貼ろうにも間に合わない。あれを受けたら自分もただでは済まない。……その時だった。巨大な影が真姫の前に飛び出した気がした。そのすぐ後に叢雲は真姫の所に着弾し大爆発。

「わわっ！」

衝撃で飛ばされた轟雷は後頭部を抱えて伏せた。そしてすぐさま立ち上がると着弾地点ヘレールガンを構えて警戒。

「やったんでしようか？」

「ううん？何か変な影が見えたよお。何か来ると思うよお」

同じタイミングで、轟雷側の全員が何かに気づいた。爆発の黒煙からさっきの影が上空に飛び出す。太陽を背にしてハッキリと姿は見えないが、上空で静止して攻撃しようとしているのは見えた。

『っ！離れろ！2人とも！』

加賀彦の慌てた声が響いた直後。上空にいたそれは、巨大な炎を吐き出す。炎は轟雷達をフィールドごと包み込んだ。

「なっ！うわああっ!!」

「きやああっ！」

突然の攻撃に防御らしい防御も出来ずに攻撃にさらされる2人。

「ビームじゃない……火炎放射?!……ドローンと火炎放射……まさか敵は……」

撃ってきたそれは真姫を守る様に降り立ち正体を現した。姫武者の前に……龍がいた。機械で出来た真っ赤なワイバーン。高さはFAGとそう変わらない。しかし横幅は巨大な翼により寝そべったFAGの3倍はあるだろう。真姫に合わせるかのような色の深紅の龍……それは……。

「あれは……アグニレイジ!!?」

『あつとこれは大きい!ヘキサギアのアグニレイジだあ!!解説のクローディアさん!FAGではない機種ですがこれはレギュレーションとして大丈夫なんでしょうか?』

『そうですねー。メーカー的には大丈夫でしょう』

ヘキサギアと呼ばれる機種のアグニレイジと呼ばれる大型機。それがシユンの使用するサポートメカだった。アグニレイジは機械にも関わらず「グルルル……」と獣の様なうめき声をあげる。

「レイジを引つ張り出すとは流石ですね。でもぼくだって男なんだ。……怯えてる場合じゃないから覚悟してもらいます」

それを操縦する、オドオドした印象のないシユンが呟く。直後アグニレイジは戦える事に歓喜するように、巨大な咆哮を上げた……。

ep28 『人間とフレームアームズ・ガール』（後編2）

『まず口部の収束性雷火光条インペリアルフレーム。頬の多目的2連レーザー砲。更に尻尾の2連プラズマキャノン。さっきの輝鎚さんの一撃を防いだエネルギーフィールド、その他接近戦用のクロール含めて……うん！ムリゲーだな勝つの！』

実況のアイがセンサーを使い増援で現れたアグニレイジを解析する。実況とはいえ他人事、故にアグニレイジとの武装差、性能差的にどう考えても轟雷達に勝ち目はないと判断しバツサリな感想を告げる。

「ちよつと！何勝手な事言ってるのよ！」

実況席の横でステイレット達がヤジを飛ばすがアイ達は意にも介してない。

『しかし運営側、マスターがサポートメカでの出場を許可していたとはいえ、あれだけ大型の機体はいいんでしょうか？解説のクロードイアさん』

『そうですねー。真姫さんが1人で出ている事を考えると、いいハンデという事になるんじゃないでしょうかー』

『この辺適当極まりねえなー運営の連中……。さあて轟雷チーム！この逆境をどう切り抜けるのか!?!』

実況は轟雷達には届いてない。仮に届いていたとしても、この状況でツッコミを返せるだろうか。轟雷達はインペリアルフレームを食らいながらもなんとか立ち上がる。

「ほう、今でも致命傷にはならないか」

真姫はアグニレイジの右翼の付け根に飛び乗る。

「……当たり前ですよ！それにしてもこんな隠し玉があったとは驚きですね。まるで狩りゲーの主人公になった気分ですよ」

轟雷は空元気ではあるが、自分が勝つと間接的に告げる。

「ほげけー」

真姫が叫ぶ時、轟雷は背中中の滑腔砲をアグニに向けて撃つ。狙いは眼前の真紅の翼竜、だがアグニレイジは機体周辺を蒼いエネルギー

フィールドで覆い防御。当然真姫もその中にいる。

「エネルギーフィールド?!あれで叢雲を防いだんですか!」

『マガツキとほとんど同じはずだ!何度も使えるもんじゃない!』と黄一。

「轟雷!エネルギー切れ狙うよお!」

その横で輝鎚が叢雲を向ける。

「させるか!」

シユンはレイジのバリア解除、直後に真姫がオオトリで視界右側にいた輝鎚を、レイジは両頬のレーザー砲で視界左側にいた轟雷に撃つ。

「ちっ!」

キャタピラで高速移動をかけて回避する轟雷。轟雷改のアーマーは光学兵器に耐性が追加されてるが、むやみに受けないにこした事はない。一方でオオトリのビームは叢雲に当たり爆発。重装甲な分通常スピードは非常に遅いのが輝鎚だった。

「わあっ!」

『輝鎚!大丈夫か?!』

加賀彦の慌てた声が響くが帰ってきた答えは元気な声だ。

「大丈夫だよお!叢雲がなくなるとも!」

輝鎚は装備を手持ちのチェーニングガンに持ちながら迎撃を行う。

『破城鎚か専用ブースターを転送しようか?!』

破城鎚というのは輝鎚専用の大銃だ。これまた身の丈以上のサイズがあり対要塞用という極端な装備である。

「大丈夫!」と答えながら輝鎚は撃ちつつける。

「余裕だな!」と、真姫は輝鎚にキョウテンを向ける。輝鎚にかわせる様な機動力はない。

「そう何度も受け止められるものか!」

「いけません!輝鎚!」

轟雷は叫びながらレールガンで真姫を阻止しようとする。しかし轟雷の方はアグニレイジが頬のレーザー砲で轟雷を仕留めようと撃ちつつける為、かわすの精一杯だ。そこへ加賀彦の叫びが響く。

『輝鎚！いつそ突っ込め！』

「!!」

輝鎚はすぐさま背部のブースターを点火させた。輝鎚はロケットの様な噴射で真姫に突っ込んでいく。発射寸前だった真姫と輝鎚は衝突し、お互いが大きく弾け飛びバウンド。

「ぐああっ?!」

「ふわああっ?!?!」

『ああっと！輝鎚！避けられないと判断するとマガツキに突っ込んだー!!』

『輝鎚に搭載されたショックブースターですねえ。重量級の輝鎚を強引に動かす為の武装ですー』

輝鎚はアグニの右側面に落ちて、真姫はアグニの真後ろに落ちた。

「真姫が?!」

シユンはどうにか援護しようとするが轟雷の相手で手一杯である。

「これでえー」

上半身を起こしながら輝鎚はチェーングンのミサイルを撃つ。フィールドで防がれると思っていたが、ミサイルは吸い込まれるようにアグニに命中。

「うっー」

爆発に驚きの声を上げるシユン。輝鎚の攻撃に気付いてなかった様だ。

『……対応が遅い?』

セコンド席の方で加賀彦が異変に気付く。

『そうか！信道君の右目！』

サポートメカを操縦していても、視界はパイロットの視界頼りだ。そしてシユンは怪我で右目が見えてない。

『轟雷！右側だ！信道君の視界は右が見えてない！』

「右?!そうか!」

轟雷は同時に真姫がアグニレイジの右翼でずっと撃っていたのを思い出した。直後シユンのアグニレイジはエネルギーフィールドを貼って防御態勢に入る。焦ってる様にも見えた。

「迎撃をしない?!迂闊です!」

この隙に体勢を立て直そうと轟雷は右に回り込もうとする。だが……、

「迂闊なのは……どっちだと思ってる!」

直後真姫が二刀流で切りかかってくる。

「うわっと!」

すんでの所でかわす轟雷、砲撃装備の崩天から通常のマガツキ装備に真姫は戻っていた。姫武者の猛攻は止まらない。

「私の逆鱗に触れたなあ!!」

今までにない怒りを見せながら少女は切りかかる。轟雷はナイフで対応しようとするが、二刀流の剣捌きは非常に素早い交戦権を真姫に与えていた。

『あぁとマガツキ!凄い気迫です!!』

「射撃だけでなく接近戦も得意とは……!」

「私が射撃一辺倒の女と思ったか!!」

「そうやって怒るって事は!やはりあなたはマスターが好きなんです  
ね!」

「っ!仕えるのは当然だろう!そんな安直な物ではない!」

そう言って真姫は刀を横に薙ぎ払い轟雷を弾き飛ばした。

「あうっ!」

次に真姫は輝鎚の方に斬りかかる。……それをセコンド席で見ていた黄一は安直な指示を後悔する。

『しまった!トラウマに触れたから……』

『悔やんでる暇はないよ黄一君!目には目をだ!』

加賀彦はそんな状況を見ながらも冷静にコンソールを操作する。黄一の方も「そうですね」と自分を落ち着かせながら続いた。

そしてフィールド内では……、

「チェストオツ!!」

轟雷同様に真姫は輝鎚を弾き飛ばした。チェーンガンが弾かれて攻撃手段が無い。

「わぁっっ!!」



倒れこむ輝鎚に、真姫はとどめを刺そうと刀を振り上げた。アグニレイジを直接攻撃した所為だろうか。

「祈れ！」

——やられる?!——

輝鎚が覚悟した時だった。真姫の真後ろから轟音を上げてフィールド内に突っ込んでくる物が二つ。振り向いた真姫は驚きの声を上げた。

「ムーバブルクローラーとブリッツガンナーだ?!」

お馴染みのギガンティックアームズ『パワードガーディアン』の分離形態だ。クローラーの方は加賀彦が操縦しており、ブリッツの方は黄一が動かしていた。

「くっ！」

機銃を撃ちながら突っ込んでくるクローラーに真姫は回避、急停止するクローラー、加賀彦はすぐさま指示を出す。

『乗れ！輝鎚！』

「解ったよおマスター！」

離れた場所では既にブリッツに乗った轟雷がアグニレイジに猛攻をかけていた。一斉射撃にレイジはフィールドで防御するが、これに輝鎚とクローラーまで加わる。このままではジリ貧だ。

「主殿……私が盾になります。インペリアルフレイムのチャージを」

『真姫?!』

フィールドを貼っていたシユンは真姫の提案に驚く。一身に攻撃を受けると言うのだ。

「このままでは押し切れます！私ならTCSとこの装甲で暫く耐えられます！」

『駄目だよ！あくまでこいつは君のサポートの為のヘキサギアなんだよ!?君が盾になつたらどつちが!』

「……シユン、せめて今位はマキに盾にならせてよ……ここでもあなたを守れなかったら、マキ……何の為に……」

凜とした表情が崩れ、真姫は泣きそうな表情になる。

『真姫……無理はしないでよ……』

「っ！言われずとも！」

了承と判断すると真姫はいつもの調子に戻った。アグニレイジの前に躍り出るとTCSで蒼いバリアフィールドを張る。直後、アグニレイジはフィールドを解除し、インペリアルフレイムのチャージを開始、

『防御を解いた?!』

「捨て身ですか！でもこのまま押し切ります!!」

全ての火器を撃ち込みながら轟雷達は強引に突破しようとする。

「やってみせろお！私はシユンを守る！今度こそ!!」

姫武者の叫びと共に蒼い障壁は一層輝き全ての攻撃を受け止め続ける。暫く真姫のTCSは続いたが、次第に切れかけた電球の様に不安定な輝きとなり、そしてエネルギー切れとなった。TCSは解除。

「エネルギー切れ!?!」

『真姫！下がれ!』

真姫は両腕を交差させ防御態勢を取る。そしてここから動くつもりはなかった。

『あぁつとマガツキ!!TCSが切れてもどける気配がないー!この判断がどう出るかー!』

「主殿！フルチャージでなければ勝てません！それまでは!!」

「敵ながら天晴れつて奴ですか！真姫！何故そこまでして！」

疑問はあるがこの状況に同情をするつもりは一切ない。轟雷達は真姫に、後ろのアグニレイジに一斉射撃を続ける。攻撃にさらされる中、姫武者の鎧が、真紅の龍の装甲がはじけ飛んでいく。暫くして……。

「く……!」

煙の上がるフィールドの中、真姫はその場に倒れこんだ。ほとんどの鎧は破壊され、ほとんど汚れた素肌とインナースーツが見えていた。残りのHPはもう僅かだ。

「勝った……?」

「いや……」

黒煙の中、紅龍の放射状に開いた顎が輝いた。真姫共々ボロボロに

なりながら、まだ生きている。アグニレイジの手は倒れこむ真姫を受け止めると、フルチャージのインペリアルフレイムを発射させた。最初とは比較にならない勢いの炎がフィールドを覆い尽くした。

「貴方達の……負けだ!!」

迎撃しようとする轟雷達の前に地獄の業火はフィールドを覆い尽くす。

『ワアアアッ!!!』

『轟雷!! (輝鎚!!)』

青空の下、似つかわしくない少女達の悲鳴と、マスター達の絶叫が木霊した。共に全員のHPがあつという間に減らされていく。瞬間にお互いのHPは0となり、このバトル、真姫とシユンの勝利である。

『winner マガツキ』

『決まったあぁっ!! 一時はどう転ぶか解らなかったこのバトル!! 逆転で勝者はマガツキだぁぁっ!!』

『この勝負、何気にマスターとFAGとの信頼関係で決まったと言つていい勝負でしたねー』

「轟雷!」

準決勝が終わった轟雷達にステイレットとグライフエン達が駆け寄ってくる。

「負けちゃいましたよステイレット……」

「大丈夫だった? 炎で焼かれたけど……」

「問題ナツシングですよ。バトル中のダメージは所詮バーチャルでしたから」

「とはいえあれだけの炎で焼かれるのを見ると無意味とはいえ心配になつてくる。」

「心残りは言いたい事言えなかった事ですかねー」

「何が言いたかったのよ」と聞くステイレットに轟雷は「内緒です」とはぐらかした。

「とはいえ収穫はありました。これで少しは戦いやすくなつたはずで

す。ステイレット……後は頼みます」

「轟雷……任せて」そう言いながら2人はすれ違う。そして決戦のフィールドに向かうステイレット達だった。

『さあ……このイベントも！もはやクライマックスとなりました!!相対する少女達！ステイレットとグライフエンのコンビネーションが孤高の剣士を粉碎するか！マガツキとアグニレイジの武装が二人を圧倒するのか！見どころであります!!』

「まさかお前と決勝で当たるとはな。偶然とは恐ろしい物だ」

「アンタ……その様子じゃマスターとは仲直り出来たみたいじゃない」

挑発する真姫にステイレットは皮肉とも心配とも取れる言葉を投げかける。真姫は言葉に詰まった。

『おかげさまで、真姫も少しは機嫌を直してくれましたよ』

「主殿!!」

にこやかに答えるシユンに真姫が慌てて止める。アグニレイジは既にフィールドに待機していた。どうにもこれから激闘をする関係とは思えない。

『ゆるいなあ』とヒカル。それに蓮が『程よく緊張がほぐれていいじゃないか』とフオローを入れた。

『battle start』

そんなやり取りもそこそこに、バトルが、決勝戦が始まった。

『いよいよ始まりました！漫才の様なパフォーマンスを経て！どのような激闘となるか実に楽しみです！しよっぱい試合見せんなよ!!』  
アイの血気盛んな実況だがステイレット達はお構いなしに、真姫達に突っ込んでいった。

「行くわよ！グライフエン！」

「頑張ります！Weigh Anchor！」

ステイレットは空から、連装砲とマルチプルシールドを装備したグ

ライフエンは陸から一斉に火器を向ける。狙うのは真姫でなく彼女が乗っているアグニレイジだった。放たれた射撃は真紅の龍に向かう。シユンはアグニのフィールドを発生させて防衛。

「最初から主殿のアグニを狙うか！相手は私だろうが！」

キョウテンを弓状に変形させて発射、空のステイレットと陸のグライフェンを同時に片づける算段だろう。横殴りの豪雨の様な拡散ビームが二人を襲う。

「つつー！」

グライフェンはマルチプルシールドで防衛。上空のステイレットは旋回しつつ回避、そこをいつも通り二基のドローンが機銃で狙う。

「しまったーなんてね！」

ステイレットは躊躇なく両肩のドローンを切り離し、アグニレイジの赤いドローンにぶつめた。両機がひしゃげると同時に爆散。だがこの程度は予想内の真姫とシユン。

「フーン！推進力が落ちた状態で！」

真姫はオオトリをステイレットに向ける。しかしそこへヒカルのキラークが割って入る。

『やらせるか！』

「何?!」

撃ってきたキラークのライフルに真姫はTCSで防衛。フォローしようとするシユンだが、加えてアグニレイジの方も蓮のレイジングブースターとグライフェンの連携でフィールドで防御せざるを得ない。

『あぁつとーこれは意外！マガツキが防戦一方になっているぞ！』

『マスターさん達がステイレットさん達の方をフォローしながら攻めてきますからねー。迂闊に動けないでしょう』

「チツ！連携で攻めてきて！」

『跳ぶよ！真姫！』

真姫の返事も聞かずに真上に跳躍するアグニレイジ、突然の動作に驚くステイレット達、

「跳んだ?!」

「上空からなら避けられまい!」

最初に轟雷達がやられたパターンだ。インペリアルフレームでバトルフィールドを薙ぎ払う。フルチャージではないが痛手は与えられるという判断だ。

「燃える!!っ!?!」

インペリアルフレームを発射するアグニレイジ、その直後だった。左右をキラークが掴まったステイレットが、レイジングブースターに乗ったグライフェンが通り過ぎる。炎の中を突っ切って更に高く上がっていった。

『ステイレットチーム!アグニレイジより高く飛んだ!これではインペリアルフレームも空振り!いや空焚きだあーっ!』

「おのれえっ!」

真姫とシユンはどうにか撃ち落とそうと、キョウテンとオオトリで、そしてアグニレイジの尻尾に取り付けられたプラズマキャノンを向けて撃ち落とそうとする。

「うっ!」

真上の太陽の直射日光に真姫は顔をしかめる。逆光になったステイレット達は良く見えなかった。

『全機!撃てええっ!!』

蓮の号令にステイレット達は真下のアグニレイジに一斉射撃、真姫はTCSで防御するも、攻撃範囲が広すぎる為に防ぎきれない。攻撃にさらされたアグニレイジは至る所で小破していく。インペリアルフレームの発射体勢だった所為でフィールドが使えなかったのだ。

『うわああっ!!』

「シユン!?シユンーッ!!」

そのまま落下するアグニレイジと真姫、追う様にステイレットとキラークが追撃をかけながら降りてくる。アグニレイジは対応しようにもエネルギーフィールドが展開できない。さっきの攻撃で頭部中央の角が破損していた。そしてそこがエネルギーフィールド発生装置だったのだ。

轟音を立ててフィールドに墜落するアグニレイジ。

「轟雷達のおかげで押す事ができるわね!!」

「負けた者を利用してようやく出来た事を!」

キョウテンとオオトリを向ける真姫、その時だった。

「だからこそっ!!」

真姫の真後ろ、つまりアグニレイジの背中に轟音を上げて何か落ちてくる。振り向いて火器を向けるが、大型のサブアームがオオトリとキョウテンを掴むと、グシャツと音を立てて握りつぶした。声の主、グライフエンだった。

「犠牲は絶対に無駄にさせません!」

「グライフエン!」

『念には念とばかりにグライフエン!アグニレイジの真上に投下!これは完全に流れはステイレット達に傾いているーっ!!』

「ああ惜しいです!武器だけでした!」

「シユンの上に乗るなっ!」

真姫を掴めなかつた事に残念がるグライフエン、激昂した真姫は二刀流で切りかかってくる。剣捌きにグライフエンはシールドで受け止めるが、シールドを切り落とされる。

「なんて切れ味!」

『グライフエン!離れろ!』

「司令官!?了解です!」

蓮のレイジングブースターがエクスキヤノンでポロポロのアグニレイジを狙う。回避するグライフエンを確認するや否や撃つ。案の定真姫が防御に入って受け止めた。

『やっぱりな!アグニレイジは自分より優先して守ろうとする!』

「それがどうした!今度こそ主殿は私が守る!」

とはいえもうアグニレイジは限界と言っている状態だ。あくまでレイジの立場は真姫のサポートメカである。ここで真姫の負担になってしまつては本末転倒だ。

『真姫!もうレイジは限界だ!離れて!』

「嫌です!」

『所詮こいつはサポートメカだよ！ここで君がやられたら意味がない！』

真姫はTCSで必死に防衛に回る。

「いや!!」

必死になる真姫、それを容赦なくステイレット達は猛攻で押しつけてく。

——何故、そこまでしてマスターを守る事に固執するんですかあなたは……——

それを見ていた轟雷は必死すぎる少女に違和感を感じていた。轟雷の言いたかった事。マスターと壁を作ろうとする少女がこのイベントに出ている事に。

と、そうこうしてる内に真姫のエネルギーも底をついたらしい。TCSが切れる。

「あつー！」

『息切れになった?!今がチャンスだ!!』

蓮の指令で全ての火器が姫武者めがけて放たれた。

——受けたとしても、アグニレイジを守りながらでは……負けるのか?——

諦めが真姫の心を覆い始めた。その時だった。

パシッ!

「えっ?!」

棒立ちだった真姫を誰かが横に突き飛ばした。シユンのアグニレイジだ。真姫を小突く様に射線上から外し、代わりに自分を置く事になった。当然そうなるのはアグニレイジは集中砲火に晒される事になる。砲撃の雨に晒された真紅の龍は砕けていき、原型を留めない。

「嫌……シユン……シユン……シユン……!!」

『真姫……駄目だよ。自分を粗末にしちゃ』

「また!また私は!」

『いいんだよ。君がいなくなる方がぼくは辛いから……』

そう言った直後だった。ステイレットのスマートガンがアグニレイジの頭部を撃ち抜く。



「あ……」

真紅の龍はその場に倒れこみ爆散した。それと同時に砕かれたパーツがフィールドに散乱する。

『これは！まさかの展開!!連携でアグニレイジ撃破！このまま決めるかステイレット達!!』

『精神的にもマガツキさんはダメーシがあるでしょうからねー。流れは完全にステイレットさん達ですねー』

崩れ、燃えていく真紅の龍。見ている事しか出来なかった真姫は絶望した様な顔で絶叫を上げた。

「ああ……あああっ!!」

「サポートメカを失っただけで大げさね！次はアンタの番よ！覚悟なさい！」

スマートガンを向けるステイレットに対して真姫は、怒りの形相で睨み返す。

「お前か……？撃つたのは……」

ゆらつと立ち上がりステイレットに向きなおると、アグニレイジの砕かれたパーツ、両翼がエンジン部ごとが浮かび上がり、背中のパーツをパーズした真姫の背中に接続される。不釣り合いなほど大きい龍翼が姫武者に追加された。

「合体した?!」

エンジン部から発する音は、真姫の怒りに呼応するかのようだった。

「撃つたのはステイレット……お前かあっ!!?」

爆音を上げながらステイレットに凄い勢いで突っ込んでくる真姫、

「速いー!」

「うわああっ!!」

回避を取ろうとするステイレットだが、それを許さない勢いの真姫が切りかかってくる。とっさにスマートガンを盾にして防御するステイレット。振るった刀がスマートガンを切り裂き、次に薙ぎ払おうと横に刀を振るう。左腕のブレードで受けたステイレットを後方に吹き飛ばした。

「あぁっ！」

『ステイレット(さん)！』

ヒカルやグライフェンが援護に入ろうと撃つが……

「フーン！」

真姫はTCSで防御。

『これは！合体したマガツキのTCSが復活してるぞー!!エネルギー切れだったのに何故?!』

『合体した事でアグニレイジの余っていたエネルギーがマガツキさんに回されたという事ですねー。さっきエネルギーフィールドが使えなかったのが今になって使える様になったという事だと思われまー。加えて今の真姫さんには消費の大きいオオトリとキョウテンが無いですからねー。エネルギーはTCSに集中出来ると思いますー』  
『ステイレット！使え！』

ヒカルがキラビークに吊るしていたサムライマスターソードを投下してステイレットに渡す。阻止しようとする真姫だがグライフェンとレイジングブースターが引き続き撃ちながら邪魔をする。

「サンキュー！マスター！」

すぐさまステイレットはソードを分割し二刀流のスタイルに。

『タイムンに付き合う必要はない！このまま押し切るぞー！』

「了解です！」

真姫の速度は非常に速い。しかし現状は四対一となっている。TCSで防御をしている真姫だが、ステイレットとそれを援護しながら舞うヒカルのキラビークに、そしてグライフェンと蓮のレイジングブースターに、それぞれの連携に徐々に押されていく。

「くうっ！キョウテンとオオトリを無くした影響がここまで！」

射撃を受けながら空中で静止した真姫は苦虫を噛み潰したような顔で苦戦していた。

「もう観念なさい！私とマスターは一線を越えてなんかないわ！でもずっと意地張ってるアンタよりかは！ずっとずっと……強い絆があるんだから!!」

「っ!!」

心を抉られた様に胸中に痛みを感じる真姫。同時に表情も青ざめる。ステイレットは砂浜でのお返しとばかりに言い続ける。

「アンタがそうやって意地を張ってるのが！シюн君にどれだけ迷惑が掛かってるか解つてr『真姫の気持ちも知らずに言うなあっ!!』  
『!?!』」

一際大声がステイレットの言葉を遮る。声を上げたのはセコンドにいたシюнだった。

『真姫はな！真姫は！ぼくを守ろうとしたんだよ！ぼくを庇ったんだ！結果ぼくの右目はこうなって！真姫はずっとその事で自分を許せないでいたんだ!!』

「え?」

オドオドしたシюнからは想像もつかない様な叫びと形相だった。言葉を遮られたステイレットは呆気にとられる。何かしら重い理由はあると思っていたが、いざそう言われると戸惑ってしまう。

「っ!?!隙ありだ!」

「くっ!?!」

真姫は隙を逃さない。とっさに剣を受けて鏝迫り合いになった真姫とステイレットは膠着状態となる。

「やはり私達はロボットの範疇を越えられない！必要以上のマスターとの距離感を縮めようとするのは反吐が出る!!身の程を弁えろ!!」  
「なんですってえ!!」

『……なら何故！真姫はマスターを拒絶するのですか!!』

『っ!?!』

実況席から轟雷の声が聞こえた。その場にいた全員が実況席を見る。見れば轟雷がアイからマイクを奪っておりボリューム最大で喋っていた。

「うおい！アタシのマイク!!」

「ごめんね。終わったら返すからにえ」

マイクを突然奪われた事に抗議するアイだが、輝鎚に羽交い絞めにされて手足をバタつかせるしか出来ない。

『このイベント!!不思議でした！マスターとFAGが皆仲良しなのば

かり!! 貴方だって! 本当はマスターと仲良しなのでしよう!?! 何故ですか! 何故ここまでしてマスターとF A Gとの間に壁を作りたがるんですか!!」

そう言われた真姫は、ぎりつと歯を一層強く食いしばった。

「……教えてやる」

『真姫!!』

「言わせて!!……ある所に一人の男の子と……F A Gがいた……」

止めようとするシュンを振り切る真姫、昔話をする様な口調で真姫は話始める。内容は真姫の事だとその場にいた全員が理解していた。

「仲の良い二人だった。一見頼りない男の子だったのに芯の強くて優しい子。一緒に暮らしてる内に……F A Gはその子の事が……好きになった」

再びステイレットを弾き飛ばす真姫。距離を取りながら真姫は話を続ける。

「そして……F A Gが男の子に好きだって言ったら……男の子も好きだって言ってくれた。……禁忌だって解っていた。他の誰にも伝えられない二人だけの秘密。でも愛があればそんな壁だっていつか乗り越えられる。そんな甘い考えをF A Gは持っていた……」

警戒しつつ淡々と真姫は話続ける。だが次第に、声に悔しさを混ぜた様に低い力の籠った声になっていく。

「だが……運命の日が来た。あの日、男の子とF A Gが乗った親の運転する自動車。あれが事故にあった日だ」

「事故……?」

「他愛もない話を男の子としながら、そのF A Gは幸せを感じていた。……横からトラックが突っ込んでくるまではな」

シュンの発言と組み合わせさせて……次第に話が見えてきたステイレット達だ。

「極限状態だった所為か、スローモーションの様だったよ。潰れていく車内で大きな破片の一つが、割れたガラスから入ってきて男の子に直つ直ぐ向かう……。F A Gはとっさにその破片から男の子を守ろうと飛びながら両手を広げた」

「……その時、アンタが守ったのがシユン君なの?」

一応ぼかして話をしていたが、当然ながら自分とシユンの事だと見抜かれる真姫。ぼかすのはやめて話し続ける。

「……守られたんだよ」

「え?」

「庇って、やっぱり自分はFAGなんだって……人間の為にとって、そんな風に思って悲しくなって……目の前に破片が迫ったその時だった。シユンは……私の主は、私を……払いのけた……」

「っ?!」

「気を失って……気が付いた私が……最初に見たのは……破片が突き刺さった右目から……シートに座ったまま、血を、脂汗を流し、声を殺して痛みに必死の形相で耐えるシユンだった……。絶望しながら……必死に主の名前を呼ぶ私に、シユンは私を見て……こう言ってくれた……『真姫、怪我はない?』って……」

涙声になっていく真姫、だがここで真姫に攻撃を加える事が誰にできようか。

「主の親も……軽傷で済んだ。主も……ただ一か所……右目以外は……、シユンは……言ってくれた。私が無事ならそれでいいって。だが私が……人形だったらシユンは私を庇う事はなかった。……私が人間だったら一生傍にいて支えてあげるのに。私達の寿命は人間よりも短い。それなのにシユンは恐れずに一生残る傷を負った。解らないんだよ自分が。……教えてくれ。私達はなんなんだ?なんでこんな半端に人間に近づいた?!中途半端に人間に近づいたロボットに何の意味があるんだ?!」

「それは……」

「……いや……言えるわけが無いな。何も考えずに……主とベタベタする事しか考えてない様な貴様たちに!!」

言葉に詰まるステイレットに対して真姫は怒りの表情をむき出しにして再び切りかかる。

「!!」

「私は右目としてシユンを守る!そして不要だった感情とも決別する

!!だから私はシュンとあえて距離を置くんだった!!」

『真姫……』

その理由に轟雷や実況達も呆然とする中、ステイレットもまたソードで刀を受ける。

『させるかよ!』

キラービークで援護に入ってくるヒカル。

「邪魔するな!!」

真姫は刀をぶん投げる。車輪の様に回転しながらキラービークに刀は斧の様に突き刺さった。

『うおっ!?!』

「マスター!!」

ステイレットがキラービークの方に向いた。間の悪いことに真姫に背中を向ける形となる。

「笑止!!」

「あっ!」

無防備だった背中に、剣道の面の動作で真姫が切りつける。ステイレットは背中の中のドローンを切られて爆発。飛ぶ手段だったそれを失ったステイレットは落ちていく。

「きやああ!!」

「解ったか!人間とFAGが不用意に近づきすぎるとこうなる!!私は憎む!こんな風に作ったFA社を!人間に近づけた源内あおと試作型轟雷を!!」

『……待てよ。人形だってんなら、だったらシュン君の意思はどうなるんだよ!』

「何?!」

見ると墜落しつつあるキラービークはステイレットの方に飛んでいく。そして翼の部分を切り離すと、それは落ちていたステイレットの背中に接続された。

「そうよ!確かに私達は人間にはなれないわ!アンタの言う通り距離感が必要でしょうね!でもね!」

ステイレットは再び飛ぶ手段を得ると刀を構えて真姫に突っ込ん

でいく。真姫はTCSでそれを防御する。離れるステイレットは刀を向けながら言い放った。

「私達だって！心があつたから救えた人間だつてたくさんいたのよ！それを否定するなんて！許せないんだから!!」

ステイレットとヒカルの脳裏に浮かぶ。健とフレズ、源三とバーゼ、それ以外にも大なり小なり救われたり影響を受けたマスターとFAGばかり見てきた。

『ああ！行くぞ！ステイレット!!』

「任せてよマスター!!」

そう言つて二人は真姫と決着をつけるべく突っ込んでいった。

「やああつー！」

ヒカルのキラビークと合体したステイレットはサムライマスタースードを振り回して真姫に斬りかかる。真姫は刀一本でそれを迎え撃つ。

「こっちは二刀流だけど！アンタは刀一本だけ！観念なさい！」

真姫は右の刀を自分の刀で受ける。ステイレットは左の刀で突き刺そうとするが、真姫はTCSで防御。

「浅はかな!!剣の扱いで私に勝てると思っているのか！」

そう言つて蹴りを入れてステイレットを吹き飛ばす真姫。追撃として更に切りかかる。

「剣の扱いはこちらの方が一日の長があるのだ！」

「っ！」

体勢を立て直そうとするステイレットだが間に合わない。だがそのまま斬られることは無くその場から移動して回避。

「わつととーマスター?!」

これに驚いた表情を見せるステイレット。彼女の操作ではなくヒカルの操作だった。

「俺も協力する！移動はこっちでやるからステイレットは攻撃に集中してくれ！」

「！お願いねマスター！マスターと私ならきつと勝てる！」

そう言つてステイレットは刀を打ち込んでいく。その連携ですら、真姫にとっては自分の言つた事を否定し続ける行為だ。不快感を隠さない。

「くっ！私の言つた事を！理解出来ないのかああ!!」

激昂しながら真姫はステイレットに斬りかかる。

「そもそも！人に仕える機械に感情を持たせようとするのが間違いだったんだ！機械と人間！越える事の出来ない壁が私達は元々あった！」



今度はTCSを張ったまま体当たりを仕掛けてくる。バリアの斥力を活かした攻撃に真姫も余裕はなかった。

「それをこのイベントに出た奴は皆それを忘れて！そんな物無駄だと解らせてやる！人間とFAGの差を思い出させてやる！私が優勝する事によつて！」

「……聞き捨てなりませんね」

その時だった。真姫の真横から砲撃が襲う。背中にレイジングブースターを装着したグライフェンが飛行する。連装砲で撃つただ。

「っ!? 貴様！」

決闘に水を刺された真姫は更に怒りを見せる。

「人間とFAGの差?それを……私達が解つてなかつたと思つていたんですか?」

対するグライフェンの表情は真剣そのものだった。

「解つてないのはあなたの方ですよ。私達がそれで絶望をしなかつたとでも?!司令官が……マスターが何も感じなかつたとでも?!」

「何!?!」

「私のマスターだって同じですよ!!生き甲斐を出来なくなつて!それが元で私と距離が縮まつて!したら今度は人間とFAGという問題を嫌と言うほど思い知らされて!!」

「グライフェン……」

涙目に、涙声になりながらも連装砲を撃ちつづけるグライフェン。真姫はTCSで退避しようとするが、グライフェンは執拗に追い撃ちつづける。

「あなたの言ってるそれは!私の司令官を!マスターを馬鹿にしてる事でもあるんですよ!それを見逃すなど許せない!!それらはここに参加してるFAGだって皆解つてるはずですよ!」

その時だった。フレズが実況席の轟雷、彼女からマイクをかつぱらつて叫ぶ。

「あつ!私のマイク!」と轟雷「アタシんだ!!」とアイ。

「そうだよ!ボクだってマスターが人間で!ボクがFAGなのは解つ

てるんだよ！でもマスターの事大好きなのは変わらないし譲れない！」

「アタシにも言わせてよー！」「わたしにもー！」

『へ？わああっ!!』轟雷とフレズとアイは予期せぬ状況に悲鳴を上げた。フレズに触発されたのか。参加していたFAGが大挙して轟雷とクロローディアのマイクに集まってくる。

「あらあらーどうしましょう」

解説席のクロローディアは一切動じてなかったが、

「私だってマスターを最初は弟みたいに思ってたわよ！でもあの事件で男として意識したんだから！」「マスター更生させたのはアタシだよ！」「ご主人様の支えになってあげたいんです！」それぞれのFAGが想いをぶつけていく。それぞれが大小様々な葛藤を抱えている。その証明だった。

「貴様ら……！」

『真姫……もうやめよう……』

「っ?!主殿ー！」

シユンが真姫を止めようとする発言。なだめようとしても止める事はなかっただけに真姫は面食らう。

「ぼくもやつと解った……皆、真姫と同じ様な苦悩があつたんだ……。真姫、君が立ち直れるならと思つて好きにやらせたけど、駄目だ。やればやるほど君が傷ついていく」

「主殿ーそんなー私はー！」

TCSを解いてシユンに抗議しようとする真姫、その状況にグライフェンもステイレットも攻撃はしない。

「傷を負う前だつて、ぼくは楽しかったよ？それは君が人形じゃなくて、心のあるFAGだったから」

「主殿……」

「だからこそ、事故の時に一瞬でも君がいなくなる事が頭に浮かんで、何としてでも守らなきゃって思つて。だから君を庇つた事に後悔なんてしなかった」

弱気とは程遠い口調でシユンは喋り続ける。突っぱね続けていた

真姫が大人しく耳を傾ける様は、心に届き始めているという事か。

「それで君を傷つけてしまったのは悲しいけど、ぼくの片目よりも君の方が大切なんだよ。……だから元気を出してよ……昔の真姫に戻ってよ！」

「シユン……でも……マキは……」

「アンタのマスターの言う通りよ。辛い事も含めて思い出でしょ！」

それにステイレットが加勢する。が、ステイレットの言葉は真姫にとって余計だった。

「……でもっ！シユンの目は！元には戻らないんだよ!!」

水を刺すなど言わんばかりに切りかかる真姫。ステイレットはさつきと同様に二刀流でそれに対応する。

「シユンの目の！原因が私にある以上そんな資格はない！」

「だったら！私達が物言わぬ人形だったらシユン君は事故に会わなかったと言いたいのか!？」

「っ！それは……!」

精神的に追い詰められている真姫は、技のキレが落ちていく上にTCSを使わない。それに追い打ちをかけるべくステイレットの猛攻は続く。

「意味のない過程でうじうじ悩んでるのはアンタでしょうが！それ自体がマスターのシユン君の意志をないがしろにしてるって解らないのか?!」

「くっ……」

ヒカルが言った『シユンの意志はどうなるんだ』という言葉だ。

「私達はFAGよ！間違いを犯してもやり直せるのが私達でしょうが!」

「だが！人間ではない！それは変えられない!!」

「そうよ！でもFAGだからこそ！マスターと会えた！マスターを!!好きになれたんでしょうがっ!!」

「くっ!!」

その言葉に、真姫の心が揺らぐ。そしてステイレットの連撃に、ついに真姫の刀は折れた。そのまま続けてステイレットは真姫の無防

備になった体に刀を打ち込んだ。体が切り裂かれる代わりにアーマーは砕け、真姫のHPが0になる。これが決め手だった。

「そんな……、そんなっ！ぐわあぁっ!!!」

真姫は敗北を悟ると同時に演出として爆発。

『winner ステイルレット&グライフエン』

そのアナウンスに、これで終わったと安堵するステイルレットとグライフエンだった。しかし……。

『真姫っ!!!』

「っ!？」

シュンの慌てる声。爆炎から投げ出された真姫が海に落ちた。

「嘘でしょ！落ちた！」

「どうなってんだ?!負けたらセコンド席に転送されるんじゃないのかよ！」

「落ちた場所がフィールドとは離れていたからかも！」

「スタツフは何やってるんだ!?こんな状況で！」

「それが周囲に一人もないのよ！」

ギャラリーがざわめく中、真姫はどんどん海中に沈んでいく。元々泳げない上に真姫の力は残っておらず、水に抵抗する事すら出来ない。

「……もう、力が……」

ふと、ステイルレットに言われた事が頭によぎる。

——マキ……悪い子だ……。折角皆が楽しんでいるイベントだったのに……シュンだって楽しもうって言っていたのに……——

頭が朦朧としてきた。仮想空間ではあるが、酸欠の再現だ。

——間違いを犯してもやり直せる。か。……もし、シュンにやり直したいって言ったら、シュンは……いつもみたいにマキの事……——

その前に、ここから戻れるのか。そんな風に考えてる。……その時だった。視界に複数人が泳いでこっちに向かってくるのが見えた。

——え?——

近づくにつれて顔がハッキリと見える。潜水モードのグライフエンに担がれたシュン、そして蓮とヒカルがそれに続いて泳いでくる。

水陸両用のグライフエンは肩と腰のスクリューを使い高速でこちらに向かってくる。

——シユン?——

シユンの頬は空気で最大限まで膨らんでいた。真姫のすぐそこまで近づくと、シユンはグライフエンから降り、真姫の両頬を掴むと……、真姫の唇を覆う様に、自分の唇を押し付ける。そしてシユンは口に含んだ酸素を全て真姫に送り込んだ。

——ふええっ?!?!?——

突然の事に顔を真っ赤にさせ混乱する真姫。その際に折角の酸素をすべて吐き出してしまう。『何やってんだ!』そう言いたげなシユンだが、グライフエンはシユンと真姫を展開したサブアームで抱えるとすぐさま海面へと上がって行った。

「プハッ!!ハアッ!ハアッ!」

海面に出ると荒く息継ぎをする真姫。豊かだった黒髪は海水でべったり肌に貼り付いていた。

「真姫!無事?!」

——眼帯が外れてる……。シユンの傷跡が……——

目の前で呼びかける少年。水中で泳いだ影響か。眼帯は外れており、傷跡が横に閉じた目と対照的に縦に走る。十字の形となった右目、それを見ながら真姫は事故の事を思い出す。

「……あの時と、同じですね。絆がって、守ろうとしたけど、結果は傷つけるだけで。今回も考えも空回りでイベントに水を刺しただけ」

「そんな事ないよ。真姫は必死に答えを探そうとしていたじゃないか」

「……でも、答えは出ませんでした」

「だったら一緒に探そうよ!ぼくの傍にいてくれるんだろ!?支えになんてくれるんだろ?!近くにいてくれるなら丁度いいじゃないか!」

「シユン……」

「おい!運んでやろうかと思ったけどそのまま惚気てるかお前ら!」

イラついた声が響く。ウィルバーナインのナインがバイクに跨り

ながら青筋を立てていた。

「わああっ！お！お願いします！」

怯えた動作を見せながらもシユンはそれに同意。

「つたく、オヤジが行けつて言わなけりゃこんなことにはよ……」

ブツクサ言いながらナインは二人を運んでいった。そして陸に戻ると、ギャラリーの多くのFAG達がそこにいた。全員が真姫をジツと見ている。真姫の発言がFAG達の神経を逆なでしたのだ。いい感情は持ってないだろう。

「……」

何か言われるのは覚悟していた真姫だった。そこへシユンが前に躍り出る。

「皆さん！真姫の事はぼくの責任でもありません！どうか……」

「いーいや！私が勝手にやった事だ！主殿はそれに付き合わされただけでー！」

そこに真姫が更に前に出て自分で責任を取ろうとする。

「でも真姫を止められなかったのはぼくの責任で！」「だが主殿はこんな私を信じて自由にさせてくれたんだ！私が責任を取るのが！」「いやぼくが！」「私が！」「ぼくが!!」「私ですってば!!」

顔を合わせながらどちらも譲らない。さっきまでのギスギスした雰囲気とはかけ離れていた。

「なんか……さっきまでイラついてた人とは思えませんね」

「ふへへえ……。やっぱりの二人も皆と同じでえ、仲いいんだよお」

輝鎚のその一言、それが周りのFAG達の心にスツと入り込む。

「……もういいわ。許す。なんかどうでもよくなつちやつた」

バルチャー型のFAGが一人そう呟くとどんどんFAGが同意していく。

「……ま、ただ煽つてたわけじゃないからね」「私達と同じ立場だったら同じ行動をしてたかもしれないってのはあるよね……」「マスターに大怪我じゃ、悩んでもおかしくないかな……」

「貴方達……私は……すまなかつた！」

深々と頭を下げる真姫、シユンもそれに続けて頭を下げた。

「ま、あんた達も答えを出そうって悩んでいたのはよく解ったわ」とステイレットがヒカル達と戻りながら言った。

『おい轟雷！いい加減にマイク返せ!!……というわけでえ!!この大会の優勝者はステイレットさんとグライフエンさんのコンビとなりましたあ!!』

アイがステイレット達を称える一言を叫ぶ。程なくしてアーキテクトウーマン達が現れた。

「素晴らしいです！正に心あるFAGだからこそ出来たドラマです!!」

他人事ともとれる一言、更に必要な時に碌に表れなかった彼女に、その場にいた全員が軽蔑の目で睨みつけた。

『……』

「あんた……なんで必要な時にいなかったのよー!!」

「わああっゴメンナサイ!!丁度こちらも仕事があつたんですー!!」

追いかけるFAG達に必死に逃げるアーキテクトウーマンであった。

「……ふふっ、何をしてるんだよ。もう……」

それを見ながら、真姫は初めてのほころんだ笑顔を見せた。

「やっとなつたね。真姫……」

その後、表彰式も滞りなく終わり。それぞれのFAG達は再びマスターと自由な時間を楽しんでいた。昼間との違いは、それにシユンと真姫も加わっていた事だ。

「こんな所があつたのですね……」

夕日の沈む水平線、赤く染まる砂浜で、二人は横になった流木に腰かけながら並ぶ。今いる場所の周りは崖に囲まれており、後方の入り口以外ここを見られることは無い。

「真姫を探してる時に見つけた場所なんだ」

シユンは一回り大きい体躯の真姫に笑顔で言った。聞き入る真姫は元のサラシと禪姿に戻っていた。

「主殿……。私……事故の後、ずっと怖かったです。自分には対等

の資格は無いと……」

真姫の方は若干の遠慮が感じられた。今一步距離間を縮められずにいる。

「真姫、それでもぼくは、君と一緒にいたかったんだよ」

「だからこそ余計に、どうすればいいのか解らなくなつたんです」

「ごめん……ぼくの方も真姫に余計なプレッシャー与えていたかも……」

「あ！いえそんな事はないです！主殿は別に何も！」

「でもぼくが」「いえ私が」『……フツ』

さつきと同じやり取りだ。どうにも締まらない。でもそれが二人の間の空気を和らげる。

「でもだからこそ……今回のイベントで収穫はあつたと実感できません。何も考えてないと見くびつていたFAG達に教えられましたよ。誰だって悩んで、答えを求めてるんだって……。私も、やり直したい」

「僕もだよ。……認めることが出来たんだね」

「はい。認めました……成長できました……。ですから……」

そう言つて真姫は、隣の少年にしなだれかかりながら、

「……だからシユン」

甘いトーンの声に切り替えながら頭を差し出した。撫でてという意思表示だつた。

「マキ、偉いでしょ。前みたいにマキの事、いい子いい子してえ」

一気に態度も表情も甘くなる真姫だつた。孤高の獣の様な女剣士が、今では甘える子犬の様にすがりつく。

「っーうんー！」

いつもの真姫に戻ってくれた。その事に嬉しくなりながらシユンは真姫の頭を優しくなでる。真姫はくすぐつたそうに身を震わせると、満足げな笑顔を見せる。

「えへへ、大きいとシユンの手のあつたかさもいつもと違う感じが。じゃあねじゃあね、今度は膝枕でマキの事撫でて〜」

事故の前はいつもやっていた事だ。しかし事故にあつてからは真姫はやるどころではなくなつた。やつと出来たかつてのコミュニ



ケーシヨンに真姫は大喜びだった。

「……無理して我慢しちやつてさ……辛かつたろう?」

膝枕で横になった真姫、主と同じ水平線を眺めながら、シユンは右手で真姫の頭を撫で、そして左手で真姫の右手とつなぐ。

「……だつてえ、あんな事あつたんじゃ、出来るわけないじゃない……」

「君の言った通り、ステイレットやヒカルさん達に感謝しなきゃね。ぼくだけじゃ、きつと真姫の事……」

「……むー」

真姫は思いつきり不満げな表情で頬を膨らませた。

「他の女の子の話しちゃヤ」

「真姫? いやだつて……」

「それにシユンてば、大会前にマキがステイレット挑発して、おっぱい見せたとき、見とれてたよねシユン……」

「え?! いやそれは……!」

真姫の視線はシユンの顔に向けられる。シユンの方は顔を赤くしながら目を逸らす。

「赤くなった……やっぱりだー! マキの方が大きいのに!!」

嫉妬全開の形相でシユンを睨む。

「いや誤解だよ! ぼくが見てるのはいつでも頑張ってる真姫なんだから!!」

半分は本当だ。自分で答えを出そうとしてもがいていたのはシユンが一番よく知っていたからだ。と、真姫の表情が一瞬で落ち着くと同時に、真姫の方は左手をかざし、シユンの頭を撫でた。

「でもね。マキよりずっと頑張ってたのはシユンの方だよ。……こんな大怪我まで負つて、それでも誰かに頼ろうとしないで自分の力で……」

「真姫……」

「こんな時位、マキに甘えていいんだよ? シユン……」

母性と憂い、そして申し訳なさを含んだ表情を真姫は見せる。

「ありがとう……でも、やっぱり真姫が甘えてくれる方が好きだから。」

「このままでいいかな？」

「……むー」再びふくれっ面になる真姫。

「だってさ……。こういう仕草を見せてくれるだけでぼくを特別扱いしてくれるって事だもの。それだけで嬉しいんだよ」

「当然ながら真姫はシユン以外にこういうった仕草を見せない。」

「じゃあ、マキ甘えながらシユンを甘えさせてあげちゃうんだから、……マキだって、シユンの頑張りを一番知ってるのはマキなんだよ？」

「有難う……真姫」

「シユン、大好き……」

「すう……すう……」

暫くして真姫は膝枕で手を繋いだまま眠りについた。眠りを妨げるわけにはいかないので体勢を変えるわけにはいかない。

「さて……、もう出てきていいですよ皆さん」

後方に声をかけると……

「う……ばれてたのか……」

フレズとグライフェンと輝鎚、他数名のFAG達とそのマスターらが出てきた。気になって覗いていたらしい。

ちなみにヒカルと黄一、轟雷とステイレットの四名は朱音の白虎を探すのを手伝う。と言う理由でここにはいなかった。

「当然ながらこの事は周りには言わないでくださいね。真姫は他人にこの状態見られるの、凄く嫌がるんで」

「本当は甘えん坊なんだ。マガツキ」と蓮が言う。

「いつものキリツとしたのも本当の真姫ですよ蓮さん」

「妙にフランクに接してくるシユンだ。最初会った時のオドオドは一切ない。」

「なんか最初会った時は妙にオドオドしてたけど、君も結構砕けた感じなんだな」と健が言う。

「そう見えます？人見知りなんで」とシユンが返した。

「……まさかとは思うけど、今日の真姫のイライラって、周りはいちや

ついでるのに、自分は甘えられなかったからその八つ当たりつてのもあるんじゃない……」

グライフェンの疑問だ。ステイレットの胸に嫉妬したと言うのなら十分にあり得る話だ。

「あはは……」

その真相を愛想笑いでシユンは返す。

「むにゃ……シユン……褒めて……マキの事お……褒めてえ……」

その頃、別行動のヒカル達は、朱音の白虎を探しまわっていた。あれから姿を一度も見せていないらしく探すのを手伝っていた。アーキテクトウーマンらスタッフには当然伝えたが、正直あてにならないからだ。

シユンと真姫のいた場所と同じく、水平線から夕陽は見える砂浜だが場所は全然違う。

「ヒカル君。そっちはどうだった？」

「玄白さん、いやこっちは駄目だったよ」

「ゴメンね。探すのにつきあってもらっちゃって、折角のイベントだったのに」

「こちら二人きりだ。こんな状況でもなければムードはあったろうなど朱音は思っていた。

「気にしないでくれよ。そろそろステイレットも帰ってくるだろうから、合流して話を聞こう」

ステイレットは飛行能力を活かして上空から探してる。

「待って！ヒカル君」

その場から移動してステイレットと合流しようとするヒカル。それを朱音は呼び止めた。

「ん？」

呑気そうなヒカルの表情に反して、一世一代の大勝負と言わんばかりの表情の朱音、……少女は意を決した様に、想いを口にした。

「わ！私、ヒカル君の事！好きです!!」

突然の事に、意味を飲み込めないヒカル。しかし数秒置いて意味が

解ると顔を真っ赤にしながら叫び声をあげた。

「え……う？ええええええ……?!?!?!?!」

少し離れた場所で……轟雷と黄一、そしてステイレットは、その一部始終を見ていた。

「……え？」

ステイレットは信じられないと言わんばかりに、完全に固まっていた。

「ス……ステイレット……」

それにどう声をかけていいか解らない轟雷。何故このタイミングで……と、轟雷は天を呪う。

と、その時だった。突如予期せぬ人物、いやFAGが声をかける。

「あの……、さっきの優勝したステイレット様はこちらでしょうか」

心ここにあらずといった表情で向いたステイレット。

「な、何よ」

「やはり……ご主人様に以前仕えていたステイレット型だったのですね」

ご主人様というワードにステイレットは反応を見せる。話しかけてきたFAG、ステイレットによく似たフォルムのその機種は……。

「フセット型？あんた……まさか……」

「はい、かつてのあなたのご主人様に、今仕えているフセットです！お姉様！」

——次回、最終章——

『その大きな手で私を抱いて』

## 最終章

### ep30 『その大きな手で私を抱いて』（起）

「……以上で報告を終わります」

何かの研究施設を連想させる薄暗い無機質な室内にて、頭にフレームアーキテクトの被り物をした女性、アーキテクトウーマンが報告をしていた。彼女の藍色に光るセンサーから、その視線の先に上司らしき白衣を纏った女性が背中を向けながらそれを聞いていた。

その上司もまたフレームアーキテクトの被り物をしていたが白衣の下の服装と体型から女性と判断するのは容易い。

「それで……結構な数が候補者に選ばれたわけだが、彼らの中から本当に決まると言うのかね？」

「はい。今回開催したイベントで、あえてこちらからの干渉をせずに見守ったわけですが……やはりFAGを大切にしてくれています。まさに人間と同じ様に……」

「そういったマスターが必要だ。こちらの方も完成までそうはかからない……。それを任せられるだけの人間が必要だからな。このプロジェクトには」

上司のアーキテクトウーマンが目の中の筒状のカプセルに手を触れる。窓も室内灯も無い室内の中、横に幾つも並んだカプセルのストレージはスモークがかかっている為に中を確認する事は出来ない。ただ……何かの溶液で満たされたその中には、人影の様な物が見えていた……。

イベントから暫く……。更に所変わってお馴染みのヒカル達の高校にて……。

「……あー……全然浮かばねえ……」

休み時間中。教室の机に座ったヒカルは眼の前の紙と睨めっこしながら呟いた。頬杖をついており難問と直面したような渋い顔だ。

「なんだよヒカル。まだ進路希望書いてねえのか」

それを黄一が呆れながら言う。大輔も一緒だ。ヒカルが悩んでいたのは進路希望調査表。卒業後の進路に関して書いて提出する。

「仕方ねえだろ黄一。日頃そんな先の事まで考えてないよ俺」

「ま、お前の場合半日先まで考えた事もなさそうだけどなー」

「やかましいわ。……俺だつてさ、このまま何も決まらないのは嫌だよ。もうすぐ三年生だつて言うのにさ」

そう。今は三月、来月に進級して高校三年生。卒業まで一年となった。

「更に四月に誕生日だったなお前。来月で18歳か」

何気なく言う黄一の発言。だが大輔はヒカルの誕生日を初めて知った為に、意外そうな表情を見せた。

「あれ？ そうなんだ。だったら何か僕とアーキテクトでプレゼント用意しないとな」

そこまでいなくていいよ。とヒカルも黄一も愛想笑いをしながら流す様に手を振った。

「いいよいいよ。気持ちだけで嬉しいわ大輔」

「そうそう。なにしろコイツ今彼女持ちなんだから、これ以上欲しい物とか贅沢だな」

「っ！ それは関係ないだろ！」

皮肉たつぷりに言う黄一にヒカルは顔をしかめる。最近はこんな感じだ。

「……ま、進路、自分で何とかしなきゃって気持ちがあるんだつたら大丈夫だよ。まあ提出期限までまだ日はあるから、粘ればいいさ」

「有難う大輔。黄一と違って知性あるなあ」

「ケッ！ だったら愛しの彼女に聞いてみたらどうだよ。……来たみたいだし」

そう言つて黄一はある方向を示した。その方向から歩いてくるのは……、

「ヒカル君？ どうかしたの？」

ツインテールの少女。玄白朱音である。若干態度はよそよそしい。

「玄白さん、進路希望書まだ提出してないんだつてさ」

「そうなんだ。まだ時間あるしゆっくり考えればいいよ」

「有難う。そういえば玄白さんは何書いたの？」

「うん保育士だよ。昔からやりたい事だったから」

「やりたい事、か……。大輔はやっぱりロボット工学系？」

座りながらのヒカルは立ったままの大輔を見上げながら問う。大輔は当然と言わんばかりに即答。

「うん。好きな事で、やりたい事だったからね。ヒカルのやりたい事とかはないのかい？バスケとか……」

「アハハ……。バスケは好きだけど……。どうもプロでやる分には色々足りてないんだよな……」

そして放課後、今日は部活も無い為に普通に下校となる。

「んじゃ黄一、久しぶりに一緒に帰ろうぜ」

次々と生徒が会話交じりに帰る中、鞆を持った黄一を、ヒカルがいつもの様に気さくに誘う。それを軽蔑する様に見える黄一。

「……いやお前、玄白さんと帰れよ。こないだ告白されたんだろうが」

「え?!いやそうだけど……」

眼を逸らすヒカル。そんな親友に黄一は質問の追撃をかける。

「で、どうしたんだよ。お前あの時の告白の返事」

イベントの時に朱音が告白するタイミングは黄一も見ていた。轟雷とステイレットと黄一、その場のギャラリーは全員が衝撃を受けていたわけだ。

特に黄一は朱音の事が好きだったりするのには誰にも言っていない。

「いや、それだったら……。まだ返事出してない……」

「はあ?!お前なにやってんだよ!」

バツの悪そうに言うヒカルに対して黄一は呆れと怒りが混ざった顔で言った。

「いやだって……。いつまでも待つって言ってたから……」

そう、イベントの時に朱音から告白されたヒカルの返事は、『しばらく考えさせて欲しい』だった。

「信じらんねえ!十日だぞ!馬鹿か!……。まさかお前、既に彼女がい

るから二股か乗り換えを……」

「してねえよ！大体俺が彼女いない歴〓俺の年齢だつて一番知ってるのお前だろう！」

心外といわんばかりにヒカルの方も声を荒げた。ついでに自分で言つててなんかミジメだった。

「……まあそーいやそーうだな。……つていうならなおさらだ！さつさと返事だせばいいだろうが!!」

「う……それは……」

「なんで言わないんだよ。断るなら断るでいいだろ」

目が泳ぐヒカルに、ジト目の黄一。

「それは……どっちを選ぼうとしても、なんか踏みとどまっちゃうんだよ」

「なんだそりゃ。ともかくお前、最っ低だな。女の子の告白一週間以上も待たせるとか」

黄一の軽蔑の視線と言葉がいちいち突き刺さる。最近部活で一緒に帰れなかったから、言いたい事はたくさんあったのだろう。

「ぐ……自覚はあるよ……」

「自覚ある奴は十日も待たせねえよ。つたく、さつさとハッキリさせりゃいいものを……」

「ねえ、ヒカル君？一緒に帰らない？」

と、そうこうしていると朱音の方が話しかけてきた。

「玄白さん、あ、今日は黄一の（ゴスツ！）グホオ!!」

ヒカルの横腹に黄一がひじ打ちを入れた。突然の事に防御できなかったヒカルは思わず痛みと共にむせる。

「そーいや俺用事あったんだつたわ。というわけでヒカル。玄白さんと帰りな」

そう言うなり黄一はそそくさとその場を後にした。黄一の表情は張り付いたような笑顔だった。

「え？だ、大丈夫？」

「途中まで通学路が同じだったんだね。私達……」



そして二人は帰路につく。朱音と帰るのはヒカルにとって初めてだった。2人が並ぶと当然ヒカルの方が身長は頭一つ大きい。夕陽に照らされながら歩幅を合わせて歩いていく。

「そうだね。玄白さんは家まで歩き？」

「ううん。途中からバスだよ。この先にバス停があるんだ」

「そっか」

『……』

ヒカルとしては女の子と帰った経験がない。故にどう話題を出しているか解らない。何か話題を出したとしてもご覧の通りすぐ途切れてしまう。

——不味い………どうにかして話題を出さないと………——

勝手なヒカルの思い込みではあるが空気が重い。何か話題は無いか。と思案するが、緊張してる所為かそれも頭がうまく回らない。

「あのねヒカル君？」

「は、はい！」

突然朱音の方が話しかけてくる事にヒカルは素っ頓狂な声を上げた。

「ヒカル君、ステイレットちゃんを相棒にしてるんだよね」

と、朱音がFAGの話題を上げる。彼女もFAGを連れている事をヒカルはすっかり忘れていた。

「あ、そうだったね確か」

「ん？」

「あ、いやそうじゃなくて！玄白さんも白虎が相棒だったんだっけ！……そもそもこの間のイベントでも一緒に出ていたのに、朱音が白虎と一緒にいる所を見た事が無い所為だろうか、

「うん。それでね。今度の日曜日に、ヒカル君とタッグでFAGのお店で対戦とかしたいなあって思ってる」

「あ、うん。いいよそれなら」

「本当?!嬉しいなあ!やっと対戦が実現するんだあ!」

「そういえばクリスマススの時に対戦したいっていつてたっけ」

「うん、私本当に楽しみだったんだよ?本当だったら共通点も無い様

な私達が唯一の共通点だもの。共通の話題で盛り上がれるってすごく嬉しいんだよ?」

そうこうしてる内に朱音の使用してるバス停についた。丁度バスが向かってくる。

「あ、ここで今日はお別れだね……」

「あ、うん……。また明日」

「またね。楽しみにしてるから!」そう言って嬉しそうに朱音は停車したバスに乗って行った。そしてバスはそのまま発進。見送ったヒカルは……。

——おかしいな。彼女が出来るって言うのに……何でこんなに何も湧かないんだろう——

変に冷めてる自分の心に疑問を感じていた。

——  
帰路につきながら、ヒカルはステイレットに日曜日に朱音とFAGの大会に出す事を考える。その為にはまずステイレットに話さなければならぬ。しかし……

——ステイレットに、どう話せばいいんだよ……——

ヒカルの考えとしては、おいそれとステイレットに話していい内容とは思えなかった。ステイレットが自分に懐いてくれるのは解っていた。しかしヒカルはステイレットが自分に恋愛感情を抱いてるとまでは思っていなかった。そして……彼自身ステイレットに恋をしているという事も気づいてない。

自分の恋心に自覚がないだけで、少なくとも、朱音の事を話したらステイレットが不機嫌になる事はハッキリと解っていた。

「ただいま……」

どうすればいいと思いを堂々巡りさせておきながら、若干上の空で家の中にヒカルは入った。

「あれ?!マスターったら、もう帰ってきたの?!」

家に帰ると飛行ユニットだけを装備した素体姿のステイレットが出迎えに出てくる。しかしその日は驚いた様な素振りを見せた。そ

んなステイレットの態度にヒカルは違和感を覚えた。

「?どうしたんだよそんな驚いて」

「い!いえなんでもないわよ!それより今日は速いのね!普通だったらもう二時間位は遅れてくるのに!」

「今日部活ないって今朝言つたら?」

「そ、そうだっけ?……あはは。マスターが彼女出来たからそっちの方が心配で忘れちゃった。ほらマスターってデリカシーない上にスケベだし、変に迫って嫌われるんじゃないかと思ってね!」

「ひでえなそれ。……玄白さんとは何もないよ。告白の返事もまだ返してない」

直後ステイレットの表情は一気に不機嫌に曇る。

「はあっ!?ちよつとマスター!それはそれで失礼でしょ!早く返しなさい!」

いつも通りのやり取り、と言いたいところだが、海のイベント以降よそよそしさがお互いに出てしまった。

「わ、解ってるよ!黄一にも同じ事言われたわ」

「それだけ目に見えて最低って事でしょ?」

「解ってるよ。……あのさステイレット」

「何よ」

今週末の朱音と出るイベントの事をステイレットに話そうとするヒカル。しかし……。

「いや、なんでもない……」

「?変なの」

言っではいけない。そんな気がする。

「なんか疲れたから今日は休むよ。少し寝る」

「あ、そうマスター、晩御飯出来たら起こすからね」

二階に上がっていくヒカルをステイレットは見送る。階段を上がり切って自室に入っていくのを見届けるとステイレットは……、

「ふう……よし!」

すぐさまキッチンに移動すると、2mある食器棚の上に隠れていたFAGに話しかけた。

「行ったわよ。残念だけど今日はお開きだわフセット」

「申し訳ありません。お姉様……。ヒカル様の事……。どうしても怖くて」

ステイレットによく似たフォルムのFAG、フセットが申し訳なきように答えた。彼女はヒカルの前のマスター『甫周月夜』（ほしゅうつくよ）に仕えていたFAGだ。

「怖いって、私のマスターなんだけどなあ」

時間を巻き戻して二人が出会った時を見てみよう。

「好きです！私と付き合ってください!!」

朱音がヒカルに告白を受けたタイミングに時間は遡る。その時にステイレットとフセットは出会った。

「そ……そんないきなり……」

「だ、駄目？」

「そうじゃないけど……そりゃ嬉しいけど……少し、考えさせて下さい……」

しおらしい態度で答えるヒカル。そこから暫く離れた場所で、フセットもまたステイレットに告白をしていた。ステイレットより露出の少ないパレオ付きのハイレグ水着が、彼女の性格を表していた。

「決勝戦のお姉様の担架！素敵でした！」

「ちよーちよつと待って！ひとまずここから離れよう!」

ヒカルは前のマスターには良い感情を持っていない。関連のあるフセットに会わせてはいけないとステイレットは判断。フセットを連れてその場を離れる。

「それでどうしたのよ。……悪いけどあんた達とは縁を切ったつもりだけど？」

離れた林の中に移動。フセットを遠ざける様なステイレットの態度、そして轟雷と黄一も訝しげに突然現れた少女を見ていた。

「それは……解ってます。でもワタクシ、ご主人様の家にいるのがもう辛くて辛くて……」

溜め込んでいた物を吐き出す様にフセットは言う。ステイレット

は自分の知らない状況になっている事が気になった。

「……何かあったの？別にアンタの家はお金持ちだから早々辛いつて事にはならないと思うけど？」

「……なったんです。ご主人様のお父様が経営する会社が倒産しました」

「な……」

「それに加えて、ご両親の離婚も決まりました。もうあの家には住んでません。財産も使用人も失ってご主人様すごい暗くなっちゃって……」

「それで、どうしようって言うのよ。お金は貸せないからね。金銭面では友情と天秤にかけてもお金を取れとママからきつく言われているのよ」

「そうではありません……。お姉様の言った事が格好良く見えて、相談に乗って欲しいと思ひまして」

ステイレット以外にもフセットに対しては怪しむ様に見える。黄一と轟雷も前のマスターとフセットの事は知っており、良い印象を抱いてない。

「……このイベントにはアーキテクトウーマンからの誘いで？」

「はい」と轟雷の問いにフセットは頷く。正式にこのイベントに参加したのは間違いないらしい。

「悪いけど、あんたの期待に添える事は何もないわよ。悪いけど他当たって……」

縫り付くようなフセットの態度、しかしステイレットとしても余り関わりを持ちたいとは思えない。踵を返してその場を離れようとする。その時だった。

「好きなんです！ご主人様の事が!!」

「!」

フセットが必死の表情で叫ぶ。その叫びにステイレットは歩みを止めた。

「解つてますよ！ワタクシだって自分が無力なFAGだって事位！でもご主人様はもうワタクシしか頼れるのがいないんです！でも一人

ではどうする事も出来なくて……」

「ステイレット。あまり深入りは……」

「……話位なら、聞いてやらない事もないけど？」

「ステイレット?!」

轟雷はステイレットが歩み寄ろうとした事に愕然とした。

「っ!! あ! 有難うございます!」

フセツトは頼る物が出来た所為か。心底嬉しそうな表情を見せた。それを見守っていた黄一と轟雷は相変わらずの警戒でフセツトを見ていた。

——あいつがヒカルの言っていたフセツトか……——

フセツトと前のマスターの事は黄一と轟雷も知っていた。間接的ながらステイレットの家出捜索に協力していたからだ。

——そんな簡単に信用していい相手じゃないでしょうに……いらぬ事を……——

——参ったな。ヒカルの告白とダブルパンチになっちまった。

……轟雷。アイツの監視、頼めるか?——

さっきの朱音の告白による精神的ショックが無ければ、恐らくステイレットも手を差し伸べる事は無かつたらうに、と黄一は渋い顔をする。心の弱っていたステイレットにとって、フセツトは自分と重ねて見えてしまったのかもしれない。

——元よりそのつもりですよ。嫌なタイミングで面倒事が重なりましたね——

このイベントに参加してるとはいえ、轟雷としても懐疑的な相手だ。悪い意味で実績がある。またステイレットを傷つけるんじゃないかと言う考えを巡らせ、黄一と轟雷は監視しようという考えに至った……。

——  
そしてそれからステイレットとフセツトの付き合いが始まった……。

「今日は轟雷お姉様がないから静かでしたね」

「模型店での集りだったらもつと賑やかよ。今度アンタも来なさい

な。と、せっかくだからこれ持っていきなさいな。後ちよつとで完成なんだからさ」

ステイレットがキッチンの電気コンロの上の鍋の中を見ながら言った。カレーが作られており、後はルーを入れて煮詰めるだけだった。

「でも、悪いです」

「謙遜するんじゃないわよ。アンタが作ったんでしょ?……マスターに食べさせてあげたいんでしょ?」

ステイレットの指摘にフセツトは頬を赤らめる。

「でもFAGでは味見は出来ません……不安です」

「私が教えたんだから大丈夫よ。アンタ筋がいいんだし」

「そんな……まだ慣れてなくて……ワタクシ、ずっと愛玩用だったわけですし」

ステイレットとフセツトの付き合いでやったのは相談と、料理や掃除等家事のレクチャーだ。フセツトはお金持ちの時から家事はしていなかった為、今ではフセツトが家事を覚える必要があった。ステイレットが家事全般をマスターしていた為に、これ幸いとステイレットからレクチャーを受けていたわけだ。

「私だってそうだったわよ。メイドさん達に任せっきりだったわ。前のあんたの生活と同じでね」

「前の豊かな生活に戻りたいとは思わないんですか?」

「全然。好きだもの。今のマスターと家族、仲間がね」

「羨ましいです。そんな風に自信を持って生きていられたら……」

尊敬の眼差しでフセツトはステイレットを見つめた。

「何見てるのよ。はいさっさとルーを入れる」

照れを隠しながらステイレットはフセツトに促した。

そしてカレーが出来たらフセツトの分と自分の分と、分けて彼女を返した。その後はフセツトの作ったカレーをヒカルに食べさせて品評させた以外は、いつもと変わらない。ただ、いつもより会話が少なめになってしまったが……。朱音の告白に、イベントの件でお互いが

精神的に参ってしまってる状態となつてしまったわけだ。

自室のベッドに入ったヒカルは机の上、ステイレットの充電くんを見る。まだステイレットは下で家事をしていた。

——いずれは言わなきやいけないんだろうけど、間違ひなくステイレットは怒るだろうな——

自分が話した時の反応を想像すると、ステイレットが怒つたり泣いたり、無理して平気な風を装つて痛々しい態度を取る事は目に見えていた。

——……なんかカレーの味、いつもと違つていたな……——

どうすればいい、と余計な考えを差し込みながらも、目を閉じつつ思考を巡らせながらヒカルの意識は眠りに落ちていった。

——マスター……ねえマスター……——

「ん……？」

ヒカルは柔らかな声に目を覚ます。目の前には声の主であるステイレットがいた。そんなヒカルは違和感を強く感じる。

「ステイレット？あれ……ここ学校？それにお前のサイズ……」

さつきまでベッドで寝ていたのに、今自分がいる景色は日差しの差し込む2人だけの教室。今ヒカルは机に突つ伏して眠つていたので起きた所だ。

そして……目の前のステイレットは人間サイズで自分の学校の制服を着ていた。

「もう、こんな所で寝て、やっぱり私がいなきや駄目ね。玄白さんよりも……」

「?!」

そう言つてステイレットは妖艶な笑みを見せる。そして顔を間近に近づける。妖艶な等身大ステイレットに迫られる。これは……ヒカルが前に夢で体験した事だった。そして目の前のステイレットはその時と同じ表情をしていた。

「これ、……夢か」

以前マイクロビキニを着たステイレットに迫られた夢を見たヒカ



ルだった。

「あれ？ヒカル君たらこんな所で寝てたんだ」

更に別方向からも声が聞こえた。声のする方を見ると朱音がいた。彼女もまた学校の制服を着ていた。

「ヒカル君しつかりしてよ。私はヒカル君の彼女なんだよ？」

「あ……いや」

夢と自覚できてもそう言われてはどう反応していいか解らない。その時だった。

「……誰よその女」

冷淡な声を見ていたステイレットが上げる。

「私？私は……、この人の恋人です」

ステイレットに対し、勝ち誇った様な表情で朱音はヒカルの右腕に抱き付いた。

「はあ?!横からしゃしゃり出て何言ってるのよ!!離れなさい!」

ステイレットの声に朱音は離れようとしなない。

「嫌ですー。だって私はヒカル君に告白したから、正式な恋人だからだよー」

怒りをむき出しにしたステイレットに対して朱音は余裕のままだった。

「告白ですって?!ぽつと出が何を言ってるのよ!私の方がマスターの好きな物とかプライベートとか全部知ってるんだから!」

「でも、貴方は彼女になる事は出来ないじゃない」

「何ですって!」とステイレットは睨む。

「……だってあなた、FAGでしょ?」

「!?」

その発言に衝撃を感じたのはステイレットではない。ヒカルの方だった。

「人間は人間でないと結ばれる事は出来ないのよ?貴方がFAGである時点で、勝敗は解りきってるじゃない」

「……それがどうしたって言うの?……重要なのはマスターがどう考えてるかでしょう?!」

ステイレットの方も怒りを更に押し出して突っかかる。

「ふー2人とも！落ち着いてくれ！」

初めて目の前で繰り広げられる女の喧嘩、どうにかヒカルは止めようとするが……、

『誰の所為でこうなつたと思つてんの!!』

お互いこちらを見ながらの息を合わせた叫びに、ヒカルはただ圧倒されるだけだった。

「はーはいいい!!」

間抜けともいえる叫びを上げながら視界はブラックアウト。ヒカルはベッドから飛び起きた！

「っ?!……ハア……ハア……よ、よかつた。やっぱり夢だ……」

ベッドから上半身を起こして息を整える。時計を見るとまだ夜中の三時だ。

「……スー……スー……」

充電くんの方を見ると、繋がれたステイレットが寝息を立てていた。今の寝顔を見ているとさっきの女の怖さを前面に押し出した形相は想像できない。

「何やってんだ俺は……」

寝汗でびっしりになりながら、自己嫌悪感にヒカルは囚われた。

e p 3 1 『その大きな手で私を抱いて』（承）

「どうですか？ご主人様……」

安物の木造アパートの一室にて、丸型テーブルの上に置かれたカ  
レーライスの器の横に立ったフセツトは問いかけた。

「……凄いよ。うまい」

フセツトのマスターであり、ステイレットの元マスター、甫周月夜  
は意外そうにフセツトに言った。

「本当ですか?!よかったあ!」

間接的ながらも自分でやり遂げたという事実はフセツトに大きな  
満足感を与える。

「何時の間にここまでスキルを。どこかで習ったのかい?」

食べ終わると月夜はナプキンで口を拭う。お金は失っても育ちの  
良さの雰囲気は消す事は出来ないと言った所か。畳、テーブル、壁、室  
内は全体的に色あせており歴史を感じさせる。その中で月夜とフ  
セツトの二人は余りにもミスマッチだった。

「……習ったんです。ご主人様の前のF A G、ステイレットお姉様と  
……」

「え……そうか」

若干躊躇いながらもフセツトは月夜に言った。驚いた様な素振り  
を見せるも月夜は一言だけ返した。

「今までの様に可愛がってもらってるだけでは済まない事になりまし  
たから……、ご主人様に何かしてあげたかったんです」

「……元気だったか?あいつは」

「はい。色々な事を知ってるんですねお姉様は、いずれは洗濯や掃除  
もマスターしたいです」

そんな健気さを出すフセツトに月夜は何だか愛おしく思えた。親  
や友達が去っていった中で、彼女が唯一の心の支えだった。

「そっか。お前も成長していつてるんだなあ」

「自分で行動すると始めて解る事ばかりですね……」

「羨ましいな……。でも僕は駄目だ……。学校でも孤独で……」

「ご主人様……」

弱気な月夜に対して、フセットは何か自分でしてあげられる事はないかと思案する。

——ワタクシだけじゃ思いつかない……。こんな時、お姉様だったらどうするんだろう……——

と、ステイレットを頼りに考えるフセット。と、フセットにある事が思いついた。

「そうです！ご主人様！お姉様達に会ってみましょう！」

——  
翌日……。ヒカルの家にて……。

「へ？あなたのマスターをお店で皆に会わせるって?!」

ステイレットが予想外とばかりに素っ頓狂な声を上げた。

「はい！相談して頂いて、ご主人様の心の傷を癒してあげたいんです！」

「ちよ！何言ってるんですか！駄目に決まってるでしょう!」

慌てて轟雷が止めに入る。フセットはかなり世間知らず、もしくは天然が入ってるらしく、突拍子の無い事を言い出す。フセットに打算がないか警戒する轟雷だが、彼女の行動はどこまでが本気なのか読めない。

「轟雷お姉様……ですが……」

泣きそうな表情になるフセット。彼女としてはステイレットが唯一の頼れる抛り所だった。

「あぁいや！でも住んでる町が違うじゃないですか！そんな手間かかる事出来るわけがないでしょう?!」

「心配いりませんよ！土曜日ですから!」

「ぐ……」

「ねえ轟雷……、別にいいんじゃないかしら」

それをステイレットが了承する。

「ステイレット?!」

「フセットも頼れるのが私達しかいないんでしょう？それじゃ可哀想じゃない」

「そ、それはそうですね……」

轟雷としてはかなり不利だった。フセット自身がマスターに恋愛感情を抱いている以上、ステイレットはフセットの味方と言っていい。フセットの敵と言えるであろう轟雷としてはどうしても分が悪くなる。

「じゃあ決まりね。明日マスター連れてきなさいな」

「有難うございます！お姉様！」

その日の夜、黄一と轟雷の家にて、黄一の部屋で轟雷は報告する。「と言うわけなんです。元マスターさんが会いに来ると言うわけです」

勉強机の上に立った轟雷は椅子に座った黄一に手振りを交えて体験した事を報告した。

「もつと止めろよお前なあ。何の為の監視だよ……」

不甲斐ないと感情を込めた視線で轟雷を見つめる黄一、

「いたたた視線が痛い！なんですか人の気も知らないで！ステイレットがフセットの味方である以上、フセットに賛同しがちになっちゃうんですよ！」

無神経ともいえる黄一に轟雷は怒りながら反論。

「悪かったよ。確かに考えて見りや恋愛感情持つてるFAG同士だからな……」

「そら見なさい。で、知らせますか？ヒカルさんに」

「引きはがした方がいいかも……。元マスターとヒカルを会わせてみるか」

「確かに最終的な判断はヒカルさんに委ねる事になっちゃいますからね。……でもマスター……本当に私達のやってる事って、正しいんでしょうか……。考えてみればこっちで勝手にフセットや元マスターさんを敵視してるだけじゃないですか」

どうにも自分達のしている行動は、話をややこしくしているだけじゃないのか？と轟雷は不安と罪悪感が湧いていた。

「確かにそうかもしれないけれど……方が何か企んでるかもしれないな

いだろう?」

翌日、学校にて……。

「ヒカル、土曜日俺といつもの店に付き合え」

「また唐突だな黄一」

「別に玄白さんとデートがあるわけじゃないんだろ?」

「決めつけんなよーまあ土曜日ならその通りだけどき……」

バツの悪そうなヒカルに黄一は呆れる。告白されて積極的にデートしようともない。目の前の親友がアホとしか思ってた。告白されてなかった。

「まあいいか、元々日曜日に玄白さんとFAGの対戦イベント出るからその時にセツティングでも……」

ピクつと黄一の眉が動いた。

「……おい、初耳だぞ」

「いやあくまで一緒に対戦するだけだし」

「デートだろうがどう考えたって!!なんでもっと早く言わなかったああつ!!」

「だああ!やめろおお!!」

ヒカルの首を掴んでブンブン振る黄一。こんな様子ではあっても今の状況ではこのど付き合いも何だか安心できた2人だった。

……そして放課後、ヒカルは部活のバスケットに行った為に黄一は一人で帰る事になる。

「さて、ヒカルは部活だし一人で帰るか……」

土曜日どうなるかな……とそんな事を黄一は考えてると、誰かが声をかけた。

「ねえ諭吉君?」

「?あ、玄白さん」

廊下に出た黄一が振り返ると朱音がいた。

「ちよつといいかな。……一緒に帰りたいんだけど」

「っ!?!俺と?!」

歡喜の声を上げる黄一。結果論だけ言うと、黄一自身朱音の事が好きだ。故にその瞬間黄一のテンションは振り切っていた。

「ちよつとヒカル君の事で相談したくて……」

直後に黄一のテンションは駄々下がりになった。

「あ、そう……」

そしてその日は黄一と朱音が並んで歩く。ヒカルより身長の低い黄一ではあるが、まだ朱音より若干背は高い。

「うん。あいつヤギ肉とドジョウ好きだから。それで弁当作ってあげたら喜ぶよ」

「有難う！ヒカル君の事よく知ってるね諭吉君」

「……直接聞けばいいじゃない。ヒカルの奴にさ。どうして俺に？」

「それは……ヒカル君がね、どうもよそよそしくて……、私、避けられてるのかなあ」

「……確かにあいつは頭は悪いけど、女の子を泣かせる様な奴じゃないよ。女の子だけじゃない、友達にだってそうさ。曲がった事が嫌いで、思いやりは人一倍ある奴だよ」

素直に思っていた事を黄一は吐き出した。考える事無くスラスラと口に出てくる。

「わあ……諭吉君で、ヒカル君の事よく知ってるんだね。男の友情って感じ」

感心した様に言う朱音。黄一の表情と口調からしてヒカルへの信頼を感じ取った様だ。

「そ、そうかな？幼馴染だからさ。アイツとは」

「でもやっぱり、避けられてるみたいで、不安なんだよね……。私としては大勝負のつもりだったんだけどな……」

「大丈夫。アイツは悪知恵なんてないよ。バカではあるけど最終的にちゃんと決断は出来る奴だから」

今の所、朱音に告白されたという理由で黄一はヒカルをよく思っていなかった。しかしながら、ヒカルを悪く言う事はなかった。朱音の前でなくともそれは覆る事はないだろう。

「駄目だよ。友達をそんな風に言っちゃ、でも妬げちゃうな。そんな風に言い切れる仲って……」

自分に対する態度からしてヒカルに不満のある朱音だった。

「……玄白さんだから言うけど、今週土曜日に入入りしてる模型店でウォーミングアップするんだ俺達。たるんだヒカルをみっちり叩き直すから安心してくれよ」

「土曜日！？……じゃあ、お願いしようかな……」

安心したような表情になる朱音。そうこうしている内にバス停についた。ここでそれぞれ道が違うために別れる。

「じゃあ、ここで俺は……」

「バスが来るまで時間はあるよ？もうちよつと話していいよう？」

「……そうしたいけど、俺も予定があるからさ……」

本当は黄一としても話をしたい所ではあるが、このまま話をしていてもヒカルの話が出るのは高確率だった。さっさと逃げるに限ると黄一は退散。

「待って！諭吉君！……ありがとう!!」

離れていく黄一に朱音は大声で感謝を伝えた。振り返った黄一は微笑みつつ軽い会釈をして返した。

——こないいい子を……何やってんだよヒカル……——

黄一は笑顔の裏で、煮え切らないヒカルに対して苦虫を噛み潰したように歯を食いしばっていた。

そして土曜日……。いつもの模型店のコミュニケーションスペース内のバーにて、ステイレットはフセットを加えて集りに参加させる。彼女自身が無かしたらコミュニティに悪影響を与えているかといえばそういうわけではない。逆にかなり控えめだった。

そしてこの日は月夜も来ていた。バーの一方の壁は取り払われており、それを月夜が覗き込む。

「……と、いうわけよ。この子が色々あつて面倒見てるフセット。そして……この人がフセットのマスター」

店内で椅子に座らずに立ったままのステイレット。そして後ろに隠れたフセットを周りに紹介。続けて月夜を、初対面の様に装って紹介した。バー内で集まってるFAGはいつものメンバーに加え、レ



フとライにバーゼラルドに迅雷。イノセントティアとレテイシアにマテリア姉妹。ほぼ勢ぞろいと言っていていいだろう。

「ああ、よろしく……」

「よ、よろしくお願いします……」

ステイレットの後ろに隠れながら様子を伺うフセットである。

「どうも大人しい子って感じだね。ステイレットと大違いだ」

「どういう意味よフレズ……」

「ねえ！元お嬢様だったんでしょ？どういう生活していたの？」

「イノセントティア、古傷を抉る様な質問は駄目よ」

「どうもバトルの実力は期待できそうに無いね。倒して名を上げたかったんだけど……」と物騒な事を言う迅雷。

「はわわ……」

慣れてない状況に戸惑うフセット。彼女に轟雷がフォローを入れる。

「そんなに一辺に話しかけちゃ駄目ですよ。こういうの慣れてない子なんですから」

「轟雷は面識があるんだっけ。……ヒカルさんはなんて？」

アーキテクトが問う。アーキテクトはステイレットの過去話にて、ヒカルがフセットと月夜の二人をよく思っていないのは知っていた。ヒカルの名を聞いた月夜とフセットの表情が曇る。

「マスターには……会わせられないわね」とステイレット。

「そうなんだ……」

バーテンダーコスプレをしたレーフが、バーのカウンター内に立ちながら言った。外側に並べられた丸椅子に座ったフセットは、戸惑いながらもポツリポツリと答えていく。

「はい。ヒカル様はなんだか怖くて……」

おびえた様子を見せるフセット。

「大丈夫ですよ。ヒカルさんは打ち解けたらすぐ懐いてくれますから」

「犬か私のマスターは」とステイレット。

それを打ち解けた風を装って轟雷は監視をしてるつもりだった。

フセットの腹の内を探ってるわけだ。

「それにしても貴方、なんだか話し慣れてないって感じね。どうもステイレットの陰に隠れて様子を伺っているって感じだわ」

レーフがフセットの態度を評する。そこで初めて月夜が口を開いた。

「フセットはね、あまり自分から動く事はしてなかったんだ……。一人で家の外にはほとんど出た事が無かったからね……」

「まあ、色んな子がいるでしょうから、そういう子もいるでしょうね」「同じ家に住んでいたステイレットお姉ちゃんもそういう体験をしていたの？」

レーフの発言の次に、反対側の席に座っていたライが月夜に聞いた。

「そうだね……。今となつては驚いたよ。こんなに快活になつていたとはね。ステイレット」

「……ちようど今のマスターに拾われた時に轟雷と知り合ったから、轟雷がよく外に出かけようつて誘ってくれたんですよ」

距離間を意識しながらステイレットは返した。月夜も遠慮してるといった感じか。

「あー……。私の場合はマスターの友達のFAGですからね。誘いやすかったんですよ。大事にしていますからね。ステイレットの今のマスターのヒカルさん」

轟雷は月夜達にヒカルをチラつかせて、ステイレットとの距離間を詰め過ぎない様に話した。

「ステイレットは前の生活では他のFAGとはどうやって会ってたんですか？」

「そうね。昔はよくFAG連れた友達を家に招待したわ。……そういえばその友達どうしたのよ？」

家の関係だったとしても、友人関係にそんなに変化はないだろうとステイレットは聞く。

「友達は……お金失った後、ほとんど離れていっちゃいました」  
そこでライは無遠慮に口を開く。

「あーそれでトラウマになっちゃったんだね。友達っていつでも財産目当てだったんだあいたあ！」

スコーンという音と共にライの顔面にトレイがfrisビーの様に当たり倒れこんだ。相変わらずライの空気読まない発言にレーフがトレイを投げたのだ。

「スイマセン。私の妹が要らない面倒を……」

ステイレットはフセットに「気にしちゃ駄目よ」とフォローを入れた。当のフセットは「はわわ……」と狼狽えていた。やはりこういうのに慣れてない。

「ウッフフ。フセットちゃんたら真っ白のシルクのような子ね」

「そうねお姉様、月夜さんも震えた子犬の様」

『揃って穢してしまいたくなっちゃう』

マリとテアの姉妹が黒い笑顔を浮かべながら月夜とフセットを評する。

「ちよつと誰よこの姉妹連れてきたの!!」

「フフ……久しぶりだな。こういう賑やかさも」

そんなやり取りを見ていた月夜が微笑みながら口を開いた。

「お姉様のお友達って、こんなに沢山いたんですね」

フセットも驚いた様なリアクションを取る。ここまで多いとは思わなかったのだろう。

「轟雷の友達ってのもあるわよ。今日は特に皆都合がついたってわけ」

「そうですねステイレット。友達の友達でも友達は友達です」

「後半ワケ解ないわよ」

「だから貴方も私達の友達だって事だろう？」とバーゼラルドがフセットにフォローを入れる。

「ああ私が言おうとしたのに」と轟雷が残念そうに言った。

「有難うございます。皆様……」

——……でも、私はこれから月夜さんをヒカルさんと会わせる。この関係を壊そうとしている。——

笑ってる轟雷ではあるが、月夜とフセット、2人の人柄を知れば知

る程、これからヒカルを会わせようとする自分達のやってる事が正しいのかと不安になる。

「それで、昔の話はどうでもいいわ。……学校含めて今のあなた達の生活はどうなってるんですか？」

本題に入るステイレット。今回の目的は月夜の精神的ケアだ。敬語で話す。

「うん……今は親と離れてフセットと生活してるよ。学校の方は、ちよつと孤立する様にはなったかな……。周りも遠慮する様になつてしまった感じで」

「別にイジメとか嫌がらせを受けてるわけではないのでしょうか？」

受け答え自体は真摯にする。「うん」と月夜は答えた。

「だったら自分から輪の中に入ろうとすればいいじゃないですか」

「でも話辛くて……、失敗するのが怖くてね」

「自分からアプローチをかけなかったら何も変わりませんよ。失敗したら逆にいい話の種になるじゃないですか」

「ステイレット……」

「最も私を捨てて他人のふりをした事は話のネタとしては最悪ですけど」

「う……」

「なんてね」

ステイレットは冗談交じりではあるが月夜を突き放す。ある程度の誠意は持っているが距離感を必要以上に詰めようとしめない。

——心配は無用だったかもしれないね——

それを見ていた轟雷は杞憂だったかもしれないと思っていた。しかしこの後ヒカルと会わせる事を考えると、この空気も重苦しくなるだろうな。と憂鬱でもあった。

「貴方は昔は周りの方から人が寄ってきたタイプですから、自分から動くんなんて慣れてないでしょうけど。自分から動かないと何も変える事なんてできませんよ」

「そっか……。本当、変わったねステイレット」

かつて一緒に暮らしていたFAGの変わり様に、月夜は静かな驚き

を見せた。一緒に暮らしていた時は少なくともこういうアドバイスをくれる子ではなかった。

「今のマスターが考えなしなだけですよ。あいつついたら考えなしで行動するからこつちがフォローしてあげないと駄目なんだから……」

「お姉様……」

「って何他人事みたいに感心してんのフセット！今はあんたが月夜さんの心の支えでしょうが！」

ステイレットとしては別に元マスターの月夜を気にかけてるわけではない。しかしながら彼の事が好きだと言うフセットを気にかけてる。

「わぁー！そ、それはそうですけど……。でも私一人だと荷が重くて……。あの、お姉様……」

もじもじとフセットは身悶えする。暫くして決意すると、ステイレットに言い放つ。……次の瞬間、とんでもない発言がフセットの口から飛び出す。

「わー！私達と一緒に暮らしませんか？」

「……な!？」

突然の発言にステイレットは、周囲のFAG達含めて愕然とした。

「フーフセット?!何を言い出すんだいきなり!!」

「そうですよ！何無茶なお願いを!!」

月夜と轟雷が止めようと叫ぶ。

「だーだっってお姉様と一緒にいると楽しいし、頼もしくてもっと色々教えて欲しくて……」

「あんた……気持ち嬉しいけど、私には私のマスターがいるの、yesとは言えないわ」

やや困惑しつつもステイレットはフセットを止める。

「そのマスターです……。ヒカル様と一緒にいるの、辛いのではないのですか？」

「え……?」

その瞬間、ステイレットの動きがビクツと止まる。

「その……お姉様のマスターが、ヒカル様が告白されたというのはワ

タクシも知ってます。それでお姉様が辛い思いをしているのも……」  
「！それはいけません！」

戸惑うステイレット。若干心が揺れ動いてるといった所か。そんな状況に轟雷が待ったをかける。

「轟雷お姉様？」

「わ！私達はFAGです！マスターの許可なしではそんな事！ヒカルさんが許可すると思ってるんですか?!」

必死の形相で轟雷はフセットに食って掛かる。

「ですが……」

その時だった。轟雷との口喧嘩になると思いきや、乱入者によってそれは中断される。

『本当に先にステイレットの方は来ているのかよ黄一』

ヒカルの声が響いた。轟雷と黄一によって来る様に仕向けたのは計画通りだ。

——ヒ・ヒカルさんが来る？——

乗り気でなかった轟雷としては顔面蒼白となる。この後の惨状は予想出来る事だ。そしてそれはステイレット達も同様だった。

「いるかー？ステイレット？ん？」

黄一に連れられたヒカルがこちらへ歩いてきた。ステイレットを探している為、真っ先に彼女がいつも使っているコミュニケーションスペースへ向かう。

「甫周さん！早くフセット連れて隠れて！」

何故こうなる。とステイレットは思っていた。今日はヒカルはここへ来る用事はなかった筈だ。……つまりヒカルは、明日朱音とFAGの大会に出る事をまだステイレットに話していなかった。

「ステイレットの声？やっぱりそこにいたのかよステイ……」

間に合わない。ステイレットの叫びで気づいたヒカルは、離れようとしていた月夜と鉢合わせとなる。

「……お前」

ヒカルは一瞬で嫌悪感丸出しの表情となる。対する月夜とフセットは怯えた様な表情だった。昔胸倉を掴まれた経験からか、ヒカルに

苦手意識がまだある。

「マスター……。なんで……。今日来て言っただけなのに……」  
「ステイレットもいるのかよ……。なんだよ。お前、今度はステイレットに何をやろうってんだ」

ステイレットを捨てた男だ。ヒカルとしては信用出来るわけがなかった。

「今は違うよ……」

「待つてマスター！今の彼は前と事情が違うわ！」

それをステイレットが止めようと割って入る。しかしヒカルとしては彼を庇うのが理解出来ない。

「ステイレット!?何簡単に信じようとしてるんだ！こいつがお前にした事忘れたのかよ！」

「忘れられるわけがないじゃない！でもね！昔と違って彼にはもう家のお金も友達も失ったのよ！貴方に拾われた時の私と同じ！忘れられないからこそ放っておけないのよ！」

その剣幕に、黄一や他のFAGにも入る事は出来なかった。轟雷はこの状況を後悔していた。反面黄一としては予想通りと言った所か。  
「?!……気持ち解るからって！信用出来る理由になるか！大体なんで俺に黙っていたんだよ！」

「！それは……。マスターが怒るのが目に見えていたから」

「や！やめて下さいッツ!!!」

見かねたフセットが一際大きい声で叫んだ。ヒカルとステイレットが揃って驚く。

「ワ！ワタクシがお姉様に言ったのがきつかけなんです！この間のイベントでお姉様の事が気になったのがきつかけで！」

ヒカルを怖がってるのか若干どもり、震えながら訴えるフセットだ。

「もうご主人様には家もお金も残っていません！ワタクシがご主人様の力になってあげたくて、お姉様に接触したんです！」

「……でもそれが信用出来るかどうかはまた別問題だ」

震えながら勇気を出している少女にヒカルは何かを感じ取りつつ

も態度を改めはしなかった。

「ぼ、僕は……あの後に全てを失いました。その時にフセットに救われたんです」

月夜の方も、ヒカルと向き合いながら怯えつつ気持ちを伝える。

「……僕の事は信用しなくてもいいし、してほしいとも思いません。でもどうかステイレットの事は信じてあげてください……」

「隠し事はありません……。純粋な気持ちでお姉様と繋がりたい。これが全てなん……です」

「隠し事……」

隠し事と言う言葉にヒカルは反応を見せる。少し考える様な素振りを見せるとヒカルは、

「……仕方ないな」

渋々ながらそう言った。その言葉に2人は安堵の表情を見せる。

「あ、有難うございますー！」

「勘違いするなよ。信用したわけじゃない」

喜ぶフセットに対し、表情を変えずにヒカルはそう言った。ステイレットの方も安堵したようだ。

「ヒカル。お前許したのかよ」

「そんなんじゃない」

黄一の発言にヒカルは渋い顔のままだ。

「それにしてもマスター、随分唐突に来たのね。今日来るって言ってなかったじゃない」

安堵しつつも、この状況に驚いたステイレットだ。その言葉にバツが悪そうになるヒカル、それに対して黄一は眉をしかめる。

「……おいヒカル」

そう言って黄一はヒカルの腕を掴み、少し離れた物陰に移動。誰にも会話を聞かれない様にする為だ。

「……お前まさかまだステイレットに言ってなかったのか？」

「ーい、言う機会がなかったから」

「……都合のいい事ってんじゃないやねえよ。玄白さんに誘われたって事、ステイレットに言えないだけだろうが」



「う……」

凶星を突かれたと言った表情に黄一は呆れる。ヒカルより身長の低い黄一だが、今の黄一はヒカルを完全に圧していた。ヒカルが煮え切らないのも強く出られない原因か。

「あのな……。お前何考えてるんだよ」

「だって、言ってるステイレットが機嫌悪くするんじゃないかって思ってる……」

「だったら明日の本番はどうするんだよ。玄白さんはどうなるんだよ」

ヒカルは言葉を詰まらせる。朱音とステイレットを天秤にかけ、悩んでると言った所か。

「なあヒカル、玄白さんだって勇気出してお前に告白したんだろうが」「それは……そうだけど」

「要はステイレットが傷つくのを見たくないってんだろ。俺だって解るわ。でもステイレットはFAGだろうが。人間とは違う。そりゃ俺はいつもステイレットをお前の彼女と例えてはいたけどさ」

黄一はステイレットがヒカルの事を好きなのは知っている。でもそれで人間とFAGが結ばれるのはさすがに無理があるというのが黄一の認識だった。

「伝えるのが遅くなれば遅くなる程ステイレットを傷つけるって解ってるのかよ」

「解ってるよ……」

「だったら戻って伝えるぞ。いい加減腹くくれ」

そう言っただけで戻ろうと促す。ヒカルはおずおずと黄一に従いながら戻っていった。

——つたく……ホンット何やってんだよヒカル——

「マスター、どうしたのかしら……」

ヒカルが明日、朱音とFAGで対戦。要は自分を使ってデートするという事にステイレットは知らない。

——い、胃が痛い……——

胃は無いが轟雷はそんな感想を抱いていた。事情を知っているだけに、これからステイレットにヒカルが何と云うか。そしてそれで親友がどんなショックを受けるか……。と、そうこうしてる内にヒカルが戻ってきた。

「あー、ステイレット……」

「何よマスター、珍しく思いつめた顔しちゃってさ」

「ステイレット……あのさ……明日、玄白さんと組んでFAGの大会出るんだ」

ビクツとステイレットの体が震える。ショックを受けてるのは見た全員が簡単に予想できた。

「え……。あ、そ、そうだよ。付き合ってるんだからそれ位するよね！」

が、気を取り直してか平静を装う。

「う……。だ、だけど！別にデートとかそういうんじゃないよ。その、一緒に出て欲しい」

「そ、そう？まあ仕方ないわね。一緒に出てあげる」

ヒカルとしても気まずい。しかしギクシヤクしつつもどうにか伝える事は出来た様だ。しかしその時だった……。

「ははっ！まだ自分にもチャンスはありそうってか?!もうねえよステイレット型！」

気まずい空気を歓迎する笑い声が、ずかずかとバーに入ってくるFAGが1人。ツインテールと白いボディ、忘れもしないその声の主は……。

「白虎……」

「ようステイレット型！失恋をいい加減受け入れたらどうだ!？」

以前のバトル大会において轟雷と揃って完敗した白虎型だった。勝ち誇る様にしてステイレットの心の傷に塩を塗りたくる。

「アンタ!!何しに来たのよ!!」

「別に？誰かさんに現実を知って欲しかった位かね」

「！あなたは!!」

見かねた轟雷達が一齐に白虎をにらみつける。フセットと月夜を覗き、全員が白虎に敵意を集中させた。

「失恋って……」

ヒカルはその言葉に戸惑う。

「あ？鈍いねえアンタ。そのステイレット型に決まってるんだろ」

「！」

「っ…やめて!!」

折角抑えていたのに。悲痛な叫びを上げたステイレットに白虎は追い打ちをかけようとする。

「お前!!出てくる度になんだよ!!」

それをヒカルが制止する。以前のバトルといい、態度が横柄すぎる。

「……これだけは言っとく。オレらFAGが人間と結ばれたとして、人間にあげられる物は何もねえ。人間同士でなけりや奪ってく一方だ」

「！」

「聞かないでステイレット!!ここでそう言ったからには覚悟は出来るんでしようね!!」

何も言い返せないステイレット。だが他のFAGは違う。怒りの轟雷が、アーキテクトが、フレズヴェルクが、バーゼラルドと迅雷が、仇討と言わんばかりにバトルに持ち込もうとする。

「悪いけど今日はそういう気分じゃねえな」

「ふざけないで!!」とアーキテクトが感情を込めて叫んだ。感情表現が苦手な彼女も白虎の態度には怒り心頭だった。勝手に自分の気持ちを言われる辛さは彼女はよく解る。

「……オレにだってな。責任があんだよ……」

声のトーンを落としながら呟くと白虎は指をパチンと鳴らす。すると大型のマシンが白虎に従う様に飛んできた。いかつい手足に反し、ひょうたんの様なずんぐりした胴体の黒い大型マシン。それが胴体部が開き、操縦席が露わになる。

「オーダークレイドル?!アルティメットガーディアンだ!」

フレズヴェルクが叫んだ。白虎の呼び出したマシン。アルティメットガーディアン。FAGが操縦する事を前提としたギガンティックアームズ最新型。

「デジセクシャリテイって言葉があんだろうが。仮にだ。オレらが人間と付き合って、それで幸せになれると思ってるのか？世間が祝福してくれると思ってるのか?!後ろ指を指されんのは目に見えてんだろ  
うが!」

「だからって!」

「近い内に解るわ。お前らが……いや、オレらFAGが笑えば笑うほど、泣く人がいるって事をな!それを解りな!」

そう言って白虎はオーダークレイドルに搭乗。コクピットを閉めると起動。大型の巨人は腰部のブースターを使いその場から出ていった。

『……』

全員が沈黙、ただ一人、へたり込んだステイレットが、無言で俯いていた……。

「黄……悪い。俺練習どころじゃなくなった」

「あ、ああ……」

黄一としてもバツが悪そうだった。さすがにこの結果は予想してなかっただけに。

「ステイレット……帰ろう」

「……ゴメン。後で一人で帰りたい」

俯いたまま、目をごしごしとこすると、目を赤く腫らしたステイレットが力なく答えた。泣いていたのは誰だって解る。

「お姉様……」

それを心配そうに月夜とフセット達は見ていた。ただ二人、マリとテアの姉妹を除いて。

——……ステイレットちゃん……私達はピノキオになれないのよ

そう誰にも聞かれない位小さい声でマリは呟く。これも運命と言わんばかりに姉妹はステイレットを見つめていた。

ep32 『その大きな手で私を抱いて』（転）

その後、結局ヒカルとステイレットは一緒に帰った。ステイレットが飛べるとはいえ、ヒカルとしてはあんな落ち込んだ精神状態では心配だったからだ。

「ステイレット……その、さ。大丈夫か？」

自室に入ると。充電君に繋がれてふて寝していたステイレットに話しかける。帰ってきてからはステイレットが落ち着く様に自室は彼女ひとりになっていた。

「……マスター……悪かったわね。変にとりみだしちゃって……」

勉強机の上に置かれた充電君に寝ているステイレット。それに椅子で座ったヒカルが話しかける。

「……気にすんな。今日はもう休んでいていいから」

「そういうわけにもいかないわ。お昼御飯の準備があるでしょ？」

気丈に笑顔を見せて振る舞うステイレットだが、これが本心で無い事はヒカルにも明らかだった。

「駄目だ。無理すんじゃない」

ヒカルが止めた時だった。『ピンポン』と家のインターホンが鳴る。

「?ちよつと待て。誰か来たみたいだ」

「轟雷かしら」

二人は誰だろうと思って玄関を移動。ドアを開けると、そこにいたのは……。

「フセット?!と……月夜さん!」

ステイレットが叫んだ。フセットと月夜、そして黄一と轟雷の四人だった。

「その……フセットが心配だと言っていたので……」

怪訝そうに見るヒカルに気付いたのか、遠慮をしながら月夜が説明する。

「まあ俺の方も気にはなっていたからさ。付き合いで来たわ」

と黄一が言った。

「良く言いますよ。心配してたのはマスターもでしょう?」

轟雷がつけたす。黄一は言うなよ。と慌てて止めた。

「あの!お姉様!お昼ご飯はまだですか?!今日は私にご飯を作らせてください!!」

フセツトは自分が力になりたいとステイレットに迫った。

「で、これで完成よ。チーズ入れるんだったら好みでね」

そしてその後、フセツトはステイレットの代わりに調理を……とまではないか。目に見えて未熟だったという事で、結局何時もの様にステイレットに料理のレクチャーを受ける形となっていた。エプロンをつけたステイレットとフセツト。轟雷の三人の視線の先の電気コンロには三人分のトマト鍋がグツグツと煮えていた。

「すいません……結局お姉様に頼る形になってしまつて……」

「いいのよ。いい気分転換になつたわ」

「あ、出来たのか……」

恐る恐る、ヒカルがキッチンにやってきて聞いてくる。何かステイレットと話せる話題が欲しいのだろう。

「マスター……。うん。運んでくれる?」

「ああ……。その、フセツトと仲良さげじゃないか」

ステイレットの見せる態度は先程より明るく感じられた。少しは持ち直す事が出来たかな。とヒカルは気が楽になる。

「そうね。掛け替えのない友達だから」

信用するな。そう言ったヒカルではあつたが、今のステイレットがフセツトのおかげで気分転換になつたのは、感謝すべきだなと思つていた。

「どうですか?ご主人様」

そして三人共に食卓のテーブルにて、トマト鍋を受け皿に取りながらの昼食となる。FAGでは飲食が出来ないので野郎三人での昼食となる。

「うん。うまいよ」

笑顔を見せながら答える月夜に感激しながらのフセツト。

「有難うございます！と、いつでもほとんどお姉様のレクチャーなんですけどね」

「何言ってるの。手を動かしたのはあんたでしょ」

「……いつもと違う味だけど、また違う形のうまさだよ。フセツトだからこそそのうまさだ」とヒカルがフセツトを褒める。

謙遜するフセツトに、ヒカルが後押しとしての一言を添えた。頭を深々と垂れるフセツト。

「ヒカル様……有難うございます」

「筋がいいからねこいつ。FAGだけど料理の才能あるわよ」

「そ！そんな事ありません！お姉様の方がずっと料理上手です！……あの！ヒカル様えつと……お！お姉様は家事の全ては完璧にマスターしていて！その上バトルまで強くてカツコよくて綺麗で！」

必死になってフセツトはステイレットのアピールをヒカルにする。朱音よりもステイレットを選んで欲しいと言う気持ちだろう。

「フセツト？」

「だ、だからヒカル様！人間の女の子よりもお姉様の方が「フセツト！」

そんなフセツトの叫びをステイレット自身が遮った。余計な事はするな。と言いたげな表情だった。

「お姉様……でも！」

バツが悪そうな顔になるフセツト。嫌な沈黙の空気が変わってしまった。それを見かねたヒカルがフセツトに話しかける。

「……その……さ。フセツト。最近こんな風にステイレットに会っていたんだよな……」

「え？あ……気づいてたんですか」

「何かカレーの味、感じ違ってたからさ。でもうまかったよ」

「あ……有難うございます」

優しく笑うヒカルに安堵するフセツト。そのフォローで少しだけ空気が和らいだ気がした。

それから程無くして、月夜とフセット、黄一と轟雷は帰っていった。……その後はまた静かになった。あまり会話もないまま夜になる。晩御飯もそのトマト鍋の残りを食べ、そして就寝の時間になる。

「マスター……。今日は私、ママとパパの部屋で寝るね」

背中にブースターを装備したステイレットはそう言った。充電君は既に別の部屋に移動させた様だ。

「え？でも……」

「明日は玄白さんとのデートじゃない。私頑張るから、一緒に玄白さんにカツコいいところ見せましょー！」

無理に笑顔を見せるステイレット。

「でもお前」

「……勘違いしないでよ。マスター……。嘘だから、マスターの事好きなのって嘘だから……」

笑顔は続くが、悲しみと混ざり合った様な声のトーン。

「私はFAGで、マスターは人間なんだから当たり前でしょ？……でもねちよつと考えたい事があるから、今日は違う部屋で寝るね」

「ステイレット……でも」

「前みたいにとっか行ったりはしないから大丈夫。だから……今晚は一人でいさせてよ」

ステイレットとしては、気持ちの整理をつけようとしていた。マスターの事が、人間のヒカルが好き。でも所詮人間と機械。いい加減現実を直視しなければいけない時が来た。そう悟ったステイレットは部屋から逃げる様に出ていく。

「そうじゃないと、心がゴチャゴチャすぎて、明日耐えられそうになりから、さ……」

そう言つて少女は廊下に出ていった。

「……どうすりゃいいんだよ」

考え込みながらヒカルはベッドに寝ころんだ。寝ようにもこんな状況では寝られるはずもない。ステイレットの事が頭から離れない。静まり返った部屋の中を壁掛け時計の針の音だけが音を刻む。しかし明日朱音と会う事を考えると寝ないわけにもいかない。考えは



程々にヒカルは寝ようと目を閉じる。……しかし目が冴えてるために中々寝付けない。

——……ステイレット……俺はステイレットの事……どう思ってるんだろう——

考えを巡らせれば更に目が冴えると言う悪循環だ。……それが暫くして……

「ヒカル君……起きて、ヒカル君」

聞き覚えのある声がする。

「……んう？」

ずっと目を閉じていた所為か。眠っていたのか、起きていたのかイマイチ判断がつき辛い。

「こんばんは」

常夜灯のついた夜の部屋でだんだん声の主の姿がハッキリする。眼の前にいたのは……、

「玄白さん?!なんでこんな所に……」

「?変なの。だって私はヒカル君の彼女、恋人なんだよ?」

「だからって……」

「恋人だからさ……」

誘惑しそうな目つきで言いながら、朱音は着ていた学校の制服を脱ぎ始めた。突然の行為にヒカルは慌てる。

「!?何をするんだよ!!」

「だって恋人ならこれ位するでしょ?」

スカートやブレザーを平然と脱ぎ、朱音はワイシャツのボタンを外していく、白いブラとパンツがチラチラと除く。

「やめてくれ!!!」

顔を真っ赤にしながらヒカルは立ち上がると朱音の両腕を掴み、広げた。

「やめてくれよ!こんなの間違ってる!俺はそんな事!」

別に朱音を嫌ってるわけではない。しかし朱音とこんな事をする気にはどうしてもなれなかった。

「マスターらしくないね。何時ものあなたなら喜んで飛びついてくる

と思ったのに」

横側から別の声。聞き慣れたその声はステイレットだった。人間等身大になった素体姿での。

「え？……ステイレット？」

「だったら、私はマスターの事が好きなんだから、私を選んでくれるよね？」

「それは……」

今日白虎に言われた事が頭によぎる。言われてヒカルは狼狽える。

「残念だけどそれは不可能よ。あなたはFAGなんだから」

勝ち誇った様に言う朱音は信じられない力でヒカルを押し返す。そして組み付いたままベッドに押し倒した。

「こういった事は人間とでなければ出来ないでしょう？」

「玄白さん！やめてくれ!!」

抵抗して振りほどこうとするヒカル、しかし朱音の力は想像出来ない程であり振りほどけない。

「ウフフ。男なら憧れていた事でしょう？二人で大人になりましたよ」

妖艶な笑みを浮かべて舌なめずりする朱音。明るい彼女の印象とはかけ離れていた。

「い……嫌だ！俺は！」

煮え切らないヒカルに、朱音がヒカルに問いかける。

「……嫌だったらどうしたいの？貴方の意志はどうなの？」

朱音の表情は真顔になっていた。また雰囲気が変わった。

「え？」

「仮に、私を選んだとして、マスターを満足させる事は出来ないよ」

朱音の後ろにいたステイレットが同調する様に言う。同じく真顔でだ。人間大だったステイレットは15cmサイズに戻っていた。

「俺の……意志」

ステイレットと今までの生活を思い浮かべる。雨の日に抱き抱えて助けた事。初めて自分をマスターと認めてくれた事。風邪ひいた時の看病に遊園地のデート。文化祭のメイド喫茶。それ以外の様々

な思い出が自分を通り抜けていく。

「俺は……」

そんな中、ヒカルの心に一番刻まれてるのは、ステイレットの拗ねたり、怒ったり、泣いたり、そして笑ったりする彼女の心だった。彼女と暮らしていてヒカルは楽しかった。……もつと一緒にいたい。

そして、ヒカルの心に、思い浮かんだフレーズが突き刺さる。そして……気づいた。

「俺は……ステイレットが！」

朱音の腕を振りほどいたヒカルは。すぐさまステイレットを両手で掴んだ。さっきの力は一切感じられない。

「好きだー……え?!」

自分で自分の言った事にヒカルはハツとしていた。愕然としていた。ステイレットが好き。自分だって望んでいた事、でも同時に人間とFAGが結ばれるのは不可能と無意識に諦めていた事。

「……白虎に言われた事、忘れたの?その子を、FAGを選んでしまえば、人間の恋人と出来る事は出来なくなる。思春期の男なら誰だって憧れる様な事を。それだけではないわ。それが社会的に認められるとでも?あなたが選ぶほうとしているのは禁忌なのよ」

朱音は淡々と現実を突き付ける。それにステイレットも便乗。

「本当は気づいていたのでしょうか?私がマスターを好きだった事」  
『でも不可能だって諦めていた。人間とFAGが結ばれることを。だから気付かないフリをした』

朱音とステイレットは冷静にいい続ける。少し考えるヒカル。  
「そりゃ……解ってるよ。そんなの最初っから……きつと。でなければ悩んでないよ。……でもさ、楽しかったんだよ。俺、アイツと一緒ににいて……だからずっと一緒にいたい」

「身体より心を取るって事?スケベな貴方が言うとは皮肉な物ね」  
「……仕方ないだろ。考えるのは苦手なんだよ」

「だったら……、やるべき事は解るよね?」

そう言った朱音、いや、ヒカルのイメージの朱音は、全身から光を放ちながら消えていく。

「！ああ……」

ステイレットを選ぶという事は、朱音を振るという事だ。ヒカルは頷いて肯定。

「キツチリ本物の私と話をつけて泣かせて、幻滅させて、みっともなく振られちゃいなさいな」

そう言った朱音は満足げな顔をして消滅。直後に部屋もまるで虫食いの様に穴だらけになっていき、崩壊していく。

「……やっぱ夢かこりゃ」

ステイレットが好きとはいえ、朱音に誘惑された事を考えたら男としては嬉しい。ほんのちよつとだけ残念ではあった。

「……本物の私は、あなたの好きなステイレットは、こんな簡単にはいかないわよ」

そしてステイレットの方も、光となり球状へと形を変えていく。以前の夢で見たステイレットも、これら全てがヒカルの想い。無意識の葛藤によって生み出されたものだった。思春期だからこそその男が持つイメージ。

「解ってるよ。ひねくれていて、口うるさくて、意地っ張りで、……誰よりも純粹で、気が弱くて乙女で、最高に可愛い奴。きつとそんなアイツだったからこそ好きになったんだ」

「ま、精々頑張んなさいな」

そしてステイレットも、部屋も光の粒子となって全てがヒカルの胸に吸い込まれていった。そしてヒカルの視界はブラックアウト。

『マスター……朝よ。マスター……』

「ん……」

目を開けると、目の前にエプロンをつけたステイレットがいた。彼女が開けたカーテンから差し込む朝日、いつもの見慣れた部屋と光景。でもいつも起こしてくれる少女の表情は少し暗かった。

「ステイレット……おはよう」

対してヒカルの方は優しい笑顔で朝の挨拶を返した。

……この日の事を、ヒカル達は一生忘れることは無いだろう。

その頃……F A社の地下、一室にて……。

「充電君を経由しての彼女のデータは十分に採用に足るものです。やはりあのステイレット型の彼女に決まるかと……」

「後はマスターがどう答えるかだな。アーキテクトウーマン、現場に向かってくれないか。直接会って確かめてほしい」

「了解しました」

白衣を着た上司に対して、アーキテクトウーマンは頭を下げると、カプセルが光源の薄暗い部屋を出ていった。

「そして妖精に人間にしてもらったピノキオは、ゼペットおじいさん達といつまでも幸せに暮らしましたとき。メデタシメデタシ……」

まだ午前中の時間、子供部屋で床に座った六歳の少女、トモコは手に持って開いた絵本を、マリはトモコのお腹を背もたれの様にして座りながら絵本を読んであげていた。ページをめくるのはトモコの役目の為、マリは朗読をするだけだ。

「面白かったー」

満足げな表情でトモコはピノキオの絵本を閉じた。人形と言う共通点にF A Gとシンパシーを感じるのか、しよっちゆうマリにトモコはピノキオを呼んでもらっている。

——人間になって幸せ……か。でも私達は……——

満足げなトモコに反して、昨日のステイレットの言われた事を思い出す。

「マリちゃん？ねえマリちゃんてば」

「ん？ああゴメンねトモちゃん。ちよっと考え事してたの」

トモコのマリを呼ぶ声にマリはハツと気づいた。マスターである彼女の前では優しいお姉さんであり、友達であり、従者で人形だった。「今日出かける用事があるって言ってたけど、そろそろ時間じゃない？」

見ると壁掛け時計はもうすぐ午前九時を指していた。今日はマリとテアは出掛ける予定があったのだ。

「マリお姉様。そろそろ時間ですわあ。ユウちゃんの方はお母様にお願いしたのでお姉様の方も一言言っておいた方が」

妹のテアがエアバイクのブリッツガンナーに乗りながらマリを呼びに来た。彼女の方は既に出掛ける準備は済ませたらしい。

「あらあらいけない。行ってくるわねトモちゃん」

「お友達に会いに行くって言ってたね。気を付けてねマリちゃん」

そう言って姉妹はそれぞれ自分用のブリッツガンナーに乗りこむ。軽快な機動で家を出た。

「行つてきまーす!」

そう言つて飛び出した空は雲がまばらに浮かんでいる。今日は風のない穏やかな天気だ。

「飛ぶにはいい天気だわあ。それにしても……あのステイレットをお姉様が気にかけるとはねえ」

「ウッフフ。そんなじゃないわ。あの子が失恋でどんな泣き顔をするか気になつただけよ。試作型からの遺伝ね」

「そう言つて、お姉様つたらトモちゃんが、『良い子にしてたら妖精さんがお姉様を人間にしてくれる』って信じてるのを悩んでいて、それに親近感でも沸いたのではなくてえ?」

「……ウッフフ」

マリは邪悪な笑顔で、並行して飛んでるテアのブリッツガンナーを故意に小突く程度にぶつけようと接近。洒落にならないので必死に避けるテア。

「わあ!ちよ!やめてお姉様!!飛んでるから!!」

「妹の泣き顔も悪くないわね」

「ああもう!お姉様もトモちゃんに自分達は人間になれないと言えればいいでしょお?いくらトモちゃんの泣き顔だけは見たくないって言つたつて!!」

普段は年長者を装つてはいるが、面倒事はしよつちゆうはぐらから。そんな姉にテアは不満を感じずにはられない。

——私達はピノキオであつてはいけない。私達はマスターのジェミニイでなければならぬのよ……ステイレット……——

ジエミニイ……妖精がピノキオの良心兼指導役として遣わせた小さなコオロギの名前だ。マスターがピノキオとして、FAGはマスターの思い出となって成長の糧になればそれでいいというのが、マリの持論だった。

「また都合の悪い事は聞かないんだからあ……」

早速先述した悪癖だ。と、そんなやり取りをしながら、姉妹は目的地へと飛んでいく。その場所はヒカル達の利用している模型店。ヒカルと朱音の参加する対戦大会会場だった。

それと同時に、地上でも会場へと向かうFAGとマスター達がいる。健とフレズ。大輔とアーキテクト。フセットと月夜。そしてバーゼラルドや迅雷にレーフにライ、レティシアとイノセンチア。皆、ステイレットとヒカルがどうなったか気になっていたらしい。

少し時間を巻き戻して……

予定時間より30分速くつくようにヒカルとステイレットは、大通りの歩道を歩いていく。この先にあるいつもの模型店の入り口が待ち合わせ場所だった。

「早く早く、女の子を待たせちゃ駄目なんだからね」

朝日に照らされ、自分のすぐ横を飛びながら急かすステイレット。ステイレットは明るく振る舞ってはいるがどこかよそよそしい。デートだと解ってる以上、わざと明るく振る舞ってるのは簡単に予想出来た。

「予定より早く向かってるから大丈夫だよ」

かく言うヒカル自身もこれから朱音に言う事を考えると憂鬱だった。自分から女の子を泣かせるわけだから。そうこうしてる内にいつもの模型店が見えてくる。

「あ、見て。もう玄白さん来てるじゃない」

ふと、ステイレットの方が店の入り口で待っている朱音を見つけた。

「えっ…もうっ…」

朱音が見回すとヒカルに気付いたようだ。すぐさま手を上げて声

を出す。

「あ、ヒカルくん」

そして軽快に走りながらヒカルに近づいてくる。学校の制服とは違う。カジュアルな私服だった。揺れるツインテールだけがいつもと同じだった。

「おはようー！いい天気だね！」

「あー！玄白さんおはよう。は、早いね……」

自分の予想より早く来た朱音に気まづくなる。

「今日が楽しみだったから早起きしちゃった！」

朱音の屈託のない笑顔。これを今から踏みにじるとなると自分が嫌になる。しかしやらないわけにはいかない。

「……あのさ、玄白さん。大事な話があるんだ」

早い内に答えを出さないと、ここまでズルズル来てしまったのだから、ある意味報いではあった。ヒカルの表情が真剣になる。

「ん？何？」

「……この間の告白の返事。言わせてください」

……自分が第三者の立場だったら間違はなくクスだ最低だと罵るだろう。それを今からやる。

「あ……。あはは……。私先にお店に入ってるから、お邪魔虫は退散するね……」

ステイレットはこの後の予想をすると逃げる様に下がっていく。ヒカルが告白に了承する事に耐えられないと言った所か。

「……玄白さん。その、告白の答えなんだけど……」

心臓がバクバク鳴る。汗が噴き出る。言葉に思考がイマイチ回せない。足に力が入らない。ふわふわしてる様な感覚。バスケの試合よりよっぽど緊張する。

「玄白さん……。その……。御免なさい!!玄白さんとは付き合えません!!」

ヒカルはせめて朱音に対して出来る精一杯の誠意を込め、深々と頭を下げながら言った。

「今日このタイミングでこんな事言っ……御免なさい。……元々、



他に好きな人がいたんだ。……どうしてもそいつの事が諦めきれなくて……だから」

朱音の目をしっかりと見ながら理由を言う。これからデートというタイミングで女の子を振るなど人道に反すると言っていていいだろう。だからせめて精一杯の誠意をここで見せるつもりだった。平手打ちが来ることは覚悟していた。罵詈雑言は全て受け止める覚悟だった。「……ふう。そっか……あーやっぱりかあ……」

反面朱音の方は、落ち着いていた。ヒカルが振るのを解っていた様

に、

「え?」  
「なんか……そんな気がしていたんだよね。……ステイレットちゃんでしょ? ヒカル君が好きなの」

「それは……」「ヒカルッツ!!」

どう答えるべきかと考えるヒカル。……その時だった。後方から大声が飛んできた。聞き慣れた声ができる方を振り向くとそこにいたのは……。

「黄一……」

「え?! 諭吉君?!」

怒りの形相の黄一が早歩きでヒカルに向かう。予想外の人物に朱音は驚いていた。告白の返事が気になって先回り、そして様子を見ていたのだ。

そして……少年、黄一は親友、ヒカルの頬を握り拳で思いつきり殴りつけた……。『ゴスツ』という鈍い音が響いた。

「っ!」

ある程度身構えていたヒカルはよろける程度で済んだ。黄一はヒカルの胸倉を両手で掴んでまくし立てる。

「何やってんだよ!!! 何やってんだよお前はっ!!!」

「黄一……すまん……」

「なんで俺に謝るんだ! 玄白さんに謝れよ!!」

「解ってる……」

殴られた頬が赤く脹れ上がる。ヒカルはそれを痛がらずに、申し訳

なごそうな顔で黄一に対応する。

「諭吉君！やめて！」

「やめないよ！玄白さんがどれだけヒカルが好きなのか！知ってるんだから!!」

止めようとする朱音を黄一突っぱねる。この間一緒に帰った黄一だから言える事だった。そしてヒカルの煮え切らない態度が、親友だからこそ腹だたしくて仕方ない。

「それに対しての仕打ちがこれか!!告白をダラダラ先延ばしにした挙句この場で断った！怒らない方がおかしいだろうが!!」

「黄一、解ってる……」

耳が痛い。でも聞かないわけにはいかない。

「誰なんだよ！お前が好きだって奴は！」

「……ステイレットだ」

ここだけは、しっかりと意志を以て伝えた。

「……馬鹿だ馬鹿だと思っていたがここまでとはな！ステイレットはFAGだろうが!!」

今まででも妙に仲の良い時はあった。しかしまさか本気でこう言うとは思わなかった。

「そんなの……」そんなの関係ないよ!!」

『!?!』

それに意義を申したのは、ヒカルではなく、朱音の方だった。必死な、そして意外な朱音の叫びに、ヒカルも黄一も驚きの反応を見せた。

「玄白さん。どうして……」

黄一としては、朱音が振られてなおヒカルを庇おうとする気持ちに納得がいかなかった。

「FAGはロボットじゃないから、黄一君なら解るでしょ？」

朱音は悲しそうではあったが真剣な表情だった。黄一と轟雷の関係を知っていた朱音はそう言う。

「そりゃ、そうだけど……。だけど！なんで玄白さんはそうやって耐えられるんだ！なんでこんな目にあってまで!!」

普通だったら泣くなり怒るなりするはずだ。明らかにこの反応は

おかしいとヒカルも黄一も思っていた。

「……マスターはな、後悔したくなかったんだよ……」

「？」

それに答えるかのように、朱音の肩かけ鞆から、一人のFAGが、ヒカル達のよく知ってる少女が出てきた。

「お前は……！」

――  
一方の店内。いつものコミュニケーション用スペースのバーにて、

「……」

「ステイレット……元気を出してください……」

バーのカウンターに突っ伏したステイレット、それを隣に座った轟雷が慰めていた。黄一とは別行動でステイレットを追いかけていたわけだ。

「有難う……轟雷。解ってたのに……こんな日が来るって……、覚悟は出来ていた筈なのに、なにやっつてんだろう私……」

気持ちの整理はつけたはずだった。でも辛い。

「駄目だよね私……これから玄白さんのFAGと組まなきゃいけないのに……」

「……」

親友の弱気な姿に轟雷は見てて辛い。かける言葉が見つからない。「ステイレット。ここにいたのか……」

ヒカルが来る。背中を見せていたステイレットは目を拭うとヒカルに向き直る。後ろに黄一と朱音も並んでいた。

「あ、マスター。……？どうしたのよそのホッペ」

黄一に殴られた頬をいち早くステイレットは気づいた。

「ああ、さつきちよつとぶつけた」

「玄白さんの前なんだから、もうちよつと格好良くしなさいよ」  
「……それだったらさ……もう……」

「？何よその反応」

「いや、……振った」

真後ろに振った本人がいる手前、バツが悪そうにヒカルは言う。反

面ステイレットと轟雷は目を白黒させて驚愕する。

「え?!ええええつつ!!!ふ!振っちゃったの!?!なんでええつ!!!」

喜びとかの感情は一切出さずに、ステイレットはただドでかく驚愕する。

「……気づいたんだ。他に好きな奴がいるって」

「……え?」

「ステイレット……聞いてくれ……俺、お前が好きだ!」

「え?!えええつ!!」

驚愕の、しかし嬉しげな声を上げたのは轟雷の方だった。

「……」

対するステイレットの方は無反応。余りの事に頭はフリーズを起こしており、固まっていた。

「……ステイレット?」

「……ば……ば……」

次第にぶるぶる震え、顔を真っ赤にしながらステイレットの方は口をパクパクと開け閉めする。そして、大声で叫んだ。

「バアツツ!!!ツツカじゃないの!?!?!!なななにやってんよ玄白さんの前でツツツ!!!」

泣きそうな顔でステイレットは怒っていた。嬉しいというより感情がぐちゃぐちゃだった。いきなりこんな事言われて信じられなかった。

「バ!バカってなんだよ!俺だって決死の告白だったのに!」

「タチの悪い冗談はやめてよ!!玄白さんの前で!」

「じよ!冗談じゃねえよ!俺はただ自分の気持ちをだな!!」

「嘘!嘘よ!ぜえつたいたい嘘!信じないんだからっ!!!」

頑なにステイレットは信じようとしない。かくなる上はと、ヒカルはある行動を思いつく。と、ステイレットを手で掴む。

「嘘じゃねえって……言っただけでしょうがあっ!!!」

そして自分の唇とステイレットの唇を、強引に重ねた。早い話がキスである。

「んうっ!!!」

?!!!!」

——あ、シヨック療法——

お互いが顔を真つ赤にしながらのキスだった。ステイレットの方は、呻きながら手足をバタつかせ抵抗するが、じきにクタツと糸の切れた人形のように力が抜けた。

「これが俺の気持ちだよ……」

唇を離してステイレットを自分と同じ目線に持っていくヒカル。ステイレットの方はポーツと放心状態だった。

「ふにや……。ッ……。バ、バカ……」

我にかえると、今度は恥ずかしそうにポカポカとヒカルの顔を両手で叩く。

「バカーバカ!!バカバカバカバカバカ!!」

「な!なんだよ落ち着け!」

そう言いながらもヒカルはステイレットとの距離は離さない。ステイレットの方は泣きながら殴り続ける。

「バカバカバカバカバカ!!マスターのバカ!折角覚悟してたのに!!自分の失恋受け入れようってしてたのに!なんでこんな事すんのよ!!」  
「さつき言ったでしょうが!お前の事が好きだって!!一緒にいたいんだよ!!」

「私人形なのに!!人間じゃないのに!!!」

「でもお前の気持ちはお前だろう!人間じゃなくなつたって!ひねくれていて!口うるさくて!意地っ張りで!」

「何よその評価!!」

「誰よりも純粹で!本当は気が弱くて乙女で!!最高に可愛いお前が!!そんなお前だからこそ!俺はお前が好きなんだよ!!」

「!!」

真剣な表情のヒカル、そして真摯な想いにステイレットは受け取らざるを得なかった。

「……バカ……。お互い馬鹿よこんな……。玄白さんの前だつてのに」

今日はもうどう反応していいか解らない事のオンパレードだ。ずっと赤面しながらステイレットは朱音に申し訳ない気持ちを呟く。

「あいにくだなステイレット型。オレのマスターはこうなる事を望んでいたんだからよ」

「!?」

軽やかな動作で朱音の肩にツインテールの白いFAGが乗った。ステイレットと轟雷は愕然とした。忘れもしないその姿は……。

「白虎!?なんであんたが!!」

散々こっちの神経を逆なでした白虎本人だった。朱音は悲しそうではあつた物の、ヒカルとステイレットを祝福するかの様な表情。反面白虎の方は面白くなさそうな表情だった。

「この人が、オレのマスターだからだよ……」

「!!?」

その発言にFAG二人は身構える。まさか黒幕は朱音か?!と。しかしその反応は白虎も予想してたらしい。

「勘違いすんな、別にマスターが腹黒い事考えてたわけじゃねえ。お前らへの嫌がらせはオレの独断だ」

「何故そんな事を?」

「……知りたきやオレと戦え」

「?百虎(モモコ)ちゃん?どういう事?嫌がらせって?」

キョトンとする朱音、百虎、そう呼ばれた白虎がステイレット達に暴言を吐いていたのは知らなかったらしい。

「う……なんでもねえよマスター。でも今日のイベントやるかどうかは別として、個別であの2人をシメてえだけだ」

「……モモコちゃん。ダメだよそんな言い方、ちゃんとバトルして下さいってお願いしなきゃ」

「ぐ……。二人とも、バトルお願いします……」

朱音の指摘に渋々と百虎は頭を下げる。敵対心をむき出しにする百虎に反して、朱音の方は落ち着いたまま、朱音には強気に出られない様だ。

「……アイツ、マスターには頭が上がらないのね……」

この前と比べて態度も言い方も若干ソフト気味である。

——玄白さん、この間白虎の事話してましたけど……これが答えで

すか……どうしよう。小悪党みたいって言っちゃった……——

そして百虎の要望のバトルへと移行する。店内の大型バトルフィールド生成用の機械。ヒカルと黄一が並び、反対側に朱音がセッションベースを手にとっていた。ヒカルと黄一、そしてステイレットと轟雷のチームが、朱音と百虎へ挑む。

「店の人には許可は取ったけど、そんなに時間はかけられないな」

「ああ、しかしまさか玄白さんに特訓の成果を見せる事になるとはな。しかも二対一、いいのかこれって」

百虎の実力は黄一達もよく知っていた。しかし朱音がマスターとなるとやり辛い。なんだか朱音の腹の内がハッキリしない。

「あの白虎が相手だからな、……ヒカル、殴っついてあれだけどフォーローはするから」

「ああ、頼む」

「……殴って悪かったな」

「いいって」

申し訳なさそうな黄一に対して、ヒカルはカラツと気にしてない感じで答えた。

三人の持つ見慣れた六角形のセッションベース。FAGのナノマシンと反撥し、FAGの触れるホログラフを発生、更に装備の転送、プラスチックの武器に攻撃力を与えるといった効果を生み出す。三人は目の前のくぼみにセッションベースを同時にはめ込んだ。

これによりセッションベースの効果は何倍にも増幅。何人ものFAGが参加できるフィールドを作り出す。

『フレイムアームズガール！セッション！』

その場にいた全員が叫んだ。そして生成されたバトルフィールドにステイレットらFAGが降り立つ。今回のフィールドは『月面プラント最深部』月面基地内部を横しているが、障害物は一切なく、ただっ広いサイバー風な景色が広がっていた。決闘としては申し分ないだろう。

「いくわよ轟雷！皆！」

「はい！（ああ！）（OK！）」

対する百虎は準備とばかりにヘルメットを被る。表情は影になり、覗く瞳からは怒りとも闘志ともとれる感情が窺えた。

——来な。マスター振ったんだ。……よくもアカネちゃんを振ったな……——

『battle start』

バトル開始のアナウンスと共に百虎は剣を抜き、正に虎の様に走り出す。ツインテールが大きくなびいた。朱音とお揃いのツインテールが……。



ep33 『その大きな手で私を抱いて』（結）

バトル開始のアナウンスと共に、百虎はステイレット目掛けて走ってくる。

「来なさい!!昨日の恨みを晴らすわ!!」

飛び上がったステイレットがガトリングガンで迎え撃つ。百虎は猫の様にステップを踏みながら回避しながら前進、スピードは緩めない。

「邪魔くせえ!」

百虎は背中のレーザーキャノン砲でステイレットを撃ちながら牽制を行う。ステイレットは回避行動を取るがその隙に百虎は跳躍力を活かしてステイレットへと大ジャンプ。黒碩剣こくせきけんを振りかぶる。

「早速一人だ!」

「轟雷!」

ステイレットは冷静に親友の名前を叫んだ。待つてましたと言わんばかりに轟雷はレールガンで百虎を狙い撃った。攻撃態勢だった百虎は咄嗟に剣を盾代わりにして防ぐ。とはいえ衝撃で大きく吹き飛んだ。

「そこお!」

すかさずステイレットは二連装ミサイルで追い打ち。着地直後に百虎は着弾し爆発。すかさず二人は爆炎の中を撃ちつづけた。更に爆発は起こり百虎を包んでいく。

「けっ!調子に乗るなあ!!」

爆炎の中を百虎は飛び出してくる。今度は轟雷の方だ。

「同じ手を!」

轟雷はレールガンで迎撃しようと撃つ。対する百虎は黒碩剣を一振りし弾丸を薙ぎ払った。そのまま百虎はライフルとキャノンの一斉発射。しかし轟雷は踵のキヤタピラで後退しながら射線から回避。そして下がりながら轟雷は肩部キャノンで百虎に狙いを定めた。同時にステイレットもスマートガンに持ち替えて狙い撃つ。

「これで!!」

「チィっ!」

想定外の動きだった。以前戦った時とは動きのキレが違う。しかも二人の連携は抜群。このままじゃ押されると百虎は判断。その時だった。

『モモコちゃん!じつとしてて!』

轟雷とステイレットにマルチプルシールドが空いた手に突然転送された。

『真上からくる!防げっ!』

それぞれのマスターの声が響くと共に、直後、大型ビームが轟雷達をそれぞれ襲う。

「っ!?!くうっ!!」

2人の少女は咄嗟に防御しながら苦悶の声を上げる。更にミサイルも容赦なく降ってくる。爆発が二人を包み込んだ。

『わああっ! (きやああっ!)』

悲鳴を上げる二人、信じて見守るマスター達、爆発が止むと轟雷達の姿が確認できた。まだ致命傷にはなっていない様だ。

「くっ……シールドが無かったら危なかった。誰が撃ってきたの?!」

ボロボロになったシールドを捨てるステイレット。と、撃ってきた相手が降りてくる。空を飛ぶモササウルスの様な機体が二機。その正体は。

「ストライクサーペント!?!」

黄一が叫んだ。水龍型のギガンティックアームズ。

「凄い実力だね。モモコちゃんを寄せ付けない強さ」

感心する様な声を上げる朱音。彼女が操作していた様だ。と、水龍の後ろに両手の無いアルティメットガーディアンが降りてくる。足は畳んでおり巡航モードだった。

「でもモモコちゃんをいじめるなら遠慮はしないよ。乗ってモモコちゃん」

「マスター……すまねえ……」

相手を舐めてた事に後悔の声を上げる百虎。そして百虎はオーダークレイドルに乗り込む。ストライクサーペントと二機と合体。両足は立ち上がり巨大な人型兵器へと姿を変えた。

「この間のギガンティックアームズか!」とヒカル。

「アルティメットガーディアン!!ギガンティックアームズの最終発展型だ!」

「パイロット照合。ストライクサーペント、オービタルマニューバー、システムオールグリーン」

胴体部、オーダークレイドル内にて百虎はシステムの立ち上げをする。密閉型のコクピット内に明かりは無く、目の前のモニターが光源だ。その画面から見上げるステイレットと轟雷が見える。

「起動コード・ファイナルギガンティックコンベネーション……」

ハイパーギガンティックアームズ  
超巨神機 甲!!アルティメットガーディアン!!!」

轟雷達の三倍はあるであろう巨人は、勝利を確信したかのように見下ろしていた。

「勝ち目はねえぜ!!」

全ブースターをふかし、両手のオーバードマニピュレーターで殴りつけてくる。ステイレットはすんでの所で回避。速い。

「ギガンティックアームズであるスピード?!」

「集大成だからな!」

「だからって!こっちも大人しくやられるつもりはありません!!」

轟雷も肩部キャノンとレールガンの一斉射撃を見舞う。

「私だつて!!」

ステイレットの方もスマートガンを撃ち込んだ。しかし効果は薄い様だ。意にも介してない。

「邪魔くせえ!!」

百虎は羽虫を払うかのように両肩のミサイルを放ち雨の様に降らせる。

「チツ!」

ステイレットはガトリングガンを再転送し、ミサイルの迎撃を行う。当てたミサイルは爆発し誘爆、残りのミサイルは普通に回避。

「ホーミングじゃないならこれ位！」

轟雷の方もキヤタピラの移動で回避し、撃ちながら迎撃するも決定打にはならずだ。

「解ってねえ様だな！絶対的な力の差を!!」

今度はアルティメットガーディアンのみ사일とビームの一斉射撃である。미사일の量が、ビームの量がさっきまでとは大違いだっ

た。  
「捌ききれな……わああつ!!」

「轟雷！きやああつ!!」

周囲の被害を一切顧みない攻撃。隠れる場所の無いフィールドである事も手伝って、絨毯爆撃の様な量の火力に二人は大きく吹っ飛ばされた。

「ステイレット（轟雷！）！」

ヒカルと黄一が叫ぶ。二人のHPはまだ0にはなっていないなかった。しかし追い詰められてる事には変わりはない。

「ギガンティックアームズのないFAGにアルティメットガーディアンは倒せないよ……」

朱音は冷静ながらも、アルティメットガーディアンの絶対的な力に勝利を確信していた。

「だからってこんなあっけなく負けるつもりはありませんよ。」

「そうね轟雷、何の為の特訓だか」

轟雷とステイレットはまだ諦めずに立ち上がる。

『大丈夫かステイレット』とヒカル。

「当然よマスター。意地を見せなきやダメでしょ？」

「そうですねステイレット。勝利フラグにはなってるんですから」

「しぶといな！だがそれでこそだ！オレの責任含めて、お前も！お前のマスターも！FAGと恋人になろうとした事を後悔させてやる！」

「っ!? そうやって……!! 貴方は何故そこまでステイレットを憎むのですか?! いつもいつも私達に暴言を吐いて！」

「モモコちゃん……?」

轟雷達は食って掛かるが、朱音は事態が呑み込めていない様だっ

た。朱音への説明もかねて百虎は説明を始める。

「……マスターに知られた。もう誤魔化せねえな。……オレのマスターはな、ヒカルさんとの恋を本当は諦めるつもりだったんだよ」

「!?どういう事よー!」

「ステイレット型、最初にお前とヒカルさんがそういう関係だって思ったのは、お前らが遊園地デートの少し前、中庭で弁当を届けに来た時だ」

「!モモコちゃん!言っちゃ駄目!」

「嫌だ!だってマスターがどれだけ辛かったか!!それを誰にも知ってもらえずに仕舞い込むなんて我慢できるか!!……予想が確信に変わったのが、お前ら2人が遊園地でデートした時、メリーゴーランドから降りて観覧車に乗って、雨の中帰った時だ」

「?!あの時にいたのか?!そんな馬鹿な!」

あの時のデートは黄一と轟雷達が監視をしていた。その時に朱音がいたとは夢にも思っていなかった。

「……諭吉君たらさ、ヒカル君に夢中になっちゃって、全然私に気付いてなかったんだよ……遊園地のデートはたまたま聞いたんだけどね」  
乗り気ではなさそうだが、朱音が諭吉に言う。クリスマスの前に既に轟雷達の事は知っていた事になる。

「元々オレのマスターはヒカルさんに好意があった。だけど、確信を持ったら身を引こうとした」

「玄白さん?!どうして……!」

「諭吉君。言ったでしょ?だって……フレームアームズガールはロボットじゃないって……」

「だったら諦めていいってか?オレは納得出来ない!せめてマスターの!」

ステイレットに集中攻撃、ステイレットを吹っ飛ばし、百虎はそのままトドメを刺そうとする。

「ぎゃあー!」

「いや、オレの怒りをヒカルさん含めてテメエに食らわせてやる!」

その時だった、側面から大型のビームが迫る。アルティメットガー

ディアンで受け止める百虎。その衝撃に巨体が大きく怯んだ。

「なっ!」

「そうはさせませんよ!!ステイレットの!友達の恋が成就するかもしれないんです!貴方の介入は許せません!!」

撃つたのは轟雷だった。身の丈もあるリボルビングバスターキャノンを構えており、それを撃つたのはすぐ解った。以前アグニレイジと戦った経験から、対大型機の装備だった。

『轟雷すまない!少なくとも……ステイレットはやらせない!』

フィールドに乱入したヒカルもキラビークで飛び回っていた。ステイレットを助けようとしたが轟雷に先を越されてしまったわけだ。

『轟雷、バスターキャノンでもフルチャージじゃないと決められない。どうにかして凌げ』

「無茶言いますねマスター!!」

『ヒカル!ステイレットと二人で時間稼げ!そうすりゃ勝てる!』

『あ……ああ』

指示を出したのは黄一だった。ヒカルを殴った黄一が、今度はヒカルを助ける。百虎は理解出来ない。

「黄一さん!?!何考えてんだよアンタは!マスターを振った人を今度は助けるだど!?!」

『ヒカルなんかの為じゃない。轟雷の為だ』

百虎は周囲を飛び回って攻撃をしてくるステイレットとキラビークを落とそうとする。しかし高速で動いてる為中々うまくはいかない。

「けっ!FAGの為に考えを変えるってか!!」

『そういう事になるな。あいにく轟雷は俺の妹みたいなものなんですね。泣き顔は見たくないんだよ』

「お笑いだぜ!アンタもヒカルさんと同じってか!!」

『……玄白さんはお前の事をこう言ったな。普段強がってるけど本当は凄く繊細で優しい子だって』

「あ?!」

『玄白さんはステイレットの事を考えて身を引いた。その原因は……人間同様の心があるって教えたのはお前なんだろう？……モモコ』  
「っ!？」

ビクツと震える百虎。

『自分が影響を与えた所為で失恋して、それを受け入れようとする。でも悲しむ玄白さん……マスターは見たくないから』

黄一は朱音に対する失礼を承知で言い続けた。ヒカル達への侮辱は朱音への想いとはまた別の問題だった。

「く……あてずっぽうでデタラメ言っただけじゃねえ!!」

『玄白さんは楽しそうにお前の事話していたんだぞ。言わないなら玄白さんに聞く』

「っ……そうさ……そうだよっ!!」

激昂しながら百虎は全武装を轟雷に向ける。

「ああそうだよ!!オレとマスター、アカネちゃんとは子供の時からずっと一緒だった!!轟雷……お前と黄一さんは出会って三年だったな。……オレは七年だ。ステイレット……お前は第一世代からの改修機だったな。……オレもなんだよ!!」

「そんなに長く……?!」

「オレはアカネちゃんが、マスターが大好きだよ。アカネちゃんもオレを大切にしてくれていた。でもだからこそ!FAGは人間と同じって思う様になっちゃった!だからヒカルさんを諦めようとした!普通だったらFAGからの恋愛感情なんてお構いなさだろうよ!」

『……モモコちゃんはそれでも私を応援してくれたんだよ。だからアプローチをやめなかった。……後悔したくなかったからあの時告白したんだ……』

「玄白さん……」

「……アカネちゃんの弁当には、ヒカルさん、アンタの好きなヤギ肉とドジョウ使ったメニューがたんまりだよ!!心の底ではまだ諦めてねえんだ!アカネちゃんの恋を失恋で終わらせてたまるかよ!!」

ヒカルに話しかけてはいるが、攻撃の狙いは轟雷の方である。自分

を破壊しかねない切り札を持つてる為だ。ミサイルを、ビームを発射しつつ轟雷を仕留めようとする。轟雷の方は踵のキヤタピラで後方に下がりながらチャージを続ける。攻撃しようと言うタイミングでステイレット達は邪魔をする。

『俺の所為もあるな……』と黄一はぼやく。

「ヒカルさん！アンタは本当にステイレットでいいのか！オレ達FAGの本質はホビーなんだぞ！どれだけ大切に想ってくれても！人間と同じに並び立つことはできねえ！」

『……俺が好きになったのはステイレットの心だ。だからそれでいい』

ヒカルの方は落ち着いて答える。

「アンタもアカネちゃんも！綺麗事で片付く問題じゃねえんだぞ!!」

そう叫んで百虎は強引にステイレット達を突破。轟雷へと迫る。バスターキャノンはほぼチャージが完了してるが、完全とはいかない。

「95%……くっ！まだチャージが終わってない!!」

「轟雷!!」

ヒカルとステイレットはアルティメットガーディアンのブースター、推進器に射撃を撃ち込んだ。突破したとはいえ、背中を見せていた事には変わらない。起こる爆発、勢いを失った巨人はその場に墜落。

「ぐおっ!!」

「98……あと少し！」

「させ……るかっ!!」

銃口を向ける轟雷に対し、百虎は両手を地面に突き刺すと踝のビームを撃ち込む。直後、アルティメットガーディアンの周囲は噴火の様に吹き上がる。轟雷の立っていた場所も例外ではない。上に吹き飛ぶ轟雷。

「わあっ!!」

「あと一歩だったな!!」

百虎は無防備になった轟雷に踝のビームを放った。ビームは真つ



直ぐ轟雷に向かう。

「っ！ステイレット!! 貴方が撃って!!」

轟雷は背中のスラストで姿勢制御と勢いをつけてバスターキャノンステイレットに投げた。キャノンは射線から離れた物の轟雷はビームに飲み込まれ大爆発を起こした。

「わあああっ!!」

その悲鳴と共に轟雷は光となり敗北判定、脱落となった。

「だがその切り札だって無駄な努力なんだよ!!」

もう片方の手を向けると百虎はバスターキャノンを撃ちぬこうとする。

「無駄なもんですか!!」

ステイレットは背中のドローンを切り離してガーディアンと撃とうとしていた拳にぶつかった。大爆発し撃つ寸前だった拳は破壊される。

「ぐがあっ!!」

かなりの衝撃だったらしく百虎は大きくよろめく。その隙にステイレットは地面に降り立つとバスターキャノンをアルティメットガーディアンに向けた。チャージはステイレットが引き継ぐとすぐ完了する。いつでも撃てると言わんばかりに、キャノンのタービンは高速で回り轟音を上げていた。

「これでえっ!! 終わりよっ!!」

「!!」

ステイレットがトリガーを弾くと巨大なビームの濁流がアルティメットガーディアンを飲み、破壊していく。

「アーアルティメットガーディアンがあっ!!」

百虎が叫びを上げながら巨人は大爆発を起こした。その場で原型の無い残骸が倒れこんだ。

「轟雷……。やったよ……」

『まだまだステイレット!! 来るぞ!!』

「えっ!? あっ!!」

ヒカルは叫びながらステイレットの背中にキラービークと合体、残

骸の中から黒碩剣を構えた百虎が飛び出してくる。すんでの所で回避するステイレット。サムライマスターソードを構え、百虎と対峙する。

「やってくれるじゃねえか!!まさかアルティメットガーディアンを破壊するとはな!!」

「アンタもしぶといわね!!」

「お互い様だ!アカネちゃんが見てる以上無様な姿なんざ見せられるか!!」

そう言つて百虎はステイレットに斬りかかる。ステイレットは二刀流でそれを受けていく。以前の百虎の剣捌きには成すすべなく倒されたステイレットだが、今度はしっかりと対応できていた。バーゼラルドとの特訓の成果である。

「この前と動きが違うだ?!」

「当然でしょ?!マスターが見てるんだから!!」

「だが負けねえ!!お前と違ってオレはホビーとして!FAGのプライドがあるんだ!!」

「何よ!!」

尚も切り結ぶ2人。このフィールドでお互いが舞う様に、しかし苛烈に決闘を続ける。

『……ステイレット。負けないで』

フィールド内に別のFAGの声、アーキテクトと大輔だ。少し前に店に到着し、バトルを見ていたらしい。

『……』

マリとテアの姉妹は無言でその戦いを見守っていた。

『動きはちゃんと対応できている。やれない相手ではない。私が教えただけだから』

今度はバーゼラルドだ。昨日の百虎とのやり取りで皆気になってここに来たわけだ。

『お姉様はきつと負けません!!』

フセットと月夜。

『ステイレット……お前は強い。大丈夫だよ!』

フレズと健。そして駆け付けた迅雷やレーフ達が激励の言葉を贈る。

『君なら勝てるよ。勝ったらボクと戦ってもらおうよ』

『勝てます！私達の憧れの貴方なら！』

『ステイレット!!頑張れ!』

『ステイレットお姉ちゃん!!』

そして最後に轟雷と黄一が言った。

『ステイレット……後少し、私の代わりに、私達の代わりに!!頑張って!!』

『行け。ステイレット。ヒカル』

「……そうよ……!!プライド背負ってんのは、私も同じなんだからああっ!!」

『ああ、ステイレット!行くぞ!!』

全員の激励に己を鼓舞し、ステイレットの剣戟のキレは増す。百虎の方はアルティメットガーディアンからのダメージも手伝ってどんどん押されていく。

「やああっ!!」

「ちっ!オレもヤキが回ったもんだぜ!!こんな悪役みてえにやられるとはよ!」

ライフルとレーザーキャノンを失い、黒碩剣を楯にしてどうにか攻撃をしのぐ百虎。こんな展開は予想してなかった。自分の実力とアルティメットガーディアンでの慢心が少なからずあった。

「当然よ!!アンタは私だけじゃない!!皆のマスターへの想いを侮辱したわ!!皆を敵に回してたんだから!!」

対するステイレットは他のFAGの想いを、恋愛感情を始めとした様々な感情を背負っていた。

その時だった。朱音が口を開く。

『だったらステイレットちゃんの想いはどうなの?君の想いは?』  
「っ!」

一瞬ステイレットが隙を見せた。その隙に百虎はステイレットを切り裂こうとする。

『おつと!!』

ヒカルがキラークビークを操作し回避。

「あ、マスター……」

『ヒカル君は貴方の事好きって言ったよ。だけど貴方の方は答えを出してない。貴方の答えはどうなの?』

「私は……」

一瞬で、色々な思いがステイレットの中を巡って行った。そして己の恋心を育んでいった。……その答えなんて、ずっと前に出ていた。「言わせるか!」

百虎は起死回生として切りかかる。それをステイレットの刃は受け止める。

「何だと!」

「……決まってるでしょ!!」

そして黒碩剣を弾き飛ばすとそのまま百虎を斬りつける。

「マスターはバカで!!スケベで!!デリカシーも!!無い!!」

一撃、二撃と百虎に刃を入れ、ソードをを合体させ大きく振りかぶった。

「でも……でも優しくって行動で示してくれるマスター。そんなマスターが……そんなマスターがずっとずっと!!私は!!!大好きなんだからああーっっ!!」

それを渾身の力で振り下ろす。それが最後の一撃だった。百虎のヘルメットに亀裂が入り、乾いた音と共に碎け散る。ぶわつと百虎の黒髪が広がり、そのまま彼女は倒れこんだ。

『……負けたよ。ステイレットちゃん』

「アカネちゃん……ゴメン……アカネちゃん……!!」

百虎は敗北判定となり光となって消えた。ステイレットの勝利である。

『winner ステイレット』

そしてバトルフィールドは解除され、降り立ったステイレットを轟雷達が出迎えた。

「負けちゃった……完敗だな……」

まず朱音がそう言った。

「玄白さん、その……私」

ステイレットとしてはやはり罪悪感があつた。

「それ以上言わないで……、……さーて、やる事やったから私帰るね。じゃあね！」

カラツとした態度で朱音はその場を後にした。わざと明るく振舞ってるのは目に見えたが……。

「玄白さん……わりいヒカル、俺も帰る」

それを黄一が追いかけてしようとする。この中で彼女を追えるのは彼だけだった……。

「黄一……頼む」

「……ああ」

ヒカルは親友に後を託す。黄一と轟雷は朱音の後を追っていった。

「……あのさ、マスター……」

ややためらいながらも、ステイレットはヒカルの胸に飛びついた。

「……これが答えだから、愚かだつて言われたつていい。これが私の本心だから。……本当に、本当に受け入れてくれるのよね？」

恐る恐るながら確認として問いかけるステイレット。それをヒカルは優しく抱きながら言った。

「ステイレット……。ああ、好きだ」

「バカ、本当にバカ……。バカでスケベでデリカシーなくて、こんな事まで行動で示すんだから……」

「そりやちよつと言い過ぎでしょうが……」

苦笑するヒカルにステイレットは目線まで飛ぶ。

「フウ……。当然でしょ。だつてマスターつてば私の事なんて言った？ ひねくれていて、口うるさくて、意地っ張りつて」

「う！そりや素直な感想だけどさ」

「やっぱそう思ってたんじゃないの！だからお返し！」

そう言つてステイレットは自分から唇を、ヒカルの唇に押し当てた。

「!!」

「……ふはっ！これでお相手なんだからねマスター！特別なんだから！感謝してよね！！一生付き合ってもらうから！大好きだから！！」

「ステイレット。望むところさ！……所で、ついでなんだけど……」  
「？」

ヒカルが何か言おうとした時だった。その時だった。強い拍手が起こる。

「感動です!!素晴らしい!!正に人間とFAGの限界を超えた関係!!大感動です!!」

「ツ！アーキテクトウーマンさん？」

拍手をしたのは頭部がフレームアーキテクトのスーツ姿の女性。アーキテクトウーマンだった。

「そして……。ヒカル様、そしてステイレット様。おめでどう御座います。先程のやり取りを本社へ送り、厳正な審査の結果。貴方達に決定しました」

そしてかしまった態度となり真面目に彼女は言う。

「へ……？やり取り？」

「はい！先程のヒカル様の大告白からステイレット様の大告白まで、盗撮しながら待ってた甲斐がありました！」

アーキテクトウーマンは自分の一つ目センサーを内蔵したバイザーを指差して得意げに言う。さっきまでの大告白を全て中継されていたわけだ。

「あ……」

ヒカルは赤面する。まだヒカルは軽い方だった。ステイレットの方は……。

「な！ななな何してくれちゃってんのよおおおっつ!!!」

絶叫しながらアーキテクトウーマンの顔面に飛びついて揺さぶった。

「消して!!消しなさい今すぐ!!」

「でええっ!!無理です生中継だから!!」

「まあまあ二人とも、所でさっき言ってた決定と言うのは？」

そんなステイレットを大輔が止めた。ヒカルがステイレットをつまんで引きはがすとアーキテクトウーマンは再び話し出す。

「おほん。本社の方で新世代ボディのテストモニターを探していたのです。候補者を絞り、失礼ですが監視させて頂きました」

「候補者……この間の海のイベントがそれという事？」

アーキテクトが不満げにアーキテクトウーマンを見る。監視やら盗撮やら、不穏な事ばかり言われて平気でいられるわけがない。

「黙っていた事は申し訳ありません。ですが大事なプロジェクトなんです……。それこそFAGを人間として扱ってくれる様なマスターが必要なんです。暫くステイレットさんを本社に預らせて頂けないでしょうか？」

「……本社に確認は取ったよヒカル。本当らしい」

スマホを持った大輔が言った。全面的な信用は彼もしてなかった様だ。

「……その新世代ボディを使えば、もっとマスターと近い距離になれるわけ？」

「はい。約束します」

「そう……。マスター……。私、行ってみたい」

「お姉様……。いいのですか？折角ヒカル様と両想いだって解つたのに、また離れ離れなんて……」

「フセット……。暫くすれば帰ってこれるでしょ？お互いの関係がもっとよくなれるなら試してみたい。いいかな？マスター……」

「お前がそう言うならいいよ」

「ヒカル様……。有難うございます」

そう恭しく頭を下げるアーキテクトウーマンだった。そしてステイレットを預ける事になる。

「じゃあ行ってくるね……。あ、所でさっき言いかけていた事だけど、何だったの？ついできて」

と、気になった。さっきヒカルが言いかけた事が気になった。

「あ……。ステイレット……。どうせなら俺の事、名前で呼んで欲しいなって」

「うん解った。ヒカ「いや、折角だから帰ってきた時の方がいいかなって思うから今はいいさ」

「いいけど……へえ結構マスターってばそういう雰囲気好きなのね（意外）」

いたずらっぽくニヤニヤ笑うステイレット。満更でもなさそうだ。そしてここにきて新しくこういう一面が見れたことを嬉しく思った。「っ！いいだろ別に。でも楽しみにしてるよ。……ではアーキテクトウーマンさん。よろしくお願いします」

「はい、責任を以てお預かりします。では……」

「うん。マスター……行ってくるから」

「ああ、待ってるよ……」

そしてステイレットはアーキテクトウーマンと一緒にその場を後にしていった。

その頃朱音は……、店から少し離れたベンチで項垂れていた。

「……」

——アカネちゃん……——

何を言っても逆効果になりそうな空気だった。アルティメットガーディアンから乗り出した百虎は声をかけようにもかけづらい。気に掛けるだけしか出来なかった。

「……モモコちゃん……」

「アカネちゃん？」

「そんな悲しそうな顔しなくても大丈夫だよ。もうすっぱり諦めがついたから……」

「そんな顔じゃ納得できねえよ。どうしてあんな潔い振りなんかしたんだよ……」

「……フフツ。だって、モモコちゃんが私の不満を全部言ってくれたから」

「え？」

「本当言うとき……やっぱり悔しいって思う所があったんだ……。かなり強気に言ってくれたからこれでもかなりスッキリした方なんだ



よ？有難うモモコちゃん」

「アカネちゃん……」

目を赤く腫らしながらも、微笑みかける朱音。その笑顔に安心する百虎。……が、次の瞬間。朱音の表情が真剣になる。

「それはそうとき……。昨日の土曜日何をしたのかなモモコちゃん？嫌がらせて何の事かな？」

「ぎっ……いや、な……なんだろうなーオレにはわかんないなあー」

「だったらなんでステイレットちゃん達、バトルの途中で『昨日の恨み』とか『皆のマスターへの想いを侮辱した』とか言ってたのかな？」

脂汗ダラダラになって目を逸らす百虎。

「駄目だよモモコちゃん。人と話す時はちゃんと目を見て」

観念したのか、ガーディアンから降りた百虎は朱音に向かい、正座して言った。

「……………ゴメンナサイ。昨日、ステイレット達に悔しくて物凄い暴言吐いちゃいました」

「昨日だけ？『いつも暴言』って轟雷ちゃん言ってたよ？」

「う……その前にもボロクソに言った事があります……」

「……モモコちゃん。皆にちゃんと謝るまでアルティメットガーディアンは没収だよ」

ひょいっとアルティメットガーディアンを掴んだ朱音は鞆の中にそれを仕舞い込んだ。朱音の顔は、まるで子供を叱る親の様だった。

「そーそれは勘弁してアカネちゃああん!!誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントとお年玉と！コツコツ貯めたお小遣いでやっとなげの知ってんだろおおっ!!」

全部朱音から貰ったお金だった。

「だから皆に謝るまで駄目だってば」

「さつき有難うって言ったじゃーん!!」

「それとこれとは話が別ー」

それを遠目に見ていた黄一と轟雷は、百虎の代わり様に呆然と見ていた。

「……本当に頭上がらないんですね……」

そして暫く時は流れて四月上旬……。

「で……まだステイレットは帰ってきてないのか？」

「まあな、どうも新世代ボディって奴の調整がうまくいってないらしい。……よつと……」

ヒカルの家でヒカルの部屋にて、黄一と轟雷は入り口に立ちながらステイレットの事を聞いた。当のヒカル本人は、掃除機をかけて部屋の掃除をしていた。

「にしてもいいのかよ黄一。今日は玄白さんとデートだろ？こんな所で油売っててさ」

「おあいにく。今日はもう少し時間に余裕があるからな」

渋い表情のヒカルに対し、ニツと笑いながら黄一は答えた。

「しかし……、まさかお前があの後玄白さんに告白してOK貰うとはなあ」

そう、あの後黄一は朱音を心配して追いかけて告白、見事彼女の了承を得たわけだ。

「で、今日は最初のデートの日ですからね。マスターすっごい緊張してて昨日眠れなかったんですよ。やっぱり自分の家以外だところが一番落ち着くみたいですねー」

「轟雷。そんなんじゃない」

照れを見せつつも黄一は否定する。あの一件があっても二人の友情はやはり変わらないのは轟雷にとっても嬉しく思えた。

「別にこつち来る必要もないだろ？早めに待ち合わせ場所に行って待つてあげればいいじゃないか」

「まあ俺もステイレットの奴が帰ってきてるか気になったからさ。それにヒカル、今日お前の誕生日だろ？」

「……あ、そうだった」

ヒカルの方はハツとした表情を見せた。すっかり忘れていたらしい。今日で18歳だ。ヒカルの反応に黄一は呆れた。

「がくつ。お前な……自分の誕生日なんだから覚えてろよ」

「もういちいち気にする様な年齢じゃないし、ステイレットの事が気になっていたからさ」

そう言いながらヒカルは持っていたエロ本を纏めては荷造りの紐で縛る。捨てると言うのだ。

「それ、いいのか？」

以前部屋のエロ本が捨てられた時に血涙を流していたヒカルが、自らエロ本を捨てる。その行為に少なからず黄一は面食らう。

「もう俺には必要ないよ。それにステイレットが嫌がるからさ」

もしかしたら……ステイレットは人間と自分の違いを見せつけられて、それが嫌だったんじゃないか。そうヒカルは思っていた。

「……あ、黄一。折角だから持ってくか？」

「いらんわ。健君の方がいいだろ？」

と、その時だった。玄関のチャイムが鳴る。

「っ！ステイレットか?!」

「あっ！ヒカル待てよ！」

ヒカルは足早に廊下に出ると玄関に向かう。それを黄一も追いかけていった。

玄関を開けるとそこにいたのは……、

「やあヒカル。誕生日おめでとう」

「おめでとうございますヒカルさん！」

「おめでとう……」

「ヒカル君おめでとう！って黄一君も来てたんだ」

「ウッフフ。おめでとうヒカルさん。大人の年齢になったのね」

「あ……皆……」

待っていたのは大輔と健、月夜と朱音とそれぞれのFAG、そしてマリとテアの姉妹だった。友達が来てくれた事には嬉しいがステイレットでないのは少々残念である。

「ステイレットは……まだみたいだね」

と大輔。ヒカルの態度からある程度察したらしい。

「ああ……折角だから上がってくれよ」

「……所でそこで会ったんだけど、今日は他にもお客さんがいるんだ」と月夜が言う。

そこで現れたのは意外な人物達だった。

「えと、初めましてかな？・ヒカル」

実際にあつたことは無い友達。だが見覚えのある顔、それは……、「蓮!?!それに加賀彦さんや駿君!えと……直哉さん?どうしてここへ?」

海のイベントで一緒になったマスター達だ。それぞれのFAGを連れており、近くないであろうこの街へ来るのは意外だった。

「それが……、FA社の人にここに来る様に言われたんですよ。今日ここですごくいい事があるって言われて」

とマガツキ型の真姫を連れてシユンが答える。失明したという右目には本当に眼帯をしており、改めて痛々しさを感ずるヒカルだった。

「それでそれぞれ集合して直哉さんの車でここへ来たってわけだよ」と輝鎚を連れて加賀彦が言う。

「あ、そうだったんですか。折角だから上がって下さい」

「ん?それはそうと宅配便が来たみたいだよ」

ウイルバーナイン型のナインを連れて直哉がそう言うのと庭の外を指差した。宅配用のトラックが止まっており、運転席から作業服を着た配達員が出てきて荷台から段ボール箱を持ってくる。ちょうどFAGの箱のサイズだった。

「あの箱のサイズ……もしかして」

「サインお願いします」

帽子を目深にかぶっており顔は確認できないが、体つきからか配達員は女性らしい。すぐさま渡されたボールペンでサインを書く、ヒカルは受け取ったダンボールを開ける。箱の感触としては何だか冷たい。

「……あ」

中を確認したヒカルは残念そうに呟いた。中に入っていたのはケーキだった。『happy birthday ヒカル』とホワイ

トチョココで描かれた板チョコのプレートが中心に刺されたデコレーションケーキ。

「……ちよつとお、私の手作りケーキなのに残念そうな顔しないでよマスター」

「え?!」

「フフツ。でもそんなに私に会えないのが寂しかったのかしら?」

嬉しげに言う配達員が帽子を取ると、艶やかな青髪がブワツと広がった。その顔は……。

「ステイ……レット?」

ステイレットだった。目の前の愛しい少女は人間大のサイズになっており。ヒカルとほぼ同等の身長さだった。

「に!人間大のボディ?!なんで!!なにがあつたんですかステイレット!!」

「それは私達が説明します」

親友の変わり様に轟雷は愕然とする。それにフォローを入れるべくアーキテクトウーマンが二人車から出てきた。トラックはF A社の物だった。

「マスターにはこのボディを使った私のモニターになって欲しいの」

そうステイレットは言うと、目を閉じる。直後、後頭部が割れて、中から操縦席の様な部分が伸びた、中には従来のボディのステイレットがコードに繋がっていた。

「うわ……」

「……ちよつとマスター、何ドン引きしてるの」

ステイレットが本社に戻った時に話は遡る。

「で、本社の地下にこんな物があるとは思わなかったわよ」

エレベーターで地下に入ったと思えば、カプセルの並ぶ薄暗い室内に連れてこられたステイレットだった。新世代ボディという物はここまで物々しい場所で作ってるのかとステイレットは思った。

「トップシークレットですからね。これからお見せする物はまさにそれですよ」

「来たか。彼女が例のステイレット型か」

そう言つて出迎えたのは白衣を着たアーキテクトウーマンだった。いや、部屋には20人以上のアーキテクトウーマンが並んでいた。姿はまちまちだが、同じメカニカルな顔の女性が並んでいると言うのは妙な不気味さがあつた。部屋が薄暗い分余計に。

「アーキテクトウーマンだらけで気味が悪いわね……。早い所新世代ボディつてのを見せて頂戴」

「いいだろう。これを」

彼女はステイレットをカプセルの前に案内。備え付けられた機械を操作し、ストレージのスモークを解除する。カプセルの溶液の中で見えていた人影がハッキリ見えた。それは……、

「人？いやこれ……フレームアームズ・ガール?!でもこの大きさは……!」

中にいたのはボディスーツを着たFAG、その人間サイズのボディだった。

「これこそが新世代ボディ、各種医療メーカーとの技術提携で開発された新型ボディです。ただ一つ足りない物がありましたね」

「ゴイツ用のAS。頭脳つてわけ?何の為にこんな物を」

「その通り。目的は人間との互換性を持たせるためだ」

白衣を着たアーキテクトウーマンが答える。

「このボディは人間の新陳代謝を再現したナノマシンを使っている。寿命はFAGの従来の物より遥かに長い。いずれはこれを人間にも使い、医療にも役立てるプロジェクトだ。これはその為のテストケースでもある。君がこのボディを使うと言うのなら、君にもこの新型ナノマシンで保護をもらう」

「人間の為の計画なの?」

「その通り、個人個人の遺伝子に合わせた生体にずっと近いパーツを使い、免疫をはじめとした身体能力の強化、老化抑制、最終的には先天的、後天的問わずあらゆる障害や後遺症の克服が目的だ。同時に、私達FAGが新しい人間との関係を結ぶ事も……。それこそが君がモニターの第一号に選ばれた理由だよ」

「理由？」

「人間に近いという事は、それだけ奇異の目で見られてしまう可能性も孕んでいる。もしそうであっても、絶対にそのFAGの味方でいられる人が必要だ。それに選ばれたのが君のマスター、洪庵ヒカル君だよ」

「その為に、あの海のイベントを、FAGと深い絆を持つマスター達を集めて調べたのです。友情や親子関係、兄弟、共依存、様々な観点から見ましたが、やはり恋愛感情を第一号モニターとして試してみようという事です」

「……ASが、人間に近い心を持った機械があるのなら、いずれ同様の身体を手に入れるのは必然なのかもね……でも本当に、本当に人間と機械の新しい関係って出来るのかしら」

「出来すよ……その為に私達は」

と、スーツを着たアーキテクトウーマンの顔面のフレームアーキテクトが『ガシヤツ』と音を立てて開いた。中にあった。いや、いたのは。

「!?アンタもFAGだったの!？」

アーキテクトウーマンの機械の顔の中にはオーダークレイドルの様な操縦席があった。そこに座っていたのは、コードに接続された白い轟雷型だった。

「その通りです」

連続的にそれぞれのアーキテクトウーマンの顔面が開いていく。白いボディのステイレット・ブレイズ、黒髪のバーゼラルド、紫のグライフエン。どのアーキテクトウーマンにもFAGが乗っていた。「私達の身体はこの為の試作型ボディ、それが全てのアーキテクトウーマンの正体」

白衣を着たアーキテクトウーマンの顔面が開き、中には褐色肌のマテリア型が座っていた。

「そしてそれら全ては、いつか人間とFAGが結ばれると信じているから。機械と人間が対立を防ぐ為、機械と人間の相互理解の為に……お願いします。どうかこのプロジェクトに協力を！」

そう言つて白衣のアーキテクトウーマン、否、マテリアは頭を下げ  
る。

「……解つたわよ。元々マスターと一緒にいる上で、後ろ指刺される  
覚悟はしてたんだから、これがあれば多少はそれも減るでしょ」

「ではー」

「喜んでやらせてもらうわー!」

……そしてそれからステイレットはそのボディに合わせたナノマ  
シンの改良。大きくなったボディに適應する為の訓練やその他もろ  
もろで時間がかかつてしまったわけだ。

そして、ヒカルの誕生日にステイレットは新型ボディで帰つてき  
た。

さっきの話同様、頭を開いたアーキテクトウーマンは本体のFAG  
で話す。腹を割つて話すならぬ頭を割つて話すと言つた所か。

「障害の克服だと……それでは……」

ステイレットの話、特にその要素に食いついたのはライフエンと  
フレズと真姫だった。特に真姫の方は自分の所為でシュンを傷付け  
たという責任を感じていた。

「そうです。真姫様。いずれ治せます。私達FAGの技術でシュン様  
の眼を」

「!シュン〜!」

真姫としてはこれ程嬉しい言葉もなかった。シュンに抱き着いた  
真姫をシュンは優しく手で包み込んだ。

「そういう事よマスター。……マスターからの告白は受けました。今  
度は私からの告白です。このプロジェクトに……付き合っていただ  
けますか?私と一緒にいてくれますか?」

他人行儀に問いかけるステイレットに、ヒカルは躊躇わずに答え  
る。

「はい!……おかえり!ステイレット!」

「契約は承りました。有難う……マスター。……ただいま!ヒカル  
!!」



操縦席を引つ込めたステイレットは嬉しそうにヒカルに抱き着いた。見た目は完全に人間の恋人同士だった。

「それじゃ仕切り直しだよ！今日はヒカル君の誕生日！ステイレットちゃんの帰ってきた記念も含めて！派手に誕生日パーティーといきましょ!!」

『イエーイー!!』

朱音がそう提案すると全員が歓迎の声を上げる。

——……あれ？ちよつと待って、この予想以上の人数であのケーキ切り分けるの？——

とステイレットが心の中で呟いたのは内緒だった。……そう思いつつも祝福する皆が見守る中、春の風が吹く。新たなる始まりと言わんばかりに桜の花びらが舞っていた……。

## エピソード

翌日……午前8時半。ヒカルの部屋。

「ん……？」

カーテンの隙間から朝日が差し込む中、ステイレットは目を覚ます。しかしここで違和感を感じた。

——あれ？この景色……——

天井を見ながら起きる。という事にステイレットは慣れていない。いつもは充電君に繋がれて座りながら寝るからだ。

「くう……くう……」

——あれ？マスター……あ——

隣にシャツとトランクス姿のヒカルが寝ていた。反面ステイレットの方はヒカルの学生服のワイシャツと縞パン。いやボディスーツ。そして今の髪形はヘアゴムを外している為藍色のロングヘア。と、直後に自分の今の身体の状態を、そして昨日どういう事をしていたか思い出す。恥ずかしくなりながら……

——……そうだ。私……しちゃったんだ……。マスターと……。ヒカルとコミュニケーション……——

恥ずかしくなりながら、下腹部を抑え昨日を思い出した。率直に言うと、ヒカルはステイレットを抱いた。

もの凄く恥ずかしいが、同時に嬉しくもあった。人間とのコミュニケーションを目的に作られたのがFAGなら、その行為もコミュニケーションシオンだからだ。汚い場所、醜い欲、それらを見せあいながらもお互いを気遣う行為。……それを二人でやった。

——恥ずかしいけど……。これで私、ヒカルと本当の恋人に……。そうだっ！——

何か思いついたことがある様だ。ステイレットはヒカルを起こさない様にベッドから出ると部屋を出ていった。

その頃、ところ変わって河川敷の土手を歩く人間とFAGが数人。黄一、大輔、健、そして轟雷、フレズ、アーキテクトだ。いつもの模

型店に向かう。今日は風も無く日差しも心地よい。

平日だが、まだ春休みだからこそ出来た事だった。

「朝に出ると気分いいね」と大輔。

「そうですね。日課の散歩もこういう天気だとやり易いや」

「それじゃ今日は轟雷を預けるから大輔、よろしく頼む」

黄一はそう言った。今日は黄一と朱音だけでデートだった為、模型店で暫く預かってもらう事になる。

「あーあ、私は邪魔者ですかマスター」

「ははは、今日は二人で映画見に行くんだから邪魔しちゃだめだよ」

「ヒカルさんとステイレットといい、皆リア充になっちゃいますねー。ああいう人間大ボデイが普及するんだったら、将来的に私の周りほとんどん人間とFAGのカップルで溢れちゃいますよ全く。未来は明るいですねアーキテクト、フレズ」

「……」

轟雷としては恋愛組のマスターとFAGをからかうつもりだったが、どうも二人の反応は薄い。

「あれ？どうしたんですか二人とも」

「轟雷……貴方はあのステイレットのボデイ、どう思う？」

暗い顔をしながらアーキテクトは答える。

「どうって……そりや素敵でしょ？人間とFAGが同じ立場になれるんだから」

「ボク達は、正直怖いよ」

珍しくフレズが暗い顔をしながら言った。

「そりやまたなんで？」

「……ありふれた不安。昔からのSF小説でもあった。シンギュラリティと、ロボットの反乱と人間の支配、そして絶滅。それが本当になるんじゃないかという確率……測定不能」

「あれを見たらさ。最初はすごくいいって思ったんだけどね……。ボク達には無限の可能性があるって聞いたけど、よく考えたら、それって危険性も同じ位あるって事じゃないか」

「そうか……アーキテクト。ちよつとこれを」

そう言つて大輔は土手の端に生えていたタンポポの茎をむしつてアーキテクトに渡した。真っ白な綿毛になつて少しの風で全部飛んでしまいそうだ。

「吹いて飛ばして見て」

「え？すう……ふうーっ」

15cmのFAGにはタンポポの綿毛も一抱えもある程の大きさだ。アーキテクトは思いっきり息を吸い込んで吹いた。タンポポの綿毛は一斉に青空に飛んでいく。

「宇宙がこの空と例えたとして、地球なんてこの一輪のタンポポみたいな物さ。そしていずれ人間が地球から出て惑星開拓や宇宙を旅する。そんなロマンを実現させるには、君達FAGやロボットの力が必要だと僕は思うんだ」

「う・宇宙つて……またデカイスケールだな……」

いきなりそんな規模の話になつた事に黄一はかなり面食らつた。

「その為には、遠からず人間と機械の融合が起きると思うよ」

「マッドだなあその話、サイボーグが当たり前つて……」

理系故か大輔のこういう所がさらつと言える事にたまに圧倒される黄一だつたりする。

「そうかなあ？だつて人工臓器やインプラント治療は20世紀からあつたものだし、2010年代末期からマイクロチップを埋め込む事が普及してる国だつてあるじゃないか。アーキテクトウーマンが言っていた、障害の克服つていうのはそういうのが必要だと思ふよ。後トランスヒューマニズムつていうんだ。そういうのは」

「……マスターの体も治せるかな？ボク……」

「フレズ、難しい事はよく解らないけどさ。少なくとも今だつて僕はお前のおかげで救われたんだ。現実の人間はそこで滅ぶほどバカじゃないよ。絶対に」

「有難う。タケル……」

「学習モード、データ取得完了。トランスヒューマニズム……人間とテクノロジーの融合……そして進化」

同時刻。トモコの家にて、

「えへへー。どう？マリちゃん。私のランドセル姿」

「……（ぶわっ）」

ランドセルを背負ったトモコがマリに見せてくる。この春から小学生だ。その姿を見た瞬間、マリの目から涙が溢れた。

「ど！どうしたのマリちゃん！どつか痛いのか?!」

「な！何でもないのトモチやああん!!私嬉しいわああっ!!」

「変なの。嬉しくて泣いてるんだ。ほら涙吹いて鼻かんで」

「あゝらゝあゝらゝまゝあゝまゝあゝ!!あゝりゝがとゝうゝ!びいっ!!」

ティッシュをあてがったトモコにマリは鼻を思いつきりかむ。

「ママとパパにも見せてくるね!」

そう言つてトモコは部屋を出ていく。

「トモちゃん……。思いやりも持つて立派になって……。ずびっ」

「マリお姉様あ、また鼻が垂れてるわよお。……。でもトモチちゃん。確かにどんどん大人になっていくのね……。ああやつて大人になって、いつか親になっていくのねえ。あんな小さな子供がいつか親になる。私達には想像もつかないわあ」

「ずずっ。そうねえ。親になる……。恋人を作る……。彼氏。男。悪い虫……」

どんどんマリの顔は凶悪になっていく。

「お！お姉様！そういう方向に持つてかないで!!」

「あらあら、でもそういう悪い虫がつくのはやっぱり我慢できないわねえ」

「ああもう、だったらお姉様もいつかステイレットの様なボディを使ってみたらどうかしらあ、あれだったらトモチちゃんのボディーガードも出来るわあ」

「……恋愛の出来る人間大のボディなど……。ホビーの本質を超えているわ」

悪い顔の次は渋い顔だ。ホビーとしての本質に誇りを持つマリとしては、ステイレットの新世代ボディは納得出来る物ではなかった。

「……でも私は素敵だと思っわあ。人間と新しい関係だなんて。私もああいうボディでいつかユウちゃんも遊びたいわねえ」

「それは……まあ解らなくもないわ」

とはいえテアの言ってる事も理解出来るマリではある。

「……でも、お姉様……どうなっちゃうのかしらね……ステイレットや私達FAGはこれから……」

昨日のステイレットの新世代ボディ、あれがマリやテアとしても何か大きな変化になりそうな気がしていた。機械にそぐわないFAGの勤である。

「彼女はジェミニイとしての立場を超えたわ。でもそれも一つの道。自分の信じた道を行けとしか言えないわね」

「——ピノキオは人間になりました。メデタシメデタシ……だけど、ピノキオは人間になって本当に幸せになれたのかしら？」

「ウッフフ……それを決めるのは、ピノキオ本人にしか出来ないわ。……自分で決める。それが生きるという事だから」

——  
ヒカルの家に戻って……

「ヒカル……起きてヒカル……」

「う……？」

耳障りのいい声でヒカルは目を覚ます。声のする横に目をやると、「おはようヒカル。遅くなっちゃったけど、夜明けのコーヒーって奴よ」

両手に湯気の立つマグカップを持ったステイレットが笑顔で出迎えた。

「ん？ステイレット……あ」

ヒカルの方も寝ぼけ眼でステイレットを見ながら昨日の事を思い出し、目が冴える。自分のワイシャツをほぼ裸で着ている上に、顔が、胸が、脚が、下腹部が自分の視界に入ると昨日の事が鮮明に浮かんできた。

明かりを消した夜のベッドで、自分の下で息を荒くし、汗だくになりながら涙を浮かべ、切なげな表情で見つめ返すステイレットの顔。

闇の中でも肌の白さからふるふると揺れるのが解る胸や尻、というか柔らかな女体全て、そしてヒカルは縞々のボディースーツの向こう側に……。

正直、緊張で一杯一杯だった。知識だって付け焼刃。自分本位に動くつもりはなかった。ステイレットを最優先にすれば自分も勝手に気持ちが高まると考えていた。幸いその予想はうまくいった。

嬌声を上げ、呼吸がうまくいってないらしく、大声でヒカルの名前を叫びながらステイレットは手足を痙攣させる。もう離さないと言わんばかりにヒカルを抱きしめて、思いつき引き込む様に締め付けた。

その煽情的な表情や仕草に、抑えられなくなったヒカルの想いを、溢れんばかりに満たされるまでステイレットは受け止める。どちらからともなく二人は深いキスをする。本来ならばお互い手の届かない想い人だっただけに夢中だった。そのままステイレットは疲れ果てて眠り、ヒカルは彼女の汗等をふき取って綺麗にすると、自分のワイシャツを着せたのだった。

と、それがヒカルの18歳の誕生日プレゼント。それを思い出して赤面。更に悶絶。

「……赤くなっちゃってヒカルのスケベエ。こんな裸ワイシャツまでさせちやつてさ」

妙にステイレットはからかう様な余裕を見せる。満足してくれた様でヒカルは少し安心する。

「し、仕方ないだろ。お前のボディースーツ、どうやって着せるか分からないんだよ」

ちなみにステイレットが作業着以外で持っていたのはいつもの人間サイズのFAG素体ボディースーツだった。しかし脱がせたら構造が解らなかつた為、裸ワイシャツとなったわけだ。

「まあ確かにあれ以外まともな服は持ってきてないわね」

「コーヒー飲んでくつろいで、朝ごはん二人で食べたなら服を買いに行こうか」

「それいいわね。部屋のインテリアとかも手を加えたいし」

そう言つて片方のマグカップをヒカルに手渡すと、ステイレットはベッドの縁に座つたヒカルの隣に座つた。と、ヒカルはコーヒーを一口飲んである事に気が付く。

「……なあステイレット。随分砂糖とミルク入れたなこのコーヒー」  
黒かつたコーヒーは茶色になる程牛乳が加えられており、誰が飲んでも甘いと感想を言うほどに砂糖が入っていた。

「？だつてえ、味見で初めて飲んだけどブラックコーヒーって苦いんだもの、人間つてこんなのがいいの？」

ブラックコーヒーはステイレットにとつて美味しくなかつたらしい。舌を突き出して不味かつたと表情のジェスチャーをする。

「そっか、飲食に慣れてないんだっけか。前の体でも飲食出来なかつたけど、それで家の炊事やつてたのつて考えてみたら凄いな」

「どやあ。私は今も昔も凄いんだから。今後は私の味の好みとかも出来るから、ご飯の味に影響出るかもね」

「でも一緒に食べる事が出来るつて楽しみだな……そういうえばその身体になつたら、今まで以上にプライベートとかあるだろうから、お前の部屋も作るべきかな」

「寂しい事言わないでよ。今まで通り相部屋がいいわ。この身体の前からそうだったんだから」

「そりや嬉しいけど、ちよつと緊張するな」

「ふふん、このボディを好きに出来るんだから嬉しいつて素直に言いなさい。……あのさ、ヒカル」

と楽しげに話していたステイレットの表情が曇る。

「どうした？」

「この身体になつて、人間に近づいたけどさ。正直……不安なんだ」

「？なんでさ」

「……よくあるじゃない。高度になりすぎた人工知能や化学が人間を滅ぼすつて。自分に使われた技術がそれなんだつて思うと怖くなつちやつてね……。そして、それにヒカルを背負わせちやつたじゃない」

「あーそんな事か」



「なによーその軽い態度。こっちは真剣に悩んでるのよ」

「それ位俺だって、いの一番に考えたよ。ていうか誰だって思いつく  
だろ。今時FAG以外でも人工知能なんて珍しくもないんだし」

「だったらなんでそんなあつけらんとしてるのよ」

「確かにFAGが人間みたいな心を得たなら、悪い心を持ったFAG  
や人工知能も出るだろうな……。だけど、俺とお前自身がこういう関  
係になれたんだ。他にもそういう奴が出てくるはずだ。きつとFA  
G以外のロボットでも出るはず」

「そりゃ、フレズやアーキテクト達もそうだけど……」

「その身体だってさ、人間の為の技術でもあるんだろ？人間と機械、競  
うだけじゃない。お互い歩み寄って高め合うもんだと俺は思う。だ  
から人間と同じ姿してるんじゃないかな」

「それ矛盾してない？大体人間同士だって争いは絶えないのに」

「だからお互い理解しようって努力出来るんだろ？確かに本質が違う  
以上解り合えない所もあるかも知れない。でもそれで終わらせたく  
ない……。少なくとも俺はそうだよ。お前と一緒にいて楽しかったん  
だから。やってみなきゃ解らないだろ？」

「らしくない小難しい考えだと途中まで思ったけど……。やってみな  
きゃ解らないって、やっぱりヒカルらしいわ」

この今後の歴史に影響を与えかねない状況にこの体育会系の答え  
である。呆れつつもなんだか安心出来た。

「いいだろ。お前いなくなった間、俺だって色々そういうの考えてい  
たんだよ」

「ま、確かにそうね。私だってそれを信じてこのプロジェクトに参加  
したんだから」

「……それでさ、ステイレット。……俺、進路決めたよ。進学する。そ  
してFA社に行く」

それ以外にも、ヒカルとしてはステイレットが奇異の目で世間から  
見られないかが心配だった。だから一番安全圏であろうFA社に行  
こうと考えたわけだ。

「ぶふおー！アーアンタその成績でえ!?!」

嬉しがるわけでもなく、飲んでたコーヒーを嘔き出してステイレットは耳を疑った。

「ぐ……。こういう時は応援してくれたっていいでしょうが！」

自分の頭の出来は自覚があった為、こういう反応は予想できてたヒカル。

「身の程を知りなさい！あぁもうシャツ汚れちゃったじゃない！」

「予備はあるからいいだろ。……少しでも人間とFAGが距離が近づける様に力になりたいんだよ。そうやって人間に近い心があるのに、ずっとホビー扱いなんて間違ってる」

そうだ。このプロジェクトが発足されたとしても、現在の人間とFAGの距離感是不変わらない。少しでもFAGや自我のあるロボットが、責任ある自由と権利を持てる様にしなかった。危ない考えかもしれないが人間に近い心を持たせてしまったのだから。それは今まで様々な人間とFAGの関係を見てきたヒカルの結論。

「ヒカル……」

「……そう言うわけで、受験勉強教えて下さい」

「がくつ。あぁもう、ちよつとカツコいいと思つたのにこれなんだから、でも……有難う。そう思つてくれて」

そうやって話してる内にコーヒーも飲み終わる。ステイレットも遅めの朝ご飯を作る準備としてヘアゴムで髪を縛つた。ロングヘアが見慣れたツインテールになった。

「うーん。ロングも新鮮でいいけど、やっぱその髪型が一番だな」

「それじゃ食べたら出かけましょう？さーてまずは……」

ステイレットは部屋の隅、縛られたエロ本の束を手を取つた。「まずゴミ出したらショツピングモール行きましょう。もうこれは必要ないものね。……私がいるんだからさ」

自分がいるから、そして自分だけを見てくれるのが嬉しいステイレットだった。だが……

「……あのですね、ステイレット……。その……やっぱりエロ本捨てるの勘弁して」

やんわりと、だがめつちや気まずそうにヒカルは言う。

「……………は!?なんでよ!私がいるってのに!!」

「いやだつて……。元々お前がこのボディで帰ってくる事は知らなかったし、あくまで通常サイズのボディで暮らすと思つてたから、禁欲生活をしようとするね……」

一気に不機嫌になるステイレットに対し、眼が泳ぎながら、そしてどんだん声が小さくなってくるヒカル。妻に頭が上がらない旦那その物の姿だった。

「……………あーそう。そういう事。私の身体でも満足できないってわけ? ……だつたらこうするまでよ!!!ていつ!!」

ステイレットは持つていたエロ本を落とすとヒカルの身体を突き飛ばす。ヒカルはベッドに倒れこんだ。

そしてステイレットがヒカルの上に馬乗りになる。ギシツとベッドが鳴った。日に照らされた二人の影が重なる。

「スーステイレット?!?」

「女のプライド傷つけられて黙つてられるわけないでしょ?!今日の予定変更よ!!コミュニケーション……ああもう面倒くさい!ヒカルは私と一日中エッチするの!!!」

「え!?えええっ!!いやそれは嬉しいけど、お前がそんな積極的になつたらそれはそれで悲しいと言うか……」

「何ワケ解んない事言つてんのよ。他の女にうつつ抜かさないうちに夢中にさせちゃうんだから……歩んでいくんでしょ?私と」

「……………そうだな。さつき言つたばかりなんだから」

そう言つて二人は掌を合わせて指を絡める。ステイレットの手のサイズは大きくなつても、まだ男女としての違いか、大きさはヒカルの方が上だった。

「……………まだ大きいね。ヒカルの手……」

ヒカルの体温に、心地よさそうにステイレットは言った。ヒカルの方も、ステイレットの肌の温もりに機械だという事を忘れそうになる。

「本当言うとき……まだまだ抱き足りないんだ。お前の身体」

「いいよ。好きなだけ抱いて……。特別なんだから……感謝してよね

……。私は感謝してるよ。私を選んでくれて……。だからさ」

2人がベッドでいちゃついてるその頃、轟雷は模型店のコミュニケーションションスペースの外側のテーブルにて、黄一のノートパソコンを借りて自伝を書こうとしていた。

「さーて、いよいよ書きますか」

アルティメットガーディアンに乗りながら轟雷が呟く。ちなみに百虎の乗ってた奴を貸してもらったわけだ。

「おい！ やつとアカネちゃんから返してもらったんだから大事に使えよ！」

「解ってますって。ステイレットやらアーキテクト達やら、書くネタには困りませんねー」

「いや他人をネタにしたら自伝って言わないでしょ……。題名はどうするの？」とレーフが聞く。

「んー、タイトルですか……」

「それはそうと轟雷お姉ちゃん。なんでアルティメットガーディアンで執筆するのさ」とライ。

「元の手の大きさではどうしても時間がかかりますからね。オーバードマニピュレーターサイズの大きさの手でなければ……。あ！ そうだ！ 決まりました!! タイトル!!」

ステイレットと轟雷、二人はほぼ同時にそれを言葉にした。

『その大きな手で私を抱いて』

……。時は未来世界、人工知能やロボット、プラモを戦わせるアミューズメント。SFと現実の距離が近づいてきた昨今、幻想は現実になりつつあった。その名は……。フレイムアームズ・ガール。

考え、行動する力、自我を与えられた少女達は主と様々な関係を築くべく生きていく。友として、相棒として、そして……。恋人となった。しかし成し遂げてなお人間と共に歩んでいく。これはそんな少女達の生き様の物語。始まりの物語……

完